
真・恋姫†無双～外史の守り手～

ブリッジ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫十無双〜外史の守り手〜

【Nコード】

N8241U

【作者名】

ブリッジ

【あらすじ】

外史を渡り歩き、守り手としての人生を歩む御剣 昂と恋姫達の波乱と笑いと涙の物語です。

駄文な上ご都合主義な物語ですが、少しの間お付き合いください。

序章 く外史の守り手く（前書き）

さて始められました。自身初めての小説投稿ですので、誤字脱字等多数出ると思いますが完結を目標として頑張ります。

序章 く外史の守り手く

正史と外史

2つの世界が存在する。

正史とは全ての外史の基点となる世界である。

外史とは正史から生まれた可能性の世界であり、正史に住む人間の『思い』、『願い』、これらが具現化し生まれた世界である。

外史によつては正史とは全く異なる歴史や文化を辿つた外史も存在する。

次に外史には管理者と守り手の2つがいる。管理者とは生まれた外史を管理維持を目的とする存在である。

守り手とは外史内の争い、戦争等を終結させ、外史を直接安定させる者である。

一言で言うと管理者とは外側から、守り手とは内側から外史を守る存在である。これから始まる物語は1人の守り手がとある外史での出会い、成長し、そして困難を突き進む物語である。

？「ふうー、これでこの外史はもう問題ないな。」

俺は遠くに見える平和な街並みを見ながら呟いた。

ここで自己紹介をしておこう、俺の名前は御剣 昴、みつるぎほの守り手の1人だ。

俺は今この外史での仕事を終えたところだ。

昴「しかしまあ、この外史も何かと面倒だったがこれでもう何も心配ないだろ。」

守り手というのは何かと大変だ。何せ大多数ある外史に対して守り手の人数が圧倒的に足りないからだ。まあ守り手に求められる資質が英傑並みの武力と知力の両方必要だから仕方ないんだが。

昴「さてと、そろそろ次の行き先案内人が来るはずなんだが……」

？「昴ちゃああああああああん！！！！！！！！！！」

昴「せええい！！」

とつさにやってきた邪な気配に拳を撃ち込む。

？「ブルアアアアア！！！！！！」

顔面に拳をめり込ませ、1人の巨漢が吹っ飛んでゆく。

？「酷いわ昴ちゃん。」

巨漢が殴られた顔を撫でながら呟いた。

昴「悪いな、殺気以上に不愉快なものを感じたんでな。」

今俺が殴り飛ばした巨漢の名は貂蟬、外史の管理者1人だ。

見た目は巨漢に下着1枚というもしかしなくても変態だ。これで管理者としてはかなり優秀でしかも管理者としての地位が高いと
いうのだから驚かされる。

昴「それで一体何の用だ。」

貂「そうねん、昴ちゃんにこれから行ってほしい外史があるのよん。」

腰をくねくねさせながら言うってくる。正直かなり気持ち悪い。つうか常人なら軽く死ぬぐらいの威力で殴ったのに何ともないようだな。相変わらず底が知れないな。

昴「お前直々に指令とは珍しいな。」

大概次の外史への指令は白装束が手紙を無言で渡し、内容を理解した上で次の外史に飛ばされる。有無を言わず。管理者直々の指令はめつたにない。

貂「ちょっと重要で急を要する指令だから私が直々に来たってわけ。

「昴」なるほどな。それでその外史というのはどんなところだ？」

貂「そうねん、三國志を基点とした外史、と言えば分かるかしら。」

昴「三國志か。」

俺も知っている。生憎俺が産まれた外史は三國志が存在しない言わば正史とは違う歴史を歩んだ外史なので詳しいわけではないが以前

別の外史で多少書物を読んだことがある。

昴「三國志というとあれだよな？劉備に孫策に曹操出てくる世界のことだろ？」

貂「そう、その三國志よん。」

正直少しわくわくしてきた。何せ何百年も語り継がれる王とその重臣である武将がいる世界に行くことができるからだ。

貂「あら、ずいぶんと楽しそうね。」

昴「そりゃな、俺も守り手である前に武人だからな。英傑と手合わせ出来る機会があるかもしれないならこれ以上に楽しいことはないな。」

貂「話を続けるわ。やってほしいことが2つあるの。1つはこれからその外史で起こる乱世を鎮めること。もう1つは………」

貂「以上が次の外史での指令よ。」

昴「分かった、問題ない。」

貂「ちなみにその2つを達成させるやり方は昴ちゃんに任せるわ。」

昴「つまり歴史を無視して違う結末になっても構わないってことで

いいのか？」

貂「そういうことよん。」

昴「なら俺のやり方でやらしてもらっせ。」

俺は少し胸を躍らせていた。

そこに一筋の光の柱が現れた。

貂「この柱をくぐれば次の外史に行けるわ。」

昴「なら行ってくるぜ。」

俺はその柱に飛び込む。その瞬間、目の前が光に包まれた。

side 貂蝉

貂「行ってしまったわね。」

昴ちゃんが柱をくぐると柱は消失した。

？「あやつで大丈夫なのか？」

そこに1人の巨漢が現れた。

名は卑弥呼、私と同じ外史の管理者で同じ漢女道を歩む同士である

わん。

卑「乱世を鎮めるのはともかく、もう1つの件は今のあやつでは。」
貂「そうねん、今の昴ちゃんでは奴にはかなわないでしょうね。」

卑「ならば!」

貂「でもね卑弥呼、現存する守り手で奴を倒せる可能性を持つのは昴ちゃんだけよん。現時点では無理でも昴ちゃんなら必ずやってくれるわん。」

卑「お前がそこまで言うなら信じようではないか。」

貂「ええ、信じてあげてねん。」

貂「(昴ちゃん、あなたを信じるわ。あなたならきつと奴を止めてくれると。)」

かくして御剣 昴の新たな外史での物語が開幕した。

続く

序章 く外史の守り手く（後書き）

書いてみて思いました。小説書くのって難しいです。プロの小説家や同サイトでの投稿小説を書いている人に改めて尊敬します。

アドバイス等ありましたらバシバシお願いします。

批判はほどほどに願います。作者の心はガラス通り越して紙です。

〜人物紹介〜（前書き）

この物語の主人公の紹介です。

〜人物紹介〜

御剣

みつのる すばる
昂

身長 179センチ

体重 68キロ

顔立ちは女つぼく、背中に軽くかかる黒髪を後ろで纏めている。瞳の色も黒。本人は女性に間違われることを気にしており、弄りすぎると激怒する。

服装は白のブレザー型の制服っぽい感じ。その上に黒い外套とスカーフを首に巻いている。

外史を飛び回る守り手で、とある外史では武官、とある外史では軍師、またとある外史では指導者をしている為基本的に何でも出来る万能型である。

感情を表に出しながらも冷静沈着に最適な判断を下すことが出来る。目指すべき理想は桃香に近い考えだがそれはあくまで、理想と割りきっていて若干華琳よりである。

仲間や味方は命をかけて守り、それらに害する敵には、容赦はしないし、非情な策すらとることも。戦い以外での性格は『真面目に生きながらふざける』がモットーで隙を見てはイタズラをしたりからかったりしている。(仕事は恐ろしい早さで確実にこなす)

武器 村雨

全長は150センチにもなる大太刀。

双剣 朝陽 夕暮

刃渡り50センチの両刃の剣。

戦闘スタイルとしては氣を用いて戦い、氣を纏って身体を硬化させたり、身体能力向上させたり、氣を放出したり、他者と氣を同調させ傷を癒したりもできる。しかし氣を用いての治癒は自分に行うことは出来ない。軽い病気の治療も出来る。（しかし五斗米道ほど万能ではない。）

氣は自分だけではなく、手に持った武器にも纏わせることもでき、硬化させれば頑丈になり氣を研ぎ澄ませれば、切れ味が上がる。武器の使い方としては1対1の時には村雨を使い、1対多数、もしくは手数で相手を圧倒したい場合は朝陽、夕暮を使う。

昂の得意武器としては大太刀>双剣>無手、の順番である。

技は随時更新していく予定です。

〜人物紹介〜（後書き）

以上が主人公の紹介になります。とりあえずこの作品は我が道
を突き進みたいと思います。

参考にするために他の方の二次小説を読んでいます。皆凄
まじりて力の差を感じます。地道に完結目指して頑張ります。

それではまた。

第1話「初名乗りは盛大に」(前書き)

1日1話は難しいな。書けば書くほど他の作者との差を感じる。
構想だけじゃ無理か……。

駄文ですがどうぞ！

第1話〜初名乗りは盛大に〜

昴「ここが新たな外史か。」

光の柱を抜けるとそこは見渡す限りの荒野だった。

昴「着いたはいいが、ここが何処だか分からんし、何処に行ったらいいのかも分からん。」

幸いここに来る前に貂蟬からこつちで使える多少の路銀もあるし、最悪俺の手持ちの荷物を売れば当分は持つたろ。

昴「まずは近くの村にでも、『おう姉ちゃん、随分と珍しい物持ってるな』ん？何だ？」

振り返るとそこにはナイスミドル、デブ、チビの3人組の男達が並んでいた。

「今すぐにテメエの荷物と金と服を置いていきな！」

言うなりナイスミドルが腰の剣を抜きこちらへ突き付けてきた。

昴「（こいつら賊か？なら片付けるだけだが。）」

斬り捨てようとしてやめた。以前に別の外史で賊と思って斬ったらその国の駐留軍で指名手配されたんだよな。まだデカイ騒ぎは起こしたくない。仕方ないか……。手持ちの鞆から以前に他の外史で手に入れたルーズリーフを取りだし、

昴「これやるから、何処かに行ってくれ。」

「着てる物も荷物全部出せって言ってるんだよ！おい、この姉ちゃんひっpegせ。後は俺たちでゆっくり楽しんだ後奴隷にでも売り飛ばすか。」

「へへ、そうですね。」

「た、楽しむんだな。」

デブとチビが近づいて来る。

おーそうかそうかこいつら相当調子にのってんな。それより1つ気になることが。

昴「なあ、さっきから姉ちゃんって俺に言ってるのか？」

「はあ？テメエ以外に誰がいんだよ。さっさと出すもの出しな！」

昴「（　　）#（　）」

「「「」()。 。 ……」

数分後

「「「キユウ〜」！」「」

昴「ふん！口ほどにもない。」

「テメエ、俺たちにこんな真似してただで済むと、」

昴「ああん！？#」

「「「」(TOT)」「」

すっかり怯えきった3人組はスタコラサッサと言わんばかりに逃げようとする。

昴「お前達。」

「「「は、はい!」「」

昴「今回は命だけは助けてやる。だがもし次賊まがいな真似してる
ところを見かけたら。」

「「「見かけたら?」「」

昴「明日の日の出は拝めないと思え!」

「「「ひいゝゝ!申し訳ありません!」「」

3人組一目散に逃げて行った。

昴「乱世とはいえ、あんなのが蔓延ってるなんて世も末だな。さて
と・・・」

背後に聳え立つ大木に。

昴「そんな見づらいところじゃなくて、もっと見やすいところで見
たらどうだい?」

? side

このあたりに一筋の流星が落ちたので気になって見にきたのだから。

? 「何もありませんね。」

? 「確かにこのあたりに落ちたはずなのですが。」

さつきからこの周辺を調べているが何も見つからない。

? 「むっ?。」

前方を良く見ると黒髪の女性が3人組の賊に襲われているではないか!

? 「今すぐ助けねば!。」

一目散にそこに駆け出した。

? 「あ、星殿!。」

? 「星ちゃん!。」

「はあ？テメエ以外に誰がいんだよ？さっさと出すもの出しな！」

まずい、今すぐ助けに・・・なっ！？

黒髪の女性から恐ろしい怒気が溢れると3人組が瞬く間にのされて行く。

昴「今回は命だけは助けてやる。だがもし次賊まがいな真似してるところを見かけたら。」

「」「見かけたら？」「」

昴「明日の日の出は拝めないと思え！」

「」「ひいゝゝ！申し訳ありません！」「」

3人組は一目散に逃げ出した。

何と？賊をみすみす見逃すというのか？

昴「乱世とはいえ、あんなのが蔓延ってるなんて世も未だな。さてと・・・」

一言呟くとこちらを向き。

昴「そんな見づらいつろでじゃなくて、もっと見やすいつろで見たらどうだい？」

何と？こちらに気付いていたのか！ならば出ていくしかあるまいな。

昴side

？「これは失礼、助けにと思い参ったのですが、無用だったようですな。」

見ると1人の女性が現れた。この女性身のこなし、かなりできるな。

昴「何、別に気にしていないさ。」

特に殺気は感じなかったから放っておいたが。

？「しかし、みすみす賊を見逃しても良かったのですかな？また同

じ事を繰り返すだけなのではないか？」

あいつらやっぱり賊だったか。

昴「その時は責任をもって斬るだけだ。」

まあ、更正してくれる事を祈るだけだな。とりあえずせつかく出会った人だ、この女性にいろいろ尋ねてみるか。

昴「ところで貴女の名前と幾つか聞きたいことがあるんだが。」

？「ふむ？人に名を尋ねるならまず自分からではないですか？」

昴「これは失礼。俺の名は御剣昴だ。」

？「それは姓は御、名が剣、字が昴ですか？」

そついやこの時代の人間には姓名以外に字があるんだつたな。

昴「あゝ違う違う、姓が御剣で名が昴。字は無いんだ。」

？「字がないとは。」

やっぱり驚くよな。

昴「それで貴女の名は？」

？「あゝ、そうでしたな、私は・・・」

？「星ちやくん。」

？「星殿。」

何やら2人組の女性が駆けてきた。連れか？

？「おゝ、稟に風か、遅かったな。」

？「あ、貴女が速すぎるのですよ。」

2人供かなり息があがってるな。

？「そちらの女性はどちら様ですか？」

何やら飴をくわえた女の子が尋ねてくる。ん？女性？

？「賊を始末しようと来てみたらこちらの方には無用だったようだな。」

？「そうでしたか。」

趙「失礼しました。自己紹介がまだでしたな。私は趙雲と申す。」

程「風は程立です。」

戲「私は戯志才です。」

趙雲に程立に戯志才ね。ん？趙雲？趙雲、趙雲、趙雲！？まさかな。

昴「趙雲、君はもしかして常山群の趙子龍か？」

趙「ほう！私のことをご存知でしたか！」

うわゝ、やっぱりか！趙雲って確か男だったような気がしたが。なる程、あくまで三國志を基点とした外史という分けね。

昴「まあ、風の噂で、な。」

それに程立に戯志才って確か有名（しやうめい）な軍師だよな。

昴「改めて、程立、戯志才、俺は姓は御剣、名は昴。字はない。」

程「字がないとは珍しいですね。」

昴「まあな、ところで近くに街や村等はないか？」

戯「この近くに街が1つあります。これからそちらに向けて行く予定でしたから、良ければご一緒しますか？」

昴「助かる、是非一緒に行かせてもらおう。」

程「ではでは、一緒に行きましょう。」

俺は程立達の案内のもと一緒に行くことになった。

その道中

昴「そういや、さつきから気になってることがあるんだが。」

程「何でしょう？」

昴「君は姓が趙、名が雲、字が子龍だよな。」

趙「いかにも。」

昴「今戯志才が趙雲に向けて呼んだのは何だ？」

戯「？」

昴「ほら、今君は趙雲とも子龍とも違う呼び方を趙雲にしただろ？」

確か星、だったかな？

戯「？・真名……ですか？」

昴「真名？」

初耳だな。

趙「真名をご存知でない？」

昴「ああ、何せこの国に来たばかりなんでな。」

聞いてみると真名というのはその者のもつ本当の名前で、家族や親しい者以外が気軽に呼べば首をはねられても文句の言えない神聖な名らしい。危ねえ、あだ名だと思って呼ぶところだった。流石に趙

子龍と殺し合いは避けたい。

昴「なるほど。しかしこんな荒野で3人とも何してたんだけ？」

俺を助けにっつのは結果論だろ。どう考えても寄り道だ。

趙「じつは今この国ではとある噂が広まっています。」

聞くところによるとその噂の内容が、世が乱れし時、この地に一筋の流星に乗った御目麗しい天の御使いが乱世を治め、この地に平和をもたらす・・・。

戯「私達は別段噂を信じていたわけではないのですが、つい先程、この近くに一筋の流星が落ちたので。」

趙「そこに向かってみたら貴女と先程の賊どもがいたというわけです。」

やっぱりか、守り手が外史に降り立つ時はどうしても登場が派手になるんだよね。1度管理者側にどうにかならないかって打診したら一言『無理』って返された。ある程度人目のつかない場所に降ろしてはくれるんだが、そんなことより。

昴「さっきから君達は誤解してるようだから言うておくが。」

趙・戯・程「？」

昴「俺は男だ。」

趙・戯・程「・・・ええー！ー！！??？」

はあ、何処に行ってもこの反応だ。何で俺つてもっと男らしい顔に産まれてこなかったんだろ。例えるなら オウとか シシロウみたいな（笑）。

趙「（これほどの美しさを持って男だと。）」

戯「（私より美しい。）」

程「（女として自信を無くしそうです。）」

うーん、やっぱりこんな反応だよな。

昴「ま、そういうことだからよろしくな3人とも。」

俺は笑顔を浮かべながらウインクをした。

趙・戯・程「っ・・・／／」

ん？何やら3人とも顔が赤いな？まあいいか。お？街が見えてきたな。

街の食堂にて

今俺たちは一軒の食堂で食事をしている。やっぱり男だからお代は払おうとしたんだが、丁重に断られ、結局割り勘ということになった。

程「お兄さんに1つ聞きたいことがあるのですよ。」

昴「何かな？」

何だか気になるな。

程「率直に聞きます、お兄さんは何者ですか？」

やっぱりそうくるよな。

昴「何者、と言われても御剣昴、としか言い様がないな。」

程「お兄さんが風達の名前を聞いた時何やら驚いた反応をしました。」

「
まあ、実際驚いたないろいろ。

戯「後ですが、貴方は真名の存在を知らなかった事を考えてこの国に来て間もないでしょう。にもかかわらず星殿の事を常山群の趙

子龍と知っていました。星殿の武は本物ですがこの地に来て間もない星殿が、まだこのあたりでは名が知れているとも思いません。」
最もだ迂濶だったな。

昴「それはだな。」

戯「はい。」

昴「秘密、ということぞ。」

人差し指を口に当て、言ってみた。

程・戯・趙「はあ？」

昴「人にはいろいろ秘密があるんだ。例えば戯志才、君が偽名を名乗ったようにな。」

戯「！・・・何故偽名だと？」

昴「君が名を名乗る時に微かに言葉に躊躇いがあったのと、名乗った時に瞳が軽く揺れていた。嘘をついてる人間の典型だ。」

戯「・・・。」

昴「ああ、別に気にしてないからな。初対面のしかも得体も知れない人間に偽名を名乗るのは寧ろ必然、俺でもそうしていたらどうからな。」

両手を広げ自分の前で振りながらフォローした。

趙「時に御剣殿この後はどうなさるおつもりです？」

昴「そうだな、」

見聞を広げる為に旅に出る。そう告げようとした刹那。

「ぞ、賊だー！ー！」

昴・趙・戯・程「！！！」

1人の街人が騒ぎだしていた。

「本当なのか！！！」

「街の外で見たんだ！間違いない！」

この反応、マジだな。ち、さっきの仲間か！

すると趙雲が、

趙「この街の県令や警備の兵はどうした？」

「県令はとつくとんずらしちゃったよ！警備の兵も県令がないから混乱してるだけだ！あんた達も巻き込まれる前に早く逃げな！」

趙「ふむ、されば！ー！」

趙雲は駆け出した。

戯「星殿、どうするつもりですか!？」

趙「たかが賊など我1人で十分だ!」

戯「星殿!無茶です!」

静止も聞かず飛び出した。

昴「時に賊の数はどのくらいだ?」

「ざっと千近くはいるんじゃないのか?」

千か、趙雲1人ではちときついだろ。

昴「程立、戯志才。」

戯「はい!」

程「何でしょう!」

昴「この街の警備兵と民を纏めて街の防衛をしてほしい。出来るか?」

出来るはずだ。何せあの程立と戯志才(本名知らないがきつと有名な武将だろ)なのだから。

戯「可能ですが貴方はどうなさるつもりですか?」

昴「俺か?俺は趙雲と共に賊を片付ける。」

多分俺の時いた種だしな。

戯「無茶です！」

昴「大丈夫。何せ俺は……」

趙雲 s i d e

賊がぞろぞろと、数はおよそ千、といったところか？だが関係ない
我が槍で一掃してくれよう！

賊「何だ！もしかして俺たちと楽しみにきたか？」

賊どもは下卑た笑いを浮かべていた。

趙「黙れ賊ども。きさまらを地獄に突き落としてくれよう！」

1番前にいた賊を一突きで仕留めると。賊が騒ぎだした。

賊「こいつを殺せ！殺せー！」

趙「舐めるな！はいはいはいー！！！！」

次々と向かってくる賊を突き殺す。

目につく賊をところ構わず我が槍にて葬り去る。

どれ程繰り返したであろうか、百を越えた辺りで徐々に状況が変わってくる。

趙「（賊どもの死体で足場が！それに身体が重くなってきた！）」

賊「囲め囲め！」

趙「くっ！」

槍を構えた矢先、

趙「しまった！」

後ろの死体に足をとられ、賊の剣が腕を掠めた。

賊「へっへっへ、ここまでだな！」

趙「くっ！」

身体が自分のとは思えないほど重い。

趙「（これまでか！）？」

街の民は避難出来たであろうか、何、稟に風がいる。あやつらがうまくやってくれるだろう。

趙「（私はここまでのようだ、すまぬ。）」

走馬灯のように浮かんできたのは、自分の両親に、共に旅をしていた風と稟。そして・・・

趙「（ははっ、御剣昂殿か。面白そうな御仁であったな。もう1度話してみたかったな。）」

賊が自分に向けて剣を降り下ろす。

咄嗟に自分に走るであろう激痛に身を震わせた。

しかしいつまでたっても何も変わらない。

趙「（いったい何が・・・！）」

目を開けるとそこには先程会いたいと願った者が自身に降り下ろされた剣を素手で受け止めていた。

昂「ギリギリセーフ、って言ったところか？」

昴side

俺は急いで趙雲のもとへ向かった。さすがは趙雲だ、千もの賊相手に善戦していた。しかしいかに趙子龍でも、足場が悪すぎるし何より体力も限界に近づいている。突然現れた賊に対応した矢先に賊の死体に足をとられ、転倒した、幸い賊の剣は腕を掠めただけだった。賊は趙雲に向けて手に持つ剣を降り下ろそうとしている。

昴「(まずい!!)」

俺は足に自身の氣を練り上げ、特殊移動術の縮地をもって一気に趙雲との距離を詰め、降り下ろされた剣を素手で受け止めた。

昴「ギリギリセーフ、って言ったところか？」

「何だテメ、『邪魔だ。』がは！」

前蹴りで賊を蹴り飛ばす。賊は10メートル後方に飛ばされた。

昴「趙雲よ、無理と無茶は別物だぜ？それに君はこんなところで死ぬ人間でも死んでいい人間でもないはずだ。」

趙「御剣殿。」

さて趙雲も心配だが今はこいつらだな。

俺は賊に向けてにじり寄る。

「な、何者だテメエ！」

昴「俺か？俺は……。」

さてせつかくの新たな外史での初戦だ、盛大に行きたいな。そういやこの外史にくる前にあの変態（貂蝉）が言ってたな。

貂「1つ言い忘れてたわん。」

昴「？」

貂「これから昴ちゃんが行く外史だけど、今1つの噂でもちきりよん。」

昴「噂？」

貂「流星に乗ってやってくる天の御遣いが乱世を治め、平和に導くであろうってねん。」

昴「随分都合のいい噂だな。・・・まさか貂蝉。」

貂「そ、外史に軽く介入しておいたわ。でも私に出来るのはここま
で。後は・・・。」

昴「自分でどうにかしろってことだろ？十分だ。」

御目麗しいってのは余計だったが好都合だ。

昴「我が名は御剣昴！乱世を憂いこの地に舞い降りた天の御遣いだ！善行改める者は武器を置いて去れ！悔い改めぬ者は天に変わりお前たちに天罰を下す！」

去るものは・・・やはりいないな、噂を信じるにしろ信じないにしろ、賊にとっては迷惑な話しだ。実績もないしな。

さて始めるかこの外史の乱世を治めに。

御剣昂の新たな外史での初戦の火蓋が切って落とされた。

続く

第1話〈初名乗りは盛大に〉（後書き）

とりあえずここまでです。俺戦闘描写へったくそだな（<―>）

感想、アドバイスお待ちしてます。

第2話 救しと断罪、そして旅立ち (前書き)

何とか今日中に間に合った。恋姫キャラの口調あれで大丈夫かな？大袈裟なタイトルですがあまり関係ないかも。それではどうぞ！

第2話 救しと断罪、そして旅立ち

昴「そんじゃ、行くぜ！」

俺は太股の外側に携えた朝陽、夕暮を引き抜き敵陣に飛び込んだ。

昴「俺に魅了された者には、死神にも魅了されるぜ！」

左右の剣で賊を薙ぎ、突き、時に蹴り飛ばしこれらを一連の動きで、繰り返す。

まるで舞を踊るかのように。

趙雲 side

趙「何という。」

御剣殿は次々と賊を葬り去っている。その姿は艶やかな踊り子だ。その姿、一言で、

趙「（美しい。）」

そんな感想しか浮かばない。戦場や武人同士での一騎討ち。その武は強ければ強いほどその相手や第三者に与えるのは圧倒的な恐怖である。しかし今の御剣殿は圧倒的な武をふるっているにもかかわらず、そこから感じるものは恐怖でなく、見るもの全てを魅了する美なのである。

趙「これが天の御遣いと呼ばれる者なのか。」

「あの女だ！あの女を狙え！」

一部の賊がこちら目掛けて迫ってくる。

趙「舐めるな！」

槍を握り返り討ちしようとした刹那、また新たに驚愕することになる。

昴「おいおい、こっちを無視するなよ。」

言つや否や、4人者の賊を斬り捨てた。

趙「（御剣殿と私とはかなりの距離があった。あれだけの距離を一瞬で、いったいどうやって。）」

呆然と御剣殿を眺めていると、

昴「趙雲よ。」

趙「はっ！」何故か身体に緊張が走る。

昴「まだ動けるか？」

昴殿の問いに、

趙「無論です。我が武はこの程度では曇りませぬ。」

昴「そうか、なら、」

こちらを振り向き、

昴「背中では任せるぜ。」

溢れんばかりの微笑み向けた。

趙「（ふふつ。）」

不思議な笑顔だ、さっきまで重かった身体が嘘のように軽い。それどころか身体からどんだん力が湧いてくる。

昴「ならば行くぞ！力無き民を脅かす賊を俺たち手で討ち果たす！」

趙「承知！」

昴殿と共に敵陣へと飛び込んで行った。

昴 side

趙雲が加わったことにより戦況はこちらの優勢に傾く。だが依然として賊の数は多い。

昴「（キリがないな。）」

いつまでもこんな事を繰り返しても埒があかない。なら一気に片をつけるか。俺は足に氣を集中させ、

昴「趙雲！少しの間俺から距離を取れ！」

上空に跳躍し賊の中心部に降り立った。

趙「御剣殿！何を！」

俺は朝陽、夕暮に新たに練り込んだ氣を集中させ、

昴「氣功多連弾！」

技名を唱えると、双剣を左右に向けピンポン玉サイズの氣の塊をマシガンのように打ち出した。

ダダダダダッ！！！！

前後左右目につく賊を氣で撃ち抜いていく。

氣で撃ち抜かれた身体の箇所からは穴が空きそこから鮮血が飛び交った。

「がは！」

「ひい！」

「ぎゃあー！」

俺に近い敵は双剣で突き、薙ぎ払い離れた敵は氣で撃ち抜いていく。賊たちに先程の余裕はなく、徐々に恐怖に支配されていく。

「何だよこいつ。」

「化け物だ！」

「槍の女もただ者じゃねえ！」

恐怖が賊全体に伝染していく。千いた賊も氣が付けば残り200にも満たなかった。

昴「だいぶ、減ってきたな。」

この調子なら問題なく……ん？

「逃げるんじゃないやねえ！戦え、戦え！」

賊の頭見つけた。

目の前の賊を斬り伏せると頭目掛けて駆け出した。

昴「ようやくご対面だな。」

頭「な！いつの間に！おい！早くこいつをやっちまえ！俺を守れ！」

頭が部下に指示を飛ばすが、誰一人動かない。いや、動けないのだらう。

頭「どうした！何故言うこと聞かな『無駄だ』なんだと！」

昴「分かんないか？動けないんだよ。奴等が今渦巻いてるのは恐怖だ。それに、命を賭けてお前を守る理由もないんだらうがな。」

頭がワナワナとさせていた。

趙「御剣殿、こちらはあらかた片づきました。」

昴「趙雲か。」

見ると趙雲の後方には賊の死体が並んでいた。

昴「趙子龍は伊達じゃないな。」

頭の方に振り返り、

昴「さて、この戦も終幕と行こうか？」

頭「ま、待ってくれ！もう俺たちはもうあの街には手を出さない！だから命だけは見逃してくれ！」

昴「お前はそうやって言ってきた者を見逃してきたことがあるのか？」

頭「と、当然だろ、俺たちはあくまで物を頂くだけ『嘘だな』な！？」

頭が驚愕の顔を浮かべた。表情に出しすぎだ。嘘だと言わんばかりじゃないか。

昴「下らない。」

戲志才の時と一緒だ、言葉に戸惑いがあるし、瞳が揺れている。そして何より、

昴「お前の身体からは大量の血の臭いがする。1人2人殺めた程度じゃそんな臭いはしないはずだ！」

武人なら身体に返り血を浴びるような戦いも殺めた方もしない。現に趙雲は得物である、槍以外に血はついてない。抵抗してきた民をやむを得ず殺めたも却下だ。こいつは見てのとおりの小心者に臆病者。無抵抗の人間か圧倒的有利での状況じゃなければ、剣を振るわないだろう。

昴「終わりだ。」

頭「ひい！」

多少殺気をぶつけただけで、この様だ。

俺は朝陽、夕暮鞘に戻し、

昴「だが、まあ、せめてもの慈悲だ。」

頭に背を向けた。

趙「なっ！」

趙雲 side

昴「だが、まあ、せめてもの慈悲だ。」

趙「なっ！」

御剣殿が賊の頭に向けた刹那、

頭「馬鹿め！」

頭が腰の剣を引き抜き斬りかかるうおとした……が。

頭「えっ？」

賊の頭の胸から上と下半身がズレ始めた。

頭「そんな、見逃してくれるんじゃない、」

昴「お前みたいなゲスにそんな都合のいい選択肢があると思っつか？」

頭の身体がどんどんズレていく。

昴「せめてもの慈悲だ楽に死なせてやる。」

上半身と下半身が完全に別れを告げた。

昴「次人としての転生賜るなら戦乱無き世に産まれてくれ。」

頭の身体が崩れ落ちた。

趙「（何という。）」

私は見た、双剣を収め、賊の頭に背を向ける刹那、腰の長剣を恐ろしい速さで引き抜き、身体を切り裂き、鞘に長剣を戻した。並みの者では目にも止まらない速さであった。

趙「（やはりこの御方、ただ者ではない。）」

御剣殿に見とれていると、

「頭がやられた！」

「もう駄目だ！」

「逃げろ〜！」

頭を失い統制を失った部下たちが我先に逃げ出し始めた。

趙「逃がすか！」

賊を追いかけようと駆け出そうとすると御剣殿が手で制し、

昴「追う必要はない。」

趙「御剣殿！みすみす賊を逃がすおつもりか！」

昴「そうじゃない、あれを見な。」

指差す方向見ると、

戯「今です！」

程「皆さ〜ん、一斉に弓を放って下さい！」

あれは稟に風か！街の警備兵と民を一つの小队に纏めあげたのか。

賊は稟と風達の小队の放つ矢に次々に討たれていき、最後の1人が討たれた。

昴「全く、街の防衛をしてくれと言っただけなんだがな。」

やれやれと言わんばかりに呟いた。

昴「何にせよ、これで街は救われた。」

趙「そのとおりですな。」

昴「さてと、後片付け・・・ん？」

御剣殿が私のもとに近づき、

昴「腕を怪我しているな？」

趙「ああ、この程度ただの掠り傷です。気になさるな。」

昴「そういうな。せつかくの綺麗な身体に傷が残ったらもったいな
いだろ？」

御剣殿がそういうと私に片目を閉じて微笑んだ。

趙「なっ／＼」

全く、なんということをおっしやるのだ、この御方は！
御剣殿が私の腕に手を翳すと傷がみるみる塞がっていく。

趙「これは!？」

昴「これは内功と言ってな、俺の氣と君の氣を同調させて傷の治癒を促してるんだ。」

趙「ふむ？」

昴「要するにな、傷や怪我とかは放って置いても治るだろ？俺がやってるのはその速さを爆発的に高める為の処置だ。」

趙「なるほど！」

それなら分かりやすい！見ると傷はもう完全に塞がっていた。

趙「何から何まで助かります。それでは一度街に・・・あっ？」

突然脚から力が抜けその場に座り込んでしまった。

趙「ははっ、申し訳ありません、今すぐ立ちますので。」

立ち上がるうとしたがうまくいかなかった。

趙「これは、どうしたことでしょう？」

昴「君の身体はとうに限界を越えているんだ、さっきまでは夢中で

忘れていただけだ。」

趙「何とも情けない姿をお見せしてしまったようですな。」

昴「すまないな、内功は体力までは元に戻せないんだ。だから街までこれではしばらくこれで我慢してくれ。」

御剣殿が私に近づくとおもむろに膝下に手を回し抱き上げた。

趙「きゃっ!」

昴「街までだ、我慢してくれ。」

なんとということをお剣殿のお顔こんな近くに。よく見ると透き通った肌にサラサラ黒髪、そして何より、

趙「(美しい。)」

見るもの全て魅了しかねない顔立ちだ。

昴「しかし、趙雲も少しは自重をだな、」

星「星です。」

昴「ん?」

星「星とお呼びください。」

昴「それ真名だろ?いいのか?」

星「貴方ほどの御仁ならば是非にも。」

昴「わかった。星君の真名を受け取る。なら俺のことは昴と呼んでくれ。それが真名に一番近いからな。」

星「分かりました、昴殿。」

昴「やっぱりそう呼ばれる方が落ち着くな。」

星「後これが命を救っていただいたお礼です。」

昴「ん？」

昴殿の首に両手を回すと昴殿の頬に口づけを交わした。

昴「せ、星!？」

星「お礼と申したでしょう?」

昴「全く!」

昴殿も存外うぶですな。武人の道を歩み男を愛するなど決してないと思っていたが。やはり人生は何が起こるか分からん。ふふっ!昴殿?私は決して貴方を逃がしませんよ?

程立 side

程「こつちは終わりましたよ。」

戯「こつちも終わりましたよ。」

お兄さんに言われて警備兵と民を纏め街の防衛に当たりましたがお兄さんと星ちゃんが思いの外賊を討ち追いつめていたので撃つて出ることになりました。

戯「それでは星殿と御剣殿を迎えに行きましょう。」

程「そうしましょう。」

歩いてゆくと星ちゃん達を見つけました。何やら星ちゃんは抱き抱えられてるようです。おゝ、星ちゃん大胆ですね。星ちゃんがお兄さんの頬に口づけをしました。

戯「口づけ、恋仲、結婚。」

おやおや稟ちゃんの妄想が始まったようです。

戯「ぶはっ」

凜ちゃんの鼻から血が飛び出しました。

程「はい、凜ちゃんトントンしますよ、トントン。」

戯「ふがふがつ！」

昴side

俺たちは一度街に戻った。

昴「俺は少し用事があるから後は頼む。」

程「何処へ行くんですか？」

昴「街の外だ。賊の死体をあのままに出来ないからな。」

戯「どうなさるおつもりで？」

昴「死体を一ヶ所に纏めて火葬する。死体をそのままにすると伝染

病の元になるからな。」

星「そうなのですか？」

昴「ああ、俺が旅で学んだことだ。」

戯「そういうことならば街の皆にも力を借りましょう。」

昴「ん、そうだな、そうしてもらおう。」

街の皆は以外にも総出で手伝ってくれた。夜まで覚悟してたんだが、日没前に作業が終わった。今俺は人ほどの高さの岩を剣で削っていた。

昴「ふう、こんなもんか？」

戯「何をなさっているのです?」

昴「これか?これは墓標さ。」

戯「賊のですか?」

昴「ああ。」

戯「どうして賊なんかの?」

理解出来ないって感じだな。

昴「あいつらは賊だ。人から物を奪い時に殺め、それを繰り返す。ま、死んでも文句は言えないよな?」

戯「・・・。」

昴「でもな、あいつらだって産まれた時から賊だったわけではないし、あいつらにも友や家族だっているだろう。」

戯「はい。」

昴「あいつらの被害にあった奴らから言わせればとても許容できないだろう。でもな、こいつらには裁き下った。だから誰か1人ぐらい甲う奴がいてもいいだろう?」

戯「御剣殿。」

昴「まあこれはただの・・・自己満足だ。」
削った岩を持ち上げ賊の火葬した場所に建てた。後にしばらく黙祷した。

昴「……………」

10秒程黙禱を捧げ、

昴「それじゃ、街に戻るか！」

そのまま街に歩き出した。その道中、

戯「御剣殿、貴方は不思議な方だ。」

昴「そうか？」

戯「戦場では勇ましく、戦場以外ではひょうきんで、今は寂しそうです。」

昴「それが俺さ。」

少しカッコつけすぎたか。

昴「あ、そうそう。」

戯「？」

昴「俺のことは御剣ではなく昴と呼んでくれ。そっちのほづが落ちて着く。」

稟「分かりました、では私のことは稟とお呼びください。」

昴「いいのか？」

稟「是非貴方に呼んでいただきたい。」

昴「分かった、稟、君の真名を受け取ろう。」

稟「改めまして私は姓は郭、名は嘉、字は奉考、真名は稟です。」

郭嘉、なるほどやっぱり後の名軍師だったか。

昴「稟宜しく頼む。」

稟「はい！」

？「おやおや、稟ちゃんに先を越されましたか。」

稟「風！？」

風「お兄さん、風は程立、字は仲徳、真名は風です。」

昴「程立まで。」

風「預ける理由は稟ちゃんや星ちゃんと一緒になのですよ。」

昴「分かった、風。君の真名を受け取ろう。宜しくな。」

風「宜しくです。」

？「おうおう、姉ちゃんみたいな兄ちゃん、おいらは宝ヶ伊だ宜しくな。」

置物が喋りやがった。

風「これこれ、姉ちゃんみたいは余計ですよ。」

帰り道に2人の真名を受け取った。

街に戻ると街を挙げて祝杯をしてくれた。遠慮したんだが、お礼にと言われたから断れなかった。祝杯は夜更けまでに及んだ。

翌朝

昴「いろいろ世話になったな。」

星「それはこちらも同様です。」

風「お兄さんお兄さん。」

昴「ん？」

風「お兄さんはこれからどうするのですか？」

昴「そうだな、とりあえず見聞を広げる為にこの国を巡ろうと思う。とりあえず次は幽州だな。」

風「そうですね。」

昴「後は俺が力を預けるに足る主を見つける。」

稟「貴方自身が王として立ち上がるとは思わないのですか？」

昴「ははっ、俺は王の器じゃない。あくまで中身だ。俺が立ち上がったところで結局本物の王の器を持った者に潰されるだけだ。」

稟「そうですね。」

昴「さてと、そろそろ出ないと日没までに次の街着かないから俺はそろそろ行かせてもらおうよ。」

星「左様ですか。」

昴「それじゃ星、稟、風、またな！」

星「また会いましょう！」

稟「ええ！また何処かで！」

風「またなのですよ〜！」

手を振りそのまま歩き出した。

昴「星、稟、風面白い奴らだったな。敵か味方が次はどういう形になるかな？」

群雄割拠の時代が訪れればいずれかと敵として会いまみえる。

昴「ま、そりゃその時に考えればいいか？」

俺は新たな地幽州目指して歩みを進めた。

星 S i d e

風「行ってしまいましたね。」

昴殿は我々に手を振りそのまま歩いて行った。

風「正直、」

星「？」

風「もしお兄さんが立ち上がってくれたなら風の知略策謀、お兄さんの為にふるって見たかったです。」

稟「風もですか？」

星「皆考えてることは一緒というわけか。」

稟「しかし、本人が望まないのですからこればかりは仕方ありません。」

星「そうだな。」

風「では、我々も行きましようか。」

稟「そうだな。」

星「うむ。」

昴は幽州、星、稟、風達は陳留方面へ向かった。

かくして御剣昂のこの外史始めての戦は終結した。昂の向かった幽州。そこには自身が求める王、そして昂すらを変えてしまう王との出会いがあるなど知るよしもなかった。

続く

第2話 救しと断罪、そして旅立ち (後書き)

やっぱり下手だ。

氣功多連弾ですが初披露なので技名叫びましたが次から無言でぶっぱなします (笑)

キャラのセリフの横の名前ですが、主人公である昴が真名を受け取ったキャラは真名の頭文字になります。

感想、アドバイスありましたら宜しくお願いします。それでは！

第3話〜叶わぬ理想、桃園の誓い〜（前書き）

長くする予定はなかったんだけど、今まで1番長くなってしまった。
週末は忙しくて連投は無理だな。それではどうぞ！

第3話　叶わぬ理想、桃園の誓い

星達と別れ、1週間程が過ぎた。街や村を転々としながら旅を続けていた。その間、賊とは何組も出くわすことになった。少ない時で50人、多い時で700人ぐらいだ。幽州には到着したんだが、今いる場所の森の中に賊のアジトがあるという情報を掴み、向かってみたが、

昴「もぬけの殻か。」

どうやら既に移動した後らしい。

昴「はあ、これで3箇所目か。」

前にも見つけたが空振りだった。溜め息も3回目だ。つうか日も暮れてきたな。よし！野宿をしよう！そんなじゃ手始めに……

熊「グオオオ！」

昴「……………」

そこには2メートル超の熊がいた。

熊「グオオオ！」

昴「……………（グウー）」

熊「グオ？」

昴「……………ニヒッ（*^|^*）」

昴「いったきまーす!!」

熊「(TOT)」

昴「しゅちそつねま」

昨日は久々豪勢だったな。さすがに食いきんないから残りは旅の商人売ったら腹も懐も膨れちまった

それから半日たって今いる場所が幽州の啄郡という場所だ。今度はこの辺にいるらしいという情報を掴んだんだが、

昴「啄郡広えーよ！」

こりゃしらみ潰しは効率悪いな、それに縮地を使って駆けてきたから、

昴「腹へった。」

氣を使いすぎると身体は重くなるし腹はへるで地味にきつい。とりあえず街があるからそこ行くか。そこで腹ごしらえと情報集めだ。

劉備 side

劉「はあ、見つからないね。」

関「申し訳ありません、桃香様。」

劉「そんな！愛紗ちゃんのせいじゃないよ！」

私たちは今噂になっていて天の御遣いを探しています。愛紗ちゃん
はただの噂だと言っていたけどここ最近すごい評判になっている。
だからきつと天の御遣い様はいる。今幽州にいるって情報を手に入
れたから探してるんだけど、なかなか見つからない。

張「鈴々が必ず見つけるから心配ないのだ！」

劉「ありがとう、鈴々ちゃん。」

張「でも今は腹ごしらえなのだ！」

関「全く！おまえというやつは。」

劉「まあまあ愛紗ちゃん。」

今鈴々ちゃんがお腹を空かせたので1度食事を取っています。食べ
終わったらもう1度、ううん、見つかる何度でも探そう。私は新た
に決意を胸に秘めていると、

女性「いらっしやいませ！何になさいますか？」

昴「君のおすすめを頼むよ。」

女性「はい！ただいま／＼」

誰か来店したみたい。うわ、すごい綺麗！それに愛紗ちゃんと同じ綺麗な黒髪だ。思わず見とれてしまった。じっと見たら失礼だよね？食事に集中した。しばらくすると、

「テメエ、何しやがるんだ！」

女性「申し訳ありません！」

「おいおい、この服どうしてくれんだ！」

どうやら、給仕の女性が3人組の食卓の男の人に料理をかけてしまったみたいだけど、

関「あいつら！」

劉「愛紗ちゃん、どうしたの？」

張「今横のおじさんがわざと脚をかけたのだ。」

そうかだから料理をこぼしちゃったんだ。

女性「申し訳ありません！服は弁償致しますので！」

「そうか？なら今月の店の売上全部持ってこい！」

女性「そんな今月の売上全部だなんて！」

「払えねえか？なら姉ちゃんで勘弁してやるよ。」

男が給仕の腕を引っ張った。

女性「きゃっ！」

店主「お願いします！娘だけは勘弁してください！」

店の奥からこの店の店主が出てきた。

「金が払えねえんだろ！？ならその変わりだ！」

店主「そ、そんな。」

関「あいつら！もう許さん！」

愛紗ちゃんが飛び出そうとしたその瞬間、

ズドーン！！

劉「！！」

関「！！」

張「にやにや！！」

大きな音がしたと思ったたら女性の腕を引つ張つた男が店の天井に突き刺さっていた。やったのはさっきの綺麗な人だ！

「テメエ、何しやが『おまえも埋まれ。』ギャハ！！」

右足で蹴られた男は今度は店の壁に突き刺さった。

「何しやがるんだ！」

昴「何じゃねえだろ？おまえが足引っかけてたくせによ。」

「くそ！」

男が逃げ出そうとしたその時、

昴「まあ待て。」

綺麗な人が男を後ろから抱えると、

昴「せつかくだ、おまえも埋まって行け。」

そのまま持ち上げて地面に、

「ギャアアア！！」

叩きつけた。叩きつけられた男はそのまま地面に突き刺さった。

それを見ていた奥の食卓から（今の男達の仲間かな？）5人組が出てきた。

「舐めた真似してくれるじゃねえか！」

5人組が綺麗な人に襲おうとした時5人組の1人が、

「なあ？こいつ今噂のあれじゃないか？」

「あれ？」

「ほら、長い黒髪、黒い外套、5尺の長剣。今次々に仲間を潰して廻ってる。」

「まさか。」

「『『『『天の御遣い！！』』』』」

劉・関・張「！！！」

昴「自己紹介の手間が省けたな。」

「俺達だけじゃないっこねえ！くっ！ずらかるぞ！」

「はい！」

5人組が逃げ出した。

昴「忘れ物だ！」

綺麗な人がさっきの3人組を引き抜いて5人組に投げつけた。

「くそ！覚えてろ！」

投げられた3人組を引きずりながら逃げ出した。

「さてと、店主、お代はここ置いとくぞ。」

お金を置くと店を後にしようとした。

店主「お客様！多すぎます！」

昴「気にするな、店の修理代と後・・・迷惑料だ。」

そういつとそのまま店を出ていった、

修理代は分かるけど迷惑料ってなんだろう？いけないいけない！あの人が天の御遣い様なら早く追いかけないと！

劉「愛紗ちゃん、鈴々ちゃん、行こう！」

関「了解！」

鈴「合点！」

私たちも店を飛び出した。

昴 side

店を出てすかさずさっきの5人組を追いかける。失神させた3人を引きずってるからそんなに早く遠くには行けないだろ。追いかけていると後ろから、

? 「待つて下さ〜い!」

後ろから3人の女の子が追いかけてきた。

あの娘たち、さっきの飲食店にいたような、しかし1番前のピンクの女の子、何か気になるな。それはさておき、ちょうどいいな。

? 「あのすみません、私たち・・・。」

昴 「あ〜すまない、君達に頼みたいことがあるんだけど。」

何か俺に用事があるみたいだけど今はそんなことより・・・、

? 「ふえっ!?!」

ピンク色の髪の娘が驚いている。

昴 「今すぐこの街の県令のところに行ってくれないか?」

? 「県令さんのところ、ですか?」

昴「ああ。もうまもなくこの街に賊が来る。」

?「！賊がですか!?!」

?「それは本当ですか!?!」

さらさらの黒髪の女の子も声を荒げて返してくる。

昴「さっきの5人組、あれは賊だ。多分今仲間を呼びに行くところだろう。」

?「そんな。」

信じられない。といった表情だ。

昴「この辺に賊が集まっているという情報があってはいたら、大当たりだった。」

最近気付いたんだが最近の賊は頭に黄色い布を巻いている傾向がある。さつきも全員巻いていたしな。まずい、さっきの賊が俺の策敵範囲を越えちまう。

昴「とにかく、県令のところに行って街の防備を固めさせてくれ!」

それだけ行って俺は賊を追いかけた。

街の外にて

昴「これはこれは。」

街の外まで賊を追いかけてきたのだが・・・

昴「これは予想外だな。」

賊は既に街の近くまで進軍していた。

さっきの奴らはおそらく偵察だったのは想像できたからこれは予想どおりなのだが、唯一の誤算が・・・、

昴「（聞いていたより賊の数が多いな。）」

情報として聞いていたのは数は500だったり700だったり800だったり。しかし今目の前に賊は明らかに、

昴「（2千はいるな。）」

情報っていうのは基本あてにならないがいくらなんでもこれは・・・

・まさか。1つの推理が頭をよぎった。

昴「俺が集めた情報、これは・・・」

そう俺が集めた情報は間違いでも勘違いでもなく、全て本当のことなのではないか？つまり全てが1組の賊のことを言っていたのではなく。3組それぞれの賊の情報だったのだろう。それで、この地で3組が合流した。

昴「（迷惑な話だ。）」

数は予想より多かったが。

昴「関係ない、たかが賊の2千、敵じゃない。」

敵も戦闘体制をとりはじめた。

昴「さてと・・・」

いつものあれ行くかな？俺は息を大きく吸い込み。

昴「我が名は御剣昴！乱世を憂いこの地に舞い降りた天の御遣いだ！善行改める者は武器を置いて去れ！悔い改めぬ者は天に変わりおまえたちに天罰を下す！」

賊は一瞬身体をすくませたが立ち去る様子はない。警告はここまでだ。さあ始めよう。俺の戦を。

俺は朝陽と夕暮を引き抜き賊へと突進した。

戦場は乱戦の極みとなった。剣で斬り薙ぎ突き、そして回転しながら氣弾を乱射し、前後左右の敵を葬っていった。

「ギヤア！」

「グフ！」

「ガア！」

賊は悲鳴を上げながら倒れていく。いい調子だ！

しかし300程は葬った辺りで賊に変化が起こった。残りの賊のうち半分が別方向へと進軍し始めた。

昴「（こいつら半分を俺に、半分は街を襲う気か！？）」

想像どおり、賊の半分が街へと進軍していた。

昴「くそ！行かせるか！」

あわてて追いかかけようとするが残りの賊に道を阻まれる。

昴「邪魔だ！どきやがれ！」

賊を次々斬り伏せていくが、数が多すぎる。

昴「（くそ！敵を侮ったか！）」

自分の力を過信し、敵を侮ったことを後悔していると、

関「我が名は幽州の青龍刀、関雲長！皆我に続け！」

張「燕人張飛！只今参上！なのだ！」

先程の女の子達が兵を率いてやってきた。

関「行くぞ鈴々！」

張「応！なのだ！」

2人を中心に次々と賊が次々と葬られていく。

昴「（まさか偶然声を掛けた娘があのかつぱり女の子か。）」
星
達の時で予想はしていたがやつぱり女の子か。）」

俺は内心驚いていた。それに、

昴「（強い。2人ともあの星と同等だ。）」

2人の武を眺めていると、

「何余所見してやが『してないよ？』グハ！」朝陽で一閃した。

昴「不意討ちするなら声出しちゃ駄目だろ。」

さてと向こう大丈夫そうだな。こっちもさっさと終わらせるか。

賊に振り返り、

昴「終幕だ。」

再び賊へ突撃した。

戦いは昴、関羽、張飛の活躍により終息を迎えた。

昴「ふう。」

何とか今回も守りきったか。とりあえずあの娘達のおかげだな。

俺は3人の所へ向かった。

昴「援軍感謝するよ。助かった。」

礼をすると、

関「礼をするのはこちらです。貴女がいなければ街は襲われていましたし、何より貴女の武がなければ賊を撃退できませんでした。」

昴「俺だけでは守れなかった。」

関「こちらだけでも同様です。」

平行線だな。

昴「ははっ、互いのおかげ、ということまで手を打たないか？」

関「ふふっ、そうですね。」

昴「なら、決まりな。」

俺は関羽に微笑みかけた。

関「・・・／＼」

ん？顔が赤いな？まあいいか。

？「あの！」

もう1人の女の子が話し掛けてきた。

昴「君は？」

劉「申し遅れました。私は劉備、字は玄德です。」

予想はしていたがやっぱり劉備か。

劉「お願いがあるんです。聞いてくれますか？」

昴「何だ？」

劉「今漢王朝が腐敗して民からたくさん税金をとったり、それに喘いだ人達が盗賊となってさらに弱い人達を傷つけています。」

昴「・・・それで？」

関「官匪の横行、太守の暴政・・・今この国はこれらが負の連鎖となつて強大なうねりを帯びています。」

劉「私達は弱い人達が傷つき、無念を抱いて倒れることに我慢が出来なくて、少しでも力になれるのならって、そう思つて今まで旅を続けていました。」

鈴「でも、3人じゃ、もう何も出来なくなつてるのだ・・・。」

劉「でも、そんなことで挫折たくない。無力な私達にだって、何か

出来ることはあるはず。・・・だから御遣い様！」

劉備が俺に詰め寄り、

劉「そういった人達が苦しむことはなく、皆が笑って暮らせるようにするために。私達に力を貸して下さい！」

そういうと劉備が頭を下げた。

たいした理想だ。聞く人が聞けばとても甘美な理想だ。しかし、

昴「・・・皆か？」

劉「はい！」

昴「いくつか訪ねたいことがあるんだが。」

劉「何でしょう？」

昴「君達は今どうして戦ったんだ？」

劉「えっ？」

質問の意味が分からない、といった顔だな。

昴「皆が笑って暮らせるようにしたいんだろ？何故戦ったんだ？」

劉「えっ？えっ？だってあの人は弱い人達から物や命を奪う賊だから・・・」

昴「おかしな話したな？皆が笑って暮らせるようにしたい人間が何

故戦うんだ？皆じゃないのか？」

劉「あの人は、力があるからって好き放題暴れて、人のことを考えないケダモノみたいな奴らで……」

昴「なあ劉備よ。」

劉「？」

昴「こつは考えたことはないか？その奴らの中には仲間のため、または家族のため、やむを得ず賊に成り下がるしかしかなかったものがあるとは？」

劉「！……そんなこと……」

昴「無いと何で言いきれる？もちろんそうだとしても許されることじゃない。しかし仲間や家族のためにどんなこともやる……、これは完全なる悪か？」

劉「それは……。」

昴「それにな、奴らだって産まれた時から賊だったわけではない。奴らは君達が言う官匪の横行、太守の暴政、こついったもの達のせいでそうならざるを得なかった。見方を変えれば奴らも被害者だ。」

劉「！……ならあなたはあの人の行いを認めるって言うんですか！？」

昴「そんなわけないだろ、如何なる理由があろうと人が人から何かを奪うなど許されることじゃない！」

劉「それならあなたは何のために戦ったんですか!？」

昴「この国に住む民とこれから産まれてくる次世代の子とその孫の為だ。」

劉「それは私達だって同じです!」

昴「後今この国は腐敗している。君のその理想を叶えるにはこの国そのものと戦わなければならない。その為には勢力を築く必要がある。そしてその勢力は君の理想を叶えるべく君の命令の元命をとしてゆく。君はそれらの命を背負う覚悟はあるか?」

劉「それは・・・。」

昴「関羽、張飛。」

関「はい!」

張「にやにや!」

昴「君達は兵の命を背負い、民の願いと劉備の理想を叶える為にその命失う覚悟はあるか?」

関「無論です。」

張「当然なのだ!」

とりあえずこの2人は大丈夫そうだな。

劉「私だつて一緒です！皆が笑つて暮らせるようにする為なら私だつてこの命を・・・」

昴「君の場合はそれじゃ駄目だ。」

劉「えっ？」

昴「君の理想に賛同した関羽や張飛、そしてこれから君の理想に賭ける者達の為に君は死ぬことは許されない。最後の1人になるまで、極端なことを言えばその関羽と張飛の命を犠牲にしても生き延びなきゃならない。」

劉「そ・んな。」

劉備は愕然としている。

昴「それが上に立つものの役目。そして・・・責任だ。」

劉備は依然沈黙している。

昴「劉備。君はこの国に住む力ない民の為に人を殺め、その命を背負い、そして君にこれから力を貸す将や兵達の為に戦えと、死ぬと、殺せと命じる覚悟は君にあるか？」

劉「・・・。」

劉備は答えることが出来ない。まあ自分の理想を真つ向から正論で否定されたから無理もないか。

昴「とりあえず自覚も覚悟もないのなら、今の君に力を貸すことは

出来ない。」

そう出来ない。決して叶うことはないから。

俺は劉備に背を向け、

昂「俺は明日あの街を離れる。その時にもう一度君の目指すものと君の覚悟を聞かせてくれ。」

俺はそのまま歩きだした。

俺が街に向かって歩いていくと、

関「お待ちください！」

関羽が追いかけてきた。

関「如何に天の御遣いあれど桃香様の理想を否定するような真似は許しません！」

それを言いにはわざわざ来たのか？たいした忠義だ。俺は関羽に振り

返り。

昴「なら君はおれの言ったことを1つでも否定出来るのか？」

関「……。」

何も言わない。無理もない、否定も肯定も関羽の信念を汚すことになる。

昴「それにな、俺の言ったことはそのまま戦い続ければいずれ気付く。ただその時では遅い。劉備は理想と現実の狭間で地獄の苦しみを味わうことになる。」

関「そんな。」

昴「それと劉備の理想は間違っていない。ただそれだけじゃ駄目なんだ。」

そう駄目なんだ。

昴「君も劉備の配下であるまえに同じ理想を抱える同士だろ？一緒に悩んで一緒に考えてあげるんだ。」

それだけ言うと再び街に向かった。

劉備 side

御遣い様と別れて街の人達の祝勝会もそこに私は早々に宿に戻り、布団に潜る。

そしてさつき御遣い様に言われたことを考える。

劉「（御遣い様の言ったことは正しいことだと思う。）」

愛紗ちゃんや鈴々ちゃんは私を信じてくれるという。

関「私は桃香様を信じます、桃香様は桃香様の信じる道をお進みください。」

張「鈴々も桃香お姉ちゃんについていただけなのだ！」

2人供私を信じてくれている。

劉「（甘いと言われるかもしれない。呆れられるかもしれない。それでも私は・・・）」

私は1つの決意を胸に秘め、眠りについた。

昴 side

翌朝街の入り口に行くと劉備、関羽、張飛の3人が待っていた。

昴「劉備、君の理想と覚悟、もう一度聞かせてもらおう。」

劉「はい。」

劉備が一步前に出た。

劉「あれから一晩考えました。御遣い様の言うとおり、私の理想を叶えるのは無理なのかもしれない。」

そこで1回止めて、

劉「それでも、・・・それでも私はこの理想を諦めたくありません！甘いかもしれない。呆れられるかもしれない。それでも完全に理想を叶えることは出来なくても少しでも理想に近づきたい。その為に私は皆と力を合わせて戦います！」

劉備は言いきった。

劉「後、愛紗ちゃんや鈴々ちゃんを犠牲にしても生き延びろって言いましたけど、私は死なせません！愛紗ちゃんも鈴々も御遣い様も、……勿論私自身も。」

と捕捉した。

それを聞いた俺の感想は、

昴「（甘い。）」

やっぱりこの一言だ。

昴「（とてつもなく甘い……………ただ。）」

どうしてこんなに俺の心に、俺の魂に響くんだ。劉備の言葉はまるで……まるで。

？『昴よ！全ての民が笑って暮らせるよう力を貸せ！』

？『甘い？我と昴ならば可能じゃ。ついて参れ』

あいつとダブる。劉備とは見た目も中身も全然違うのに。
思えば初めて劉備に会った時に興味を持ったのはその為なのかもし
れないな。思わず俺は、

昴「くくくつ、あはははははは！」

笑いが出てしまった。

劉「やっぱり可笑しいですか？」

劉備が心配そうに聞いてきた。

昴「違う違う、皆を守る、誰も死なせない、こんな甘い理想を語る
奴が……俺以外にもいるとは思わなくてな。」

手を胸の前で振りながら劉備に言った。

劉「えっ？えっ！？」

昴「俺も馬鹿だったことだ。」

劉「それじゃあ！」

昴「いいだろう。君の理想の為に俺の力を貸そう。」

劉「ありがとうございます！」

劉備は勢いよく頭を下げた。

昴「改めて、俺は姓は御剣、名は昴字はない。」

桃「私は劉備、字は玄德、真名は桃香です。」

愛「私は関羽、字は雲長、真名は愛紗。」

鈴「鈴々は張飛、字は翼徳、真名は鈴々なのだ！」

昴「では桃香、愛紗、鈴々これからよろしく頼む。」

桃「よろしくね」

愛「よろしくお願いします。」

鈴「よろしくなのだ！」

俺と桃香、愛紗、鈴々は出会った。

場所は変わって

桃「うわ〜綺麗！」

愛「美しい・まさに桃園という名にふさわしい美しさです。」

今俺達は近くの桃園に来ていた。この場所は以前に助けた店主が教えてくれた。

昴「確かに絶景だ。」

各々が桃園に感動していると、

鈴「さあ酒なのだ！」

鈴々、少しは感動しようぜ。

愛「まったく！鈴々は！」

桃「まあまあ。」

桃香が愛紗をなだめている。酒も店主からお礼にと貰った。

昴「それじゃ始めるか？」

鈴「応！なのだ。」

それぞれ楽しんでいると1つ気になったことがあった。

昴「そついや君達は姉妹の契りは結んだのか？」

桃「そついえば。」

愛「まだですね。」

鈴「まだなのだ！」

昴「ならここらでしておいたらどうだ？」

桃「うーん、それもそうだね。」

愛「そうしましょう。」

俺は皆の杯に酒を注いだ。

これが桃園の誓いか、俺三國志でもこの場面好きだったんだよな。

うーん、感動だ！

よく見ると3人子供こちらを見つめている。もしかして俺を待ってるのか？

桃「早く早く。」

俺も入るのか？姉妹じゃないんだが。俺も自身の杯に酒を注ぎ3人の前に並んだ。

杯を天に掲げ、

愛「我ら4人！」

桃「姉妹の契りをむすびしからは！」

鈴「心を同じくして助け合い、みんなで力無き人々を救うのだ！」

愛「同年、同月、同日に生まれることを得ずとも！」

桃「願わくは、同年、同月、同日に死せんことを！」

昴「乾杯!!」

チン!

桃園の誓いが今成された。

桃「4姉妹、力を合わせて頑張ろうね！」

4姉妹・・・ああ何となく才子は読めたが、

昴「なあ。」

桃「？」

昴「1つ言っておきたいことがあるんだが。」

愛「何でしょう?。」

昴「俺、・・・・・・・・・・男だぜ?。」

桃・愛・鈴「えっ!?!」

やっぱりこの反応だ。もういいよ(TOT)

続
く

第3話　叶わぬ理想、桃園の誓い（後書き）

戦闘描写下手なのにどうして入れるかな。だんだん自信なくなってきたな。感想、アドバイスありましたら宜しく願います。

第4話〈私塾と臥龍鳳雛〉（前書き）

小説のしの字も知らない小わっぱが4話目で言うことではないんですが、スランプです。書いては消し書いては消しを繰り返して、ようやく完成しました。正直自信はないです。それではどうぞ。

第4話　私塾と臥龍鳳雛

桃園の誓いから1ヶ月程が過ぎた。俺は1人旅を続けていた。桃香達とはどうした？一緒に行くんじゃないのか？ってか？勿論嘘をついたわけでも逃げ出したわけでもないぞ？どういう経緯かということ

・
・
・

茶屋にて

桃「御主人様、今この辺の賊は約5千、私達はどう動けばいいかな？」

昴「それだけの数、当然個人の力じゃ無理だ。」

正直やれないことはないが。

昴「当然それに対抗する兵力を今の俺達で集めるのは不可能だな。」

桃「そうだよね。」

昴「とりあえず公孫贄が今その賊に対抗するために義勇兵を募って

るらしいそれに参加してみてはどうだ？」

愛「公孫贄というと、」

桃「白蓮ちゃんだ！」

鈴「桃香お姉ちゃん知り合いなのか？」

桃「昔ね、盧植先生と一緒に勉強したお友達だよ」

そうなのか？っていつか同門の事忘れてなかったか？

愛「桃香様、今思いだしませんでしたか？」

桃「えへへ」

本当に忘れてたのか。

昴「なら話は早い。公孫贄のところへ行くべきだな。公孫贄の兵力は約3千。しかしその大半が農民であることを考えると実質互角。勝敗を分けるのは・・・率いる将の質だな。そこで・・・。」

桃「愛紗ちゃん鈴々ちゃん御主人様の出番だね。」

愛「しかしかつての同門とはいえ、向こうは太守、こちらは今はただの腕自慢です。はたして相手にされるでしょうか？」

それが1番の問題だな。

昴「それならこっちも兵を連れて行けばいい。とりあえずこっちも

少数でいいから義勇兵を募ろう。」

鈴「でも鈴々達には義勇兵を集めるお金がないのだ。」

桃「そうなんだよね。」

その辺は問題ない。

昴「皆これを見てくれ。」

手持ちの鞆に手を入れ。

昴「これは火を付ける為の道具だ。」

ポウツ！ライターに火が灯る。

愛「これは！」

鈴「すごいのだ！」

皆驚いてるな。しかしまだあるぜ！

昴「あともう一つある。」

鞆から、

昴「これはボールペンと言ってな、普通文字を書くとき墨を摺って筆を使うがこれなら……。」

サラサラ。

桃「すつーい！文字が書けてる！」

昴「これを好事家や貴族にでも売ればかなりの金になる。とりあえずそれで義勇兵を募る。」

愛「分かりました。さっそく売りに行きましょう。」

桃「じゃあ私が売ってきてあ『却下だ。』ぶーぶー。」

足下見られるのは目に見えてるからな。

昴「愛紗頼む。」

愛「御意。お任せください。」

話は纏まったな。

昴「後皆に聞いてほしいことがある。」

鈴「何なのだ？」

昴「俺は皆とは別行動をとる。」

桃「！…どうしてですか！？」

愛「我らを導いてくれるのではないのですか！？」

昴「勿論そのつもりだ。」

愛「では何故です!？」

昴「以前に君達に理想とその覚悟を聞かせてもらった。次は君達がそれを成し遂げられるかを見定めさせてもらおう……ってのは建前でな。」

桃「？」

昴「俺はこの国をもつと見てまわって見聞をもつと広めたいんだ。」

正直それが出来るのは今のうちだけだろうからな。

桃「そんな？」

昴「もつと情報を集めたい。それはきつと後々必ず役に立つはずだから。」

愛「ですが。」

桃「君達なら大丈夫だ。自分達を信じる!それとも何か?君達の理想は俺におんぶに抱っこされなきゃ成し遂げることができない程度のものだったのか?」

鈴「そんなことないのだ!」

昴「必ず戻ってくる。だから旅を続けさせてほしい。頼む。」

俺が頭を下げると、

桃「分かりました。だけど2つ約束してください。」

昴「何だ？」

桃「必ず帰って来ること。後は無理だけはしないでください。」

昴「分かった、約束する。」

必ず戻ってくるよ。必ず。

昴「ならさっそく行動に移そう。俺はすぐにも出発する。君達はさきのとおり頼む。」

桃「分かったよ。」

愛「分かりました！」

鈴「分かったのだ！」

俺は店の精算を済ませ。桃香達と反対方向に歩き、

昴「ならまたな！」

桃「またね〜！」

愛「いずれまた！」

鈴「またなのだー！」

俺はそのまま歩き出した。

というわけだ。俺は依然旅を続けている。とりあえず荊州に入った。賊は相変わらず蔓延っており、俺は邑邑を襲っている賊を見かける度に潰してまわった。その甲斐あってか俺の天の御遣いとしての評判はどんどん上がった。上がったんだが、

昴「いくら何でも、これはな。」

俺が頭を悩ませているのは俺の評判と同時に付いて回った2つ名の事だ。

今民や賊の間で出回っている2つ名は、

『黒髪为天罰神』

『戦場の舞手』

『流麗の御遣い』

等である。名が上がるのは嬉しいがこんな厨二病くさい2つ名は認めん被りたいな。分かる？ 『噂程じゃないじゃん。』って勝手にがっかりされるこの気持ち。まだ言われてないけど。文句を言っているよ、

昴「ん？」

ふと空を見上げると空はいつの間にか雨雲に覆われており、雨が降りだした。

昴「まいったな。」

外套に付いているフードを被り縮地で走り出した。

雨はどんどん強くなり、止む気配がなかった走り続けていると一つの建物が見えてきた。

昴「あそこの軒で雨宿りでもするか。」

建物の軒下に入った。

昴「こりやまいったな。」

雨は暫くは止みそうにない、さてどうするかと考えていると、

キィ。

昂「ん？」

音のした方を見ると建物の扉からベレー帽みたいな帽子を被った女の子がこちらを覗いていた。

？「……………」

じつと見つめている。

昂「こんにちは。」

軽く挨拶をすると、

？「はわわ！」

何やらそんな声をあげると建物に引っ込んだ。

昂「何だ？」

何かおかしかったかな？まあいいか。もう一度視線を空に写し雨を眺めていると再び、

キィ。

音のした方を振り返るとさっきのベレー帽の女の子と今度は魔女みたいな帽子を被った女の子もいた。

？「……………」

?「・・・・・・。」

またじゅっと見つめている。うむ、どうしたものか。

昴「やあ。」

今度は手を振ってみた。

?「はわわ!」

?「あわわ!」

建物に引っ込んでしまった。

昴「?・・・・?」

一体何なんだ?そんな疑問が浮かびしばらくそのまましていると建物の奥から。

?「朱里、雛里、一体どうしたの?あら?」

今度はさっきの2人の女の子と妙齡の婦人が出てきた。

昴「すみません、雨に降られてしまったので軒をお借りしました。宜しければ小降りになるまでお借りしてもよろしいですか?」

お願いしてみると、

?「そういう事でしたら家へ入らせてください。濡れているようですし、雨が止むまで休まれてください。」

昴「よろしいので？」

？「お困りのようですので。」

ありがたい申し出だ。

昴「ではお言葉に甘えます。」

？「ではこちらへ。」

中に入れてもらった。

案内してもらってる途中に自己紹介を済ました。この建物は私塾でこの妙齡の婦人は水鏡というらしい。案内された部屋でくつろいでいると、水鏡さんがやってきた。

水「雨は止みそうにありませんので、今日はもうこちらでお休みください。今食事をお持ちしますので。」

昴「何から何まですみません。」

礼を言つと、

？「お、お待たせしました。」

先程の女の子2人が食事を持ってくれた。

テーブルに食事を並べ終わると、

?「ゆつくりしていつてくだしゃい・あう。」

あ、噛んだ。

それだけ言つとそそくさと出て行ってしまった。

昴「あの子達に何か失礼なことでもしたのでしょうか?」

水「ふふっ、決してそういうことではないのでお気になさらないでください。・・・ところで1つお訪ねしたいのですが。」

昴「何でしょう?」

水「あなたは今噂の天の御遣いですか?」

昴「何故そうだと?」

水「噂になってる特徴に類似していますし、何より、2つ名のおりですから。」

うーん、すごく恥ずかしいな。

昴「噂というのがどのようなものかわかりませんが、概ねそうですね。」

水「やはりそうでしたか。いえ、少し気になっただけです。」

昂「噂とは存外あてにならないでしょう?」

水「そんなことはありませんよ。噂以上です。」

本当か?

昂「ご婦人もお美しいですよ?」

一種の意趣返しだ。

水「あら?お上手ですね?」

あっさり返された。さすが大人の女性だ。

?「聞いた?雛里ちゃん?」

?「聞いたよ朱里ちゃん。」

?「やっぱり天の御遣い様だったね。」

?「噂どおりの人だね。」

？「うん、すごく綺麗。・・・羨ましいな。」

昴の知らないところで盛り上がっていた。

翌朝昨日より雨脚は弱まったものの、依然として雨は降り続いていた。

昴「雨止まないな。」

今俺は水鏡さんを探している。世話になった恩返しをする為だ。一宿一飯の恩義って言葉もあるしな。私塾内を探していると、程なくして見つけることができた。

昴「水鏡さん、探しましたよ。」

水「どうかなさいましたか？」

昴「お世話になりましたので何か返させてほしいのですが？」

水「そうですね・・・ではお1つお願いしたいのですが。」

昴「何なりと。」

水「昨日料理を運んだ朱里と雛里・・・諸葛亮と鳳統に隣街まで使いに出したのですが。少し帰りが遅いので様子を見に行ってもらえませんか？」

昴「ああ、あの子達ですね？」

へえ、あの子達諸葛亮に鳳統って言うのか・・・何だと!!!
あのチビツコ2人があの臥龍鳳雛なのか!!!正直この外史に来て
1番の衝撃だ。

水「?・どうかなさいましたか？」

昴「いえ、何でもありません。」

俺は平静を取り戻すと、

水「寄り道するような子達ではないので、何より今このご時世です
し、様子を見に行ってもらえませんか？」

昴「分かりました。」

水鏡さんに道を聞くと1度部屋に戻って支度をして、私塾を出た。

私塾からは街までは約1里（4キロ）。生い茂った森を越えた先にある。寄り道するような子達ではないのなら何かあったのならこの森だ。俺は森の中心で立ち止まり、

昴「（ここらで探索をかけてみるか。）」

俺は目を瞑ると、あの2人の氣と氣配の探知を試みた。

昴「（北・・・南・・・東・・・見つけた。）」

東方向約1キロ程の距離で2人の氣を発見した。しかし、

昴「（人の氣は全部で6つ、2人の氣を残りの4つが追いかけてる感じだな。）」

嫌な予感がする。場所はそう遠くない急ぐか。俺は縮地で急行した。

諸葛亮 side

諸「雛里ちゃん、頑張って！」

鳳「うん！」

私達は水鏡先生になり街まで使いに来ました。用事を済ませ、帰ろうとしたら賊の人達が突然襲いかかってきました。何とかスキをみて、逃げ出したのですが、依然として賊は追いかけてきます。

「まちやがれ！」

「ギャハハハ！待てよ！」

諸「雛里ちゃん、もう少しだから……。」

私は雛里ちゃんの手を引いて必死に走っていると、

雛「あう！」

雛里ちゃんが足をとられて転倒した。

諸「雛里ちゃん！」

鳳「うう、朱里ちゃん、朱里ちゃんだけでも逃げて。」

諸「何言ってるの！雛里ちゃんも一緒に……。」

その声を掛けようとすると、賊に追いつかれてしまった。

「へへ！手間かけさせやがって！」

諸「はわわ！」

鳳「あわわ！」

「どうする？楽しんでから殺るか？」

「はっ！ガキに興味はねえよ！盗るもの盗ってさっさと殺っちまうぞ！」

賊が剣を抜いて近づいてきた。私は雛里ちゃんの前に両手を広げて前に出た。

鳳「駄目！朱里ちゃん逃げて！」

諸「雛里ちゃんは死なせない！」

「ならまずはお前からだ。」

賊は剣を上振り上げ、

「心配すんな、2人仲良くあの世に送ってやるよ！」

賊が剣を降り下ろした。

鳳「朱里ちゃん！いやあ！！！」

私は目を瞑り、死を覚悟した。しかし先程から何も変化がない。痛みも何もない。

？「もう大丈夫だよ。」

その声を聞いて目を開けると私は天の御遣い様の腕のなかにいた。

昴 s i d e

探知に引っ掛かった場所に縮地で急行する。

昴「（見つけた!）」

すぐに2人を見つけた。しかし賊が剣を諸葛亮に降り下ろそうとしている。

昴「（やらせるか!）」

俺は縮地最大速度で諸葛亮に近づきそのまま腕に抱えてそのまま離れた。諸葛亮は目を瞑り、身体を震わせている。

昴「もう大丈夫だよ。」

それを聞くと諸葛亮はゆっくり目を開けた。

諸「天の・・・御遣い様?」

昴「ああ、待たせたな。」

俺はウインクをして諸葛亮に微笑みかけた。

「何だテメエは！」

俺は諸葛亮から手を離して賊に振り返り。

昂「お前みたいなのがスに名乗る名なんてねえよ！」

そのまま村雨を引き抜き一刀両断にした。

「ギャハ！！！」

賊は真つ二つにされ果てた。

「なっ！」

賊が圧倒された。

俺はそのまま近くにいた賊に飛び込み、そのまま胴を一閃した。

「グアハ！！！」

2人目の賊も果てた。

「ひいっ！」

俺が近づくと賊も同じだけ退く。

「ガ、ガキだ！もう1人のガキを人質にとれ！」

「お、おう！」

賊の1人が鳳統に振り返る。すかさず俺は縮地で移動して道をふさいだ。賊は正面にいた俺が振り返った先にいたもんだから驚愕している。

昴「つくづく救えないな。」

そのまま賊の頸を飛ばした。

「グフ！」

賊はそのまま倒れた。残りの1人は腰を抜かして後退りしている。

「俺が悪かった！もう抵抗しないから許してくれ！」

命乞いをしてくる。

昴「許しは、」

「？」

昴「地獄で閻魔様にでも乞いな。」

「ひいー！」

そのまま村雨を降り下ろし肩口から賊を斬り伏せた。

「ギヤアアア！」

断末魔をあげると最後の賊も果てた。俺は村雨を血振りすると鞘に

納めた。

振り返ると諸葛亮は鳳統の肩を抱いている。俺は2人に近づき、2人を抱きしめた。

諸「はわっ！」

鳳「あわっ！」

昴「よく頑張ったなもう大丈夫、大丈夫だから。……だからもう泣いていいんだぞ。」

諸「グス。」

鳳「うう。」

2人は目に涙を浮かべ、

諸・鳳「「恐かったよ〜〜！」」

2人は声を上げて泣き出した。俺は2人の頭を撫でながら2人が泣き止むまで胸に抱きしめ続けた。

その後に私塾まで2人を連れて帰り、事の顛末を聞いた水鏡さんが、水「朱里と雛里を救っていただき本当にありがとうございます。あなたがとうございます。あなたがいなければ今頃どうなっていたかことか。」

と水鏡さんは深々と頭を下げた。

昴「間に合ってよかったですよ。」

本当にギリギリだったもんな。

諸・鳳「あの！」

昴「ん？」

諸「命を助けていただきありがとうございます。何かお礼をさせていただきますい！」

昴「何、こつちとしては世話になった礼を返したただけだから気にしないでくれ。」

鳳「私達はあなたが受けた恩以上のものを受け取りました。だからお願いします。何かお礼をさせてください。」

貸し借り、この世界じゃ大度と器量だっけ？受けた恩はそれ以上のものをもって返さなきゃ行けないんだっけ？なら断るのは失礼か。

昴「そうか。ならありがたく受け取らせてもらっよ。」

さてどうしたものかな。あ、そうだ！

昴「ならば、君達読み書き出来るよね？俺にこの国の文字を教えてくださいませんか？」

外史に来てまず1番困るのは読み書きだ。言葉は何故か通じるんだけど。

諸・鳳「はい！喜んで！」

昴「ならよろしく頼む。」

ありがたい限りだ。それにしても、

昴「・・・(ジ)。(」

この2人があの歴史に名高い名軍師(になる予定)とはね。

ナデナデ

諸「はわわ！」

鳳「あわわ！」

うん、可愛いなあ！

元々いろんな外史でいろんな文字に触れていたこともあるけど、やっぱり諸葛亮と鳳統の教え方がうまいおかげで3日で文字を覚えることが出来た。2人は「たった3日で文字を覚えてしまっなんてすごいです!」とか言ってたけど。俺は文字をマスターした後水鏡さんに1つのお願いをした。それは、

昴「それでは水鏡先生に変わり私が教鞭をとらせていただきます。皆さんよろしくお願いします。」

そう、先生だ。1度やってみたかったんだ。俺は眼鏡をかけて教壇に立った。眼鏡は伊達だけど。内容としては俺がいろんな外史で学んだ知る限りの兵法、政、謀等を時間が許す限り教えた。最後にこの時代では革新的な政の政策を教えてみた。やはり諸葛亮と鳳統は優秀だ。俺の言ったことを即座に理解していた、2人以外で理解出来たのはほとんどいなかった。授業も終わり最後に、

昴「私の授業はこれまでです。皆さんはこの後で政に関わる者、中には戦に関わることになる者もいると思います。ですから覚えておいてください。武は人を傷つけ時に殺めることがあります。しかし知は時に大量人を傷つけ、苦しめ、殺めることになることがあります。それも本人の手を汚さずに。君達が学び培ってきたその知識、より多くの人を守り、救うために活用してください。私の授業はここまでです。皆さん今日は1日ありがとうございます。」

頭を下げると大きな拍手をしてくれた。何か照れるなノノ

翌朝、降り続いていた雨もついにあがり、俺は旅を続けることにした。

昴「大変お世話になりました。」

水「こちらこそお世話になりました。」

昴「諸葛亮に鳳統も世話になったな。」

諸「……。」

鳳「……。」

2人は黙っている。どうしたんだろう。

諸・鳳「あの！」

2人が同時に声を上げた。

諸「あなたはこの国で何を成すおつもりですか？」

徐に尋ねてきた。その目は真剣だ。

昴「俺はこの乱世を終わらせ、民が戦に怯えることのない世界を創る。もちろん大量に人を斬ることになるだろうし、大量に人を死なすことになるだろう。それでもこの国に住む民の為、生まれてくる民の為、死んでいった民の願いの為に俺は戦うよ。」

俺は真剣に答えた。

諸「雛里ちゃん。」

鳳「朱里ちゃん。」

2人はお互いに顔を合わせ、頷き合つと、

朱「姓は諸葛、名は亮、字は孔明、真名は朱里。」

雛「姓は鳳、名は統、字は士元、真名は雛里です。」

朱・雛「我らをあなたの末席にお加えください。」

そう申し出てくれた。

昴「……。」

2人が俺の目を一切逸らさずに見つめている。

昴「俺についてくれば、またあのときみたいな怖い思いをすることになるし今度は死ぬことになるかもしれない。その覚悟はあるか？」

朱・雛「はい、もちろんです！」「」

昴「君達の策で大量に人が死に君達が策を仕損じれば仲間が死ぬ。君達の命令の元に散っていく命を背負う覚悟はあるか？」

朱「もちろんです！」

雛「弱い人達が苦しんでいるのを見ていられないから。」

2人は言った。なるほど、覚悟は出来ている、っていうことか。

昴「分かった、君達の力、存分に使わせてもらう。俺は姓は御剣、名は昴、朱里、雛里これからよろしく頼む。」

朱「はい！」

雛「よろしくお願いします。」

歴史に名高い名軍師、臥龍鳳雛、彼女らが御剣昴の理想に触れ、新たに仲間になった瞬間だった。

続く

第4話〈私塾と臥龍鳳雛〉（後書き）

というわけで4話目です。うまく書けたかは分かりません。次回オリキャラ登場予定です。私ごときがオリキャラを使いこなせるかは分かりませんが蛇足にならないように頑張ります。感想、アドバース等ありましたらよろしくお願いします。待っています。

第5話 大梁義勇軍との防衛戦と乱世の霸王（前書き）

2日あいてしまいました。ポリウムは過去最大ですが中身は薄いです。華琳の扱いは難しいです。それではどうぞ！

第5話 大梁義勇軍との防衛戦と乱世の霸王

昴「朱里、雛里よろしく頼む。」

朱「はい！」

雛「よろしくお願いします。」

昴「ただな、今俺は旅の途中なんだ。君達には俺についていくよりも行つてほしいところがあるんだ。」

朱「行つてほしい・・・ところですか？」

2人とも少し残念そうだ。

昴「劉備玄德という名を聞いたことがあるか？」

雛「はい、幽州の公孫贛さんのところで名をあげている義勇軍の方ですね。」

知っていたようだ。桃香達、頑張ってるんだな。

昴「今は別行動をとってるが、旅が終われば劉備達のところに戻る予定だ。俺のいない間劉備を支えてほしい。」

朱「劉備様は仁徳を兼ね備えた方だとお聞きしています。あのお方でしたら喜んでお仕えます。」

昴「劉備は俺と同じ理想を掲げる仲間だ。きっと君達も仲良くやれ

るはずだ。今彼女らに必要なのは君達のような軍師だ。俺の変わりに彼女達を支えてほしい。」

雛「分かりました。御遣い様が変わり、劉備様をお支えします。」

昴「ありがとな。ならさっそく・・・。」

靴から紙を取りだしボールペンで桃香に紹介状を書いた。・・・これだけだと俺からの紹介状だと信じないかもな、愛紗とか堅物そうだし。・・・そうだ！俺は頭の髪留めを外し、

昴「この紹介状と髪留めを持っていけば劉備も受け入れてくれるはずだ。」

朱「分かりました。お任せ下さい。」

朱「行つてきます！」

雛「水鏡先生もお元気で！」

街に行くと、幽州行きの行商人に交渉し、2人を送ってもらった。

昴「桃香達によろしくなー！」

俺は大きく手を振り見送った。

昴「水鏡さん、よろしかったのですか？」

水「あの子達が決めたことですから。私は朱里と雛里の無事を祈るだけですわ。」

昴「そうですね。」

水鏡さんは少し寂しそうに言った。

水「ところで昴さんはこれから何処へ行く予定ですか？」

昴「これからですか？とりあえず陳留へ向かおうと思ってます。」

会ってみたい者が1人いるからな。

水「それでしたら一緒に連れて行ってほしい子がいるのですが。」

昴「一緒にですか？」

水「ええ、この子なんです。」

すると水鏡さんの後ろから麦わら帽子を被った女の子がひょこっと出てきた。この子は確か私塾にいた子だな。

水「さあ、自己紹介なさい。」

女の子は1歩前に出ると、

司「・・・姓は司馬、・・・名は懿、・・・字は仲達・・・です。」

とスローテンポで自己紹介をした。この子、俺の授業での近未来の政策を朱里と雛里以外で理解したもう1人だ。

水「私の妹の娘なのですが、朱里や雛里と並び、優秀な子です。」

だろうな、正史じゃ諸葛亮と並び称される軍師だからな。

昴「司馬懿ちゃん？」

司「何・・・でしょう。」

昴「何故俺と一緒に行くこうと思ったんだ？」

司「・・・仕えるべき・・・主君を・・・探す・・・為です。」

昴「それなら朱里や雛里と一緒に行けばよかつたんじゃないか？」

司「・・・(フルフル)」

首を横に振る。

司「朱里ちゃん・・・も・・・雛里ちゃんも・・・大好き・・・でも2人の求める主君・・・と、私の求める主君・・・は違う・・・から。」

昴「劉備ではないと？」

司「・・・(コクリ)」

なるほど。

司「曹操・・・孟徳様。あの方に・・・会ってみたいです。」

昴「曹操が自分が仕えるべき主君だと？」

司「かも・・・しれないです。」

昴「・・・分かった。それなら一緒に行こうか。」

司「宜しく・・・お願いします。」

水「それではお願いします。茉莉？身体には気をつけるのよ？」

司「お世話に・・・になりました。叔母上も・・・お元気で。」

水「私は私塾に戻りますので、それではこれで。」

昴「本当にお世話になりました。」

と頭を下げ、水鏡さんを見送った。

昴「それじゃ行こうか、司馬懿ちゃん。」

司「・・・茉莉。」

昴「ん？」

茉「茉莉と……呼んで下さい。」

昴「それ真名だろ？いいのか？」

茉「センスなら……いい。」

昴「分かった。なら茉莉行こうか。」

茉「はい。」

俺達は陳留へと向かった。

水鏡さんの私塾を旅立ち2週間程が過ぎた。茉莉と邑邑を転々と、時には野宿をしながら旅を続けていた。茉莉だが当初あまり感情出さない子だなと思っただがそうでもないらしい。例えば甘味屋に寄った時、とても嬉しそうな顔をしていた。他には暇をみて勉強を見てあげてるんだが、良くできた時に頭を撫でてあげた時とても嬉しそうな顔だった。後茉莉は俺のことを『センス』と呼ぶ。何故そう呼ぶのかを聞くと、

茉『センスは……センスだから。』

らしい。1日だけの先生のもりだったのだが。まあ本人が呼びた

いなら別にいいか。旅の道中やはり賊に襲われることがしばしばあった。普段なら早々に叩き潰すんだが今は茉里と一緒にだからあまり無理はできない。そのためこちらからは手を出さない。教われた場合も500人以上いる場合は手を出さず、茉里を邑に預けてから片付けるようにしている。しかしここで1つの問題が発生した。名をあげるために各地で賊を鎮圧してまわっていたことが実り過ぎた。最近では邑や街行くだけで指を指されるようになってしまった。正直煩わしいので今では外套のフードを被り、スカーフで口元を隠している。歩き続けていると、邑が見えてきた。

昴「今日はあの邑で宿をとろう。」

茉「はい・・・分かりました。」

邑の近くまで来てみると様子が少しおかしかった。

昴「(やけに物々しいな。まるで何かを警戒してるような感じだ。)
」

茉「・・・へん。」

昴「茉里もそう思うか？」

邑の手前で話していると、

？「そこで止まれ！」

昴「ん？」

声の方向を見ると手甲を身につけた傷痕だらけの女性が立っていた。

？「お前達賊の手先だな！ここは絶対に通さない！」

昴「待て、俺達は賊じゃな」問答無用！はあ！』いや聞けよ。」
女性はそのまま俺に飛び込むと拳を繰り出した。とりあえず俺は右に避ける。避けられるのを確認すると拳を繰り出した反動で回し蹴りを繰り出してきたのでそれを右腕で受け止めた。

昴「（型の荒らさから考えて我流だな。しかし筋はいい・・・が、今はそれどころじゃないな。）」

戦うつもりはないからとりあえず大人しくさせるか。女性が1度下がり、今一度飛び込み右拳を繰り出した。俺は顔に直撃する直前に縮地で女性の背後にまわった。

？「くっ！何処に！？」

女性は俺を見失っている。俺はそのまま彼女の左腕をひねり、動きを封じた。

？「ぐっ！離せ！」

昴「いやいい加減話を聞けつて。」

問答を繰り返していると、

？「昴！ちよい待ち！」

？「昴ちゃん、落ち着くの。」

すると、邑から女の子2人が現れた。

？「風、いくら何でもいきなり手え出したらアカンやる。」

？「そうなの〜。」

話を通じそうな2人が来たので俺は傷痕の女性から手を離れた。

昴「とりあえず話を聞いてもらってもいいか？」

？「あゝ、すまん。」

俺は旅の者で邑へ泊めてもらう為に来たことを説明する。

？「やっぱり風ちゃんの勘違いなの。」

？「うう、真にすみません。」

昴「何、構わないさ。・・・ところで、やけに物々しい雰囲気だが何かあったのか？」

尋ねてみると、今この辺には賊があり、邑は警戒しているのだという。

？「という訳でこの邑は今賊の襲来に備えています。ここには巻き込まれますよ？」

昴「しかしそろそろ日も暮れる。暗がり歩く方が危険だろ。」

？「・・・それもそうですね。ならこの邑に入らして下さい。」

昴「恩にきる。」

茉「ありが・とう。」

?「しかしな、そないな被り物と布で顔隠しとったらそら尻でなくとも警戒するで?」

昴「ま、確かにな。」

?「顔に怪我してるわけやないんなら外してもらってええか?」

まあしょうがないか。

昴「分かった。」

俺はフードを外し、スカーフを首に下げた。

?「何や意外に別嬪さんやないか。何で顔隠しとったん?」

昴「ま、いろいろとな。」

するとメガネっ娘が、

?「ねえ、この人今噂の人に特徴似てない。」

と言い出した。気づかれたか?

?「黒い外套、5尺の長剣に黒髪。ホンマや!」

どうやら気づいたようだな。

？「あなたはもしかして天上の天罰神と呼ばれる天の御遣いでしょ
うか？」

その二つ名か。他よりマシか。

昴「そう呼ばれることもあるが、俺は御剣昴。一応天の御遣いだ。」

？「「「！！！！」」」

3人は驚愕している。

楽「私は楽進です。」

李「うちは李典や。」

于「沙和は于禁なの。」

楽「御遣い様、我らに力をお貸し下さい。」

昴「分かった、とりあえず詳しい話を聞かせてくれ。」

楽「ありがとうございます！それではこちらにいらして下さい。」

街の作戦本部にて

楽「賊の数は約3千。それに対し我ら大梁義勇軍は1千3百程です。」

昴「戦力差は2倍以上……。」

李「今西側と東側に防壁を築いとるんやけど東側は材料が足りひんからかなり脆いねん。」

昴「なるほど。」

于「さつき偵察に行つたんだけど、賊は2里ほどの距離なの。」

昴「(2倍以上の戦力差、東側の脆い防壁。2里ほどの距離か。よしここは。)」

昴「茉里、君ならどういう策をとる?」

茉里に聞いてみた。

茉「はい、……まず部隊……ですが、西側と……東側に250人ずつ……配置して下さい。」

李「東側の方が防壁が脆いんやで?そつちを多くせんでええのか?」

茉「どうせ脆いなら……抜かせてしまいます。」

楽「どういうことだ?」

茉「罨を……仕掛けます。」

楽「なるほど。」

茉「西側にも同様に・・・罾を仕掛けます。これで西側と東側の入り口は・・・大丈夫。」

まあ無難だな。

茉「次に・・・2百人程・・・邑の南の森に・・・伏せてください。」

李「賊の背後を突くちゆうことやな。」

茉「(コクリ)」
于「なるほどなの。」

茉「賊が退いた後は・・・夜襲を仕掛け・・・糧食を燃やします。策は・・・こんな感じですよ。センセ、どうでしょう?」

昴「ああ、問題ない。よくできました。」

茉「・・・んっ／＼」

頭を撫でてあげたらとても嬉しそうだ。

李「ほんなら、何処にうちらを配置するん?」

茉「東側は・・・李典さん、西側は・・・于禁さん、・・・北側は・・・私。南側は・・・楽進さん、お願いします。」

昴「と、すると俺は伏兵を率いればいいんだな。」

茉「はい。天の御遣いが現れた・・・というのは、賊には脅威・・・だから。」

昴「分かった、任せろ。」

策は決まったな。

昴「よし！それでは、準備を始めるぞ。終了後はそのまま開戦まで待機だ。」

楽・李・于「了解です（や）（なの〜）！」

昴「それともう一つ。絶対に死ぬな！名誉も矜持も生き残って初めて意味を成す。だから死ぬな！必ずまた会おう！」

茉・楽・李・于「はい！」

昴「それでは行動開始だ！」

おれが檄を飛ばすと各々が持ち場へ向かった。

楽進 side

数時間後賊が来襲し戦が始まった。

当初の目論見通りに東側の防壁は開戦してしばらくして突破されつつあった。

「東側の防壁を2つ突破されました！残る防壁はあと1つです！」

楽「狼狽えるな！これも軍師殿の目論見通りだ！そちらは真桜に任せろ！」

「分かりました！」

「西側も1つ目の防壁が破られました。」

くっ！思っていたより早い！

楽「そちらも予定通りだ！沙和に任せろ！」

真桜、沙和任せたぞ！かといってこちらにも余裕があるわけでもない。

楽「踏ん張れ！もう少しもちこたえれば！御遣い様がどうにかしてくれる！」

その後方から悲鳴が轟いた、

「申し上げます！東側の賊が畏にかかりました！」

「西側の賊も同じく畏にかかりました！」

よし！こちらの思惑通りだ！東側と西側の防壁近くには落とし穴を仕掛けた。穴に落ちた賊に油をかけその上から火矢をいかけ、火だるまにする。正直あまりに気味悪い光景だが賊は所詮は農民あがり

だ、火はこれ以上ない恐怖と混乱を産む。賊に動揺が走っているその時、

昴「我はこの地に舞い降りた天の御遣い、御剣昴だ！皆俺に続け！」

南の森に伏せていた伏兵が飛び出した。

昴side

今俺は邑の南側の森に兵2百を伏せている。邑の方角から悲鳴が轟いた。よし、仕掛けた罠にかかったな。まだまだもう少し……今だ！

昴「皆、行くぞ！」

俺は先頭を切って飛び出した。

昴「我はこの地に舞い降りた天の御遣い、御剣昴だ！皆俺に続け！」

「おー！！！」

それに続き義勇軍が飛び出した。

俺は浮き足立っている賊の背後から突っ込み、さらに混乱させる。

敵は多数だが今回は朝陽、夕暮ではなく村雨を引き抜き後方正面の賊を一気に5人を斬り捨てた。その勢いのまま敵陣を突っ切って行く。

昴「1人で敵に当たるな！必ず2人で1人に当たれ！」

義勇軍も賊も兵の質は互角。なら個と個ではなく、集と個で当たる質が同じなら個が集に勝てるわけがないからな。俺が賊を斬り捨てていると、

「ば、化け物だ！」

「い、一度退くぞ！」

賊が次々と退いて行く。

昴「追撃をかける！しかし深追いはするな！」

今日の戦は終わった。賊の被害が7百人に対し大梁義勇軍は50足らずだった。

その夜、俺は精鋭50人の義勇軍と楽進を率い敵陣の側まで来た。た。

昴「見張りは8人か。」

奇襲を仕掛ける為に敵陣に来たが、

昴「今飛び出してもさほど被害は与えられないな。」

楽「やむ得ません、行きましょう。」

楽進が飛びだそうとしたのでそれを手で制した。

昴「まあ待て。」

俺は邑から持ってきた小刀を8本を両手に構えそのまま投げた。

「ぐ！」

「あが！」

8人の賊が頭や喉や心臓を貫かれ息絶えた。

昴「行くぞ。」

楽「は、はい。（なんて人だ！）」

俺達は敵陣の兵糧を焼き払い、そのまま陣を突っ切り、賊に打撃を与えた。

翌朝、敵は兵糧を焼かれたことによる士気の低下と夜襲による疲労でガタガタだった。俺は今は西側、于禁と共に邑の防衛に当たっている。昨日の戦の際に邑の案山子を大量に立てていた為、矢も十分な量があった。案山子は戦力を多く見せる為のハツタリの役目もあった。とはいえ、倍以上の戦力を相手にしている以上矢にも限界は近付いてくる、そして遂に、

于「矢が尽きたの。」

矢が底を尽きた。だが茉里はこの事態をも予測していた。

昂「よし、石を投げる！」

昨日のうちから非戦闘員に邑の中の石垣や、岩を投げやすい大きさに崩して、一ヶ所にまとめておいてもらった。ちなみに案山子も彼等の手作りだ。昨日の作成会議の後に協力を依頼に行ったら「力に慣れるのなら」と快く引き受けてくれた。今のところ全てが順調だったが思わぬ訃報が飛び込んだ。

「南側が苦戦しており、楽進様が討って出ました。」

昂「何だと！」

ち、こっちの兵力が少し少ないと思ったがまさか南側に戦力を集中していたか、この辺で兵を伏せられるのは南側だけだ。昨日の例があるから警戒していたのだろう。しょうがない。しかしだからといって防衛側が討って出るのは迂濶だろ。

昂「于禁、ここは任せた、俺は楽進の援護に行く。」

于「凧ちゃんを助けてあげてほしいの〜。」

于禁は3人の中で1番兵の統率力があるので大丈夫だろう。俺は南側に急行した。楽進無事でいろよ。

楽進 side

現在南側の防衛にあたっているのだがやけに敵戦力が多い。矢も崩した岩も早々に尽きてしまった。

楽「（やむを得ないか。）」

覚悟を決めよう。

楽「私が討って出る。皆はこのまま防衛を続けてくれ！」

私は防壁を飛び出し、敵へと突進した。

楽「はあああ！〜！」

賊に拳で殴り、蹴り、氣弾で吹き飛ばす。

「困め困め！」

「相手は1人だ！」
「殺せ！」

くっ！数が多い！が、しかし、

楽「舐めるな！」

脚に氣を集中させ、

楽「猛虎蹴撃！」

大きな氣で賊を大量に吹き飛ばす。しかしそれでも賊はまだ大量にいる。

楽「次から次へと！」

襲いかかる賊を次々殴り、蹴り飛ばすが、体力も徐々に限界に近づいてくる。

楽「（真桜、沙和すまない。）」

覚悟を決めよう。皆の為に1人でも多くの賊を道連れにする。そう心に決めたその時、

？「飛龍衝撃！」

ドコーーン！！！！

と、声が轟くと、黄金龍が、賊を飲み込みその周辺を吹き飛ばした。爆煙が消えるとそこには大きな穴が空いていた。

？「全員生き残れと言っただろ。何故死を覚悟してんだ？」

そこには長剣を肩に下げた御遣い様がいた。

昴 side

俺は縮地で建物の屋根を跳び跳ねながら、南側の門に向かった。門を飛び越えると楽進が1人で戦っていた。良かった、まだ無事かすると楽進が氣を脚に集中させると、賊に大きな氣を飛ばした。敵はある程度吹き飛ばがまだまだ残っている。氣を消耗したことが原因で体力が限界に近付いていた。ふと楽進の目を見るとその目は生きることをあきらめ、1人でも多く敵を片付ける言わんばかりだった。

昴「（あの馬鹿！）」

俺は脚に氣を集中させ、上空に高く上がると氣を村雨に集中させた。

昴「飛龍衝擊！」

氣で作りあげた黄金の龍を賊の中心に叩き込んだ。そこを中心に大きなクレーターができ、その周りの賊は死屍累々と言わんばかりだった。

昴「全員生き残れと言っただろ。何故死を覚悟してんだ？」

楽「御遣い様。」

昴「そもそも防衛側が討って出てどうするんだ。」

楽「申し訳ありません。」

楽進はシュンとしてしまった。

昴「ま、出てしまった物は仕方ない、とりあえずこいつら片付けるぞ。」

楽「はい！」

楽進の瞳に生への気力が甦ったようだ。

俺は村雨を鞘に納め、

昴「せっかくの機会だ、俺が無手での多数の相手の仕方を教えてやる。」

楽「わ、分かりました。」

昴「多数を相手にする場合は敵が全部視野に入る位置を取るこれが基本だ。」

そうすれば敵の行動が分かるしな。

昴「しかし今回のように前後左右に囲まれた場合は一点突破して敵が見える位置を取りに行くかもしくは、」

賊が背後から襲いかかる。それを肘打ちで対応する。

「げほ！」

昴「五感と周りの氣の流れを感じとり、こちらに向かってくる敵を選別する。」

俺は自身に向かってくる敵を拳、脚、肘、膝を駆使して対応する。賊は俺が暴風雨の中心が如く次々飛んでいく。

昴「簡単に言うところこんな感じだ。正面、きてるぞ?。」

楽「はっ!?!はあ!。」

楽進はあわてて正面に振り返り賊を拳で殴り飛ばした。

実際は簡単にできることじゃない。やれと言ってこれができるのは達人くらいなものだろう。しかし、楽進の名を冠した君ならできるはずだ。しばらく敵を片づけていると、

ゴーン!ゴーン!ゴーン!

大きな銅鑼の音が鳴り響いた。

楽「何事だ!。」

すると1人の義勇兵がやってきた。

「北方より砂塵を確認しました。旗は『曹』と『夏侯』です!。」

どうやら援軍が来たみたいだな。

「え、援軍だ！」

「逃げる！」

賊が次々と逃げ始めた。

楽「御遣い様！」

昴「俺達の勝利だ。皆勝鬨を上げる！！」

「おおおおーーーー！！！！」

義勇軍の声がこの地一帯に轟いた。

昴「楽進よく頑張ったな。」

楽「……………」

楽進は無言だ。

楽「御遣い様。」

昴「ん？どうした？」

楽「此度の戦で自分の愚かさや浅はかさを痛感いたしました。私はずっと強くなりたい！御遣い様、自分の大切な人を守るよう私を鍛えてはくれませんか！？」

昴「……………」

思いがけないお願いだな。しかしこの楽進なかなか面白い。確実に素質はある。

昴「分かった。しかしな仮に強くなっても何でも自分でやろうと考えるな。個人では限界があるし、人には役割がある。自分でできることと出来ないこと、それを間違えるな。」

なまじ力を得ると自分の力しか信じられなくなり、1人で無理をして自滅するか力に悦楽して悪の権化に成り下がるか。後半は大丈夫だろうが前者は生真面目で優しい楽進ではあり得るからな。『自分が何とかなくはない』は得てして『自分の力しか信用していない』と誤解と疑念を生んでしまうのが人間の心理だ。

楽「はい！」

昴「とりあえず一度邑に戻り、曹操を出迎える。行こう楽進。」

凧「私の真名は凧です。凧とお呼びください。」

昴「では凧、行こうか。」

凧「はい！師匠！」

師匠「……か、いい響きだな！」

邑に戻り、出迎えの準備を始めた。その際に李典と于禁から真名を預かった。いいのかな？って思ったけど、風が許したのと戦の勝利の礼らしい。

すると北門より赤色の服を着た黒髪の長髪の女性と青の髪と服を着た女性。後金髪でクルクルの髪型をした女の子が兵を率いやってきた。

昴「（赤と青の女性、なかなかできるな。中央の金髪の女の子、あそこだけ空気が違う。）」

？「救援要請を受けてやってきたのだけど、無用だったかしら？」

風「いえ、曹操様達が来ていただけなければ、もっと被害が出ていました。」

曹「貴女がこの義勇軍を率いていたのかしら？」

風「大梁義勇軍は私と李典と于禁の3人が率いています。しかし此度の戦、勝利することができたのはこちらのお二方のおかげです。」

と曹操こちらを向いた。

曹「あなた達は？」

ふむ、少し試してみるか。

昴「人に名を尋ねるならまず自分からではないのか？」

？「貴様！華琳様に対して何だその口の聞き方は！」

昴「俺は曹操の臣でも民でもない。従う義理はあっても義務はない。第一俺は礼儀の話をしているだけだ。」

?「貴様〜!」

黒髪の女性が剣に手をかけた。

曹「やめなさい春蘭!」

?「しかし!」

曹「そちらの言い分が正しいわ、いいからやめなさい。」

?「ぐぐぐつ!」

そう言われ渋々剣から手を離すが依然としてこちらを睨み付けている。

曹「失礼したわ、私は曹操、字は孟徳、陳留の州牧をしている者よ。あなた達も名乗りなさい。」

淵「夏侯淵、字は妙才だ。」

惇「ぐつ!夏侯惇、字は元讓だ。」

昴「ご丁寧にどうも。俺は姓は御剣、名は昴。字はない。しかしやはり君が曹操か。」

曹「やはりとはどういう意味かしら?」

昴「君の周りだけ空気が違う。それに覇気に満ち溢れてる。」

曹「あなたから見て私はどう見えるかしら。天の御遣い？」

気付いていたか。

昴「偉大な王だな。とても今の地位に治まる器ではない。君は君自身の力と君に惹かれて集まってくる者の力で更に大きくなるだろうなって行くだろう。」

曹操だからそう言う訳ではないぞ、仮に知らなくても同じことを言っていただろう。本当だぞ？

曹「盛大な評価ね。ところで、この邑を守れたのはあなたの力あつてのことみたいのようだけど？」

昴「俺じゃない、策を考えたのはこの司馬懿、邑を守りきれたのは大梁義勇軍の力であつて俺は少し手助けしただけだ。」

曹「そうなのかしら？」

凧に尋ねると、

凧「いえ、師匠、御遣い様のお力あつてのことです。」

真「兄さんのおかげでもあるな。」

沙「凧ちゃんや皆を助けてもらったの〜。」

昴「ま、要するに皆の力を合わせた結果だ。」

曹「随分謙虚なのね。」

昴「手柄を独り占めにするつもりはない。」

曹「あなた達はなかなか優秀な人材みたいね。あなた達、この曹孟徳に仕えなさい。」

凧「噂はかねがね聞き及んでおります。楽進。真名は凧、曹操様にお仕えいたします。」

曹「そちらの3人のいけんは？」

真「うちの真名は真桜や。陳留の州牧様の話しはよう聞いとるし、そのお方が大陸を治めてくれるなら、今よりは平和になるっちゆうことやる？うちもええよ。」

沙「真名は沙和なの。凧ちゃんと真桜ちゃんが決めたなら私もそれでいいの。」

茉「1つ・・・お尋ねします。」

曹「何かしら？」

茉「曹操様の・・・目指すものは・・・何ですか？」

曹「私は乱世に覇を唱え、王となり、この国を平和へと導くわ。」

茉「・・・。」

曹「・・・。」

場が沈黙する。茉里が片膝を着き、

茉「司馬懿・・・字は仲達。・・・真名は茉里です。・・・私の知略・・・あなたに捧げます。」

茉里は臣下の礼をとつた。

曹「茉里、あなたの知略で我が覇道を支えてもらつわ、凧、真桜、沙和あなた達にも期待しているわ。」

茉「・・・御意。」

凧「はい！」

真「まかしとき！」

沙「了解なの〜！」

曹「御剣昂、あなたはどくなの？」

昂「悪いが俺は仕える主はすでにいる。だから断らせてもらつ。」

惇「きさま！華琳様の誘いを断るとは！もう許せん！」

夏候惇が剣を引き抜き俺に襲いかかった。俺は身体を半身にしてそれを避けた。

ドガン！

おうおう、クレーターができちゃったよ。曹操をちらつと見る。今度は止める様子はない。怒っているという訳ではなさそうだな。なるほど、俺を試す気か。いざとなれば夏侯淵に止めさせるんだろうが。

惇「死ねえ！」

昴「うお！危ねえ！」

あわてて避ける。こいつ本気で殺す気だな。

惇「避けるな！」

昴「避けるわ！」

つたくよ。

昴「お前おでこ広いくせに心狭すぎだ。」

惇「ぐぐぐっ！きさま！私の気にしてることを！もう許せん！」

更に夏侯惇のスピードが上がった。しかし、頭に血が昇っているため攻撃は単調で大振りだ。避けやすいことこの上無い。もう飽きたな。

惇「うおおお！」

パシン！

俺は夏侯惇の腕を掴んだ。

惇「なっ！」

昴「速さに腎力は申し分ない。が、しかし動きが単調過ぎる。しかもいちいち相手の言葉を鵜呑みにしてどンドン泥濘にハマっている。」

俺は左手の人差し指をしならせ、

昴「夏候惇0点。」

バシーン！

惇「ギャン！」

デコピンをかました。インパクトの瞬間に人差し指に氣をこめたのでかなり痛い。夏候惇はデコピンを受けると後ろへ倒れた。

惇「うぐぐぐ。」

夏候惇はおでこを押さえている。

曹「まさか春蘭を子供扱いするなんてね。」

夏候惇が弱い訳じゃないがあれではどうにもならないだろ。

曹「私に仕える気はないと？」

昴「悪いな。」

俺は桃香と約束したからな。

惇「きさま〜！」

夏候惇が立ち直って剣を構えていた。

曹「春蘭、いい加減に『やれやれ、話が進まないな』？」

昴「少し黙れ！」

俺は夏候惇に本気の殺気をぶつけた。

惇「!?!？」

殺気に当てられ、夏候惇は剣を落とし膝立ちになった。

曹「!・あなた!春蘭に何をしたの!?!？」

昴「殺気をぶつただけだ。しかし俺の本気の殺気を浴びて意識を保っていられるとはな、0点は取り消すよ。」

皆が沈黙している。

昴「話を戻すが、君には仕えられない。」

凧「師匠、鍛えていただけなのではないのですか？」

茉「センス・・・行っちゃうの?」

2人が不安そうに見つめる。

昴「が、しかし風との約束があるし、何より賊がもう活発化し過ぎて最早個人の力じゃどうにもならない。だから黄巾の賊を潰すまでの間客将という形で勘弁してくれないか？」

曹「……まあいいわ。その間だけ私のもで働きなさい。」

昴「すまない、恩に着る。」

曹「私達はこのまま先程の賊を追うわ。あなたは義勇軍を率いて私達の傘下に入りなさい。」

昴「了解。それじゃすぐに準備をする。」

俺は邑の駐屯地へ向かった。

曹操 side

曹「春蘭、大丈夫？」

惇「は……はい。」

それにしても春蘭を殺気だけで圧倒するなんてね。

淵「姉者を殺気だけで・・・信じられん。」

惇「あの殺気には驚きました。・・・それ以上に驚いたのが・・・、」

曹「？」

惇「奴が殺気を放った時、奴から華琳様と同じ覇気を感じました。」

淵「何だと!？」

私と同じ覇気?ということとは御剣昂は私と同じ種類の人間ということかしら。・・・ふふ、これから楽しみね。

その後棄てられた空き城に賊が逃げ込んだ賊を討伐し曹操軍と大梁義勇軍は陳留へと帰還した。

霸王曹操、天の御遣い御剣昂が今出会った。

続く

第5話 大梁義勇軍との防衛戦と乱世の霸王（後書き）

正直自分ではあれが限界です。書けば書くほど自信なくなりま
す。次回から魏の拠点フェイズに入ります。ですが決して魏 に入
るわけではありませんので。またこの駄文にお付き合い下さい。そ
れではまた。

第6話〈警備隊の発足、凧との修行〉前書き

お待たせしました。いろいろ忙しく2日あいてしまいました。前半部分は原作の巻き直しみたいなものですが相変わらずの出来ですがそれではどうぞ。

第6話 警備隊の発足、凧との修行

昴 side

大梁義勇軍との防衛戦から2週間あまりが過ぎた曹操の拠点陳留へとやってきた俺は客将として働いている。基本的に仕事は各部署の補佐や練兵、警邏等である。客将なのでわりと暇を持て余している。そういう時は大概街をうろつろしているか城で仕事を探しているんだが、……ん？あれは曹操か？

昴「よう、何やってるんだ？」

曹「あら、御遣いじゃない。」

昴「昴でいいよ。」

曹「なら昴、どうしたの？あなたにはいくつか仕事を任せただけけど？」

昴「全部片付けて今は仕事を探してるところだ。それより何か悩んでいたみたいだが？」

曹「悩みというものの程のものでもないけれど、……そうね、あなたにも考えてもらおうかしら。」

昴「？」

曹「これを見てちょうだい。」

曹操から渡された竹巻を見してみる。

昴「これは城の治安維持の計画書か。草案ってことはまだ完成してないってことだな。」

曹「あなたに意見を求めたいわ。」

治安維持の向上か。この街は曹操の治めている街であって基本的に治安がいい。しかし警邏をして感じたことがいくつもあった。

昴「警邏をしてて思ったんだが、地区によっては場所が遠すぎて騒ぎが起こった時にすぐ駆けつけられない。各地区に一定の間隔に詰所を置いて兵を常駐させてはどうだろう。」

曹「・・・いい考えではあるわね。でもそれだと人手と経費が高つくわね。」

昴「人手に関してだけど平時は城から回すとして、足りない人手は募集を掛けるしかないだろうな。」

曹「それは義勇兵ということ?」

昴「いや、兵とは独立した治安維持の警備隊として募集を掛けるんだ。」

曹「それで人が集まるかしら?」

昴「ちゃんと給料は支払って後は・・・兵役や雑役は免除にでもすれば集まると思うぞ。本隊に行きたきゃ推薦状でも出してやればいい。」

曹「なるほど。」

昂「経費は商人達に出資してもらおう。治安が良くなれば安全に仕事が出来ようになるから商人達にも悪い話じゃない。きっと出資してくれる。」

昂「他国からの流民や仕事が見つからない者もいるから雇用対策にだつてなる。こんなのでどうだ？」

曹「・・・なかなか面白いわね。これはあなたのいた国で行われていることかしら？」

昂「俺の生国でもやっていたな。」

この方法は結構行われている。正史の警察を参考にしたものがこれと似たやり方はどの外史どの時代にもある。

曹「あなたの意見を採用しましょう。この案、あなたを中心に動いてちょうだい。」

昂「いいのか？俺は客将だぞ？責任者ということは事実上警備隊長だ。いずれいなくなる俺では都合が悪いだろ？」

曹「詳細はあなたの頭の中にあるのだからあなたを中心に動いた方が早いわ。後任はあなたがなくなる前に適任者を見つけておきなさい。」

昂「了解、それならすぐにも商人達の説得に向かうよ。詳細は明日にでも纏めて曹操のところを持って行くよ。」

俺が街に向かおうとする。

曹「待ちなさい。」

昴「どうした？」

曹「華琳よ。」

昴「？」

華「これからは私のことは華琳と呼びなさい。」

昴「いいのか？」

華「これだけの貢献をしてくれた礼も兼ねているわ。それに皆にも慕われているようだしね。」

まあ確かに凧、真桜、沙和に茉里、こないだの空き城の賊を殲滅した際に仲良く城のつぺん旗を刺したことをきっかけに仲良くなり、真名を預けてくれた季衣等だ。夏候淵はともかく、夏候惇はなんかよそよそしく、荀イクに関しては何故かかなり嫌われている。

昴「わかった。では華琳、改めてよろしくな。」

俺は笑顔浮かべ華琳に言った。

華「／＼・・・話はそれだけよ、早く始めなさい！」

ん？顔が赤いなまあいいか。

俺は街に向かった。

当初の目論見通り、商人の説得はすんなり終わった。

わりとてこずるかなって思ったけど説得した商人が以前に俺が賊から助けた商人であった為、話を聞くと快く引き受けてくれた。それどころかこの街の商人達を説得して回ってくれろという。ありがたい話だ。警備隊の募集も順調で、当初人が集まるのもう少し警備隊としての結果がある程度出てからの予想していたのだが集まった人数は2百人弱程だ。これには募集をかける際に、警備隊の隊長はあの天の御遣いであるということをや大々的に公表したことが理由らしい。集まった人数のうち3〜4割が女性というのが少し気掛かりだったが、さすがはというか何というか、この外史の女性は何故か男より強い。決して男が弱くなっているのではなく、単純に強い。警備隊志願者が集まった際に、俺の隊長としての地位は仮のものであり、いずれは後任に後を引き継ぎ俺はこの国を旅立つことを告げた。集まった志願者はがっかりしたみたいだが志願を辞める者はいなかった。

計画の立案から2週間程が経ち遂に警備隊の発足が完了した。隊長は現在は俺。小隊長に大梁義勇軍の凧、真桜、沙和を任命した。これは街の人に顔を覚えてもらおう意味合いもある。そして今4人と街の警邏に来てるのだが、

沙「あー！新しい阿蘇阿蘇が出てるー！」

真「発売中止になった超絶からくり夏候惇や！」

沙和と真桜は各々勝手なことをしている。

昴「おまえら仕事 중이다ぞ。」

一方凧は2人と違って真面目だ。真面目なんだが、

凧「……不審者、不審者。」

真面目過ぎだ。殺気出しすぎで街の皆が怯えている。

昴「凧はもう少し肩の力を抜け。」

先が思いやられるな。

沙「今日の恋愛運は最高なの〜！」

真「おっちゃん！もうちょいまけてーな。」

まったく仕方ないな。

昴「おい、おまえら、サボってないでそろそろ『待てえーい！』何だ？」

声の方向を見ると凧が1人の男を追いかけていた。近くの店の店主に事情を聞くとあの男が盗みを働いたらしい。俺は凧の元へ向かった。

昴「凧、そいつを逃がすな！」

凧「はい、師匠！」

凧が後ろを追いかけるが男もなかなかすばしっこく、凧も苦勞している。見ると凧ががだんだん焦れてきている。

凧「ええいつ、まどろっこしい！」

凧の脚に氣が集まってきている。まさか、

昴「こんな街の中心地で氣をぶっぱなすつもりか!？」

しかも込めた氣の量が多すぎる!あれじゃ盗人以外にも被害がでちまう!

昴「凧、よせ！」

凧「はあああ!!！」

制止も間に合わず氣が飛んでいる。

昴「ああもう！」

俺は縮地で盗人に近づきドロップキックで昏倒させる。盗人の後頭部を支点に氣弾に振り返りそのまま氣弾を空に蹴り飛ばす。氣弾は空中で霧散した。危ねえ危ねえ。

昴「凧にはこれから加減も教えないとな。」

┌

俺は氣絶した盗人を引きずりながらしみじみ考えた。

所変わって数日後、俺は凧との修行の為近くの森の中に来ていた。森でやる理由は凧は氣の扱いがまだまだの為、城じゃあちこち壊す可能性があるからだ。

昴「とりあえず俺が教えるのは氣の扱い方についてだ。拳法に関しては後回しだ。」

それは俺でなくても教えられるしな。

凧「はい！師匠！」

昴「氣の使い方はとりあえず大きく分けると4つ、硬化、身体強化放出、治癒だ。最後の治癒は他の3つが出来なきゃ話にならないからまずは身体強化と放出だ。硬化はとりあえず問題なさそうだが放出に関してはまだまだだ。とりあえず・・・あの岩に氣をぶつけてみてくれ。」

凧「はい！」

凧は氣を手に集め、岩にぶつけた。

ドローン！！！！

岩に穴があいた。ふむ、なかなかだな。

昴「次に俺が同じことをする見ている。」

俺は手に氣を集め、凧が穴をあけた横にある同じサイズの岩に氣をぶつけた。

ドガーン!!!

岩はこなごなになった。

凧「すごい、岩がこなごなに、これが私と師匠の氣の量の差ですか？」

昴「いや、今俺が込めた氣の量は凧と変わらない。」

凧「ではどうして？」

昴「氣の練り上げ方が甘いんだ、だから氣が目標に到達する前に氣が霧散して威力が落ちちまう。これはひとえに集中力の問題だ。」

凧「集中力。」

昴「戦場ともなれば敵や味方の現状も気にしながら戦わにやならないから集中力が乱れれば威力はなお落ちる。」

凧「なるほど。」

昴「次に氣の種類についてだ。今は破壊することを目的に氣を練り上げたから穴があいたりこなごなになった。氣を斬撃、つまり斬ることを目的とした氣を手に練り上げれば、」

俺は手刀に構え、研ぎ澄ました氣を手に集めた。そして目の前の木に手刀を一閃した。

バキバキバキドーン!!!

昴「このとおりだ。」

凧「すごい、まるで鋭い刃物を使用したような切り口だ。」

昴「まずはこの2つの種類の氣、破壊と斬撃を使いこなせるようになってもらう。」

凧「はい!」

昴「といっても小難しい理屈はない。頭の中で斬ることをイメージ・
・あつまり想像するんだ。」

凧「想像・・・。」

凧はどうやら掴めていないようだ。

昴「俺はこの森を警邏がてら散歩してるから1人でやってみてくれ。」

凧「はい!分かりました。」

それを告げると俺はもりの奥へ向かった。

2時間程森の中を警邏を兼ねて散歩した後河原で水を汲み、果物を持って凧の元へ戻った。

昴「そろそろ気が尽きかける頃合いだろう。コツぐらいは掴んだかな？」

氣の扱いは感性や感覚の類いなのでどうにも説明が抽象的になる。しかしあれで分からなければ氣は操れないし、出来る者はあの説明でもコツを掴むことはできる。

昴「どんな感じかな・・・ん？」

凧「はあああ!!！」

シュツ！バキバキバキドーン!!!

昴「!?!」

凧が手刀を一閃すると一本の木が倒れた。

凧「ふう。」

昴「お疲れさん。」

凧「あ、師匠！」

俺は凧が倒した木を覗いてみる。

昴「……。」

凧「どう……でしょうか？」

正直驚いてる。まだ氣の練り上げ方が甘い為、切り口は粗いが氣を確実に使い分けられてる。

昴「この短時間でさすがだよ凧。」

凧「！ありがとうございます！」

昴「だけどまだ氣の練り上げ方が甘い。この辺はもっと鍛練を積もうな。」

凧「はい！よろしくお願いします！」

昴「よし、一旦休憩にしよう。」

凧「いえ、まだまだやれます！」

昴「駄目だ、消耗した氣を戻さないと鍛練が出来ないから一旦休憩。」

凧「……はい。」

しびしびといった感じで側の岩に腰掛けた。

昴「ほれ。」

俺は凧に水と果物と湿らせた布を渡した。

凧「わざわざすみません。」

昴「気にすんな。」

俺と凧は世間話をしながら休憩をとった。

昴「次に身体強化だ。これはさっきのより単純だ。身体に氣を纏わせることを頭に浮かべるんだ。こんなふうにな。」
身体に氣を纏うと俺の身体が白く輝く。

凧「綺麗です。」

昴「どうも。この状態なら普段より膂力に疾さが上がる。脚に氣を集中させれば、」

脚に氣を集中させ、縮地を使い凧の背後をとる。

昴「こんなふうにも目にも止まらない疾さになる。」

凧「！・これは！」

昴「特殊歩法の縮地という。」

凧「縮地。」

昴「とりあえず、今のやってみ？」

凧「はい！」

凧が目を瞑り、氣を集中させる。

凧「・・・氣を・身体に・纏わせる・・・」

ゆっくり身体を動かし、

凧「はっ！」

縮地で前方に移動した。

凧「師匠！出来まし・・・ギャン！！！」

凧は勢いあまり大木に激突した。

昴「まあこれに関しては、発動より加減の方が難しいんだ。何せ目にも止まらない速度で動くんだ。慣れなきゃ目が追いつかない・・・
・大丈夫か？」

凧「ふあい、大丈夫です。」

凧は涙目で言った。

昴「よし、最初は少量の氣で少しずつ慣らそう。」

凧「はい！」

修行を始め数時間が経ち、日も暮れかかってきた。

昴「よし、今日はこれまでにしよう。」

凧「はい……ありがとうございます……ございまして……」

凧は最後まで言い終わる前に力尽きた。

昴「ま、一日氣を酷使したから仕方ないか。」

俺は背中に凧を背負い城に戻った。

城に戻ると途中真桜や沙和に見つかり、からかわれたが、とりあえずデコピンくれた後2人に凧を託し部屋に戻り。残った仕事を始めることにした。その道中。

華「お疲れのようね。」

昂「おー、華琳か。」

華「鍛練はどうだったの？」

昂「まあ順調だ。」

華「そう。・・・あなたから見て風はどう？」

昂「そうだな・・・正直素質はかなりのものだ。このまま順調に修行を重ねればいずれはこの国全土を揺るがす武人になるかもな。」

華「それは楽しみなね。でもそれではいずれあなたが困るのではなくて？もしこの先敵となって合間見えた時、あなたはどうするの？」

昂「先のことはその時考えればいい。もし双方敵になったら、お互い武人だ。覚悟を決めるさ。」

華「そう。」

昂「仕事はまだ残ってるんだ。ここいらで失礼するよ。」

華「引き止めて悪かったわね。」

昂「それじゃまた明日。」

華琳に告げると俺は自室に戻った。

昴「結構多いな。」

俺は自室に戻ると、書簡の多さに少し憂鬱になった。

昴「風の方もあるしな。」

風は修行後は政務どころじゃなくなるだろうからあらかじめ風の分の書簡をある程度こっちにまわしてもらった。

昴「ちゃっちゃと終わらせて寝るか。」

俺の政務が終わったのは日が変わった頃だった。こっして風との1日は終わった。

続く

第6話、警備隊の発足、凧との修行（後書き）

真桜と沙和の話しは長くなりそうだったので分けることにしました。作者は凧が好きなので少し（いやかなり？）凧が鼻屑になっています。このまま完結目指して頑張りますのでこれを見ている方々、未永く長い目でお付き合ってください。それではまた。

第7話〜夏候姉妹、いつかその領域に〜（前書き）

連投です。結構なキャラ崩壊が起きています。ですが後悔はありません。それではどうぞ。

第7話 夏候姉妹、いつかその領域に

惇「死ねー!!」

昴「はずれた。」

夏候惇の剣が空を斬る。

ドゴーン!!!

昴「おうおう、相変わらず威力だけは一級品だな。」

惇「黙れええい!!」

夏候惇が次々と攻撃を繰り返すが、

昴「当たらねえよおでこ。」

惇「おでこ言うなー!!!」

夏候惇の斬撃がいつそう激しくなるが、攻撃が単調過ぎて避けやすいことこの上ない。

ガキン!!

俺は村雨を引き抜き、夏候惇の剣を弾き飛ばし、首筋に村雨を当て、

昴「勝負ありだ。」

惇「くそー！！もう一度だ！」

昴「仕事があるからまたな今度な。お前も仕事残ってんだろ？」

惇「そんなものは後だ！」

昴「お前それで仕事後回しにして華琳に怒られたろ。」

惇「むう。」

昴「お互い暇ならいつでも受けてやるから、な？」

惇「絶対だぞ！すぐに仕事を終わらせる。貴様もすぐに終わらせる！」

昴「はいはい。」

それだけ言い残すと夏候惇は政務へと走り出した。

？「いつもすまないな。」

昴「夏候淵か。」

淵「姉者が政務をサボっているので呼びに来たのだが昴が促してくれて助かった。・・しかし、相変わらずの強さだな。」

昴「よせよ。夏候淵だって分かってるだろ？俺と夏候惇は本来あそこまで一方的な展開になるほど力の差はない。」

淵「そうだろうな。」

昴「それにこつちもそれほど余裕があるわけじゃないんだぜ？」

頭に血を昇らせると攻撃が大振りかつ単調になるが威力が半端なく上がるから結構ヒヤヒヤもんだ。一発でも避けそこねたらそれこそ死だからな。

昴「何か助言でもしてやったらどうだ？」

淵「助言をしても姉者はきつとすぐに忘れてしまつた。」

昴「だろうな。」

それはそれで困つたもんだな。

昴「ではまたな。」

夏侯淵に告げると俺は警邏に向かった。

翌朝、自室で政務をしていると。

タタタタタ、ドン！

惇「御剣！」

昴「おう、どうした？」

惇「力を貸してくれ！」

昴「え？」

顔合わせれば剣を向けて勝負だ勝負だ言ってくる夏候惇が頼みごと？

昴「どうした？」

惇「うむ、秋蘭が緊急事態なのだ！貴様の力を貸して欲しくて来たのだが、手伝ってもらって構わんか？」

昴「夏候淵が！？わかった、案内してくれ。」

惇「いいのか？」

昴「当然だ。夏候淵が大変なんだから？」

惇「うむ、・・・こつちだ。」

俺は夏候惇の後に続いた。

昴「で？要するに1人1個の限定のお菓子を華琳のぶんも買いたいから一緒に並んでほしいと。」

淵「まあ、そういうことだ。」

惇「ここのお菓子は華琳様の大好物なのだ！それを是非とも今日のお茶で出したいと思ってな。」

昴「なるほどな。」

惇「駄目か？」

昴「いや構わないさ。ただもう少し普通に頼みに来てくれ。」

惇「わ、私は秋蘭の言ったただけだぞ！こらっ、秋蘭！貴様も何とか言ったらどうだ！」

淵「そうか、私の教えたとおりに言ったのだな、姉者は。」

惇「お前が1度試してみると言ったからな。だいたいお前の言うこととは間違ったことがないし。」

淵「今回も言ったとおりになっただろ？姉者。」

惇「うむ・・・ううむ。」

昴「はあ。」

惇「ところで、貴様が我らを手伝うことにしたのは秋蘭を好いているからなのか？」

淵「・・・なに？」

昴「ん？」

どういふことだ。

惇「あの時の御剣の目はいつになく真剣だった。それは秋蘭を好んでいるということだろう？」

昴「うーん。」

淵「随分と誤解があるようだな。」

惇「いくら貴様でも秋蘭は渡せんぞ！確かに腕は立つし頭もいいし何より華琳様に認められているが秋蘭は華琳様のものだし、それに私だってその・・ああ、うう。」

昴「どうした？」

顔赤くしたり、慌て出したりどうしたんだ？

淵「いろいろ誤解はあるようだが、要するに姉者は私だけではなく姉者も一緒にもらってほしいと言うことか？」

惇「／＼・・にや、にやにを言っている、秋蘭。」

淵「おや？姉者はよく言っているではないか。御剣はなかなかの美形で・・、」

惇「わーわーわー！」

昴「あまりからかってやるなよ。」

淵「くくっ、姉者はかわいいなあ。」

惇「うゝ。」

そうこうしているうちに列は進み俺達は無事に限定のお菓子を買うことができた。

昴「よかったな。」

惇「うむ！これも貴様のおかげだ！礼を言う！」

昴「ここまで素直な夏候惇も珍しいな。雨でも降るか？」

惇「ふふん。今日の私はとても心が広いから貴様のそんな嫌みにも動じないのだ！ふんふーん！」

淵「姉者。浮かれるのはよいが菓子を落とさないようにしてくれよ？」

買ったお菓子は今夏候惇が持っている。どうしても持ちたいって言うから持たせている。夏候淵はどうも心配みたいだな。

惇「分かっている！任せておけ！」

昴「しかし、相変わらず華琳が絡むと上機嫌だな。」

淵「まっただ。」

惇「当然だ！華琳様は強く気高く聡明でお優しく、そのうえ私達を可愛がって下さる方などいはいはないのだ。」

昴「そ、そうか。」

俺は夏候惇の勢いに圧倒されていた。

惇「いいか！華琳様はな・・・。」

夏候惇はヒートアップし始めた。その時、話しに夢中で道の真ん中に飛び出してしまった。

昴「！・・・危ない！」

淵「姉者！」

突然早馬が飛び出した。俺は縮地で弾かれた夏候惇のもとへ向かった。倒れそうになる夏候惇を受け止めた。もちろんお菓子もしつかりキャッチした。夏候惇は突然のことで呆然としていた。

昴「まったく、子供じゃないんだから道の真ん中に飛び出したら危ないだろ。」

惇「／＼・・・あつ。」

昴「ほれ。」

夏候惇にお菓子の箱を手渡す。

昴「華琳を喜ばせたいんだろ？しっかり持ってる。」

惇「／＼・・・ち・近い。」

昴「ああすまないな。怪我はないか？」

惇「だ、大丈夫だ。」

どうやら怪我は無さそうだな。顔は赤いが、その時、

「隊長！」

昴「ん？」

あれは警備隊の1人だな。

「盗人を捕まえようとしてるのですが手強くて、応援をお願いします！」

そうか、今日この地区に風達いないんだっけ。

昴「分かった、すぐに行く。2人とも急用が出来た。すまないが行くな。」

惇「あ、ああ。」

淵「今日はすまないな。」

昴「じゃ、またな。」

俺は現場に急いだ。

夏候 惇 side

淵「姉者、大丈夫か？」

惇「大丈夫だ。」

どういうことだ。様子がおかしい。顔が熱い。

惇「秋蘭はこれは何なのだ？」

淵「ふふつ、私からは教えられないな。」

惇「秋蘭〜。」

何なのだ？これもきつと御剣のせいだな！そうに違いない！奴を倒せばきつとこんなものなど、

惇「秋蘭！御剣昴を倒す為の方法を一緒に考えてくれ！」

昴 side

結局盗人は現場に駆けつけた俺が一瞬で制圧した。最近警備隊は少し気が緩んでたからいい刺激になった。それから翌日、城を歩いていると、

惇「御剣昴！勝負だ！」

昴「いいぜ、受けて立つ。」

庭に場所を移し、

昴「またやられに来たか？おでこ。」

惇「……。」

ん？様子がおかしいな。

惇「行くぞ！」

夏候惇が飛び込んで来た。いつにもまして、剣筋が鋭い。左に避けるとすぐさま対応してきた。

昴「！」

ギーン！！

俺は村雨で剣を受け止める。

惇「ははっ！いつもの余裕はどうした！」

昴「ちい！」

剣を弾き、夏候惇に下から一閃する。

ギイン！！！！

夏候惇は剣でそれを防いだ。その際に夏候惇は後ろに弾かれた。いや自分で飛んだのか？

昴「いつもとはひと味違うみたいだな。なら！」

俺もマジで戦うことにしよう。

ギイン！！ガン！！ギイン！！

一合、二合、三合と斬り結んでいく。

惇「はあ！」

夏候惇が正面から突っ込んでくる。俺の得物の方が射程が長い。夏候惇の射程外から斬る。

昴「ふっ！」

俺の射程内に近づいたのを確認し村雨を一閃する。しかし、

昴「何！」

射程内直前に夏候惇は剣を地面に刺し、急ブレーキをかけた。

俺の刀は夏候惇の眼前を素通りする。

惇「もらった！」

夏候惇は刀が眼前を通ったのを確認すると一気に間合いを詰める。

昴「ちい！」

俺は止まろうとせずそのまま勢いのまま1回転しそのまま夏候惇の胸に蹴りを入れた。

惇「何！・ガア！」

夏候惇もこれには対応できず、蹴りを受けると後方に吹っ飛んだ。

昴「（危なかった。俺の刀が通常より長い刀じゃなかったじゃなかったら一撃もらってた。）」

刀が長い分距離が出来た。それだけの差だ。

昴「夏候惇、大丈夫か!？」

惇「・・・。」

何か様子がおかしいな。ん？これは？

夏候惇の両耳に何かを見つけたのでそれを取ってみる。

惇「あつ!？」

昴「これは耳栓?・・・ああ、なるほど。」
だから全く挑発が効かなかったのか。

昴「夏候惇、大丈夫か?」

惇「うぐ、問題ない。」

少し苦しそっだがしっかり自分の足で立ち上がった。

昴「悪いな、必死過ぎて加減が効かなかった。」

惇「本気なのは望むところだ。しかし・・・」

昴「ん？」

惇「お前は強いな。きっと私とは違う領域にいるのだろう。」

昴「どうだかな。」

惇「私もいつまでもやらねばなしているつもりはない。いつか必ずお前の領域にまで辿り着いてみせる！」

昴「ああ、待ってるぜ。」

春「春蘭だ。」

昴「ん？」

春「私の真名は春蘭だ。この真名御剣に預ける。」

昴「いいのか？」

春「華琳様も預けているようだしな。それに私は武人としてお前を認めている。」

そうか。なら、

昴「分かった、では春蘭。君の真名を預かるう。俺のことは昴と呼んでくれ。これからもよろしくな。」

俺は春蘭に手を差し出す。

春「？・これは何の真似だ？」

昴「これは握手といってこれからもよろしく頼むというまあ、一種の儀式だ。手を握ってくれ。」

春蘭がおそるおそる手を握る。

昴「これからもよろしくな春蘭。」

春「ああ！よろしく頼むぞ！昴！」

がっちり握手を交わした。

春「では私は行くぞ。また勝負だぞ！いいな！」

昴「もちろんだ。」

春蘭は調練場に向かった。それと入れ違いに夏候淵がやってきた。

昴「耳栓は夏候淵の入れ知恵だな？」

淵「まあな。相手の挑発にのるなと言っても姉者は効かないだろう

からな。」

昴「確かにな。」

間違いなく助言なんか忘れて怒り狂うな。

昴「さてと、俺も仕事に戻るかな。」

俺が踵を返すと、

淵「待て。」

昴「どうした？」

秋「私の真名は秋蘭だ。この真名お前に預ける。」

昴「姉妹揃って、いいのか？」

秋「元々預けても良いと思っていたのでな。華琳様も姉者も認めたとお前なら問題ない。」

昴「分かった。なら秋蘭、君の真名を預かるよ。秋蘭もよろしくな。」

秋「ああよろしく頼む。」

昴「んじゃ行くな。またな。」

秋「ああ。」

俺は仕事に向かった。

秋蘭 side

昴は街の警邏に向かった。

秋「ふふっ、御剣昴。武人として将として、私も認めているぞ。そして……男としてもな……。」

その呟きは風の中に消えていった。

続く

第7話〜夏候姉妹、いつかその領域に〜（後書き）

以上、拠点春蘭秋蘭フェイズです。結構やりすぎたかなって感じもします。これから先もこのようなキャラ崩壊があるかもしれないです。感想、アドバイスをありましたらどしどしお願いします。それではまた。

第8話 相入れないモノ、変わっていくモノ（前書き）

今回は正直反省しています。キャラ崩壊が前話の非じゃないです。賛否両論、主に否ばかり出ると思いますが・・・それではどうぞ。ちなみにかなりのご都合主義です。

第8話 相入れないモノ、変わっていくモノ

とある日、警邏に赴こうと城の通路を歩いていると正面から・・・あれは荀イクか。荀イクがやってきた。

昴「よう。」

荀「・・・。」

聞こえなかったのか？

昴「奇遇だな。こんなところで会うなんて。」

あ、そっぽ向かれたよ。相変わらず嫌われてるな。・・・そうだ。

昴「あ、華琳。」

荀「華琳様!!！」

昴「すまん、大木だった。」

荀「どうやってたら大木と間違えるのよ!！」

昴「聞こえてんじやんか。」

荀「はっ!?!?・・・ち。」

面白いなこいつ。

荀「一体何の用よ！」

昴「挨拶しただけだろ。」

荀「話しかけないで！妊娠するでしょ！」

昴「そんなんで妊娠するなら少子化なんて言葉存在せんわ！・・・で、挨拶ついでにどこ行くんだ？」

荀「あんたなんかに答える必要性をこれっぽっちも感じないわ。」

うわっ、可愛くねえ！つうか感じ悪！

昴「もはや悪意しか感じないな。」

荀「当然でしょ？男なんていう下品で穢らわしい生き物となんて、接点を持ちたくないもの。」

昴「軍師が決めつけるのは良くないぞ？あらゆる可能性をなくしちまう。」

荀「大きなお世話よ。男なんて低俗で、低脳で、煩惱の塊のなのよ！」

昴「お前が華琳にされたいと考えてることは煩惱じゃないのか？」

荀「ぐっ！・・・ち、違いわよ！」

昴「しかもついさっきその低脳のなんのひねりのない策にあっさり引っ掛かってたな。」

荀「あ、あれは低脳すぎて思わずひっかかっただけよ。」

昴「今蔓延ってる賊も低脳で低俗な策を使ってくるんだぜ？そんなざままで華琳の軍師が務まるのか？」

荀「当たり前でしょ！私は華琳様に認められた軍師なのよ！」

昴「だろうな。政に関して言えば茉里以上だ。」

荀「ふん！あなたに誉められても嬉しくないわよ。っていうか用がないなら早く視界から消えてくれない？」

昴「ああもうとりつく島もないな。・・・あれ？華琳？」

荀「次は大岩かしら？2度も同じ手に引っ掛かると思って・・・」
荀イクが振り返ると、

華「あら桂花、こんなところに居たの？」

荀「か、華琳様！？」

くくくくくつ！やっぱり面白いな。俺が笑いを堪えていると、

荀「あ、あなたねえ！」

昴「くくつ、それじゃ警邏に行くな。」

俺はスキップしながら警邏に向かった。

荀「覚えておきなさい！」

荀イクの声が通路に木霊した。

荀イクとこんなやりとりを数日繰り返していたある日、

華「最近桂花と仲がいいようね。」

昴「あれでか？会う度嫌味ばかり言われるんだが。」

華「あら、桂花が男と話してるところなんてあなた以外で見たことないわ。」

昴「そうなのか？」

だからといって嫌味ばかり言われてるから素直に喜べないが、

昴「しかし荀イクの男嫌いも筋金入りだな。何が原因なんだ？」

華「それはあなたが直接桂花に聞きなさい。」

昴「話してくれるとも思えないが・・・おっとそろそろ警邏だな。それじゃ行くな。」

華「ええ、しっかりと励みなさい。」

その日は2件の喧嘩を仲裁してその日は終わった。

明くる日、手透きになったので城の庭に来てみると、

春「ぐぐぐぐぐっ!」

荀「春蘭?早くしてくれないかしら。」

春「うるさい!黙っている!」

あれは春蘭に荀イク、秋蘭もいるな。何やってるんだ?

春「これでどうだ!」

春蘭が駒を進める。

荀「相変わらず突撃?脳みそまで筋肉が詰まってるのかしら。」

パチッ、っと駒を進めた。

春「うぐ!」

荀「勝負あったわね。」

春「くそ〜！もう1回だ！」

荀「何度やつても同じよ。」

どうやら決着がついたみたいだな。

昴「よう、何やってるんだ？」

秋「ああ昴か。何、姉者が桂花に象棋の勝負をしていたのだ。」

象棋・・・ああこの時代のボードゲーム、まあ将棋やチェスみたいなやつか。

昴「無謀だろ、相手が荀イクじゃ春蘭はおるか秋蘭でも負けるだろ。」

秋「そうだな実際私は10回やつても2〜3回ぐらいが関の山だろ。」

昴「やつぱりな。」

荀イクは優秀な軍師だしな。っていつか春蘭じゃ突撃ばかりだろうからな。

荀「あら？御剣昴じゃない。」

昴「よう。完勝みたいだな。」

荀「当然よ。軍師が武官に負けるわけないでしょ？ましてや脳筋な
んかに。」

春「何だと！」

昴「春蘭、落ち着け。」

秋「姉者、落ち着け。」

春「むう。」

荀「ところで御剣昴？」

昴「ん？」

荀「暇ならー勝負どうかしら？」

うーん、勝負か。

昴「悪いな、気分じゃないから遠慮しとくよ。」

つつかルール分かんないし。

荀「あら逃げるの？臆病風にでも吹かれたのかしら。」

・・・ほう。

荀「天の御遣いが聞いて呆れるわね。所詮男なんて情弱で根性無し
な生き物ね。」

言っじゃねえか、そこまで言っなら、

昴「いいだろう、その勝負受けてやるよ。」

荀イクがニヤリと笑う。その余裕消してやるよ。

昴「ただし、」

荀「？」

昴「お前が自信満々で挑んできた勝負だ。何を賭けることになって
も文句はないよな？」

荀「どういうこと？」

昴「負けた方は勝った方の言うことを何でも聞く。どうだ？」

荀「いいわ。どうせ勝つのは私なのだから。」

言ったな。

昴「決まりだな。悪いがやり方がわからないから秋蘭教えてくれな
いか？」

秋「やり方も分からないのに桂花に挑むのか？」

昴「まあ何とかなるだろ。」

秋「まったく、やり方は……。」

秋蘭に説明を受け、

秋「・・・こんな感じだ。本当に大丈夫なのか？」

昴「大丈夫。問題ない。」

俺は荀イクの対局に座る。

荀「勝つたらとりあえず自害でもしてもらおうかしら？」

遊びの賭け事で何ても要求しやがるんだ。それにしても余裕綽々
って顔だな。自分の負けを一分も疑ってない。

荀「では始めるわ。」

荀イクが最初の一手を繰り出す。

俺はしばらくどう戦略を組み込むかを考える。

荀「まだ一手目よ、早くしてくれないかしら。それとも今更怖じ気
ついたのかしら？」

昴「慌てるなよ、今お前をどう料理するか考えてるんだからな。」

荀「ふん！言ってなさい。」

よし！戦略は決まった。これで行くか。それにしても相変わらず荀
イクの表情は余裕綽々だ。今では薄ら笑いを浮かべてるほどだ。

昂「今は精々余裕かましてろよ。」

俺は駒を持ち、一手目を繰り出す。

さて始めるか、荀イクよ俺の兵法を見せてやる。お前の余裕そしてその表情、

凍り付かせてやるよ？

荀イク side

何よ・・・これ。

勝負が始まって数局たった。最初は思惑どおりにことが進んでいた。ただ勝負の中盤戦に差し掛かる直前にそれは起こった。こちらが事前に組み込んだ策は全て見抜かれ、裏を掛かれた。

荀「くっ！」

私が駒を進めると時間を置かず間髪入れずに駒を繰り出す。それも1番やられると嫌な場所に。たちまち手詰まりになる。

荀「（どうする！？一点突破で陣に穴を空けるかそれとも一旦守りを固めるか！？）」

私が思案していると、

昴「どうした？早く手を繰り出せよ？一点突破するか、守りを固めるか。どっちに決めるんだ？」

荀「！・・・な、どう・・・して・・・。」

昴「策は全て読まれ劣勢だ。そんな状態で辿り着くのは兵法の基本。言わば常道かつ教科書どおりの兵法だ。この場合は一点突破か守りを固めるかだな。」

荀「うぐっ。」

昴「追い詰められた軍師が最後に辿り着く境地、いや心理だ。」

見抜かれてる。

昴「あいにく俺は今手透きだから時間はたっぷりある。一刻だろうと1日だろうと構わないぜ？ゆっくり考えたらいい。」

荀「ちっ！」

あの顔、勝利が確定したかのようなあの顔、気に入らない。

荀「（どうする！？攻めるか守るか！？……待つて？本当にそれでいいのかしら？こちらの策は全て読まれてた。そして今も。どちらを選んで相手の掌で踊らされるだけなんじゃ。）」

考えれば考えるほど分からなくなる。ならここは1度様子を見るべきね。ここで様子を見て相手の出方を窺う。

パチッ！

一手進める。すると今まで間髪入れずに駒を繰り出していた御剣昂が止まった。どうやら予想外の一手だったみたいね。さて、ここから反撃を始めるわ！

昂「荀イク。」

荀「何よ？」

昂「その一手は……下策だぜ。」

荀「な！？……どういうことよ！？」

昂「勝敗が決まりかかろうとしている終盤。この場面で攻めでも守りでもなく保留を選ぶのは1番の悪手だ。」

荀「な、何を！？」

昂「ここで攻めか守るか決断すればまだ荀イクにも勝ちの目はあったんだがな。」

御剣昴が駒を取り、

昴「これで、終局だ。」

止めの一手が繰り出された。

荀「!?!?・・・そこは!?!?」

最悪の一手だ。何処を動くも手詰まりにされる一手だ。

荀「（こつちを進める？駄目、今の一手で止められている。なら退く？それも今更できない!?!?それなら、それなら・・・）」

あらゆる手を考える。だが思いつく全ての一手の先が読めてしまう。自分の負けを。優秀であるが故に読めてしまう。

荀「私の・・・負けよ。」

私は敗北を宣言した。

昴「ふう、大方、自分が打つ前に読まれた一手だ。どちらに進んでも俺の掌で踊らされるんじゃないのか？どうせこつ考えての保留だろ?」

くっ!?!そのとおりよ!

荀「あんな一言聞かなければ・・・。」

昴「だからわざわざ口に出したんだよ。攻めも守りもとらせない為に。まるでどちらを選んでも罠にはめられるかのような言い方をし

て、ね。」

まさにそのとおりだ。

昴「確か負けたら言うことを何でも聞く約束だったよな？今は思い浮かばないから後日伝えるよ。」

御剣昴は立ち上がり、

昴「それじゃ、また後日。」

意地悪い顔浮かべて立ち去った。

完全に負けた。策も心理も何もかも見透かされた。春蘭を武で圧倒していたから典型的な武官だと思っていたけど、あれが天の御遣いと呼ばれる者の実力なの？

荀「悔しい。」

私はただその言葉しか口に出せなかった。

昴 side

昴「あー、勝ったな。」

やりすぎたかな？でもこの程度で潰れるようならどのみち一緒か。

秋「今日ほどお前に驚かされた事はないぞ。」

昴「秋蘭か。」

秋「まさか桂花を相手にあそこまで一方的に勝利してしまうとはな。」

昴「ま、荀イクも途中までかなり油断してたけどな。」

秋「姉者以上の武に桂花以上の知。何処まで化け物なのだ。」

昴「武はともかく、知はただの経験の差が出たに過ぎない。あいつとは比較にならない修羅場を潜り抜けてきたからな。同じ経験を積みめば荀イクは俺以上になるさ。さっきの勝負でそれを物語ってる。」

秋「どういうことだ？」

昴「最終場面、武官や並の文官には荀イクの敗北宣言が早すぎると感じるだろう。」

秋「確かに私も感じたな。」

昴「あの局面で取れる手は精々5通りくらいだが俺はその全てに対応策があった。荀イクもそれを理解していた。だから荀イクは敗北宣言した。」

秋「つまりどういうことだ？」

昴「これを実際の戦に置き換えてみる。策は軒並み看破されあらゆる一手が打てず手詰まりになる、このまま無理に戦を続けたらどうなる？」

秋「あつ。」

理解したようだな。

昴「そうだ、その答えは自軍の全滅だ。ここで退却すればまだ再起の可能性は大いにある。しかし負けを認めずに無理な戦を続ければその先は全滅。しかも再起の可能性も無くなるほどの敗北だ。つまりあそこで負けを認められるということは優秀な軍師である証拠だ。」

秋「なるほどな。・・・しかし桂花への罰はほどほどにしてやれよ？」

昴「心配するな、人や軍師としての尊厳を汚すような真似はしないよ。」

秋「ならいいがな。桂花は華琳様の大切な軍師だ。」

昴「ま、ほどほどにな。」

さて罰はどうしようかな？・・・よし、あれにしようかな。俺はいろいろ思案しながら自室に戻った。

数日後。

荀「ちょっと！私を何処に連れて行くつもり！」

昴「いいからついてこいって。」

俺と荀イクは街を歩いていた。理由は数日前の罰ゲームを執行する為だ。

荀「何処に行くつもり！はっ！？まさか人気のないところで私を襲うつもりね！？やっぱり男なんて下品で粗暴で、『着いたぞ。』えっ？」

着いたのは1軒の料理屋だ。

荀「ここは・・・。」

昴「料理屋だ。華琳お気に入りのな。」

前もって予約しといた店だ。何せ人気店だから予約しないと入店出来ないらしい。

荀「ここで何を・・・。」

昴「料理屋で食事以外の何をするんだ？さ、中入るぞ。」

俺達は店に入った。店員に案内され卓に着き、注文してしばらくすると料理が運ばれてので各々食事を楽しむ。

昴「・・・ところで1つ質問があるんだが？」

荀「はあ！？何で答えなくちゃならないのよ！」

昴「勝負に負けたる。」

荀「だから一緒に食事してるじゃない！」

昴「華琳お気に入りの店でタダ飯食ってるんだから罰じゃないだろ。」

荀「男と一緒にっただけで苦痛なのよ！」

昴「タダ飯で差し引き0だろ。」

荀「ぐぐぐぐぐっ！」

荀イクは唸っている。

荀「それで？聞きたい事って何よ？」

どうやら答えてくれるらしい。

昴「お前は どうしてそこまで男が嫌いなんだ？」

荀「・・・。」

昴「正直お前の男嫌いは異常だからな。後警備隊の兵や城の兵から結構苦情出てんだよ。何もしてないのに罵声浴びせられる、ってな。」

荀「……。」

荀イクは黙っている。

荀「……それは言わなきゃ駄目なの？」

昴「聞かせてくれるか？」

荀「……。」

荀イクは話してくれた。何故男嫌いなのかを。過去に自分の母親が賊に拐われたこと。その際に回りの男達は何もしようとしなかった。こちらが策を提示しても自分の命惜しさに聞く耳持たなかった。結局母親は賊に慰み者にされた上に殺された。下衆な男達に。他にも以前にある男と論戦になった際に自分の意見が論破されると、男は荀イクを心身共に汚そうとした。自身の誇りを汚された腹いせをするために。その時は通りかかった武官が仲裁に入った為事なきを得たらしいが。

以上が理由だった。

荀「……。」

昴「……。」

互いに黙っている。荀イクの闇は深かった俺の思った以上に。

昴「それが理由か。」

荀「ええ、そうよ。」

昴「お前が今まで会った男達は確かに下衆や自己中心的な奴ばかりだったかもしれない。でもそれは事実であって真実ではないだろ？」

荀「どういう意味よ？」

昴「そうだな。お前の意見はある種極論だ。だがな、極論するのは大抵が机上の空論そのものだ。机上の空論するのは便利だ。お手軽だしうっとおしい事情は無視できるからな。」

荀「……。」

昴「だけどな、お前は男が下衆だなんだと言う前にな、一度でも男と一緒に飯食ったり酒飲んだり、もしくは恋愛したり他愛のないことを語り合ったり、そういう経験はあるか？」

荀「……。」

荀イクは何も答えない。

昴「男だってな、それぞれいろんなものを背負って生きてる。そこは男だって女だって一緒だろ？下衆だの何だので男を評価するがそれは女だって一緒だ。過去の経験則からの極論で決めつけるのは強引過ぎると思っぞぞ？」

ドン！！

荀「聞きたい事は話したわ。もう用はないわよね？帰らせてもらうわ。」

荀イクは卓を両手で叩き席を立った。

昴「なら最後に、男嫌いを治せとは言わない。せめて言動や態度に出すのはやめてやれ。俺はともかく他の男は結構へこむぞ？お前だって華琳や春蘭や秋蘭に同じことされたらいい気分しないだろ？」

荀「・・・善処するわ。」

荀イクは店を出ていった。

昴「ふう。」

荀イクが過去にうけた傷は完全癒えず、確実に傷痕として苛んでいく。あれは相当重傷だな。

昴「さてと。」

俺も会計済まして帰るか。店主に会計をお願いすると、

昴「うげっ！」

さすが華琳のお気に入り店の店だけあって値段張るな。トホホ、しばらくは極貧生活だな。

その後、荀イクとは会話をしていない。何せ荀イクに会うとそそくさどどこか行ってしまう。そんな気まずい2人が今森の中を歩いている。何故かというと、

華『最近近くの山森に怪しい人影が頻繁に報告されているわ。桂花に調査を向かわせるからあなたは護衛として着いていきなさい。山森は凧との鍛練でよく利用するのでしょうか?』

と言われたので現在2人で森の中を歩いている。

昴「……。」

荀「……。」

相変わらず2人とも無言だ。

昴「……なあ。」

荀「……。」

昴「荀イクさん。」

荀「……。」

はあ、無視か。

昴「まな板胸。(ボソツ)」

荀「何ですって!#」

昴「ようやく口聞いてくれたな。」

荀「あつ!?!ちっ!」

昴「とりあえず、この辺には痕跡がないから場所変えるか?」

荀「・・・分かったわ。」

2人が森を進んで行く。

昴「あの食事で財布軽くなっちまってな。」

荀「・・・。」

昴「でも旨かったな、あの店。」

荀「・・・。」

昴「あれじゃどっちが罰だか分かんないな。」

荀「・・・ああもつ!耳元でごちゃごちゃうるさいのよ!」

昴「そっちが無視するからだろ?」

荀「あんたなんかと口もききたくないのよ！だからもう黙ってなさいよ！」

昴「はあ。」

溜め息が漏れる。

荀「ふん！」

荀イクが踵を返して歩き出す。・・・ん？不味い！そっちは！？

昴「荀イク！止まれ！」

荀「もう！何よ！・・・あっ！？」

そう、この辺は見通しが悪いから分かりにくいが森と茂みを抜けたすぐ先が断崖絶壁になっている。普段なら気付いたんだろうが俺との会話で激昂してたせいで距離を誤ったのだろう。

昴「くそっ！」

あわてて飛び降り、落ちていく荀イクを腕に抱えた。

昴「はあああ！！！」

氣を脚に集中させ、崖の岩の出っ張りを足場に下へと降下していく。

バサッ！

昴「うぐっ！」

最後、木に突っ込んだ際に尖った枝で背中を切ってしまった。

昴「まあ浅傷だから大丈夫か。」

荀イクは・・・どうやらショックで気絶している。

昴「調査は十分にしたし、城に戻るか。」

荀イクを抱えながら森を歩き出した。

しばらく歩いていると、

荀「う、うづん。」

荀イクが目を覚ましたようだ。

昴「目が覚めたようだな。」

荀「な、何が・・・ちよ、ちよっと！何私の身体に触れてるのよ！」

荀イクが腕の中で暴れだした。

荀「離しなさいよ！」

昴「分かったから！」

荀イクを降ろす。

荀「全く、妊娠したらどうするのよ！・・・それで、ここは何処なのよ？」

昴「下に落ちちまったからな。今は商人も避ける獣道だ。」

荀「厄介ね。」

昴「とりあえずこつちだ。」

俺は歩きだす。

荀「ま、待ちなさいよ!」

その後をあわてて荀イクがついていく。

昴「……。」

荀「……。」

無言で森を歩いている。

荀「ねえ!」

昴「ん?」

荀「……さつきは……助かったわ。」

昴「どういたしまして。」

荀「ふん!」

荀イクはそっぽを向く。再び無言で歩いていると、俺は絶壁の前で

立ち止まる。

荀「どうしたの？」

昴「城に戻るにはこの絶壁を昇らにゃならん。」

荀「こんな絶壁無理に決まってるでしょ！？他に道はないの！？」

昴「あるにはあるが、それだと今日中に城に戻れないぞ？」

荀「そんな・・・。」

昴「この辺は熊や猪出るし蛇も出るぞ？そんな所で野宿したいか？」

荀「嫌に決まってるでしょ！」

昴「なら昇るしかないな。」

荀「そんな・・・こんなの・・・。」

昴「何、心配するな。このくらいなら問題ない。」

荀イクを肩に乗せて、

荀「何するのよー！」

昴「目瞑ってる。後喋るな、舌嚙むぞ。」

荀「何言って・・・きゃあああ！ー！」

俺は脚を氣で強化して絶壁の岩場の出っ張りを足場に今度は登り始めた。

そのまま城に戻った。その間会話は一切なし。何とか日が暮れる直前に城に戻ることが出来た。背中の傷は尻に薬を塗ってもらった。すごい染みた。

華「今日はあなたに特別に湯を使わせるわ。」

昴「いいのか？」

この時代の風呂は貴重だ。毎日入れるわけではない。それは華琳も例外ではない。

華「話しは桂花に聞いたわ。大切な部下を助けてもらった礼よ。受け取ってもらえるかしら？」

昴「分かった。それじゃお言葉に甘えるよ。」

華「ならゆつくり入ってきなさい。」

華琳は何やらクスクスと笑いながら去っていった。何だ？・・・ま

あいいか。よし、風呂だ風呂だ
意気揚々と湯に向かった。

昴「はあゝ、超気持ちいい／＼」

やっぱりどの時代どの外史も風呂は気持ちいいな。ゆっくり湯に浸かっていると、

コツコツコツコツ、

昴「ん？」

誰か近づいてくるな。城の将は女の子だから今湯に来る人いないはずなんだが。

苟「湯に浸かるのは久しぶりね。．．．ゆっくり疲れを癒し．．．
て．．．」

よりもよって苟イクか。華琳の差し金だな。とりあえず指で耳を塞いで、

苟「きゃあああ！．．．この変態！何でここにいるのよ！遂に本性

現したのね！」

昴「いや先に入ってたの俺だろ？」

荀「変態！痴漢！獣！」

はあ、全く。

昴「分かった分かった。」

俺は布で目隠しをして、

昴「これでいいだろ？」

荀「隙間から覗いてないでしょうね？」

昴「見えてない見えてない。」

荀「全く！」

しばらく無言で湯に浸かっていると、

荀「ねえ、その背中傷、私を助けた時に出来た傷ね。」

昴「さあな。」

荀「誤魔化さないで、尻に聞いたわ。」

尻に？全く、黙っとけって言ったのに。

昴「傷もすぐに治るし痕も残らないから問題ない。第一人の命には

変えられないよ。」

実際傷一つで命救えたなら安い買い物だ。それが後の名軍師荀イクなら尚更だ。

荀「あ、ありがと……。」

昴「ん？」

荀「何でもないわよ！」

素直じゃないな。

昴「なあ。」

荀「何よ。」

昴「お前さ、男は嫌いだって言ったけど父親も駄目なのか？」

荀「父様は……。」

その反応だと少なくとも嫌いじゃなさそうだな。

昴「お前の言うとおり男は馬鹿で子供だ。俺含めてな。でもな、それがまた良いところでもあると思うぞ？」

荀「ふん、男なんて……。嫌いよ。」

ま、いきなりは無理か。

昴「いつか男と普通に接しられるようになればいいな。」

俺はそう言っつて荀イクの頭を撫でた。

荀「！？・・・触ら・・・ないですよ。・・・っつていうかあなたやっぱり見えてるんじゃない！」

昴「見えてないよ。音と気配と氣。それだけ分かれば位置は把握出来る。姿そのものは見えないよ。」

荀「ふん！」

昴「さてと、俺はもうあがるな。荀イクも浸かりすぎてのぼせるなよ？」

荀「大きなお世話よ！早く消えなさいよ！」

昴「はいはい。それじゃあ待たな。」

荀「待ちなさいよ！」

昴「ん？」

桂「桂花よ。」

昴「？」

桂「私の真名、桂花よ。」

昴「呼んでいいのか？」

桂「か、勘違いしないで！あくまで命を助けてくれた礼よ！だからあまり気安く呼ばないでよ！」

昴「分かった分かった。それじゃあ桂花。よろしくな。」

桂「用はそれだけよ、早く出て行って!」

昴「それじゃ、待たな。」

俺は風呂からあがり、そのまま自室に戻った。

桂花 side

桂「全く!」

なんなのよ、あいつ! 凶々しくて嫌な奴でおまけに性格も悪い奴! 本当に気に入らない!

桂「男なんて・・・。」

男なんて大嫌い。下衆で馬鹿で下品の塊よ。でも・・・。

桂「あいつは他の男と違うのかな・・・。」

頭を撫でられた時、嫌じゃなかった。まるで昔父様に誉められた時

みたいに・・・、

桂「はっ！？・何考えてるのよ私は！」

男なんてどれも一緒よ！・・・一緒なんだから・・・。

私は湯を顔にパシャパシャと当てて苦悶した。

華琳 side

桂「この馬鹿！どうしてこんなことも出来ないのよ！」

春「何だと！誰が脳みそまで筋肉に詰まった馬鹿だと！」

桂「誰もそこまで言っていないでしょ！」

春蘭と桂花が喧嘩をしている。相変わらずね。この2人は。

桂「全く！こつちも暇じゃないのよ。・・・昴！あなたたちちょっと手伝いなさい！暇なんでしょ！？」

昴「客将の領分越えてるだろ。第1に俺は武官だぞ？」

桂「あなた頭人より回るんだから出来るでしょ？・・・ああもう！」

食事奢るから手伝いなさい！」

昴「よし、のった！構わないぜ。」

桂「ならついてきなさい。」

昴「あいよ。」

昴が桂花の後をついていく。あの桂花が男に頼るなんて意外ね。それはそうと、春蘭や秋蘭に風は武人として1枚格を上げようとしている。桂花に茉莉も軍師として著しく成長している。

華「ふふっ。」

昴に出会って皆変わろうとしている。いい方向に。これは是が非でも傍に置きたいわね。

華琳は密かに御剣昴を手に入れる方法を画策していた。

続く

第8話 相入れないモノ、変わっていくモノ（後書き）

どうでしたでしょうか。やりすぎた感がかなり強いです。後残りの拠点フェイズが季衣と茉里と真桜と沙和ですが、真桜と沙和の話が浮かばないです。真名は預かってるし・省略するかな？それでは感想、アドバイスありましたらお願いします。

第9話〜甘いおやつと書達の笑顔〜（前書き）

今日中に仕上がったので投稿します。今回は少し短めです。かとい
って濃い内容というわけでもありませんが・・・それではどうぞ！

第9話〜甘いおやつと書達の笑顔〜

昴side

茉「これで・・・どうですか？」

昴「・・・うん、これで問題ないな。」

今茉里の政務の手伝いをしている。是非にと頼まれたからだ。まあ暇だったしな。それにしても茉里は喋り方こそスローテンポだが仕事は早い。書簡を纏める手が普段の茉里からは考えられないくらいに早い。

茉「終わり・・・ました。」

昴「お疲れ様。」

終わったみたいだな。

昴「よく頑張ったな。」

頭を撫でてあげた。

茉「〜えへへ〜」

茉里は嬉しそうだ。

昴「それじゃ俺はもう行くな。」

茉「はい・・・ありがとうございます。」

昴「待たな。」

俺は茉里の部屋を後にした。

城の通路を歩いていると、

昴「・・・(グウー)」

腹減ったな、そついやもう昼飯時か。今日は何にしようか・・・
・・・ん？何かうまさうな匂いがしてきた。これは・・・中庭か？
俺は匂いの元をたどってみると、

季「モグモグ。」

季衣が中庭で串団子を食べていた。

昴「よう季衣、食後のおやつか？」

季「にゃ？あ、兄ちゃん。ごはんはまだだよー。」

昴「大量に団子があるようだが？」

季「そりゃあるけど、むぐむぐ。」

昴「じゃあ、団子が昼飯か？」

季「そんなわけないじゃん。お団子はお団子だよー。兄ちゃんも食べる？」

昴「いいのか？」

季「たくさんあるからいいよ。」

昴「なら遠慮なく。」

季「はいはい。どうぞー。」

季衣に団子を1本貰い1口食べてみた。

昴「おう、なかなか上手いな！」

季「でしょー？(ぱくっ)」

昴「しかしな？そんなに団子食べて昼飯大丈夫なのか？」

季「このくらいで入らなくなるわけないじゃん。兄ちゃんだって知ってるでしょ？」

昴「ああ、そういや・・・、」

そうだ、以前に季衣を食事に誘った時その小さな身体からは想像出

来ないくらいに大量に食べていた。しかも奢るって言っちゃったもんだから財布が大打撃を受けたのは記憶に新しい。

季「今日は春蘭様と秋蘭様の3人でお昼食べに行くことになってるからさー。」

昴「へえー、そうなのか。」

季「おながが空きすぎてももたないからこつやってちょっとねー。」

昴「なるほど。」

あれで・・・ちょっとね。

昴「俺も一緒にいいか？」

季「いいよー。ごはんは皆で食べたほうが美味しいからね！」ぱくっ」

また1本の団子を食べる。ああもう口元に団子のタレが付いちゃったよ。

昴「ほら季衣、口元汚れてるぞ。」

季「ん？」

俺は季衣の口元のタレを指ですくうとそのまま自分口に運んだ。

季「に、兄ちゃん!？」

季衣が後ろへのけ反った。

季「兄ちゃん・・・大胆だよ・・・」

ん？季衣の奴、どうして・・・ああなるほど。季衣だって女の子だもんな。軽率だったな。

昴「悪い悪い。少しやりすぎたな。」

季「別に・・・いいけど。（ボソッ）」

昴「何か言ったか？」

季「な、何でもないよ！」

季衣の奴どうしたんだ？顔も赤いし・・・まあいいか。おっ春蘭に秋蘭来たな。

秋「季衣、待たせたな。」

春「誰かと思えば昴ではないか、私と勝負しろ！」

昴「こらこら、これから季衣と食事に行くんだろ？」

春「むっ、そうだったな。」

昴「飯の後に腹ごなしに1勝負といこうぜ。」

春「よーし言っただな！次は勝たせてもらおうぞ！」

昴「のぞむところだ。」

秋「ところで、どうしたんだ季衣？ 様子が変だが？」

季「な、何でもないですよー、秋蘭様。」

と、一瞬チラツと俺の方を見てあわてて否定した。

秋「まったく、お前という奴は・・・」

今度は秋蘭が俺の方をチラツと見てボソツと呟いた。いやちよつとデリカシーに欠けてたとは思っけど・・・。

春「？・どうしたのだ？」

秋「何でもないさ。それでは行くか。」

春「うむ、そうだな。」

季「行きましょー！」

昴「ご一緒させてもらっぜ。」

そのまま4人で街に繰り出し食事に向かった。この日は今話題になっているという餃子を食べた。いや〜うまかったな。ちなみに食後の春蘭との勝負だが、1勝負ではなく、結局5本勝負となった。結果は俺の5連勝。相変わらず挑発に弱い。冷静な春蘭ならそれなりにいい勝負になるんだがな。だがまあ確実に進歩はしているけどね。

数日後

昴「〜」

今俺は城の厨房を借りてお菓子作りをしている。実は料理とお菓子作りは俺の趣味の1つだったりする。そして今俺が作ってるのはクッキーだ。材料が1部別の物を変わりに使用したが大体の材料集まりそうだったので試しに作ってみることにした。

昴「ふんふん ふん ふんふん ふん ふん ふん ふんふんふん
」

順調にクッキーは焼き上がっていく。

昴「炙って、炙って、炙って、たくさん上手に焼けました」

よし完成だ。さてお味は・・・うん、砂糖だけはどうにもならなかったので別の物を変わりに使ったが悪くないな。逆にカロリーオフでいいかもしれない。

昴「とりあえずこのクッキーは・・・茉莉に持って行ってあげよう。」

時間的にもそろそろ小腹が空いているだろうしな。運ぶ準備をしているさ、

季「何かいいにおいがする。」

昴「ああ、季衣か。」

季「兄ちゃん、それ何？すごく美味しそう！」昴「これはクッキー
と違ってな。甘いお菓子だ。」

季「茎？よく分かんないけど美味しそう。」

昴「これから茉里のところに持って行くんだ。いっぱいあるから季
衣も食べるか？」

季「うん、食べたい！」

昴「よし、それじゃ一緒に行こう。」

季「うん！」

俺は焼いたクッキーを皿に並べると季衣と茉里の部屋に向かった。

茉「ふう。」

ようやく政務に……一段落つききました。相変わらず……仕事の量は……多いです。この量を今まで……1人こなしていた……桂花さんはすごいです。

茉「ん／＼／」

椅子にもたれ掛かり大きく伸びをしていると。

昴「茉里、今大丈夫か？」

センセの声だ。

茉「大丈夫です……どうぞ。」

昴「邪魔するぜ。」

季「入るよ〜！」

センセが……入ってきた。季衣ちゃんも……一緒だ。

昴「仕事中だったか？」

茉「ちょうど……一段落つききました。」

昴「ならよかった。」

センセ……何か持ってる。いいにおいがする。

昴「頭ばかり使って疲れたる？これでも食べて少し休憩しないか？」

茉「?..それは?」

昴「これはクッキーと言ってな、甘い甘いお菓子だ。」

茉「甘い..お菓子。」

美味しそう。

季「兄ちゃん、早く食べようよ。」

昴「分かった分かった、慌てなくてもお菓子は逃げないから。」

そういつて卓に皿を並べた。

昴「さっ、召し上がれ。」

茉「いただきます。(ぱくっ)」

季「いただきます!」(ぱくっ)」

1つ摘まんで食べてみる。

茉「...。」

季「...。」

昴「ど、どうだ?」

茉「おいしい。」

季「おいしーい！」

本当においしい。柔らかくて・・・口の中に甘さが広がっていく。

季「こんなお菓子初めてだよー！」

昴「ならよかった。」

センセは笑顔でそう答えた。

いっぱいあったけどすぐになくなってしまった。

季「美味しかったー！」

茉「ごちそうさまでした。」

昴「お粗末様でした。」

季「また食べたいなー。」

昴「また作ってあげるよ。今度は華琳や春蘭達も一緒に食べような。」

季「うん！」

茉「はい。」

季「兄ちゃんが本当に兄ちゃんだったらよかったなー。」

昴「ははっ、それだと毎日食事は大変そうだ。」

季「ぶう〜、僕そんなに食べてばかりじゃないよー。」

昴「そうかー？」

季「兄ちゃんひどいよー。」

昴「ははっ、冗談だよ。」

季「もう。」

茉「ふふっ。」

センセがお兄ちゃん・・・毎日楽しそうだな。

昴「2人供大事な妹みたいなものだよ。」

センセは私と季衣ちゃんの頭を撫でてくれた。

季「えへへー／／」

茉「うにゅう／／」

ナデナデ気持ちいい／／

昴「さてと、季衣、茉里もそろそろ政務に戻らないと行けないだろ
うからそろそろお暇するよ。」

季「うん、分かったよ!」

昴「それじゃ、邪魔したな。」

茉「今日は……ありがとございました。お菓子……美味しかったです。」

昴「ありがとな。それじゃ、またな！」

季「茉里ちゃん、またね！」

茉「またね。」

センセと季衣ちゃんは部屋を出ていった。

茉「ふう。」

お菓子……美味しかったな。

茉「ふふっ。」

センセはすごい。武術も……知識も……お料理もすごい。それに……すごく優しい。良いことしたら……褒めてくれる。頭撫でてくれる。

茉「……センセ。」

センセは劉備さんと……一緒に乱世を歩むつもり。それに黄巾の賊を……退治したらここからいなくなっちゃおう。

茉「……嫌。行っちゃ嫌。」

センセ、ずっと・・・一緒にいてほしい。一緒に華琳様を・・・支えてほしい。ずっと頭を撫でてほしい。センセ・・・

大好き。

茉莉は1人昴を想い心の慟哭を吐露した。

続く

第9話〜甘いおやつと書達の笑顔〜（後書き）

というわけ季衣とオリキャラ茉莉（司馬懿）の拠点フェイズでした。季衣はともかくオリキャラは自己設定なのでやりやすいようにできやすく、やりにくいようでもやりやすい、こんな感じでした。感想、アドバイスありましたらどしどしお願いします。お待ちしております。それではまた。

第10話 覇道、その道程 (前書き)

昨日中に間に合わなかったな。今回は少し難しかったです。それで
はどつぞ！

第10話 覇道、その道程

昴 side

昴「うーん、いないな。」

今華琳を探しているんだが何処にも見当たらない。書庫や玉座にもいなかった。

昴「さて、どうしたものか……ん？」

あれは……桂花か？ちょうどいい。

昴「よう。」

桂「誰かと思えば昴じゃない？何よ？」

昴「華琳知らないか？」

桂「華琳様？……知らないわ。」

なぐんか妙な間があつたな。

昴「本当に？」

桂「本当よ！」

昴「まいったな、華琳に今日中に見せなきゃならない報告書があるんだが……」

桂「それなら後にしなさい、今華琳様は……。」

昴「……(じいゝ)」

桂「ふん！」

桂花は踵をかえして去ろうとした。

昴「待った。」

桂花の肩を掴む。

桂「知らないったら知らないわ！っていうか触らないですよ！妊娠するでしょ!？」

昴「するか！っていうか報告書見せないと俺が怒られるんだって！」

桂「怒られなさい！ついでに死になさい！私には関係ないわ！」

昴「ひでえだろそれ!？」

桂「とにかく今は駄目よ！昴でも駄目なの！」

こんな感じに桂花と問答を繰り返していると。

秋「どうした2人して、騒々しいな。」

昴「秋蘭か。いやな、今華琳を探しているんだが知らないか？」

秋「華琳様なら今日は1日お休みだぞ？」

昴「そうだったのか？」

秋「聞いていなかったのか？」

昴「初耳だ。今日までに警備隊の発足からの事件件数と改善案の報告書を纏めて報告するように言われてただけだな。」

桂「それなら昨日のうちに終わらせて報告すればよかったじゃない。」

昴「昨日はいろんな部署の手伝いに行ってたから時間なかったんだよな。無理にやれないこともなかったけど今日まででいいって言われてたからさつき仕上げたんだ。つつかその手伝いの中には桂花も含まれてるんだけどな。」

桂「つつ。」

昴「まあ何にせよ休みだってんなら日を改めるよ。」

秋「すまないな。急ぎでないなら明日の朝にしてくれると助かる。」

華琳様に何か言われたら私の名を出して構わんぞ。」

昴「しかし華琳にそういう気を使うと怒らないか？」

秋「うむ。理解はしてくださるだろうが、納得はされないだろうな。」

やれやれ、

昴「まあ、忘れてたことにするよ。」

最悪土下座しよう。

秋「そうか、気を使わせて悪いな。」

昴「休みの日ぐらいゆっくり休まないとな。それなら俺は警備に行くよ。それじゃ、またな。」

秋「ああ。．．そうだ、城を出るならむこうの庭を通った方が近道だぞ。」

桂「そういえばそうね。」

昴「そうだったっけ？」

庭っていつも歩いてるけど遠回りじゃなかったっけ？

秋「うむ。なら詫びがてらに教えてやろう。」

．．．
つというわけで今秋蘭に教えてもらった道を歩いているんだが．．．

昴「やっぱり遠回り・・・だよな。」

秋蘭に教わったとおりに歩いているがどうも近道してる気がしない。

昴「ま、別にいいか。」

たまには違う道を歩くのも悪くない。

昴「ん？」

がさりと茂みを抜けるとそこには木陰に渡されたハンモックがあった。そしてそこにいたのは

昴「華琳・・・」

ついさっきまで探していた華琳だった。

昴「・・・まったく。」

秋蘭や桂花も変なところで気を回すんだからな。

昴「起きてるか？」

華「・・・。」

昴「華琳。」

華「・・・うつん。」

寝てる・・・みたいだな。それにしても・・・、

昴「ふふっ、可愛い寝顔だな。ついずっと見つめたくなるな。」

今日の前には歳相応の可愛い女の子にしか見えなかった。

昴「君はもう少ししまわりに頼って肩の力を抜かないと。でないと疲れちまうぜ?」

華琳は何でもできる。だから何でもしてしまう。それが俺には心配だ。

華「・・・ううん、うるさいわね・・・んん。」

昴「!?!?・・・起きたのか?」

華「・・・。」

そついうわけではないみたいだな。・・・それにしても、

昴「霸道か・・・」

彼女の歩む道。彼女自身が定めた道。

昴「華琳・・・その道は冷たくて、孤独で誰も横に並び立てない寂しい道だぜ。」

霸道とは選ばれた者にしか歩むことができない道だからな。

華「まるで自分が歩んできたような言い方ね?」

昴「!?!?・・・起きていたのか・・・。」

華琳 side

春蘭と秋蘭が珍しく休めというものだから庭先にきている。ふふっ、あの2人も心配性なのだから。読書もそこに眠っていると・・・

昴「起きてるか？」

この声、昴かしら。

昴「華琳。」

やっぱり昴ね。

昴「ふふっ、可愛い寝顔だな。ついずっと見つめたくなるな。」

なっ／＼、何てこと言うのよ！まったく。

昴「君はもう少しまわりに頼って肩の力を抜かないと。でないと疲れちまうぜ？」

春蘭達といい昴といい本当に心配性なのだから……。

華「ううん……うるさいわね……んん。」

昴「！？……起きたのか？」

華「……。」

何で私、寝たふりなんかしたのかしら？

昴「霸道か……。」

……昴？

昴「華琳……その道は冷たくて、孤独で誰も横に並び立てない寂しい道だぜ。」

その言い方……まるで……

華「まるで自分が歩んできたような言い方ね。」

昴「！？……起きていたのか……。」

私ったら思わず……まあいいわ。

華「あなたをずっと見ていたわ。あなたは私とよく似ている。考え方も思想も。そして今の言、おそらくだけど……あなたは天の国で王だったのではなくて？それも霸道を歩んだ王。」

昴「……。」

何も言わない・・・やはりあなたは・・・。

昴「・・・とある霸道を歩んだ王の話だ。」

華「昴？」

昴が唐突に話はじめた。

1人の英傑がいた。

その者は武も知も優れていた。

その国は荒れていた。

その英傑は荒れた国を救いたいと考えていた。

英傑は自分の力と知を正しく使い、そして自分を受け入れてくれる器を持つ王を探した。

旅を続け、遂にその王を見つけた。その王は強く、気高く、そして慈愛に溢れていた。

その王と共に乱世を歩んだ。その王とその国はどんどん大きくなっ

ていった。

この王となら乱世を治められる。そう確信した。しかし・・・、

その王は志半ばで倒れた。王が倒れたその国を率いられるのはその英傑だけだった。

王の意志を継ぎ国を率い、戦った。しかし王としての器を持たない英傑が戦っていくには覇道を歩むしかなかった。

自分が見初めた王とは真逆の道である。

国も領土もどんどん大きくなるが、それと同時に皆その英傑を恐れ
ていく。

そして戦い続けその大陸から戦争がなくなった。

それと同時にその英傑は姿を消した。

昴「つとまあ、そんなお伽噺だ。」

華「それで、何が言いたいのかしら？」

昴「ま、要するに覇道を歩むにはそれ相応の覚悟が必要だってことをこのお伽噺話は伝えたいんだろ？」

華「それで、その霸王はそれからどうなったのかしら？」

昴「さあな？多分……今も戦い続けてんじゃないのか？それが自分の使命とばかりに。」

華「私は違う考えね。今も追っているのではないかしら。その前の王の理想とやらを。」

昴「そうか……そうかもな……。」

昴は悲しいような嬉しいような……そんな表情を浮かべていた。

華「（昴……やはりあなた……）」

あなたはお伽噺の王なのね。

昴「なあ、霸道だけが道ってわけじゃないんだぜ？他の道を探そうとは思わないのか？」

何を……。

華「愚問ね、霸道こそが我が歩む道。そして霸道こそがこの国と民をより良い方向へと導く道だと確信しているわ。そのためなら如何なる苦行、如何なる困難をも乗り越えてみせるわ。」

ええ、乗り越えるわ、必ず。

昴「そうか……ならもう何も言わないさ。だけどな……。」

華「？」

昴「もう少し仲間に寄りかかってくれ。華琳、君は1人じゃない。華琳の為に最後の最後まで戦ってくれる仲間がいる。そいつらの為にもあまり無理はするな。」

そつと私の頭撫でた。

華「／／・分かってるわ！」

昴「なら、約束だ。」

そう言つと私の頭から手を離れた。もう少しそのままでも・・・つて何を考えているの、私は／／

華「と、ところであなたは何故こんなところに？街に行くには遠回りのようだけど？」

昴に動揺を気づかれないように話題を変えてみる。

昴「何、ただ散歩がてら通っただけだ。」

・・・この様子からして・・・秋蘭ね。何も言わないなら私も聞かないわ。

昴「せつかくの休みだ。華琳もゆっくり休むといい。」

華「ふふっ、そうさせてもらっわ。」

昴「そつだ！・・・確かこの辺に・・・。」

何やら昴が手荷物をあさりはじめた。

昴「これを飲むといい。」

華「これは？」

丸い丸薬のようだけど・・・

昴「これを飲んで休めばぐっすり眠れるし短時間で疲労もなくなる。味は・・・不味くないが美味くもない。」

華「ならいたたくわ。」

丸薬を食べてみる。本当に美味くも不味くないわね。

華「ありがとう。これでゆっくり・・・！？」

何？急に頭がポーツとして眠気が襲ってきた。

華「な・・・に・・・？」

昴「この丸・は即効性・・・いからな。」

何？もうよく聞こえないわ。

昴「お・すみ・・・華琳。」

そのまま夢の中へと誘われた。

昴 side

昴「おやすみ、華琳。」

相変わらずよく効く丸薬だ。これを寝る前に飲むとすぐに睡眠状態になる。効果は眠った時間のおよそ倍の睡眠効果が得られる。つまり丸薬を飲んで3時間眠ると身体は6時間分寝たのと同じ状態になる。

華「すうくすうくすうくすうく。。。」

昴「今度こそ眠ったな。」

。。。。それにしても、俺は何で華琳にあの話をしたんだろう。。。。

昴「やっぱり似てるからなんだろうな。」

気高くて初志貫徹貫き通すところがあいつに。。。。

昴「。。。。。」

桃香と華琳。2人の歩む道はあまりにもかけ離れている。互いが大きくなれば必ず互いに牙を向きそして。。。。やめよう。今はまだ考えなくてもいいことだ。それに。。。。桃香なら。桃香ならきつと新しい答えを見つけてくれる。信じよう。俺が認めた主と王を。だか

ら今は・・・

昂「可愛い1人の女の子の寝顔堪能するのでしょうか。」

俺はそつと華琳の前髪を撫で華琳が起きるまで傍にいた。

続く

第10話 覇道、その道程 (後書き)

以上、華琳拠点です。華琳の扱いは難しいですね。もうそろそろ話を進めようと思います。感想、アドバイスありましたらお願いします。それではまた！

第11話 黄巾党殲滅戦 (前書き)

まず最初に真桜、沙和ファンの方々本当にすみません。2人の話が浮かばず、原作をただ重ねるだけならいっそのことダイジェストにということにしました。今回は・・・うーん、自信ないです。それではどうぞ！

第11話 黄巾党殲滅戦

華琳のところへ客将になって幾ばくかたった。思い返せばいろいろあつたな。春蘭と秋蘭鍛練や華琳に似合う服を探したり。季衣と食べ歩きしたり。茉里と一緒に菓子づくりをしたり。桂花の仕掛けた罌を仕掛けあつたり（基本的に引つ掛かるのは桂花）。凧を鍛えたり。真桜とカラクリを弄つたり。沙和に浴衣を作成したりもしたな。本当にいろいろあつたな。

その後、黄巾の賊を討伐に行った春蘭と季衣が逃げた賊を深追いしすぎて他国の領地へ侵入してしまい、孫策に大きな借りを作つてしまつたというアクシデントがあつた。そして現在、俺は凧と少数の兵を率いて偵察にきている。

昴「昨日はお疲れ様。身体は大丈夫か？」

昨日は凧も参加していたからな。

凧「いえ、問題ありません。師匠に鍛えていただいていますから。」

昴「そうか、でも無理はするなよ？」

凧「大丈夫です。自分にはこういう事しか出来ませんから。戦つてとしか・・・自分にはそういう生き方しか・・・。」

俺は凧の頭にポンつと手を置き、

昴「そんな悲しい事言つな。俺は凧の良いところ可愛いところを知つてる。きつと他の生き方だつて出来るはずだ。そうだな・・・結婚でもして家庭を築くつてのもいいんじゃないか？」

凧「・・・／＼・・・無理ですよ・・・。こんな傷だらけの女なんて皆気味悪がられるだけですよ・・・。」

全く、凧は・・・。凧をそのまま俺の身体に引き寄せ、

昴「身体の傷は凧にとって勲章だろ？傷の数だけ多くの人が救われているんだ。だから誇ることすれ卑下することはない。だからそういうこと言つな。」

俺は凧の頭を撫でてあげた。

凧「／＼・・・師匠!？」

昴「凧だったら嫁さんに大歓迎だけどな。」

言つと凧の顔はみるみる赤くなり、

凧「・・・はい。・・・ありがとうございます／＼」

凧はそのまま頭を俺の肩に預けた。すると後ろから・・・、

「楽進様やつぱり・・・(ボソッ)」

「完全にホの字ですね・・・(ボソッ)」

後ろから兵士の声が。すると、

凧「!?!」

凧が慌てて俺から離れた。

凧「っ！（キッ！）」

「・・・（ヒュ）」

「・・・（キヨロキヨロ）」

「・・・（カチャカチャ）」

兵士は凧に睨み付けられると、口笛を吹いたり、周囲を警戒したり、装備を点検しはじめた。

凧「きさまらっ・・・!？」

凧は氣を拳に集中させ、兵士の後方に打ち出した。

ドン！！

「楽進様!？」

「いくらなんでもそれは!？」

昴「違う、敵だ！総員戦闘体勢を！周囲を警戒しろ！」

兵士があわてて戦闘体勢をとる。

「くっ！」

残りの1人が逃げ出した。

逃がすか！俺が追おうとすると、

凧「師匠、ここは自分が！」

凧は縮地で敵の前方を塞ぎ、

凧「はっ！」

腹に拳を打ち込んだ。

「がはっ！」

一撃もらうと敵はその場に倒れた。凧のやつうまく縮地を使えるようになったな。

凧「こちらは問題ありません。」

昴「ご苦労様。周囲にとりあえず気配はない。．．．それにしても．．．」

見たところ黄巾の賊だな。こんなところで少数で何を．．．ん？何か持ってるな。これは地図か？．．．何か書いてあるな．．．集合場所の連絡．．．ってことは。

昴「こいつらは連絡兵か。」

凧「！？．．．それならばこれで敵の主要地点がひとつ分かりますね！」

昴「ああ、しかし賊もずいぶんとしつかりとした連絡を取り始めたな。」

先日春蘭を手玉に取った奴らといい賊にも頭を使える奴がいるみたいだな。

凧「賊も我々のような作戦行動取るようになってきているようですね。」

昴「全く、厄介だな・・・とりあえずこれを持って一度華琳のところに戻るぞ。」

凧「了解です！」

「「「了解です！」「「「

昴「それと・・・、」

「「「？」「「「

昴「お前達賊がここまで近づいてるのに凧以外誰も気付かなかつたな？」

「「「（ビクッ！）「「「

昴「お前達城に戻ったら特別に訓練な」

「「「（TOT）「「「

その後兵士は全員真っ白な灰になった。

その後城に戻り手に入れた連絡文書を元に軍議が行われた。

秋「さきほど偵察に出した部隊が戻ってきました。連中の物資の輸送経路と照らし合わせて検証もしてみました。敵の本隊で間違いないようです。」

昴「つうことは張角もそこにいるわけだな？」

秋「ああ。張三姉妹の3人が揃っているとの報告も入っている。」

華「間違いないのね？」

秋「何とというか・・・3人の歌を全員が取り囲んで聞いていて、異様な雰囲気を漂わせていたとか。」

華「・・・何かの儀式？」

秋「詳細は不明です。連中の士気高揚の儀式ではないかというのが偵察に行った兵の見解ですが。」

昴「確か張三姉妹つてもともとは旅芸人なんだよな？・・・ライブでもやってんのか？」

春「らいぶ？」

昴「確か大人数で歌を聞く集会だっけな。大きな規模になると千や万になるらしい。」

春「何だそれは？千や万も集まっては歌声なんてまともには聞こえんだろつ。」

昴「まあそうだがな。」

正史はこの外史とは比べものにならないくらい文明が発達しているからな。張三姉妹はどうやってんだろ？

華「それは何をする集まりなの？宗教儀式？」

昴「いや、娯楽の一環だ。連中は土気高揚も兼ねてるんだろつがな。感想は・・・奴らにでも聞こう。」

華「そうね。」

昴「何にせよこれは好機だ。ここで奴らを一網打尽に出来れば黄巾の賊による争乱も終わる。」

季「そうなれば兄ちゃんは・・・」

皆が沈黙する。

昴「こうしてる今も力のない民が賊の猛威にふるわれてるんだ。早く終わらせなきゃいけない。この争乱を。」

季「分かってるよ、兄ちゃん。」

華「昴の言つとおりよ。早く終わらせるわよ。」

春「はっ！」

華「動きの激しい連中だから、昴の言うとおりこれは千載一遇の好機よ。気を引き締めなさい。皆、決戦よ！」

「「「「了解！」「」「」

凧「秋蘭様、本隊、到着いたしました。」

秋「そうか、各隊の報告は纏まったか？」

真「ちょうど終わったところやで。連中、かなりグダグダみたいやな。」

秋「やはりな・・・華琳様の予想通りか・・・それで、まずは報告を聞かせてもらおうか。」

真「はいはい。まず、連中の総数やけど約20万。」

沙「ものすごい大軍隊なの。」

季「それって、ボク達だけで勝てるんですか？」

昴「まあ落ち着け。その全てを相手にするわけではないさ。真桜、そのうち戦えそうなのはどのくらいなんだ？」

真「さすが隊長や。そのうち戦えそうなんは3万くらいやないかな。」
季「？・・・どういこと？」

昴「補給線を潰しまくったから食糧も装備も足りてるはずかないからな。」

真「そのとおりや、さっきもどっかの敗残兵みたいなのが合流してたみたいや。」

凧「さっきの大兵力は非戦力を合わせた上での数ということか。」

真「そういことや。」

凧「それで、作戦は当初の予定通りで大丈夫でしょうか？」

秋「問題はなかるう。華琳様の本隊に伝令を出せ。皆は予定通りの配置で各個錯乱を開始しろ。」

秋「攻撃の機は各々の判断に任せるが張三姉妹にだけは手を出すなよ。以上、解散！」

「オオオオオ！！！！！！！！！！」

自軍の兵達の雄叫びが戦場に轟いた。

昴「さすが華琳、ドンピシャだな。」

季「兄ちゃん！」

真「隊長、おまたせー。」

昴「こつちも予定通りだな。」

凧「師匠、御指示を。」

昴「よし、それじゃ……、」

俺はスウーッと息を吸い……よし、行くか！俺は村雨を抜き空に切っ先を掲げ、

昴「これより俺達は本隊に合流、その後本隊左翼として攻撃を続行する！だが張三姉妹は生け捕りにするぞ！皆ここが正念場だ、気合い入れるよ！」

「……応！！！！」

昴「先陣は俺が切る、皆俺に続け！総員突撃——！！」

俺は村雨を構え、賊へ突撃した。

俺はただただ村雨で賊を切り裂き、敵陣に穴を空けていく。

昴「はああああ！」

「ギヤア！」

「ガフツ！」

賊を1振りです人切り裂く。

昴「よし、このまま・・・！？」

前方の弓隊がこちらへ斉射しようとしている。斉射されればこちらに被害が出る。

昴「オオオオ！」

「早く矢を放『遅い！』ぐはあ！」

縮地で一気に加速し、弓隊を斬り裂く。

凧「はああああ！」

季「でやあぁ！」

ドゴーン！！！

凧が氣弾で、季衣は岩打武反魔で残りの敵を吹き飛ばす。

凧「師匠。我らがいることも忘れないでください。」

季「兄ちゃん無理しすぎだよ。」

真「隊長出過ぎや。」

どうやら俺は後続を置いて1人で出過ぎたみたいだな。

凧「悪い悪い。斉射されたら面倒だったからな。それにしても……」

もともと士気が低いのと事前に敵陣に火を放つたことによる混乱で賊の指揮系統はボロボロで賊は陣形すらまともに構築できていない。

凧「これなら早くにカタがつきそうだな。」

凧「悪条件が重なっているとはいえ、賊がここまで脆いとは。」

凧「畏にかかった獣はもはやなすがままだ。それより……」

敵陣で抜けられるところは……あそこだな。

凧「季衣、部隊の指揮を頼む。真桜は季衣を補佐してくれ。凧は俺

「についてきてくれ。」

凧「師匠、どちらに？」

昂「張三姉妹を捕らえる。」

真「せやったら、敵本陣に行ったらええんやないの？」

昂「もう本陣にはいないさ。季衣、確か張三姉妹はもともと旅芸人なんだよな？」

季「街で見掛けたから間違いないよ。」

昂「張三姉妹がどういう経緯で黄巾の賊の首領になったかはわからないがもし大陸平定が目的ではなく成り行きでここまでの事態になったならもう指揮も統制もとれないこの状況じゃ逃げ出しているだろう。」

凧「なるほど、ですがそれなら居場所が・・・。」

昂「逃げるなら敵にも味方にも見つかるわけにはいかない。こつそり抜け出すならこつちしかない。」

真「なるほどな。しかし凧と隊長で大丈夫なんか？」

昂「2人で移動した方が早いし兵を引き連れて追い詰めたら下手すると自害される可能性がある。それに混乱し過ぎて最悪賊に張三姉妹が殺されることも考えられるから時間が惜しいんだ。」

季「分かったよ！こつちは任せて！」

真「隊長、くれぐれも無理せんといてや。」

昴「分かってるって。凧、少し飛ばすからしっかりついてこい。」

凧「はい！お供いたします。」

俺と凧は縮地で敵の後方へ移動した。

張三姉妹 *side*

張宝「この辺りまで来れば・・・平気かな。」

張角「もう声もだいたい小さくなってるしね！・・・でも、みんなには悪いことしちゃったかなあ？」

張梁「難しい所だけど・・・正直、ここまでのものになるとは思っていなかったし・・・潮時でしょうね。」

張宝「けど、これで私達も自由の身よ！ご飯もお風呂も入り放題よね！」

張梁「お金ないけどね。」

張宝「うつ。」

張角「そんなものはまた稼げばいいんだよ。ねー？」

張宝「そう、そうよ！また3人で旅をして、楽しく歌って過ごしましょーよー！」

張梁「で、大陸1番の・・・」

張宝「そうよ！今度こそ歌で大陸の1番に・・・っ！」

男「こんにちは。盛り上がってるところ悪いな。」

そこにはサラサラの黒髪の綺麗な人がそこにはいた。

張角「あなたは？」

男「俺は曹操軍の者だ。君達は張三姉妹だね？」

張宝「・・・！」

張梁「くっ！こんな所まで！」

張角「どうしよう・・・もう護衛の人達もいないよー？」

張宝「くうう、まだあんな事やこんな事もしてないのにー！」

すると黒髪の人の後ろからもう1人女の人がもの凄い速さでやってきた。

女「師匠、遅くなりました。」

男「遅いぞ。」

女「申し訳ありません。・・・この3人が・・・」

男「季衣の言つてた特徴によく似てる。ってことで、悪いが君達、一緒に来てくれないか？」

張梁「・・・付いて行かなかつたら？」

男「少し荒っぽくなるな。」

男は顔しかめて言った。

女「幸い私達は無手の心得があつてな。お主らを傷付けずに捕まえることも出来る。安心しろ。」

張宝「そつちはともかくあなたのそれものすごく固そつだけど!？」

女「心配しなくても手加減してやる。」

張宝「そついう問題じゃない!」

「張角様!」

男「ん?」

女「!」

「テメエ！俺達の張宝ちゃんに何をしようてんだ！」

女「逃げた主をなお庇つか。」

男「こいつらは純粹に張三姉妹の歌に惹かれたやつらなんだろうな。全く、この熱意をもっと正しく別の方向に向けらればな……」

女「私にお任せください。」

男「死なすには惜しいな。風くれぐれも……」

女「分かっています。……はああああ！」

「ぐふっ！」

「がはっ！」

女の人が瞬く間に移動するとあっという間にぶっ飛ばした。

男「うまく氣を操れるようになったみたいだな。」

張角・張宝・張梁「！」

後ろを振り向くとそこには黒髪の男がいた。

張宝「（いつの間に傍に近寄ったの！）」

張梁「（一瞬目を離しただけなのに。）」

張角「（何で何で？）」

男「君達の歌に惹かれて命を賭けてくれる人がいる。君達の歌は良いものなんだな。」

男は笑顔で言った。

張梁「・・・諦めましょう、姉さん。この人達から逃げ切るのは無理だわ。・・・いきなり殺したりはしないのよね。」

男「ああ、そう言われてるからな。」

張梁「ならいいわ。投降しましょう。」

張宝「人和・・・」

張角「れんぼーちゃん・・・」

男「心配するな。大丈夫だから、な？」

男は片目を閉じて笑顔で言ってくれた。

張角・張梁・張宝「・・・／／」

その笑顔はとても美しく、3人の不安は取り除かれたのだった。

かくして、この大陸全土を震わせた本日をもって黄巾党は壊滅した。

続
く

第11話 黄巾党殲滅戦 (後書き)

本来ならこの話で魏編を終わらせるつもりでしたが、長くなりそうなので分けることにしました。次回、魏編の最後の予定です。感想、アドバイスありましたらよろしくお願いします。それではまた！

第12話 出発、新天地へ (前書き)

序盤はほぼ原作。中盤はおふざけ。終盤はグダグダ。相変わらず文才がない作者です。それではどうぞ！

第12話 出発、新天地へ

昴 side

俺と凧は無事に張三姉妹を捕らえ、現在は華琳のところへ来ている。

華「で、あなた達が張三姉妹？」

張宝「そうよ。悪い！」

華「季衣、間違いない？」

季「はい。ボクが見たのと同じ人達だと思います。」

張角「あ、私達の歌、聞いてくれたんだねー。どうだったー？」

季「すつごく上手だったよ！」

張角「ほんと！？ありがとうー」

昴「君達はもともと旅芸人なんだろ？どうしてこんな事に？」

張梁「・・・色々あったのよ。」

華「色々ねえ？ではその色々とやらを話してみなさい。」

張宝「話したら斬る気でしよう！私達に討伐の命令が下ってるのだから！」

華「それは話を聞いてから決める事よ。それから、ひとつ誤解をしてるようだけれど・・・」

張宝「何よ？」

華「あなた達の正体を知っているのはおそらく私達だけだわ。」

張宝「・・・へ？」

華「そうよね？桂花。」

桂「はい。あなた達ここ最近、私達の領を出ていなかったでしょう。」

張梁「それは、あれだけ搜索や国境の警備が厳しくなったら・・・出ていきたくても行けないでしょう。」

桂「ですから現状、首魁の張角の名前こそ知られていますが、他の諸侯の間でも、張角の正体は不明のままです。」

張宝「どういうこと？」

昴「ま、要するに尋問しても誰も君らの正体を明かさなかったってことだ。大した人気じゃん。」

張梁「そんな・・・！」

華「それに、この騒ぎに便乗した盗賊や山賊は、そもそも張角の正体を知らないもの。」

昴「それでそいつらがでたらめばかり証言しまくった結果が・・・
これだ。」

俺は3人に証言をもとに作成されたであろう張角の絵姿を見せた。

張角「えー。お姉ちゃん、こんな怪物じゃないよー。」

身長3メートル、髭モジャ、腕8本、足が5本、角シツポ付き。もはやただの怪物だ。」

華「まあ、この程度という事よ。」

張梁「何が言いたいの？」

華「黙っていてあげてもいい、と言っているのよ。」

張宝「どういうこと？」

華「あなた達の人を集める才覚は相当なものよ。それを私の為に使うというなら、その命、生かしてあげても良いわ。」

張梁「目的は？」

張宝「ちよつと、人和！」

華「私が大陸に覇を唱えるためには、今の勢力では到底足りない。だから、あなた達の力を使い、兵を集めさせてもらうわ。」

張梁「その為に働けと？」

華「ええ。活動に必要な資金は出してあげましょう。活動地域は・
・そうね。私の領内なら、自由に動いて構わないわ。通行証も出し
ましょう。」

張宝「ちよつと！それじゃ、私達の好きな所に行けないって事じゃ
ない!？」

張梁「待ってちい姉さん。」

張宝「何よ。」

張梁「曹操。あなた、これから自分の領土を広げる気なのよね。」

華「それがどうかした？」

張梁「それは私達が旅できる、安全な所になるの？」

華「当たり前でしょう。平和にならないのなら、わざわざ領土を
広げる意味はないわ。」

張梁「分かったわ。その条件、飲みましょう。その代わりに、私達3
人の全員を助けてくれる事が前提。」

華「問題ないわ。決まりね。」

張宝「ちよつと人和！何勝手に決めて・・、姉さんも何か言ってや
つてよ!」

張角「えー。だってお姉ちゃん、難しい話ってよくわかんないし・
・」

張宝「あーもう役に立たないわね！」

秋「……。」

昴「……。」

俺と秋蘭は春蘭を見た。

春「秋蘭に昴。なぜ私を見る。」

昴「大変だな。」

秋「もう慣れたさ。」

春「？」

春蘭はワケわからないといった感じだな。

張梁「ちい姉さん。もともと選択肢なんかないのよ。ここで断れば私達はこの場で殺されるわ。」

張宝「むう。」

張梁「生かしてくれる上に、自由に活動するための資金までくれて自由に歌っていいなんて、正直破格の条件だと私は思う。」

張宝「用が済んだからって殺したりしないわよね？」

華「用済みになったら支援を打ち切るだけ。その頃には大陸一の歌い手になっているのでしょうか？せいぜい私の国を賑やかにしてちょ

うだい。」

張梁「面白いじゃない。それは、張三姉妹に対する挑戦という事でいいのね？」

華「そう取るなら、そう取ればいいわ。」

張宝「よし！なら決まりだわ！」

張角「えーっと。結局、私達は助かる、って事だいいのかなあ？」

張宝「それに、また大陸中を旅して回れるのよ！今度こそ、あの太平何とかって本がなくても、大陸一番を獲ってみせるわよ！」

華「！」

張角「え、やったじゃない またみんなで歌って旅が出来るんだね」

華「ちよつと待ちなさい。」

張宝「何？」

華「さつき、太平何とかって・・・」

張梁「太平要術？」

華「あなた達、それをどうしたの！」

華琳の様子がおかしいな。太平要術の言葉に反応したようだが。

張角「んー。応援してくれてる、っていう人にもらったんだけどー。逃げてくるとき、置いてきたの。」

華「そう。」

張梁「私達のいた陣地に置いてあるはずだけど・・恐らく、もう灰になっているはず。それがどうかしたの？」

華「いえ。そう、あの書は灰になったのね。」

昴「華琳、太平要術ってのは何なんだ？」

華「南華老仙の古書で私の領内から持ち出されたのだけど。」

昴「その古書に何かあるのか？」

華「ええ。その古書はどうにも不思議な力が備わっているみたいだね。悪用されると面倒だから探していたのだけど・・、」

昴「じゃあ、張三姉妹がこれだけの規模の集団を率いられたのは・・。」

華「恐らく、それも1つの要因なのでしょう。」

昴「・・・。」

イレギュラーギフト。神からの想定外の贈り物か。外史が発生する際にそれと同時にトンでもな物が外史にあることがある。形状は武器であったり、道具であったりするんだが、厄介なのがそれを手に

すると誰でも英傑並みの力を備わってしまうことだ。過去、他の外史でイレギュラーギフトを持った敵と戦った事があるけどかなり厳しい戦いだっただ。守り手はそれらを回収もしくは消滅させることも仕事だったりする。

華「どうかした？」

昴「いや。」

春「華琳様、探して参りましょうか？」

華「不要よ。それよりあの陣にもう一度火を。誰かに拾われて悪用されては、また今日のような事態になりかねないわ。」

秋「承知いたしました。」

回収するの面倒だし。これでいいか。

凧「ふう。」

昴「お疲れ、凧。」

凧「あ、師匠、お疲れ様です。」

沙「凧ちゃん、今回は大活躍だったねー。華琳様もすごく褒めてたの。」

凧「そうか。」

昴「良かったな。」

凧「はい。これで大陸も平和になります。」

昴「そう・・だな。」

凧「?・どうしました?」

昴「何でもないよ。」

これで全てが収まるとは思えない。恐らくこれは終わりではなく始まりだろう。でもまあ、今日くらいはいいだろう。

昴「華琳から褒賞も貰ったんだし、今日は派手に宴会でもするか?」

真「せやな。華琳様も軍議は次の日にする言ってたしな。」

沙「賛成なの〜!」

各々が黄巾党の殲滅とその祝杯に胸を躍らせていた。

風side

私達は荷物を解く暇もなく、広間に集合かけられていた。真桜や沙和はもちろんみんなも不満そうだ。師匠はこの場にはいない。

張遼「すまん。みんな疲れとるのに集めたりして。すぐ済ますからな、堪忍してな。」

華「あなたが何進將軍の名代？」

張遼「や、ウチやない。ウチは名代の副官や。」

春「なんだ。將軍が直々にというのではないのか？」

張遼「あいつが外に出るわけないやろ。クソ十常侍どもの牽制で忙しいんやから。」

仮にも自分の上司にあたる人にひどい言い様だ。

？「呂布様のおなりですぞー！」

すると帽子を被った小さな女の後に1人の女性がやってきた。

呂「。。。。。」

何だ？発せられる空気が私とは違う・・・この人、強い！
傍の人は陳宮だと秋蘭様が教えてくれた。

陳「曹操殿、こちらへ。」

華「はっ！」

呂「……。」

ん？何も喋らない？

陳「えーつと、呂布殿は、此度の黄巾党の討伐、大儀であった！と仰せなのです！」

華「……は。」

呂「……。」

陳「して、張角の首級は？と仰せなのです！」

華「張角は首級を奪われることを恐れ、炎の中に消えました。もはや生きておりませんまい。」

呂「……。」

陳「ぐむう……首級がないとは片手落ちだな、曹操殿。と仰せなのです。」

華「……申し訳ありません。」

呂「……。」

陳「今日は貴公の此度の功績を称え、西園八校尉が1人に任命するという陛下のお達しを伝えに来た。と仰せなのです！」

華「は。謹んでお受けいたします。。。#」

私にもわかる。華琳様・・・すごい怒気が溢れてる。皆もそれに気づき萎縮している。空気が重すぎる。するとそこに・・・、

昴「おーい皆！俺特製肉まんが蒸し上がった・・・た・・・ぞ？」

師匠が何やら肉まんが入った籠を持って入場してきた。

昴「ん？もしかして俺・・・空気読めない子？」

はい。まるで空気読めてません。

昴side

勢いよく入場したはいいがどうやらそういう空気ではなかったみたいだな・・・ん？何やら赤毛の女の子が近づいてきたな。

呂「・・・(ゴクッ)」

赤毛の女の子は俺ではなくどうやら俺の持つ特製肉まんに興味があるみたいだな。特製と言ってもチャーシューまんだがな。

昴「食べてみるか？」

呂「・（コクコク）」

昴「おひとつどうぞ。」

呂「・・・（モキユモキユ）」

肉まんを受けとるとすぐさま食べ始めた。おお、何か可愛いな／＼

昴「味はどうだ？」

呂「美味しい。こんなに美味しい肉まん、はじめて。」

昴「なら良かった。」

言っちゃ否やすぐに食べ終わった。すると、

呂「・・・（ジ〜）」

視線は相変わらず肉まんだ。

昴「いっぱいあるからもう一つどうぞ。」

呂「・・・ありがとう（モキユモキユ）」

ああ、やっぱり可愛いなあ。思わず女の子の頭を撫でてしまった。

昴「・・・(ナデナデ)」

呂「・・・ん／＼」

どうやら気持ち良さそうだ。そこに、

陳「お前！呂布殿に何をなさるか！ちんきゅーキーク！」

ガシツ！

飛び蹴りをしてきた小さな女の子の足首を掴みそのまま逆さにぶら下げる。

陳「はーなーせー！離すのです！」

何やらジタバタしはじめた、さてどうしたものか・・・、

ポクポクポクポクポク・・・チーン！！

昴「よし、庭に植えよう。」

陳「何でなのですか！」

そのまま庭に歩き出す。

陳「はーなーすーのですー！」

昴「来年にはもっと大きくなるうな」

陳「ねねは植物ではないのです！」

陳「何故穴を掘るのです!？」

陳「土をかけるなです！」

陳「水をかけるなです！」

・
・
・
・
・
・

陳「ビエエエー！ン！恋殿ー！」

大泣きをして赤毛の女の子ところに抱きついてしまった。うーんや
りすぎたか。

昴「ごめん、ごめんな？ほら、冗談じゃん？冗談。」

陳「グスツ！首から下を埋めたです・・・水をかけたです・・・。」

呂「ちんきゅーいじめちゃ駄目。」

昴「少しやりすぎたな・・・そうだ！確か陳宮だっけ？さっきの肉ま

ん、大量にあるからさ、これ詫びと言っては何だがお土産に持って帰ってくれよ。なっ？」

呂「ちんきゅー、許してあげよう？」

陳「恋殿〜。」

張遼「お前、おもしろいやっちなあ。しかしなあ、仮にも都に仕える将にあないなまねしたらただでは済まんぞ？」

昴「他じゃ手に入らない酒も付けよう！これはブドウから作った酒だ。」

張遼「・・・あーねね？この人も誠心誠意謝つとるみたいやし、ここは1つ懐の大きいとこみせようやないか。」

陳「うう、ねねはお酒以下なのですか！？」

すっかりいじけてしまった。

昴「ほら、1つ食べてみな？」

陳宮はおずおずと肉まんを手に取り食べ始めた。

陳「・・・(モグモグ)」

昴「うまいだろ？」

陳「・・・美味しいのです。」

良かった。口に合ったみたいだな。俺はそのまま陳宮をそっと抱き

しめて後頭部を撫でてあげた。

昴「ごめんな。俺が悪かった。だから機嫌直してくれ。な？むくれてると可愛い顔が台無しだ。」

陳「何やら丸め込まれてる気がするのです。」

昴「気のせい気のせい」

呂「ねね、許してあげよ？反省してる。」

陳「・・・恋殿がそういうなら・・・。」

昴「ありがとな。」

陳「ふん！」

あら拗ねちゃった。でも許してくれたようだ。

昴「それにしても、俺は宴会やるって言うから大量に肉まん作ってきたのに、そしたらまあ、こんな感じだったからさ。」

張遼「すまん。こっちの用事は済んだから後は宴会でも好きにしたらってや。」

昴「そうなのか？明るく登場したら・・・あんな空気だったろ？だから空気を替えるためにとっさに陳宮を・・・なあ？」

陳「ねねをダシにするなです！#」

昴「だから許してくれって。このとおり!」

直立不動。

陳「頭を下げるです!#」

張遼「おまえらホンマにおもろいな!2人でおもろい漫才できるんとちゃうか?」

陳「誰がこんな奴と!」

昴「笑いの世界はそんな甘くねえ!」

陳「お前に言われると余計に腹がたつのです!」

張遼「やっぱり息ぴったりやん。」

陳「ぬぐぐぐぐ。」

張遼「まあ何にせようちらは用が済んだから帰るで。」

昴「ひき止めて悪かったな。・・・ああ最後に名前聞いてもいいか?」

張遼「ウチは張遼、字は文遠や。」

昴「そっちは陳宮だろ?君は?」

恋「恋。」

昴「ん？」

恋「真名・・恋。」

陳「恋殿!？」

昴「いいのか？」

恋「ん、これすごく美味しかった。だからいい。」

昴「そうか。俺は姓は御剣、名は昴。昴でいいぞ。」

ね「むう、恋殿が許したなら、ねねは陳宮、字は公台、真名は音々音なのです。」

昴「ねねねね？」

ね「音々音!」

昴「冗談だよ。音々音。」

ね「呼びにくいならねねでいいです。」

張遼「2人とも行くで〜。」

恋「昴、またね。」

昴「ああ、またな。」

ね「今度会ったらちんきゅーキックでとどめを刺すです。」

昴「次は八墓村な」

ね「よく分かりませんが嫌な予感がするのです・・・覚えてろ！なのです！」

昴「またな、ねね！」

3人は帰って行った。しかし恋は何か可愛いし、ねねは面白いし、張遼は付き合いやすそうだったな。さてと・・・ん？

「「「・・・。」」」

皆沈黙している。どうしたんだ？

「「「・・・プツ、あはははは！」」」

皆が笑い始めた。

真「隊長、めっちゃおもろかったで！」

沙「笑い堪えるの必死だったの〜！」

秋「くくっ、仮にも都の将だぞ？」

春「華琳様を見下し罰だ。あはは！」

桂「ほんとよ！くくくっ！」

凧「・・・プツ！」

茉「・（プルプル）『笑いを堪えている』」

華「本当に、あの呂布を相手にあんなまねするなんて、ねえ？」

呂布「・呂布！？」

昴「恋つて呂布だったのか！？」

華「ええそうよ。それがどうかしたのかしら？」

昴「なるほどな〜・・・いやあの子、恋な、かなり強いぞ？」

華「評価が高いわね。ちなみにあなたから見るとどのくらい？」

昴「直接手合わせしないと推測の域をでないが・・・とりあえず春蘭と秋蘭、それに季衣と凧の4人がかりでなんとかつてところだろ。勝利したとしてもその時には2人はやられてるかもしれない。」

華「なるほどね。」

言われた4人は何も反発しない。自分でも気づいているのだろう。

華「昴、あなたなら勝てるかしら？」

昴「そうだな、かなり苦勞するだろうな。」

官軍 side

恋「・・・(モキュモキュ)」

張遼「ホンマに美味しいなこれ。」

ね「確かに美味しいですが、だからといって真名を預けるのはやりすぎですぞ。」

恋「・・・(フルフル)」

張遼「ん？違うんか？」

恋「これ美味しい。でもそれだけじゃない。昂、恋より強い。」

ね「なんですとー!?!？」

張遼「ホンマか!?!?確かにただ者やないとは思たがそこまでかいな。」

驚くのは当然である。恋こと呂布はこの黄巾の乱で3万の賊を1人で討ち滅ぼした猛将だからである。

ね「そんな、何かの間違いです!」

張遼「いや、まてよ?御剣、昂。確かどっかで・・・!そうや、御剣昂、今国中を揺るがしとる天の御遣いの名が確かそうや!」

ね「あのいじめっごがですか!？」

張遼「多分そうや。かゝ、もっとはよ気づいてたら手合わせしてもらったんやけどなゝ、」

恋「・・・モキュモキュ」

ね「最強は恋殿なのです!間違いないのです!」

3人は帰りの道中こんな話をしていた。

昴side

一方こちらは、

華「さっきまで気分は最悪だったけど、今はとても気分がいいわ。皆で宴会でもしましょうか、明日は二日酔いで遅れてきても目をつぶるわ。思い切り羽目を外しなさい。」

季「やった〜!兄ちゃん、さっきの肉まんまだある?」

昴「心配するな。今侍女の子に蒸してもらってるからまだまだあるぞ。」

季「やった〜！」

華「後・・・昴、あなたの送別も兼ねているからね。」

季「えっ・・・。」

華「黄巾党の首魁張角はもういない。残存する賊も諸侯に討伐されるでしょう。確かあなたは黄巾党を壊滅させるまで客将を言うつもりでいたわね。つまり、もう行くのでしょっ？」

昴「・・・ああ。」

季「兄ちゃん、行っちゃうの？」

春「我々と共に華琳様を支えればいいではないか！」

昴「季衣、春蘭、それに皆。皆に華琳がいるように俺にも帰りを待たせてくれる仲間がいる。だから俺は行かなくちゃならない。それに、まだ旅の途中だしな？」

華「それで、出発はいつ？」

昴「とりあえず明日にでもここを発つ予定だ。」

凧「そんな、師匠、急すぎます。」

昴「結構長居しちゃったからな。」

早く次に行かないとじかんがなくなっちゃう。

秋「華琳様、よろしいのですか？」

華「もともとそういう約束なのだから、それを反故にしては曹孟徳の名に傷をつけることになるわ。」

秋「・・・そういうことでしたら。」

不満「そうだな。嬉しいような・・・何と云うか。」

昴「ま、何にせよ出発は明日だ！今日はパーッと騒ぐぜ！」

華「そうね、めでたい日でもあるのだから。」

凧「そうですね。」

真「賛成やー！」

沙「賛成なの〜！」

昴「それじゃ準備するか。凧、真桜、沙和、手伝ってくれ。」

凧「了解です。」

真「任しとき！」

沙「はいなの〜。」

俺達は準備に向かった。この後の宴会はすごく盛り上がったのだが、春蘭はべるべろになって半分猫化したりそれを見てる秋蘭は『姉者はいかがいなあ』とか言ってたし、桂花は・・・辞めとこう、酔っぱらった桂花があんな可愛いわけがなゲフンゲフン！何でもない。

季衣はとにかく食べまくって、俺は無くなる度に料理を作ってた。何で？その他は特に代わり映えなかったな。華琳とか結構飲んでたけど変化はなかったな。その後宴会は深夜まで続き、そこでお開きになった。

宴会終了後、俺はここでの仕事の引き継ぎ、要するに警備隊業務の引き継ぎ作業をしている。

昴「隊長は凧だろうな。1番真面目だし。後は・・・」

華「起きてるかしら？」

この声華琳だな。

昴「ああ、起きてるよ。」

華琳が部屋に入ってきた。

華「あなた結構飲んでいたのに余裕ね。まだ仕事をするなんて。」

昴「それは華琳もだろ同じだろ？凧達へ引き継ぎをしっかりしておかないといけないからな。」

華「そう・・・。」

サラサラっと、筆を走らせる音が部屋に響く。

華「・・・行くの？」

昴「ああ。」

華「・・・。」

昴「・・・。」

華「もし・・・もしあなたが私と同じ道を歩んでくれるなら、あなたを大都督としての地位を与えようと思ってるのだけど・・・。」

大都督、今の華琳の軍のナンバー2は春蘭だ。大都督となれば春蘭とほとんど同等、いやそれ以上だ。

昴「俺が大都督か・・・くくつ、笑える冗談だ。」

俺は思わず含み笑いが出た。

華「・・・本当に・・・笑える冗談よ・・・。」

拒絶、華琳はこちらの意図に気づいたのだろう。

華「あなたが力を貸してる劉備、この乱で義勇軍で名を馳せた人物だという報告を得てるけど、劉備は私の誘いを断る程の人物なのかしら？」

昴「単純な武と知なら華琳と比べるまでもないさ。勝ってるのは胸の大きさがら《ジャキ！》・・・ごめんなさい。」

ジェスチャーまでしたら絶を首筋に当てられちゃいました。

昂「ま、とにかく、武や知はあまり素質はないだろうな。だけど、あの娘には俺達にはないモノを持っている。」

華「私達にはないもの？」

昂「彼女の存在、その言葉には人を惹き付ける何かがある。彼女の理想に賛同し彼女を信じて皆が彼女のため大切な何かを守るために力を貸したい。そんな気持ちにさせられるんだ。」

華「劉備の理想とはなんなの？」

昂「皆が笑って暮らせるようにしたい。それが彼女理想だ。」

華「夢物語ね。」

昂「だろうな。俺も同じ意見だ。けどな、彼女の言葉を聞くとそれが実現できそうな気がしてくるから不思議なんだ。甘ったるい理想なのに。」

華「私には理解できないわ。」

だろうな。

昂「1人じゃどうにも心配だから俺がいるわけだ。」

サラサラサラ・・・終了つと。

華「終わったの？」

昴「ああ、これがここでの最後の仕事だ。．．ふああ、それじゃ寝るとするかな。」

華「．．．そう。」

椅子で伸びをすると後ろから華琳が俺を抱きしめた。

昴「華琳？」

華「．．．今だけよ、今だけこうさせなさい。」

昴「．．．分かった。」

そつと華琳の手に自分の手を重ねた。

華「．．．。」

昴「．．．。」

時間にして5分くらいだろうか。スツと華琳が俺から離れた。

華「夜中に悪かったわね。ゆっくり休みなさい。」

昴「何、気にしてないさ。」

華「おやすみ、昴。」

昴「おやすみ、華琳。」

挨拶を交わすと華琳は部屋から出ていった。再び部屋に静寂が流れた。

昴「・・・ごめんな、華琳。」

俺はやっぱり桃香の理想を共に貫きたい。例えそれがいかに困難で、いかに夢物語であろうと。だから・・・ごめん・・・

華琳 side

華「・・・バカ。」

昴なら、私と同じ道を歩める昴なら、きっと私の孤独を埋めてくれると思っていたのに。

華「・・・本当に・・・バカ・・・」

私は1人の王として、そして、1人の女として呟いた。その声は闇に溶け込んでいった。

昴 side

翌日の昼前、全ての準備と引き継ぎが終わり、旅立ちを目の前にしている。

昴「皆、世話になったな。」

春「おのれ、勝ち逃げしおつて。次会ったら必ずお前に勝ってみせるからな！」

昴「楽しみにしてるぜ。」

秋「お前がいなくては私1人で姉者を面倒みなければならぬのだがな。」

昴「悪いな。でもそれも悪くないだろ？」

秋「ふふっ、それもそうだな。」

季「兄ちゃん、ボクのこと忘れないでね？また一緒にご飯食べようね？」

昴「ああ、もちろんだ。たまには俺も料理を振る舞うよ。」

桂「ふん！ようやく出ていくのね。せいせいするわ。」

昴「・・・桂花。」

桂「・・・勝手に死んだりするんじゃないわよ・・・。」

昴「心配するな。殺されたって死なないさ俺は。」

そつと桂花の頭を撫でた。

桂「・・・ふん／＼」

凧「師匠、今日まで御指導、御鞭撻、ありがとうございます。」

昴「凧はもつと強くなる。鍛練を欠かすなよ。それと警備隊の方も頼むな。真桜と沙和だけじゃ心配だ。」

凧「はい！おまかせください！」

真「隊長ひどいで〜。」

沙「ひどいの〜。」

昴「日頃の行いだ。2人も元気でな。凧にあまり迷惑かけるなよ。」

真「分かつとるわ。」

沙「任せてなの〜。」

少し不安だが大丈夫だろ。さてと・・・

昴「茉莉。」

茉「……。」

さつきから下を向いたままなにも喋らない。参ったな。すると茉莉が俺に近づき、俺にギュウとしてきた。

茉「・・・行っちゃ嫌。」

昴「茉莉……。」

茉「行っちゃ嫌！センセはずっと一緒にいるの！」

普段の茉莉からは考えられない大きい声で俺に懇願した。

茉「センセ華琳様のこと嫌い？・・・皆のこと嫌い？・・・私のこと・・・嫌い？グズツ！」

その顔涙で濡れていた。

昴「嫌いなわけないさ。華琳も皆も、もちろん茉莉も大好きだ。」

茉「グズツ！なら……。」

昴「それでも俺は行かなきゃならない。やらなきゃいけないことがあるから。俺を待っていてくれる仲間がいるからな。」

茉「センセと・・・離れたくない……。」

俺は茉里と同じ目線に立ち、そつと抱きしめ、頭を撫でた。

昴「一生の別れじゃないんだ。またいつか会えるさ。それに俺がいなくなつても茉里にはたくさんの仲間がいるんだ。だから寂しくないだろ？」

茉「グズツ、・・・はい。」

昴「だから、泣き止んでくれ。可愛い笑顔で見送つて、次会うときもその笑顔で迎えてくれ、な？」

茉里は袖で涙を拭き、

茉「はい！・・・センス！」

とびきりの笑顔を向けてくれた。

昴「華琳、君には本当に世話になったな。」

華「こちらも部下が同じだけ世話になったのだからお互い様よ。」

昴「そう言ってくれると助かるよ。」

華「あと一つ言っておくけど・・・。」

昴「？」

華「私はあなたを諦めたわけではないわ。いつか必ずあなたを手に入れてみせるわ。」

昴「ははっ、楽しみにしてるよ。・・・さてと、そろそろ行くな？」

華「分かったわ。」

昴「それじゃ、皆、またな！」

春・秋「またな。」

季「兄ちゃん、またねー！」

桂「早く行きなさいよー！」

凧「師匠、お元気で！」

真・沙「またな〜（なの〜）。」

茉「センセ・・・お元気で。」

皆の声を受け取り。城を後にした。

昴「ここを発つ前に腹ごしらえでもしようかな・・・何処にしようか・・・ん？」

あれは、

昴「おーい！」

張角「あゝ、昴。」

張宝「昴じゃない。」

張梁「こんにちは、昴さん。」

昴「何してるんだ？」

張角「私達、これから食事なんです。」

昴「ならご一緒してもいいか？」

張梁「はい、構いませんよ。いいですよね？姉さん。」

張宝「ちいもいよ。」

張角「行こ行こ。」

とりあえず張三姉妹と店に入った。場所は華琳が気に入ってる店の1つだ。以前に桂花と食事した際に値段聞かずに入店したもんだから財布が大打撃を受けてしまった苦い記憶があるので、手頃な値段の美味しい店に来た。

張角「昂ぐ、これ、美味しいよ。」

プニプニ。

張宝「昂！こつちも食べてよ！」

プニプニ。

昂「あ、ああ。」

ううう、いろいろ、当たってるノノ

昂「少し・・離れような？・・その、当たってるし。」

張角・宝「何が当たってるのかな？」

こいつら確信犯だな！俺は両腕を2人とられてるから飯が食えない。2人にあぐんされてる。

張梁「姉さん達、昂さんが困ってます。」

張角「そんな事言つて、本当は羨ましいだけのくせに。」

張梁「そ、そんなことないノノ」

張梁は顔を赤くしている。ちなみに何故かここの払いは俺ということになっている。まあいいけど。それにしてもうまいな。さすが華琳が気に入るだけはある。

？「お待ちどうさまです。」

翠色の小さな女の子が料理を運んできてくれた。

昴「ここの料理美味しいね。特にコレとコレ。」

2つの料理を指差した。

？「本当ですか！？ありがとうございます！・・・実はその2つ、私
が作ったんです。」

昴「へえー、君給仕じゃなかったんだな。」

？「はい、人手不足なので給仕もやってるんです。」

そういえば・・・

昴「君って確か華琳・・・じゃなくて曹操から誘われてた料理人じゃないのか？名前はえーと・・・『典韋です。』そう典韋だ。」

典「お誘いは嬉しかったんですが、実は探してる人がいるんです。」

昴「探している人？」

典「はい。もともと親友に呼ばれてこの街に来たんです。結局合流
出来なかつたんですが。」

昴「そうなのか？俺最近までこの街の警備隊の隊長やってたから力
になれるかもしれない。その人の特徴と真名じゃない名前を教えて
くれないか？」

典「本当ですか？ありがとうございます！特徴は背は私くらいで食べるのが大好きで名前は、許緒です。」

許緒……。

典「ご存知ないですよね？」

昴「いや、よく知ってるよ。ていうか許緒、今曹操のところで親衛隊やってるぞ。」

典「曹操様の親衛隊！？お城に勤めてるって言うからってつきりどこかの大きな建物をお城とでも言ってるのかと……本当なんですよね？」

昴「ああ、立派に親衛隊をつとめてるぞ。探してたんなら訪ねてみるといいよ。」

典「はい、今日はもうすぐにあがりなんで早速行ってみます。教えていただきありがとうございます。」

昴「気にするな。」

典「それでは失礼しますね。」

一礼すると奥に下がって行った。何にせよ会えて良かった良かった。

張角「むう、私達がいること忘れてな〜い？」

張宝「ちいの前で他の女の事考えるなんて!」

ええー、理不尽。

昴「2人ともごめんな？」

張角と張宝の頭を撫でてあげた。

張角・宝「・・・／＼」機嫌直してくれた・・・かな？さてと・・・

昴「俺はそろそろ行くな。もう行かないと次の邑まで間に合わないからな。」

張宝「次の邑？」

昴「ああ、客将としての期間が終わったからな。」

張梁「曹操様の臣下ではなかったのですか？」

昴「期間限定の客将だ。」

張角「そんな〜、せつかく彼氏にしようと思ってたのに〜。」

張宝「ちいだって狙ってたのよ！」

冗談なんだか本気なんだか。

昴「とりあえず勘定はここ置いとくから。」

張角「う〜、分かった。また一緒に食事しようね〜。」

張宝「あたし達の歌いつか聞きに来なさいよ。」

張梁「旅のご無事をお祈りします。」

昴「それじゃ、またな！」

店を出てそのまま街の外を出て新たな目的地へ移動を開始した。

かくして、曹操のところでの客将も終わり、また新たな旅が始まるのであった。

続く

第12話へ出発、新天地へへ（後書き）

ふう、とりあえず魏編終了です。拠点は難しいです。感想、アドバ
イスありましたらお願いします。それでは！

第13話 新たな出会い、麒麟児との共闘（前書き）

今回の出来はイマイチです。時間軸に矛盾等出るかもしれませんがそこはご都合主義ということと。それではどうぞ！

第13話 新たな出会い、麒麟児との共闘

華琳の元から旅立ち、3週間程がたった。俺は邑や街を転々としながら旅を続けている。とりあえず今は荊州に来ている。

昴「しかし、荊州の邑や街をまわってみたが、正直あまり治安は良いとは言えないな・・・。」

訪ねたいくつかの邑は貧困に喘いでいた。華琳が治めていた地方とは大違いだった。この国を治めているのは確か袁術だっけな？

昴「華琳と比べるのも酷な話か・・・ん？、あれは。」

遙か前方に大集団がいた。見たところ官軍や諸侯の軍ではないな。

昴「黄巾党の残党か・・・。」

いくら首魁の張角がいなくなったとはいっても根本的な問題が解決されていないから賊はいなくなるらない。相変わらず私利私欲による圧政が横行しているせいで民は苦しんでいる。それに耐えかねて賊に成り下がった者は今も出ている。

昴「あのまま何処かの邑が襲われたら厄介だな。」

奴らの目的は確実に略奪だ。ここで見逃したら面倒なことになる。この国の兵が来るまでまだ時間が掛かりそうだ。

昴「数は1万、けどやらなきゃならないな。」

決して楽ではないが、やれない数でもないな。

昴「行くか。」

俺は朝陽と夕暮引き抜き、賊に向かった。

孫策 side

策「はあ、全くもつ。」

私達はは今袁術の命令で黄巾党の残党を討伐しに来ている。あの袁術の命令を聞くのは癪だけど私達は今袁術の客将という立場だから仕方ない。

策「・・・妙ね。」

黄「どうかしましたか、策殿？」

策「そろそろ賊が見えてもいいはずなのに姿すら見えてこないわ。」

周「確かにそれは気になったが・・・。」

黄「しかし相手は賊じゃ、気に病む必要はないと思うが・・・」

策「そうなんだけどね。」

相手は賊。常識に当てはまらないことなんていくらでも考えられるけど・・・何か気にかかる。

周「何、偵察部隊もすぐに戻ってくる。そうすれば何が起こっているかわかるさ。」

策「それもそうね。」

しばらくすると偵察部隊が戻ってきた。

「申し上げます!」

黄「うむ。」

「前方4里ほど先にて賊が交戦中です!」

どういふこと?

黄「この辺りで動ける軍といえば袁術ぐらいなものだがのう。」

周「しかし袁術から討伐命令が出たのだ。それはないだろ。何処かの義勇軍でも来たのか・・・。」

「いえ、それが・・・。」

黄「何じゃ、申してみる。」

「賊と戦っているのはたった一騎です！」

黄「何じゃと!？」

周「馬鹿な、報告では数は約1万だぞ。」

「間違いありません。既に2千程が討ち取られております。」

へえー、面白そうね。

黄「化け物か、其奴は。」

私の勘が言ってるわ。そこに行くべきだと。私は馬を走らせ、その場所へ急いだ。

周「雪蓮!待ちなさい!」

黄「策殿!ええい、全く!」

後ろで2人が何か叫んでいたけど今はそれどころではないわ。少しでも早く行かなければ!今私の頭の中を占めていたのはそれだけだった。

昴side

昴「はあ！」

グシユ！ザク！ダダダッ！

「うぐっ！」

「がはっ！」

「ぎゃあ！」

俺は賊を突き、薙ぎ払い、氣弾で撃ち払っていく。戦い初め、既に3千は撃ち取っただろうか。相変わらず賊はうじゃうじゃ沸いてくる。

昴「まったく、次から次へと！」

賊はまだまだ向かってくる。

「死ねえ！！！」

賊が背後から襲ってきた。しかし、

「甘えーよ……………！？」

「グフッ！」

撃退しようとした瞬間賊の更に後ろから褐色肌のピンクの髪的女性がその賊を斬り捨てた。何だ、この人は？

「余所見してんじゃ・・・ぐわはあ！」

邪魔だ。

？「余計なお世話だったかしら？」

昴「とりあえず礼は言っておくよ。ありがとう。」

？「それにしても無茶をするわね。これだけの数を1人でやるうなんて。」

昴「お互い様だろ？・・・ところで、これからどうするんだ？すっかり賊に囲まれちゃったが。」

だいが蹴散らしたはいえ賊はまだまだ7千程いる。今完全に包囲されていた。

？「どうするも何も、1人残らず殺るだけでしょ？」

昴「・・・違いない。」

2人は背中合わせに並ぶ。

昴「背中任す。ぬかるなよ？」

？「ええ、あなたもね！」

互いが同時に動いた。

戦場は更に激化した。俺と褐色肌の女性前に次々と屍の山が築かれた。

昴「せい！」

?「はあ！」

グシュ！ザシュ！ザク！ズブツ！

「がはっ！」

「ギャハ！」

「ぎゃあ！」

、
5千近く討ち取り、徐々に賊に動揺が走り出す。それにしても……

昴「（この人強い。強さは春蘭や愛紗クラスか。……だが何より・
」

これ以上ないくらいに息が合う。実力がある者同士が共闘する場合はよつては足の引つ張り合いになることもある。だが今の俺達はまるで何年も共に戦っているかのように息が合うのだ。互いが互いの隙を埋め、互いが互いに高め合う。今の俺達は正にそれだ。

昴「さあて、もうひと頑張り・・・する必要もないか。」

ヒュヒュヒュヒュヒュン！

「グフッ！」

「うわぁ！」

矢の雨が賊に降り注いだ。

昴「どうやら到着したみたいだな・・・お姉さん、とりあえず下がるか？」

？「そうね。さすがに火の矢の雨にさらされるのごめんだわ。」

後方に第2矢、先端に火が灯された矢を構えた兵が立っていた。

昴「後は任せるか。とりあえずもうやることもないだろ。」

俺達は後方の援軍のところまで下がった。

戦いは俺と孫策（さつき教えてもらった、正直かなり驚いた。）が事前に半数近くを叩き潰したのと、火矢によって賊は大混乱を起こし、たちまち孫策の軍に討ち取られた（孫策は援軍と合流後、再び敵に突っ込んで行った）。結果、大した被害を出さずに勝利した。そして今、俺は孫策の本陣に招かれている。

孫「あなたのおかげで邑は救われたしこちらでも被害を少なく戦いを終わらすことができたわ。」

昴「礼には及ばないさ。」

策「代表してお礼をしたいから、私達の城まで来てもらえないかしら。」

ふむ、随分と律儀なんだな。ま、断るのはあれだし、ありがたく礼を受け取るか。

昴「構わないよ。」

策「そう言ってもらえると嬉しいわ。」

そう言うと言ひのある笑顔を浮かべた。ん？何だ？俺は孫策達に案内されるまま、孫策の城である荊州の南陽に向かった。

孫策 side

賊の討伐も終わり、御剣昂（さつき教えてもらった）と共に城へと帰還している。

策「（良かったわ、一緒に来てくれて。）」

先程共闘した時、面白いくらいに息が合った。何年も一緒に戦ってきたかのように。何より……、

策「（あれだけ人を斬って血を見たのにいつもの疼きが現れなかった。）」

私は血を見たり長い時間戦って興奮状態になると自分で自分を抑えられなくなる。でもさつきの戦いではそれは一切起こらなかった。それどころかもっと別の高揚感みたいなものが溢れてきた。

策「（きつと御剣昂が共にいたからね。私の勘も昂を逃がすなど言ってる。これはどんな手を使ってでも私達の所に留まってもらわなくちゃ）」

1人私は昂を留める方法を思案していた。

昴side

城に着き、孫策の館に招かれた。今日の前には孫策、周瑜、黄蓋がいる。

昴「（爽快だな。英雄達に合い見えるとはな。）」

ちよつと感動している。

周「改めて、賊の討伐に協力してくれた事、礼を言う。」

昴「改まらなくても構わないけどな。」

周「ところで、1つ尋ねたいのだが。」

昴「何だ？」

周「今巷で噂されている天の御遣いとは貴殿のことか？」

それか・・・。

昴「噂と言うのがどういうものか分からないが一応そうだ。」

周「ふむ、やはりか。」

黄「何と！」

策「へえー、やっぱりね。」

反応はいろいろだ。

黄「しかし何故荊州におつたのじゃ？最近では一ヶ所に留まっていたようだが？」

昂「ああ、一時曹操の客将をやっていたんだ、その後は見聞を広げる旅を続けていたんだ。」

周「なるほど。」

昂「荊州には一目会っておきたい人物がいたのと、・・・1つ気になる噂を耳にしてね。」

策「噂？」

昂「黄巾党の残党が荊州に集まっているという噂だ。」

周「確かに、今荊州に賊が集まってきている。・・・しかしこの地にかけてどうするつもりだったのだ？」

昂「とりあえず潰す・・・つもりだったんだけど。数が多すぎて諦めた。」

黄「無茶をするの。」

策「ふうん、それなら、私達と協力しない？」

1人じゃ無理だし、何より・・・この孫策という人物を見たいな。

昴「分かった、君達に協力するよ。しばらくの間、世話になる。」

策「決まりね。」

話はまとまった。

黄「一目見ておきたかった人物とは誰なんじゃ？」

昴「ああ、それは……。」

孫策の方を見て、

昴「江東の麒麟児、孫策伯符だ。」

策「……それは何故かしら？」

昴「黄巾党の争乱で名を上げた諸侯はいくつかいたがその中でも袁術の客将の孫策の名は結構国中に轟いていたから是非会って見たかったんだ。」

さすがに歴史に名を残す英傑だからですとは言えなかった。ま、嘘じゃないし。

孫「それで……あなたから見て私はどう見えた？」

昴「そうだな……一言で言うと王だ。大きな器を兼ね備えた王。孫策の元には更に人材が集まり大きな勢力になるだろうな。」

黄「まあ、当然じゃの。」

周「雪蓮ならば当然だ。」

策「天の御遣いの目に叶ったのなら光栄ね。」

昴「あくまでも俺個人の評価だけだな。」

策「そう・・それなら今度はこっちの話を聞いてもらおうかしら。」

昴「ああ。」

策「私達孫家がのしあがるには名と風評を上げる必要があるの。だから・・孫家にあなたの血を入れてちょうだい。」

・・・ん？何だつて？

昴「えつと・・つまりどういうことかな？」

策「つまり、孫家の人間とまぐわって子をなしてほしってことよ。」

昴「いやいや、冗談だろ？」

策「まさか 孫家に天の御遣いの血が混ざれば孫家は安泰だと思うの。だから、じゃんじゃんまぐわって 私の妹とかおすすめよ。胸もお尻もいい形だし、とつても・・。」

昴「いやいや、そんなこと言われてもだな・・。」

周「まあ雪蓮、そのことに関しては後でもいいだろ？」

周瑜さん、その発言からして反対ではないんですね。

策「とにかくこれから一緒に戦うわけだからあなたに私の真名を預けるわ。」

昴「いいのか？」

策「こつちは言い方を変えればあなたを利用するつもりだからせめてもの礼儀よ。」

昴「分かった。」

雪「私の真名は雪蓮よ。」

冥「雪蓮が預けるなら私も預けよう。私の真名は冥琳だ。よろしく頼む。」

祭「わしの真名は祭じゃ、世話になる。」

昴「雪蓮、冥琳、祭さん、しばらくの間世話になるよ。よろしく頼む。」

ということで、俺は雪蓮達と共に戦うことになった。

この昴と孫家の出会いがこの先の大きな運命を変えることになるのはこの時誰も気付いていなかった。

続
く

第13話 新たな出会い、麒麟児との共闘（後書き）

一応可能な限りのキャラとオリ主を出会わせたいのでこういう形になりました。しかし呉の面々と出会わせるために今回の形にしましたが、ちよつと強引過ぎたかな？とも思っている自分もいます。はあ、文才とアイデア欲しいな。感想、アドバイスありましたらよろしく願います。

第14話 孫家の宿将、熱き思いと心の慟哭（前書き）

この話から呉の拠点に入ります。魏よりも書くの難しいです。<<それではどうぞ！

第14話 孫家の宿将、熱き思いと心の慟哭

雪蓮達と協力することになってから数日たった。俺は一応雪蓮に仕える軍師という形になった。もちろん、飯のものである。雪蓮自身が客将だし、客将の客将だと何かややこしいのでこういう形になった。俺は早々に仕事を終えたので街に来ている。

昴「さすがに袁術のお膝元だけあって街は活気づいてるな。」

通りでは市が開かれ、商人達の声が響く。

昴「さて、何処に寄っていきうかな・・・ん？あれは・・・こんにちは、祭さん。」

一軒のカフェみたいところに祭さんを見つけた。

祭「なんじゃ、昴ではないか。どうしたのじゃ、こんなところで？」

昴「仕事が終わったので街へ散歩に・・・っていつかまだ日が高いのに酒ですか？」

祭さんの卓の上には空の器で溢れていた。

祭「これくらい、飲んだ内に入らぬ。それより、主も一緒にどうだ？」

真っ昼間から酒か・・・仕事終わったしいいか。

昴「なら一緒に一緒にさせてもらいますよ。」

祭「そうこなくてはな。ほれ、飲むがいい。」

俺は器を受け取り、酒を注いでもらうと、それを一気に飲み干した。

昴「ゴクゴクゴク・・・プハア〜！白乾児ばいかゝるですか。なかなかですね。

「

祭「主もこの酒のよさが分かるか。んぐんぐんぐ。」

言っや否や再び酒を飲み始めた。まだ飲むのか。どんだけウワバミなんだ。

昴「ゴクゴクゴク・・・プハア！しかし祭さん、仕事はいいんですか？確か今日は休みではないですよね？」

祭「何、仕事など酒を飲みながらしたところで、どうという事はあ
るまい。」

いやあるでしょ。

昴「はあ、知りませんよ。んぐんぐんぐ・・・。」

俺はしばらく祭さんと酒を楽しみながら過ごした。

祭「それでの、あの時の穏は痛快での……」

昴「へえー、そんなことが……、」

気が付けば結構長い時間飲んでいたようだ。それじゃ、そろそろ。

昴「俺はここで失礼させてもらいます。」

祭「なんじゃ、もう少しおればよいだろうに……んぐんぐんぐん……」

まだいきますか。

昴「所用を思い出したのでね。祭さんも早いとこ仕事に戻らないと冥琳に怒られますよ。」

祭「冥琳？なあに、あんなひよっこに何を言われようと気にせんわい。」

いやしないと。

祭「そもそも周家のご令嬢は、今でこそああやってエヘンと威張っておるが、昔は……、」

昴「あー分かりました分かりました。それでは行きますね。」

祭「おう、またな。」

昴「ああ、そうそう、1ついい忘れてたんですが。」

祭「?・・・なんじゃ?」

昴「さつきから後ろに冥琳がいますからね。」

祭「なんじゃと!」

あわてて後ろに振り返るとそこには・・・、

冥「・・・#」

祭「め、冥琳・・・いつからおったのだ!？」

冥「そうですね・・・そもそも周家のご令嬢は・・・の辺りですかね?」

祭「ぬうう。す、昴!」

昴「・・・(合掌)」

祭「この薄情者が!」

冥「では祭殿、場所を変えてゆっくりお話ししよう。」

冥琳は祭さんの腕をつかみ、引き摺っていった。

祭「離せ、離すのだ!」

まあ自業自得だしな。祭さんご冥福を祈ります。

チーン!

用事を済ませ、城の庭を歩いていると、

？「昂〜！」

ん？何処からか声が・・・上か？1本の木を見上げるとそこには酒器を持った雪蓮がいた。

雪「昂もこつちで一緒に飲みましょう」

はあ、孫家の人間はどれだけ酒が好きなんだ・・・。
もちろん政務を放り出して酒を飲んでいた雪蓮はこのあと冥琳に見
つかりこつてり叱られました。

翌日、日が昇りきったぐらいに起床し、政務に励んだ。華琳のところで
は武官の客将であったため、業務は軽い調練と警備隊の警邏、
後は他の将の補佐ぐらいだったが今は正式な文官扱いのため、仕事

はかなり多い。おかげで仕事が一段落付くのに昼過ぎまで掛かってしまった。

昴「腹減ったな。」

朝飯は食べたが昼飯は食べ損なってしまった。

昴「街で何か食いに行くかな・・・、それとも厨房行って何か作るか・・・。」

溜め息をつきながらとぼとぼ歩いていると・・・、

祭「昴ではないか、どうしたのじゃ？」

ん？あれは祭さんか・・・。

昴「いえ、昼飯がまだだったので何か食べに行こうかと。」

祭「なんじゃ、仕事をしていたのなら一度切り上げて済ましてしまえばよいだろうに。」

昴「まあ、そうなんですが・・・。」

仕事に夢中で忘れてたんだよな・・・。

祭「冥琳ではあるまいし、仕事ばかりにかまけてどうするのじゃ？」

昴「冥琳も好きなわけではないと思いますが・・・。」

祭さんはもう少しかまけましょう・・・言わないけどね。

祭「それなら厨房にでも行って……そうじゃのう。ついて参れ。」

昴「？」

祭「儂が何か作ってやるう。」

昴「……祭さんが？」

祭「なんじゃ、何か不満そうじゃのう？」

昴「いえ、そんなことは……是非お願いします。」

祭「素直にそう言えばいいのじゃ。ではついて参れ。」

ジューーーー！

祭「~~~~つ」

祭さんは鼻歌を歌いながら料理を作っていく。へえー、手際すごくいいな。

祭「主は好き嫌いはあるまいな？」

昴「何でも食いますよ。」

まあ春蘭が以前に作った料理は後の模擬戦思わずボコボコにしてしまつぐらいに破壊力があつたが。

祭「そうか、もう少して出来るから待つておね。」

着々と料理は出来上がっていく。いいにおいが厨房を包んでいく。

祭「意外か？」

昴「ん？」

祭「儂が料理を作ると皆意外そうな目で見るからのつ。」

昴「本音を言えば驚きました・・・でも料理をしてる時の祭さん、すごく絵になりますよ。」

祭「／／・・・年寄りをからかうでないわ！」

昴「俺は嘘は言いませんよ。」

俺は笑顔で祭さんに言つてみた。

祭「・・・どうやら本気で言つとるようじゃが、お主も存外女誑しよのつ。」

昴「そうですかねえ？」

祭「自覚無しか、まあ良い・・・ほれ、出来たぞ。」

目の前にご飯と青椒肉絲が並べられた。一人前にしては少し多いが。

昴「いただきます。」

祭「あつ。そうじゃ、ちょっと待て。」

昴「ん？どうしました？」

祭さんが箸で青椒肉絲を掴み、

祭「儂が食べさせてやるつ。」

昴「・・・あーんしなきゃ駄目ですか？」

祭「いらぬのか？仕方ないの。」

料理を片付けようとする。

昴「あゝ、待つてください、します。しますから。」

祭「最初からそうすれば良いのじゃ。ほれ、あーんせい。」

昴「あーん。モグモグ・・・！？美味しい！」

祭「そうじゃろつ？」

昴「次いいですか？あーん・・・。」

祭「なんじゃ、さっきまで嫌がっておったのに、ほれ。」

昴「あーん・・・パクっ！モグモグ・・・うん、美味しい！」

祭「喜んでくれたのなら何よりじゃ。」

そのまま料理がなくなるまであーんは続き、

昴「ご馳走様でした！」

祭「うむ！お粗末様じゃ。それにしてもお主は本当に美味しそうに食べるのう。」

昴「実際美味しかったですからね。」

祭「そう言ってもらえると僕も作った甲斐があると言つものじゃ。」

昴「それにしても、それだけ料理が上手くて面倒見がいいのに未婚なんてもつたいたいですね。」

祭「僕は孫家一筋で生きて来たからのう。もはやこんな行き遅れに貰い手なぞおらぬじゃろう。」

昴「そんな行き遅れなんて。祭さんは綺麗で、さつきも言いました。が料理は上手くて面倒見が良くて。十分魅力的な女性ですよ。」

祭「ノノ・・・随分と言うではないか。それならお主が貰ってくれるか？」

昴「そうしたいのはやまやまですが、俺にはもつたいたないし何より俺はいずれここを離れなければなりませんね。」

祭「・・・それだけか？」

昴「?・・・他に何かありますか？」

祭「ふん！後片付けは儂がしとくからお主はもう仕事に戻るが良い。」

昴「片付け手伝いますよ？」

祭「構わぬ。いいから早く戻らんか！」

昴「?・・・分かりました。それでは行きますね。ご馳走様でした。料理、本当に美味しかったです。」

俺は仕事に戻った。祭さん顔赤かったけど大丈夫かな？少し言い過ぎたかな？でも祭さん程の女性なら言われ慣れてるからだろうから問題ないか。さ、腹も膨れたし、仕事仕事。

さらに翌日、時は夜も更けた時間帯。

昴「頼まれた仕事の書簡ここに置いておくぞ冥琳。」

冥「・・・あの量を1日で終わらせたのか？」

昴「ま、気合いでな？」

冥「正直、明日中に終わらせてもらえば十分だったのだがな。内容も……的確で正確だな。」

昴「どうも。」

冥「すまなかつたな。今日はゆっくり休んでくれ。」

昴「あいよ、冥琳も程々にな？」

冥「分かっているぞ。」

昴「それじゃ、また明日な。」

冥「ああ。」

昴「うう、一日書簡とにらめっこは疲れたな。」

コキコキと肩を鳴らしながら廊下を歩いている。

昴「このあとどうするかな・・・そついや城の近くの森に小川が流れてるんだっけな。涼みにも行くか。」

俺は厨房から酒と器を持ち、森に向かった。

昴「んゝ、聞いた話じゃこの辺なんだけどな。」

森を歩いているがなかなか目的の場所は見つからない。

昴「どこかな・・・ん？」

歩いていると川のせせらぎが耳に届いた。

昴「お、あそこだな・・・あれ？」

ふと見るとそこには既に先客がいた。

昴「祭さん？」

そこには、祭さんが1人酒を飲んでいた。その姿はとても絵になるのだが、祭さんにはいつもの豪快さはなく、とても儂げであった。一瞬声を掛ける事を躊躇っていると、

祭「んぐんぐんぐ・・・ん？なんじゃ、昴ではないか、こんなとこ

るにどうしたのじゃ？」

昴「仕事が終わったので酒を持って涼みに来たのですが……お邪魔でしたか？」

祭「構わぬ、1人酒も飽きていたところじゃ。」

昴「では失礼して……。」

祭さんの腰掛けていている岩の隣に座り、持ってきた酒を器に注いだ。

昴「ゴクゴクゴク……。」

祭「んぐんぐんぐ……。」

無言で2人供飲んでいる。

昴「それで、」

祭「ん？」

昴「何故このようなところで1人酒を？」

祭「似合わぬか？」

昴「いえ、どちらかと言うと賑やかな所で飲む方が祭さんらしいなつと。」

祭「儂とて1人静かに飲みたくなるときもあるわ。」

昴「なるほど、確かに。」

再び無言で飲み始めた。響くのは酒を注ぐ音と川のせせらぎだけである。

祭「かつてな、」

昴「？」

祭「かつてこの地は我ら孫家が治めていた。」

昴「……。」

俺は無言で耳を傾ける。

祭「治めていたのは策殿母君である孫文台殿じゃ。」

昴「そう聞いています。」

祭「堅殿とは旧知の仲でのう。小さな勢力頃から共におった。海賊征伐や反乱軍の制圧で名をあげ、この地を治めるに至った。」

昴「すごい人なんですな。」

祭「うむ、堅殿は強かった。策殿もいずれ越えて行くじゃろうが堅殿は今の策殿以上じゃった。」

昴「今の雪蓮以上ですか？是非とも手合わせ願いたかったですね。」

祭「堅殿とは表向きの関係は主従じゃがひとたび公務を外れれば一人の友と友じゃった。よくこうして酒を酌み交わしたもんじゃ。」

言つなり酒を一杯煽つた。

祭「当時、堅殿がどうにかなるとは考えられなかった。堅殿はそれほどまでの豪傑じゃつたからのう。策殿も冥琳も同じように考えておつた。劉表との一戦戦況は我等が僅かに劣勢であつた。そのため堅殿自らが先陣を掛け、兵達を鼓舞したのじゃ。しかし堅殿が先陣で孤立したところに劉表の伏兵に会い、堅殿はその伏兵に矢を射かけられ、帰らぬ身となつた。」

昴「……。」

祭「やがて我等は堅殿を失い勢いをなくし、それまで堅殿についていた豪族は掌を返すように我等を裏切つた。徐々に追い詰められ、後堅殿の後を継いだ策殿も官位を持っておらぬことも災いして我等は国を失い袁術の客将となるしかなかった。」

俺は相槌だけを打ち話を聞く。

祭「今でも、儂がもつとしっかりしておつたら、儂にもつと力があればこのようなことにはならなかつたと思うときがある。いまさら言つても後の祭じゃがな。」

祭さんは自嘲気味に笑つた。

祭「儂は堅殿を守れなかつた。じゃから儂はこの地を袁術から取り戻し、堅殿の悲願が成るまで死んでも死にきれぬ。堅殿に変わり我等の大願を果たすまで、次世代の策殿や冥琳。さらにその子達に全てを受け継ぐまではのう。」

言つと酒を一杯煽つた。

祭「まあ、年老いた酔っぱらいの戯言じゃ。」

昴「……自分にもつと力があつたら……あのときこうしておけば……考えても不毛なことなのに考えずにはいられない。」

祭「昴？」

昴「だから人は過去に想いを馳せる。」

祭「……主にも同じ想いがあるのか？」

昴「さて、どうだったかな？俺にとって過去はそこから学び、それを教訓とし、それを現在と未来に生かす。それだけですよ。」

俺は器の酒を一気に飲み干した。

祭「昴……。」

昴「過去なんて……振り返つても、その時の自分の無能を嫌悪して、ただありもしない『もしも』を考えてしまうだけ……えっ？」

唐突に祭さんが俺を胸に抱いた。

祭「もうよい。これ以上何も言つな。」

昴「ははっ、別に俺は気にしてなんて……。」

祭「じゃったら何故涙を流しておる。」

昴「えっ？」

目元に手を当てると一筋の涙が伝っていた。

昴「あれ、何で涙なんか……もう昔のことなのに……とっくに過ぎ去ったことなのに……」

涙が止まらない。忘れようとしていた、幸せだった思い出が頭の中を反芻する。

祭「儂も同じじゃ。ありもしない『もしも』を考え、幸せだった思い出と重ねて都合のいい妄想に浸っていた。」

昴「祭……さん……。」

祭「ここには満月と儂しかおらぬ。今宵は思う存分泣くがよい。」

昴「すい……ません。」

俺はしばらく祭さんの胸で静かに泣いた。昔の思い出を浸りながら。

昴「うっ／＼」

いかん、めっちゃ恥ずかしいノ

祭「はっはっは！気にするでないわ！」

パンパンと背中を叩きながら祭さんは笑った。

昴「・・・ここだけの話にして下さいよ？」

祭「分かっておる。人の秘め事をペラペラ喋るほど下衆ではないわ。」

はあ、今の出来事は完全な黒歴史だ。

祭「あまり気にするでない、ほれ。」

昴「あつ。」

俺は祭さんの膝の上に寝かされた。

祭「笑ってしまった詫びじゃ。今宵は僕の膝の上で眠るがよい。」

昴「それだと祭さんが・・・っていかかなり恥ずかしいんですが・

。。。」

祭「今夜は蒸すからのう。ここなら涼しいであろうっ？」

昴「確かにそうですけど。。。」

祭「細かい事は気にするな。ほれ、さっさと眠らぬか。」

昴「・・・分かりました。」

その言葉を聞いて俺は目を閉じた。今日の政務の疲労と酒の力もあり、俺は直ぐに夢の世界に旅立った。

祭 Side

祭「あつという間に寝てしまったわ。」

あれだけ文句を言っておったのに目を閉じると早々に眠りに落ちた。

祭「天の御遣いと呼ばれ、他者を圧倒する武と知を兼ね備えておつても心は純粋な人間ということか。」

昴は強さの中にひどく脆い部分がある。むしろ欠けておるのか？

祭「御剣・・・昴・・・。」

前髪を一撫でして、

祭「策殿はご自身か蓮華殿に昴との世継ぎの子を成そうと考えてお

るが、儂も考えてみようかの。」

儂の忘れかけていた女を疼かせるこやつを、人一倍大人で人一倍子供でもあるこやつを、愛してみようかの？

祭「策殿の言ではないが、みすみす逃すには大き過ぎる魚じゃ。」

儂は日が昇るまで昴の寝顔見つめ続けていた。胸に宿った想いを馳せて……。

続く

第14話 孫家の宿将、熱き思いと心の慟哭（後書き）

こんな感じでしょうか？祭らしくなかつたかもです。次回は拠点から外れます。予定としてもオリキャラも出す予定です。感想、アドバイスお願いします（T-T）

それではまた！

第15話 孫呉の将集結、荊州掃討前哨戦（前書き）

投稿間隔が空いてしまった。挙げ句、賊の掃討戦まで行けなかった。今の時期は忙しくて辛いな・・・それではどうぞ！

第15話 孫呉の将集結、荊州掃討前哨戦

雪蓮と手を組むことになってから幾ばくかたった。いつものように政務に励んでいると、雪蓮から城の広場に集まるように言われたので行ってみるとそこには冥琳と祭さんと陸遜がいた。

昴「雪蓮はまだ来てないみたいですね。」

冥「雪蓮なら袁術に呼ばれている。用件は……言うまでもありませんか？」

昴「このあたりに集結している賊か。」

陸「そうですね。」

昴「今さらな気がするが。」

祭「所詮は袁術だしのう？」

ひどい言われようだな。まだ1回も会ったことないけど。

昴「そういえば陸遜と顔合わせするのはこれが初めてだな。」

陸「そういえばそうですね。」

お互い間が悪くてまだ雪蓮達に名前を聞かされたぐらいだな。

昴「なら改めて、俺は姓は御剣、名は昴だ。呼ぶときは昴でいい、よろしくな。」

穩「ご丁寧にありがとうございます。私は姓は陸、名は遜、字は伯言、真名は穩です。」

昴「真名までいいのか？」

穩「雪蓮様達も預けているようですし、お噂は聞いています。是非穩とお呼びください。」

昴「分かった。では穩、よろしく頼む。」

穩「はい。よろしくです。昴さんは天の御遣いということと私達にはない知識をお持ちみたいですね？」

昴「まあ、いろいろなところに行ったりしてるからな。」

穩「お時間ありましたら是非一度お話をお聞かせください。」

昴「ああ、構わないよ。」

穩「それでは楽しみに待ってます。」

軍師だけあってやっぱり新しい知識というのは興味あるんだろうな・・・ん？

昴「冥琳？祭さん？どうしたんだ？」

冥「・・・いや、何でもない。」

祭「気にするでない。」

2人と俺から目を背けている。何だ？まあいいか。

冥「雪蓮が戻る前に話を進めておく。袁術からの指令は十中八九荊州に集まっている賊の討伐だろう。」

祭「それしか考えられんしのう。」

冥「それでその賊だが、現在隊を2つに分けている。一方は空き城を占拠してそこを根城にしている。数はおよそ2万といったところだ。率いてる将は波才という將軍くずれだ。もう一方は空き城からかなり離れた場所に陣を構えているらしい。数は1万5千ほど。率いてる将は程遠志だ。」

祭「何故2隊に離れておるのじゃ？」

冥「集めた情報によると空き城にこれ以上兵を置くことが出来ないのが1つ、もう1つは率いているそれぞれの将の仲が悪いらしい。」

昴「下らない。所詮は賊ということか。だがわざわざ2つに分けているのは好都合だな。」

穩「確かにそうですが、それでも兵力差はあります。」

昴「ま、それもそうだ。」

冥「こちらの兵力は5千、無理をすれば7千ぐらいは集められるだろうが現状はこれが手一杯だ。」

昴「袁術から兵や物資を出す可能性は？」冥「あまり期待しないほうがいいだろうな。仮に出すといっても意見を変えられる可能性も

ある。」

面倒だな。

昴「兵力を増やすか、せめてもう少し兵を率えられる将がいれば何とかなるんだがな。討伐出来ないこともないがそれではこっちにもそれなりに被害がでちまう。さてどうするか・・・。」

どのように討伐するか策を練っていると・・・、

雪「ああくもうムカつく！#」

怒気を纏った雪蓮が戻ってきた。

冥「おかえり雪蓮、それで、袁術は何と？」

雪「・・・聞かなくても分かるでしょ？」

冥「やはりか。」

やれやれと言った感じだな。

祭「それで、策殿はどうするおつもりじゃ？」

雪「とりあえず皆を呼び寄せてから考えるわ。」

冥「皆？ということは、旧臣を集めることに関して袁術が許可を出したのか。」

雪「ええ。馬鹿よね、ホント。」

昴「あり得ないな。．．．だけどこれである程度は問題が解決されるな。」

冥「ああ、軍もこれで増強できる。」

穩「それでは、早速興霸ちゃんに周泰ちゃんに凌統ちゃん、孫権様に尚香様に使者を出しますね。」

冥「頼む。．．．それで、出陣はいつにする。」

雪「全ての準備が整うまで出陣しないわ。．．．袁術にも伝えてあるから、しばらくは何も言っておかないでしょう。」

穩「それは有り難いですねえ。では私は使者の選定と兵站の準備に取りかかりますね。」

祭「策殿と公謹と昴には軍略の決定を頼もつかの。」

雪「了解。部隊の合流は行軍の途中で行うから、そのつもりで居なさい。」

冥「分かったわ。ならば軍の編成が終わり次第、出陣しましょう。」

昴「了解。」

さてと、忙しくなるな。

雪「いよいよ独立に向けて動き出せる。皆、私に力を貸してちょうだい。」

冥「当然だ。」

祭「うむ。」

穩「はい」

昴「ま、今は君の仲間でもあるから、それまでは力の限り協力するよ。」

これを号令に各々が動き出した。

それから10日ほどがたち、出陣準備が整い、黄巾党の残党との決戦が始まるうとしていた。そして今、俺達は進軍中である。

雪「穩。蓮華達はいつ合流するって？」

穩「兵をまとめ、もうまもなく合流できると思います。」

雪「そう。久しぶりに皆と戦うことができるわね。」

祭「じゃがそれでも兵力差は否めぬがのう。」

昴「率いている将とその数、それに兵の質はこちらの方が上だ。作

戦次第では完勝も可能だろ。・・・そういや、これから雪蓮の妹・孫権と孫尚香だっけ？という人なんだ？」

雪「そうね、仲謀はちょっと真面目でカタブツっぽいところもあるけど、とっても良いよ。可愛いし、おっぱいも大きいし、お尻の形も最高だし。」

真面目でカタブツねえ、後半はとりあえずどうでもいいが・・・。

雪「もう1人は尚香と言ってね。弓腰姫とか呼ばれるぐらいおてんばだけど、可愛い妹ちゃんよ。」

昴「なるほど。」

雪「きつと昴のこと、気に入ると思うわ。尚香については先に御愁傷様って言うておくわね。」

昴「？・・・どういうことだ？」

冥「多少、イタズラ好きでな。それに孫呉の中では1番女らしい方だ。・・・喰われんように気をつけるんだな。」

昴「おいおい・・・。」

雪「まあ将来的には2人の間に子を貰わないと駄目なんだから、気にしたって意味ないわよ。」

昴「いやだから俺はそういつつもりはないっての。」

どこまで本気なんだか。

話をしていると、

穩「後方に砂塵あり、です。どうやら蓮華様達がやってきたみたいですよ。」

冥「さすが蓮華様だ。蒼天中央に日輪が至る刻に・・という合流時間をつかりと守ってくれているな。」

雪「そういう融通の効かなさが、心配ではあるんだけどねえ。」

昴「真面目だねえ。」

雪「カタブツとも言い換えられるわよ?」

昴「悪いことじゃないだろ?」

祭「まあ色々言い方はあるじゃろうが、孫家の人間として頑張っておられる御方じゃよ。」

昴「ふん。」

孫権に孫尚香。どんな人物なのか楽しみだな。

孫権 side

権「ふう。」

甘「どうかされましたか？」

権「限りなく続く大地。忘れていたから、少し嬉しくて。」

甘「軟禁状態となつて早2年。まさか袁術公認で出陣出来るようになるとは思いませんでしたね。」

権「そうね、袁術が馬鹿で良かったわ。」

甘「御意。」

権「でも、愚かだったお陰で姉様と合流出来る。いよいよ孫呉独立に向けての戦いが始まるのね。」

甘「はい。もうまもなく雪蓮様に合流出来るでしょう。そこからは正念場です。」

権「そうね。心して掛からないと。・・姉様、お元気がしらね。」

甘「雪蓮様のことです。必ずやお元気でいらっしやることでしょう。」

権「冥琳に迷惑を掛けっぱなしでしょうけどね。」

甘「その自由闊達さこそ、雪蓮様です。」

権「ふふっ、そうね。でも1つ気になるのが、手紙にあった天の御遣いとはいったい何者なのかしら？確か今共闘していると書いてあつたけど・・・」

甘「天の御遣いについては私にも噂が聞き及んでおります。たしか単身で数多の賊を討伐しているという噂です。」

権「私もそれは聞いたことがあるわ。だけど共闘するなんて、私はあまりそういうのは良くないと思うわ。」

甘「御意。ただ周瑜殿や黄蓋殿がお許しになつていいるからには何か事情があるのでしょうか。」

権「そうかもしれないけど・・・でも1番気にかかるのが、手紙の最後の方に書いてあつた『いずれあなたの夫が義兄になるかもしれない男だから仲良くしなさい。』っていうのが気がかりだわ。」

甘「・・・雪蓮様は御自身か蓮華様に嫁がせるおつもりなのでしょうか？」

権「冗談ではないわ！私は絶対にそんなの認めないわ！」

甘「とにかくお会いになれば分かることですので・・・蓮華様、旗が見えてまいりました。雪蓮様の旗です。」

権「分かつたわ、すぐに準備をお願い。」

甘「御意。」

言うつとすぐさま思春は準備を始めた。
天の御遣い。あなたがどのような人物が見定める。もしくだらない
人物ならその場で頸をはねるわ！

昴side

砂塵が徐々に近づき、やがて孫呉の牙門旗が俺達の前で止まった。
先頭を走っていた人影がこちらへやってきた。

権「お姉様！」

尚「おつねえさまー！ー！」

権「お久しぶりです！お元気でしたか！？」

雪「もちろん、こちらは変わりないわ。蓮華、シャオ、あなた達も
元気そうね。」

権「はい、この瞬間を彼方より待ち望んでおりました！」

尚「もちろん 毎日水浴びしたり街で遊んだり。楽しかったよー
？」

雪「ふふっ、相変わらずね。」

久しぶりの再会でお互いに楽しそうに言葉を交わしている。

昴「あれが孫権と孫尚香か・・・。」

冥「ああ。雪蓮の妹にして孫呉の後継者だ。」

昴「孫権は雪蓮とは対称的だな。」

冥「とても真面目な御方だ。器で言えば、おそらく雪蓮よりも大きいだろう。」

昴「なるほど。」

確かにそんな印象が受けられる。

祭「英雄に相応しい器と能力を持っておられる。あとは経験だけと
いったところかの。」

穩「皆に愛されてる、素晴らしい御方ですよ。」

昴「へえー。」

雪蓮との会話を聞く限り、真面目な印象が受けられる・・・おっ、
孫権がこっちに来たな。

権「貴様が天の遣いと言われている男か。」
さっきとは違って変わった態度だな。

昴「ま、一応そういうことになってる。」

権「・・・腕は立つみたいだけど、何が目的でお姉様に近づいた？」

昴「お互いの利害が一致したから共闘している。荊州に集まった賊を何とかしたいってね。」

権「荊州で何が起ころうと貴様には関係ないのではないか？」

昴「異なることを言うな？・・・孫権、君は自分に関係なければ守らないのか？自分の周りさえ良ければそれで満足か？」

権「そのようなことがあるか！私は貴様が信用するに足らんと断言しているのだ。」

昴「経験不足故に狭量だな。目の前の人物と言葉を交わしてその人となりを掴めないようじゃ將止まり、王にはなれないぜ？」

権「貴様！私を愚弄するか！」

孫権が腰の剣に手を掛ける。

冥「お待ちください蓮華様。確かにこやつは素性が知れませんが、今まで行動をされていて怪しい点などまるで無く。またその武力と知略は他の追隨を許さない程の能力を有しております。共に並び立てば必ずや孫家に繁栄もたらす存在でしょう。」

権「・・・公謹がそういうのならはそうなのでしょうが、私はまだ信用することは出来ないわ。」

それを言い残すと孫権は立ち去ってしまった。

昴「やれやれ、若いというか何というか・・・」

冥「昴よ、あまり蓮華様をからかわないでくれ。」

昴「悪い悪い。大器を見るとついな。・・・しかし、今は経験不足故に柔軟性には欠けそうだが・・・ふふっ、この先に期待って感じたな。」

祭「お主が認めたのなら問題はあるまい？」

昴「俺はあくまでも素質を見たに過ぎない。それを開花させるも埋もれさせるも孫権次第さ。」

冥「蓮華様なら心配は無用だ。」

昴「なるほどね。」

信頼されてるんだな・・・もう1人こっちに来たな。

尚「おねえちゃん相変わらずねえ・・・ねえねえ、あなたが天の御遣い？」

昴「ああ、そうだよ。」

尚「ふーん・・・二ヒツ、えい！」

昴「おっ？」

突然孫尚香が俺に飛び付いた。あわてて俺は受け止める。

尚「・・・(ジ〜)」

孫尚香は俺の顔の近くで顔を覗きこむ。

昴「どうした？」

尚「へえー、顔も髪もすごく綺麗なのね。」

昴「ど、どうも。」

何か誉められたな。

小「うん！シャオ、あなたの事気に入った！私の名前は尚香。真名は小蓮っていうの。シャオって呼んでね。」

昴「真名までいいのか？」

小「シャオあなたの事すごく気に入ったし、それにそのうちシャオの旦那様になるんでしょ？シャオは全然構わないよー。」

昴「その件はともかく、俺は御剣昴だ。よろしくな。」

小「ん よろしくしてあげるー」

俺はシャオを地面に下ろす。なるほど、冥琳の言葉の意味がよく分かった。すると先程立ち去った孫権と他に3人が雪蓮に連れられてやってきた。

昴「よう雪蓮、どうした？」

雪蓮に尋ねると、

権「貴様、何故姉様の真名を口にする！」

はあく、孫権が突っ掛かってきた。

昴「んなもん預けてもらったからに決まってんだろ？孫権言えどそこにとやかく言われる筋合いはないぞ？」

権「姉様、本当なのですか!?!」

雪「本当よ。ちなみに私だけじゃなくて、冥琳と祭、それに穩も許してるわよ。」

権「なっ!」

甘「……腕は立つようですが……。」

泰「雪蓮様が真名をお許しになる人物なのでしょうか？」

凌「……。」

雪「そう言わないの。昴はあなた達の夫になるかもしれない男なんだから」

権・甘・泰「ええっ!?!」

凌「……!?!」

おいおい。

泰「あ、あの、どういことでしょうか？」

雪「昴は今この国で大きく知れわたってる。天の御遣いなの。そんな貴種の血を孫呉に入れることが出来たら、大きな力になるでしょう？」

冥「少なくとも、孫呉に天の遣いの血を引く人間がいる、という評判に繋がるだろうな。」

いや、そんなこと言われてもな・・・。

雪「そういうこと。昴と共闘する際に交わした約束事の1つよ。」

昴「いやいや約束してないし。」

権「な、何たる浅慮！お姉様は私たちの意志を無視するおつもりですか！」

雪「とは言っても強制はしないわ。あなた達が昴を認めたのならそうするっていう話よ。」

権「そう・・・ですか。」

雪「それに、いざという時は私が昴の子を成すつもりだしね。」

権「お姉様！」

雪蓮はどこまで本気なんだか・・・。

冥「あくまでもそういつことだ。興覇、幼平、公績。3人とも良いな。」

甘「・・・はあ。」

泰「は、はい！」

凌「・・・。」

祭「安心せい、昴はなかなか骨のある奴じゃからのう。」

祭さんが俺をフォローしてくれている。それでも孫権は、

権「ふん。」

不満そうだ。そりゃそうだろ。

雪「とにかく皆昴に真名を預けなさい。」

明「は、はい！あの、姓は周、名は泰、字は幼平、真名は明命！昴様、よろしくお願いします！」

昴「俺は御剣昴だ、よろしくな？」

明「はいっ！」

元気な子だな。それにこの子の得物、俺の村雨に似てるな。

思「・・・我が名は甘寧、字は興覇。・・・王の命令による真名を教え

よう。思春という。」

昴「よろしくな。とりあえずその物騒な殺気をしまっけてくれると助かる。」

思「ふっ、やはり腕は立つな。だがよろしくするかどうかは孫権様次第だ。」

そついうと思春は孫権の後ろに下がった。身のこなしと得物からして速さを生かして戦うタイプか。

そして最後はショートカットの拳法着をきた人物だ。

凌「……。」

冥「公績、どうした？」

凌「……気に入らねえ。」

雪「ん？」

凌「気に入らねえんだよ。いくら大将の命令でもはいそうですかと真名は教える気はねえ。」

祭「これ、公績！」

凌「へっ！」

はあ、また癖のある……。

昴「ならどつすれば認める？」

凌「そつだな・・俺と一騎討ちをしる！俺に勝てば認めてやる！」

昴「って言ってるが？」

俺は雪蓮の方を見る。

雪「・・・良いわね。公績がどれほどになったか見ておきたいし、それに・・・昴の実力も気になるしね。」

あつさり許可がおりたな。

凌「そんなじゃ、早速始めようぜ！」

昴「ああ。」

俺達は雪蓮達から少し離れた位置で対峙する。

雪「審判は私がするわ。勝負は決着が着いたら終わりにするわ。」

凌「がっかりさせないでくれよ、御遣い！」

昴「期待には答えるよ。」

凌統が構える。見たところ得物は見えない。

昴「（暗器使いか？そんな感じはしないな。なら凧と同じ拳法家か？）」

先程祭さんに聞いたら凌統の実力は雪蓮の次に強いらしい。まあ仕掛けて見れば分かるか・俺は朝陽と夕暮を抜く。

雪「それでは・・始め！」

空に上げた手が下ろされた。

凌「おりゃあ！」

先に仕掛けたのは凌統。右拳を俺に振り抜く。

昴「ふつ。」

俺は左に避ける。

凌「甘え！」

凌統は反動を利用して左足で俺に一撃を見舞う。俺はそれをスウエーで避け、そのまま朝陽を降り降ろした。体勢が崩れているため、凌統は避けられない。

入る。

そう思った瞬間、凌統が左腕で朝陽を受けた。

ガキン！

昴「!?!」

朝陽を当てた感触は皮膚でもなく鉄そのものだった。

昴「（腕を氣で硬化させたわけではない。これは・・・っ!?!）」

すると凌統が俺の懐に飛び込み、そして、

ヒュンヒュンヒュン

手元で何かを回し、そして。

凌「はあ!」

俺に振り上げた。

昴「ちい!」

俺は先程以上に後方に身体を反らし、3回バク宙を繰り返し、距離をとる。

そうか、凌統の得物は、

トンファー

トンファーとは攻防一体の戦いが出来る武器で、扱いは難しいが熟練すればかなりの代物になる武器だ。

昴「（トンファー、話には聞いたことがあるが相對するのは初めてだな。）」

凌統はステップを踏みながらトンファーを回している。

凌「やるじゃねえか。だがなまだまだこれからだぜ！」

凌統が再び距離を詰めてくる。打つ、突く、払う、そして薙ぎ払う、そこに足技も加わるため、相手ペースに嫌でも巻き込まれる。防戦一方のまま時間が過ぎていく。

凌「どうしたどうした！手を出さねえのか！？それとも出せねえのか！？あまり俺をがっかりさせんなよ！」

依然として勢いを落とさずにこちらへ向かってくる。

昴「（だいぶ掴めてきたな。）」

凌「おらあー！」

凌統がトンファーを突いてくる。

ギン！

凌「何！？」

俺はトンファーの突きを夕暮の剣先で押さえた。

昴「初めて相対する得物だから少し戸惑ったが、もう慣れたし間合
いも掴んだ。第2幕、明けさせてもらっぞ。」

俺はトンファーを押さえ込みながら凌統に告げた。

凌統 side

トンファーと双剣の一本との鏢迫り合いは未だに続いている。

凌「（もう慣れたただと？馬鹿な、大将ですら俺の得物に慣れるのにかなりの時間がかかったんだ。ハツタリに決まってる！）」

剣を払いのけ、もう一本のトンファーで一撃を放つ。

凌「はっ！」

ガキン！

剣で防がれる。

凌「まだまだ！」

波状攻撃を御遣いに浴びせる。

ヒュン、ヒュン、ガキン！ヒュン、ガキン！

先程まで大きく避けていた時とは違い。必要最低限の無駄のない動

きで避けられる。

凌「（ちい！ホントにこの短時間で間合いを掴みやがったのか！だがそれならこれはどうだ！）」

一度距離を取り、一直線に突っ込む。

凌「はあ！」

渾身の突きを浴びせる。

ガキン！

やはり剣先で防がれるが予想の範囲内だ、本命はこつちだ！

トンファーが剣先に当たると同時に半身になってそのままの横向きで一気に懐に飛び込んだ。

凌「いただきだぜ！」

手でトンファーを回し、そのまま一撃を見舞う。

ギイン！

御遣いは慌ててもう一方の剣で防ぐがその剣を弾き飛ばされてしまう。勝負をかけるならここだ！ここを勝機と見た俺は一気に勝負をかけた。相手は剣を一本飛ばされているのだ。勝機はこつちにある。だから気付かなかった。俺が剣を弾き飛ばした時。御遣いの表情は驚愕ではなく、笑みを浮かべていたことに。防戦一方で防ぐことに必死になっている御遣い。勝負あった。止めに向かった。

凌「終わりだー！」

俺はありつただけの力を込めて御遣いに一撃を振るつた。しかし右手の一撃は剣で弾かれ、左の一撃は空いた手で払われた。

凌「ちい！まだまだ・・・！？」

よく見ると、左の一撃を払った直後、その手は硬く握られ、拳を構えていた。

凌「（ヤバい！）」

慌てて両腕を胸の前で十字を組み、攻撃に備える。

ドン！

凌「ぐうっ！」

防いだものの衝撃までは殺すことが出来ず、後方へ飛ばされる。慌てて体勢を整える。

凌「ちい！仕切り直しだ！」

再び距離を詰めようとしたその時、

昴「動くな！死にたくないならじっとしている！」

凌「（！？・・・こいつ、何を言って・・・）」

その刹那、

ヒュン、ヒュン、ヒュン、ザク！

俺の髪の毛1本が何かを掠めた。

凌「何が・・・っ!？」

髪の毛を掠めたものの正体、それは先程弾き飛ばした双剣の片割れだった。

昴「危なかったな、後一步前にいたらあの世行きだ。」

その顔は笑っていた。

凌「(！？・・・こいつまさかこれを狙ったのか!?だからあの時あつさり剣を飛ばされ、いや違う。剣を上空に飛ばしたんだ。)」

その時には気付かず、今になって分かる違和感。その答えがこれだ。

凌「(剣を払われたフリをして剣の落下地点に相手を誘導する。こんなの仮にただの賊や雑兵にすら難しい。それを俺相手に・・・)」

慣れない得物相手の適応力、相手の位置を制御する立ち振舞い・・・格が違う。

昴「さて、続けるか？」

御遣いが地面に刺さった剣を抜き、構える。

凌「・・・もういい、俺の負けだ。」

俺は敗北を宣言した。

昴 side

凌「・・・もういい、俺の負けだ。」

凌統は敗北を宣言した。へえー、乱暴な言動とは裏腹に相手を推し量る能力にも長けてるんだな。しかし・・・苦労したな。トンファーがあそこまで厄介だとはな。星や愛紗や鈴々、春蘭や秋蘭や凧でも初見ならやられるんじゃないのか？

昴「俺の事、少しは認めてくれたか？」

凌「・・・。」

凌統はうつむいたまま黙っている。怪我をさせたつもりはないんだが・・・」

昴「凌統、何処か怪我でも・・・。」

体調の有無を尋ねようとすると、

凌「・・・すごい。」

昴「えっ？」

凌「すごいぜ御遣い！ここまで強え奴はあんたが初めてだ！」

昴「おおう？」

急に目をキラキラさせて俺に詰め寄った。

凌「噂は聞いてたけどよ、実力は噂以上だ！こんな力の差を見せられたのは初めてだ！」

昴「それは何よりだ。」

凌「くううー！ドキドキがまだ治まらないぜ！」

凌統はおおはしゃぎをしている。

昴「それで、俺の事は少しは認めてくれたか？」

楓「当然だぜ！俺の姓は凌、名は統、字は公績、真名は楓かえでってんだ、よろしくな！」

昴「俺は御剣昴だ。楓、よろしく頼む。」

楓「よろしくするぜ昴の旦那！」

旦那ね、まあいいか。

楓「・・・あのよ。」

昴「ん？」

楓「その・・・な、子供についてはもう少し覚悟を決めてからにしてくれよな？その・・・経験ねえからよ・・・。」

はあ、そのことか。

昴「心配するな、俺は無理矢理する趣味はないしもともとそのつもりはない。子供は将来の夫に授けてもらうんだ。」

楓「いや、別に昴の旦那で構わないんだ。どのみち俺は相手なんて現れないだろうしな。」

昴「ばーか。」

俺は軽く楓の頭を小突く。

楓「あた！」

昴「楓は自分の思っている以上に可愛い女の子だぜ？武と同じくらい女を磨けば相手なんざいくらでも出てくるぜ？」

楓「／＼・・・昴の旦那！何言っつてやがる！」

昴「もうちょい自分を磨け、なっ？」

楓「／＼・・・ああ、俺戦の準備してくる！」

言つと猛スピードで駆けていった。速いな。

祭「やれやれ、まさかあの楓をのう？」

冥「孫家の将来は安泰そうだな。」

穩「ですね。」

昴「何の話だ？」

雪「気にしないで。こつちの話だから。．．それじゃあ、戦の軍議を始めるわ。将は皆私の天幕に集まりなさい。」

「」「」「御意！」「」「」

賊討伐の為の軍議が始まった。

孫呉の集結し、孫家にとっての第一歩の戦が始まるうとしていた。

続く

第15話〈孫呉の将集結、荊州掃討前哨戦〉（後書き）

今回はここまでです。調子に乗って新キャラ出しちゃいました。蛇足にならないように頑張ります。気が付けばPVが7万を突破しました。この小説を覗いていただきありがとうございます。感想、アドバイスも随時お待ちしております。それではまた！

第16話、荊州掃討戦、完全無欠の単騎駆け（前書き）

ついに賊との決戦です。正直にわか兵法です。自分の頭ではここら
が限界でした。矛盾等おかしな点もあるかと思いますが、ご都合主
義ということでご容赦を。それではどうぞ！

第16話 荆州掃討戦、完全無欠の単騎駆け

楓との模擬戦も終わり、現在天幕にて軍議が行われている。

冥「さて、賊共はこの先3里程のところに陣を構えている。数は約1万5千だ。対するこちらは蓮華様の隊と合流して兵力が7千までになったが・・・」

祭「それでも兵力差はこちらの倍、厄介よのう。」

甘「兵の質、將の質ともにこちらが上ですがまともにぶつかるのは得策ではありません。」

ふむ、そのとおりだな。

冥「勝利するだけなら容易い。だがただの勝利に意味はない。勇名武名を轟かせ、かつ犠牲を最小限に抑えなければ意味がない。穩、何か策はあるか？」

穩「はい、いくつか策は浮かびましたが、どうしてもこちらに被害が出てしまいます。」

穩は悲しそうに答えた。一同が唸りながら策を考えていると・・・

雪「昂、あなたの策を聞かせてちょうだい。」

雪蓮が尋ねると皆が俺の方を向く。

昂「・・・少し待ってくれ。」

密偵の報告によると賊は3里程先の平地に陣を構えている。数はこちらの倍以上。俺達の勝利条件としては、

・犠牲を限りなく最小限に抑える。

・勇名、武名を轟かせるような戦をする。

この2点が絶対条件。辺りの地図を見る限り、障害物等は特にない。せいぜい近くに森があるぐらいか。・・ならとる策はこれしかないな。

昴「皆、これから俺の策を説明する。」

皆が息を飲む。

昴「まず雪蓮を先頭に少数の精兵を率いて賊に斬り込んでもらう。」

権「なっ!?!」

祭「なんじゃと!?!」

昴「続けるぞ? 賊に斬り込み、ひとしきり戦闘を行い、頃合いを見てこの森まで退く。他の隊は森を包囲する。」

俺は地図を指差しながら説明する。

昴「森まで退いて賊を森に誘導したらあらかじめ森を包囲しておいた他の隊は森に火を着ける。ここのところ雨は降ってないし生えてる木々はほとんど燃えやすいものばかりだし、その上木と木の間隔

が割りと狭いからすぐに燃え移るはずだ。」

ごくり。そんな音が聞こえるくらいこの天幕は静まりかえっている。

昴「後は火から逃れて蜘蛛の子散らすように森から飛び出した賊を一網打尽にする。とりあえず大まかな策はこんなかんじだ。」

権「しかしそれではあまりにも姉様が危険過ぎるわ！賊への斬り込みもその後の森でも、姉様にもしものことがあつたら・・・」

昴「その時はそれが天命なんだろう？」

権「貴様！何を他人事のように・・・」

昴「孫権。この策以上に被害を抑え、風評を得る策はない。だいたい、戦では常に危険隣り合わせなんだ。危ないとか危険なんて言つてたら戦なんかできやしないぜ。それにな、何かを得るにはそれ相応の対価がいる。今回の戦は危険という対価を払い、風評を得るわけだ。」

権「そうだとしても・・・」

雪「蓮華、昴の言うとおりよ。私達が孫家を復興させるためにはある種の危険、時には博打もする必要だつてあるわ。私達には手段を選んでいる余裕はないの。だから聞き分けなさい。」

権「・・・」

昴「孫権、いずれ君も王として国を背負う立場になるかもしれないから言っておく。確かに不用意に危険を犯したり博打をするのはよ

くない。だがな、危険を犯すことも博打をすることも出来ないんじや国を、ましてや乱れた世で王として国を守ることは出来ないぜ。例えば、兵と将ともに質が拮抗した状態での戦になつたらたちまち敗北するぞ？何せ博打をしない心はこれ以上になく読みやすい。これは武にも言えることだがな。楓は良く分かるだろ？」

楓「まあ、確かにな。」

昴「心配は最もだが、所詮相手は賊だ。もはや博打という言葉すら当てはまらないよ。」

権「・・・冥琳それでは良いのか？」

冥「・・・本音を言えば雪蓮を危険に晒すのは賛成出来ないが状況が状況だ。多少の危険は否めない。」

権「皆はどうなの？」

孫権が皆に問い掛ける。全員理解出来るが納得は出来ないといった感じた。ここで雪蓮まで失つたら孫家復興が更に後退するからな。しかし、このまま策を実行しても不備が出る可能性があるな。あまりに士気が低い。

昴「さつきもし雪蓮に何があつたらその時はそれが天命だと言つたがそれは半分冗談だ。」

権「冗談？」

昴「ああ。先陣には雪蓮と共に俺も立つつもりだからな。」

権「!?!?・あなた自身が!?!?」

昴「ああ、策の立案者は俺だし、それに雪蓮の護衛と共に撤退や森の放火の合図を出す人間が必要だからな。」

祭「だからといってお主自身が先陣を切ることはあるまいに。」

昴「俺はここでは文官やつてるけど本来は武官なんだ。だから後ろで指揮をとるのは正に合わない。それに寝泊まりさせてもらっている恩義も返さないといけないしな。」

冥「恩義という意味ではこちらにも助かっているがな。」

文官の仕事多いからなあ。雪蓮はよく政務サボるし。

昴「心配するな。この策は必ず成る。何せ今の孫家には天が付いてるんだぜ?」

親指で俺を指しながら言った。

「「「「「.....」」」」」

皆唾然としている。すると、

冥「ふふっ、確かになそうだな。」

祭「今僕らには天の遣いが付いておるんじゃないのう。」

穩「確かにそうですね。自分で言うのはどうかと思いますけど。」

「

言つてちよつと恥ずかしかつたし。

雪「昴の言つとおりよ。私達には天が付いてるわ、私の背中には常に天の御遣いたる昴がいるわ。たかが賊など恐るるに足りないわ。だから皆、今は私と昴を信じてちようだい。必ず無事に戻ってくるわ。」

俺も続く。

昴「俺は今は孫家の天の御遣いだ。雪蓮は命に代えても守り抜く。だから俺と俺の策と皆の力を信じてくれ。孫家の未来と荊州の民達の為に。」

俺は誠心誠意をもつて皆に問い掛けた。

冥「ふむ、私は昴と昴の策、信じよう。」

祭「儂も昴に賭けよう。策殿を任せるぞ。」

穩「私達も頑張りますので、昴さんも頑張ってくださいね。」

楓「昴の旦那！大将を任せるぜ！」

権「……。」

冥「蓮華様……。」

権「……分かった。貴様を信用してやる。もし姉様に何かあったら……。」

昴「その時は焼くなり煮るなり好きにしろ。」
権「ふん！確かに聞いたからな。その言葉、必ず守れ！」

昴「言われるまでもない。」

雪「話は纏まったわね。皆直ぐにでも動くわよ。この一戦はただの一戦ではないわ。孫家復興のための一歩と心得なさい。それでは解散！」

「「「「了解！」「」」」」

雪蓮の一言を皮切りに皆が動き出した。

場所は変わってここは最前線、今俺は雪蓮と軍の先頭を歩いている。

雪「あなたも大胆な策を考えたものね。冥琳なら絶対にこんな策は立てないわね。」

昴「だろうな。俺も冥琳と同じ立場なら思い付いても進言しづらいな。」

雪「あら？やっぱり他人事なのかしら？」

昴「まさか、雪蓮が王だったから成立する策さ。雪蓮以外の王ならまた違う策をとっただろうな。・・・どうした？やっぱり止めるか？」

雪「それこそまさかよ。私好みの策だし、何より、最近袁術からの我が儘でかなり頭きてたからこころで大暴れして憂さ晴らしたかったのよね。」

私情バリバリじゃねえかよ・・・。

昴「暴れるのは結構だが作戦を忘れるなよ。もたもたしてたら置いていくからな。」

雪「私に何かあったら責任もって蓮華と孫家を復興させてね。」

昴「その前に俺の頸が飛ぶがな。」

孫権絶対するだろうな。

昴「まあとにかく無理はするな・・・賊の先頭が見えてきたな。前方目と鼻の先に賊は布陣していた。」

昴「ま、俺も最近は政務尽くしでかなり身体鈍ってたからな。ちょっといい運動だ。」

雪「あら、結局昴も私と一緒にじゃない。」

昴「誰かさんが政務ほったらかしてサボるからな。」

雪「・・・ごめんなさい。」

自覚あるならちゃんとしてくれ。

昴「さてと、冗談話はこちらまでにして、始めるか？」

雪「そうね。」

雪蓮が大きく深呼吸し、そして、

雪「勇敢なる孫家の兵達よ！いよいよ我らの戦いを始める時が来た！新しい呉のために！先王、孫文台の悲願を叶えるために！天に向かつて高らかに歌い上げようではないか！誇り高き我らの勇と武を！剣を振るえ！矢を放て！正義は我ら孫呉にあり！」

「「「「うおおおおおお！」「」「」

兵達が雪蓮の言葉に雄叫びをあげる。俺も行くか。

昴「皆何も恐れることはない！皆には天より舞い降りた御遣いたる俺がいる！お前達には天の加護が、賊には天罰を下るだろう！誰一人無駄死にはさせない！皆の活路は俺が開く！皆存分に奮闘せよ！天命は我らにあり！」

「「「「うおおおおおお！」「」「」

兵達の士気がさらに上がる。

雪「全軍拔刀！」

シヤキ!

兵達の剣が抜かれる。

昴・雪「全軍、突撃せよ!」

俺と雪蓮は同時に飛び出した。

雪「ふふっ、ゾクゾクしてきたわ。暴れたいように暴れるわ。私を
楽しませなさい!」

昴「雪蓮!後ろが付いてきてないぞ!自重しろ!・・・ああもう聞
いちゃいねえ。」

雪蓮は兵を置き去りにして事実上単騎駆けを始めた。

昴「!?!」

前方に弓を構えた賊が目についた。あのままじゃ接敵する前に一矢
放たれる。

昴「させるかよ!」

俺は鞘に納められた村雨に手を当て、

昴「北辰流抜刀術・・・」

村雨に氣を込め、

昴「斬・月！」

抜刀と同時に研ぎ澄ました氣を込めた斬撃が賊に放たれる。

ヒュツ・・・ブシャアア！

「うぐ！」

「ギヤアア！」

「うげっ！」

前方の弓を構えた賊はたちまち真っ二つに裂かれた。

「あ、慌てるな、早く矢を・・・」

雪「遅いわよ！」

「ギヤア！」

弓隊を指揮をしてたであろう賊は雪蓮の剣によって斬り裂かれた。

昴「はぁー！」

宿地で一気に賊との距離を詰めて村雨で4人を斬り裂く

雪「遅いわよ！」

昴「待たせたな！」

俺と雪蓮で賊の陣に穴を空けていく。後続の兵もようやくたどり着き、戦闘を始める。

雪「あはは、楽しい〜」

昴「雪蓮の奴、完全にトリップしてるな・・・せい！」

俺と雪蓮で賊を葬って行く。

「調子に乗りやがって、死ね！」

ヒュッ！

俺の後ろから2本の矢が放たれる。

パシッ！

俺は左手の人差し指、中指、薬指で矢を挟み、

昴「フッ！」

「ギヤア！」

矢を放った賊にそのまま投げ返した。

雪「あなた背中に目でも付いてるのかしら？」

昴「このくらい、朝飯前だ・・・まだまだ来るぞ！」

雪「ふふっ、私達だけで全滅出来るんじゃないかしら？」

昴「無理言つな、先に体力が尽きちまう。」

その後しばらく俺達は戦い続けた。俺と雪蓮が先陣を切ったため兵達はかすり傷をおった程度である。
頃合いだな。

昴「雪蓮！退くぞ！」

雪「そうね、皆退け！退きなさい！」

雪蓮の言葉を合図に兵達は退いていく。

昴「殿は任せろ！皆疾く退け！」

俺は隊の後方に付き敵を迎撃しながら後退する。

程「憎き官軍は我らに恐れをなしたぞ！逃がすな、殺せ！」

ん？あれはこの賊を率いている程遠志か？さっきまで後ろ居やがったくせに有利と見た瞬間出てきたな。

雪「何あれ？さっきまで後ろでこそそしてたくせにこっちが退い

た途端急にやる気出しちゃって・・・殺ってもいい？」

昴「直ぐに地獄行きなんだからほっとけ。それより森に入るぞ。考えようによってはこっちのほうが危ないんだからな？」

雪「了解。皆森に入るわ、ちゃんとついてきなさい。」

俺と雪蓮は先頭に移動し、森の中へ突入した。

森をしばらく進んでいると、前方に森の出口が見えた。

昴「よし、ここだな。それじゃ、合図を出すぞ。はあ！」

俺は村雨に氣を込めて、

昴「行けえ！飛龍衝撃！」

氣で作成した龍を空に撃った。

昴「森の外まで逃げ！巻き込まれるぞ！」

俺と雪蓮と兵達は駆け足で森を抜けた。

冥「!?!?・・・森の中から籠・・・昴からの合図だ皆ただちに火を放て！」

指示を受けた兵が火矢や火の付いた薪を森に投げ込む。水気のない木はたちまち木から木へ恐るべき早さで燃え移る。

冥「策は成った!後は森から飛び出した賊どもを一網打尽にしろ！」

全てが思惑通りに進んだ。さすが天の御遣い、御剣昴だ。この戦、もはやこちらの完勝は揺るがないだろう。

賊・程遠志 side

官軍の兵が森の中に逃げ込んだ。

程「官軍どもを逃がすな!追え追えい！」

くくくつ、何やら2人が斬り込んで来たときは肝を冷やしたが所詮は数の前では無意味だ。見つけ出して楽しんだ後にでも殺ればいい。

「いないな。」

「こちらにもいません。」

程「つべこべ言わず探せ！役立たずは斬り捨てるぞ！」

ふん！使えない奴らだ。ここで官軍を退けられればもはや波才なんぞにでかい顔はさせん！くくくつ、今から楽しみだな・・・それにしてもさつきからやけに暑いな。それに妙な臭いが・・・。

「も、森が燃えてるぞ！」

「火だ！火が来るぞ！」

「助けて・・・ゴホツゴホツ！」

森が・・・森が燃えている・・・！くそ！奴らはこのために森に、

程「森から離れろ、逃げ！」

くそ！こんなところで死ねるか！

辺りには火や煙、倒れた大木の下敷きになった死体が目につく。

程「ぐつ！もはやこれまでか、気に入らんが波才に頭を下げて仕切りなおすしかあるまいか。官軍どもめ！必ず復讐してやる！」

前方に光が、出口が見えてきた。

程「これで助かつ・・・なっ！？」

森の抜けた先、そこには先程の女が包囲していた。

雪蓮 side

森を抜けた同時に火が放たれたわけだけど、どんどん燃え広がっていくわね。しばらく待つと賊が森から必死な形相で飛び出してきた。あらかじめ布陣していた私達に次々と一網打尽にされてるわけだけど、私のところには来ないわね・・・あら？あの顔はさっきの指揮官ね。私のところが1番当たりだったみたいね。

程「これで助かつ・・・なっ!？」

雪「残念だけどここまでよ。」

程「くっ!」

所々黒焦げね。

雪「よくもこの荊州を荒らしてくれたわね。もう終わりよ。大人しく・・・死になさい?」

程「ひっ!・・・お前達!かかれ!俺を守るんだ!」

この期に及んで部下に頼るなんて、将くずれだって聞いたからせめ

て捨て身の一騎打ちぐらい期待してたのに。あゝあ、興醒め。

程「は、早くしろ！俺を守・『無駄だ。』・なっ!？」

昂「他の奴らは包囲していた孫家の將に制圧された。お前の側に居た仲間は今俺が葬った。」

さすがね。ついさっきまで側にいた賊どもを一瞬にして斬り殺してしまった。

雪「さて、もういいわね？」

程「わ、分かった、投降する、だから命だけは・・・」

雪「お前は、一度人としての仮面を脱ぎ捨て、獣に堕ちたのだ。人に戻れると思うな。」

程「ひい!」

ジャリ、ジャリ。

少しずつ程遠志との距離を詰めていく。

程「う、うわああー!」

程遠志は剣を振りかぶり、私に向かってきた。覚悟も何もない。恐怖にかられて飛び出しただけ。そんな一撃、

雪「はあ!」

程「ぐふっ!」

私には通じない。南海霸王を一振りして程遠志の胴を払った。一振り程遠志は絶命した。

雪「敵総大将、程遠志は孫伯符が討ち取った！もはやお前達に勝ち目はない！大人しく武器を捨てて投降しろ！」

その言葉を聞いてある者は武器を捨て、ある者は逃げ出した。終わった。この戦は終わりを遂げた。

昴side

雪蓮が敵総大将、程遠志を討ち取ったことにより、戦いは終わった。賊の被害は初めの雪蓮との突貫で千。森の火にやられたのが8千。5千が森から抜け出たところに包囲していた孫呉の將兵に討ち取られ、残りは投降、及び逃げ出した。対するこちらの被害は百も満たなかった。完全なる勝利だ。

昴「ご苦労様、雪蓮。」

雪「あゝあ、もう少し齒ごたえがあればいいのに。」

昴「最初最前線であれだけ暴れたんだから我慢しろって。本来総大

将が最前線に立って斬り込むなんざ異例中の異例なんだからな。」

雪「・・・はあい。」

はあ、全く。

昴「足りなきや今度模擬戦でも付き合おうよ。」

雪「ホント！？絶対だからね！」

目をキラキラさせて喜んだ。またいらん苦勞を背負うことになりそうだ。雪蓮と話していると孫権がやってきた。

権「・・・。」

昴「約束通り、雪蓮は守ったぜ？」

権「当然だ。そうでなくては困る。」

やれやれ、孫権も素直になりやいいのに。孫権はしばらく黙っていると、

権「・・・ね、姉様を守ってくれてありがとう。」

礼を言ってくれた。やっぱり根はいい娘なんだな。

昴「どう致しまして。俺は約束を果たしただけだ。」

権「・・・あなたの武勇と知略、私は素直に尊敬したわ。」

昴「どうも。」

権「私には姉様のように剣を振るえないし、冥琳のように頭も良くない。その両方を兼ね備えたあなたが羨ましい。そして何も出来ない自分が恨めしい。」

孫権は自嘲気味に言った。

昴「・・・悔しいなら、自分に力が足りないと思うならもっと努力して高見を目指せばいい。簡単な話だ。」

権「御剣昴。」

昴「ゆっくりでいい。自分の歩幅で駆け上がれ。焦ることなんてないんだ。だから君は君の道を歩け。」

権「ありがとう。御剣昴。」

昴「昴でいいよ。長くて言いづらいだろ？」

蓮「分かった。それなら私のことは蓮華と呼んでいい。」

昴「真名で呼んでもいいのか？」

蓮「尊敬したと言ったでしょ？だからあなたに真名を預けるわ。．．それと良かったら私に色々教えてくれると助かる。」

昴「俺なんかで良かったら喜んで。これからよろしくな蓮華。」

蓮「よろしく、昴。」

共に手を差し出し、固く握手をする。

昴「・・・さてと、ここで困ったことが一つある。」

蓮「困ったこと？」

昴「ほれ。」

俺は森を指差す。

昴「あれだけ燃え広がるとさすがにどうにもならないな。かといってほっとくのもなあ。」

犠牲を出さないためとはいえ、森の木や植物、動物には悪いことしたな。どうするか考えていると、

ポタツ、ポタツ、ザーーーー!!!

突然の豪雨が降りだした。

昴「天の恵みか？どちらにしろちようどいい時期に降ってくれたな。」

少しずれていたら面倒だったが今はありがたい。

蓮「こんな時に突然の雨なんて、昴は天に愛されているのね。」

昴「言わなかったか？俺は天の御遣いだぜ。」

蓮「ふふっ。」

まあ何にせよ、これで戦も後始末も完了だ。まだもう1隊の賊が残っているが、またそれはその時に考えよう。

かくして、黄巾賊の残党は討たれ。昴と孫家の将は城へと帰還した。

続く

第16話 荊州掃討戦、完全無欠の単騎駆け (後書き)

木について、燃えにくい燃えやすい木があるかどうか、どのくらいの速さで燃え広がるのかは作者にも分かりません。作品内の話は空想です。決して真似しないでくださいね。孫家の将は合流したのでまたしばらく拠点に入ります。何か蜀のタグ入れてるのになかなか蜀行きませんね。感想、アドバイス、どしどしお願いします。それではまた！

第17話「幼き王、求めるモノは」(前書き)

何かすぐに書き上がったので続けて連投します。相変わらずのご都合主義です。それではどうぞ！

第17話 幼き王、求めるモノは

賊の討伐が終わり、城に帰還してから3日が過ぎた。自室で政務をこなしていると、

冥「昴、少しいいか？」

昴「冥琳か、どうした？」

冥「昴に1つ頼み事があるのだが・・・。」

昴「頼み事？」

冥「ああ、その・・・何だ・・・。」

齒切れが悪いな。

冥「先程の戦でな、袁術に昴の存在を知られてしまったな。」

・・・ああ、袁術に・・・。

昴「それで？」

冥「袁術がお前に会わせるとするさくてな、本来なら断りたいのだが・・・。」

今の孫家は袁術の客将、だから断れないというわけだ。

昴「なるほど、袁術に会ってくれってことだろ？構わないぜ。」

冥「すまないな。我らに力があればお前の手を煩わせることもなかったのだが……」

昴「気にするな。世話になってるし、それに一度袁術にも会ってみたかったしな。」

冥「そう言ってもらえると助かる。」

昴「なら今から行つて来るよ。」

俺は筆を置き、軽く身支度をして袁術のもとに向かった。

場所は変わって俺は玉座の間に来ている。

袁術「ふむ、ご苦労であった。」

小さな子供が出迎えた。玉座に座つてることからあの子が袁術か。傍にはバスガイドの服を着た女性がいる。するとあれが張勳か。

袁術「お主が各地で名を轟かせておる天の御遣いかの？」

昴「ふむ、人に名を尋ねるならまず自分からと教わらなかつたか？」

袁術「むっ。」

張勳「あなた、お嬢様に何て口の聞き方をするのですか!」

昴「やれやれ、三公袁家の末裔はそんなことも出来ない礼儀知らずだと?」

張勳「あなた・・・!」

張勳が一步前へ出る。

袁術「待つんじゃ七乃!」

張勳「お嬢様?」

袁術「確かにお主の言うとおりのじゃ。妾は袁術、字は公路なのじゃ。」

張勳「そんな、お嬢様がそのような真似を。」

袁術「妾は麗羽と違って礼儀知らずではないのじゃ。七乃も名乗るのじゃ。」

張勳「ううゝ張勳です。」

とりあえず礼儀知らずなわけではなさそうだ。

昴「ご丁寧に。俺は御剣昴だ。それで・・・俺にどんな用で?」

袁術「うむ、聞けばお主、腕も立つし頭も切れるらしいの？見れば顔も良いしの。お主今より妾に仕えるのじゃ！」

勧誘しているつもりか？っていうかもはやこれは命令だ。

昴「悪いが俺には既に仕える相手がいる。それには応じられない。」

袁術「嫌だと申すのか？」

昴「残念がらな。」

袁術「むうう。」

袁術は唸りを上げている。

袁術「仕えるべき相手というのは孫策かや？」

昴「違う。孫策ではない。」

袁術「では誰なのじゃ？」

昴「劉備玄德だ。」

袁術「劉備？七乃、知っておるか？」

張勳「確か幽州で名を上げている義勇軍の長が確かそのような名前でしたね。」

袁術「義勇軍……。」

用がこれだけなら早く政務を片付けたいんだがな。

袁術「・・・どうしても駄目かや?」

昴「悪いな。」

袁術「・・・。」

昴「・・・。」

早く帰って政務を・・・はあ。

袁術「・・・うう。」

昴「?」

袁術「嫌じゃ〜!嫌なのじゃ〜!天の御遣いを妾のもとに置きたいのじゃ〜!」

うわ、駄々こねはじめた。どう考えたって袁術が非常識なんだから張勳も止めるよ。ちらりと張勳を見る。

張勳「よっ!明らかにお嬢様が非常識なのに気付かない、お馬鹿さん、可愛いぞ」

駄目だこりゃ。

袁術「妾がここまで頼んでおるのじゃぞ?」

昴「駄目だ。」

頼むつて、命令だっただろ。だんだん腹立ってきたな。

袁術「うう、仕えるべき相手がいるから駄目なのじゃな？ならばその者がいなくなれば妾に仕えるのじゃな？」

あ？こいつは何を言って・・・。

袁術「七乃！今すぐ兵を纏めて劉備とやらを始末するのじゃ！」

昴「!？」

張勳「お、お嬢様!？」

こいつ、本気で言ってるのか？他国の領に他国の兵が侵入なんかしたら桃香を始末して袁術の配下になるとか、そんな次元の話じゃない。

袁術「何をしてる七乃！早く仕度をせぬか！」

張勳「お嬢様。」

もはや張勳すら引いている。

袁術、この子に、良い悪いも、善も悪も、正しいも間違いもない。ただ・・・ただただ子供なだけだ。・・・少し分かせてやる必要があるな。

俺は袁術に歩み寄る。

張勳「な、何ですか!？・・・お嬢様から・・・っ!？」

俺は静止させようとする張勳を目で訴えかけた。

邪魔をするな

目でそう訴えた。張勳は道をあけた。再び袁術に歩みより、袁術の目の前に立つ。

袁術「な、何をするつもりじゃ！」

俺は目の前で戸惑っている袁術に、

ゴン！

袁術「ぴぎゃ！」

拳骨を入れた。

張勳「あ、あなた何を！？」

張勳が何か言ってるがとりあえず無視だ。

昴「袁術。」

袁術「ひぐつ！痛いのじゃ、お主、妾にこのような真似をしてただで・『もう一発拳骨落とすか？』・何でもないのじゃ。」

俺は袁術に視線を会わせる。

昴「袁術、君がどれだけ偉くて、君の先祖がどれだけすごいかは知らない、けどな、だからといって誰もが君に従うとは思うな。権力を笠に我が儘言うのはただの子供だ。上に立つ者ならもう少し自

分の立場を自覚するんだ。」

袁術「……。」

昴「君も大切なモノを無理やり奪われたら嫌だろ？ 苦しいだろ？ だから今後は我が儘だけで権力を使わないな。」

袁術「……うむ。」

昴「それで、いけないことをしたり、言ったりしたらどうするのかわ、それも教わらなかったのか？」

袁「うう、ごめんなさいなのじゃ！」

袁術は泣き出してしまった。

昴「はい、良くできました。」

頭をナデナデしてあげた。

袁術「ヒック、ヒック。」

まだ泣き止まないな。

昴「しょうがないな、それ！」

袁術「にや！」

俺は袁術を抱き抱え、そのまま抱っこした。

昴「もう袁術は立派な王なんだからいつまでも泣いてちゃ駄目だろ？」

袁術「う、うむ。」

昴「ほら、泣き止むまでこっしててやるからな。」

俺は袁術が泣き止むまで抱っこしながら頭を撫で続けた。

しばらくすると袁術は泣き止んだので床に下ろして、改めて配下にならないことを告げた。

袁術「・・・分かったのじゃ。諦めるのじゃ・・・。」

ようやく分かってくれたか。

昴「俺は仕事があるからそろそろ戻るな。」

袁術「ま、待つんじゃない！」

昴「ん？」

袁術「・・・配下にならなくても良いから、また妾の元に来てくれる

かの？一緒にお話してくれるかの？」

昴「構わないよ。俺が暇な時にでも遊びに行くよ。」

袁術「本当じゃな！？約束じゃぞ！？」

昴「ああ、またな。」

袁術「また来るのじゃ！」

俺は玉座の間から出ていった。

昴「ああ、何かいろいろ疲れたな。」

俺が城の廊下を歩いていると、

冥「昴、今戻ったか。お疲れのようだな。」

昴「まあ・・・な。」

冥「どうした？袁術に我が儘でも言われたか？」

昴「我が儘って言えば我が儘だが・・・ただ雪蓮達に少し同情したく

なつたな。」

冥「どういうことだ？」

昴「俺から見ても、袁術はただの子供だ。何処にでもいる純粹な・ね。どんな正義より、どんな悪より戦いたくはない相手だ。少なくとも俺に袁術は斬れないな。」

冥「昴・・・」

昴「俺はそつちの事情にとやかく言わないが、自分が雪蓮の立場でなくて良かったと思ってる・・・ま、とりあえず政務に戻るな。」

冥「そうか。」

昴「それじゃ、またな。」

俺は自室に向かった。

袁術 side

昴が立ち去った直後。

張勳「お嬢様？拳骨までされて何で謝ったりしたんですか？」

袁術「あの御遣いが言った言葉は昔父様が妾にかけてくれた言葉なのじゃ。それにの抱っこして頭を撫でてくれたのも父様がしてくれたことじゃ。」

張勳「お嬢様……。」

袁術「またすぐに会いたいのじゃ、抱っこしてもらいたいのじゃ。」

張勳「それなら呼んじゃえばいいんですよ。」

袁術「駄目なのじゃ！我が儘で権力を使わないのじゃ！約束してくれたから来てくれるのを待つのだじゃ！」

張勳「えーん。お嬢様が真面目に……まあこれはこれでいいか。」

袁術「何か言ったか？」

張勳「何でもありません。」

天の御遣い、確か御剣昂じやつたかの？またすぐにきてほしいのじゃ。あの者は父様と一緒に傍におると胸が暖かくなるのじゃ。また一緒に話したいのじゃ。」

袁術は無くなった家族の想いと愛を昂に重ねるのだった。

続
く

第17話「幼き王、求めるモノは」(後書き)

何か美羽が少し良い子になっちゃいました。作者が美羽を見た印象がこれだったので、一部架空設定を入れて書きました。結局大まかな結末は変えないんで美羽と張勳は……。タグに基本ギャグ、時々シリアスと入れたんですが、最近シリアス比率が上がってますね。次回は何とかギャグ要素を入れてみたいと思います。感想、アドバイスお待ちしてます。それではまた！

第18話 稀代の軍師、悲しき性癖 (前書き)

今回はタイトルの如く穩の拠点です。穩といえはこれしか浮かびませんでした。穩ファンの方ごめんなさい！それではどうぞ！

第18話 稀代の軍師、悲しき性癖

昴 side

昴「何故こんなことに・・・。」

目の前には横たわる穩の姿が。それは遡ること5時間ほど前・・・。

頼まれていた書簡を纏め、冥琳に提出した帰り道、時間が空いたので何をするか考えていると・・・。

穩「昴さん！」

昴「ん、穩か。」

穩「もしかしてお暇ですか？」

昴「ああ、仕事も終わって冥琳に書簡を提出した帰りだ。」

穩「でしたら、以前にお約束した、昴さんのお話を聞かせてもら

「つてもよろしくですか？」

昴「ちょうど暇してたところだ、構わないぞ。」

穩「本当ですか！？ではでは、早速昴さんお部屋に行きましょ
う！」

穩が俺の腕を抱えて引っ張っていく。少し胸が当たるな。

昴「ははっ、慌てるなって。」

急かす穩をなだめる。そしてこの先こう思うことになる。あの時断
れば良かったと。

部屋に戻った俺は穩に椅子を1つ用意して横並びに座る。

穩「それでは昴さん、よろしくお願いします。」

昴「それじゃ、何から話すかな・・・。」

俺は今までに巡った、外史の政策や兵法等を話した。

昴「それでな、その国はその時にあえて、民から募集をかけてな・・・。」

穩「ハア、ハア、そんな方法が、ハア、ハア。」

・
・
・
・
・
・

昴「その王は、籠城はあえて行わず、野戦を選んでな・・・。」

穩「ハア、あふう、そのような・・・ハア、ハア、選択を、ハア、ハア。」

何か様子が変だな？体調でも悪いのか？

昴「・・・穩、大丈夫か？」

穩「何でも・・・ありません。」

・・・大丈夫そうには見えないが・・・。心なしか手が胸にいつてるような・・・まあ本人が大丈夫って言ってるからとりあえず様子を見るか。

昴「他には・・・そうだ、確かこの中に・・・。」

俺は手持ちの鞆の中に手を入れ・・・あつた！

昴「これを読んでくれ。きっと穩には参考になるし、気に入ると思うんだが。」

穩「こ、これは！」

昴「これは陳留の州牧・俺がここに来る直前西園八校尉になったんだっけな？曹操が孫子に編纂を加えた、題名は孟徳新書だ。」

これは華琳のところに行ったときに華琳が手掛けた書だ。手伝おうとしたんだが、基本的に趣味でやっているらしいから俺はたまに意見を言った程度だが……。一冊完成品を華琳から手伝った礼にと貰ったものである。

昴「一通り読んだがかなり奥が深い一冊だぜ。曹操は知ってるだろ？」

穩「ぞ、存じてます〜、こ、こんな素晴らしい書が目の前に〜ハア、ハア。手に取ってもハア、ハア、よろしいですか〜？」

昴「あ、ああ……。」「

何だろ、だんだん嫌な予感が……。チラツ、つと書を覗きこむ。

穩「やはあああ〜んっ」「

うお！どうした！？

穩「曹孟徳、彼女は時代を越えて受け継がれてきた、孫子の歴史書をけがしたのでしょうか……。それとも。過去から現代へ、孫子に新しい命を吹き込む偉業を成し遂げたのでしょうか？どうなの？ああ、知りたい……。」「

いや、読んだらいいだろ・・・。

穩「それでは、失礼して・・・、」

穩がおそろおそろ孟徳新書を手に取り、読み始めた。途中奇声をあげたり艶っぽい声をあげたり、いろいろあつたが、黙々と読み進め、やがて・・・、

穩「はあ〜、素晴らしい、一品でした。」

昴「そ、それは何よりだ。」

何だろ、さっきから冷や汗が止まらないんだが・・・。

穩「こんな・・・こんな素晴らしい物を・・・読んでしまったら・・・」

しまったら？

穩「もう我慢出来ません〜!!」

昴「うおおお!!?」

突如飛び付いてきた穩を横に避ける。

ゴン!・ズズズズ〜。

そのまま壁に激突し、壁を擦りながら倒れこむ、しかしすぐさま起き上がり、こちらに振り返る。

穩「あゝん、昴さゝん!」

穩はミノムシみたいな姿でなお俺に這いずり寄る。

昴「うわゝ。」

まさか穩にこんな一面があるとは、そっぴや以前に穩が真名を預けてくれた時、冥琳と祭さんの様子が変だったな。なるほど、こっぴうことか……。さてとこのあと穩を『ブチッ!』どうするか、えっ?ブチッ?

振り返ると頑丈に縛った繩を引き千切った穩が立っていた。

穩「うふふゝ、無駄ですよゝ?」

あ、あの繩を……。再びピンチだ。

穩「昴さゝん!」

穩が再び飛び付いてくる。こっぴうたらやむ得ない。

昴「水月!」

穩「あう!?!」

穩は床に倒れ伏した。

昴「と、咄嗟に人体の急所を突いてしまった。」

まったく、ただ穩と話をして、書を渡したただけなのに、

昴「何故こんなことに・・・。」

つと、今に至る、穩は大丈夫かな・・・ホツ、気絶してるだけか。それにしても、穩に書を読ませるとこんなにも危険なのか・・・まあ、そんなことより、

昴「穩を部屋に運ぶか・・・。」

俺は穩を背負い、穩の部屋のベッドまで運んだ。

はあ、今日は疲れたな・・・。政務以上に疲れたのであった。

翌日、俺が城の廊下を歩いていると、

穩「昴さん。」

昴「お、おう穩か。」

昨日の一件もあり、少し気まずい。

穩「昨日は本当に申し訳ありませんでした。」

昴「あ、ああ気にするな。俺も痛い思いをさせてすまなかつたな。」

穩「それは心配には及びません。それよりも……。」

昴「ん？」

穩「私のお願いを聞いてくれますか？」

昴「お願い？」

穩「はい、私は見ての通り素晴らしい本を読み、知的好奇心を満たしてしまうと性的興奮を抑えられなくなってしまっんです。」

とんでもねえ性癖だな。

昴「それで？」

穩「いつからか、気が付いたらこんな症状が出るようになりまして成長するにつれて症状はどんどん酷くなる一方で、冥琳様には書庫の出入りを禁止されてしまいました。」

まあ、あれを見たら誰でもそうするだろうな。

穩「でも、でももう嫌なんです、皆さんに迷惑かけるのも！何より！大好き本を読むことが出来ないのが何より嫌なんです！」

そう必死に訴える穩。その瞳から一筋の涙が流れていた。

穩「ですから、ですからこの症状を克服するために昴さんの力をお貸し下さい！」

・・穩も悩んでいたんだな。本音を言えばあの状態の穩と対峙するのはお断りしたいんだが・・ここまで切実で真剣な願いを・・無下に出来ないよな・・。

昴「はあ、出来る限り協力するよ。」

穩「！・・ありがとうございます〜！」

そう言っただけで穩は俺に抱きついた。あー胸が、また苦勞を背負うことに・・なるんだろうな、はあ。

当然、この予想は現実のものとなる。

場所を変えて、俺と穩は森に来ている。

穩「昴さん、これは一体？」

とりあえず症状を克服するには慣れるしかない、かといってあの状態になったら手に負えないので・・森で首から下を埋めて見ました。だって縄程度じゃ引き千切られるんだもん。

穩「うう、動けないです〜。」

端から見たら生首だなこりゃ。

昴「我慢しろ、俺がもたないんだ。」

穩「ううゝ、それでゝ、これでどうするんですかゝ？」

昴「とりあえず・・・、」

手荷物から・・・、

昴「孟徳新書だ！」

穩「おお！？」

昴「俺が穩の目の前で代わりに本を進めていくから穩はとにかく性的興奮を抑える努力をしろ。」

穩「は、はいゝ、頑張りますゝ。」

もうすでに症状出かかっている。

昴「それじゃ、始めるぞ。」

穩「はいゝ！」

ペラ・・・ペラ・・・ペラ・・・

俺は孟徳新書のページを進めていく。

穩「ああ・・・はあん・・・ジユル。」

症状は出かかっている。穩は必死に性的興奮と戦っている。

ペラ・・・ペラ・・・ペラ・・・。

ページはどんどん進んでいく。

穩「・・・昂さくん、あ・ふん、私・・・もう・・・。」

昂「耐えろ、耐えるんだ穩！」

穩が徐々に徐々に毒されていく。

穩「・・・もう・ハア、ハア、私いっ・・・。」

昂「耐えろ！つうか耐えてください（TOT）」

本当にあの状態の穩怖いです。

ゴゴゴゴゴゴゴゴ！

突如地面が揺れ始めた。な、何が始まるんだ？

穩「・・・す、昂さくん・・・。」

昂「おいおい・・・。」

穩の様子がかなりおかしい。

穩「・・・もう。」

昴「もう?」

穩「もう・・・限界ですう〜!」

ズカーーン!!!

昴「ギャアー!生えたー!」

穩「ハアハア、昴さんハアハア、昴さん、ハアハア、昴さん。」

ジリジリ穩がにじり寄る。あかん、やっぱり怖い。どうする!?何か限界まで我慢した分反動で昨日以上になっている。だからといって二度も手荒な真似はしたくない。どうする!?そうだ、脳内会議だ!俺が培ってきた経験、野生の勘、洞察力に決をとる。俺はどうすればいい!

経・野・洞「」「逃げなさい。」「」

よっし、満場一致!それでは逃げよう。

御剣昴は逃げ出した。

ダダダダ・・・ポヨン!

昴「ムギユ!」

柔らかい物に阻まれた。何だ?おそろおそろ上を向くと。

穩「昴さん？逃がしませんよ？」

しかしまわりこまれた。

昴「確実にさっきまで俺の後ろいましたよね？・・・うわっ！？」

俺は穩に押し倒されてしまった。

穩「これでえ・・・もう、あ・ふう、逃げられませんか。」

昴「くっ！」

まずい、マウントをとられた！このままでは！やむを得ないか、こ
うなったら穩を前みたいに・・・あれ？手が動かない？・・・うお
っ！手が縛られてる！？いつの間に！？

穩「これは、我が国の蔵書の一つの、『緊縛の奨め』という蔵
書に記載されていたもので。」

昴「んなもん奨めんじゃねえ！」

まずい、まずい！引き千切れないし、ほどけない！どうする、どう
する！？

穩「昴さん・・・いただきます。」

昴「ギヤアアアア！」

.....

・・・

このあと穩に食べられる刹那、たまたま心配になって様子を見に来た雪蓮と祭さんに間一髪救出された。この外史に来て1番怖かった人、それは穩である。だって血で興奮した雪蓮以上なんだもん。

結論、穩には本を読ませない。もはやこれしかないな。俺は新たな教訓を得た。

さらに翌日。

穩「昴さん！」

昴「(ビクッ)・・・よう穩。」

穩「昨日は本当に本当にすみませんでした。次こそは克服してみせますので、またお手伝いを。」

俺はボンと肩に手を置き、

昴「あきらめる。」

穩「そんな、お手伝いして下さい！」

昴「無理だつて！つつかやだ！」

俺は逃げ出した。

穩「待って下さい、昴さん！」

追いかける穩。俺と穩の追いかけてここをしばらく続いたのだった。

続く

第18話 稀代の軍師、悲しき性癖 (後書き)

何か原作以上の性癖になってしまった。少しやりすぎた感はありませんが悔いはなし！感想、アドバイスお待ちしています。それではまた！

第19話「深き因縁、真の心」(前書き)

お待たせいたしました。気がつけばPV10万突破！お気に入りも登録も100人越えました！ありがとうございます。小説投稿を始めて1ヶ月が経ちました。早いものです。今回はオリキャラ楓の拠点です。原作資料がないので完全作者のオリジナルですが、それはどうぞ！

第19話 深き因縁、真の心

楓「はあ！」

昴「ふっ！」

バキッ！

楓の一撃を避ける。

楓「まだだ！」

避けた先に右の正拳突きが襲う。

昴「甘い。」

それを左手で受け流す。

昴「次は俺から行くぞ。はっ！」

俺は楓に飛び込み、拳のラッシュをかける。

楓「ぐっ！」

楓は拳の嵐をウィービング、パリング、ガードを駆使して対応する。しかし徐々に捌ききれなくなり、

楓「くそ！」

焦った楓が蹴りで俺の首を狙う。

昴「焦ったな。」

楓「!?!」

蹴りをしゃがんで避け、水面蹴りで楓の脚を刈り取る。

楓「うわっ!」

体勢を崩し、倒れた楓に顔スレスレに拳を止める。

楓「うっ、まいった。」

昴「また俺の勝ちだな。」

楓に手を差し出し、楓は手を掴み立ち上がる。

昴「劣勢になると一撃必殺を狙うのは悪い癖だぞ?」

楓「分かつちやいるんだが……。」

パンパンと埃を払いながら答える。

楓「それにしても、昴の旦那は強えな、全く齒が立たねえ。」

昴「こっちもそれほど余裕があるわけじゃないけどな。それに、楓もどんどん筋が良くなってきてるよ。」

楓「そう言ってくれると嬉しいぜ。……それにしても旦那は無手も使えるんだな。」

昴「まあ、必ずしも武器が使える状況ばかりとは限らないからな。あらゆる事態に対応出来るように身につけておいた。」

楓「それでそこまでの使い手になれんだから旦那は化け物だな。」

昴「化け物はないだろ……。」

楓「ハハハッ。」

楓と話をしていると、

思「公績。」

ん？思春か？確認しようとしたその時、

ピシッ！

まるで空気に亀裂が走ったようにその場がピリついた。

楓「……何だ？」

思「これより軍議だ、すぐに集まれ。」

楓「……分かった。」

思「急げよ。」

楓「……。」

思春はそれだけ伝えると、その場を立ち去っていった。

昴「（何だ？この2人・・・）」

仲がわるいとか、ソリが合わないとか、そんな感じじゃない。

昴「楓？」

楓「わりい、行くわ。」

楓はそう言うと思春の後を追った。楓の顔を伺うことは出来なかった。

昴「あの2人に何が・・・」

あまり人の心に踏み込むものではないが・・・、少し・・・気になるな。俺は何か釈然としないものを感じながらその場を後にした。

城の廊下を歩いていると、

穩「昴さん！」

お、穩か。

穩が大きな胸を揺らしながら駆け寄ってきた。

穩「こんなところで奇遇ですね。」

昴「そうだな。」

穩「またお暇でしたら症状克服のお手伝いをしてくださいね。」

昴「あ、ああ。」

今でも穩の性癖を克服する訓練に付き合っている。と言っても本は読ませないが・・・そうだ、穩なら楓と思春のことについて知っているかも。

昴「なあ穩、1つ聞きたいことがあるんだが。」

穩「何でしょう？」

昴「楓と思春の間に何かあるんだ？」

穩「！？・・・何ですか？」

昴「あの2人・・・溝というか、何か因縁めいたものがあると思うんだが・・・。」

沈黙する穩。

穩「・・・申し訳ありません。私から申し上げることはできません

」。

昴「そうか・・・。」

穩は申し訳なさそうに告げた。

穩「それでは、お仕事が残っているので失礼します。」

穩はそそくさと足早にその場を去った。

昴「やれやれ。」

どうしたものかな、こんな本人には聞けないしな。思春なんか確実に話さないだろう。こういう時は・・・あの人しかいないか・・・しょうがない。俺はとりあえず街へ繰り出し、手土産を買いに行った。

その日の夜、俺はとある一室を目指し、歩いている。確か・・・ここだな。

昴「昴です。起きてますか？」

祭「ぬっ？昴かどうしたのじゃ？」

昴「祭さんに用がありました、忙しければ後日にしますが・・・。」

祭「構わぬよ、今扉を開ける。」

キィ。

祭「こんな遅くに何の用じゃ?」

俺は手に持っている酒と器を出し、

昴「どうぞです?」一緒に。」

祭「・・・ふむ、付き合おう。」

しばらく近況報告や世間話をしながら酒を酌み交わしていると、

祭「・・・それで?わざわざ酒を飲むためだけに儂のところに来たのではないのじゃろ?」

昴「やっぱり分かりますか?」

祭「伊達に長生きはしておらぬわ。儂に聞きたいことがあるのじゃ

る？」

昴「はい・・・それなら率直に聞きます。楓と思春の間に何があったんですか？」

そう尋ねると祭さんはピクツと酒を飲む手を止め、器を卓に戻した。

祭「何故そう思う？」

昴「今日、2人の様子がおかしかったからです。正直、2人の間にただならぬ何かあるような。そんな感じがしました。」

祭「・・・それを知ってお主はどうするのじゃ？」

昴「俺は2人の仲を取りなしたいと思っています。俺は期間限定とはいえ今は孫家の仲間ですから。」

祭「・・・儂らにもどうにもならぬことなのじゃぞ？」

その言い方からしてやはり何かあるんだな。それも大きな何かがある。

昴「それでも、俺は2人の中にあるわだかまりを解決したいと考えています。」

祭「何故じゃ？」

昴「大切な仲間だからです。」

祭「・・・。」

昴「……。」
暫し祭さんで見つめ合う。

祭「ふう、あまり人の事をペラペラと喋る趣味はないじゃがのう。」

昴「すみません。」

祭さんが器に酒を入れ、それを一気に煽ると、

祭「簡単に言うんじゃ、楓にとって思春は父の仇なのじゃ。」

昴「!?!?…どういうことですか?」

祭さんは説明してくれた。時は数年前、まだ前王孫文台が存命の頃、劉表との戦で、劉表本隊との決戦の前に立ち塞がったのが部下である黄祖である。当時思春は錦帆賊と呼ばれる川賊の頭領だった。思春は錦帆賊の帰郷を黄祖に妨げられ、やむなく黄祖に与していた。孫堅本隊が黄祖に当たったのに対し、思春率いる錦帆賊には当時、水軍を率いていた楓とその父凌操が相対した。楓が賊兵を相手にしているなか、思春と凌操の一騎討ちが始まった。戦いは壮絶なものとなり、何合にも及ぶ打ち合いとなった。そしてほんの僅か、たったほんの僅かの差で思春が凌操に勝利した。凌操は即死ではなかったものの、深傷を負ったことにより亡くなった。楓は怒りから思春を殺そうとするがそれと同時に黄祖の本陣が陥落。思春率いる錦帆賊は包囲され、思春は投降した。思春は斬首を潔しとし、望んだが、思春の部下達の懇願と黄祖によって戦わざるを得なかったこと。その他に凌操を失ったことにより水軍を率いられる将がいなくなったことと、江東、荊州で最も有名で屈強の川賊の頭領を組み入れれば水軍の強化と共に江東一帯の川賊を無力化出来るという利もあり、

思春は孫家に降った。だが当然楓にとって納得いくはずもなかったが孫家のため仕方なく従った。

祭「ふう。」

説明を終えるとまた一献酒を煽った。

昴「（仇・・・か。）」

自分の大切な家族を殺した相手が味方陣営にいる。その心中はともではないが・・・。

昴「2人の一騎討ちはどうだったのですか？」

祭「壮絶じゃった。双方実力は拮抗しており、勝負は一進一退。どちらが勝ってもおかしくはなかった。再び相対することがあったなら次は違う結果になることもあり得るじゃろう。」

昴「そう・・・ですか・・・。」

楓にとっては同じ孫家に仕える将であると共に父の仇でもある。忠義との板挟み、か。

昴「思春は正当な一騎討ちをしたんですよ？策を企てたりとかそんなことはなく。」

祭「ふむ、互いが名乗りをあげ、互いが武人として誉れある一騎討ちを行っておった。儂も見ておったし、部下からも同様の意見じゃ。」

「

昴「そうですね．．．」

そうか．．だから楓は．．だったら．．。

昴「ありがとうございます。2人の事は俺が何とかしてみます。」

祭「うむ、では任せるぞ。」

昴「それではもう行きますね。酒はここ置いておきますから。では。」

俺は祭さんの部屋を後にした。2人のわだかまりを解くにはいくら言葉を重ねても意味がない。問題は思春より楓だな．．．やはり方法は1つしかないな。多少危険だが、やるしかない。さてととりあえず明日に備えるか。俺は自室に戻った。

祭 side

祭「ふう。」

昴がいなくなつた後も1人酒を飲む。

祭「何故あんな話をしてしまったのかのう。」

決して話したことを後悔しとるわけではないが、不思議とあの時昂なら何とかしてくれると思った。

祭「僕にはどうすることも出来なかった。昂よ、2人を頼むぞ。」

再び酒を一杯煽った。

昂side

翌日、俺は楓を連れて街の外を歩いていた。

楓「なあ、どこまで行くんだ？」

昂「何、もうすぐ着く、黙ってついてきてくれ。」

楓「・・・おう。」

それから時間にして10分程歩くと目的地に着いた。そこはただの荒野でちらほら岩が転がってるだけの場所だ。

昂「着いたぞ。」

楓「何だ？何もねーじゃん。……ん？誰かいるな、あれは……大将ともう1人は……!？」

着いた先に待っていたのは雪蓮ともう1人は、

楓「甘寧！」

思春だった。

楓「……どういつつもりだ。」

昴「今説明する。」

楓「まさか仲直りしろとかほざくんじゃねーだろうな。」

楓が俺を睨み付ける。

昴「雪蓮、待たせたな。」

雪「それほど待ってないわ。……楓、思春。あなた達の王として命ずるわ、この場で孫伯符と御剣昴立ち会いの元一騎討ちをしない。」

思「!？」

楓「!？……正気か？今まで散々禁じてたのによ。」

雪「ええ、本気よ。否は認めない、これは命令よ。」

楓「・・・上等だ。」

雪「思春もいいわね？」

思「・・・御命令とあらば。」

楓と思春が一定の距離を保ち、対峙する。俺と雪蓮も2人から少し離れた位置に下がる。

楓「・・・。」

思「・・・。」

両者が睨み合う。やがて楓が口を開く。

楓「手を抜いてみる、そんなときは、分かってるな？」

思「元よりそのつもりだ。」

両者が武器を構える。雪蓮が2人の中心に立ち。

雪「それでは始めるわ。勝敗は両者気が済むまでやりなさい。」

雪蓮が右手を上げ、

雪「始め！」

雪蓮の手が振り下ろされる。

楓「はぁ！」

思「ふっ！」

両者が合図同時に動き出す。

ガキン！

楓のトンファーと思春の剣が交錯する。

ギギギツ！

両者が鏝迫り合いを始める。先に動いたのは、

楓「おらっ！」

楓だった。鏝迫り合いの最中、思春に蹴りを狙う。思春は後ろに一歩下がり、蹴りを避けると一気に距離を詰め、手持ちの武器である鈴音を楓に振るう。

楓「はっ、甘え！」

楓は右手のトンファーで受け止める。すぐさま体勢を整え、左手のトンファーを振るった。

思「ちっ！」

思春は大きく後ろに下がり仕切り直す。しかし楓はその間を与えない。

楓「おらおらおらあ！」

思「ぐっ！」

ガキン！ガキン！ガキン！

楓は思春の懐に飛び込み、間髪入れず攻撃を繰り返す。思春は防ぐので手一杯でなかなか攻撃に移れない。

思「舐めるな！」

思春は楓の右手の一撃を左足の裏で止め、左足で受けたトンファーを足場にして楓に右足の一撃を振るう。

楓「何！？ぐあ！」

咄嗟に左手のトンファーで防ぐが体勢を大きく崩してしまう。その隙に思春は後ろに下がり体勢を整えた。

雪「今のところ互角ね。昴はどうみる？」

昴「今は大きく均衡は崩れてないが、時間の問題だ。」

雪「というと、どっちが先に均衡を崩すの？」

昴「それは……、」

楓「はああー！」

思「ぐっ！」

昴「楓だ。」

雪「どうしてそう思うの？」

昴「そうだな、両方とも武器は違えど軽装の身の軽さを利用して速さで戦う武人だが、2人の戦い方は大きく異なる。まず楓は持ち前の速さで相手の懐を奪い、連撃を加え、一気に仕留める。思春は巧みに動きまわり、当てて退いてを繰り返しながら相手を追い詰める。

「

別の言い方で分かりやすく言えば、ボクシングに当てはめると楓はインフアイトボクサーで思春はアウトボクサーだ。

昴「楓はだんだん思春の動きを見切りつつある。動きが先読みされてるから思春は守勢にまわらざるを得ない。何より楓は俺との模擬戦の回数を重ねてるから慣れてしまえば主導権を奪われることはま
ずないだろう。場所が障害物や遮蔽物のある例えば森林なら思春の
方に分があるが対等でまっとうな条件での一騎討ちなら、」

ガギーン！

思「うっ！」

思春は鈴音を弾き飛ばされ、そのまま尻餅を付き、トンファーを顔
に突き付けられる。

昴「楓が勝つ。」

勝敗は決した。

雪「勝負あつたはね。」

止めに入る雪蓮を俺は手で制する。

雪「・・・何をするの？」

昴「まだだ。」

雪「決着はもうついたわ！」

昴「まだだ！ここで止めたら意味がない！」

雪「何を言ってるの！？このままじゃ・・・！？」

ふと見ると楓がトンファーを狙いすましている。

雪「どきなさい！どかないなら力づくで・・・」

昴「信じろ！」

大きく手を広げ、雪蓮を行き先をふさぐ。

楓「ウオオオオオオ！！！」

雪「楓！・思春！」

楓のとどめの一撃が放たれた。

思春side

私は雪蓮様より街の外へ連れ出された。何の用事か見当がつかなかったが、御剣昂が公績を伴って来たことで理解することが出来た。なるほど、この場で仇討ちをさせるということが。

楓「手を抜いてみる、そんなときは分かってるな？」

手を抜くつもりなど毛頭なかった。一騎討ちで手抜きはこれ以上ない相手への侮辱だ。全力で相手をする。いざ一騎討ちが始まると最初こそ互角だが徐々にこちらの動きが読まれ始め、防戦一方になる。

思「くっ！」

苦し紛れの一撃も鈴音ごと身体も吹き飛ばされ、眼前にトンファーを突き付けられた。

思「（負けか）」

勝敗はついた。しかし公績はとめるつもりはないようだ。

思「（とどめか）」

当然だな。一騎討ちにおいて最後相手にとどめを刺すのはごく自然なことだ。もはや恐怖等はなかった。もともと自分の命をくれてやるなら公績にと決めていたからだ。公績にはその資格がある。

思「（蓮華様にもつと尽くすことが出来なかったのが残念だ。）」

それも今更後の祭、私は目を瞑り、覚悟を決めた。

楓「ウオオオオオオ！！」

とどめの一撃が放たれる。

ドゴン！

歯を食いしばる・・・が激痛はいつまで経っても襲ってこない。目を開けると自分の顔の僅か右にトンファーが突き刺さっていた。

楓 side

楓「なあ、どこまで行くんだ？」

俺は旦那に連れられて街の外に来ている。こんなふうに旦那に誘わ

れるのは初めてだ。しばらく歩くと前方に2人の人影が見えた。片方が大将である雪蓮で、もう1人は・・・

楓「甘寧！」

甘寧だった。

楓「・・・どういうつもりだ。」

もしこの場で仲直りしろとか、仲良くしろとかほざきやがったら・・・
いかに大将や旦那でも許さねえ。しかし大将が口にしたのは、

雪「楓、思春、あなた達の王として命ずるわ。この場で孫伯符と御
劍昂立ち会いのもと、一騎討ちをしなさい。」

思いもよらない命令だった。何せ今まで大将は甘寧との模擬戦及び
兵の訓練の相手さえ禁止してたからだ。大将の目は本気だった。旦那
も同様だ。・・・上等だ！俺と甘寧が対峙する。

楓「手を抜いてみる、そんなときは分かってるな？」

思「元よりそのつもりだ。」

やっとだ、やっとこの時が来た！親父、見てろよ！

一騎討ちが始まった。やはり甘寧は強かった。さすが親父を倒した
だけはある。だけど・・・戦ってるうちにだんだん甘寧の動きに慣れ
てきた。何より、昂の旦那に比べれば遥かに容易い。

楓「はあ！」

思「ぐっ！」

ガギイン！

俺は甘寧とその武器を弾き飛ばした。俺は倒れた甘寧にトンファア―を突きつける。

思「……。」「

甘寧は覚悟を決めている。

グツとトンファア―に力を込める。

楓「（親父、俺は甘寧に勝ったよ。）」「

親父との想い出が走馬灯のように頭をよぎる。とても厳しくとても強かった親父。忠義に厚く、孫家に全身全霊をもって尽くした親父。そして・・・豪快で優しく、男手1つで俺を育ててくれた親父。今・ここで、全てが終わる・・・。

楓「ウオオオオオオオ！！！」

俺は渾身の一撃を繰り出した。

ドゴーン！！

俺は甘寧の眼前僅か右にトンファア―を打ち込んだ。甘寧は少し驚いた様子だ。俺はトンファア―を引き抜き、甘寧から離れる。

思「何故外した？」

楓「今の孫家の状況を理解出来ないほど俺も馬鹿じゃねえ。お前は今の孫家には欠かせない人材だ。それに、親父の雪辱は果たしたしな。もうこれ以上は意味がねえ。」

思「私はお前の父を殺したのだぞ。」

楓「俺もお前も、そして親父も将であり、そして武人だ。戦場に立つ以上死は必ずついてまわるもんだ。それは戦の理であって誰が悪いわけじゃねえ。」

思「だが！」

楓「親父が死の間際に俺に言った。決して甘寧を恨むなと。自分は武人として栄誉ある一騎討ちの果てに逝くことができる。戦場に生きる者としてこれ以上はない死にかただ。悔いはない。お前は自分との想い出ではなく、未来を見ながら生きる。そう言った。それでも最初は納得出来なかったが、お前を見て、孫家と、何より蓮華殿に仕えるお前が親父に重なって見えた。お前は真面目で少し不器用だけど決して悪い人間じゃない。俺にはそう見えた。」

思「公績。」

楓「ホントはもっと早く話したかったんだけどよ、話そうとする度に親父の想い出が甦って、なかなか言えなかった。だけど今回お互い全力でぶつかって、何か吹っ切れちゃった。」

俺は甘寧に手を差し出す。

楓「改めて、俺は姓は凌、名は統、字は公績。真名は楓だ。これか

らよろしくな！」

甘寧が俺の手を握りしめ。

思「私は姓は甘、名は寧、字は興覇。真名は思春だ。よろしく頼む。」

思春はフツと笑い、握手に応じてくれた。

楓「なあ思春。」

思「何だ？」

楓「親父は強かったか？」

思「ああ、私が勝てたのは揺れる船上という地の利を生かしたに過ぎぬ。今回のような条件であったなら負けたのは私であっただろう。」

楓「そうか。」

ありがとな、思春。

楓「また機会があったら模擬戦に付き合ってくれ。最も次も勝たせてもらうけどな。」

思「二度も負けるつもりはない。次は勝たせてもらおう。」

俺達はようやく仲間になれた。

そこに大将が近づいてきた。

雪「2人供お疲れ様。」

楓「よう、大将。」

思「はっ。」

雪「急に呼び出して悪かったわね。とりあえずもう城に戻って構わないわ。」

思「はっ、それでは。」

思春は城に戻った。旦那はいつの間にか姿が見えない。

楓「あれ？旦那は？」

雪「昴なら決着がついた後にすぐに城に戻ったわ。自分は部外者だから帰っちゃったわ。」

楓「旦那。」

部外者だなんて、そんなことねえのに。

楓「しかしな、思春と一騎討ちだなんてよ、もし俺が思春を殺したらどうしてたんだ？」

雪「それは私も思ったわ。だけどね、今回の一騎討ちは昴が言い出したことなのよ。」

楓「旦那が？」

雪「実はね・・・」

雪蓮 side

早朝、今日はどうやって冥琳と仕事から逃げようかなって考えていると、

昴「おはよう、雪蓮。」

雪「おはよう、昴。」

そこには昴がいた。

昴「1つ頼みがある。聞いてくれるか？」

雪「あら、何かしら？もしかして夜伽のお願いかしら？」

昴「違う。」

そうおどけて見せても昴は反応を示さない。おかしいわね、いつも

の昴なら軽くのつてくれるのに。

昴「今日、出来る限り人気のないところで楓と思春の一騎討ちをさせてほしい。」

雪「!?!?それは何故かしら?」

昴「2人のわだかまりを解消するためだ。」

雪「……。」

昴「……。」

どうやら冗談や酔狂ではないみたいね。・祭辺りに事情聞いたのね。

雪「悪いけど、いくらあなたのお願いででもこれは聞けないわ。」

昴「何故だ?」

雪「話は聞いてるんでしょ?楓が思春を目の前にしたらどうなるかわからないわ。だから私は楓と思春との模擬戦はおるか合同の調練でさえ禁じたの。」

昴「しかしこのままでは、」

雪「分かってるわ。だけどね。正直楓の気持ちは痛いほど分かるのよ。もちろん思春は信頼してるし我が孫家には決して欠かせない人材よ。だけど誰かを憎む気持ちは痛いほど分かるの。私も母様を失ったから。」

昴「雪蓮。」

雪「もちろんこのままじゃいけないことも分かってるわ。だけど今は駄目よ。孫家復興のため、今は楓も思春も失うわけにはいかないの。だからあなたの願いは聞けないわ。」

そう昴の願いに応じることが出来ない。

昴「仇・・・か。雪蓮、楓は多分思春のことを憎んではないと思うぞ。」

雪「何故そう思うの？」

昴「楓が思春を見る瞳に殺意、殺気等がこもってないからだ。」

雪「父を殺されたのよ？」

昴「ああ。だけど思春は卑劣な策をもって楓の父を殺したわけではない。武人と武人の一騎討ちの果ての結末だ。悲しさはあるんだろうが憎しみはないんじゃないかな？戸惑ってはいるだろうけどな。」

雪「だけど、それはあくまでもあなたの予想でしょ？そんな曖昧なものでは部下の命は賭けられないわ。」

昴「頼む。」

雪「・・・万が一、2人に何か起きた時、私達の失う者は計りしれないわ。その時はどう責任をとるの？」

昴「もし2人に何かあったらその時は・・・俺の頸をはねろ。」

雪「!?!?・・・本気？」

昴「ああ。」

雪「・・・。」

昴「・・・。」

本気みたいね。そこまで言うなら昴を天の御遣いを信じてみようかしら。

雪「分かったわ。2人のことは私も気掛かりだったからいい機会だわ。」

昴「悪いな。」

雪「それで、具体的にはどうするの？」

昴「雪蓮は街の外に思春を連れて待っていてくれ。俺も入れ違いに楓を連れていく。」

雪「分かったわ。それでは後で会いましょう。」

昴「ああ。」

楓 Side

楓「昴の旦那がそんなことを・・・。」

雪「昴も無茶を言ってくれるわ。」

やれやれと言った感じだ。

楓「旦那は俺が思春を憎んでるわけじゃないと分かってたんだな。」

雪「分かったた、というより昴はあなたを信じていたんでしょね。」

楓「旦那が・・・俺を？」

雪「そ 楓はそんなことをしない優しい娘だってね。」

楓「そ、そんなこと。」

嬉しいな、他でもない昴の旦那に信頼してもらえることが。

ドクン！

楓「!?!？」

何だ？胸が・・・。

雪「？・・・楓、どうかした？」

楓「い、いや何でもない。」

何だろう、急に胸が熱い。もしかしてこれが恋ってやつなのか？こんな気持ち、初めてだ。でも・・・すごく心地いい。

楓「（孫家の繁栄のため・・・か。）

大将は俺達に孫家の繁栄のために昴の旦那と子を成せと言った。俺はどうせ将来自分を好きになる相手なんざ生涯現れないと思ってから孫家の為ならそれでもいいと思ってた。昴の旦那は強いし賢いから。だけど今は・・・本気で昴の子を産みたいと思ってる。孫家の為とか関係なく、1人の女として・・・でも昴の旦那はその気はないみたいなんだよな。

楓「（どうすれば旦那が俺を見てくれるか、大将か祭さんかシャオちゃんに今度相談してみよう。）」

この話をして3人からからかわれるのはまた別の話である。

かくして楓と思春の長年のわだかまりは解け、新たな絆が生まれることとなった。

続
く

第19話 深き因縁、真の心（後書き）

凌統、甘寧の因縁は実際の三国志をもとにしました。細かい設定は私のオリジナルです。正直自分の文才ではこれが限界です。

感想、アドバイスありましたらよろしくお願いします。それではまた！

第20話 密林の捕縛戦、お猫様から始まる想い (前書き)

今回は・・・正直ちょっと自信がないです。はあ、文才が欲しい。
それではごっごぞ！

第20話 密林の捕縛戦、お猫様から始まる想い

昴side

今日は部隊訓練やるということとで、祭さんから一緒に来るよう言われたので祭さんと穩の後について歩いている。後ろには20人前後の精鋭部隊がついてきている。ちなみに何の訓練かは聞かされていない。祭さんにいくら聞いても『現地で話す』としか言わないし。やがて森の中に入り、ある程度奥に行つたところで、祭さんと穩が足を止めた。

穩「このあたりですね。」

祭「そうだな。皆のもの！これより訓練を開始する！心してかかれ！」

祭さんの声で兵士達は一斉に辺りを窺い始めた。兵士達に緊張が走っている。それにしても……。

昴「なあ、いい加減、何をするのか教えてくれよ。」

祭「うむ、今日は、对工作員の訓練だ。」

昴「工作員っていうと他国の諜報活動や破壊工作をする人間のことか？」

穩「そうです。工作員は明命ちゃん、すでに前もってこの辺りに隠れているんです。」

祭「その明命を、儂、穩、お主とそれぞれの3小隊で見つけて捕らえる、という訓練だ。」
なるほど。

昴「それでこの森と後ろの兵士達を連れて来たわけか。．．．んで明命がさつきから付かず離れずの距離を保っているのはその為か。」

祭「!?!?．．．お主、明命に気づいておったのか!?!?」

昴「ん〜、まあ、微かだけど森に入ってから気配がしたから。」

穩「それで明命ちゃんはどこにいますか?」

昴「それなら．．．、」

ドサツ!

昴「一瞬傍まで来て、兵を1人気絶させて離れていった。」

祭「つ!?!?」

穩「つ!?!?」

後ろの兵が倒れている。．．．ん?よく見ると顔に．．．何か書いてあるな。どれどれ、

『一番にやられました。えへ』

昴「．．．うん。」

祭「明命に捕まるとこのように顔中に落書きをされる。しかもこの墨は特製でしばらくは洗って取れない代物だ。」

それはきついな、捕まって落書きされたら街中をその顔で歩くはめになる。・・・嫌だな。

昴「ま、とにかく明命を捕まえりゃいいんだな。」

穩「そうですね。」

祭「しかし、このまま我が身を守ることを考えても意味がない。」

穩「それでは小隊単位で動きますか？」

祭「そうだな。当初の予定通り、3小隊分かれて動くぞ。」

穩「では、しばらく策敵したらこの地点に戻ってきましょう。もちろん明命ちゃんを捕まえることができればそれで終わりとなりますし。」

祭「よし、それでいこう。それでは穩はあちら、儂は向こうを受け持つ。お主はそちらを頼む。」

昴「・・・わかった。でも俺は1人でいい。」

祭「!?!?・・・明命侮つておると危険じゃぞ?」

昴「大丈夫大丈夫。それじゃ、また後で。」

祭「お、おい!」

俺は森の奥に進んだ。

しばらく一人で明命をやり過ごしながら森をうろつろしているところ、たまに悲鳴や呻き声が聞こえてきた。どうやらあらかたやられちまっただようだな。所々に兵達が倒れている。そして顔にはやはり落書きが。

『注意力散漫』

『先走っちゃいました。』

昴「酷いな。」

さらには、

『卑怯もの』

『人間失格』

昴「何をしたんだこいつら。」

こいつらはまだいい。酷いのは。

『何か嫌』

これは1番嫌だな。何か嫌って何か嫌（笑）

『長男のくせに』

いいじゃん別に、長男でもいいじゃん。

『肉まん』

・・・もはや書くこと無くなったんだろうな。再び周囲を探索している。

昴「!?!?・・・穩、祭さん・・・」

そこには変わり果てた2人の姿が。その顔にはやはり、

昴「むごいな・・・」

穩の顔には『存在価値は巨乳のみと』祭さんには『乳に栄養行きすぎ』と書かれていた。私情からの悪意がこめられた落書きだった。

昴「穩、祭さん、仇は取る。だから今は・・・」

安らかに眠ってくれ。俺はそっと2人の瞳を閉じた

（注）死んでいません。

昴「さてと、そろそろマジになるとしますか。」

俺は周囲の探知を始めた。

明 side

訓練が始まってからだいぶ経ちました。兵達を始め、祭様、穩様も捕らえ、後は昴様だけです。のらりくらり逃げていましたが私を捕まえる素振りも見せなかったので後回しにしましたがもう終わりです。昴様の強さはよくご存知ですが、この森の中なら負けません。

明「（見つけました！）」

昴様は木々の間を特に周囲を警戒することなく歩いている。

明「（ご自分を過信なさっているのか、それとも私を侮っているのか、どちらにしる迂濶ですよ！）」

昴様は大木の影に隠れましたがもう遅いです。

明「それでは参ります。お覚悟を。」

昴「おう、頑張れよ。」

明「はいです。これから捕まえますので見ててください・・・い。」

私の後ろにはいつの間にか昴様がいた。

昴「よっ！」

明「！？・そんな、確かにあの大木の影に！？」

そんな！？私が見過ごした？

昴「ボーツとしていいのか？」

！？・しまった！

明「くっ！」

一度距離を取ります。この森は私の庭のようなものです。一度体勢を整えます。ある程度森の中を進み、茂みに姿を隠す。

明「それにしても、いつの間に私の背後に回ったのでしょうか？」

昴「君が俺から僅かに視線を外した時さ。」

明「あんな一瞬のことで、すごいです。」

昴「すごいだろ。」

明「ですが私も負けませ・ん・ん・ん!?」

私の背後には、

昴「よう!」

そんな、何で!?

明「それなら!」

私は木の太い枝に掴まり、木々の上を渡り歩いて距離を取る。

明「これならいかに昴様でも・・、」

後ろを確認するがついてきていません。振り切った!一瞬安堵して正面に視線を戻すと進行方向の枝の上には昴様が。

昴「これはこれは、お久しぶりです。」 リーザの声。

明「何で!?!」

昴様は規格外です!ですが捕まるとわけにはいきません!昴様に捕まる前に他の枝に!すぐさま他の枝に飛び移ったが・・。

バキッ!

明「はっ!?!」

枝が私の体重に耐えられず、折れてしまった。

明「しまったです!？」

飛び移った先はかなり高い。予期せぬ事態のため、体勢も悪い。このままでは頭から落下してしまう。咄嗟に頭を守り、目を閉じて落下の衝撃に備える。しかし衝撃はいつまで待っても襲ってこない。おそろおそろ目を開けると、

昴「ふうー、間一髪だ。」

私は昴様に抱きかかえられていた。

昴side

俺は明命を捕まえるため、先回りし、明命を待ち受ける。先回りされた明命は焦って傍の木に飛び移ったが、

バキッ!

枝が明命の体重に耐えきれずに折れてしまった。

昴「!?!?…まずい!」

明命は想定外のことに対応出来ていない。このままでは頭から落ちてしまう。この高さから頭から落下したら最悪死ぬ。

昴「間に合えー!」

枝を蹴り、明命を追いかける。間一髪、明命に追いつき、抱きかかえ、木の幹を蹴りながら地面に着地をする。危ねえ危ねえ。明命がおそろおそろ目を開ける。

昴「ふうー、間一髪だ。」

明「えっ?助かった?」

昴「油断大敵だぞ?明命。」

明「ごめんなさいです。……ですが……」

昴「ん?」

明「その気になれば昴様はいつでも私を捕まえられたのですね。」

昴「えーっと……。」

ぶつちやければそのとおりだ。あまり早く捕まえたら訓練にならないし何より明命の面目を潰すことになる。

明「いえ、いいんです。私が未熟なだけですから。」

あちゃあ、明命落ち込んだな。

明「ところでですね。」

昴「どうした？」

明「あの・・・そろそろ下ろしていただけないかと・・・。」

俺はさっきからお姫様抱っこのままだ。明命は恥ずかしそうだが、
けど・・・。

昴「そういや、俺達が捕まったら顔に落書きされるんだよな。」

明「そ、そうですね。」

昴「なら明命は俺に捕まったんだし、明命も罰を受けなきゃ駄目だよな？」

明「そ、それは。」

昴「とりあえず明命はこのまま俺と城に戻ろうな？」

明「ええ〜！そんなの恥ずかしいです！ご勘弁を！」

昴「ダメ。」

明「うう〜、酷いです〜。」

かくして訓練は終わり、城に戻った。途中街で祭さん達は笑われ、

明命は終始恥ずかしそうだった。

翌日、仕事が一区切りし街へ繰り出していた。

昴「何か面白いことないかな？」

誰かを誘おうと思ったけど皆忙しそうだった。仕方なく1人で街に
来ていた。

昴「とりあえずあの店でも・・・ん？」

表通りから離れたところで、何やらしゃがみこんでいる人影を見つ
けた。あれは・・・明命だな。何をやってるんだ？その傍らには猫が
1匹。猫はどうやら日向ぼっこをしながらポーツとしているようだ。

明「お猫様お猫様。日向ぼっこ中ですか？気持ちよさそうですね。」

どうやら明命は猫にアタックをしているようだな。

明「今日はいいいお天気ですし、日向ぼっこには最適ですね！」

何やら話しかけているようだ。

明「ところで・・・そのモフモフの毛、気持ち良さそうですねー。」
猫は特に反応はない。

明「よろしければモフモフさせてもらっていいですか？」

猫は無反応。

明「お願いしますー。えっと、ほら、ちゃんとお礼の品も用意してありますよ。」

明命はそう言うと言った懐から一握りの煮干しを取り出した。猫はどちらの反応を示したようだ。その声は何やらめんどくそだ。

明「えへへ、ありがとうございますー。・・・それでは失礼しますね。」

明命はその声を了承ととり、日向ぼっこ中の猫をゆっくり手を伸ばし、そっと抱き上げた。

明「えへへ、それでは失礼しますね。」

モフモフモフモフ。

明「はうわ〜・・・モフモフ気持ちいいです。」

モフモフモフモフモフモフ。

明「あうあう〜。たまりません〜。」

明命はモフモフを続けている。おお、明命も猫も可愛いなあ。

明「モフモフ気持ちいいです。最高です。」

モフモフモフモフモフ。

明命気持ち良さそうだな。だけどあんなにモフモフしたら猫は……。

猫「……うなあ！」

明「あいたっ！」

あらら、案の定指を引っ搔かれちゃったな。

思わず猫を手放し、その際に猫は立ち去ってしまった。

明「あうう。」

明命は、その猫を物欲しそうな、申し訳なさそうな表情で見送るしかなかった。俺はそこまで見届けて、明命に近づいた。

昴「よう、手は大丈夫か？」

明「はうわ！？どうして昴様が……ひょっとして、見ておられたのですか？」

昴「いや、俺は『お猫様お猫様。』辺りからしか見てないぞ？」

明「あうう、ほとんど全部です。」

顔真っ赤になっちゃったな。．．ああ、そうだった。

昴「手、見せてみな。．．血が出てるな。」

明「あ、こ、このくらい。．．。」

右手の人差し指から血が出ていた。とりあえず内功で．．．いやその前に消毒しなきゃ駄目だな。とりあえず俺は明命の手をとり、人差し指をそのまま俺の口に運んだ。

クチュ、チャポン。

明「っ!？」

軽く傷口を吸い上げる。

昴「とりあえず後は。．．。」

そついや右のポケットに．．．あった。バンソーコーを取りだし、傷口に貼り付けた。

昴「これでよし。これは貼る薬だから城に戻るまで貼ったままにしとけばすぐに治る。」

明「．．／／」

昴「ま、一応城に戻ったら軟膏を塗っておけ。動物の爪は汚れてることが多いからな。」

明「は、はい。ありがとうございます／＼」

明命は何やらうつむいてしまった。

昴「ん？どうした？」

明「い、いえ・・・その・・・失礼します！」

明命は脱兎の如くの勢いで走り去ってしまった。

昴「明命のやつ一体何が・・・ああ。」

女の子の指をくわえるなんざ、いくら治療のためとはいえ・・・よく考えなくても分かるよな。後でちゃんと謝らないとな。

明命 side

明「あうあう、びっくりしてしまいました。」

昴様が突然あのようなことを・・・。

昴様がぐくわえた指に目を落とす。

明「昴様……。」

戦では無双の如く強さと孫史の如く知略を持つ昴様。以前の訓練でいとも簡単に私を捕らえてしまう昴様。何より私以上の美しい髪とお顔を持つ昴様。

明「……私は一体どうしたら良いのでしょうか？」

あの方はこの大陸に轟く天の御遣い。私ごときが好きになってもいいのでしょうか？雪蓮様や蓮華様の方が相応しいのでは……。

明「私なんかが……。」

素敵な事のはずなのに、今はそれが辛い。

明「昴様……。」

明命はただ1人の愛しき人を想い、静かに涙を流した。

続く

第20話 密林の捕縛戦、お猫様から始まる想い (後書き)

明命と言えば猫ですね。中身は物凄く安直でしたが。感想、アドバイスお願いします (TOT)

それではまた!

第21話 自身の限界、自らの歩む道（前書き）

ようやく完成しました。今回は少々自信がありません。これでいいのかな・・・スランプなう。

それではごっぞー！

第21話 自身の限界、自らの歩む道

昴 side

蓮「はあ！」

ブオン！ガキン！

昴「どうした？振れてないぞ？」

蓮「まだまだ！」

ガキン！ガキン！

昴「ただ力を込めればいってもんじゃないぞ？」

蓮「くう、黙れ！」

ブオン！

昴「隙ありだ。」

バキッ！

蓮「うぐっ！」

蓮華は顔を苦痛に歪ませる。

昴「おいおい、これが真剣なら真っ二つだぞ？情けねえ、それでも

雪蓮の妹か？」

蓮「!?!?・・・貴様!」

蓮華の怒りを込めた一撃が襲う。それを俺は・・・、

昂「ヒョイツとな。」

避ける。

蓮「うつ!?!?」

蓮華は体勢が崩れる。

昂「相手が馬鹿正直に剣を受けると思っな・・・それ!」

ブオン!バキッ!

蓮「ぐう!」

蓮華は俺の一撃を受け止めきれず、吹き飛ばされる。

俺達が今何をしているのかという蓮華と模擬戦をしている。どう
いう経緯でそうなったかという・・・。

昴「ふわ、久々に休みだ。」

ここのところ政務尽くしてマジできつかった。3日連続朝から晩まで書類とにらめっこは地獄だよもう。ま、それもとりあえず仕事片付けたから今回限り・・・なはずだけどな。こんなこと考えながら庭に来てみると・・・、

ブォン！ビュン！

昴「ん？」

何か音が聞こえるな・・・庭からだな。

音のするほうへ行くとそこには素振りをする蓮華がいた。

蓮「それ！はぁ！」

ビュン！ビュン！

汗の量からして結構長い時間やってるみたいだな・・・邪魔するものなんだし、どうしようかな・・・水でも用意しとくか。
俺は厨房へ向かった。

・・・
・・・
・・・

・・・

戻って来てみると、蓮華はまだ素振りを続けていた。とりあえず終えるまで待つておこう・・・20分くらい待つと、

蓮「ふう。」

蓮華が素振りを止めた。どうやら一息入れるみたいだな。

昴「お疲れ、精が出るな。」

蓮「ん？昴か。このようなところでどうした？」

昴「とりあえず久しぶりの休みだから何して過ごそうか考えながらブラブラしていたら素振りをしていた蓮華が目に入ってな。ほれ。」

俺は竹筒に入った水と湿らせた布を渡す。

蓮「ああ、すまないな。」

受けとると蓮華は水を一気に喉に流し込んだ。

蓮「ゴクゴクゴク・・・ぷはぁ、生き返る！」

昴「それにしてもめずらしいな、いつもは思春と鍛練してるのに。」

蓮「思春は水軍の訓練に行っているわ。だから1人で鍛練をしていたのだ。」

昴「なるほどな。」

そういや以前の朝議で言ってたな。

蓮「ところで、今日は休みと言っていたな。」

昴「ああ。」

蓮「せっかくの休みのところすまないが、良ければ鍛練に付き合ってもらえないだろうか？」

蓮華と鍛練か・・・それもいいな。何より政務尽くしだから身体を動かしたいしな。

昴「ああ、構わないぜ。」

蓮「助かる。」

それじゃ・・・そういや、村雨も朝陽と夕暮も部屋に置きっぱなしだったな。

蓮「武器を取ってきてくれ。それまでここで待っている。」

昴「いや、それには及ばない。それに時間がもつたないしな。」

さてと・・・おっ！程よい木を発見。

パキッ！

枝を一本折り、余計な小枝取り除く。後は長さを・・・よし、完成だ。即席の少々不格好な木刀が完成した。

昴「さあ、始めるか。」

蓮「?・・・何の真似だ?こちらは真剣なのだぞ?」

昴「見れば分かるよ。俺はこれでいい。」

蓮「・・・私を侮っているのか?」

昴「そうじゃない、これで十分だと判断したまでだ。」

蓮「!?!?・・・貴様!」

昴「悔しいなら言葉ではなく、行動で示すんだな・・・来い。」

蓮「言われなくとも!その余裕、今すぐ消してやる!」

蓮華が地を蹴り、俺に飛びかかる。

蓮「はあ!」

ガキッ!

俺は蓮華の剣を木刀で受け止めた。

蓮「っ!?!?・・・馬鹿な!?真剣を木刀で受け止めただど!?!?」

おそらく避けると予想していたんだろう。

昴「ほら、ボーツとしてて、いいの、かな!?!?」

そのまま蓮華を弾き飛ばす。

蓮「ぐう！」

蓮華は何とか体勢を立て直した。

蓮「馬鹿な、何故？」

昴「種明かしは後だ・・・行くぞ、気を抜くなよ？」

・・・
・・・
・・・

とまあ、今に至る。もうかれこれ4時間位続けている。

蓮「はあ、はあ・・・はあ・・・くっ！」

ビュン、ガキッ！

蓮「くそ！」

昴「はい、終わり。」

バキッ！

蓮「うわっ！」

蓮華は仰向けに倒れた。

昴「今日はここまでだな。」

蓮「ま、待て・・・私は・・・まだ。」

昴「そんなにへ口へ口じゃ、鍛練にならないよ。ここからは身体を動かす鍛練ではなく、頭で鍛練するんだ。」

蓮「頭で？」

昴「今日1日俺の動きを肌で感じたろ？何で俺に一撃も入れられなかったか。ゆっくり考えな。」

蓮「・・・分かった。」

蓮華は相変わらず倒れたままだ。

昴「動けないなら部屋まで連れて行こうか？」

蓮「大丈夫だ。少し休めば起き上がれる。しかし、何故お前の木剣は折れないのだ？もしかしてそれが氣というやつか？」

昴「いや、いくら氣でこれ（木刀）を強化しても立て続けに蓮華の剣を受けたら、元が木だからすぐにへし折れるさ。」

蓮「ならば何故？」

昴「君の振るう剣と接触する時に剣の切れ味が一番鋭い垂直角度を外してなおかつ体全体で打ち込みの衝撃を吸収したんだ。」

蓮「……………」

呆気にとられてるな。

蓮「簡単に言ってくれるな……そのようなことをいとも容易く……」

昴「出来るんだな。」

蓮「……………」

昴「……………」

蓮「昴。」

昴「ん？」

蓮「雪蓮姉様相手に同じようなことが出来るのか？」

昴「……無理だな。思春や楓でも同様にな。」

蓮「そうか……………」

昴「……………」

蓮「お前は以前に言ったな。『ゆっくりでいい。自分の歩幅で歩けばいい』と。」

昴「ああ。」

蓮「そう遠くないうちに孫家復興のための戦が始まる。その時に私は何も出来ないのではないかと考えてしまう。私は姉様のように先頭に立って皆を引っ張って行くことは出来ない。姉様は私の尊敬する姉であり、目標でもある。でも姉様のことを知れば知るほど自分がいかに矮小な存在か思い知らされる。私は姉様のように出来ないのか……。そう考えると焦るなと言われても焦れてしまう。」

なるほど、尊敬する姉、偉大な姉を持つ妹……。か。

昴「雪蓮のようになれるかなれないか。その問いに答えるなら、蓮華、君は雪蓮にはなれない。」

蓮「!?!」

昴「率直に言う、目指すだけ不毛だ。」

蓮「……くっ!」

昴「自分がどう在るかどう在りたいか知りたければ明日もここにきてくれ、待っている。」

俺は庭を後にする。

蓮華 side

蓮「くそっ！」

昂との模擬戦、最初から自分に勝ち目があるとは思っていなかった。せめて一矢報いられば、そう考えていた。しかし実際は、あれほどの余裕をとられ、一太刀入れるどころか木剣をへし折ることも出来なかった。・・・そして何より・・・、

昂「君は雪蓮にはなれない。目指すだけ不毛だ。」

あのような言葉まで吐かれてしまった。

蓮「くそっ！」

悔しい。目から流れる涙を止めることが出来ない。

『王はみだりに涙を流してはならない。』

昔母様が言っていた言葉だ。ここには誰もいない。だから今だけ、今だけは・・・この悔しさを明日、全てぶつける！

蓮「う、うわあああ！！！」

私は一人庭で思い切り泣いた。

そこに1つ見守る影があったことに気付かず。

昴 side

昴「ふう。」

俺は蓮華と別れた後もう一度厨房に行つて水をもらい、汗を拭き取つた後部屋に戻っている。もう街に行くにも中途半端な時間なので部屋で軽い筋トレ、ストレッチをして休もう。そう考えていた。

スタスタスタスタ……。

やがて自室の前に着き扉のまで止まる。

昴「ふう。用があるなら早くしてくれ。」

そう言つと柱の影から……。

昴「やっぱり思春か。」

思「……。」

昴「用があるからここまで付いてきたんだろ？」

思「……楽しいか？圧倒的力で他者をいたぶり、愉悦に浸るといふ

のは。」

・・・ああ、なるほどね。

昴「わざわざそれを言いに来たのか？」

思「・・・。」

沈黙する。もはや肯定と同義だな。

昴「それを言うために蓮華の前では現れず、俺が1人の時を狙って声をかけたのか？」

思「！？・・・ちっ！」

気付いていたのか！？とでも言いたげだな。

思「蓮華様は孫家の1人。亡き文台様のご息女が1人であられる。そのお心にかかる重圧は我らでは理解の外だ。そんな繊細な蓮華様のお心を何故貴様は叩き折るような真似をする！」

はあ・・・全く、蓮華といい思春といい。

昴「へえー、蓮華の心つてこの程度のことです折れるような脆いものなんだ？己の主君を随分と過小評価するんだな。」

思「・・・っ！？」

ギリッ！

齒軋りがこちらにも届いた。

昴「どのみち、この程度で折れるような心ならそんなもん・・・俺は知らん。いつその内に叩き折ってやったほうが蓮華のため、孫家のためだ。」

思「!?!?・・・貴様ー!」

思春が自分の得物に手を掛ける。

昴「こんなところで剣を抜いたらすぐに人が飛んでくるぜ?それに袁術の客將の配下が刃傷騒ぎ起こしたら、いかに対象が俺でも孫家がだいぶ不利になるぞ?最悪責任の一端が蓮華にだって及ぶ。」

思「・・・くっ!」

昴「ま、とりあえず俺に言えることは、蓮華をもう少し信じてやりな。蓮華は思春が思っている以上に強いぞ?」

思「話はそれだけだ。では、またな。」

それだけ言って自室に戻った。

思春side

思「・・・っ！」

気に食わん男だ。初めて会った時から感じていたことだ。腕は立つ。頭も切れる。弁も立つ。しかし・・・。

思「あの男は蓮華様に悪い影響しか与えん！」

私は認めん。御剣昴。貴様のことは絶対に！

昴side

翌日の昼下がり、政務もそこそこに切り上げ、昨日の庭に向かった。すでに蓮華は待っていた。

昴「悪い待たせたか？」

蓮「特に時間を決めていたわけではない。構わないわ。それより・・・。」

蓮華が俺の木刀に目を落とす、

蓮「やはりそれを使うのね。」

昴「ああ。」

蓮「私にとってはそっちのほうが腹ただしいわ。・・・そして、昨日の最後の言葉。」

昴「君は雪蓮にはなれないと言ったことか？」

蓮「そうだ。」

昴「それは今も訂正するつもりはない。」

蓮「ならば私の手で訂正させるだけだ！」

昴「・・・そうかい。」

蓮華は地を蹴り、俺に一直線に向かってくる。

蓮「はあ！」

ガキン！

昴「おいおい、昨日と何も変わってないぞ？力だけましても無駄だと言っただろ！」

ブオン！

俺は蓮華を引き離すために木刀で弾き飛ばす。

蓮「くっ、まだまだ！」

蓮華はすぐさま体勢を立て直し、再び向かってくる。

蓮「これならどう！」

今度は真っ正直にはなく、いくつかフェイントを入れてきた。

昴「（なるほど、昨日とは全く同じというわけではないみたいだな。・・・だけど。）」

俺は蓮華の剣に木刀を合わせ、

昴「殺気がこもってない一撃なんて、おそるるに足りないよ。」

後ろへ大きく弾き飛ばした。

蓮「きゃっ！」

蓮華は飛ばされ倒れるがすぐに起き上がる。まあ、木刀が体に触れたわけではないからな。

昴「昨日一晩考えた成果、見せてみな。」

蓮「言われなくとも！」

蓮華が改めて向かってくる。

蓮華はあらゆる手を尽くし向かってきた。だがそれでも俺に一撃はおろか、木刀をへし折ることすら出来ない。やがて、

蓮「はあ、はあ、はあ・・・くっ！」

そろそろ策も体力も尽きてきたようだ。

昴「どうした？もう種切れか？」

蓮「ま、まだまだ！」

気力こそ尽きてないが体力まではそうは行かないようだ。もうそろそろだな。

昴「はあ、蓮華がこの様じゃ、万が一、雪蓮がいなくなったら孫家は終わりだな？」

蓮「！？・・・取り消せ・・・。」

昴「ん？」

蓮「今の言葉、取り消せ！」

昴「悔しいなら取り消させてみせる。」

蓮「ああ、そうさせてやる！」

蓮華は策も何もなく、ただ感情のまま突っ込んできた。

蓮「うおおおお！」

もはや策も何もなく、ただ感情のまま剣を振るってきた。動きそのものは始めた当初よりもいいが、あまりに単調過ぎる。当然俺には当たらない。怒りに任せて、力任せの攻撃を長時間続けてきたツケが一気に襲ってきた。

蓮「はあ．．．はあ．．．。」

もはや体力は限界ギリギリで。手持ちの剣でかろうじて体を支えている。

昴「もうろくに体も動かせないだろう。今日はこれまでだな。」

俺は木刀を肩に下げ、蓮華に背を向けた。

蓮「ま．．だ．よ。まだ．．終わって．．。」

昴「よせ、もうこれ以上は無理だ。」

蓮華は疲労が限界を越え、脳に酸素が行き届いていないせいか、目も虚ろで、意識が朦朧としている。恐らくもう半分は意識がない。

蓮「私．．は、尊・敬する雪蓮・姉様の妹．．。」

蓮華が剣を握りしめ、俺に向かってくる。

蓮「そして．．偉大なる．．孫堅文台の娘．．．孫権・仲謀だ！」
昴「しょうがない、気絶させて大人しくさせ．．!？」

ドクン!

あわてて振り返ると今までとは別人の殺気を放つ蓮華の姿があった。

蓮「ハアアアア!!!」

昴「くっ!」

まずい、速さ、剣速が段違いだ!

あわてて促そうと木刀を合わせるが、

ヒュイン!

昴「!?!」

木刀と剣が交差した刹那、俺の木刀が根元から綺麗に斬られた。蓮華はそのまま意識を失い、その場に倒れた。最後の最後の体力も尽きたのだろう。

昴「まさかな、綺麗に切断されるなんてな。」

予想もしなかった。まさかこんな綺麗に……とりあえず蓮華を介抱するか。俺は蓮華を抱き起こし、木陰に寝かせた。

蓮「う・ん。」

昴「ん？」

小一時間ほど経ち、蓮華が目を覚ました。

昴「お目覚めか？」

蓮「私・・・一体・・・！？・・・そうだ！模擬戦は！？」

あわてて起き上がろうとする蓮華を寝かしつけた。

昴「まだじつとしてる。」

蓮「ああ、すまない。」

蓮華が横になる。

蓮「最後の方の記憶が曖昧なのだが、夢かもしれんが、私は昴の木剣を斬ったような・・・。」

昴「夢でも幻でもないよ。ほら。」

俺は切断された木刀の柄を見せた。

蓮「！？・・・あれは夢では・・・ならどうして、私はもう最後残った体力なんてほとんど・・・まさか情けをかけたのか？」

昴「力を計り損ねたのは事実だけど切断させるつもりは毛頭なかつ

た。」

蓮「ならば、何故？」

昴「2つの要素が重なったからだ。1つは疲労が限界を越してたとだ。」

蓮「どういうことだ？」

昴「人間つてのは疲労が限界に達すると1番楽な動作をするんだ。つまり、1番自然な動作だ。蓮華は正直無駄な動きが多かったからそれによって1番速さと力がのる一撃を放った。」

蓮「なるほど。」

昴「もう1つは君の中の孫家の血だろう。」

蓮「母様の？私に流れる血は誇りではあるがそんなものが要因になるのか？」

昴「一概に血筋つてのは馬鹿に出来ないぜ？人は鍛練と実戦を多くこなせばある程度の高見に行ける。けどそこから先、更なる高見、後世に名を遺すほどの高見に行くために必要なのは才能、つまり血筋だ。事実、最後の1撃、君から放たれた殺気は雪蓮と同等のものだった。一撃の速さと力強さも同様にな。」

蓮「私がそんな一撃を……。」

昴「無意識に覚醒したってところだな。扱いこなすにはまだまだ鍛練も実戦経験遥かに足りない。ま、その辺はこれからの努力次第だ。」

蓮「そうか・・・私にそんな力が・・・」

嬉しそうだな。

蓮「私も努力すれば、いつか姉様のように・・・」

昴「もう一度言うが君は雪蓮にはなれないぞ？」

蓮「！？・・・何故だ！？さっきだって姉様と同じ一撃を『聞け。』
！？」

昴「君は雪蓮にはなれない。そして雪蓮はどう頑張っても蓮華にはなれない。それは雪蓮は雪蓮であって蓮華は蓮華だからだ。」

蓮「私は・・・私？」

昴「君と雪蓮は違う。たとえ血を分けた姉妹であつてもだ。自分は自分以外の何にもなれない。他人になんてなれっこない。他人なるうとするなんてこれ以上にならない不毛なことだ。」

蓮「・・・それでは、私はどうすればいい・・・」

昴「蓮華、君はもう雪蓮を追うな。雪蓮の歩む道、それは雪蓮だけの道、そして王道だ。雪蓮だけにしか歩めない。そしてそれだけが王道ではない。」

蓮「・・・。」

昴「王の在り方というのは何も雪蓮だけが全てではない。雪蓮のよ
うに先頭に立って道を切り開く。それも1つの王道。他には策略、
謀略を操り、己が描いた絵を完成させるために臣下を巧みに適材適
所に使う王。言わば霸道。」

そう華琳のような王。

昴「理想を掲げ、理想を叶えるために仲間と力を合わせ、一緒に戦
う王。」

そう桃香のような王。

昴「道はいくらでもある。どの道も正解も不正解もない道だ。蓮華、
君は、君だけの王道を見つけ、そして歩みを進める。武も知も、も
ちろんあるに越したことはないが、それが王に1番必要な資質とい
うわけではない。君はもう雪蓮の道を歩く必要はない。君の道を探
し歩め、孫仲謀。」

蓮「・・・はい。」

昴「とりあえず今は休め。今だけは・・・な？」

蓮「・・・あ・・・あ。」

蓮華はゆっくりと目を瞑り、ゆっくりと眠りに落ちた。

昴「限界まで体力使ったからな。」

俺は蓮華の髪を撫で、顔を覗きこもつとしたその時、

思「貴様、今何をしようとした？」

そこには思春がいた。殺気をビンビンに放った思春が。

昴「何って別に俺は・・・。」

そこでハッと気付く。今の自分の状況に。

横たわる蓮華 膝枕する俺 髪を撫で顔を覗き込む俺

うーん、誤解を与えるには十分だな。

思「斬る。」

昴「待て！落ちつけ！」

思「聞く耳もたん！」

昴「持ってくれよ！」

思春がジリジリと近づき、今まさに襲い掛かるつとめるその時、

雪「昴に思春？どうしたの？・・・あら蓮華も。」

思「雪蓮様？」

昴「雪蓮。」

助かった。

雪「何かあったの？思春はやけに殺気立ってるようだけど。」

思「雪蓮様、御剣昴が有能なのは認めます。ですが！この男が我々に必要な存在だとは思えません！このような、不埒で不真面目で無責任な男は孫家には不要です！」

ひどい言われようだな。

雪「うーん・・・分かったわ。それなら思春、昴と一騎討ちをしない。」

昴「何？」

突然 何を・・・。

雪「ほら、前に思春と楓がしたみたいに、一騎討ちをすれば分かりあえるんじゃないかしら。」

昴「ちよっ、いや待てよ・・・。」

それはあくまでもあの時は楓が思春に憎しみを抱いているわけじゃなかったからああなったわけで。思春の場合は・・・、ちらりと思春を見る。

思「殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す。」

相変わらず殺気は全開だ。

雪「とりあえず、これはもう決定だから」

雪蓮の奴、楽しんでるな。

雪「勝負は明日、この場所で、2人ともいいわね？」

思「私が勝てばこの男は自由にしても？」

雪「いいわ。思春が勝ったら好きにしなさい。」

思「はっ、それでしたら・・・。」

雪「昴もいいわね？」

昴「はあ、分かったよ・・・。」

雪「今日はそれぞれ仕事に戻りなさい。」

思「はっ!」

思春は庭から去っていった。

雪「それじゃ、明日は楽しみにしてるからね」

雪蓮は軽やかな足どりで去っていった。

はあ、大変なことになったな。

蓮「・・・ううん、す・・・る。」

蓮華は幸せそうに眠っていた。

かくしてひょんなことから思春と一騎討ちをすることになってしまった。

続
く

第21話 自身の限界、自らの歩む道（後書き）

思春が春蘭化してるような・・・。本当は蓮華と思春の拠点はセツトにする予定でしたが、分量の関係で2つに分けました。どうしよ、小蓮の話浮かばないな・・・。

感想、アドバイスがありましたら遠慮なくお願いします。

それではまた！

第22話 一騎討ち、迷走する心 (前書き)

完成しました。キャラ崩壊警報を発令します。こんな感じの思春、
どうですか!?

それではどうぞ!

第22話 一騎討ち、迷走する心

昴「……。」

思「……。」

今は俺は思春と睨みあっている。昨日決まっていた一騎討ちをするためだ。

思「必ず貴様を……。」

昴「……はあ。」

何か気が乗らないな。というか一番気がかりなのが、

明「昴様、頑張ってください。」

祭「うむ、いい酒の肴になりそうじゃ。」

穩「楽しみです。」

冥「まったく雪蓮は……。」

蓮「……何故2人が？」

何故か観客が？蓮華は状況が飲み込めてないみたいだが。

昴「何で皆いるの？」

雪「私が呼んだからよ」

昴「・・・はあ。」

孫家の武官文官勢揃いだな。

思「御剣昴。貴様に蓮華様は渡さん。」

話がでかくなってる。何で？

チラッと雪蓮を見ると。

雪「（ニヤニヤ）」

雪蓮が何か吹き込んだんだな。・・・そういえば、思春が勝ったら俺を好きにできるといふことは・・・。

昴「雪蓮、勝つたら好きにできるって話、俺も同様の条件でいいんだよな？」

雪「ん〜、思春、どうする？」

思「構いません。勝つのは私です。」

雪「ということよ。」

おっしゃ！俄然やる気出てきた！

雪「勝負はどちらかが戦闘不能になるまで、いいわね？」

思「了解しました。」

昴「分かった。」

楓「思春く、ちったあ楽しませろよ〜！」

思「黙って見ている楓！」

へえー、あんな冗談言える仲になったんだな。少し感動だ。

雪「それでは2人とも、準備はいいわね。」

思春が鈴音を抜き。俺は朝陽と夕暮を抜いた。

雪蓮が右手を上げ、

雪「・・・始め！」

思「はっ！」

先に仕掛けたのは思春だ。

昴「ふっ！」

ガキン！

とっさに朝陽で防ぐ。思春はすぐさま距離をとった。

なるほど、自身の速さを利用しての戦法か。あいにくその戦法は以前に見た。なのであまり苦勞はしない・・・と踏んでいたんだが・・・。

昴「!?!？」

ガキン！ガキン！ガキン！

心なしか、以前の楓との一騎討ちの時より速さも力強さも上だ。

思「これで終わりではないぞ？」

昴「ちっ！」

ギン！

思春を弾き飛ばし一度距離をとる。

昴「ふう。」

やっぱり気のせいじゃないな。明らかに以前見たときよりも違う。前は手を抜いていた・・・という訳でもないんだろう。要するに気持ちの問題だ。楓は自分が殺めた武人の娘。本気のもりでも実質7〜8割程しか出せていなかったのだろう。今は相手が俺だから何の遠慮もないと。楓よりやりにくいな。積極的に向かって来ない相手は。戦闘不能ってことは気絶させるか武器を手放させる、あるいは破壊して喉元に剣を突きつける・・・こんな具合か。思春を気絶させるのは気が引けるし、武器破壊等は完全勝利とは言い難いな。どうするか・・・あつ、1つある。完全勝利の選択肢が。1番難しい選択肢だが、1番平和で分かりやすい勝利だ。

思「来ないのか？ではこちらから行くぞ！」

ダッ！ガキン！

昴「おっと！」

思春の一撃を防ぐ。
やることは決まったがこの選択肢は仕込みにかなりかかる。しばらくは思春に主導権を渡すか。

昴「行くぜ？」

思「・・・来い。」

俺は思春に向かって行った。

観客side

10合、20合と昴と思春が斬り合いをしていく。

明「思春殿が押していますね。昴様は防戦一方です。」

楓「うーん・・・。」

明「どうしました？」

楓「旦那があまりにも手を出さなすぎる気がすんだよな。」

明「それは思春殿がそうさせないだけなのでは？」

楓「旦那の実力も思春の実力もよく知っている。旦那がこの程度なわけがねえ。」

祭「そのとおりじゃ。」

明「祭様？」

祭「昴の顔よく見る。顔に焦りが一切ない。それどころか汗1つかいてない。」

明「ですが、思春殿は隙を見逃さず、絶えず攻めていますか・・・。」

祭「思春は確かに隙を見逃さず攻めておる。じゃが昴はあまりに露骨に隙を見せすぎだとは思わんか？」

明「・・・どういうことでしょう？」

祭「思春程の腕なら隙を見つけ、そこを狙うのは容易い。じゃが逆に言えばたった一ヶ所の隙に必ず攻撃が来るわけじゃ。もしわざと隙を見せておるのなら、思春はそこに攻撃を誘導されておるわけじゃ。」

明「!？」

楓「!？」

やがてもう一度昴と思春が交錯すると双方に距離が生まれた。

祭「どうやら決着がつきそうだ。見ておれひよっこ共、滅多にお目にかかれん次元の高い戦いじゃ。」

今一騎討ちが終わろうとしている。

昴 side

思春の攻撃を防ぎ、距離を取る。

思「どうした？守ってばかりでは私には勝てないぞ？」

おっしやるとおりだ。仕込みも十分だし、そろそろいいか・・・。

昴「思春。」

思「何だ？」

昴「次の一撃で終わらせる。覚悟はいいか？」

思「！？・・・笑えない冗談だな。先程まで防戦一方だったお前が。」

昴「やれば分かるよ。」

思「言ってる。ならばその自信を打ち砕いてくれよう。」

俺は再度構えを取る。両者の間に緊張が走る。

ダッ!

俺と思春が同時に飛び出す。

昴「はあああ!」

思「ふっ!」

ガキン!

両者が剣をぶつけ合い、そして止まる。

俺は朝陽と夕暮を鞘に戻す。

思「何故剣をしまう。私はこのとおり何ともないぞ?」

昴「勝負はついた。もうこれ以上は意味がない。」

思「・・・貴様は私のみならず、一騎討ちまで汚すか!もう許さん!
その首、即刻落としてくれる!」

思春が怒り心頭で飛び掛かる。

昴「待て!そんなに激しく動いたら・・・。」

ビリビリビリ。。。

昴「さっきの斬り合いで服の継ぎ目に切れ目を入れまくったから。。。」

ビリビリビリビリ。。。

昴「服が破ける。。。」

思春の服が禪を残して破れた。

思「!?!?..キヤアアア!?!」

思春が胸を両腕で隠し、その場でうずくまった。

昴「あゝ、すまん。加減を間違えた。胸のサラシまで斬るつもりはなかったんだが。。。」

思「(キッ!) 貴様、よくも!」

思春は半裸のまま俺に襲いかかってきた。俺は思春の剣が当たる直前に縮地で思春の背後に回った。

思「何!?!」

俺は思春に身につけている外套を肩に掛けた。

思「何の真似だ!」

昴「もう終わりだ。そのカツコじゃ戦えないだろ？」

思「!?!?・・・/ /」

思春は状況を思いだし、外套で体を隠す。

雪「思春、あなたの負けよ。」

雪蓮からも審判が下った。

昴「そういうことだ。とにかく俺の勝ちな。あ、一騎討ちの際の取り決めも忘れんなよ?」

俺はそれだけ告げてその場を後にした。

思春side

思「くっ!」

このような屈辱を味わうとは。

雪「お疲れ思春。どう、昴は？」

思「強いです。ですが・・・。」

それは分かっていたことだ。

祭「随分派手にやられたのう思春。・・・しかし、お主綺麗な体をしておるの？」

思「っ！？」

咄嗟に体を隠す。

雪「あら祭、そんな趣味があつたの？」

祭「そうではありませぬ。思春の体に傷1つ付けず。服の継ぎ目だけに切れ目を入れる、このようなことよほどの腕がないかぎり出来はすまい？」

思「！？」

雪「確かにね。ただの賊や雑兵ならともかく、思春を相手にやるなんてねえ？」

・・・格が違いすぎる。最初から勝負にすらならなかった。

祭「まあ昴は思春に一切の傷を負わすことなく決着をつけるためにこのような手段を用いたのじゃろう。」

そのような気遣い、いっそ叩きのめしてくれれば！

祭「何にせよこれで昴の言うことを一つ聞かねばならぬがのう?」

思「!?!?・・・くっ!」

雪「大丈夫よ。昴は無茶なお願いはしないわよきつと。」

祭「楽しみに待っておれ。」

雪蓮様に祭殿も他人事のように!御剣昴、これ以上の屈辱を強いるなら貴様を・・・!

思春は新たな憎悪抱いた。

昴side

一騎討ちから翌日。

カキカキカキカキカキカキカキカキカキカキ。

今大量の書簡と格闘中。理由は一騎討ちの勝利の約束のためだ。どうせやるならお互いが休みの時がいいと思い、休みの調整のために書簡を片付けている。確認してみると、思春の休みが明後日で、おれが4日後だ。なので間2日の書簡を片付けるため、大急ぎで片付けている。

カキカキカキカキカキカキカキカキカキ。

・・・
・・・
・・・

そして前日の夜。

昴「よし！終わったー！イヤッホイ！」

睡眠時間もほとんどとらずに書簡を片付けていたため、現在異常にハイテンション中。

さつと、早いとこ冥琳に書簡の束を渡しますかね 書簡を渡し時に冥琳が一言、

冥「化け物が貴様は・・・」

と、半分驚愕、半分呆れていた。思春に日時と場所はもう知らせてあるから・・・よし寝よう。

昴「おやす・・・ZZZ・・・」

布団に潜ると同時に夢の世界へ旅立った。

その翌日、城門の前に来てみると、既に思春は来ていた。

昴「よう、待たせたか？」

思「……。」

無愛想だな。

昴「それじゃ行くか？」

思「何処へ行くつもりだ？」

昴「まあ、ついてきてくれ。」

俺はとりあえず当初の目的の場所へ向かった。

思春 side

私は御剣昂に連れられ街を歩いている。こいつは何も話さない。

思「いい加減に何処へ行くか話したらどうだ？」

昂「すぐに着くから慌てんな。あ、ちょっと待っていてくれ。」

何だ？

御剣昂は1人のご老人に駆け寄り、持っていた荷物を持ち始めた。どうやら重そうに荷物を持っていたご老人を気遣ったのだろう。目的の場所まで荷物を運び、ご老人に礼を言われるとこちらへ戻ってきた。

昂「悪い悪い。それじゃ改めて、行こう。」

・
・
・
・
・
・

「御遣い様、今日はお休みなんですか？」

昂「ああ、久々に休みだ。」

「御遣いさん、こないだは助かったぜ！」

昴「何、困った時はお互い様だ。」

「御遣い様、こないだはほんに助かりました。おかげで体が楽になりました。」

昴「それは何よりだ。だけどあまり無理はしないでくれよ？」

「御遣い様、遊んで。」

昴「また今度な！」

街を歩くと御剣昴は随分話し掛けられる。どうやら慕われているようだ。御剣昴を眺めていると。

昴「ん？どうした？」

思「何でもない。」

こちらの気配に目敏い奴だ。

しばらく歩くと、

昴「着いたぞ。」

思「ここは……。」

服や装飾品等売っている店だ。このようなところで何を……。

昴「さ、入ろう。」
御剣昴に言われるがまま店に入った。

昴 side

思「・・・何だこれは。」

昴「何って、服だ。」

今思春が着てる服は赤のワンピースに赤の円形に広がる鍰にリボンをあしらった帽子かぶっている。ちなみに思春は髪を下ろしている。これは俺が華琳のところに行った時、沙和が愛読していた阿蘇阿蘇に載っていた衣装だ。っていうか阿蘇阿蘇って（笑）

そんなツツコミはさておき、今思春はその衣装を着ている。

思「そんなことは分かっている。何故私がこのような服を着ねばならない！」

昴「まあ、何故かって言われると・・・俺の趣味だ。」

思「・・・斬る。」

昴「冗談だつて！これから行く場所は普段の服だとちょっとな。」

思「冗談ではない！このような姿、武人を辱しめるにも程がある！」

昴「一騎討ちで負けたんだから文句は聞かないぞ。」

思「くっ！」

昴「とりあえず、次行くぞ？」

街を歩くと、思春は注目の的である。もちろん皆思春に見とれてい
る。

思「見る！人々が私を嘲笑っている・・・」

昴「違うって、皆思春に見とれているんだ。」

思「・・・馬鹿にして・・・」

昴「そんな気はないって・・・」

どっちかと言うと俺に嫉妬と羨望の視線、更には殺気まで向けられて
いる。

俺達は目的の場所に向かった。後ろからは思春が殺気をチリチリ当
てている。かつてない殺気だ。だけど、気にしない　気にしない
い

俺達は街の大通りを外れ、人通りの少ない脇道を歩いている。

思「どこまで行くつもりだ！貴様は何も話そうとしない。それが私にどれだけ、『着いたぞ。』何？ここは・・・。」

着いたのは少々広い空き地にぽつんと一軒の建物が建っていた。

昴「皆、出てこいよ〜！」

すると建物から子供達20人ほど出てきた。

「あ〜、お兄ちゃんだ〜！」

「御遣いしま〜！」

瞬く間に子供達に囲まれる。

「遊んで遊んで〜！」

昴「分かった分かった。」

思「この子供達は？」

昴「この子供達は両親が共に働きに出たりして1人きりの子供達だ。」

そついつ子らがここに集まって遊んでいるんだ。」

思「なるほど、それで私をここに連れてきてどうしろと?」

昴「今日はこの子達の面倒を一緒に見てほしいんだ。」

思「私がか?」

ジロツと思春が子供達に目をやる。子供達は俺の後ろに隠れてしまった。まったく。。。俺は思春の後ろに回り、頬つぺたをグニと引っ張った。

思「ひはまゝはひをふふゝ! (貴様ゝ何をするゝ!)」

昴「そんな無愛想な顔じゃ子供達が怯えるだろ? ほゝら笑って笑って」

グニグニと頬つぺたを引っ張る。

昴「こつちの人は甘寧お姉さんだ。今日はこのお姉さんと一緒に遊んであげるからなゝ!」

「あははゝ甘寧お姉ちゃん面白い顔ゝ!」

「お姉ちゃん遊ば遊ばゝ!」

思「ええーい、離さんか!」

昴「とにかく、今日1日よろしくな?」

思「負けたのは私だ。従おう。」

思春はしぶしぶながら従ってくれた。

・
・
・
・
・
・
・
・

それからしばらく子供達と一緒に遊んだ。追いかけてっこをしたり、ケンケンパをしたり、縄を束ねて縄跳びをしたりして遊んだ。遊んでいる最中、

ステーン！

歩き始めて間もないであろう子供が派手に転び、そして・・、

「ビエエエェン！！」

泣き出してしまった。

思「こ、こら泣き止むんだ。」

思春が慌ててなくさめるが、

「ビエエエェン！！」

幼子は泣き止む様子はない。思春がおろおろしている。

昂「思春、そんな高いところから見下ろすようにしてたらそのくらい

の歳の子は不安がるって。視線をその子と同じか低くなるぐらいまで下げて。」

思「こ、こいつか？」

昴「それで優しく抱きしめて背中を撫でながら優しく声をかけてあげて。」

思「む？ほら、もう痛くない。男の子だろ？いつまでも泣くな。」

「ふえ？」

思「ほら、もう大丈夫だ。」

思春はその子の母親の如く慈愛に満ちた顔でその子を抱きしめている。

「えへへ、ありがとう、甘寧お姉ちゃん！」

思「ふふ。」

昴「（へえー）。」

そついう顔も出来るんだな。子供達もなついているみたいだし。しばらく遊んでいると子供達の親が次々尋ね、1人、また1人と母親の元に帰って行く。やがて最後の1人も母親に連れられ、帰って行った。

「バイバイ、御遣い様、甘寧お姉ちゃん！」

俺と思春は軽く手を振り、子供を見送った。

昴「さてと、子供も今ので最後だ。思春、ありがとな。」

思「構わん。・・・それにしても随分手慣れているのだな？」

昴「昔から子供にはよくなつかれるほうでな、よく面倒を見ていたんだ。まあ、何より子供達の退屈な顔見るより楽しく笑っている顔の方が好きだしな。」

思「なるほど。」

昴「悪い気はしなかつたら？」

思「・・・。」

言葉には出さないけど。満更ではなさそうだな。

昴「疲れてるところ悪いが次が最後だ。付き合ってくれないか？何、時間が時間だから食事に行くだけだ。」

思「・・・いいだろう。」

俺達は大通りの俺がよく行く飲食店に向かった。

思春side

昴「ゴクゴクゴクゴク・・・ぷはぁー！」

思「・・・。」

今私は御剣昴のよく行くという飲食店で食事をしている。奴は酒を飲んでいゝる。私は遠慮した。

昴「改めて、今日は悪かったな。」

思「構わんと言ったはずだ。・・・悪い気分ではなかった。」

少し手がかかったがな。

思「御剣昴。」

昴「ん？」

思「貴様の認識は少し改める。しかし、やはり貴様は蓮華様の関わるな。蓮華様の気持ちはお前に理解出来るとは思えん。」

昴「・・・そうだな。蓮華の心の内、王の気持ちなんて分からない方がいい。民の期待。兵の期待。将の期待。そして自身の責務・・・分りたくはないさ・・・。」

思「御剣昴？」

貴様は何故そんな顔する。そのような辛く悲しい顔を。

昴「王と将兵に関わらず、人と人なんて結局完全にわかりあうなんて無理だ。けどな、だからそれが何だ？分らないから何もしないのか？関係ないさ。俺は力になりたいから出来ることをするだけだ。思春もそうだろう？」

思「……。」

昴「俺が正しいと言うつもりはないが、俺は蓮華を導きたいだけだ。そのくらいは・・勘弁してくれ。」

言つと御剣昴は酒を一杯煽った。するとそこへ、

祭「なんじゃ、昴、ここにおったのか？」

昴「祭さん、どうかしましたか？」

祭「冥琳が探しておつてな。渡された書簡について何か思うところがあるらしいが。」

昴「あゝ、なるほど、分かった、すぐに行く。悪いな思春。そういうことだから城に戻るな？」

思「分かった。」

昴「勘定はここに置いていく、またな。」

御剣昴はお金を置き、店を出ていった。

思「ふう。」

ようやくいなくなったか。

祭「思春よ、横、良いかのう?」

いつまにか手には酒と器が握られていた。

思「構いません。」

祭殿は横に座ると、無言で酒を飲み始めた。しばらくすると、

祭「思春よ、いい加減認めたらどうじゃ?」

思「?・・・おっしゃる意味が分かりかねますが・・・。」

祭「そう言うか、ならばつきり言うが、お主が昴にあれほどに感情をあらわにするのは昴の性格や蓮華様に近づくのが気に入らぬのが原因ではあるまい?」

思「では何だと?」

祭「お主はただ単に昴が他の女に近づくのが我慢ならぬだけであるう?」

思「・・・なっ!?!なっ、何を根拠にノノ」

祭「思春よ、お主は気が付いているかどうかは知らぬが、お主は昴が近くに来ると無意識に目で追っておったぞ?それに他の女が近づく途端に機嫌が悪くなる。」

思「・・・／＼」

くっ、私が出たようなことを／＼

祭「今日一日昴と過ごしてどうじゃった？お主が口にするような男ではなかったであろう？」

思「・・・。」

祭「策殿も蓮華様も小蓮殿もも奴に惹かれておる。明命もあの楓さえも同じじゃ。無論、儂もな。あのお堅い冥琳もおそらくはな。」

思「・・・。」

祭「お主も少しは素直になれ。たまにはこの老骨の助言に耳を傾けてみる。案外、道が開けるかもしれんぞ？」

祭殿は言つと酒を一杯煽った。

祭「まあ、どうするかはお主次第じゃ。一人でゆっくり考えるがよい。」

祭殿はそれだけ言い残し、店を後にした。

思「・・・私は。」

分からない。確かに御剣昴が蓮華様に近づくと無性に腹が立った。それと同じくらい空虚な気持ちになった。

思「くそ！」

そのあと思春は酒を大量に煽った。次の日二日酔い苦しめられたのは言うまでもない。思春は自身に生まれた気持ちに戸惑うばかりであった。

続く

第22話 一騎討ち、迷走する心 (後書き)

前話、思春が若干春蘭化してたので、愛紗成分を混ぜてみました。
こんな思春もいかなっと思えます。

感想、アドバイスお待ちしております。

それではまた！

第23話 運命との戦い、決死の鉞（前書き）

完成です。今回の出来は・・・正直イマイチです。

それではどごぞぞ！

第23話 運命との戦い、決死の戦い

昴 side

昴「はあ、今日も忙しかったな。」

賊がまだまだ活発化してるから仕事は当然多い。邑邑や土地は荒らされるし、荒らされたら当然整備し直さなきゃならない。各地から流れてくる流民の対応もしなきゃならない。放っておけば賊に成り下がって各地で暴れて、また、整備・・・の連鎖になる。それにしても、冥琳は俺が来るまで膨大な量の書簡をこなしていたわけだ。よく体壊さなかったな。

お？前方からやってきたのは冥琳か。

冥「む、昴か。仕事は終わったのか？」

昴「まあな。」

冥「昴は仕事速くて助かる。」

昴「それほどでもないさ。そっちの仕事はまだ終わらないのか？もう夜更けだったのに。」

冥「後少しで終わる。そうすれば休むさ。」

昴「体を大事にしるよ？」

冥「案ずるな。雪蓮の筆頭軍師である私がこのようなところで倒れるわけにはいかないからな。」

昴「まあそれもある・・・けど・・・。」

何だ、今一瞬何か・・・。

冥「どうした？」

昴「いや、何でもない。」

冥「心配せずともすぐに休む。ではな。」

昴「ああ、またな。」

冥琳は部屋に戻っていった。

昴「・・・。」

何だろう、さっきから何か引っ掛かっているんだけど・・・まあいいか。
俺も休むかな。

俺は部屋に戻り、眠りに落ちた。

翌日、俺は街の警邏に出ている。他の将は現在重要な軍議中。俺は言わねば客将みたいなもので軽い軍議には参加するが、重要な軍議には参加しない。じっと待ってるのも退屈なので兵達と一緒に警邏をしている。

昴「……。」

昨日から何か頭の中で引つ掛かっている。その何かが分からない……。

昴「……。」

兵A「御遣い様、いかがなされました？」

昴「えっ？」

兵B「先程から心ここに在らずといった御様子ですが……。」

昴「ああ、悪いな、少し考え事をしていただけだ。」

兵A「そうですか、御体がすぐれないのであれば警邏は我々が行いますので、城で御養生ください。」

昴「心配いらない。本当に大丈夫だ。」

兵A「それならばいいですが……。」

考え事に集中し過ぎてポーツとしてたみたいだな。

兵A「そういえば、あの食堂の給仕の娘とはどうなったんだよ?。」

兵B「別に何も無い。」

兵C「こいつ、別れたんだよ。」

兵A「何ー！ホントかよ!？」

兵B「別に、たいしたことない。」

兵C「何言ってるんだ。顔も目も真っ赤にして大泣きしたくせに。」

兵B「う、うるさい、まだ警邏は終わってないんだ、次行くぞ!」

兵A・C「ハハハッ!」

兵達が下世話な話をしている。

昴「話しながらでも構わないが、仕事はきっちりこなせ。。。」

何だ、今、頭の中で何か繋がった。さっきあの兵は何て言った?

『顔も目も真っ赤に。。。』

確かそう言った。何か引つ掛かる。何かが。。。。!?

そっだ、昨日最後に会った冥琳。確か。。。。!?!?・まずい、もし俺の思ったとおりなら!

昴「すまない、俺は城に戻る。後の警邏は任せた!」

兵A「り、了解しました!」

俺は大急ぎで城に戻った。

俺はとにかく急ぐ。もし俺の思ったとおりなら。頼む、杞憂であつてくれ！

俺は走り続け、会議行われている一室にたどり着いた。

「御遣い様、まだ軍議は終わっておりませんので用件は後程・・・」

昂「悪い、事は急を要する。通らせてもらつぞ。」

「み、御遣い様！？」

扉の前で番をしていた兵士の制止を振り切り、部屋に飛び込んだ。

バン！

扉を乱暴に開ける。皆の視線が俺に集まる。

祭「何じゃ昂、まだ軍議の途中じゃぞ？」

昴「すまない。」

冥琳は・・・いた！

昴「冥琳、少しの間ジツとしていてくれ。」

俺は冥琳の目を見つめる。

冥「昴よ、突然何を・・・。」

冥琳の瞳の眼球の色素がわずかに薄い。

昴「冥琳、手を出してくれ。」

冥「な、何だと言うのだ。」

冥琳はおずおずと手を差し出す。俺は冥琳の手を両手で包み、冥琳の氣を調べる。

昴「（頭・・・胸にかけては違う。そこから下・・・!?!?・・・やっぱり・・・）」

嫌な予感が当たってしまった。

昴「明命!」

明「は、はい!」

昴「この街には華佗という医者がある。今すぐ連れてきてくれ。」

明「医者ですか？」

昴「早く！」

明「はい！分かりました！」

言うとすぐに部屋を飛び出していった。

雪「何？いったいどうしたの？」

昴「それは華佗が来たら説明する。」

華佗。あいつがいればもしかしたら・・。

・
・
・
・
・
・

明「お待たせしました！連れてまいりました。」

明命の傍に赤い髪をした男が立っていた。

昴「久しぶりだな、華佗。」

佗「昴か！久しぶりだな！」

華佗とは雪蓮や華琳、桃香と出会う前、賊に襲撃を受けた後の邑に寄った際、負傷者の治療をしていた男がいた。それが華佗だった。俺も自身の内功の治癒術を用いて、邑人の治癒を行った。その際に知り合った。

昴「相変わらず元気そうだな。早速で悪いが彼女を診てほしい。」

佗「分かった。・・失礼するぞ?」

華佗が冥琳の診察を始める。

佗「・・ここは、違うな。ここか・・なつ!??・・これは!?!」

昴「気付いたか?」

佗「ああ!これは・・。」

雪「ねえ、さつきからそつちばっかり盛り上がって、そろそろ説明してほしいんだけど。」

昴「そうだな、率直に言う。冥琳は病魔に冒されている。」

雪「え?」

冥「なつ!?!」

「「「「!?!?」「」「」

昴「それもかなり厄介な病魔にな。」

冥「待て、私は別に何ともないぞ。」

昴「冥琳本人にまだ自覚症状はないだろうが本当だ。」

雪「そんな、嘘でしょ!？」

佗「本当だ。彼女の肺の辺りの氣が乱れている。おそらく悪性の病魔だ。」

祭「冥琳は大丈夫なのか!？」

昴「このままじゃまずい。放置すれば数年と経たぬうちに……
・死ぬだろうな。」

冥「!?!?…なん…だと…。」

額に手を当て、恐怖する。

昴「いや、発症したばかりだから今から処置をすればまだ間に合うはずだ。」

祭「本当か!？」

昴「ああ、必ず。華佗、冥琳、周瑜を助ける方法は2つだ。1つは病魔の原因を直接切除し患部を取り除く。確か華佗は痛みを消す薬つてのを持ってたよな?」

佗「麻沸散のことか?毒の治療をするのに使う散薬だが、体を切除するならあれでは駄目だ。軽く体の一部分を開くならともかく、腹

全体を開くとなると麻沸散でも効き目が足りないだろう。」

昴「なら方法は1つしかない。以前に華佗がやっていた、氣を込めた鍼を患部に打ち込み、病魔を退散させる。」

佗「……。」

雪「どうしたの……その方法なら治せるんでしょ？」

佗「……理屈では治せる……しかし。」

華佗が悔しげな顔を浮かべ、

佗「この病魔を退散させるには膨大な量の氣が必要だ。俺の氣だけではとても足りない……。」

祭「なん……じゃと……。」

雪「そんな……嫌よ……冥琳がいなくなるなんて絶対嫌よ！」

雪蓮の声が部屋に響き渡る。

昴「ふうー、何とも巡り合わせだな。」

蓮「……どういうことだ？」

昴「この国に俺と華佗がいたことが、だ。」

祭「どういふことじゃ!？」

昴「華佗が足りない分の氣は俺が補う。それで解決だ。」

祭「!?!?・・・そうか、昴もかなりの氣の使い手じゃったな!」

佗「いやしかし、人間はひとりひとり氣の種類が違う。俺とは別の氣が混じっても意味を成さない。」

昴「だろうな。けどな、これを見な。はあっ!」

俺は手に氣を集中させる。手が仄かに光を帯びた。

佗「俺と同じ氣!?馬鹿な、何故俺と同じ氣をお前は持っている!」

昴「俺の治療術たる内功の極意は傷を癒す対象の氣と同調、つまり同じ氣を傷口にかざし、治癒を促す。他人の氣を真似るなんて造作もない。幸い、俺と華佗の氣は似通ってるから真似るのも楽だ。」

佗「何てことだ。行ける。行けるぞ!昴の氣が加われば病魔を退散させることができるかもしれない。」

雪「冥琳は助かるの?」

昴「助かる。いや俺達で必ず助ける。華佗、始めよう。」

佗「分かった。それでは周瑜さん、そこに立ってくれ。」

冥「ここで良いのか?」

佗「ああ。昴、俺の肩に手を。そこから俺に氣を送ってくれ。」

昴「了解。」

華佗の肩に手を置き、神経を集中させる。

昴「スー、ハー。」

一回深呼吸をする。

行くぞ！

昴「ハアアア！」

同調させた氣を手に集中させ、華佗に送り込む。

佗「いいぞ、その調子だ！」

俺の氣をどんどん華佗に送り込む。

昴「華佗！まだか！？」

佗「まだまだ！まだこれでは足りない！」

くそっ！まだか！

目一杯の氣を華佗に送り込む。

佗「これでは不十分だ！これではまだ！」

限界一杯まで氣を高めているのに！だったらその限界を越える！
氣功闘法の奥義、七星閃氣。

昴「貪狼、解放！」

俺の体全体が青く輝き、氣が一気に膨れ上がる。

昴「(ぐっ！氣の同調計りながら氣を拡張させると体にかかる負担が尋常じゃない！)まだか！」

佗「後少しだ！」

くっ、仕方ない、もう一段階拡張させるしかないな！氣を同調させながらもう一段階拡張させたら・・・体持つかないけど・・・やるしかない！

昴「巨門、解放！」

俺の氣が更に膨れ上がる。

ズキッ！

くそっ！体が・・・！？

昴「ゴホッ！」

俺の口から血が吐き出された。

雪「昴！？」

楓「旦那！」

祭「お主、まさか氣を無理やり拡張させておるのか！？」

雪「どういづこと!?!」

祭「昂は何らかの方法を使い、氣の容量を拡張させておる。じゃが自身の限界を越える氣を出しておるのじゃ、このまま続けたら昂は・
」

雪「!?!?・・昂!」

冥「昂!もう止める!このままではお前が!」

昂「構う・・かよ!助ける・・絶対に・・助ける!もう、死なせない。誰も、絶対に・・死なせねえ!」

身体中激痛が走る。もう少しだ。もう少しもってくれ!

佗「よし!これだけの氣があれば行けるぞ!」

華佗が鍼を天に掲げた。

佗「はああああっ!」

集めた氣が鍼に集まる

佗「我が身、我が鍼と一つなり!全力全快!必察必治癒・・病魔覆滅!げ・ん・き・に・なれえええええつ!」

金色に輝い鍼を冥琳の胸の中心に打ち込む。部屋全体が眩い光に一つまれた。やがて光はおさまり。

佗「病魔・・退散!」

雪「どうなったの？」

佗「病魔は滅することに成功した。」

祭「それでは！」

佗「しばらくは安静にしてもらいたいが、もう心配ない。」

そうか・・・助け・・・られたんだな・・・良かった・・・。

俺は冥琳の無事を確認しそのまま意識を手放した。

「「「「昂（様）（旦那）！」「」「」

昂「・・・うっ。」

ここは・・・。

昂「知らない天井・・・ではないな。」

俺の部屋だな。

佗「目が覚めたようだな。」

昴「華佗か・・・俺は・・・そうかぶっ倒れたわけか。」

佗「限界を越えた気を放出したんだ、しばらく安静にしている。」

昴「俺はどのくらい眠っていたんだ？」

佗「丸2日といったところだ。」

昴「随分と寝てたんだな。」

七星閃氣を同調させながら使ったから当然か・・・。

昴「仕事随分貯まってるんだろうな・・・俺はいつから仕事に復帰出来るんだ。」

佗「これから体の回復を早める為に鍼を打つ。激しく体を動かさないのであれば明日にも大丈夫だ。」

昴「そうか、助かる。」

佗「それにしても、周瑜の病魔によく気が付いたな。俺でさえはつきり診なければ見逃してしまうほどの病魔だっていうのに。」

昴「・・・冥琳の瞳だ。」

佗「瞳？」

昴「あの病気は発症すると瞳の色素が僅かに薄くなるんだ。俺が初めて冥琳、周瑜に会った時に比べて薄かったのに違和感を覚えたから気付くことができた。」

と言っても、瞳の色素が薄くなったからといって必ずしも病気が発症したというわけではないけどな。

佗「そんなことで分かるのか？」

昴「命に関わる病気は大概体や行動に初期症状が現れる。俺はそれで病気の判別をしている。」

佗「・・・やはりお前は面白いな。五斗米道ですら分からないことを知っている。」

昴「必ずしも、前兆が現れたら病気だってわけじゃないけどな。やはり氣の歪みを診たほうが確実だ。」

佗「それでも勉強になる。・・・おっと、少し喋り過ぎたな。そろそろ鍼を打つぞ？」

昴「ああ、頼む。」

佗「血の流れを正し、体の回復を早めるツボは・・・、ここだあああつ！いつけええええ！五斗米道おおおつ！」

光り輝く鍼が俺に打ち込まれる。

ピガアーーン！

佗「これで大丈夫だ。」

昴「お？お？」

相変わらずやかましいが華佗の治療はさすがだな。

佗「俺は皆に昴が目を覚ましたことを伝えてくる。安静にしているよ？」

昴「ああ、いろいろとすまん。」

佗「ではまたな。」

華佗は部屋から出ていった。

昴「ふう。」

丸2日寝てもまだ疲れは取れないな。
しばらく物思いに耽りながら過ごしていると。

ガチャ。

昴「ん？」

部屋の扉が開かれる。そこに立っていたのは。

昴「冥琳。」

冥「華佗から目を覚ましたと聞いて一足先に来させてもらった。構わないか？」

昴「構わないよ。」

冥琳が俺のベッドの側の椅子に腰掛ける。

冥「・・・すまない。」

昴「何のことだ？」

冥「私のせいで昴がこのようなことに。」

昴「俺が好き好んで勝手にやったことだ。気にするな。」

冥「しかし！・・・けれど何故だ？何故お前はそうまでして私を・・・」

昴「何故って、理由は必要か？誰かを助けるに小難しい、理屈や理由が？」

冥「もうこのような無茶をしないでくれ。お前が倒れた時、私は怖かった。私のせいでお前が死ぬんじゃないかって。」

昴「俺は生きてるだろ？」

そう言うと冥琳は俺を抱きしめた。

冥「馬鹿、私や皆がどれだけ悲しんだと思っているんだ。」

昴「冥琳・・・。」

冥「お前はいつか私達の元を離れる。私達の関係は言わば利害の一致による共闘に過ぎない。それでも・・それでも私はお前に死んでほしくない。お前を失いたくないんだ！だから、自分を犠牲にするようなことはするな。それで私だけ生き残っても私はどうすれば良いのだ？」

昴「・・・すまない。俺は・・・ただ俺は冥琳を救いたかった。助けなかった。」

ただそれだけだった。わかっていたはずなのに、残される人間がどんな気持ちなのか、よくわかっていたはずなのにな。

昴「本当にすまなかった、冥琳。」

冥「いや、こっちこそ。本当はこんなことを言いたかったわけではないんだ。全く、私はとんだ恩知らずだな。」

昴「冥琳の言うことは最もだ。俺はなんだかんだ言っただけのことしか考えていなかった。」

冥「いや、そんなこと・・・やめよう。このままじゃ平行線だ。とにかくすまな・・・いやありがとう、昴。」

昴「ハハッ、どういたしまして。」

何か照れくさいな。

冥「昴、1つ約束してくれ。」

昴「何だ？」

冥「もう無理はするな。皆を悲しませるような事はしないでくれ。」

昴「……。」

冥「約束してほしい。」

昴「……分かった。約束するよ。」

皆を悲しませたくはないし。それに、俺にはまだまだやることもあるしな。

冥「そうか……では……。」

冥琳が俺に顔を近づけ、そして、

チュツ。

俺の頬に口づけをした。

昴「め、冥琳!?!」

冥「これは約束の証だ決して約束を破らせないためのな。」

昴「……/」

冥「今日はゆっくり休め。ではな。」

冥琳は部屋から立ち去った。

昴「つたく／＼」

冥琳があんなことするなんてな。．．．それにしても、柔らかい唇だったな．．．。

昴「はっ！？俺は何を．．．」

とにかく、今日はもう寝よう。明日から冥琳の顔見れるかな？まあいいや、寝よ！

俺は深い眠りについた。俺は翌日から仕事復帰を果たせた。

続く

第23話〈運命との戦い、決死の鉞〉（後書き）

以上、冥琳の拠点でした。少しキャラ崩壊かなって感じはしますね。

感想、アドバイスお待ちしております。

それではまた！

第24話 非凡の才、次世代の軍師 (前書き)

ふう。完成しました。亜莎の拠点です。そういえば亜莎出してなかったな・・・け、決して忘れていたわけじゃないんだからね！・・・
・ゴホン！

それではどうぞ！

第24話 非凡の才、次世代の軍師

昴「親衛隊の訓練？」

祭「うむ、今日は親衛隊の訓練なのじゃが、親衛隊の隊長である思春は急遽別の任務が入ったのう。代わりにお主にやってもらいたいのじゃ。」

昴「まあ構いませんが、思春が駄目なら同じ親衛隊の明命でもいいのではないですか？何だったら楓でも。」

祭「そうなのじゃが、今回は無手による訓練なのじゃ。明命では他の親衛隊とそう変わらん。まあ楓なら適任ではあるのじゃが・・・。」

昴「？」

祭「親衛隊にはお主の強さに触れてもらいたいのじゃ。中には自信を、心が折れる者も現れるかもしれないが、であるなら初めから親衛隊なぞ務まらんじゃろう。冥琳の一件でしばらくまとりに体を動かしてはおらぬのじゃろう？親衛隊は手練れの兵を集めておるからちよつどいい運動になるはずじゃ。」

昴「まあそうですね。分かりました。やりますよ。今からですよね？」

祭「うむ、訓練場に集まっておるからすぐに向かってくれ。」

昴「了解。それではすぐに。」

俺は軽く身仕度をし、調練場に向かった。

調練場に着くと親衛隊はすでに2列に並んでいた。人数は30人ほどだ。

うーん、やっぱり皆女の子なんだな。どうやらこの外史の優秀な人材は圧倒的に女性に偏るらしい。

俺は彼女ら親衛隊の前に立ち、挨拶を始めた。

昂「ゴホン。今日は親衛隊の隊長である思春、甘寧が任務のために訓練に出られない。代わりに今日の訓練は俺、御剣昂が担当させてもらう。皆、よろしく頼む。」

ざわざわ・・・。

親衛隊の面々は知らされていなかったらしく、ざわつき始めた。

昂「とりあえず・・・ちょうどいい人数だから左から1人ずつ相手をしていこう。早速始めよう。各自、準備をしてくれ。」

親衛隊が調練場の端に広がり、規則正しく並んだ。

昴「さあ、始めようか？」

「は、はい！よろしくお願いします！」

うーん、ガチガチだな。

昴「そう緊張するな、いつもの訓練の通りにやればいい。な？」

「は、はい／＼．．．それでは、参ります！」

親衛隊最初の1人が飛び出した。親衛隊の訓練が始まった。

．．．
．．．
．．．

昴「踏み込みが甘い、次。」

．．．
．．．
．．．

昴「もつと足を使って相手を攪乱しろ。次。」

・
・
・
・
・
・
・

昴「むやみやたらに突っ込むな、次。」

訓練は滞りなく進んで行った。

親A「ハアハア、噂には聞いていたけど・・・」

親B「つ、強いです。ハアハア。」

親C「ハアハア、御遣い様、汗一つかいてません。」

親D「それ、どころか、ハアハア、ほとんどあの場から動かれてません。ハアハア。」

親E「格が違い過ぎます」。ハアハア。」

あらかた終わったか。これで最後だな。

?「よ、よろしく願いします!」

昴「君で最後だな?」

随分と眼力のある娘だな。

呂「呂蒙、字は子明!行きます!」

昴「来い。」

呂蒙が俺に一気に飛び込んできた。

昴「ふつ。」

俺は体を半身にして避ける。

呂「まだです!」

即座に体勢を立て直し、蹴りを浴びせる。

昴「甘いな。」

俺は体を倒して蹴りを避ける。

呂「そこ!」

昂「!?!」

とっさに右腕を後頭部にかざし、

ガシッ!

呂蒙の踵落としを防ぐ。

呂「!?!」

まさか防がれるとは思わなかったのだろう。ふーん。

呂「次、行きます!」

呂蒙が俺に再び飛び込んで来る。

呂蒙の実力そのものは親衛隊の中でもそう目立つものではない。しかし、この娘の戦い方は面白い。普通戦闘は如何に相手の隙を見つけ、あるいは作り出し、そこを突くかだ。フェイントを入れたり、強打でガードをこじ開けたり。呂蒙の場合、ただ一度の一撃の為に二重三重に伏線を張る。誘導、おとり、思い込み等を巧みに利用している。言うなれば、戦場の軍師が立てる策みたいだ。さてと、そろそろ終わらせるかな。俺は呂蒙に飛び込んだ。

呂「はあ!」

呂蒙が正拳突きを仕掛けるが、途中で止め、中段蹴りに切り替える。フェイントか。

俺は構わず前に出て、中段蹴りの芯を外す。

呂「なっ!?!」

そのまま呂蒙の胸に掌打を打った。

呂「ぐう！」

呂蒙は後方へ飛ばされる。十分な手応え・・・いや、まだか。

呂「ケホツ、まだま・・・っ!？」

俺は呂蒙の顔スレスレに拳を止めた。

昴「勝負あり。ここまでだ。」

呂「ま、参りました・・・た。」

呂蒙は糸の切れた人形のように倒れた。

昴「おっと。」

あわてて呂蒙を受け止める。

昴「それじゃ、訓練はここまでだ。各自俺が指摘したことを念頭に入れて鍛練に励んでくれ。以上、解散！」

「「「「はい!」「」「」

親衛隊の隊員が各々散らばって行く。

昴「さてと。」

俺は呂蒙を抱き上げると、親衛隊の1人を捕まえ、呂蒙の部屋を聞き、部屋まで送り届けると自室に戻った。

昴「……。」

自室に戻ると、部屋の机に大量の木簡や書簡が。

昴「……これをやれと？」

はあ、雪蓮ではないけど逃げ出したいな。

昴「……やるか。」

書簡、木簡との格闘が始まった。

翌日。

昴「……。」

無言で政務。

カキカキカキカキカキカキカキカキカキ

昴「・・・あゝ、終わらん！」

いつまで経つても減らない木簡書簡。途中2時間位仮眠を取り、再び政務に向かったのだがなかなか終わらない。っていうか量を減らしてもすぐに増える。

昴「・・・気晴らしに少し街にでも行くか・・・」

俺は筆を置き、街に繰り出した。

昴「やっぱり賑やかだな。」

街は相変わらずの賑わいを見せていた。

昴「腹も減ったし、何か腹ごしらえでも・・・ん？あれは・・・。」

一軒の本屋に見たことのある顔が。あれは確か・・・そうだ、親衛隊の呂蒙だ。

彼女はどうかやら本を読んでいるようだが、

昴「顔と本との距離近いな、っていつか目細。」

ひょっとして彼女って。

昴「よう。」

話しかけてみると、目を細めたまま俺に近づき、

呂「・・・はっ!?み、御遣い様!こ、こんにちは!」

ようやく俺に気付いたらしくあわてて挨拶をした。

昴「昴でいいよ。邪魔したか?」

呂「いえ、そのようなことは。」

呂蒙はあわあわしている。この娘が読んだのは・・・これか。

昴「君は兵法に興味があるのか?」

呂「あの・・・その・・・そうです。」

昴「なるほど、それでああいう戦い方が出来るわけだ。」

呂「それはその、私は親衛隊の中でも優秀ではないので、戦略を立てて戦うしか親衛隊の皆に勝てませんので。」

昴「力が及ばないならそれ以外のものを利用する。いい考えだ。」

呂「あ、ありがとうございます！」

呂蒙は何度もペコペコ頭を下げた。

昴「ところで、1つ質問なんだけど。」

呂「何でしょう？」

昴「君ひよっとして目が悪い？」

呂「!?!?・申し訳ありません!これは決して昴様が嫌いだとかそういうことではなく・・・、」

昴「あゝ違う違う。呂蒙は物が良く見えてないんじゃないか？」

呂「そのようなことは・・・。」

昴「そうか?なら・・・。」

俺は懐からペンを取りだし、掌にペンで書き出し、

昴「そのままの位置で、俺の掌には何て書いてある?」

呂「はい。えっと・・・国?いや違う、甘?じゃない、えゝとえゝと・・・関・・・関です!」

昴「それでいいのか?」

呂「は、はい!」

昴「……。」

呂「……(トキトキ)」

昴「はずれだ。ほれ、良く見てみな。」

俺は掌を呂蒙の目の前に近づける。

呂「これは……鼠の絵ですか？」

昴「そういうこと。」

呂「そんなく、絵だなんて一言も『文字だとも言っていないぞ。』う
く。」

昴「とりあえずそのままだと不便だろ。よし……そうだな……。」

俺は呂蒙の手を掴み、

昴「少し付き合ってくれ。」

呂蒙の手を引く。

呂「す、昴様!?!」

昴「いいからいいから。」

呂「あの、ここは・・・。」

昴「服屋だ。ただここはそれ以外にこういう物もあってな。」

呂「眼鏡・・・ですか？」

昴「そ。とりあえず、そうだな・・・。」

あの絵が見えないってことは相当に悪いよな。呂蒙の場合、沙和のような眼鏡より、こっちのモノクル（片眼鏡）の方が似合いそうだな。後は度だな。・・・このくらいかな。

昴「これをかけてみてくれ。」

呂「は、はい！」

呂蒙はおずおずと渡された片眼鏡をかけた。

昴「どうだ？」

呂「あつ。」

おっ？

呂「はい！とても良く見えます。」

さっきまでおどおどしていた呂蒙だったが片眼鏡をかけるとその顔がばあぁと明るく輝いた。

呂「すごいです。なんだか、目の前が広くなった感じがします！」

昴「そうか、なら良かった。」

呂「わぁ。」

気に入ったみたいだな。

昴「なら、これにするか。呂蒙、君にこれを贈らせてもらっよ。店主、これを貰おう。」

呂「そんな！昴様にそのようなことをしていただく理由が……っ／／」

昴「理由なんて気にするな。贈りたいから贈るだけだ……どうした？」

ん？どうしたんだ？呂蒙の顔がやけに赤い気がするが……。

呂「い、いえ／／……その、申し訳ありません。」

昴「謝ることじゃないだろ？はいこれ。」

呂「あ、ありがとうございます！何とお礼をすれば……。」

昴「お礼なんて気にする・・・ふむ、そうだな。なら一つ手伝ってほしいことがあるんだが。」

呂「？」

自室にて。

昴「いや助かったよ。一人でこなすの大変だったんだよ。」

呂「いえ、・・・ですが、私なんかが政務に携わってよいのですか？」

昴「俺も後で確認するし、大丈夫だよ。むしろ貯めておく事の方が問題だつて。」

呂「それならば良いのですが・・・。」

.....

・
・
・

数時間後。

昴「ふう。後は俺1人でどうにかなりそうだな。ありがとな、呂蒙。」

呂「いえ、お力になれたのなら光荣です。」

昴「今更言うのも何だが、悪かったな。今日は休みだったんだろ？」

呂「お気になさらないください。特に予定ありませんでしたので。」

昴「そうか、ならいいんだが。．．．それにしても．．．」

呂「？」

昴「君は政務もある程度こなせるし、さっき本屋で読んでいた書物
といい、君は学問に興味があるのか？」

呂「は、はい。まだまだ全然分かりませんが。」

昴「そうか．．．」

それなら．．．うん、そうだな。

昴「呂蒙、君さえ良ければ、俺が君に学問を教えよう。」

呂「……ええ！？そ、そんな！昂様にそのようなことまで！私なんかのためにお時間をいただくなんておそれ多いです！」

昂「そこは気にしなくていいよ。暇な時だけだしな。恩義を感じたならまた今日みたいに政務を手伝ってくればいいさ。」

呂「……。」

昂「どうする？」

呂「そこまでおっしゃっていただけるなら……昂様、よろしくお願ひします！」

昂「そうか、なら明日からよろしくな、呂蒙。」

呂「あ、あの……。」

昂「ん？どうした？」

亜「私のことは亜莎とお呼びください。」

昂「それ真名だろ？いいのか？」

亜「はい！昂様は天下に名を轟かせている天の御遣いですし、それに私にこれから学問を教えていただく師でもあります。是非私の真名をお預かりください！」

昂「分かった。では亜莎。よろしくな。」

亜「はい！未熟者ですが、よろしくお願ひします！」

亜莎の家庭教師ならぬ個人レッスンが始まった。

翌日から暇を見つけては亜莎に政略、軍略、謀略等を教えた。亜莎は飲み込みが良く、1を教えれば3も4も理解する。茉里と同じくらい教え甲斐がある。亜莎の家庭教師になってから2週間程が経ったある日。

亜「試験……ですか？」

昂「ああ。今日で一区切りつくし、亜莎がどれだけ理解出来るか確認する意味も込めて、な？」

亜「はい！分かりました！」

昂「試験は明日だ。今まで教えた所を出題するからちゃんと復習しておくようにな。」

亜「分かりました！」

昂「では今日はここまでだ。ではまた明日な。あまり夜更かしするなよ？」

亜「はい！お疲れ様でした！」

俺は亜莎に告げると。亜莎の部屋を立ち去った。

昴「さてと。」

今日中に済ましとくか。まずは思春のところだな。次は・・・

亜莎 side

翌日、私は昴様に言われた通り、試験に取り組んでいます、

亜「これは・・・。」

一部、昴様からご指導いただいていない問題が、それにこの試験、とても難しい。

亜「こんなの、私には・・・。」

ううん、昴様は私なら解くことができると信じているからこの問題

を出したんだ。私が挫けたら昴様の信頼を裏切ることになる。

亜「頑張らなくちゃ。」

私は一心不乱に問題に取りかかった。やがて、

亜「これで最後の問題だ……。これって。」

最後の問題、その内容は……。

『この先、この大陸はどう動く?』

亜「これは……。」

兵法とも違うし政略ともなんか違う。

亜「……。」

私は私の思うがままに書いた。試験は終わり、昴様に用紙を提出した。

亜莎から答案用紙を預かり、今採点している。

昂「へえー。」

試験は9割以上正解だ。残りも考え方は面白い。

昂「さすがだな。でもやっぱり・・・。」

1番の興味は最後の問いだ。この大陸の行く末について。亜莎の問いは。

昂「!?!?・・・はははっ。やっぱり亜莎は面白い。」

最後の問い。亜莎の答えは。

『漢王朝は滅び。群雄割拠の時代が来る。大陸が1つになることが出来なければ新たな勢力により漢の地は無くなる。』

新たな勢力、それは異民族のことだろう。確かに漢王朝が機能しなくなり、各勢力が各々バラバラになったら異民族の侵攻は退けられないだろう。今でも幽州や西涼には異民族の小競り合いがちらほらあるみたいだし。奴等が本腰入れて侵攻しないのは腐敗しているとはいえ漢王朝が機能しているからだろう。

昂「こんなこと、一介の武人、いや並の軍師では行き着かないだろう。」

やっぱり、俺のにらんだ通りだ。計画通りに運ぶかな。そろそろあれが出来上がってるだろうし。さてと街に取りに行くかな。

俺は街に繰り出した。

亜莎 side

亜「これは・・・。」

試験の翌日。てっきり採点結果が発表されると思っていたのですが、部屋に置いてあったのは、

亜「これは・・・服？」

置いてあった箱の中には少し紫色の大きめな帽子と服だった。そして書き置きが。

昴『これを着て。今すぐ城の庭まで来るように。』
と書かれていた。

亜「これを着て・・・庭まで。」

私は言われるがままに置いてあった服に袖をとおり、城の庭に向か

った。

昴side

雪「どうしたの？こんなところに呼び出して。」

冥「何だと言うのだ？」

昴「悪い悪い。ちよつとな・・・おつ、来たな。」

庭先から用意しておいたチャイナドレスと帽子を着た、亜莎の姿が。

亜「お、お待たせしました・・・孫策様、周瑜様？」

雪「あら？この娘は？」

冥「確か親衛隊の・・・」

昴「亜莎、自己紹介してくれ。」

亜「は、はい！姓は呂、名は蒙。字は子明です！」

昴「ありがとう。それで用と言うのは他でもない。この娘を軍師見習いとして推挙したいんだ。」

亜「……ええー！！！！！」

冥「この娘をか？」

昴「見所は十分だ。十分に鍛え、経験を積ませれば、いずれ立派な軍師になるだろう。」

亜「い、いえ、私なんかが軍師だなんて……。」

昴「昨日の試験な、亜莎を軍師として推挙するかしないかの意味合いもあったんだ。結果は合格だ。少なくともあの試験は素質ない奴には解けない問題ばかりだ。その試験を9割以上正解していたんだ。凡夫なはずがない。」

亜「あゝ、うう。」

雪「私は構わないわ。昴が言うなら問題はなさそうだしね。」

冥「ふむ、今の私達は1人でも多くの仲間が必要だ。特に軍師をな。」

昴「なら、決まりつてことだな。」

亜「あの、私なんかに軍師なんて務まるのでしょうか？」

昴「それはやってみないと分からないさ。だけどな、私なんか、そんなことを言ってたら。軍師どころか何も出来ないぞ?」

亜「……。」

昴「亜莎、こつちへ……。」

亜「?」

雪蓮と冥琳から離れた場所に移動した。

昴「君には素質がある。それ以外にも理由がある。」

亜「理由、ですか?」

昴「冥琳の件は聞いているか?」

亜「お噂程度ですが……。」

昴「冥琳の病魔は疲労や睡眠不足、精神的重圧から発症する病魔だ。冥琳はこの先も無理を繰り返すだろう。今は俺がいるから負担をある程度減らせるが、俺はそのうちここを離れなきゃならない。だから俺の代わりに冥琳を助けてやってくれないか?」

亜「……私に出来るでしょうか?」

昴「素質は俺が保証する。後は亜莎の心次第だ。」

亜「……分かりました。私に何処まで出来るか分かりませんが、私、頑張ります!」

昂「そうか、そう言ってくれると助かるよ。」

亜莎は雪蓮と冥琳の前に立ち。

亜「孫策様、周瑜様、私の真名は亜莎です。よ、よろしく願います！」

亜莎は臣下の礼を取った。

雪「ふふっ、緊張しなくても良いわよ。これから共に戦っていく仲間なんだから。我が名は孫策。真名は雪蓮。よろしくね。」

冥「私は周瑜、真名は冥琳だ。お前の力期待しているぞ？」

亜「はい！雪蓮様、冥琳様、若輩者ですがよろしく願います！」
かくして、御剣昂により呂蒙子明が乱世の舞台に上がった。後に天下に名を馳せる名軍師が今誕生した。

第24話〈非凡の才、次世代の軍師〉（後書き）

以上、亜莎の拠点です。内容はアニメ版を参考にさせていただきました。原作でも亜莎自身が自分はその武勇を認めていただいた。それで雪蓮の近くに仕えていた、と言っているので原作より少し切り口を変えてみました。どうでしょう？

感想、アドバイスお待ちしております。

それではまた！

第25話、人質救出、一騎討ちに願いを込めて、（前書き）

完成です。雪蓮の拠点です。もはや何も言いません。

それではどうぞ！

第25話 人質救出、一騎討ちに願いを込めて

昴「賑わってるな。」

俺は政務も早々に終わったので街に繰り出した。

昴「一時は政務尽くしだったけど、最近は亜莎がいるからかなり落ち着いたな。」

亜莎は蓮華付きの軍師見習いという形になった。今でも俺や穩でみっちり鍛えている。

昴「さてと、何処に行こうかな・・・。」

辺りを見渡していると、

祭「おお、昴か、ちょうど良い!」

昴「祭さん、どうしました。」

祭「説明は後じゃ、ついてこい!」

昴「ちょ、祭さん!?!」

俺は祭さんに引っ張られ、連れていかれた。

祭さんに連れられ、中央広場に着くと、そこには人だかりが出来ていた。

ただどこからでは中の様子はよく分からないな。

昴「何の騒ぎなんですか？」

祭「しい！・・・こつちじゃ。」

祭さんは人差し指を唇に添え、慎重に人混みに近づいていった。

俺もそれに習い、気配を消して祭さんを追いかける。祭さんが止まり、人だかりの中心を覗いてみると、

雪「人質を離さない。」

賊「離せと言われて、はい、そうですかーって聞けるかよ！」

爺「しえ、雪蓮ちゃん・・・。」

婆「うう・・・。」

あれは黄巾党の残党か。それと人質に取られてるのは、

昴「あの老夫婦・・・。」

祭「知っておるのか？」

昴「雪蓮と仲のいい老夫婦です。」

以前に紹介されたことがある。それから時々たま会ったら話をしたりお茶をいただいたりしている。

祭「そうなのか？そりゃ余計にまずいのう・・・。」

状況から察するに雪蓮が賊を発見し、捕らえようとしたところ、奴等がたまたま近くにいた老夫婦を人質につてところか。とりあえずこの状況をなんとかしないと。

昴「俺がなんとかしてみせます。祭さんは奴等に気付かれないように周囲を警戒してください。」

祭「心得た。」

俺の言葉を聞いて祭さんは動いた。さてと、これ以上騒ぎが大きくなるまえに止めよう。

昴「賊ども、何の罪をないあの2人を怯えさせた罪、償ってもらおうぞ。」

俺は賊達に歩みよった。

雪蓮 side

雪「おまえたちは、この状況で人質を取って、どうするつもりだ？」

賊「どっ、どっつて。」

雪「まさか人殺しをしたい訳じゃないでしょう。」

賊「うっ・・・そっ、そんな口きいていいのかよ？俺達には人質がいるんだ。いつでも剣を動かせば・・・。」

爺「ひいっ！」

雪「でも殺しちゃったら、あなた達の大事な人質がいなくなっちゃうわよ。意味なくない？」

賊「あ・・・。」

雪「やっぱりわかってなかったのね。阿呆の相手は疲れるわ。」

賊「なっ・・・！てめえ、さっきから好き勝手言いやがって！なんならこのジジイだけでも殺してやるっか!？」

雪「好き勝手？・・・もしその2人に何かしたら・・・。」

その時は殺してあげるわ。後悔するぐらいに・・・。
私の心がドス黒い感情に支配されかけたその時、

昴「おまえ達。」

ふと振り返ると、昴の姿があった。

賊「何だてめえは！引っ込んでろ！それとも、俺達と楽しみたいのかあ？ギャハハハハ！」

昴「・黙れ。」

ズン！

雪「！？」

何！？この殺気、昴が発しているの！？

昴「3つ数える。それまでに人質を離してとっとと消える。そうすれば命は助けてやる。離して消えるか、死ぬか。3つ数えるまでに選べ。」

賊は動かない。私も動けない。

昴「1つ。」

賊「な、何を言ってやがる。こっちには人質が・・・。」

賊「へっ、てめえに何が出来んだ！」

賊は戸惑っている。

昴「2つ。」

賊「てめえ、立場わかってんのか！」

賊「馬鹿にしゃがって！こんなジジイ殺してやるよ！」

雪「待ちなさい！」

私は慌てて賊に近づく。お爺ちゃんを助けるために。

昴「・・・3つ。」

カチン。ズシヤ！

気が付くと、剣を握っていた賊の腕が宙に飛んでいた。

賊「えっ・・・ギヤアアアア！」

賊が飛ばされた腕を呆然と見つめ、自分の腕を飛ばされた事を理解すると、痛みと衝撃で悲鳴を上げた。

昴「祭さん！お爺さんを！」

祭「任せる！」

祭がお爺ちゃんをすぐさま、保護する。

賊「痛えーよ。痛えーよ。」

昴「なら痛みから解放してやる。」

賊「ぐふっ！」

昴が腕を飛ばした賊を斬り伏せる。

賊「なっ！？お、おい！？」

賊が混乱し始める。

昴「・・・ふっ！」

賊「がはっ！」

賊「ギヤア！」

昴がすぐさま地を蹴り、恐ろしい速さで賊に近づき、長剣で賊2人を一振りで葬りさる。

賊「くそ！」

賊の1人がお婆ちゃんに近づき、背後からお婆ちゃんの首筋に剣を突きつけた。

婆「うう・・・。」

賊「く、来るな・・・来たらこのババアを・・・。」

賊がお婆ちゃんを人質に取った。しかし昴はお構い無しに賊に近づき、一度長剣を鞘に納めた。

何、何をする気なの？

昴「北辰流抜刀術・夢幻！」

雪「!?!、待ちなさい、昴！」

昴は鞘から一気に長剣を引き抜き、お婆ちゃんを斬りつけた。

雪「お婆ちゃん！」

ザシュ!

賊「がはっ！」

雪「う・そ・そ・。」

長剣は、何故か背後の賊だけが斬られ、お婆ちゃんは無傷だった。

賊「た、助けてくれ！」

昴「。。。。。」

シリツ。

昴が賊に近づく。

賊「もう抵抗はしない。助けてくれ！」

昴「お前が赦しを乞うのは俺じゃない。・閻魔様にでもしろ。」

賊「ひいひいー!がはっ!」

昴は長剣を一閃し賊を仕留めた。

賊「ひえ〜!」

残った賊が一目散に逃げ出した。

雪「逃がさないわ!」

私が賊を追いかけようとしたその時、昴に肩を掴まれる。

昴「俺に任せろ。あの2人の前であの状態にはなりたくないだろ?」

雪「!?!」

あの状態、血を見て気分が高揚すると自分を抑えられなくあれのことだ。

雪「昴。。。」

私を気づかかって。。。昴が一度頷くと賊を追いかけ、程なくして賊は捕まった。

そつだ、お爺ちゃんとお婆ちゃんは？私は2人に駆け寄った。

雪「お爺ちゃん、お婆ちゃん、大丈夫だった?」

爺「雪蓮ちゃんと御遣い様のおかげで大丈夫じゃ。」

婆「肝を冷やしましたが、おかげで無事です。」

雪「そつ、良かった。。。ごめんね。」

婆「何を謝られますか？」

雪「私が不甲斐ないばかりに怖い思いさせてしまって・・・。」

爺「雪蓮ちゃんが謝ることではないですわ。儂らがボーツとしてののが悪いんじゃないのう。」

雪「お爺ちゃん。」

婆「頭を上げてください。私達は雪蓮ちゃん達のおかげで助かりました。だから雪蓮ちゃんが謝ることではないですよ。」

お爺ちゃん。お婆ちゃん。ありがとう。

爺「それにしても・・・。」

雪「？」

爺「あの御遣い様が雪蓮ちゃんの良人とはなのう？」

雪「・・・えっ／＼、お爺ちゃん突然何を!？」

爺「違うのかのう？2人が楽しそう歩いているのを見かけたからてつきりそうなのかと思ったんだがのう。」

雪「あはは。」

正確にはまだ・・・だけどね。

婆「御遣い様は聡明で立派なお方です。ぼやぼやしていると他の

方に先を越されるかもしれないよ?。」

ああ、確かにね。楓に穏に明命。あの思春に冥琳もだしね。

雪「私も頑張らなくちゃね!。」

爺「応援しとるぞ!。」

婆「困ったことがあればいつでも相談にのりますからね。」

雪「うん!ありがとう、お爺ちゃん、お婆ちゃん!。」

ふふつ。私も皆に先を越されないように頑張らなくちゃ。
私の闘志に火がついた瞬間だった。

昴side

昴「では、よろしく頼むぞ。」

兵「了解しました。」

賊達が兵達によって連れていかれた。残りの賊は捕らえることにした。黄巾賊の残党なので何か情報が得られるかもしれないからだ。

昴「それにしても・・・、」

夢幻。久しぶりに使ったな。あれは人をすり抜けて後ろの敵を斬る技だ。すり抜ける対象の氣を同調させ、それを刀に込めることでのような現象を生む。ただ扱いが難しく、失敗すれば対象ごと斬ってしまう危険な技だ。たまに会ってるお婆さんだからこそ成功できた技だ。

昴「あの賊達・・・。」

奴等はおそらく街の偵察にでも来たのだろう。残りの黄巾賊の残党との決戦も近そうだな。俺は一緒の予感を感じた。

次の日、いつものように自室で政務に勤しんでいると、

雪「すくばる。」

ポヨン。

昴「おっ？」

突然後ろから抱きしめられた。

昴「雪蓮、どうしたんだ？」

雪「会いに来ちゃった」

昴「会いに来たって、仕事はどうしたんだよ。」

雪「それは・・・えへへ。」

昴「まったく・・・それと・・・雪蓮、さっきからその、胸が当たってるんだが。」

雪「ん？当ててるんだけど？」

昴「・・・はあ。それで、一体何の用だ？」

雪「ん？昴にお願いがあつて来たのよ。」

昴「お願い？」

スツと雪蓮が俺から体を離し、

雪「ねえ昴。一度、私と本気で戦ってもらえないかしら？」

昴「俺と雪蓮がか？」

雪「ええ。それでもし私が勝ったら私の願いを1つ聞いてくれる
い?」

昴「……。」

雪蓮とか。一度本気で戦いと思ってたんだよな。

昴「分かった。いいよ。」

雪「!?!、ホント!?!」

昴「ああ。構わないよ。」

雪「それじゃ、約束だからね!勝負は・明日がいいわね。それじ
やまたね!」

雪蓮は部屋を去っていった。

雪蓮と勝負か。なんかここに来てから一騎討ちばかりしてるな。雪
蓮は手強そうだな。

昴「よし、明日のために早めに仕事を終わらせてさっさと寝るか。」

俺は再び政務に戻った。

さらに翌日。俺は城の庭に来ている。

雪「来てくれて嬉しいわ。」

昴「ま、約束したからな。．．．それにしても．．．」

楓「大将も旦那も頑張れよー！」

明「雪蓮様、昴様、頑張ってください！」

祭「ふむ、楽しみよう。」

蓮「姉様と昴。一体どっちが強いのかしら。」

冥「まったく。雪蓮には後でゆっくり政務についてもらうわ。」

相変わらず孫家の面々が勢揃いしている。

雪「それでは始めましょう。準備はいい？」

昴「いつでも構わないぜ。」

雪蓮が南海霸王を抜き、俺は村雨を抜く。

雪「思春、合図を。」

思「はっ。」

思春が右手を上げ。

思「それでは、始め！」

雪「はぁ！」

昴「ふっ！」

ガキン！

俺と雪蓮の得物が交差する。一度距離を取り、再度接近する。

ガキン！ガキン！ガキン！

雪「ふふっ、やるわね！」

昴「雪蓮もな！」

勝負はまったくの互角だ。

昴「（仕掛けるか。）」

俺は縮地で一気に距離を詰める。雪蓮の正面から攻撃、と見せかけて、雪蓮の脇をすり抜け、背後から背面斬りを狙う。

雪「！？」

雪蓮は不意をつかれたようだ。

勝負あり。

そう思ったその時、

ガキン！

昴「！？」

雪蓮は背後に剣を向け、こちらを見ずに俺の村雨を受け止めた。

昴「ちっ！」

一旦雪蓮から離れる。

昴「読んでいたのか？」

雪「何か嫌な予感がしたのよね〜。」

勘かよ。

雪「ふふっ。楽しいわ。どんどん行くわよ！」

雪蓮が地を蹴り、俺に一気に接近する。

ガキン！

昴「くっ！」

ガキン！ガキン！

雪蓮は間髪入れずに攻撃を繰り返す。

昴「（一息もつかない代わりに一息もつかせないつもりか！）」

雪蓮は常に懐に飛び込み、連続攻撃を繰り返す。こっちは通常より長い刀を使用している。射程が長い代わりに懐に飛び込まれると防戦一方になる。しかも雪蓮はさつきからこっちの隙を的確に突いてくる。思春の時と違い誘導しているわけではないのでこちらは手を出せない。

昴「（歴史に名を残す王は武や知が優れていたり、人を惹き付ける魅力があったり、神がかり的な勘の良さを持っていたりするが、雪蓮の場合、その勘はもはや予知レベルだ。）」

雪蓮は今も懐に接近をして、間髪入れずに攻撃を繰り返してくる。一度距離を取らないと始まらない。俺は雪蓮の斬撃を受ける刹那、村雨を手放す。

雪「！？」

俺は雪蓮の胸に掌打を打ち込む。

雪「ぐっ！」

雪蓮は咄嗟にガードするも後方に弾かれる。とりあえずこれで距離を取れたな。さてどうしたものか。雪蓮の実力は春蘭とそれほど大差はない。ただ、挑発すれば頭に血を昇らせて突っ込んでくる春蘭と違い、的確に相手の追い詰め、自身の隙を勘で補いながら戦う雪

蓮は俺の苦手の相手だ。言わば天敵だ。ここはあれしかないな。俺は朝陽と夕暮を引き抜く。

昴「スー、フー。」

俺は大きく深呼吸をする。俺の取って置きの一つ、双剣奥義。

昴「喪神夢想・・・。」

俺は四肢の力を抜き、雪蓮に対峙をした。

観客 side

蓮「急に動かなくなっただけ。姉様は何故行かないの？」

祭「ふむ、それは昴に変化が現れたからです。」

蓮「変化？」

祭「隙だらけなのですよ。」

蓮「隙だらけ？それならば何故姉様は行かないの？」

祭「確かに並の者ならばそれでも良いでしょう。しかし相手は昴です。蓮華様、もし今まで隙をほとんど見せなかった相手が急に隙だらけになったらどのよう考えます？」

蓮「！？、なるほど、だから姉様は・・・。」

祭「じゃが、策殿の気性ならば罫とわかっていても向かっていってしまわれるでしょう。」

蓮「いくら姉様でも・・・あっ！」

雪「はあ！」

ブオン！

雪蓮は地を蹴り昴との距離を詰め、剣を一閃する。昴は最小限の動きで剣を避ける。

雪「まだまだ！」

続けざまに雪蓮が昴に波状攻撃をする。しかし昴はいずれも最小限の動き、あるいは手持ちの双剣で防ぐ。

祭「（昴は先ほどからまったく手を出せない。その割りに策殿から離れようとはせん。何故じゃ？何を狙っている・・・いや待っている・・・まさか・・・。）」

雪「この、当たり前さい！」

祭「いかん、策殿！」

雪「えっ？」

ガギイイイン！

その瞬間、雪蓮の南海霸王は宙を舞い、雪蓮の首筋に双剣の片割れが突き付けられていた。

昴「俺の勝ちだな。」

雪蓮 side

急に昴が隙だらけになった。相手が昴じゃなきゃ遠慮なく行くんだけど。

雪「（私の勘が行くと危ないと言ってる。）」

昴はさつきから変化がない。

雪「(いいわ、何が待っているか見せてもらおうわ。)(はぁ!」

私は昴に向かっていった。

ブオン!

私の一撃は避けられる。

雪「まだまだ!」

私は先ほどまでのように一切の間を与えず、攻撃を繰り返す。しかし昴には一切攻撃が当たらない。昴は手を出さない。かといって、距離も取らない。

雪「(何?昴の狙いは何なの?)」

攻撃当たらない、昴が何も手を出さないことに段々苛立ってきた。

雪「この、当たりなさい!」

祭「いかん、策殿!」

雪「えっ?」

渾身の一撃を繰り返そうとした瞬間、

ガギイイイイン!

気が付けば私の南海霸王は飛ばされ、首筋には剣を当てられていた。

昴「俺の勝ちだな。」

何が・・起こったの？

思「勝者、御剣昴！」

私は敗北した。

昴「ふう、さすがに雪蓮は強いな。まさかあれを使わされるとはな。」

雪「あれ？急に隙だらけになったのと関係あるの？」

昴「もちろん。俺の奥義の1つ喪神夢想。」

雪「喪神夢想・・・。」

昴「俺のあの構え、雪蓮から見れば隙だらけに見えるけど、あれは1番俺にとつて前後左右に動きやすい構えなんだ。そして俺は雪蓮そのものではなく、雪蓮の氣を見ていた。」

雪「私の氣？」

昴「喪神夢想の極意は相手の攻撃を避け続け、ここぞという時に渾身の一撃を浴びせることにある。俺は雪蓮の氣を見定め。雪蓮が焦って大振りの一撃を繰り出す瞬間を狙いつつ。氣つてのは正直だから言動や行動、表情より先に変化が現れるからな。」

そういうことなの……。でもそれって……。

雪「そんなの無敵じゃない。」

昴「そうでもない。この奥義には弱点もある。まず、1対1にしか対応出来ない。1人に集中するから。横槍を入れられたらイチコロだ。もう1つはこれはあくまで後の先、返しの技だ。相手が向かってこないと意味をなさない。」

雪「つまり相手がじつとしてたら。」

昴「まあ、どっちかが動くまでお見合いだろうな。」

雪「そう。」

やっぱり私の勘は当たってた。

雪「あゝあ、負けちゃった。ぶー、せつかく昴に1つ言うこと聞いてもらおうと思ったのに！」

昴「それは残念だったな。……ところで、何をお願いするつもりだったんだ？」

雪「秘密よ秘密。昴には教えてあげない。」

昴「何だよそれ、勿体振らないで教えてくれよ。」

雪「駄目よ、次勝つたら聞いてもらうつもりなんだから。」

昴「えー、……分かったよ。」

雪「次は負けないわよ」

昴「楽しみにしてるよ。それじゃ俺は政務に戻るかな。観客もいつの間にかいないしな。」

ホントね。大方冥琳に解散させられたのね。

昴「それじゃ、またな。」

昴は自室に戻っていく。

冥「雪蓮、あなたが真面目に仕事をするって言うから昴との戦いを許したのよ。早速仕事してもらおうよ。」

雪「ぶー、はあい。」

冥琳に腕を引っ張られ、自室に連行されていく。

雪「（あーあ、昴に勝ってお願いを1つ聞いてほしかったのに。）」

私のお願い、それは、

昴との子供を産ませてほしい。

昴はいつかここを離れるから夫婦はきつと無理。でも子供ならと思っただ。たとえ私がいなくても蓮華が孫家を引っ張っていつてくれる。

雪「ふふっ、諦めないわよ。いざとなったら夜這い朝駆けしてでも。。。」

冥「何か言ったか？」

雪「言ーえ、何も」

私は密かに悪巧みを企んだ。

昴side

ブルッ！

昴「何だ？一瞬悪寒が・・・まあ、気のせいだろ。」

俺は気にせず自室に戻り仕事を始めた。当然悪い予感当たった。

続く

第25話、人質救出、一騎討ちに願いを込めて、（後書き）

とりあえず予定していた拠点はこれで最後です。小蓮の拠点はすみません、浮かびませんでした。小蓮ファンの皆さんごめんなさい。小蓮って結構好きなキャラなんだけどなあ。次回から物語を進めます。

感想、アドバイス待ってます。

それではまた！

第26話 荊州掃討最終戦、黄巾の乱の終結 (前書き)

投稿します。今回は短めです。内容も薄い！

それではございぞー！

第26話 荆州掃討最終戦、黄巾の乱の終結

俺は今城の庭にいる。周りには雪蓮と冥琳を除く、穩、祭、蓮華、小蓮、思春、楓、明命、亜莎、が揃っている。しばらく待っていると雪蓮と冥琳がやってきた。

雪「皆集まってるわね。」

祭「うむ、それで策殿、此度の軍議は荆州の賊についてかのう。」

雪「ええ、たった今袁術から要請があつたわ。」

やはりか。

思「我らの兵力は現在1万2千。空き城を占領した賊は程遠志が率いていた賊の残党とさらに他国から流れ着いた賊が合わさり、今では2万3千に及びます。」

穩「これが賊が占領している城の地図になります。」

冥「ふむ、厄介な城だな・・・。」

穩「攻めづらく、守りやすい、まさに教科書のようなお城ですね。」

蓮「全軍を展開出来るのは全面のみ。左右は狭く、大軍で攻めるには無理がある、か。」

思「後ろには絶壁がそびえていて、回り込むことは不可能でしょう。」

雪「めんどくさいから、真っ正面から突入しちゃうよ。」

祭「うむ、策殿に賛成だ。」

楓「それ、面白そうだな。」

蓮「何を馬鹿なことを言っているのです。夕子の悪い冗談を言っている場合じゃありません。」

雪「結構本気なんだけど。。。」

蓮「なお夕子がわるいです。」

雪蓮はしょぼりしている。本気だったんだな。

冥「。。昴。」

昴「ん？」

冥「お前の意見を聞かせてくれ。」

昴「そうだな。。。」

俺は地図に目を落とす。この真ん中辺りあるのが本丸だな。これは・
・倉か。こっちは宿舎か。地図を見る限り、本丸の横に宿舎があつてその横に倉が並んでいる。

昴「。。この倉の辺り、死角になってるな。」

穩「あ、そう言われれば、そうですね。」

昴「黄巾賊の残党がこの城を本拠地にしてるなら、兵糧は倉に保管しているはず、なら倉を狙うのが良策だな。」

明「でも、一体どうやって？」

昴「夜の闇に紛れて城内に侵入して火を放つ。出来るだろ？」

冥「出来るな。祭殿、古城に到着し、夜になりましたら部隊を正門に集結させてください。」

祭「ふむ、それは良いが、夜襲を掛けるのか？」

冥「掛けるフリだけで結構。奴らの目を正門に惹き付けるのが狙いです。」

祭「なるほど。囷になる訳か。」

冥「ええ。その後、興覇と幼平の部隊が城内に侵入。放火活動を行います。その状況に合わせて、祭殿は雪蓮と合流し、混乱する城内に突入する。これでどうかしら？」

雪「良いんじゃない？ワクワクしちゃうわ。」

蓮「しかし、確実に成功するという保証が無い以上、お姉様が前に出るのは危険です！」

雪「蓮華、戦に絶対は無い。それぐらい分かってるでしょ？」

蓮「しかし、母様が死んだ時と、状況が良く似ていて・・・。」

雪「城攻めの時に私が死ぬかもって？無い無い。私が指揮するのは突入部隊だけ。城攻めの指揮は祭と楓に任せるもの。」

祭「うむ、承った。」

楓「腕が鳴るぜ！」

雪「ね？だから安心して私の背中を見ておきなさい。孫呉の王の戦いぶりをね。」

蓮「・・・(コクッ)」

昴「心配するな。夜襲部隊には俺も同行するから。」

明「はうあ！昴様自らですか！？」

思「我らだけでも十分だ。」

昴「2人を信用していないわけじゃないさ。俺が行ったほうが時間も短縮できるし、正確性も上がる。それに、そういうのも得意だしな。だから心配は無用だ。」

蓮「分かった。任せるぞ。」

雪「聞き分けの良い子は好きよ。じゃあ蓮華は後方を任せるわ。」

蓮「はい。」

雪「思春、明命。2人はすぐに精鋭部隊を編成し、作戦を検討しておいて。」

思・明「御意。」

雪「私と祭と楓は部隊を編成するとして、冥琳達はどつするの?」

冥「穏は蓮華様の補佐を。」

穏「了解でありませす。」

冥「私と亜莎は、雪蓮達が突入したあとの総仕上げを行う。」

雪「亜莎、大丈夫?」

亜「はい!一生懸命頑張ります!」

小「ねえ、シャオは?」

雪「シャオはお留守番よ。」

小「ぶー、シャオだって孫家の一員なのよ!」

雪「駄目よ。シャオの出番が必ずくるから今回は聞き分けなさい。」

小「・・・はあい。」

納得言っていないな。万が一に備えてつてところだろう。

祭「後は、黄巾党の残党と我らの兵力差は1万以上。しかも此度は以前と違い敵は城内じゃ。ある程度は策で補うにしてもこの差は大きいぞ？」

雪「その辺は大丈夫よ？」

冥「少々、嬉しい誤算があつてな？」

祭「？、どういふことじゃ？」

冥「袁術が討伐の際に兵5千と物資を提供してくれることになつてな。」

祭「あの袁術がか？」

へえー、気前いいな。

雪「ええ。賊の討伐に昴が同行するって話したら提供してくれたわ。」

祭「ハッハッハ！ありがたい限りじゃ！」

ん〜、どういふことだ？ま、提供してくれるならいいか。

雪「これである程度兵力差は埋まるわ。それではすぐに準備を始めなさい。明日には出発するわよ！」

「「「「「御意！」「「「「」

各々が準備に取り掛かった。

翌日に城を出発し、2日かけて移動し、古城の後方に本拠地を築き、夜を待った。そしてその夜、

冥「作戦を開始する。昴、興覇、幼平。行け！」

思・明「はっ！」

昴「任せる。」

さてと、一仕事しますかね。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

昴「始まったな。」兵達の怒声が木霊した。

昴「急ごう、倉はこの先だ。」

明「はい。」

思「ああ。」

最善の注意を払いながら進んで行く。

明「見えました。倉です。」

思「見張りは・・・3人か・・・」

騒がれたら計画が水の泡だ。時間もないし、早々に片付けるか。

昴「待っている。」

俺は屋根に飛び移り、見張りの背後に回り、見張りの1人の口を塞ぎ、脇腹を殴打。

「ふぐつ！」

間を開けず縮地でもう1人の見張りの首筋に手刀。

「うっ！」

残りの1人を片付けようとしたその時、

ザシュ！

「ガハッ！」

思春が手持ちの得物で一突きにした。

昴「悪いな。」

思「構わん、昴、幼平、始めるぞ。」

明「はい。」

昴「おう。」

準備は滞りなく進んでいく。後は2人に任せれば大丈夫だろう。

昴「後は2人に任せる。」

明「どちらへ？」

昴「放火のついでに城門をこじ開ける。」

明「！？、お1人ですか！？」

昴「明命、声デカイ。」

明「ふぐっ、申し訳ありません。」

明命があわてて口を塞ぐ。

思「正気が貴様？」

昴「正気だよ。城門開ければ突入部隊が楽になる。もともとそのつもりでこっちに来たからな。」

明「でしたらお供致します。」

昴「待て待て。思春1人じゃ時間掛かるだろ？それに1人の方が動きやすい。それじゃ、ここは頼んだ。」

明「昴様!？」

俺は城門へと向かった。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

城門近くにまで来たがやはり賊の数は多い。迂濶に飛び出せば瞬間に城壁と門前の賊の格好の的になる。チャンスは一瞬。思春と明命が倉を燃やし、賊達に動揺が走るほんの一瞬だ。

「火事だ!」

「く、倉が燃えてるぞ!」

「食料が。。。」

賊達に混乱が走る。

行くならここだ！俺は縮地で一気に城門に近づく。

「何だテメエは！」

「侵入者だ！」

昴「邪魔だ！」

「グフツ！」

「ガハツ！」

俺は村雨で一閃する。真っ直ぐ城門に突撃し、邪魔者は斬り捨てる。やがて城門前にたどり着き、

昴「はあ！」

大きく跳躍し、村雨に氣を大量に込める。

昴「飛龍衝撃！」

氣を飛ばさず、村雨を直接城門の門に叩きつけた。

ドオン！

城門の門は破壊され、扉は開かれる。

昴「さて、やることは終わったし、雪蓮達と合流・・・げっ！」

ヒュヒュヒュヒュン！

祭さん部隊の威嚇射撃の矢が飛んできた。

昴「うお！」

ギンギンギンギンギン！

村雨を手元で回転させ、矢を全て弾く。

昴「まずい、城門から離れないと！」

俺は2射目が放たれる前に祭さん部隊に合流する。

祭「むっ、やはり昴か。」

やはりって。

祭「しかし、お主城門から出てきたがまさか城門を破壊したのか？」

昴「ええ。思春達が倉を燃やして賊達が動揺してる隙を付いて。」

祭「・・・相変わらず、無茶をするのう。」

昴「まあこのぐらいはね。・・・とにかく策は成りました。今こそ好機です。」

祭「では行くかのう。昴よ、本陣に戻り、冥琳と合流せよ。」

昴「了解。祭さん、御武運を。」

祭「言われるまでもない。黄蓋隊、城へ突入するぞ！ついてまいれ！」

「了解！」

祭さんと部隊は城へ突入を始めた。

昴「本陣に戻るか。」

俺は本陣へと向かった。

昴「戻ったぜ。」

冥「ご苦労様。相変わらず我らの予想の斜め上のことやってくれる。」

昴「あまり褒めるな。」

冥「褒めていないぞ。・・・まあ、とにかく好機だ。一気に殲滅する

ぞ。・・昂、号令を頼んでもいいか？」

昂「俺がか？」

冥「天の遣いであるお前が号令と同時に鼓舞すれば士気も大きく上がるだろう？」

昂「わかった。それじゃ・・、」

大きく深呼吸をし、

昂「策は成った！これよりこの地に蔓延る賊どもを駆逐するぞ！呂蒙隊は左翼前線に進め！」

亜「り、了解です！」

昂「周瑜隊は右翼前線へ！賊を殲滅せよ！」

冥「了解した！」

昂「天命、天運は我らにあり！皆、進めー！」

「「「「「おおおおおー！！」「」「」

兵達の雄叫びが天に轟いた。

本格的に進攻が始まり幾ばくか経った。城門が破壊され、倉を燃やされた賊達の士気は低く、もはやこちらの勢いは止められなかった。明「敵の大將旗が倒れました！」

雪「よし！今こそ決戦の時！皆の者、雄叫びと共に猛進せよ！」

「「「「「おおおおおー！ー！」「「「「「

雪蓮の号令により、各所で兵達の雄叫びが上がる。

黄蓋隊、甘寧隊、周泰隊が追撃を始める。勝ち目無しと見て、城から逃げ出した賊は次々と討伐されていく。やがて、賊は残らず討伐された。荊州に集まった黄巾党の残党は殲滅され、本格的に黄巾の乱は終結した。

続く

第26話 荆州掃討最終戦、黄巾の乱の終結（後書き）

っていうわけで、黄巾党の最後です。次の話で孫呉の話は最後になります。

感想、アドバイス、よろしくお願いします。

それではまた！

第27話 最後の宴、そして旅立ち (前書き)

何とか今日中に間に合いました！孫呉編はこの話で最後です。

それではございぞー！

第27話 最後の宴、そして旅立ち

戦に完勝し、孫家の面々は城へと帰還した。現在、城の庭に孫家の将が集められた。

雪「皆、お疲れ様。此度の戦、あなたたちの活躍で完勝を果たすことができたわ。今日はゆっくり体を休めてちょうだい。」

「」「」「御意。」「」「」

雪「それと・・・。」

雪蓮がこちらを向き、

雪「荊州に蔓延った黄巾党の残党は駆逐された今、あなたとの契約は終わるわけだけど、昴、あなたこれからどうするの？」

皆の視線が俺に集まる。

昴「・・・準備が出来次第、ここを出発しようと思ってる。」

「」「」「!?!?」「」「」

皆が驚愕する。

雪「そう・・・。出発はいつ？」

昴「準備を含めて明後日だな。」

祭「急じゃな。」

楓「そんな。」

思「……。」

雪「なら盛大に祝勝会と一緒に送別会をしなきゃね」

昴「そんな気を使わなくても……。」

雪「私達はあなたにずいぶん助けられたわ。そのお礼をしたいのよ。だからこれくらいはさせなさい。」

そう言われたら断られないな。

昴「わかった。楽しみにさせてもらうよ。」

雪「話は決まったわね。ならこれで解散するわ。皆、早々に片付けを終えなさい。」

「「「了解!」「」「」

各々が作業に動きだした。

昴「俺も手伝おう。」

皆の後に続いた。

帰還したその日は片付けを早々に終わらせ、眠りについた。翌日、早朝に起床し、残された仕事を終わらせ、業務の引き継ぎ作業も夕方に関わることができた。そしてその夜・・・

雪「それでは、荊州の賊の掃討と昴の旅の無事を祝って、」

「「「乾杯ー！」「」」

皆が天に器を掲げ、宴は始まった。卓には様々な料理と酒が並んでいる。場所は庭先で、あえて椅子は置かず、いわゆる立食パーティーである。以前に何気なく雪蓮に話したことがあるので、それを参考にしたのだろう。俺が酒と料理をつついていると、

明「す、昴様！これ、よろしければどうぞ！」

明命が料理を持って俺のところに来てきた。

昴「これは、明命が？」

明「はい！是非、召し上がってください！」

昴「それなら遠慮なく。」

俺は一口料理をいただく。

昴「これは、美味しい！」

明「本当ですか!？」

昴「本当に美味しいよ。どことなく味は祭さんの料理に似てるけどもしかして……。」

明「はいっ!私の料理の師匠は祭様なんですっ!」

昴「へえー、どおりで……、うん、美味しい。明命はきつといいお嫁さんになれるよ。」

明「はうわ!？お、お嫁さんですか!？」

昴「ああ。料理は美味しいし、相手に尽くしてくれるしその上可愛いしな。明命の夫になる人は幸せ者だな。」

明「あうあう／＼」

ハハツ、顔が真っ赤だな。

明「……あ、あの!」

昴「ん?」明「もし、もし私が昴様のお嫁さんでしたら、その、ど

うですか？」

昴「それはもう毎日可愛がって愛でまくっちゃっただろうな」

明「・・・！？／＼・・・あ、お、お猫様です！」

明命が突如茂みへと走りだした。

昴「慌ただしい娘だな。」

明命の姿を目で追っていると、

祭「あまり年頃の生娘をからかってくれるな。」

昴「祭さん。」

祭「ほれ、儂からじゃ。」

祭さんからはなかなか上物そうなお酒と、

昴「青椒肉絲だ。いただきます！」

すぐさま青椒肉絲を食した。

祭「これこれ、慌てて食べなくても料理はなくならぬぞ？」

昴「だってこれ美味しいし！」

祭「まったく・・・ほれ、口が汚れておるぞ？」

祭さんが手拭いで俺の口を拭ってくれた。

昴「あ、すみません。」

祭「まったく、子供じゃあるまいし……儂の夫になれば毎日食べられるぞ?」

昴「魅力的な提案ですが、俺には待っている人がいますから。」

祭「そうか……残念じゃ。」

俺は祭さんの料理を全て平らげた。

昴「ふう、ご馳走様!」

祭「お粗末様じゃ……。儂の料理が食べたければいつでもまた来い。ご馳走してやる。」

昴「ありがとう、祭さん。」

祭「皿は儂が片しとく、お前は他の者ところに行つてやれ。」

昴「分かりました。では失礼します。」

俺は祭さんのところを離れ、場所を変えた。

昴「よう、亜莎。」

亜「す、昴様!?!」

昴「隣いいか？」

亜「ど、どうぞー！」

亜莎の卓にある料理をいただいた。

亜「こ、此度の戦、お疲れ様でした！」

昴「お疲れ様。亜莎もよく頑張ったな。」

亜「いえ、私なんか・・・策を提示され、自ら実行し、成功に導いた昴様に比べたら・・・。」

昴「そんなことはない、亜莎はちゃんと冥琳の補佐をしてたじゃないか。」

亜「私なんて・・・先日の戦で昴様や冥琳様を拝見させていただいて私との大きすぎる差を痛感させられました。私に雪蓮様や蓮華様の軍師が務まるとは思えません。せつかく昴様に推挙していただいたのに。」

昴「・・・。」

亜「私、怖いんです。いつか自分のたてた策のせいで皆を死なせてしまうのではないかと。だから私に軍師なんて・・・。」

亜莎の瞳からは一筋の涙が流れ出した。

昴「駄目だよ亜莎。」

亜「はい。私は駄目な軍師です。」

昴「いや、そうじゃなくて。亜莎、俺や冥琳が初めから今のよう
に軍師を務められてたと思うのか？」

亜「そ、それは・・・。」

昴「俺も冥琳も努力をしたからこそ今の今がある。もし及ばないと感
じたならもつと努力すればいい。」

亜「・・・。」

昴「俺は亜莎に冥琳を助けてほしいと言った。けどな、素質も素養
も何もない人間を軍師に推挙するほど俺は浅はかではないぞ？」

亜「昴様・・・。」

昴「自信を持って。軍師はな自身の策を疑わず、例えハツタリであつ
ても迷いや不安を顔に出しちゃ駄目だ。仮に被害が出ても自分がい
なければもつと被害が出ていたんだと、堂々とするんだ。亜莎だつ
て不安な顔をして策を出されたら安心してこなせないだろ？」

亜「グスツ・・・はい。」

亜莎は瞳から流れた涙を袖口で拭った。そんな亜莎を俺は優しく亜
莎を抱きしめた。

亜「・・・っ！？／＼」

昴「俺を信じる。例え自分自身を信じられなくても、亜莎が信じる
俺を信じてくれ。そして自分が信じられるくらいまでいっぱい努力

するんだ。いいね？」

亜「は、はい！」

昴「せっかくの祝いの宴だ。ほら笑って笑って！」

亜「ふふっ、そうですね。」

やっと笑ってくれたな。

亜「私、もつともつと頑張ります！皆さんのために。そして・・・
昴様のために。（ボソツ）」

昴「ん？最後よく聞こえなかったな？」

亜「い、いえ／＼、何でもありません！」

昴「？、そうか・・・。」

何でもないならいいけど・・・。
と、その時後ろから・・・。

穩「昴さん。」

昴「おっ、穩？」

突然涙目の穩が後ろから抱きしめられた。

穩「グスッ、昴さんがいなくなったら、グスッ、私、本が読めなくなってしまうす〜。」

そうなのだ。穩は本を読むと暴走モード（俺が命名）に突入してしまい、しばらく手がつけられなくなってしまふ。そのため、近くに俺がいないと止められる者がいないため、基本的に俺が傍にいないときは読書を禁止させられている。これでも当初に比べて、多少はマシになったが・・・。

穩「グスツ、私、どうしたら・・・。」

昴「ま、我慢しろよ。」

穩「そんな〜。（T|T）」

だつて不意を付かれたら俺でもアウトだから他の者には無理だろうしな〜。今の穩は兵法書や経済各書の入門書的な本なら大丈夫だが、孫子や孟徳新書等といった内容が濃く、深い本になると多少、暴走モードまでの時間が延びたものの、まだ全然駄目である。

穩「でも・・・でも、そんなことより・・・。」

昴「ん？」

穩「昴さんがいなくなってしまうことが1番悲しいです。」

昴「穩・・・。」

穩「私のこと、忘れないでくださいねえ〜。」

昴「ああ。忘れないよ。」

いろんな意味で忘れないと思うが。

穩「絶対に絶対ですよ〜？」

昴「絶対に絶対だ。」

穩「ん〜・・・、昴さん。」

昴「ん？」

穩のほうへ振り向くと、

チュツ。

昴「っ!？」

そっと触れるだけの口づけを交わされた。

穩「これで忘れませんよね？」

昴「あ、ああ／＼」

穩「ふふっ、それでは失礼しますね〜 亜莎ちゃんも行きましょう
ね〜？」

亜「は、はい!」

穩は嬉しそうに顔しながら去っていった。 亜莎もそれに続く。

昴「まったく・・・／＼、ん？あれは・・・。」

ふと庭の片隅を見ると、

昴「あれは蓮華に……思春か？」

何やら大きな木の傍であれば、揉めてるのか？

蓮「思春、いつまでもそんなところに隠れてないで、あなたも宴に参加なさい。」

思「い、いえ、私は……。」

昴「蓮華、どうしたんだ？」

蓮「昴？ほら思春。いつまでもそんなところにいなくて……。」

思「れ、蓮華様、ご勘弁を……わっ！」

蓮華に引つ張られ、木の影から飛び出す。

昴「おお。」

木の影から飛び出した思春は以前に贈った、赤のワンピースを着ていた。（帽子はなし。）

昴「気に入ってくれたみたいだな。」

思「ノノか、勘違いするな！これは最後だから、その、義理だ！義理で着ているだけだ！」

昴「そうなのか？」

蓮「ふふっ。思春はその服、とても気に入っているのよ。」

思「れ、蓮華様！そのようなこと！」

蓮「あら？私はあなたが部屋でその服に袖を通しているのを何度か見かけたのだけれど？」

思「れ、蓮華様！そ、それは！」

昴「まあ何にせよ、また着てくれて嬉しいよ。」

思「ふ、ふん／＼」

思春は照れながらそっぽを向いた。

蓮「ほら思春。あなたもこちらに来なさい。」

思「か、畏まりました。」

思春は蓮華に続き、料理が並ぶ卓へと向かった。再び、料理を楽しんでいると、

小「あゝ！昴こんなところにいた〜！」

シャオが俺達のいる卓にやってきて、俺の腕を取った。

小「ぶ〜、昴はシャオの夫なんだから、傍にいたくちや駄目でしょう〜！」

いつの間に夫に・・・。

小「にひっ シャオが食べさせてあげる。・・・ん・・・。」

シャオが料理を口にくわえてそのまま俺に顔引き寄せせる。

小「ん〜。」

そんなシャオを蓮華1つ拳骨を落とす。

蓮「小蓮！お前も孫家の姫なのだからあまりはしたない真似をするな！」

小「いったあ〜い！もう、何するのよ！」

蓮「何するのよ、ではない！」

小「料理を食べさせてあげるのは妻の務めでしょ！」

蓮「誰が妻だ！」

蓮華がシャオにお説教をしている。

うーん、微笑ましい姉妹喧嘩・・・なのかな？
そんな2人を思春が仲裁に入る。

思「蓮華様、小蓮様、その辺に・・・。」

小「あ〜！思春が可愛い服着てる！」

どうやらやぶ蛇だったみたいだ。

思「こゝ、これは・・・。」

小「その服、昴が贈ったんでしょ？ずる〜い！シャオにも何か買ってよ！」

蓮「我が儘を言うな小蓮！」

小「む〜！」

再び2人が姉妹喧嘩を始める。

昴「蓮華とシャオは相変わらずだな。」

思「そうだな。」

そんな2人を俺と思春が遠巻きに見守る。

思「お二方、特に蓮華様は変わられた。以前の蓮華様は孫家の姫という重圧に縛られていた。貴様が来てからはご自身のお心に余裕が持てるようになった。礼を言う。」

昴「何、俺はきっかけを与えただけだ。」

依然として蓮華とシャオは姉妹喧嘩を繰り広げている。

昴「そろそろ止めてやるか。」

思「そうだな・・・っ!？」

ふと一步踏み出した時、慣れない服を着ていたため、思春が裾を踏み、躓いた。

昴「おっと、大丈夫か？」

躓いた思春を抱き止める。

思「・・・っ／＼」

眼前には思春の顔があつた。思春が目線を逸らし、

思「・・・き、気が向いたら戻ってこい。貴様なら蓮華様を、孫家を導けるだろうからな。」

昴「ありがとう。思春、たまにでいいから街のあの子供達と遊んであげてくれ。」

思「ふふっ、貴様に頼まれるまでもない。」

良かった。これで心残りが1つ消えた。

思「・・・。」

昴「・・・思春？」

思春がジッと俺を見つめ、やがて目を閉じた。そして自身の顔を俺にそっと近づけたその刹那、

蓮「こ、こほん！」

小「・・・思春？」

思「・・・っ／／」

慌てて俺から離れる。

思「こ、これは・・・その・・・」

思春は顔を真っ赤にしながらしどろもどろとしている。

小「思春！昂はシャオの夫なんだから手を出しちゃ駄目なんだからね！」

思「っ／／・・・し、失礼致します！」

思春が顔を真っ赤にしながらものすごい速さで駆け出した。
思春、そんなに急いだらまた裾を踏むぞ。

小「こらっ！待ちなさい！」

シャオもそれに続く。

蓮「まさかあの思春がね。」

昂「蓮華。」

蓮「以前の思春なら考えられないわね。これもきつと昂に出会ったことで変わったのね。」

昂「そうなのか？」

蓮「そして私も……。昴、私はあなたに出会うまで雪蓮姉様になることばかり考えてたわ。それが私の務め、ひいてはそれが孫家のためだと。でも、それは違っていた。私は私以外になりえない。それを昴が教えてくれた。私はこれから私自身の道を歩き、雪蓮姉様と同じ高見を目指すわ。」

昴「ああ。それでいい。」

蓮「あなたも驚くぐらいの高見を登ってみせるわ。」

昴「楽しみにしてるぜ。」

蓮「ありがとう。……ところで雪蓮姉様はどこに行ったのかしら？」

昴「雪蓮ならほれ。」

俺が親指で俺の後方を指差し、

昴「あそこの卓で祭さんと飲み比べしてるぞ。」

蓮「まったく！孫家の家長ともあるう者が……姉様！皆の前ですよー！」

蓮華は雪蓮を諫めに向かった。

すごい飲みっぷりだな。するとそこへ、

冥「楽しんでるか？」

昴「ああ、冥琳。もちろん楽しませてもらってるぞ。」

冥「そうか、ならばいい。」

昴「雪蓮、止めなくていいのか？」

冥「何、今日くらい構わないさ。・・・それより、貴様がいなくなつては戦場で雪蓮の手綱を握れる者がいなくなってしまうな。」

昴「雪蓮はすぐに最前線に出たがるからな。」

冥「それに、雪蓮がサボつた分の仕事をこなす者もいなくなる。」

やっぱり雪蓮の分上乗せされてたんだな。

昴「ま、戦場はともかく、仕事に関しては亜莎がいるだろ？」

冥「そうだな。・・・そんなことより・・・私は軍師としてではなく、私個人として昴を引き留めたいと考えている。」

昴「冥琳。」

冥「ふつ、今のは独り言だ。どうやら私も酔っているらしい。」

昴「ありがとな。」

冥「礼など不要だ。そんなことより、まだ話をしていない者もいるのだろ？そつちに行つてやれ。」

昴「ああ。分かった。」

俺は冥琳の言葉に従い、まだ話しをしていない楓を探した。しかしどの卓にも楓はおらず、暫し探していると、卓から離れた場所で楓を見つけた。

昴「楓、ここにいたか。」

楓「うお！旦那か。」

昴「隣、いいか？」

楓「構わねえよ。」

楓の横に腰かける。

楓「……。」

昴「……。」

楓「……なあ。」

昴「ん？」

楓「行くのか？」

昴「ああ。」

楓「ここに残ろうとは思わないのか？」

昴「悪いな。俺には俺を待っていてくれる仲間がいる。だから行か

なくちゃいけない。」

楓「そうか・・・。」

楓は頂垂れた。

楓「だったら・・・だったら俺も・・・ん!？」

俺は楓の口に人差し指を当てた。

昴「そつから先を言葉にしたら君は一生後悔することになる。君の居場所はここだろ?」

楓「・・・そうかよ。・・・なら!」

楓が俺の頬に口づけを交わした。

昴「か、楓・・・。」

楓「／＼、こ、これぐらいは許せよな!そ、それじゃあな!」

楓が颯爽とこの場を離れた。

雪「まさかあの楓がね〜。」

入れ違いに雪蓮がやってきた。

雪「どう?一杯。」

雪蓮が酒を前にかざした。

昴「いただくよ。」

俺は雪蓮から器をもらい、酒を注いでもらった。

雪「楓はね。昔から武一辺倒でね、それ以外に何も関心を持たなかったのよ？今では私やシャオなんかにおしゃれについて聞いてくるのよ？変わったわ。」

昴「そうか・・・。」

雪「皆変わったわ。蓮華もシャオも思春も祭も、あの冥琳も・・・そして私も・・・。」

昴「・・・。」

雪「・・・。」

俺は酒を煽った。

雪「ねえ、昴。あなたここに残る気はない？あなたがいれば母様の悲願を果たせると思うの。」

昴「・・・悪いな。俺には帰らなくちゃならない場所がある。」

雪「そう・・・。」

昴「それに俺なんかいなかったって雪蓮の母君の悲願を果たせると思っぞ？。」

雪「・・・分かったわ。これ以上は聞かないわ。でもね・・・。」

昴「!?!?」

雪蓮が俺の顔を引き寄せ、おもむろに口づけを交わした。

雪「ん・・・。」

クチュン、チヨロ。

昴「っ!?!?」

その口づけは情熱的で、強引に舌を絡めてきた。

雪「ぷはっ!」

しばらく口づけを交わすと雪蓮は顔を離した。俺と雪蓮の口からは一筋の光る糸が伝った。

昴「っ／＼／」

雪「王としては諦めても、女としては諦めるつもりはないからね」

昴「あ・・・う・・・。」

雪「ふふっ、後でね」

雪蓮は再び祭さんのもとへ向かっていった。

昴「ったく、雪蓮の奴／＼」

俺はしばらく口づけの余韻に浸った。ほどなくして宴はお開きになった。各々が部屋に戻り、そして夜が開けた。

昴「世話になったな。」

雪「こつちも随分助けられたわ。」

祭「昴よ。また尋ねてこいよ。」

昴「はい。機会があれば。」

穩「昴さん、お達者です。」

昴「穩も元気だな。」

蓮「昴、あなたの言葉忘れないわ。」

昴「君の成長、楽しみにしてるよ。」

思「次会うときまでに貴様より強くなってみせる。」

昴「楽しみにしてるぜ。」

小「次会ったら式を挙げるんだからね！忘れないでね！」

昴「・・・約束は出来ないけどまた会おうな。」

明「昴様。私のこと忘れないでくださいね。」

昴「忘れないよ。今度は可愛い猫でも連れてくるよ。」

亜「昴様、旅のご無事をお祈りします。私は、昴様の名を汚さない軍師になってみせます。」

昴「君にならなれるさ。頑張れよ。」

楓「旦那、今度会うときまでに、武も知もそれと女も、もっともつと磨くからな！」

昴「次会う時を楽しみに待ってるよ。」

冥「昴。」

昴「ん？」

冥「餞別だ。」

渡されたのはお金だった。

冥「お前が働いた分の給金だ。それと・・・情報によると、義勇軍

の劉備という者が黄巾党の争乱の際の活躍が認められ、今は平原の相に任命されたらしい。」

昴「何から何まですまないな。」

冥「気にする程のことではない。」

昴「あくそつだ！」

俺は手持ちの鞆から、丸薬が入った袋を取りだし、

昴「これを渡しとく。これを眠る前に一粒服用すれば眠った時間の3倍の効果の睡眠時間得られる丸薬だ。冥琳のことだから無理をするなど言っても聞かないだろうからな。無くなったら調合の材料の書いた紙も一緒に入れておいた。割りと手に入る材料だから集めるのは簡単だ。」

冥「すまないな。」

冥琳は丸薬の袋を受け取った。

雪「昴、必ずまた会いましょう！」

昴「ああ、必ずな。」

そろそろ出発するか。

昴「それじゃそろそろ行くな。皆！またな！」

俺は大きく手を振り、皆の姿が見えなくなるまで振り続けた。俺の、

孫家での日常が終わりを告げた。

昴「さてと・・・。」

黄巾党の首魁である張角はもういない。残党である目ぼしい将もあらかた荊州で討ち取られた。他の残党はそのうち諸侯に鎮圧されるだろう。これで全て解決・・・とは行かないだろうな。今回の争乱で漢王朝の支配力の低下が白日の下に晒されたからな。黄巾の乱は言わば始まりに過ぎない。しばらくは平穏が続くだろうが、それもほんの僅かな時間だろう。もし次に何か起こるとすれば・・・。

昴「都、洛陽辺りか・・・。」

桃香と合流する前に都を見ておくか。

俺は都洛陽を目指し、進み始めた。

1つの物語が終わり、新たな物語が始まった。

続く

第27話 最後の宴、そして旅立ち (後書き)

というわけで終了しました。思春は・・・好評のご感想があったので思春拠点のままにしました。次回は少し寄り道をしてその次の話からタグの通り、蜀ルートに入ります。結構長かったです。

感想、アドバイスお待ちしております。

それではまた！

第28話 都の実状、潜入捜査（前書き）

出来上がったので投稿します。ギャグとシリアスがごっちやです。

それではどうぞ！

第28話 都の実状、潜入捜査

雪蓮達のもとから旅立ち、2週間程が経った。俺は洛陽を目指している。都洛陽で何か起こる。そう予感して洛陽を目指している。その道中、気になる情報を耳にした。それは移動中の行商人に道を訪ねた時のことだ。

昴「道を訪ねたいのだが。洛陽へ向かうにはこの道を行けばいいのか？」

「へい、洛陽はこの道をずっと行けば着きますが……。」

昴「？」

何だ、歯切れが悪いな。

「悪いことは言わないが今洛陽には行かない方がいいですよ？」

昴「どづいつことだ？」

「それはですね・・・。」

行商人が俺の耳に近づき。

「あまり大きな声では言えませんが、今各地で檄文が飛び回っておりまして、洛陽では董卓が宮中を牛耳り、暴政を敷いておりまして、特に今長安なんかは重税を課せられて民は貧困に喘いでいるだとか・・・。」

昴「ふーん。あなたはそれを見たのか？」

「いえ、洛陽へ向かう途中、その情報を耳にしたのでこうして引き返した次第です・・・。」

昴「なるほど。」

なら、話の有無は分からないわけだな。

昴「忠告どうも。ではな。」

「危険ですぜ！」

昴「危なそうだったら逃げるなりなんなりするぞ。」

「そうですか。ではくれぐれもお気をつけて！」

昴「ああ。ありがとう。」

そのような話を聞き、警戒しながら洛陽へと向かった。長い道程の末たどり着いてみると、

昴「ふーん、暴政の都、ねえ。」

そこは今まで見たどの街より栄えており、暴政の欠片もなかった。街を見渡してみても民からは笑顔が溢れていた。

昴「店主、これを1つ貰うよ。」

「毎度あり！」

昴「景気よさそうだね。」

「そりゃもう！董卓様が入らしてからこのとおりですよ。」

ふむ。

昴「へえー。董卓様ってのはどんな人なんだ？」

「董卓様はそれはもうお優しく、民の事を誰よりも想ってくださいさる御方ですよ！宮中でやれ官僚やら十常侍やらが私服を肥やし、私達

に高額の税を徴収するばかりだったのですが、董卓様がそれらを一掃していただいたおかげで今ではこのとおり。」

昴「なるほど。これ、どうもね。」

「毎度あり！」

暴政のぼの字も出なかったな。

他にもいろいろな人に聞いてみたが皆答えは一緒だった。

暴政は行われていない。

むしろ董卓が来てから暮らしは良くなった。

こんな感じだ。もちろん言わされているのではない。これらを聞いて考えられるのはただ一つ。

昴「董卓の暴政は嘘八百だな。」

大方、董卓が都を牛耳るのに嫉妬したつてところか。檄文の発起人である袁紹。会ったことがないから聞いた噂程度の知識しかないが、噂通りの人物なら嫉妬程度のために簡単に動くだろう。

昴「さてどうするか……。」

この後のことだ。あまりぼやぼやとしてしていると桃香と合流できなくなるし、かといってこのまま帰るのも芸がない。

「……うん！、やっぱり董卓という人物。一目見ておきたいな。」

都でこれだけの評価を受ける名君。興味がある。

昴「そうと決まれば会いに行くか。」

忍び込むならやっぱり夜だな。とりあえずそれまで下調べをして、後はゆっくり待とう。俺は早速行動に移した。

そしてその夜、辺りはもう暗く、人通りもほとんどなくなった。

昴「それでは行動開始！」

下調べをした結果、忍び込むにはやはり正面から忍び込むしかなかった。都の居城だけあって構造も警備も厳重だ。

昴「だが俺には秘策がある！」

とある人が言った。潜入に必要なのは段ボールだと。しかしこの時代には段ボールはないので、代用品として人が1人入れる竹籠を用

意した。これで準備はオールオツケーだ！

昴「それでは潜入開始！」

ズルズルズルズルズルズル。

竹籠を被り、城門の脇を抜ける。

ズルズルズルズルズルズル、ドン！

昴「ん？」

何かにぶつかった。おかしいな、進行方向には何もなかったはずなのに。

ガバツ！

兵「……。」

昴「……。」

城門の門番が竹籠を持ってこちらを見ていた。

兵「……。」

昴「……曲者！」

兵「こちらの台詞だ！」

うおっ！いい突っ込みじゃないバレた！何で！？とにかく誤魔化

さないど。

昴「すみません、私は不治の病に侵されています、竹籠を被って城に入らなければ死んでしまうのです。」

兵「ならば仕方ない、通るがよい。」

昴「では失礼して。」

兵「なるか！」

やっぱり！

昴「南無三！」

ゴツ！

兵「ぐっ！貴様！覚えて・・・ぐう。」

ドサツ！

昴「スマン。」

見張りの門番は片付けたが、見張りが1人とは少ないな。ちょうど交代の時間だったのか？とにかくこれで潜入できるけど、この門番このままにしてたら大騒ぎになるな。とりあえず・・・おっ！あった。握り拳大の石を門番の頭の横に置く。これで・・・(*^m^*)

鞆からマジックペンを取りだしカキカキカキと、これでよし！

昴「ギャハハハ！笑えるぜ！」

あゝ面白い。ひとしきり笑ったし、行くか。

昴「それでは潜入開始」

城へと潜入した。

昴「広い城だな。」

潜入したはいいけど広すぎて何処が何処やら……これは苦勞しそ
うだな。

昴「うゝん……はあ。しょうがない。聞くか……兵士発見。」

昴「すみません、董卓どこですか？」

「董卓様？そんなもの大広間で軍議に決まっているだろ。それより
貴様見かけない顔《ガスツ！》キュウ。」

大広間ね。そこを目指そう。

さまようこと約20分。道中侍女に場所を訪ねて（気絶はさせてないよ。）ようやくたどり着いた。しかし正面から入るわけにはいかないの、天井裏から覗き見ることにした。大広間にいるのは5人。

昴「あれは恋にねねだな。それに張遼。あいつら董卓の将だったのか。残りは知らんが。」

さて、しばらく見学しますかね。

董卓軍 side

?「今大陸各地で根も葉もない檄文が飛び交っているわ。」

張遼「ホンマふざげとるわ!何で月がこんなふうになんねん!言われなあかねん!」

?「迂濶だったわ。十常侍の1人が捕まる直前に嘘の都の実状を書いた手紙を袁紹に送っていたなんて。」

ね「袁紹はただ月様に都を支配されたことに嫉妬してるだけなのです!」

?「おのれ袁紹め!董卓様を悪者扱いしおって!絶対に許さん!」

張遼「落ち着き、華雄。」

華雄「これが落ち着いていられるか!」

恋「・・・華雄、落ち着く。」

華雄「むうう。」

張遼「それで賈馱っち、これからどないするん?」

賈「連合が生まれ、ここに押し寄せて来るのは確実だわ。迎撃の準備を始めるわ。」

張遼「しゃーないか・・・。」

華雄「ところで董卓様は？」

賈「最近は根をつめていたからもう休ませたわ。」

華雄「そうか・・・。」

張遼「・・・一番辛いんわ他でもない、月やからな。」

賈「どれもこれもあのくそ十常侍と袁紹のせいよ！おかげで月は・・・。」

ね「月様・・・。」

賈「皆、力を貸して。月のために。」

張遼「おう！言われるまでもないで！」

華雄「うむ！当然だ！」

ね「袁紹をコテンパンにしてやるのです！」

恋「・・・頑張る。」

賈「今日はここまでにしましょう。細かいことは明日伝えるわ。」

恋「・・・。」

張遼「恋？どないしてん？」

恋は先ほどから上、天井を見つめている。

恋「・・・ふっ！」

恋がおもろに傍に置いてある方天画戟を天井に投げつけた。

ザクツ！

ね「れ、恋殿！？」

賈「恋！？どうしたの！？」

恋「・・・誰かいる。」

華雄「何！？間諜か！？」

恋「・・・ん、逃げられた。」

張遼「逃がすかいな。追うで！」

華雄「応！」

恋「ん。」

張遼を先頭に華雄、恋と続き、大広間を飛び出した。

昴 side

賈「今日はここまでにしましょう。細かいことは明日伝えるわ。」

どうやら完全に檄文は嘘っぱちだったようだ。さてと、後は董卓を・
・・・ん？

恋「……………」

恋、こつちを見てる？恋が傍らの戟を握り、天井に…………投じた。

昴「アカン！」

ザクッ！

先ほど俺がいた場所に戟が刺さる。

昴「とりあえず、逃げる！」

俺はその場から離れた。

とにかく逃げ続けた。時に空き部屋に隠れ、時に天井に張り付き、時に天井裏に隠れたりしながら追手を撒いている。不幸にも城の門番と城内で気絶させた兵士の存在が明るみになってしまい、警戒レベルはかなり高まってしまった。

昴「まいったな。」

気が付けば城のかなり奥に来てしまった。

昴「やみくもに逃げ回ったから何処が何処やら……ん？」

目の前の部屋。人の気配がする。扉がかすかに空いていたので隙間から覗き見を試みた。そこには1人の女の子がいた。

昴「（あの娘の佇まい、着ている服。それに気品のようなものを感じる。もしかして……）」

あの娘が董卓かな？この辺は城の最奥部にあたる。ただの将兵がこの部屋を宛がわれるとは思えないな。しばらく彼女を眺めていると。

？「どうして……。」

彼女が呟いた。

董卓 side

私は董卓。この都、洛陽の太守をさせていたでいております。もともとは涼州で部隊を率いていたのですが、都の十常侍の要請により都入りをしました。都へと来た私は愕然としました。都には活気も何もありませんでした。民も暗く、街も何処か薄暗かった。調べてみると、十常侍を筆頭に民から膨大な税を搾りとり、私服を肥やしていました。払えなければ刑罰をも下していた。

ひどい・・・。

私はそれを見ていられませんでした。なので私は十常侍の肅正を決心しました。本当はそんなことしたくない。でも力の無い民が苦しむのはもつと嫌だから。結果十常侍は肅正し、詠ちゃんや皆のおかげで再び都に活気が戻りました。しかし、十常侍の残党の1人が捕縛される直前に袁紹さんに都の嘘の実状と一緒に助けを求める手紙を送っていました。それにより、今国中に檄文が回っている。逆賊である私を倒せと。近いうちにこの都に諸候の連合が攻めてくる。

攻めてくるなら戦うしかありません。戦うしか……。

董「どうして……。」

ぐっと胸で拳を握った。

董「どうして、こんなことに……。」

詠ちゃんも、恋ちゃんも、ねねちゃんも、そして霞さんも華雄さんも戦場も行ってしまう。私のせいで。

董「私のせいで……、私のせいで皆が傷ついてしまう。」

戦争になればいっぱい人が死んでしまう。私を守るために皆が。涙が止まらない。次から次へと頬を伝って流れていく。

董「戦ってほしくないのに……、生きていてほしいのに……、皆戦場に行ってしまう。そんなの嫌なのに……。」

皆自らが望んで戦場に立つと言ってくれた。例え来るなど言われても私のために、と。そう言うってくれて嬉しかった。けどそれ以上に辛かった。

董「お願いします。皆を、皆を守ってください。私はどうなっても構わないから……。」

私は夜空の月へと祈りを捧げた。祈ることに意味はないかもしれない。でも私に出来るのはこれだけだから……。私は祈り続けた。しばらく祈りを捧げていると、

？「守つてやるよ。」

董「！？、誰ですか！？」

後方から声がし、振り返つてもそこには誰もいませんでした。部屋の外にも。

董「気のせいかな？」

疲れていたせいで幻聴が聞こえたのかもしれない。私は再び祈りを捧げた。

昴side

董「お願いします。皆を、皆を守ってください。私はどうなっても構わないから・・・。」

董卓が夜空の月へと祈りを捧げている。

昴「……。」

これが董卓か。暴君の欠片もない。董卓は悪く無いのに恨み言一つ言わない。ただ他者を気遣っている。乱世は非情だ。優しいだけの王なんて生き残れない。例え彼女が殺されてもそれは乱世の常だ。だけど……、だけど……。

昴「（こんな娘を死なせたくない。）」

甘い？優しい？だから何だ。これだけ他者を思いやれる人間が何故死ななきゃならない！

昴「守ってやるよ。」

思わずそう口走っていた。

董「！？、誰ですか！？」

しまった、気付かれた。俺は縮地でその場から離れた。

急いで城から脱出し、街の大通りを歩いている。

昴「とりあえず、もうここには用はないか。」

情報は集まった。今度こそ桃香と合流しよう。少し距離があるが、不眠不休で縮地で駆ければそう時間もかからないだろう。やることは決まり、ここを離れようとしたその時、

兵「見つけたぞー！#」

昴「ん？」

振り返ると、まるでロボットのように、口の端から顎にかけて線が引かれ、おでこには『肉』と書かれた一風変わった変人が襲いかかってきた。

兵「貴様が書いたんだろうが！#。取れないぞこの墨！（TOT）」

昴「油性だからな。」

水性ペンにしてやれば良かったな。

兵「死ね！」

兵士は大きく剣を振りかぶる。

昴「生きる！」

ゲシッ！

兵「ガフッ！」

俺は兵士の顔面に前蹴りを入れる。兵士はズルズルズルっと、倒れていった。

昴「スマン。」

俺は油性ペンでドラえもん髭と鼻毛を追加してその場を立ち去った。

街を脱出し、今度こそ桃香達のもとへ向かう。俺はただただ駆け出した。

おまけ

兵「ううう、落ちねえよ」（TOT）」

兵士の顔の落書きは2日落ちなかった。

兵「死なす！絶対死なす！#」

この兵士は昂への憎しみを糧に將軍にまで登り詰めたとか何とか。ちなみに『落書きの人』という二つ名がついた。

続く

第28話、都の実状、潜入捜査（後書き）

ギャグかシリアスを統一すれば良かったかなとも思っています。次回から本格的に蜀ルートです。後オリキャラ出します！

PVが20万を突破しました！ありがとうございます！

感想、アドバイス待ってます。

それではまた！

第29話 新たな仲間、そして合流（前書き）

投稿します。以外に時間がかかりました。久しぶりの蜀勢だったので少し苦戦をしました。

それではどうぞ！

第29話 新たな仲間、そして合流

桃香 side

桃「私は参戦したい。長安や都に住む人が苦しめられているのを見て見ぬ振りはできないよ。」

愛「私も同意見です。力無き民にかわり、暴悪な為政者に正義の鉄槌を喰らわさなければ。」

鈴「悪い奴は鈴々がぶっ飛ばしてやるのだ!」

今私達は袁紹さんから都で暴政を強いる董卓さんを討伐しようという手紙が届き、どうするかを皆で集まって軍議をしている。

桃「朱里ちゃん、雛里ちゃん、星ちゃんの意見は?」

朱里ちゃんと雛里ちゃん。2人は水鏡女学院から来た子で、ご主人様が軍師として私達のために推挙してくれた2人で、とっても頭が良くて、私達が黄巾の乱で活躍出来たのも2人のおかげです。星ちゃんは白蓮ちゃんのところへ行った際に白蓮ちゃんの元で客将をしていた人で、実力は愛紗ちゃんや鈴々ちゃんと同じくらい強い人だった。私達が白蓮ちゃんの元を独立と同時に白蓮ちゃんの所から旅に出て、私達が平原の相に任命されてから幾ばくかした時に改めて力を貸してくれることになった。

星「ふむ。桃香様や愛紗達が言うことも尤もだと思つのですが。」

愛「なんだ。星は反対とでも言うのか?」

星「そうは言わん。ただ・・・。」

朱「この手紙の内容が気になっているんですね？」

星「軍師殿も同じか？」

朱「はい。敵対勢力について書かれているとはいえ、あまりにも一方的過ぎるか・・・。」

鈴「一方的？？どういうことなのだ？」

雛「董卓さんは悪い奴。だからみんなで倒そう・・・、分かりやすいことばかり書かれていますけど、この手紙はそんな単純なものでは無いと思うんです。」

朱「これは諸侯の権力争い。抜け駆けして朝廷を手中に収めた董卓さんへの諸侯の嫉妬が、このような形で現れたて見るべきです。」

愛「しかし、力無き民が苦しめられているなら、我らは連合に参加すべきだ。」

朱「董卓の圧政に皆が苦しんでいる。それが本当ならば愛紗さんの言うことも尤もなんですけど。」

桃「嘘の可能性があるってこと？」

雛「嘘とまで言えるかどうかは分かりませんが、逆にどこまでが本当のことなのか。その辺りを見極めなければならぬかと。」

鈴「うゝ、何だかややこしいのだあゝ。」

星「それが政治というものだ。鈴々よ。」

朱「我々はすでに流浪の義勇軍ではなく、一つの地域を支配する候ですからね。」

雛「それに、すでに漢王朝に崩壊の兆しが見えている以上、先のことを見据えて動かなければ、私達のような弱小勢力は、巨大な濁流に呑み込まれるのは必至だと思います。」

愛「自分達の理想を実現するためにも、その理想を客観的に見つつ、実現するために現実的な考え方をしる・・・そういうことか。」

星「理想というものは大切だ。だが自分で自分の理想の目映さに目が眩んでいては、いつかは転んでしまつたろう？太陽は蒼天に、確かにあるのだから。その光を浴びながら地に足をつけて歩くことこそが重要だと、私は思うのだよ。」

桃「星ちゃんの言いたいことは分かるけど、でも、じゃあ私達は参戦しない方が良いつてこと？そんなの嫌だよ。」

愛「例え圧政の確たる証拠がないにしても、苦しむ庶人がいる可能性があるのならば、私はその人達を助けに行きたい。」

星「私とて本心ではそうなのだがな・・・さて。桃香様、如何しませしょうか？」

桃「・・・。」

私は参戦したい。都の人達が苦しんでいるなら。でももし朱里ちゃん達の危惧していることが本当だったら・・・。

鈴「あゝあ、こんな時お兄ちゃんがいれば、決められるのにな。」

ご主人様。天の御遣いであるご主人様がいてくれたら・・・。私達がどうするか考えていたその時、

「し、失礼致します！」

愛「何だ、今軍議の途中だぞ！」

星「まあ待て愛紗よ・・・。それでどうした？」

「はい！それがこの城に所属不明の隊が近づいております！数はおよそ300ほどです！」

愛「所属不明の隊？それは官軍か諸侯の軍か？」

「いえ、そのような旗印はどこにも・・・。」

愛「ならば賊か？ならばすぐに討伐を・・・。」

星「愛紗よ、如何に賊でも、その程度の数で邑ではなく城を狙うほど馬鹿ではなからう。」

雛「おっしゃる通りかと。」

朱「他に何か特徴はありませんでしたか？」

「はあ、おそらく、その隊を率いている者だと思われるのですが、先頭に黒い外套で体を覆い、5尺程の長剣を携えた男がおりました。」

桃「黒い外套、5尺の長剣つてまさか・・・。」

「「「ご主人様（お兄ちゃん）！！」」」

昴side

昴「桃香達、元気かな・・・。」

今俺はとある1団を率いて桃香達のいる城へ向かっている。

？「大丈夫でしょうか？いきなり矢を放たれるなんてことは・・・。」

昴「大丈夫だろ。所属不明とは言っても劉備はいきなり攻撃するよ。」

うな奴じゃないし、向こうには優秀な軍師が2人もいる。」

？「それならば良いのですが・・・。」

朱里と雛里が安易な決断はしないだろ。おつ、城から出てきたなあれは・・・。

桃「ご主人様！」

桃香が俺を見つけ、そして俺に飛び込んだ。

昴「桃香、元気そうで何よりだ。」

桃「ご主人様も元気そうで良かった。・・・会いたかったよ。」

昴「桃香・・・。」

桃香が俺の胸に顔をうずめた。

愛「ご主人様！」

鈴「お兄ちゃん！」

昴「愛紗、鈴々、2人も元気そうで何よりだ。」

愛「ご主人様のご活躍は私達も聞き及んでおります。」

昴「俺にも皆の活躍は聞いてるよ。」

鈴「お兄ちゃん、鈴々達頑張ったんだよ？」

昴「うん、良く頑張ったな、鈴々。」

鈴々の頭をナデナデする。

鈴「うん！えへへ。」

朱・雛「ご主人様〜！」

昴「朱里、雛里も、俺のかわりに桃香を良く支えてくれた。ありがとう。」

2人をナデナデする。

朱「はわわ〜／／」

雛「あわわ〜／／」

2人とも嬉しそうだった。

？「お久しぶりです、昴殿。」

ん？この声は・・・。

昴「星か！久しぶりだな。」

星「昴殿も、覚えていただいていたって何よりです。」

昴「忘れるわけがない。何せこの外史・・・この国に来て初めて背中を合わせて共に戦ったんだからな。そっちも忘れずにいてくれて

何よりだよ。」

星「忘れるものですか昴殿。いや主、と呼ぶべきか？主に命を救われ、共に戦い、勝利をしたことを。」

昴「星。。。」

星「そしてその後の熱い口づけも。。。」

昴「そうだな、熱い口づけを。。。えっ？」

桃・愛・朱・雛「ご主人様？」

昴「いやいや！口づけなんて。。。星！誤解を招くのようなこと言うなって！」

星「そんな恥ずかしがらなくとも。。。」

星は顔を赤らめさせ、頬に両手を当てて体をくねらせる。

桃「へえー、星ちゃんのご主人様知り合いなのは知ってたけど。。。」

愛「星と口づけを交わしていたとは。。。」

鈴「にははは、お兄ちゃん大胆なのだ。」

朱「はわわ／＼」

雛「あわわ／＼」

昴「星、もうその辺にしてくれ・・・。」

星「ははは、申し訳ありません。皆心配するな、口づけはしてらん。あくまでも私が頬に口づけをしたただけだ。」

桃「へえー・・・。」

皆がジトーとした目で俺を見る。また余計な爆弾を・・・。

桃「（ジ〜）・・・チュツ。」

桃香が俺の頬に口づけをした。

昴「!?!?」

愛「桃香様!?!?」

桃「星ちゃんだけずるい!」

昴「ずるいつて・・・。」

愛・鈴・朱・雛「ジ〜。」

もう收拾つかないな。

昴「もうやめようこの話しは!?!」

この空気嫌!

星「ところで主よ、後ろの集団は一体なんなのですか?」

昴「それも含めて城で話さないか？」

桃「そうだね。皆、城に戻るう？」

愛「御意。」

俺達は城へと向かった。

昴「桃香立派になったな。」

初めて会った時はただの旅の武芸者だったのに今は一国の中の候だからな。

桃「えへへ、皆のおかげでここまでこれたんだよ。」

愛「ゴホン、ところでご主人様、先ほど率いていた部隊は一体……」

昴「そうだったな、あの隊はもともと彼女が率いていた隊なんだ。」

雫、自己紹介を。」

俺は横にいる女性が前に出る。

周「私は周倉、字は烈陽ですわ。」

昴「彼女も俺と一緒に桃香達の仲間に加わる。」

星「周倉？周倉、お主、不敗の周倉隊の周倉か？」

愛「知っているのか？」

星「うむ。黄巾党の隊で官軍を相手に不敗誇った部隊があると聞いたことがある。その名が周倉だ。」

愛「賊ですか？賊風情が我らの仲間になど、不要なのでは？」

愛紗がそう言うと、雫がピクツと反応し、

周「義勇軍から官軍に成り下がった貴女に言われる筋合いはありませんわ。」

愛「何だと！貴様、我らを侮辱する気か！」

愛紗が手持ちの青龍刀を雫に構えた。

周「先に侮辱したのは貴女でしょう？自分の器でしか物事を図れない方は嫌ですわ。」

愛「貴様ー！」

青龍刀で攻撃をしようとする愛紗を俺と桃香が2人の間に割って入る。

昴「愛紗やめろ。雫も挑発をするな、」

桃「愛紗ちゃん、駄目だよ。今は愛紗ちゃんが悪いもん。」

愛「くっ・・・、しかし、賊が臣下など桃香様の名に傷が。」

星「まあ待て愛紗よ。噂通りなら周倉隊が狙うのは圧政を働く諸侯や官軍と自身を狙ってくる隊だけだ。邑や街は一切襲撃していないという話だ。」

愛「そんなもの、他が奪った糧食を使用していたなら同じだ！」

周「馬鹿にしないでいただけます？糧食や物資も悪徳の官軍から奪った物しか使用してませんわ。」

愛「ふん！口先だけなら何とでも・・・。」

周「はあ。昴様、話を進めて下さいな。相手するのも億劫ですわ。」

愛「くっ、貴様！」

昴「だからやめろって！雫、挑発もするなって言っただろ？」

愛「・・・申し訳ございません。」

周「申し訳ありませんわ。」

2人が頭を下げる。

星「それで主よ。彼女とは何処で？」

昴「ああ、彼女と知り合った経緯は・・・」

時は少し遡る。

洛陽から3日3晩縮地で走り抜け、休憩の為に1度邑に立ち寄った時のこと、邑人から1つの噂を聞いた。この近くの邑が賊に占拠されたという噂だ。1度そこを納める太守が軍を差し向けたが返り討ちにされたらしい。いち早く桃香と合流したかったが、ほっとけなかつたし、何より進行方向にある邑で別段遠回りでもなかったのだから、寄ることにした。そしていざ寄ってみると、

昴「別におかしな様子はないな。」

邑は普通に人が暮らしていた。何処にでも見られる邑の風景だ。

昴「まあ噂が立つ位だから何かあるだろ。」

一通り見て聞いて回って、何もなかったら桃香と合流しよう。邑に入り、何人かの邑人に聞いてみたが特に何も聞けなかった。やつぱりガセか？そう思って最後の1人の男に聞き込みをしたところ、

「実は大きな声では言えないんですが・・・。」

ようやく新しい情報が聞けたようだ。

「ここではあれなので、こちらへ・・・。」

俺は邑人の後をついていった。

男は邑の人気のない所へどんどん進んで行く。そして左右家が建ち並ぶ長屋のような所に案内された。

昴「なあ、何でこんなところに・・・、」

連れて来たんだ？と続けようとした所、後方から、

？「あなたですわね、この邑で私達のことを嗅ぎ回っているのは。」

振り返ると、棍を携えた1人の女性が立っていた。

昴「!？」

家々や家の屋根から次々と武器を携えた人が現れ、瞬く間に囲まれた。

昴「なるほど、君達がこの邑を占拠したと言われてる賊、というわけか。」

？「あなた、私達のことを聞いて回ってるみたいですけど、あなた官軍の間者ですか？」

昴「官軍でも間者でもないけどな。」

？「どちらにしろコソコソ動き回られても迷惑ですので、出ていっていただけませんか？」

昴「嫌だと言ったら？」

？「少々痛い目を見ていただくことになりますわね。」

周りの男達が剣や槍、弓を構えた。

昴「（一斉にかかられると面倒だな。さてどうするか・・・）」

どう動くか考えていると、

？「安心なさいな？周りには手出しはさせません。戦うのはあくまでも、」

棍を構え、

？「私ですわ！」

俺に飛び込んでくる。

昴「ちい！」

ガキン！

俺は村雨で受け止める。

？「はあ！」

続けて棍を突き、払い、時に蹴りを繰り返す。

昴「。。。。」

ガキン！ガキン！ドン！

俺は無言で迎撃をする。

昴「ふっ！」

俺は1度距離を取った。

？「あなた、先ほどから何故手を出しませんの？」

昴「・・・少しな。ところで、ここらで君の名前を聞かせてくれないか？」

？「聞いてどうしますの？」

昴「少し気になってな。」

周「・・・周倉ですわ。」

昴「周倉ね・・・。」

周倉、はて？何処かで聞いたような・・・もしかして。

昴「不敗の周倉隊。それは君の事か？」

周「よくご存知ですわね。」

不敗の周倉隊。黄巾党の賊の1部隊で官軍相手に不敗を誇った部隊と言われている。

桃香の義勇軍や華琳や雪蓮と言った猛将、知将が揃った軍と戦わなかったただけだといっても不敗はすごいことだ。

周「それで、私達を賊と知ってどうしますの？」

昴「いくつか聞きたいことがある。」

周「何でしょう?」

昴「俺は賊が邑を占拠したという情報を聞いた。これは本当か?」

周「正確ではありませんわね。私達は邑には休む為に寄らせていた
ただいただけですわ。略奪等の荒事は一切行っていないせんわ。」

昴「みたいだな。別段邑人に怯えてる様子はないからな。．．それ
ともう一つ、この太守の軍を撃破したというのは本当か?」

周「．．ああ、あれですか。何やらこの太守の使いが莫大な額
の税収を取り立てに来たので少々手荒く追い返しましたが、そのよ
うな話になっていましたのね。」

なるほどね。

昴「それで、君はこれからどうするんだ?」

周「どうする、とは?」

昴「今度はもつと大軍が押し寄せてくるだろう。どうする気だ?」

周「攻めてくるなら迎撃するだけですわ。」

昴「この邑の人を巻き込んで、か?」

周「!?!?」

昴「この国の太守や県令が君らと共にこの邑人をどうするか。分か
るだろ?」

税収の徴収の使いを追い返し、何の音沙汰もなければこの国の太守は反乱と見なすかも知れない。そうなたら周倉達と共に討伐の対象になる。」

周「私は官軍を許しません。官軍だけは絶対に！」

昴「官軍を憎む者は多い。けど君はその中でも一際根が深い。君がそこまで官軍を恨む理由はなんだ？」

周「・・・それは、・・・それは、官軍が・・・私のお父様とお母様の仇だからですわ！」

昴「・・・仇か・・・」

周「お父様は官に遣える将でしたわ。とても優秀で真面目な将でしたわ。しかしある日、お父様は収賄の容疑で処刑を言い渡されました。それは他の官吏の濡れ衣でした。お父様のことを気に入らなかつた者が都合よく処分するために仕組まれたことでしたわ。結果お父様は処刑され、残されたお母様と私は国を追い出されました。お母様も移り住んだ先の街の暴政によって身体を壊し、亡くなりましたわ。だから私は官軍が憎い。漢王朝が憎い！」

昴「・・・そうか。」

周「だから私は戦います。復讐を果たす為に1人でも多くの官軍の者を殺しますわ！」

昴「ふうー、結論から言わせてもらつと周倉、君がやっていることはただの無駄だ。」

周「なんですって!？」

昴「君が憎しみのまま官軍を殺し続けても世界は何も変わらない。枝葉を払っても新たに枝葉が生えるだけだ。そんなこと、君の父も母も望んでいるとは思えない。」

周「あなたに何が分かりますの!？何も知らないあなたに！」

周倉が棍を振り上げ、俺に襲いかかる。

昴「はあ！」

キーン!

俺は1度鞘に戻した村雨を再び引き抜き、抜刀術で棍を真つ二つにし、周倉に村雨の切っ先を向ける。

周「っ!？、そん・な。」

切れた棍を見つめ、膝を付く。

昴「なあ周倉、俺と・・・いや俺達と一緒にこの国を変えないか？」

周「どういうことですか？」

昴「言葉通りの意味だ。今漢王朝は根底が腐ってる。もはや致命的にな。そんな国を俺達で変えて皆が笑って暮らせる世を目指して戦わないか？」

周「そんなこと・・・出来ますの？」

昴「出来る出来ないじゃない。やるんだ。俺はそのためにここに
いる。」

周「そのためにつて・・・！？、思い出しましたわ、黒い外套、5尺
の長刀にその美しい出で立ち。あなた、天の御遣いですよ！？」

昴「そう呼ばれている。・・・周倉！」

周「は、はい！」

昴「俺に力を貸せ！この国を変えるための力をだ！」

周「・・・あなたを信じれば、この国は変わりますの？」

昴「変えてやる！この国を絶対に！皆が笑って暮らせる世を創るこ
とで君の復讐を終わらせる！そして君自身も幸せにする。」

周「つ／＼！？」

復讐に生きるなんて不幸だ。だから俺は復讐を断ち切り、周倉を幸
せにしてあげたい。

周「（幸せにするって、この国を変えた後私を、その、妻にすると
いうことかしら？そんな、天の御遣いはなんて大胆・・・でもこの方
のなら・・・。）」

昴「周倉、やはり俺を信じられないか？」

周「わ、分かりましたわ！あなたを信じようではありませんか！」

昴「ありがとう、周倉。」

初対面の俺を信じてくれたことが嬉しく、笑顔で礼を言った。

雫「つ／＼、私は姓は周、名は倉、字は烈陽、真名は雫ですわ。これからは雫と呼んで下さいな。」

昴「分かった。雫、君の真名を預かるう。」

雫「そ、それと・・・。」

昴「ん？」

雫「私を、その、幸せにするというのはその、嘘でも冗談ではありませんよね？」

昴「ああ。嘘でも冗談でもないよ。必ず幸せにするよ。」

復讐なんて悲しくて不幸だからな。

雫「ふふっ、そうですね。それでは私が公私共に私があなただを支えてあげますわ。」

昴「公私？まあいいや、頼りするぞ、雫。」

雫「はい！フフッ、フフフッ。」

その後雫は周倉隊の解散を部下に命じたが全員雫についてきた。雫は慕われているようだ。邑も雫が立ち去った後すぐに太守に書状を

出したので大丈夫だろう。そしてそのまま桃香の居城目指して……

昴「というわけだ。」

星「なるほど。ですが主。」

チラツと星が桃香を見る。

昴「なんだ？」

桃「今の話を聞く限りだけど……。」

桃香が朱里と雛里を見る。

朱「そうだよね。」

雛「うん。」

桃・星・朱・雛「(きつと周倉さんは、ご主人様(主)に求婚されたと勘違いしたのでは?)」

昴「どうした?」

桃「ううん、何でもないよ?」

昴「ん?そうか。」

何か知らんがまあいいか。

雫「劉備さん?」

桃「は、はい!」

雫「私の主はあくまでも昴様。私はあなたの命に従う気はありませんので、それはあらかじめ伝えておきますわ。」

雫がそう言い放つと桃香は雫の手を取り。

桃「うん、分かった!ご主人様と一緒に頑張ろうね!」

雫「・・・なるほど、昴様の言った通りの方ですわね。」

桃「?、?」

雫が桃香の手を空いている手で握り。

雫「命には従いません。ですが協力は致します。共に頑張りましたよ」

う。劉備さん。」

桃「はい、よろしくね。周倉さん。私のことは桃香でいいよ!」

雫「では私も雫と呼んでくださいね。」

桃「うん、雫さん!」

鈴「桃香お姉ちゃんが預けたなら鈴々も預けるのだ。鈴々、字は翼徳。真名は鈴々なのだ!」

雫「鈴々さん、よろしく。私も雫でよろしいですわ。」

朱・雛「私達も預けます。」

朱「私は諸葛亮、字は孔明。真名は朱里でしゅ・・・あう。」

雛「私は鳳統。字は土元。真名は雛里でしゅ・・・あう。」

カミカミだった。

雫「私のことは雫と呼んで下さいね。可愛い軍師さん?」

最後は愛紗だが、

愛「私はお前を信用出来ん。悪いが真名を預ける気も預かる気もない。」

雫「貴女には聞いてませんわ。」

愛「相変わらず癪に障る・・・。」

桃「まあまあ愛紗ちゃん。」

桃香が愛紗をなだめる。

昴「ところで、皆は軍議の途中だったみたいだな。」

大きな卓を見ると、卓の上には飲みかけの器が並んでいる。

桃「うん、そうだよ。」

昴「内容は袁紹からの檄文か？」

星「いかにも。我らがどう動くか話し合っていたところです。」

昴「その事についても話がある。単刀直入に言うと、袁紹の檄文の内容は全部嘘っぱちだ。」

桃「！？、ご主人様、それは本当なの！？」

昴「ああ、間違いない。」

俺は洛陽で見たこと聞いたことを全て話した。

桃「そんな・・・。」

愛「なんてひどい・・・。」

皆俺の言葉を聞いて驚愕している。

桃「やめさせよう。(ボソッ)」

愛「えっ?」

桃「やめさせよう!こんなの間違ってるよ!董卓さんは何も悪くないのに!今から袁紹さんや他の諸侯に書状を書いてこの連合を・・。

」

昴「それは無駄だ。」

桃「っ!?!、どうして!?!」

昴「俺の言った事に嘘はないが、それを証明するものは何もありません。ましてや俺達は弱小勢力。誰も信用しないだろう。」

桃「無駄かどうかはやってみなくちゃ分からないよ!もしかしたら誰か協力して・・。」

昴「なら言い方を変える、無理だ。諸侯の中にはこの檄文が嘘だと気付いている者もいるだろう。」

少なくとも華琳や雪蓮の所は気付いているだろうな。

昴「実際問題、参加する諸侯のほとんどがこの檄文の有無はどうでも言いと思っているだろうな。この戦いで参加し活躍をすれば名をあげることができる。勝ちさえすれば檄文の内容が嘘でも悪名は全て袁紹が被ってくれるしな。これが参加する諸侯の本音だ。」

桃「そんな・・・、なら、董卓さんに協力をして連合の皆を・・。」

昴「それも駄目だ。」

桃「どうして・・・。」

昴「連合の大軍相手に俺達に加わったところで対して変わらない・
・いや、本音を言えば愛紗、鈴々、星という猛将に朱里、雛里とい
った知将。それに俺と雫が加われれば連合を退けることは可能だろう。
だけどそれは先のことを考えればやらないほうがいいだろう。」

愛「先の事？」

昴「董卓は圧政を強いている。この噂がここまで広まった以上、も
う董卓には洛陽以外に味方はいない。連合を退けてもそこから先は
ずっと戦い続けなきゃならない。俺は董卓という人物に少し触れた
が、董卓は戦い続けるには優しすぎる。覚悟を決めた桃香とは違い、
戦で人が死んで行くことに耐えられないだろうな。」

桃「・・・。」

皆が沈黙している。

星「では主殿、我々はこの連合には不参加、ということですか？」

昴「いや、連合には参加する。」

桃「っ!?!、どうして!?!?」

昴「表向きは他の諸侯と同じ、名をあげるためだ。」

星「表向き。では本当の目的は？」

昴「……俺は董卓を保護したいと考えている。」

星「!?!」

愛「そのような事、もし他の諸侯に気付かれれば我らが討伐の対象になりますよ!?!」

昴「だろうな。だから上手くやる必要があるだろうな。」

星「主よ、董卓を保護する利は我らにはありませんぞ?」

昴「利なんてないさ。でもな星。俺達は利の為にだけに戦っているわけでも戦ってきたわけでもないだろ?」

星「……」

昴「俺達はこの国でいわれのない暴力、暴政から民を守り、皆が笑って暮らせる世にするために立ち上がった。ならその中に董卓は入れないのか?董卓はこんな状況でも恨み言1つ言わないでただ自分を責めている。自分のせいではなくさんの命が散ってしまつと。俺はそんな子をみすみす死なせたくはない。皆これはただの我が儘だ。今まで皆に任せつきりで何もしなかった俺が言うのもおこがましいが皆力を貸してほしい。頼む。」

俺は頭を下げた。自分でも無茶なことを言っているのは分かる。それでも俺は……

桃「私はご主人様の意見に賛成だよ。」

昴「!?!?、桃香。」

桃「私達は皆を守る為に立ち上がったんだもん。そこに董卓さんが入らないのはおかしいよ。皆はどう？」

愛「私も賛成です。弱き者や苦しんでいる者を守るのが我らの使命。否はありませぬ。」

鈴「鈴々も賛成なのだ！」

星「我ながら利で動くこととするとはなんと浅ましきことだ。これでは私服を肥やす官吏と変わりませぬな。私も賛成です。」

朱「私も否はありません。」

雛「それこそが私達が戦う理由だから。」

雫「私は昴様に付き従うのみですわ。」

昴「皆、ありがとう。では俺達は連合に参加という形をとる。いいね？」

桃「うん！」

皆も同意の構えをしている。

昴「よし！そうと決まれば早速準備を始めよう。」

「「「「「了解！」「」「」「」

皆の掛け声を合図に各々が準備に取りかかった。

かくして、劉備勢力は連合への参加を表面したのだった。

続く

第29話〈新たな仲間、そして合流〉（後書き）

若干、オリキャラ零の設定が楓と被りましたね。周倉の字はなかったので自分が考えました。周倉って実在人物じゃないらしいですが、お墓は存在するそうです。零は喋り口調こそ麗羽と同じですが当然資質は違います。今回は、目ぼしいオリキャラを出し尽くしたので、ここらでオリキャラ紹介をします。

感想、アドバイス、どしどしお願いします。

それではまた！

〽オリキャラ紹介〽 (前書き)

オリキャラの紹介をします。

一部ネタバレがあるので、過去の話を読んでない人はご注意ください。
さい。

それではどうぞ！

くオリキャラ紹介

姓 司場
名 認
字 仲達

真名 茉里

朱里や雛里と同じ水鏡塾の塾生で、2人が旅立つのと同時に昴と共に華琳の元へ仕官に向かった。能力的には政治等の政まつりごとに関しては朱里と雛里に若干劣るが、戦や戦略に関しては言えば2人を僅かに上回る。理由としては朱里と雛里は桃香と同じ理想を掲げている為、残忍な策や、味方に犠牲を強いる策に難色を示すが、茉里は必要とあらば即決してそのような策を取れる決断力があるため、戦に関しては、対等な条件なら朱里と雛里を上回る。

性格は大人しく、あまり人と喋らない（話しかけられるのは嫌なわけではない。）

喋り方はスローテンポでぶつ切りで、感情を表に出さないが、決して無感情なわけではなく、好物の甘い物を食べた時や、昴に褒められ、頭を撫でられると満開の笑みが溢れる。背丈、身長、年齢は朱里と雛里とほとんど同じで、胸は若干ではあるが、2人を一方リード。（朱里と雛里は羨ましがっているが、本人は気にしてない。）髪型はストレートロングで、トレードマークは麦わら帽子。

当初茉里は朱里たちのようなちびっこ軍師にするか、冥琳のような色気のある軍師にするか迷いましたが、実際の三国志では諸葛亮のライバルであるため、それに現実味を出すためにちびっこ軍師に落ち着きました。

姓	凌
名	統
字	公績

真名 楓

孫家に仕える将で、その実力は雪蓮の次に強い。当初は亡き父、凌操と共に水軍を率いていたが、思春が来てからは歩兵部隊を率いている。原作では雪蓮が先陣を切ることが多かったが、この作品では楓がその役を担うことが多いため、雪蓮は少し不満げである。思春とは父である凌操を殺された関係で憎しみとまで言わないものの、あまり良い感情を持ってなかったが、昴の計らいにより和解し、冗談を言える間柄になった。

凌操に男手1つで育てられたため、性格も口調も男勝りに育ち、とにかく自らの武を磨くことに心血を注いでいた。雪蓮に昴との間に子を成せと言われた時も、どうせ自分には生涯相手なんて現れないだろうと思いついていたため、当初は強い昴ならいいかな？って程度だったが、昴の強さ、人柄に触れたことにより、本気で昴に惹かれ、そのことから女らしさを意識するようになった。身長は愛紗と同じくらいで髪型はショートヘアで、見た目はボーイッシュ。そのため、男と間違われることもしばしばある。

持ち武器は虎狼双という名のトンファー。

姓 周
名 倉
字 烈陽

真名 雫

元賊將で、一隊を率いていた、その隊は官軍や諸候を相手に1度も敗北しなかったことから不敗の周倉隊と恐れられた。

元々は父親が官に仕える将であったが、濡れ衣により処刑され、残された雫とその母親は国を追われた。移り住んだ先の街ではその国の太守の重税により、税の支払いと娘を育てるために無理をしたために早くに母親も亡くなった。そのことにより、官軍を心底憎んでおり、同じ目的を持った者を集め、官軍や諸候に戦いを挑んでいた。程なくして黄巾党が結成されたが、張3姉妹に煽動されただけの集団と残りはそれに便乗し、略奪や殺戮を繰り返す集団であったため、一切の協力もせず、援助も受けず、兵糧と物資は官軍や悪名高い諸候から強奪したものを使用していた。黄巾党が解散され、周倉隊も疲弊していたため、立ち寄った邑で農作業等を手伝いながら過ごしていたところ、昴に出会い、昴の仲間になった。

雫は父親が官に仕える将であった時にあらゆる書を読み、学んでいたため、戦略、政にも長け、我流で棍を覚え、武も長けている。雫の能力は、武は愛紗や鈴々や星、知は朱里や雛里に劣るが、総合力では蜀勢の中ではピカイチ。白蓮の器用貧乏とは違い、文字通り万能である。

雫の特徴として、身長は177センチと高く、スタイルは良く、

胸も大きすぎず小さすぎずのモデル体型。ヘアースタイルはウェーブのかかったロング。幼い頃は暮らしが良かったためしゃべり方は麗羽のようなお嬢様口調。性格は少々思い込みが激しく、融通がきかない節があるが、仲間思いで、仲間を守るため、特に昴のためなら何でもできる。愛紗とはファーストコンタクトが最悪だったため、仲が悪い。（協力するべき時は協力する。）流行やファッションに敏感で、沙和と同僚ならきつと話しも弾むと思う。

持ち武器は蒼天棍という名の棍。

〽オリキャラ紹介〽 (後書き)

以上です。

身長に関しては恋姫キャラの身長が分からなかったのも、正確な身長を記載します。容姿や顔は読者におまかせします。

感想、アドバイス、お待ちしております。

それではまた！

第30話〈連合集結、担うは最前線〉（前書き）

時間がかかりましたが完成しました。今回ちょっと桃香がらしくないかなって感じかします。

それではどうぞ！

第30話 連合集結、担うは最前線

連合への参加を決め、数日間は準備に費やし、やがて準備が整うと、俺達は平原を出発した。参加した将は、俺と桃香、それと愛紗、鈴々、星に、朱里と雛里だ。さすがに本城を留守にするわけにはいかないの、雫が留守番をすることになった。理由は武も知も優れてることと、将として、訓練をしている時間がなかったため、兵との連携が出来ないからだ。まあその時愛紗は反対して、またひと悶着あつたけどな。それと出陣の際、とある問題点が出てきた。それは平原に赴任して日が浅く、税収を得るための組織を構築出来なかったため、兵糧と軍資金が不足しているということだ。これに関してはどうしようもないので、他の諸候にお世話になろうということとで落ち着いた。格好は悪いがこの際格好は気にしても仕方ないので、それでひとまず納得した。

そして出陣してから1週間、俺達は反董卓連合との合流地点に到着した。

桃「ほわー、たくさん兵隊さんが居るねえ。」

昴「確かにな。」

あの中央のが袁紹か。その横が袁術だな。おつ、あれは華琳だな。当然来るよな。その奥が雪蓮か、これも当然か。他にも西涼の馬騰に、官軍所属の諸候がちらほら、か。

桃「あ！あそこ、白蓮ちゃんの旗だー！」

……ああ、公孫贛か。確か、桃香知り合いなんだっけ。

昴「とりあえず、連合の総大将のところへ行こうか。」
桃「うん！」

中央の大きな天幕を目指して歩いていると、

「長の行軍、お疲れ様でございました！貴殿のお名前と兵数をお聞かせ下さいますでしょうか！」

金ぴかな軍装に身を包んだ兵士が、筆記用具を持ちながら声を掛けてきた。派手だねえ。

桃「平原の相、劉備です。兵を率いてただいま参陣しました。連合の大将さんへ、取り次ぎをお願いできますか？」

「はっ！しかし恐れながら現在、連合軍の総大将は決まっておらぬのです。」

愛「何？総大将がまだ決まっていなないと？」

星「ということは、この場所に駐屯し、いったい何をしているのだ？」

もつともな質問だな。

？「総大将を決める軍議をしているのさ。」

兵士からの返事を待っていると、背後から質問の答えが返ってきた。

桃「白蓮ちゃん！」

公「よ、桃香。久しぶりだな。」

桃「お久しぶりだねー 元気だった？」

何やら桃香達と何やら話し始めた。ふーん、あれが公孫贇か。人は良さそうだし、なかなか優秀そうだが・・・なーんか特徴がないな。普通？悪く言えば地味だ。そんなことを考えていると、公孫贇がこちらを向き、何やら近づいてきた。

公「お前が噂の天の御遣いか？」

昴「一応そう呼ばれてるな。」

公「へえー・・・。」

頭のとっぺんからつま先までじっくり眺める。

昴「ん？どうした？」

公「ああ悪い悪い。何、噂とは当てにならないなと思ってな。」

昴「噂なんて得てしてそんなものだろ？」

公「噂以上だよ。お前は。」

昴「お褒めに預かり光栄だよ。・・・こちらも桃香達が世話になったようだな。感謝するよ。」

公「昔馴染みの間柄だからな。それにこちらも世話になった。」

昴「ふむ、やはりあなたはいい人なんだな。」

公「よせやい／＼」

昴「はははっ。」

やはり公孫贖は人がいいな。

愛「ところで白珪殿。総大将がまだ決まっていけないというのは本当のことなのですか？」

公「ああ。残念ながら事実だ。」

朱「どういうことなんでしょう？やはり諸侯の主導権争いが泥沼化しているのでしょうか？」

公「それがなあ。．．実はその逆なんだよ。」

どういうことだ？

公「一部を除いて、総大将なんて面倒な仕事はごめんだ．．という人間が殆んどでな。軍議が進まん。」

鈴「面倒なのはやだーって言うなら、やりたい奴にやらせれば良いのだ。違うのか？」

公「いや、実際そうなんだが、やりたそうにしている人間が自分から言い出さなくてなあ。」

雖「つまり、やりたそうにしている人間に押しつけるつもりなのに、やりたそうにしている人間が立候補せず、また他の諸侯も発言に対

して責任を負いたくないから薦めない・・・ということですか？」

公「ぴったりその通り。・・・腹の探り合いで疲れるよ、ホント・・・」

全く、一応は都の窮地っていう体なのに随分悠長だな。それで結果自分の首を絞めてんだからわけないな。

昴「それじゃ、決めるに行くか。」

桃「えっ？」

昴「こんなところで時間掛けてたら連合の勝機がなくなるからな。」

星「しかし主よ、我々は弱小勢力、諸侯の将らがまとも取り合つとは思えませぬが・・・。」

昴「そこは、何とかなるさ。桃香、行こう。」

桃「は、はい！」

俺は諸侯の代表らが集まる天幕へと向かう。桃香もそれに続く。

桃「ご主人様、本当に大丈夫なの？」

昴「連合の総大将を決めるだけならわけないよ。ただ・・・少し面倒事抱えるハメになるかもしれないけどな。」

桃「面倒事？」

昴「まあ、発言の責任は取らなきゃならないだろうがな。」

桃「えーと・・・大丈夫かなあ。」

昴「何、それに見合うだけの物は戴くけどね。」

桃「えっ？どついうこと？」

昴「とにかく俺に任せろ。桃香は他の諸候に舐められないようにドシツと構えてろ。」

桃「うん、分かったよ！」

昴「さてと・・・。」

軍議に突入する前に少し仕込みをしておくか。

諸候が集まる天幕に近づくと何やら甲高く笑い声が聞こえてくる。

昴「行くか。」

桃「はい！」

さて、突入だ。やっぱり第一印象は大事にしないとな。

バサッ！

天幕の入り口が傍に立つ兵士に捲られ、俺と桃香は天幕の中へ入場した。

？「
において完璧な我ら連合軍。しかしてただ1つ足りないもの。さてそれは・・・あら？どなたですの？」

天幕に入ると華琳の比じゃないドリルを持った女性が何やら（無駄そうな）演説をしていた。諸侯の視線が全て俺に集まる。大陸中の諸侯が揃い踏みだな。華琳に冥琳、雪蓮は面倒くさがってここには来なかったのか、袁術もいるな。あのドリルはもしかなくても袁紹だな・・・さてと、きつちり挨拶をしますかね。

桃「平原の相、劉備です。」

先に桃香が挨拶をする。俺も続こう。俺は手を胸に当て、

昂「お初にお目にかかります。平原より参りました御剣昂です。以後お見知り置きを。」

きつちり礼節を守り、挨拶を決めた。場に暫し沈黙に支配されると、

華「似合わないわね。」

冥「似合わないな。」

術「似合わぬな。」

紹「似合いませんわね。」

一部諸候に超不評だった。っていつか袁紹、お前は初対面だろ。

昴「行軍中にそこそこ悩んで考えた挨拶なんだがな・・・。」

華「あなたそんな礼儀を守る柄じゃないでしょう?。」

冥「確かにな。」

ひでえな、おい!

顔見知りの諸候とはこんな感じだった。残りの諸候は各地に広まっている噂を聞いていたんだろう、何やらざわついている。

紹「ゴホン!今は田舎者のことなんてどうでもいいではありませんか!今はこの連合を誰が率いるか、ですわ!それはもちろん、気高く、誇り高く、そして能力を・・・『ああ、その件なんだが』、何ですの#」

昴「連合の総大将の件だが、ここに集まる諸候の本音として総大将みたいな面倒事はやりたくない、かといって何か発言をしてその責任も取りたくない、そうだろ?。」

俺は回りを見渡す。誰も肯定も否定もしない。

昴「しかしこのままいたずらに時間を長引かせても董卓軍が有利なるだけで、こちらが不利なる。それも分かるだろ？」

皆が無言で頷く。

昴「そこでだ。」

俺は懐から紙の束を取りだし、卓に並ぶ諸候に配る。

昴「これにそれぞれ、連合の総大将に相応しい人物を書き、投票してもらおう。それで多くの諸候に選ばれた者が総大将だ。これであらうか？」

俺は諸候の將に提案した。諸候の皆はそれぞれこの提案を飲むか思案している。

華「私はそれで構わないわ。」

華琳がそう言ったのを皮切りに、

冥「私も構わない。」

袁「妾も構わぬぞ。」

冥琳と袁術もそれに続き、残りの諸候もそれに応じた。

紹「お待ちなさい！そのようないい加減なやり方で決めるなんて私は認めませんわ！」

華「この御剣昴の言う通り、このまま軍議に時間を掛けるのは無意

味だわ。それとも貴女は総大将選ばれる自信がないのかしら？」

紹「ぐぐぐっ！分かりましたわ、それではそのやり方で決めますわ
！」

華琳のフォローにより、投票による方法が決まった。

・
・
・
・
・
・

各々が書き終わり、4つ折りにし、用意しておいた布に紙を置いていく。全て集まると、風呂敷でつつむように布の四隅を縛り、軽くシャッフルして再び布を広げる。

昴「それじゃ、開票するぞ。」

俺は中の1枚を取り、開く。書かれていたのは『袁本初』。次々に開票されていき、描いてあるのは全て袁紹だった。そして全て開票する前に袁紹に決まった。

昴「これも袁紹・・・だな。何だ、全て開票する前に決まったな。投票により連合の総大将は袁紹殿ってことで皆構わないな？」

諸候は皆この結果に同意した。

昴「それじゃ、袁紹殿、よろしく頼む。」

紹「おーっほっほっほっ！当然ですわね。」

袁紹はこの結果に大満足みたいだ。

袁紹よ選ばれたって言うよりはあんた完全押し付けられたんだぜ。

華「総大将が決まったなら後の事はその総大将に任せるわ。私は陣に戻る。決定事項は後程伝えてくれれば良いわ。」

と一言残し、天幕から出ていった。

冥「私も自陣に戻らせてもらう。曹操殿と同様、作戦は後程通達してくれればそれで良い。」

冥琳も同様に席を立つ。俺の横を通り過ぎる瞬間。

冥「ではな。」

ボソツと一言呟き、天幕を出ていった。

術「何じゃあの2人は。身勝手にもほどがある。」

公「あーあ、どうするんだ。本初。」

紹「ふんっ、私に任せると言った以上、私の指示に従っていただき
ますわ。」

袁紹やや不満気に呟いた。

昂「では俺達もこれで・・・。」

紹「お待ちなさいな。」

だよなあ。

紹「さて、御剣昂さんとやら、あなたの発言のお陰で、私が連合軍の総大将という責任の重い仕事をする事になってしまったのですけれど。」

はあ、やっぱり来たか。

昂「何だ、嫌だったのか。なら俺が変わりに総大将になってやるよ。」

紹「なっ！？誰がそのような事を言いましたか！？」

昂「だってやりたくないんだろ？」

紹「そのような事！この連合の総大将に相応しいのは三公袁家の末裔たるこの私しかありえませんか！諸候を指揮する誉れ、あなたなんか・・・。」

昂「誉れっていうことは選ばれて光栄だつてことだよな？ならそのきっかけを作った俺に感謝こそあれ、責任取る必要はないよな？」

紹「ぐっ！・・・でしたら、総大将として命じますわ！」

総大将命令ときたか。

昂「内容は？」

紹「簡単なことですよ。連合軍の先頭で勇敢に戦っていただければ良いのです。あ、もちろん、その後ろには私達袁家の軍勢控えていますから、何も危険なことはありませんわ。」

要するに俺達を捨て駒にするつもりか。

紹「先陣は武人にとって荣誉ある持ち場。なら喜んで受けるのは当然のことでしょう？」

言ってくれるね。

昂「おっしゃる通りだ。分かった、引き受けよう……そのかわりいくつか条件を付けさせてもらおうぞ。」

紹「条件？」

昂「兵1万の貸与と兵糧二月分で引き受けよう。」

紹「なっ!？」

昂「先陣は武人にとっての誉れ。それは袁紹殿の言う通りだ。しかし一番危険で一番被害が出る配置場所だ。それを自身の権限をもって命令するんだ。そのくらい対価を払うのは当然だろ？」

紹「ぐっ!しかし……。」

それはさすがに無理か。

昂「分かった、なら兵糧は一月半で兵は7千・いや6千でいい。それ以上は妥協しない。無理なら他の諸候に頼んでくれ。聞くところによれば曹操とは旧知の仲らしいな？そのよしみで頼んだらどうだ？」

紹「くっ、言ってくれますわね。だからと言ってそれだけの兵と兵糧なんて・・・」

揺れているな。あと一息つてところか。

昂「袁紹殿、これはあなたにとつても悪い話ではない。君が俺の提示しただけの兵と兵糧を提供すればここに集まる諸候及び天下の誰もがあなたの器量を認めるだろう。さすがは三公袁家の末裔たる袁紹だと。それに俺達の兵の中に袁紹殿の兵が加入される以上、俺達の活躍は回り回ってあなたの評価にも繋がる。どうだ？悪い話ではないだろ？」

紹「・・・そうですわね。良いでしょう。兵6千と兵糧、ただちに手配しましょう。」

よし！のってきた！

昂「さすがは名門袁家の人間。あなたの尊大なる器量に感謝するよ。」

紹「当然ですわ。おーっほっほっほ」

大きな高笑いをする袁紹。
くくくつ、俺のにらんだ通り、扱いやすくて助かった。

桃「(すごいご主人様。あの袁紹さんをいとも簡単に扱ってる。)」

昴「それじゃあ袁紹殿。先陣は承った。それで、これから董卓軍と戦うにあたってどのような作戦をとるんだ？」

紹「作戦？そのようなものありませんわ。」

・・・ん？このドリルさん、何をほざいているのでしょうか？

桃「作戦、考えてないんですかーっ!？」

紹「な、何ですか？何でそんなに驚くんのですの？」

桃「だ、だって、普通、軍を動かす場合作戦に沿って動かすじゃないですか？作戦が無いんじゃ、どうやって進軍すれば良いのか・・・」

紹「ああ。それならば決まっていますわ。」

桃「ですよねー・・・。」

まあ、あまり期待は出来ないが。

昴「それで、作戦は？」

紹「雄々しく、勇ましく、華麗に進軍、ですわ。」

桃「……。」

期待を裏切らないな。だけどこの場合……。

桃「袁紹さん、いくらなんでもそんないい加減な……。」

俺は袁紹に物言う桃香を手で制し、

昂「単純にして豪快な作戦、恐れ入る。話しは決まったなら俺達は陣に戻らせてもらうよ。」

紹「分かりましたわ。精々励みなさいな。」

俺は天幕を後にする。

桃「ちよっ、ご主人様!？」

桃香は俺と袁紹を交互に見て俺に続いた。

桃「ご主人様！」

昴「どうした、桃香？」

桃「どうして袁紹さんに何も言わなかったんですか！？あんなの作戦でも何でもないよ！」

昴「だろうな。あれを作戦なんて言ったら、それは作戦に対する冒涇だな。」

桃「だったらどうして・・・。」

昴「雄々しく、勇ましく、華麗に進軍。アホくさい作戦だが、裏を返せばそれさえ守ればこちらはどう動いて構わない、ってことだろ？」

桃「！？、それはそうだけど・・・。」

昴「第一、あの袁紹じゃどのみちまともな作戦は期待できない。あれに頭捻らせて作戦練らせて変に行動を制限されるより、ああ言うてくれたほうが寧ろ助かる。」

桃「な、なるほど・・・ご主人様ってすごい。いっぱいいるんな事考えてるんだねえ。」

昴「そのくらい考えないと生き残れないさ。」

桃香と話がら歩いていると、

？「久しぶりね。昴。」

昴「・・・久しぶりだな。華琳。」

華琳が俺達の陣近くに立っていた。

昴「自陣に戻ったんじゃないのか？」

華「あなたに用があつてね。・・・琉流。」

すると、傍に控えていた女の子が前に出た。あれ、この子は確か・・・。

昴「君は確か・・・典韋だっけ？」

典「はい！覚えていただいて光栄です！」

華「琉流があなたに礼を言いたかつたらしいから連れてきたのよ。」

昴「そうなのか。」

俺なんかしたっけか？

華「私は席を外すわ。・・・劉備だっけ？」

桃「は、はい！」

華「あなたと個人的に話がしたいわ。付き合ってくれないかしら？」

桃「分かりました。」

桃香と華琳がその場を離れた。何を話すんだろ？

典「あ、あの。」

昴「ああ悪い悪い。礼、だっけ？何か俺したか？」

典「はい。御剣昴様のおかげで季衣と会うことができましたのでそのお礼をしたかったんです。」

昴「そんな改まらなくてもいいのに。」

典「いえ、そういうわけにはいきません。是非お礼を言わせてください。」

律儀な子だな。

昴「分かった。それなら礼を受けとるよ。」

典「はい。あの、ありがとうございます。」

と、典章が頭を下げた。

昴「どういたしまして。」

典「それと、これを召し上がってくれませんか？」

典章が包みを取り出した。開けて中を見てみると。

昴「これは・・・クッキーか？」

典「はい。季衣や茉里ちゃんに話を聞いて作ってみたんですけど……」
すごいな。話を聞いただけでここまで再現したのか。

昴「分かった。では一つ……」

一つ取りだし、食べてみる。

昴「これは、美味しいな。」

典「本当ですか!?!」

昴「焼き具合も固さも甘さもちょうどいいし、すごく美味しいよ。」

典「ありがとうございます。初めて作るお菓子だったから不安で……」

昴「味は保証するよ。以前に食べた料理も美味しかったし、やっぱり典韋はすごいな。」

典「そ、そんなノノ」

典韋は恥ずかしそうに顔を赤くした。

典「あと、もう一つお願いがあるんですけど……」

昴「何かな?」

典「その……兄様と呼んでもいいですか?」

昴「兄様？・・・それはまた何で？」

典「それはその・・・季衣も兄と呼んでるみたいですし・・・わ、私も呼びたいなって、その・・・駄目ですか？」

典韋が不安そうに上目遣いでおずおずと尋ねる。兄様が・・・。

昴「ああ。構わないよ。季衣は妹とみたいなものだったし、その親友なら君も妹みたいなものだ。」

琉「あ、ありがとうございます！それでは私の事は琉流とお呼びください。」

昴「真名までいいのか？」

琉「はい！是非！」

昴「では琉流。よろしくな。」

琉「はい！兄様！」

元気でいい子だな。
それにしても。

昴「桃香と華琳は何を話してるんだろ。」

少し気になるな。

華琳 side

桃「それで話と言うのは・・・。」

華「ふふっ、あなたにいくつか訪ねてみたいことがあるのよ。興味もあるしね。」

桃「私に・・・ですか？」

華「ええ、昴が選んだあなたに・・・。」

私の誘いを断ってまで選んだあなたに。

華「あなたは元は義勇軍らしいけど、何のために義勇軍を旗揚げしたのかしら？」

桃「それは、力の無い民が傷ついたり、苦しんでだりしているのが見ていられなかったからです。」

華「なるほど。それで、あなたが目指すものは何かしら？」

桃「私は、この世の中を、皆が笑って暮らせる世にしたいと思っています。」

・ふふっ、昂の言っていた通りね。少し意地悪してみようかしら。

華「あら不思議ね。笑って暮らせる世を目指しながら、あなたは武器を持って戦うのね。」

桃「はい。戦わなければ何も成すことはできませんから。」

華「あなたが戦い、死んでいった者、殺していった者の中にも平和を望み、笑って暮らせる世を生きたかった者もいたでしょう。あなたはその者の未来を奪った。あなたは自分で自分の理想を否定しているのではなくて？」

桃「・・・曹操さん言うことはもつともだと思いません。でも今のは世は皆仲良くしようって声を上げてても平和になりません。個人でいくら悪者をと戦っても平和になりません。だから私は今の世の中で義勇軍を結成して戦う決意をしました。私の言ってることは矛盾してることとはわかっています。でも私の理想を叶えるには戦い続けなければなりません。いっぱい人も死んでいくと思います。だけど私は戦います。例えば私が最後の1人になっても。それが私の理想の為に死んでいった人に対する責任だと思っから。私は、私の理想の為に死んでいき、そして殺した人の願いと命を背負って最後まで戦って私の理想を叶えます。」

華「・・・。」

これが劉備か。噂を聞く限りただの理想家かと思っただけね。・・・なるほど、覚悟もあるということね。例えば昂がいなくともこの劉備

が入ればきつとその勢力は強大になるわね。

華「なるほど、あなたのこと、よく理解できたわ。今は味方同士、お互い頑張りましょう。」

桃「はい！」

私は劉備と握手をした。
今は、ね。いずれは・・・。

桃「私、曹操さんのこと尊敬してるんです。」

華「私を？」

桃「私は頭も良くないし、武もからつきだし。何でも出来る曹操さんが羨ましくて。」

・・・そんなこと。

華「そう思うなら書をたくさん読んで勉強するなり誰かに武を習い鍛練するなりして自らを高めなさい。自分に出来ないことを肯定しているだけでは永遠に進歩しないわよ。」

桃「は、はい！頑張ります！」

華「ふん。」

私つたらいずれ我が覇道の障害になるかも・・・いえ、障害になる相手に何故助言なんか。

華「そろそろ向こうも話が終わっているでしょうし、戻りましょうか？」

桃「そうですね。」

私は昴の元へ戻った。

・
・
・
・
・
・
・

華「琉流、話は済んだわね。」

琉「はい、華琳様！」

嬉しそうね琉流。

昴「そっちは何を話してたんだ？」

華「ふふっ、他愛のない世間話よ。」

昴「そうか・・・。」

華「ところで、麗羽、袁紹のことだから無茶を言ってきたでしょう？」

昴「よく分かるな？おっしやる通り先陣をきることになった。」

華「やはりね。今のあなた達で厳しいでしょう。良ければ私達が力を貸しましょうか？」

桃「本当ですか!？」

劉備は喜んでいる。

昴「嬉しい提案だ。・・・それで、その礼にこちらは何を支払うんだ？」

昴が笑みを浮かべて尋ねる。

ふふっ、良く分かってるわね。

華「大したことではないわ。御剣昴、あなたが私のものになるだけでいいわ。」

桃「なっ!?!?そんなの駄目です!」

劉備が慌てて反対する。

華「どうかしら?」

再度昴に問いかける。

昴「ふふっ、せっかくの提案だが、遠慮させてもらおうよ。」

華「あら、残念ね。でも実際どうするつもりなのかしら？総大将があの袁紹じゃまとも作戦は期待出来ないわよ？」

昴「袁紹を総大将にしたときから予想は出来たけどな。」

華「袁紹が総大将で災難ね。」

昴「いや、むしろ好都合だけだな。」

華「どういうことかしら？」

昴「俺達は連合参加にあたって糧食不足だったからどうしても何処かから融通してもらわなければならない。そういう意味では袁紹がうってつけた。華琳は見返りを要求されるだろうし、孫策は袁術の客将だから援助は期待できない。袁術は本人はともかく、あの張勳は抜け目なさそう。華琳と同じ何か見返りを要求してくるだろうしな。その点袁紹は扱いやすそうだから1番適任だ。」

華「なるほど。けれど万が一袁紹が総大将にならなかつたらどうするつもりだったの？」

昴「そうはならないさ。」

ポンと何かを私に手渡した。

昴「俺達はこの辺で失礼するよ。先陣を任せられた以上、いろいろやることは山積みだからな。」

華「分かったわ。なら最後に1つだけ尋ねるわ。」

昴「何だ？」

華「あなたは何故この連合に参加したの？」

あなた程の人間がこの連合の意味と真相が理解できないわけがない。

昴「尋ねるまでもないだろ？これから先の群雄割拠の時代のためにこの連合で名を上げる。それ以外に何かあるか？」

華「……。」

昴「……。」

華「……ふっ、そういうことにしておくわ。呼び止めて悪かったわね。」

昴「気にするな。では、またな。琉流もまたな。」

琉「はい。兄様！」

昴が劉備と共に自陣に戻っていった。

華「ふふっ、昴は何を企んでいるのかしらね。」

まあ、昴とあの劉備の性格を考えたら大体予想はつくけれど。そういえば昴は私に何を渡して……！？、これは！？

華「くくくっ、アハハハハハハ！」

琉「か、華琳様？」

華「さすが昴ね！やはりあなたは面白いわ！全てはあなたの思惑通りとでも言うのかしら？」

昴が手渡した物は先程総大将を決める際に使用した紙の残り。その紙には全て『袁紹』と書かれていた。

華「やはりあなたは最高だわ。いつか必ずあなたを手に入れるわ。」

覚悟しておきなさい。昴。私は改めて御剣昴を手に入れる決意をした。

かくして御剣昴の思惑通り、兵と糧食を手に入れた昴、桃香の軍だが、その代償として危険な先陣に任命されたのだった。

第30話〈連合集結、担うは最前線〉（後書き）

少し今回の内容、無理ありましたかね？ご都合主義の範疇を越えて・
・いや後悔はありません！

感想にセリフの前の名前をなくしてみても？つという意見がありました
したが、反董卓連合集編までそのまま次回拠点から試して反応を待
つてみることにしました。恋姫キャラは数が多いので誰がしゃべっ
てるのか分からなくなる危険性があるんですよ（^| ^ ;）
オリキャラ零の留守番の理由は説明いたしましたが大人の事情を
言えば麗羽とキャラが被るが主な理由です。後々活躍させる予定で
すので。

感想、アドバイスお待ちしていますのでどんどんお願いします。

それではまた！

第31話 シ水関の戦い、勝利への布石 (前書き)

投稿します。あまり原作代わり映えがなくて申し訳ないですが・・・。
後携帯投稿なのでシ水関のシの字が出ないです (<|>)

それではどうぞ！

第31話 シ水関の戦い、勝利への布石

昴side

軍議？ 終え。自陣に戻った俺と桃香。皆に事情を説明していると、

昴「お？」

兵糧と兵士の提供が行われた。

愛「我らの気が変わる前に、既成事実を作っておこうと、そういうことでしょうね、これは。」

桃「多分そうだろうねえ。与しやすそうだったけど、案外抜け目無いなあ、袁紹さん。」

昴「ま、あれでも大領主だからな。」

星「兵6千と兵糧一月と半。よくこれだけ出させましたな。」

昴「まあ、そういう交渉事は得意だからな。」

「いただく物は限界ギリギリまでつり上げていただいたほうがいいかな。」

朱「足りないものは揃いましたけど・・・それでもこの人数で連合の先陣を切るとなると、かなり厳しいですね。」

星「伝え聞くとところによると董卓の軍勢は約20万。我ら連合で約

15万。我らが20万の敵軍を全て受け止めるという訳では無いが、はてさて・・・。」

「離」兵法の基本は敵よりも多くの兵を集めること。そして敵よりも多くの兵で対峙すること。この2点を、連合は守っていませんから。」

鈴「離里は連合軍が負けると思ってるのかー？」

離「負けるとは思いませんが・・・でも、朱里ちゃんの言う通り、苦戦するだろうなあ、って。」

桃「絶対苦戦するだろうね。だからこそ、私達の軍が生き残るために全力を尽くさない」と。」

昴「桃香の言う通りだな。・・・とりあえず朱里、予想される戦場の状況の説明を頼む。」

朱「はい。まず洛陽はご存知の通り、河南省西部に位置し、東に虎牢関、西に函谷関を備えた漢王朝の王都です。ここは黄河の中流に位置し、渡河点ともなっています。また支流である洛河との分岐点にも当たるため、非常に水上交通の良いところです。」

昴「ようするに衢地か・・・。」

朱「そうです。今回、私達が進軍するに際し、道は2つあります。東から虎牢関を抜けて洛陽に向かうか、西から函谷関を抜けるか、です。」

桃「私達の居る場所からだ、東から進軍した方が手っ取り早い」

もしれないね。」

雖「その場合は虎牢関を抜けることになります。」

朱「難攻不落絶対無敵七転八倒虎牢関を抜くとなると、かなり厳しい戦いになりそうです。」

昴「仰々しい名前が付いたものだ。ただ、総大将決めるのに時間掛けすぎたからもはや虎牢関を抜けるしかないだろ。」

朱「そのとおりです。これ以上時間を浪費するのは得策ではありませんから・・・。」

星「時間を許せば、今以上に防備を固めるだろうな。全く、厄介なことだ。」

昴「虎牢関って確か、両脇に崖がある上に一本道で防衛にえらく向いた場所だったよな？ 関もいくつかあったし。」

朱「お詳しいですね。」

昴「洛陽に行った時にちょっとな・・・。」

本当は迷いまくっただけだけだな。

昴「でも実質障害になるのは虎牢関とシ水関ぐらいなものじゃないか？」

桃「そうなの？ 関っていっぱいあるんじゃない？」

雛「大小合わせて二桁ありますが、殆んどが連合軍の進軍を阻むほどでは無いと思います。注意すべきは先程ご主人様が言った虎牢関とシ水関だけです。」

桃「うーん、それでも2つも難敵があるんだね。」

桃香は説明を聞いているうちにどんどん鬱になっていった。

愛「敵軍の配備状況などは分かるのか？」

朱「放った斥候の報告によると、シ水関に籠る董卓軍の兵数は約5万です。将の中で強敵なのは華雄將軍ですね。」

5万か・・・。

昴「華雄將軍つてのはどんな人物なんだ？」

朱「董卓軍の中でも猛将で知られ、兵士達の人気も高い方です。かなり強敵だと言って良いと思います。」

なるほど、ね。

星「して、我々はどのように動きましょつか？」

雛「攻城戦は基本的に作戦や策らしきものは必要ありません。」

桃「そうなの？」

雛「はい。攻城戦はどう頑張ってもみても、圧倒的に籠城側が有利ですから。なので野戦とは違い、策というものは調略方面でしか活

躍できないんです。」

朱「それに今回は董卓さん1人を相手に、複数の諸侯が連合を組んでの戦いですから、挟撃される心配も少ないでしょう。」

愛「つまり・・・作戦無しで戦えということか。」

雛「戦況を見て、その都度即応する・・・ということしか言えませんです・・・ごめんなさい。」

星「雛里が謝ることではないさ。・・・主よ、いかが致しますか？」

昴「敵はシ水関という固い甲羅に首を引っ込め、籠る亀だ。現状、今の俺達で固い甲羅を叩き割るのは不可能だ。」

桃「そんな〜。」

鈴「じゃあどうするのだー？」

昴「甲羅を叩き割るのが不可能なら、相手に首を出してもらっしかないだろ。」

愛「?・・・どういことでしょうか？」

昴「敵将華雄を挑発して関から引っ張り出す。」

愛「なるほど、華雄程の猛将ならば自らの武を穢されることを嫌わず。彼奴を罵って関より引き出す。有効かもしれませんね。」

星「しかし、一軍の将となっている者が、見え透いた挑発に乗るだろうか？」

愛「乗るさ。．．なあ鈴々。」

鈴「にや？なんで2人して鈴々を見るのだ？」

星「ふっ、なるほど。案外、凶に当たるかもしれないな。」

うーん、鈴々には悪いけど俺も言いたいこと少し分かるな．．。

朱「ご主人様の策は有効かもしれませんが．．。」

桃「？、どうしたの？」

雛「作戦が成功して華雄將軍が関を出たとしても、それを受け止めるのは私達の役目ですから．．。」

朱「全軍火の玉になって攻め立ててくる華雄將軍を、どういなすか、それが問題かと．．。」

昴「それは我らが総大将にどうにかしてもらおう。」

愛「どういうことですか？」

昴「俺達の後ろには袁紹の大部隊が控えてるんだ。俺達が押し込まれたフリをしてそのまま袁紹になすりつけてしまえばいい。」

星「ふふっ、大いにありだな。」

桃「ありだねえ。」

鈴「ありなのだ！」

朱「私も同じことを考えてました。」

雛「私もです。」

皆同意だな。

昴「なら基本方針はこれで行こう。」

雛「了解です。それでは華雄さんが突出した際、私達はその攻撃を一度だけ正面で受け止め、押し返します。その後、再度押し出してくる華雄さんの攻撃を受け止めるフリをして・・・。」

昴「後退、だな。」

雛「はい。でもただの後退では華雄さんも乗ってこないと思います。華雄さんを釣るためにも、本気で戦線を崩さないと。」

愛「ふーむ。戦線が崩れば、そのまま一気に瓦解する可能性もある。危険な賭になるな。」

雛「ううん。そうでもありません。だって連合軍ですから。」

星「つまり他の諸侯が助け船を出す？」

雛「はい。皆さん、こんなところに負けてられない人達ばかりですし。」

昴「自分達の目的達成するために、助け船を出さざるを得ないだろ

うな。」

桃「えーっと、つまり、袁紹さんだけを巻き込むじゃなくて、みんなを巻き込んだんじゃえってこと？」

雛「有り体に言えばそんな感じですね。」

昴「決まりだな。皆何か異存は無いか？」

愛「ええ。今の状況では、この作戦しか、我らに勝利の道は無いように思えます。」

桃「そうだね。今はとにかく生き残ることを考えないと・・・。」

星「弱小の我らが生き残るためには他者を利用するのは必然です。」

鈴「じゃあ決定なのだ！」

昴「よし。それじゃあ早速準備をしよう。愛紗と星は袁紹が提供してくれた兵士の確認と采配を頼む。」

愛「御意。」

星「うむ。」

昴「朱里と雛里は袁紹からもらった兵糧を確認しつつ新たに斥候を放って確実にするために今の作戦を煮詰めてくれ。」

雛「御意、です。」

朱「はい！」

鈴「お兄ちゃん、鈴々はどうするのー？」

昴「鈴々は桃香の傍にいてくれ。桃香は待機ね。」

桃「うう。待機してれば良いんだね・・・。」

昴「悪いな。俺は愛紗と星を手伝って、その後は朱里と雛里と一緒に作戦の穴埋めをするよ。」

鈴「分かったのだ！」

昴「任せた。・・・それじゃあ皆、それぞれ準備に取りかかってくれ。・・・皆、この戦、勝つぞ！」

「「「「了解りかい（なのだ）！」「」「」

俺達はこれから始まる激戦に勝利すべく、各自が持ち場へと向かった。

準備が終わり、俺達を先頭に連合軍は行軍を始めた。俺達の先陣は愛紗と星に任せることにした。まあ鈴々は『鈴々も先陣が良い！』って駄々を捏ねたけど、そこはうまく言いくるめた。・・・ごめんな、鈴々。それぞれが心を決め、持ち場につくなか、連合軍の本陣より諸候の陣に伝令が走る。

昴「始まるか。」

この緊張感はこの外史にきて1番だな。

桃「この瞬間って、いつまでたっても慣れないな。」

昴「そんなものだ。・・・手、握ってようか？」

桃「心配してくれてありがとう。でも大丈夫。大丈夫、だから・・・」

桃香は胸に拳を当て、目を瞑る。

強くなつたな、桃香。

鈴「鈴々はこういうドキドキは好きなのだ。」

昴「頼もしいな。頼りにしてるぜ。」

鈴々の頭をナデナデする。

鈴「にやはは〜／／」

鈴々は嬉しそうだ。

ポーン！ポーン！

連合軍の本陣から激しい銅鑼の音が響く。

桃「ご主人様。合図だよ。」

昴「ああ。・・・全軍前進！作戦通り、事を進める。皆、気合い入れるよね」

「応っ！」

桃「皆！無理せず頑張ろうね！・・・じゃあ出発進行！」

桃香の号令により、兵がゆっくり前進を始めた。

董卓軍 side

「華雄將軍。連合の先陣が進軍を開始しました。」

雄「ああ。しかし小勢のようだな。・・・将は誰だ？」

「斥候の報告では、平原の相、劉備と名乗るものだそうです。」

雄「劉備・・・聞いたこと無い名だ。」

「最近売り出し中の人間のようにですが、百戦錬磨たる我らの敵では無いかと。」

雄「そうか。ならば鎧袖一触、敵の先陣を殲滅し、連合の総大将に目にももの見せてやるうではないか。」

「了解です！」

雄「全軍、出撃準備！先陣の劉備なるものを粉碎し、敵軍中央にそびえる袁家の牙門旗を墮とすぞ！」

「はっ！」

遼「ちょ・・・待ちいや華雄！賈馱っちの命令はシ水関の死守やで！？出撃してどないすんねん！」

雄「ふん。亀のように甲羅に縮こまるのは性に合わん。」

遼「だからって、総大将の命令を無視して突っ走ってええんか？そりゃ料簡が違いすぎるやろ。」

雄「違わん。現場の判断だ。それに敵を殲滅すれば軍規など何ほどのものでもない。・・・何よりな、張遼。」

遼「なんや？」

雄「戦に逸る兵の気持ちを抑えることなどできん。その戦意こそ、我が軍の力となっているのだからな。」

遼「例えそうやとしても出撃させるわけにはいかん。これは月のためでもあるからな。」

雄「・・・くっ！」

遼「とにかく今はシ水関の死守や、勝手に出撃なんて・・・『申し上げます！』なんや！」

「先陣の軍から将らしき者が前に出てきます。」

関から下を覗くと、先陣の劉備軍から1人がシ水関が歩み寄っている。

遼「・・・ほんまや、何をするきや？」

愛紗 side

シ水関近くまで進軍した。後は華雄をここから引きずり出すのみ。

愛「スー、ハー。」

私は大きく深呼吸し、

愛「敵将華雄よ！猛将と呼ばれながらそのような関に籠るなど、猛将が聞いて呆れる。戦うのが怖ければ寝台にでも縮こまっていればよからう。」

次々と華雄への罵倒の言葉をぶつける。

愛「ここまで言われてなお関にて縮こまるか！はっ！猛将華雄とはただの臆病者だったと天下の笑い者にもなるがよい！」

遠目からでよく様子が見えないが、確実に華雄は憤っている。後一息だ。止めはご主人様により授かった最大の挑発を贈ろう。私は持っていた弓を構え、そして、

ヒュッ！

華雄目掛けて放った。

董卓軍 side

雄「ぐぐぐぐつ！先ほどから黙っていればいい気になりおつて！もう許さん！」

遼「華雄落ち着き！あんなを見え透いた挑発やる！？これでのこのこ出ていったらただの阿呆やで！？」

張遼は華雄を羽交い締めにして止める。

雄「黙れ！奴等を八つ裂きに・・・！」

「あ、あれを！」

雄「？」

遼「なんや？」

先ほどから挑発を繰り返していた将がおもむろに弓矢を構え、そしてこちらへ放った。

ヒュッ！

矢は華雄の僅か横を抜けていった。

遼「なんや、外したんか？」

改めて敵将を見ると。

愛「外れたか。おかしいな、私の弓は百発百中・・・ああ、さしもの矢もお前のような臆病者の血など吸いたくないということか。矢にすら笑いにされた華雄よせいぜいそこで怯えているが良い。」

そついい放ち、自陣に戻った。

雄「もう我慢ならん！全軍出撃するぞ！奴等を皆殺しにする！」

遼「華雄！ええ加減に・・・。」

雄「放せ！」

華雄が張遼を振り払う。

雄「貴様は後生大事に命令を守り、功名の場を逃せば良い。」

遼「・・・分かった。ならウチは虎狼関に退く。それでもええな？」

雄「勝手にしろ。」

華雄は関の門へと向かった。

遼「・・・猪、ここに極まれるやな。戦は戦意だけでやるもんやない。」

現実を見んあんたには、多分明日はこーへんやる。さらば華雄。先にあの世で待つとき。ウチもいつかそっちにいくから。」

張遼及び張遼隊は虎狼関へと退いていった。

愛紗 s i d e

矢を放ち、ご主人様に授かった挑発を浴びせ自陣に戻った。

星「ご苦労だ愛紗よ。早速シ水関で動きがあつたようだぞ？」

後ろを振り返るとシ水関の開門され、華の牙門旗が上がった。

愛「ここまでは作戦通りだ。・・・本番はこれからだ。子龍殿。私の背中、お主に預ける。」

星「我が背中も同様だ、雲長殿・・・では参ろうか。」

愛「ああ。」

私は青竜刀を構え、

愛「聞け！勇敢なる兵士達よ！」

星「いよいよ戦いの鐘が鳴る！義は我らにあり！」

愛「恐れるな！勇気を示せ！皆の心にある思い、皆が持つ力、その全てを振り絞り、勝利の栄光を勝ち取るために！」

星「我らに勝利を！」

「「勝利を！」」

愛「我らに栄光を！」

「「栄光を！」」

愛「全軍、抜刀せよ！」

星「位置につけ！」

愛・星「皆の命、私が預かる！」

敵将華雄が陣を構成しこちらへ迫ってくる。

星「来た！愛紗！」

愛「ああつ！全軍魚鱗の陣に移行！敵の突撃を真っ正面からぶち当

たり、その勢いをもって敵を後退させる！その後はすぐに後退する！時機を見失うな！合図を聞き漏らすな！一瞬の油断が命取りになることを忘れるな！」

星「我らの旗に付き従えば勝利は間違いないし！勇を奮え！名を惜しめ！勝利の栄光を掴むために！」

愛「全軍、突撃いいいいいいーっ！」

「うおおおーっ！」

我らの戦が始まった。

続く

第31話、シ水関の戦い、勝利への布石（後書き）

ふう。シ水関の戦いを一気に終わらせたかったけど出来なかったな。
駄文、遅筆ですみません。

感想、アドバイスお待ちしております。

それではまた！

第32話 シ水関の戦い終結、そして・・・（前書き）

投稿します。結構長くなりました。若干違和感があるかもしれませんが
んです。

それではどうぞ！

第32話、シ水関の戦い終結、そして・・・

昴side

昴「始まったな。」

兵士達の咆哮、雄叫び、剣と剣がぶつかり合う音が戦場に響く。

桃「愛紗ちゃん、星ちゃん。皆。」

桃香が胸で拳を握り、先陣で戦う2人と皆の無事を祈る。

昴「心配するな。皆必ず戻るさ。」

桃「・・・うん。そうだね。」

とは言うものの不安は拭えないみたいだ。

昴「いざとなったら俺が出る。だから心配は無用だ。」

桃香にウインクしながら言葉をかけた。

桃「ふふっ、ありがとう。私は皆を信じる。皆の無事を。」

桃香の不安が若干和らいだ。

頼むぞ愛紗、星。

愛紗 side

愛「うおおお！」

ザクツ！グシュ！

星「はい！はい！はいー！」

ザシュ！ザクツ！

敵と交戦状態となり、幾ばくか経った。私と星は次々と敵を葬っていく。

愛「皆、離れるな！三人一組になって敵の兵に当たるんだ！」

星「友を守れ！守れば友がお前を守ってくれる！そう信じて突き進め！」

兵達に激を飛ばし自身も武器を振るい、尚も敵を葬っていく。

星「ん？敵が後退する？・・・いや、違うな。距離をとって突貫する
のか。」

愛「ならば場合は良し！敵の突貫の直前で退くぞ、星！」

星「承知した。・・・皆の者、秩序を守りつつ、作戦通りに後退する。
我が旗に続け！」

「応っ！」

昴side

桃「ご主人様！前線の部隊が動き出したよ！」

・・・よし、潰走してるわけじゃなさそうだ。

昴「作戦通りだな。」

桃「大丈夫だよな？」

昴「大丈夫だ。兵達に焦りの顔はない。」

桃「良かった。」

ホツとする桃香。すると、

朱「ご主人様、桃香様ー！」

雛「作戦は成功ですー！」

朱里と雛里がやってきた。

昴「ああ。ここから確認できたよ。」

朱「華雄將軍は鋒矢の陣を敷き、私達を突破して袁紹さんの居る本陣に迫ろうとしているようです！」

雛「このまま突っ込んできますよお。早く兵を纏めて道を空けないとおー！」

昴「落ち着け落ち着け。まずは愛紗と星と合流しないと、だろ？」

雛「あ、あわわ、そうでした。」

昴「合流がすんだら手筈通りに動く。鈴々、2人の撤退の援護、頼むぞ？」

鈴「任せろなのだ！」

昴「桃香は朱里と雛里と一緒に、愛紗達と合流したあとの兵の指揮、

頼むな。」

桃「まっかせーなさーい」

朱「御意です。でも、あの、ご主人様は？」

昴「俺も鈴々と一緒に愛紗達の撤退の援護をする。」

朱「分かりました。」

雖「気をつけてくださいね？」

昴「ああ。」

桃「任せるね。じゃあご主人様。またあとで。」

昴「ああ、あとでな。」

兵と共に後方に下がった桃香達を見送った。

鈴「にやはは。お兄ちゃんと一緒になのだ。」

昴「頑張ろうな。」

鈴「応！なのだ！」

さてと、この戦も佳境に入る。ここが正念場、だな。

・
・
・
・
・
・

暫し待機していると、

鈴「来た！お兄ちゃん、砂塵が見える！愛紗達が帰ってきたのだ！」

昴「確認できてるよ。合流の準備を始めよう。・桃香に伝令を。」

「はっ！」

鈴「お兄ちゃん！愛紗達の後ろに軍勢が張り付いてるのだ！」

昴「・流石は猛将と言ったところか。」

鈴「どうするの？鈴々が行こうか？」

昴「そうだな。頼んだ。」

鈴「合点なのだ！皆！鈴々についてくるのだ！これから愛紗達を助けにいくよー！」

「応っ！」

鈴「弓兵の皆はひたすら矢を放つのだ！歩兵の皆は鈴々と一緒に突

撃なのだ！」

「応っ！」

鈴「退却してくる愛紗達をやりすぎしたあと、全力で華雄の軍とぶつかるのだ！そのあと、すぐに後ろに向かって前進なのだ！分かったかー？」

「応っ！」

鈴「なら行くよー！突撃、粉碎、勝利なのだ！」

「応ー！」

鈴々の掛け声に応えて兵達が答える。

………見えた！愛紗達が肉眼で良く見える位置にまで後退してきている。

昂「鈴々！」

鈴「分かっているのだ！弓兵のみんなー、射撃準備なのだ！」

「はっ！」

鈴「愛紗達の後方にたくさん矢を放つのだ！それで愛紗達が来たら合流して後退するのだ。分かったかー？」

「応っ！」

鈴「なら鈴々の命令で矢を放つのだ。いくよー！いち、にー、さーん、ダーツ！」

ヒュツヒュツヒュツヒュン！

矢が一斉に放たれる。

早！・・・いやドンピシャか？鈴々の奴、何てタイミングで矢を放ちやがる！愛紗なんて面食らってるぞ。・・・天性の戦上手って奴か。愛紗達が援護射撃の隙をつき、一気に俺達のところへ合流した。

鈴「愛紗ー！」

愛「鈴々！良い援護だったぞ。助かった。」

鈴「当然なのだ！」

愛「ふっ、そうだな。」

昴「2人供良くやった。ここまでは作戦通りだ。」

星「しかし主。作戦はここからが正念場です。」

昴「もちろんだ。桃香が朱里と雛里と一緒に後ろに控えている。すぐに合流するぞ。」

星「了解です。主。」

昴「最後の山場だ。・・・俺と鈴々で殿をつとめる。星と愛紗は先行して桃香と合流してくれ。」

愛「!?!、ご主人様自らが殿ですか!?!なりません!そのような危険な役は私や鈴々で……。」

昴「戦場にいる以上、どこにいたって危険なことには変わらない。俺は皆と合流して日が浅いから指揮を取るのには星や愛紗達のほうがいいだろ?」

星「しかし、だからといって主自らが危険に晒さなくとも……。」

昴「言いたいことは分かる。けど俺は後ろにいるのは性に合わない。何より……皆の主である俺が命を賭けなくて、どうして皆に戦えと言えるよ?心配はいらないから俺の指示通り頼む。」

星「……了解した。主よ。御武運を……愛紗、行くぞ。」

愛「……分かった。ご主人様。桃香様達とお待ちしています。」

昴「了解。」

愛紗と星達が後方へ下がって行く。

昴「さてと……。」

前方に振り返り、

昴「鈴々、派手に行くぜ!背中任せた!」

鈴「合点、なのだ!」

作戦はこちらの思惑通りに進み、袁紹軍を巻き込むことに成功した。
戦場は大混乱に陥った。

昴「順調、だな。」

桃「順調だけど、このまま連合軍壊滅なんてことにならないよね？」

朱「大丈夫です。ほら。」

愛「ん？あれは。。。」

「 雛「曹操さんの軍ですね。華雄軍に横槍を入れてくれるみたいです。」

華琳、実ではなく、名を選んだか。

星「となると・・・更に戦場は混乱するな。」

鈴「ならそのときを狙って一騎打ちをするのだ！」

昴「それが良さそうだな。このまま戦が終わったら俺達はただ敗走して連合軍を混乱させた印象しか残らない。華雄を討ち取れば面目は立つし、今までの事も策で言い訳できるだろ。」

星「なるほど。良い手ですな。」

愛「華雄ほどの良将ならば、正々堂々と勝負をしたかったが、致しかたありませんね。」

昴「決まりだな。・・それじゃ、鈴々は部隊を率いて華雄隊の右翼を頼む。左翼は星だ。」

鈴「合点なのだ！」

星「うむ、承知した。」

昴「2人が左右から当たり、僅かな間だろうが華雄隊の本陣までの道ができる。そこを俺がこじ開け、露払いをする。そこを・・、」

愛「私が突撃し、華雄を討ち取るわけですね。」

昴「そういうことだ。愛紗は華雄に事実上宣戦布告してるわけだからここらでケリをつけちまおう。」

愛「了解致しました。必ずや華雄を討ち取ってご覧に入れます！」

桃「愛紗ちゃん、気をつけて。絶対帰って来てね。」

愛「無論です。」「心配なさらず吉報をお待ちください。」

話しは決まったな。

昂「よし！皆行くぞ！最後の山場だ！」

「」「」「御意！」「」「」

華雄隊が袁紹軍に突撃したことにより、混乱に陥った戦場。更に曹操軍が袁紹軍の救援に向かったことにより、戦場は激化していった。

鈴「皆、突撃なのだ！」

星「皆我に続け！」

鈴々隊が華雄隊の右翼にぶつかり、そこに間髪入れず、星の部隊が左翼からぶつかった。

昴「よし、今だ！皆正面よりぶつかるとぞ！俺と関羽に続け！」

「応ー！」

俺が先頭を切り、華雄隊にぶつかる。

昴「はあああ！」

バキッ！ゴツ！ドカッ！

「ぐふっ！」

「がはっ！」

俺は進行先の敵兵を無手で排除する。村雨や朝陽夕暮は使わない。理由はこの戦、こちらに大義がないため、敵とはいえ、殺めるのは気が引けたからだ。極力致命傷は避けて応戦している。これはあくまで自身に化しているだけで他の者には命じてない。まあ、偽善と言われればそれまでだが……。

昴「仕上げだ！」

村雨を引き抜き、跳躍する。

昴「飛龍衝撃！」

ドゴーン！

俺はそのまま氣を飛ばさず、そのまま地面に村雨を叩きつけ、爆風で敵兵を吹き飛ばす。

昴「行け、愛紗！」

愛「御意！」

愛紗が俺の脇を抜け、華雄の元へと向かう。

昴「さてと。」

俺は村雨を鞘に戻し、

昴「ここからは誰も通さん。抜けたければ俺を倒してみせろ。」

俺は華雄隊の兵の前に立ちただかる。

愛紗、任せるぞ。

ご主人様が開けていただいた道を一気に駆け抜ける。華雄は・・・見つけた！

愛「見つけたぞ、華雄！」

雄「！？、貴様は、関羽か！」

愛「素っ首、貰い受ける！」

雄「ほざけ！私を愚弄した罪、あがなわせてやる！行くぞ！」

愛「うおおおお！」

ガキン！ギギギギツ！

私の青竜刀と華雄の戦斧が激突し鏝迫り合いになる。

愛「ふっ！」

一度距離を取り、再度華雄へ攻撃を繰り返す。

ガキン！ガキン！ガキン！

攻撃を当て、時に防ぎ、数合に渡り、攻防を繰り返す。

愛「どうした！その程度私に挑もうなど片腹痛い。」

雄「ほざけー！」

華雄が怒りに任せて戦斧を振るう。

愛「ふっ。」

私はそれを難なく避ける。

愛「これしきの挑発に乗るなど、愚かな。」

私は青竜刀を構え直し。

愛「貴様の武は所詮独りよがりの武。その程度の武で私にかなうと思っな！行くぞ！」

ガキン！

雄「ぐっ！」

私は華雄に渾身の一撃を浴びせる。

愛「まだまだー！」

ガキン！ガキン！ガキン！

次々と華雄に攻撃を浴びせる。

雄「く・・・そ・・・」

華雄が防戦一方になる。

愛「これで最後だ！我が渾身の一撃、受けてみる！うおおおお！」

私は最大の一撃を華雄へと繰り出した！

バキン！グシュ！

雄「がはっ！・・・ば・馬鹿な・・・。」

華雄の戦斧は私の一撃に耐えきれず、そのまま私の青竜刀が華雄の胸を切り裂いた。

雄「く・・・そ・・・。」

華雄はそのまま地へと倒れ伏した。

愛「・・・華雄よ。あなたは良き将であり、良き士であった・・・。」

私は倒れた華雄を一瞥し、一度深呼吸をして、

愛「敵将華雄！劉備軍が一の家臣、関雲長が討ち取ったー！」

「「「「「おおおおお！！！！」「」「」

戦場に怒号と歓声が鳴り響いた。

昴 side

ある程度の敵兵を撃退し愛紗の様子を見に行ってみると、

愛「敵将華雄！劉備軍が一の家臣、関雲長が討ち取ったー！」

「「「「「おおおおお！！！！」「」「」

愛紗が華雄を討ち取り、勝ち名乗りを上げていた。その瞬間、戦場に怒号と歓声が鳴り響いた。

昴「よくやった、愛紗。さすが、幽州の青竜刀の名は伊達ではないな。」

愛「ご主人様！ご主人様が道を切り開いていただいたおかげです。」

昴「頑張ったのは愛紗だよ。俺は愛紗のような仲間を得て幸せだ。」

愛「ご主人様・・・勿体なきお言葉です／＼」

愛紗は頬を赤らめる。

昴「さてと・・・。」

俺は動かない華雄を見つめ、

昴「愛紗、後のことは任せていいか？」

愛「はい。構いませんが、ご主人様は何処へ？」

昴「俺は、華雄を何処かへ弔ってくる。如何に敵将とはいえ、これほどの武人を晒し首にするのは気が引けるからな。」

愛「・・・そうですね。それでしたら私が弔って参ります。」

昴「そうか。なら俺は前線でもう一暴れしてくるよ。」

愛「！？、なりません！ご主人様は我らの玉なのですよ？そう何度も危険には・・・、」

昴「なら愛紗が後始末を任せるよ。俺は華雄を弔うから。」

愛「・・・分かりました、くれぐれも用心なさってください。」

昴「了解。」

愛紗は後方の兵の所へ向かった。

昴「ふう。」

俺は華雄に歩み寄り、

昴「・・・急ぐか。」

俺は華雄を抱き上げ、縮地で崖を駆け上がった。

しばらく縮地で移動し、

昴「この辺でいいか。」

木々で覆われた一角で華雄を仰向けに寝かせた。

昴「・・・まずいな、完全に心臓が止まってるな。」

俺は拳を握り、氣を込めて華雄の胸を軽く叩く。

トン。

昴「もう一度。」

トン・・・トン。

雄「かはっ!」

よし。心臓が動いた。俺はすかさず華雄の傷を内功で塞ぐ。

雄「う・・・ぐ・・・。」

傷はみるみる塞がっていく。

雄「うつ・・・ここは・・・。」

昴「目が覚めたか？」

意識を取戻したがまだ完全に覚醒してはいないようだ。

雄「何だ？・・・川を渡ろうと一歩踏み出したら何かに引っ張られた・・・。」

・・・ギリギリだったみたいだな。

雄「うつ・・・お前は？」

ようやく俺の存在に気付いたようだな。

昴「俺は劉備軍の御剣昴だ。」

雄「御剣・・・昴・・・劉備軍・・・！？、貴様連合の将か！」

慌てて体を起こそうとする。

昴「まだ完全に傷は塞がってないんだ。寝てろ。」

華雄を再び寝かす。

雄「何のつもりだ！」

昴「君を死なせるには惜しい。そう思ったまでだ。」

雄「ふざけるな！敵の情けなど受けん！殺せ！」

昴「……。」

雄「連合の捕虜になどなる気は毛頭ない！そのような生き恥をさらすなどごめんだ！」

昴「……。」

雄「何を黙っている！貴様は私に武人として、将としての矜持を穢がすつもりか！」

昴「黙れ。」

雄「っ!？」

昴「さつきから黙って聞いてれば、将として？武人の矜持？はっ！お前ごときが偉そうに語るな。」

雄「何だと！」

昴「華雄。お前は此度の戦、何で戦った？」

雄「貴様らが攻めてきたからだろ！」

昴「質問が悪かったな。お前は何のために戦った？」

雄「何のため？そんなもの・・・」

昴「董卓のためではなかったのか？」

雄「！？、そうに決まって・・・」

昴「お前は軍師からシ水関に籠り、可能な限り時間を稼げと指示を受けなかったか？」

多少頭が回れば当然の策だ。勝たなきゃいけない連合と違い、董卓軍は負けなければいい。防衛側の利を生かすのは必然にして当然。

昴「だがお前が行ったことは、自身の矜持を満たすため、そして安い挑発にのって関を飛び出し、挙げ句、敗北した。」

雄「あ・・・」

昴「今頃シ水関はいずれかの諸侯に落とされているだろう。もしお前が指示通りに行っていたら、まだシ水関は健在だっただろう。仮に抜かれても連合側は糧食、兵、疲労面でかなりの痛手を被っただろう。まず間違はなく虎牢関は抜けなかった。だが、お前の暴走で早々にシ水関は抜かれ、大した被害もなく連合軍は虎牢関に対峙できる。士気が最高潮に高い連合軍とは対象に董卓軍は早々にシ水関を抜かれたこととお前とお前の部隊がやられたことにより士気は最低だ。」

雄「ああ・・・ああ・・・」

昴「もう董卓軍に勝ち目はない。いくら時間を稼ごうと援軍は来ないのだからな。」

雄「……。」

昴「お前にとって董卓は何だ？己の武人としての欲求を満たすための道具か？」

雄「違う……董卓様は……。」

昴「お前は自分の武人としての矜持と董卓の命を秤にかけ、お前は自分の矜持を取った。お前は董卓を命を自分の矜持の為に失わせたんだ。」

雄「……私・は……。」

昴「己の矜持のために主をみすみす死なす真似をしたお前に将を語る資格はない。」

雄「……あ……ああ……ああ……！」

華雄は頭を抱え、茫然自失となる。

雄「くっ！」

華雄はおもむろに腰の小剣を引き抜き、喉元を突き刺そうとした。

昴「っ！？」

パシッ！

俺は小剣の刃を掴み、止める。

昴「何をするつもりだ？」

雄「・・・死なせてくれ。もはや私に生きる資格など・・・董卓様に
会わず顔などない！・・・一思いに死なせてくれ・・・」

パシン！

雄「う！？」

俺は華雄の頬を張った。

昴「お前の主、董卓は失敗を死で償わせて喜ぶ人間なのか？」

雄「それは・・・」

昴「お前が死んで何とも思わないような人間なのか？」

雄「・・・違う。董卓様は・・・」

昴「そうだろ？だからお前は臣下として仕えていたんだろ？」

雄「・・・だが・・・私は・・・」

昴「お前は選択を誤った。けどな、だからといって死んでどうする
？死ぬなんていうのはただの責任逃れすぎないんだよ。」

雄「・・・だったら・・・だったら・・・私はどうすれば良いのだ！？
董卓様のために・・・一体どうしろと言うのだ！？」

昴「生きる、華雄！」

雄「っ！？」

昴「恥でも何でもいい、生きる！生きて生きて、その汚名を返上し、それを帳消しにする程の功を立てるその日まで生き続ける！それがお前に出来ることだ。」

雄「私に？」

昴「ああ。少なくとも自害なんて責任逃れなんてするより、よっばど忠を尽くした生き方だ。」

雄「……。」

昴「なあ。董卓のためにこの場で命を捨てる忠義があるなら、もう一度胸を張って董卓に会える日まで生きてみるよ。」

華雄は俺の言葉を受け、その瞳に再び闘志が蘇る。

雄「……ふっ、そうだな。私は再び不忠を働いてしまうところであった。この汚名を返上するまで、生き続けなければ……くっ！」

華雄は立ち上がり、虎牢関へと足を運ぼうとする。

昴「無茶だ。傷自体は塞がってるが、血液はかなり不足している。体にろくに力なんて入らない。今のお前じゃ、将はおるか、兵とすらまともに戦えない。」

雄「それでも・・・行かねば・・・この体、動くなら、虎牢関に・・・」

華雄はゆっくり体をよろけさせながら虎牢関へと向かおうとする。

昴「・・・華雄。董卓のことは俺に任せてくれないか？」

雄「・・・どういうことだ？」

昴「俺は董卓が暴君でないことを知っている。俺は・・・いや、俺達劉備軍は董卓を保護するためにこの連合に参加したんだ。」

雄「何！？では何故我らではなく連合に力を貸す！」

昴「それしか董卓を救う方法がないからだ。考えてみる。檄文のせいでモはや董卓には洛陽にしか味方がいない。仮に連合を退けても董卓は戦い続けなければならない。・・・その苦行、董卓に耐えられるか？」

雄「・・・無理だ。董卓様はお優しすぎる。」

昴「董卓を助けるには連合に与し、董卓を諸侯に気付かれないように保護するしかないんだ。」

雄「・・・。」

昴「華雄。今は信じてくれ。必ず俺達が董卓を救う。この天の御遣いの名にかけて。」

雄「・・・分かった。どちらにしろ今の私にはそれしかできない

からな。」

昴「ありがとう、華雄。」

雄「だがもし、董卓様を死なせたらその時は・・・。」

昴「いつでも俺の首を取りに来い。」

雄「約束だ。」

昴「よし、それじゃ・・・。」

俺は木の影から馬を一頭連れてきた。

昴「これに乗って一旦ここを離れる。」

雄「良いのか？こんな馬を貰って。」

昴「構わないよ。」

どうせ袁紹軍からかつぱらった馬だ。

俺は華雄を馬に乗せる。

昴「このまま真っ直ぐ進めばその内に邑が見える。その邑には医者
がいるからしばらく療養しろ。」

雄「分かった。・・・それでは董卓様を頼んだぞ。」

昴「任せる。」

雄「ではな・・・はっ！」

華雄は森の奥へと消えていった。
ふう、これで・・・

パチパチパチパチパチパチ！

昴「っ!？」

俺は拍手の鳴る方向を警戒する。

?「いやいや、いいものを見せてもらったよ。喜劇?いや茶番劇かな
?」

全身白の意匠で身を固めた俺と同じくらいの年齢と背格好をした男
が立っていた。

何だこいつ。何故こんなところに・・・いやそれ以前に俺がこの距
離まで気配を感知できなかった?

?「しつかり警戒しないと、気が付いたらあの世行きだよ?守り手
君。」

昴「っ!？」

こいつ!・・・この違和感、まさか、こいつ・・・。

貂「やってほしいことが2つあるの。1つはこれからその外史で起こる乱世を鎮めること。もう1つはあなたに倒してもらいたい相手がいるのよ。」

昴「倒してもらいたい相手？」

貂「ええ。．．外史の破壊者ってご存知かしら？」

外史の破壊者．．．。

昴「かつてあらゆる外史で虐殺を繰り返し、混沌に陥れたっていうあの破壊者か？」

聞いたことがある。

昴「だが、そいつは既に封じられたはずじゃなかったのか？」

貂「そうよ。多くの守り手と管理者の命、そして1つの外史を犠牲にして、ねん。だけどその封印は解かれてしまったのよ。」

解かれた？

昴「解けたでも破られたでもなく、解かれたのか？」

貂「そのとおりよ。」

昴「つまり封印解いた奴がいるっていうことが。誰だそんなことをしたのは……。」

貂「あなたのよく知っている人よ。」

昴「俺の？」

貂「あなたと最も関わりがあり、あなたに最も恨みをもつ人物よ。」
俺に関わりがあつて恨みをもつ奴……まさか。

昴「左慈と于吉か……。」

貂「ええ。当たり前よん。」

左慈と于吉。管理者側の人間で、度々俺のいる外史に介入し、俺の邪魔や俺の命を狙ってきたあの2人組か。

昴「また面倒なことを……。つまり、次の外史では外史の破壊者とあの2人が介入してくるってことか？」

貂「いいえ、あなたが相手にするのは外史の破壊者だけ、左慈ちゃんと于吉ちゃんは来ないわ。」

昴「どういうことだ？さすがに管理者が動いたのか？」

貂「違うわ。左慈ちゃんと于吉ちゃんは封印を解いた時に外史の破壊者に殺されたわ。」

昴「まぬけな話だな。あいつらだってそいつが危険だってのは知っていたんだろ？」

貂「利用できる・・・とでも思ったのでしょね。」

昴「話は分かった。それじゃあそいつの顔を教えてくれ。」

貂「あいにく写真は一枚もなくてねん。でもそんなの知らなくても会えば、一目で分かるわ。」

昴「そうか、なら名前だけでも教えてくれ。外史の破壊者ってのは二つ名だろ？」

貂「そうよ。外史の破壊者の名前は」

昴「そうか、お前が外史の破壊者」

昴「 刃だな。」

刃と呼ばれた男はただ不気味な笑みを浮かべた。

続く

第32話、シ水関の戦い終結、そして・・・（後書き）

今回はこの二次小説の核心に少し触れました。うまく書けて入ればと願います。華雄は死なせないことにしました。また登場の機会があります。ですので、華雄の真名、こんなのがいいというのがありましたら感想にお書きください。

感想、アドバイス、どしどしお願いします。

それではまた！

第33話 破壊者の実力、理解する差（前書き）

投稿します。今回は・・・出来はイマイチです。

それではどうぞ！

第33話 破壊者の実力、理解する差

昴「……。」

外史の破壊者、刃と対峙する。

昴「……。」

別段強い殺気を放っているわけではない。だが……動けない。俺の中の全ての感覚、器官が警報を鳴らしている。刃、こいつは怖いとか恐ろしいとかではなく、不気味だ。率直に言えばかなり隙だらけだ。だが、動くことができない。

刃「くくくくくつ。」

昴「っ!?!、何がおかしい?」

刃「いやなに、過去俺に立ち向かった守り手は皆、俺が外史の破壊者だと知るとたちどころに飛びかかってきたけど、君は冷静だね?」

昴「ちつ、初見でしかも実力を図れない相手に飛びかかるほど馬鹿ではない。」

刃「なるほど、わざわざ俺に差し向けるだけあって、なかなか……でもね……。」

昴「っ!?!?」

数メートル先にいたはずの刃が目の前にいた。

刃「こつちから行かないとは限らないよ?」

昴「くっ!」

即座にバックステップをして距離をとった。

刃「ほらほら、ぼーっとしてると死んじゃうよ?あははは!」

ちっ!余裕かましてやがるな。超スピードか、何かタネがあるのか。
・・考えても無駄か。

昴「ふ〜。」

悔しいが刃は強い。確実に俺より。なら様子見は不要だ。

チャキ!

俺は村雨に手を当て、抜刀術の構えを取る。

刃「いいねいいねえ〜。その殺気。・・なら少し遊んであげるよ。」

刃は腰の刀を抜き、肩にかける。

その余裕、すぐに崩してやるよ。・・一撃だ。俺の最速の技をもつて一撃で決める。

おれは体勢をやや下に傾ける。

昴「北辰流抜刀術・・。」

両足に氣を集中させる。

昴「疾・風！」

ドン！

俺の全力のスピードで刃に突進し、村雨の射程内に刃が入ると一気に抜刀、一閃した。

ザン！

刃の体が2つに裂かれる。

昴「とらえ・・・っ！？」

手応えが妙だ。刃は何処だ！？

刃「お見事。なかなかの速さだったよ。」

昴「何！？」

ザシユ！

昴「がはっ！」

俺の背後から刃の声がかかり、慌てて振り返ったその刹那俺の胸を刃の刀が貫いた。

刃「今のは写し身、君が俺だと思い込んで斬ったのはただの身代わりだよ。」

昴「っ!？」

先ほど刃がいた場所を見ると真っ二つになった人ほどサイズの丸太が転がっていた。

刃「ただの手品だよ。しかしねえ、抜刀術は一撃必殺にうってつけだけど、外すとこれ以上にないくらい隙だらけになるんだよねえ。」

昴「くっ・・・そ・・・。」

俺は刀を素手で引き抜き、刃から距離をとる。

昴「うぐっ!」

貫かれた胸からは血が溢れる。

刃「へえー、仕留めるつもりだったけど、咄嗟に急所外すとは、中々やるねえ。・・・でも。」

刃が俺に歩みより、

刃「その様じゃもうまともに戦えないよねえ?」

昴「・・・まだだ!」

俺は激痛を堪え、村雨を構える。

刃「頑張るねえ。くくくくくっ、まだ戦るなら俺を楽しませてよ?」

調子に・・・のりやがって!

昴「・・・刃。」

刃「何かな？」

昴「あまり、俺を舐めるなよ。」

刃「何を・・・っ!？」

刃の肩口から血が走った。

刃「あらら、避けたと思ったけど、僅かにかすってたみたいだね。自分の血を見るなんてどのくらい振りだろ？やるねえ。・・・けど、それが今の君の限界だねえ。」

昴「くっ!」

どうする？こいつは予想以上に強い。拳げ句こっちは致命傷こそ避けたがこの様だ。

刃「来ないの？それとも来れない？」

アレを使うか？けどこの体じゃ数秒と持たない。・・・それに仮に使ってもこいつには・・・。

刃「ふう。ならもういいや。・・・死んで？」

刃が刀を振り上げる。くそ！俺は死ぬのか？俺はこんなところで死ぬわけには！

刃が振り上げた刀を振り下ろそうとしたその時、

？「よいしょ！」

？「ふん！」

刃「っ！？」

突如刃の後方から2つの影が飛び出した。刃は横っ飛びをしてその影を回避する。

刃「随分と手荒い挨拶だな。・・・貂蝉、卑弥呼。」

貂「久しぶりねん。刃。」

卑「ぬう、避けられたか。」

昴「貂蝉！？、卑弥呼！？」

管理者であるこいつらが何故！？

貂「ごめんなさいね。ここで昴ちゃんを殺らせるわけにはいかないの。」

卑「我らが相手になろう。」

貂蝉と卑弥呼が構えをとる。

刃「くくくっ、管理者の中でも指折りの手練れである2人が直々に相手とは恐れ入る。・・・けどな、お前達2人がかりでも俺に勝てるか？」

卑「……………」

貂「…………無理、でしょうね。」

だろつな。刃の強さは異常だ。

昂「3人が相手なら……………」

俺も加勢しようと思ち上がろうとすると貂蟬が手で俺を制した。

貂「…けどね、私達2人の命と引き換えにすれば、あなたを封印することくらいわできるわ。」

昂「っ!?!」

貂蟬!?!お前、何を!?!

刃「本当にそう思ってるのか?」

卑「ならば試してくれようぞ。」

刃「……………」

貂「……………」

卑「……………」

3者がにらみあつ。しばらくにらみあつてこゝろ、

刃「くくくつ、そう怖い顔しないでよ。今日はどのみちそのつもりはなかったよ。」

卑「ならば何故ここへ来た？」

刃「新しい守り手と、ここに集まる外史の英傑の見学に來ただけだよ。・用は済んだし、今日は退くよ。」

刃が俺達に背を向けて歩き出す。

昂「ま、待て！」

俺が刃を追いかけてようとすると、

刃「守り手君。君はまだ泳がせれば味が熟成されそうだから、その命は君に預けとくよ。だからもつと強くなって俺を楽しませてね？
じゃあねえ」

昂「くつ！」

突如刃の足下の枯れ葉が刃を覆い、枯れ葉がはれるとそこには誰もいなかった。周辺にも気配の欠片も見つからなかった。

昂「くそ！逃げられ・・・いや、見逃されたか・・・。」

外史の破壊者がここまでとは・・・。

昂「くつ！」

刃に貫かれた胸に再び激痛が走る。

貂「昂ちゃん、大丈夫？」

昂「・・・急所は外した。血さえ止まれば問題ない。」

貂「今治してあげるわん。さ、目を閉じて。あたしと熱い口付けを・
・。」

卑「ちょ、貂蟬！ずるいぞ！ここは我が・・・。」

昂「・・・そんなんされるぐらいなら死ぬ。」

貂・卑「ひ、ひどいわ！」

冗談じゃねえ。

貂「冗談よん。今治すから傷を見せて。」

昂「ああ。」

俺は外套と内側の服の留め具を外した。

貂「あらん、良い体だわん。思わず頬擦りしたく・・・。」

ザクッ！

昂「早くしろ！」

貂「んもう、イケず。待っててね。」

貂蟬が何やら小瓶を取り出した。・・・って。

昴「てめえ、今それ何処から出した。」

貂「漢女にはいろいろ秘密があるのよん 始めるわ。．．少し我慢してね。死ぬほど痛いわよ。」

貂蟬が小瓶の液体を傷にふりかけた。

ジュー！

昴「ぐおおおお！」

結構きつい！まるで強力な酸でもかけられてるみたいだ！

貂「終わったわ。」

昴「すごいな。完全に傷が塞がっちゃまったな。」

先ほどの激痛が嘘のように楽になった。

昴「それより、お前達は何故ここにいたんだ？」

貂「刃がこの外史に侵入したから昴ちゃんに伝えに来ただけけれど．．．」

卑「一足遅かったようだな。」

昴「まあ何にせよ、助かった。」

貂「気にしないでいいわ。．．．それより、刃と接触してみて、ど

うだったかしら。」

昴「・・・強いの一言ぞ。」

疾風をあつさり返された。突進力と速さなら俺の手持ちの技の中で
も1番だったんだが。

貂「ちなみに言うと。刃がその気だったら、今頃私達はあの世行き
だったけどねん。」

昴「・・・お前達でも無理か？」

卑「むうう、命と引き換えに封印を施しても奴には効かなかったで
あろう。」

貂「第一、直接的な強さでは昴ちゃんに劣る私達じゃ、まともには
対抗できないわ。」

昴「・・・。」

貂「私達はこの外史に長くはとどまれないの。そろそろ行かなくて
はならないわ。・・・どうする？辞めてもいいのよ？」

昴「・・・冗談じゃない。今の俺じゃ奴に及ばない。でも必ず奴は俺
が倒す。」

刃は必ず俺が・・・。

貂「そう。なら任せるわ。」

卑「主なら刃を倒せると信じているぞ。」

貂「私達は行くわ。ああ、それと、刃のことだけど、しばらくは気にしないで大丈夫よ。」

昴「どういうことだ？」

貂「刃は破壊や殺戮を激しく好むけど、彼はいつでも守り手や外史をすぐに滅ぼそうとはしなかったわ。」

昴「何故なんだ？」

貂「彼は結果より過程を楽しむのよ。より多くの希望を与えて、そしてそれを全て絶望に変える。彼はそれを楽しむの。だからしばらくは目立った行動は起こさないわ。」

昴「ありがたいのかどうか分からないが、分かった。」

貂「それじゃ、頑張ってるね。」

卑「また会おう！」

2人は光の柱に包まれ、そしてその姿を消した。

昴「……。」

俺は自分が最強だなんて思ったことはないが、それなりに自信はあった。しかし刃はそんな俺の遙か上にいた。

昴「強く、ならないとな。」

奴を倒すためにももっと力を付けなくちゃな。・・・けど今は・・・

昴「反董卓連合。今はこっちをどうにかしないとな。」

もうシ水関は完全に連合が制圧しただろう。とりあえず桃香達のところへ戻るか。

俺はシ水関へ向かった。

戻ってみるとシ水関は完全に連合が制圧作業しており、董卓軍は投降するか虎牢関に逃げていった。

桃「ご主人様！」

桃香や皆が俺に集まってきた。

昴「今戻ったよ。」

桃「もう遅いから心配したんだよ？」

愛「何かあったのですか？」

昴「悪い悪い。連合に見つかからないように気をつけてたら時間がかかったんだ。・・・それで、状況は？」

朱「はい。将である華雄さんが討たれたことにより華雄隊は統制を失い、たちどころに制圧されました。」

雛「シ水関は私達が華雄隊を相手取っている間に孫策さん隊が制圧しました。」

昴「なるほど。」

雪蓮は名より実を取ったか。

鈴「にゃー、結局、孫策つて奴がシ水関を落として1番目立つ手柄を立てちゃったのだ。」

昴「何、俺達が華雄を関から引きずり出して討ち取ったから孫策もシ水関を落とせたんだ。皆俺達のことを認めてくれるさ。」

鈴「そうなのかな？それならいいのだ。」

昴「制圧作業が落ち着いたら、虎牢関突破の為の軍議も始まるだろう。今のうちにやることやっちまおうぜ。」

星「そうですね。」

昴「それじゃ、愛紗と鈴々はこのまま作業を続けてくれ。星は隊の

編成を。朱里と雛里は虎牢関に斥候を放って。戻り次第、その情報をもとに作戦を練ってくれ。桃香は……。」

桃「うう、待機だね。」

昴「悪いな。俺は・・星を手伝うな。」

星「分かりました。よろしくお願い致します。」

朱「すぐにも斥候を放ちますね。」

雛「私はその間兵糧の点検をしておきます。」

昴「頼む。それじゃ、引き続き辛い戦いが予想されるが、皆頑張ろう。」

「「「「了解。「「「「」

皆が持ち場へと向かった。

思いがけないトラブルが発生したが、シ水関の戦いは連合の勝利に終わり。次に待つ虎牢関での戦いに向けての準備が始まったのだ。た。

続
く

第33話 破壊者の実力、理解する差（後書き）

もう少し刃とのやりとりを綿密したほうがよかったのかな？自分にはこれが手一杯です><

感想、アドバイスお待ちしております。

それではまた！

第34話 虎牢関の戦い、立ちはだかる飛將軍（前書き）

日付変わるまでに投稿出来なかった。話も色々ぶちこみ過ぎてもはやご都合主義で通るかどうか・・・。

それではどうぞ！

第34話 虎牢関の戦い、立ちはだかる飛將軍

シ水関の制圧作業も終わり、虎牢関へと進軍した連合軍。一応その前に軍議をしたが、決まったことは軍の配置場所と・・・作戦とは名ばかりの・・・作戦だ。俺達劉備軍の配置は後曲となった。どうやら華雄を討ち取り、活躍したことが総大将である袁紹がお気に召さなかったみたいだ。似たような理由で孫策軍も同じ後曲になった。劉備軍と孫策軍の後ろに袁術の軍が控えている。前曲は袁紹軍と曹操軍が務めている、といった具合だ。そしていざ開戦し、虎牢関突破に向けて、攻撃が開始されたんだが・・・。

昴「・・・誰か戦況の説明を。」

朱「はい。現在、袁紹さん軍と曹操さんの軍が虎牢関への攻撃を開始しました。しかし、袁紹さんが無策で力攻めを繰り返すばかりで一向に進展がなく、曹操さんも袁紹さんが城門の前を陣取って攻め立てているため、攻め手を欠いています。」

昴「全く、早々にシ水関を落とした意味合いがなくなっちまうな・・・。」

あれじゃ時間も掛かるし被害も出ちまう。

星「そのとおりですな。あのままでは袁紹の軍はかなりの被害を受け、董卓軍の士気は再び高まってしまっ。」

桃「私達の力で何とか出来ないかな？」

雛「今は静観かと。迂濶に動けばより混乱を招くだけですから。」

愛「前曲の袁紹といい、シ水関でも虎牢関でも後ろで静観している袁術といい、袁家の者はどうしてこう・・・。」

鈴「にははは、2人とも馬鹿だから仕方ないのだ。」

昴「はあ、・・・先が思いやられ・・・ん？」

まてよ、混乱・・・袁姉妹・・・孫策・・・曹操・・・ん、試してみるか。

昴「この状況を一気に変えちまおう。」

朱「何か策でもおありですか？」

昴「ああ。ただ俺達だけじゃ無理だ。他の諸候にも協力してもらおう。」

愛「しかし、他の諸候がご主人様の策に協力するでしょうか？」

昴「心配いらぬ。協力せざるを得ない状況を作り出すから・・・それじゃ、交渉してくる。」

愛「ご、ご主人様!？」

俺は自陣を飛び出した。

雪蓮 side

シ水関制圧後の軍議で私達孫家の隊は後曲に配置換えとなり、今虎牢関を袁紹と曹操が攻めている。

雪「はあ。」

冥「どうしたの、雪蓮？」

雪「本当に退屈ね。」

冥「我々は後曲だからな。」

穩「初戦で私達と劉備さんが大活躍しましたから、袁紹さんも大方焦ってるのかもしれないね。」

雪「ま、ちょうど良いと言えばちょうどのかもね。斥候の話じゃ、虎牢関には飛將軍呂布が居るってことだし。」

明「はつ。虎牢関に籠るのは飛將軍呂布。そして先の戦で虎牢関に撤退した張遼という話です。」

思「両方とも国中に名を轟かす良将にして猛将です。・・・苦戦は必死かと。」

冥「ふむ。袁紹と曹操がどうやって虎牢関を落とすか。見物だな。」

雪「・・・つまないわね。」

思「如何なさいましたか？」

雪「袁術ちゃんよ。あいつ、まだ動いてないでしょ。」

冥「そうだな。袁紹を上手く操っているんだろう。・・・確かに面白くはない。」

穩「袁術さんの部隊が無傷っていうの、後々のことを考えれば厄介かもしれないねえ。」

思「しかし、袁術の隊は我らの更に後方。袁術が袁紹を巧みに操っている今、そう簡単には・・・。」

冥「動かない。そうだな。袁術に動く道理などないからな。」

穩「はあ、どうしましょうか・・・。」

孫家の今後のため、袁術ちゃんをどうにかしたい。私達が頭を悩ませていると・・・。

「申し上げます。孫策様にお目通り願いたい者が参りました。」

冥「この戦時にか？ 一体誰が・・・。」

「それが、劉備軍の御剣昴殿です。」

冥「昴が？」

穩「一体何の用なんでしょう？」

雪「・・・。」

昴がこの非常時に用も無しに他国の陣に来るわけがない。・・・これは何かあるわね。

雪「良いわ。連れてきてちょうだい。」

冥「雪蓮、良いのか？」

雪「構わないわ。戦闘状態ではないのだし。・・・それに、昴なら何かいい考えがあるかもしれないわ。」

冥「全く雪蓮は・・・今すぐここに通せ。」

「はっ！」

兵が戻っていった。

さて、昴は何の用なのかしら。ふふっ、楽しみね。

昴 side

「どうぞ、こちらへ。」

おつ、戦闘状態ではないとはいえ、開戦途中だから無理かなって思ったら以外にすんなりいったな。

昴「ありがとう。」

兵の後についていくと、そこには見知った顔が勢揃いしていた。

昴「よう雪蓮。それに皆、久しぶりだな。」

雪「久しぶりね。昴。」

穩「お久しぶりです。」

明「お久しぶりです！昴様！」

冥「私は軍議で会ったがな。」

祭「久しいの。」

つい最近まで共にしていたのにもう懐かしいな。

思「・・・今は開戦中だ。相変わらず非常識な奴だな。」

昴「ははっ。」

手厳しいな。思春。

祭「頬が緩んどるぞ？思春よ。」

思「／＼、祭殿！何を仰って・・・！」

相変わらずだな。

雪「・・・それで、わざわざ私達の陣にまで何の用かしら？」

昴「そうだな。雪蓮。今のこの状況。どう見る？」

雪「どうもこうも・・・見ての通りでしょ？」

昴「どうにか打開しないか？」

冥「何か策があるのか？」

昴「まあ、な。」

雪「ふーん。でも・・・あなたの策、私達がのることに利はあるのかしら？」

昴「当然あるぞ。」

雪「ふーん……。」「

昴「……。」「

やはり簡単にはのらないか。俺を信用出来る出来ないの問題じゃない。簡単に食いつけば主導権を相手に渡すことになる。ま、この辺は王として当たり前か。

昴「孫家はシ水関でその名を上げた。が、しかし、もう一つどうにかしておきたい問題があるだろ?」「

雪「気になるわね、一体何かしら?」「

雪蓮は笑みを浮かべながら訪ねる。

昴「袁術。」

雪「……。」「

昴「連合が生まれ、未だに袁術は被害を受けてない。後々のことを考えれば、袁術が無傷で終わるのは孫家にとっては困るんじゃないのか?」「

雪「……。ふふっ、そうね。」

昴「どうだ?のらないか?」「

雪「……。」

場に沈黙が走る。

雪「……ああもうやめやめ！昂と腹の探りあいしてもしようがないわ。」

昂「雪蓮？」

雪「私達はなりふり構ってられない。いいわ。あなたの策にのりましょう。皆もいいわね。」

冥「雪蓮がそう決めたのなら私は構わない。」

祭「儂も構わぬ。」

残りの皆も同様だった。

昂「助かるよ。それだ策だが……、まあ、実際は大したものじゃない。とりあえず孫策隊には虎牢関への攻撃に参加してもらいたい。」

祭「この状況下でか？」

明「はうあ！戦場はますます混乱してしまいます！」

昂「それでひとしきり戦闘をしたら敗走したふりをして後方に下がってほしい。」

雪「なるほどね。」

雪蓮は策の意図に気付いたか。

冥「話は分かった。が、しかし、この策には問題点が2つある。第1に、この策を実行するためには袁紹軍と曹操軍との連携が必須だということ。第2に、呂布や張遼がこれに食いつかなければ意味を成さないということ。呂布も張遼有利である関を捨て、飛び出すほど愚かではないぞ？」

もつともな質問だな。

昴「第1の問題については心配いらぬ。まず曹操だが、袁紹が考えなしに城門攻め立ててるせいで被害こそ受けてないが手を打てないでいる。そこに孫策軍が乱入すれば即座にその意図に気づき、連携してくれる。袁紹軍も孫策軍と曹操軍が下がれば自分達が殿を務めなくちゃならなくなるから必然的に一緒に下がる。これで最初の問題はいいな？」

冥「ああ。」

昴「第2の問題点だが、これも問題ない。呂布と張遼は必ず出陣する。」

冥「何故そう言い切れる。」

昴「いくら籠城しようと援軍は来ないんだ。関を盾にしてもいつまでももたないだろ。なら、土気下がりきららない内に連合軍に痛手を与えられれば悠々と逃げる事が出来る。」

冥「いくら何でもそんなことあるわけが・・・。」

昴「ある。冥琳ならそんな策は取らないだろうが、呂布は飛將軍と呼ばれ、張遼は驍將と讃えられる武人だ。1度2人に会った時の印象通りなら必ず出陣する。」

冥「・・・むづ。」

賛同出来ないか。軍師だけに利にかなわないことには賛同出来ないか。

昴「雪蓮。もし雪蓮が今の呂布や張遼と同じ立場ならどういった行動を取る?」

雪「・・・私なら今昴が言った行動を取るでしょうね。」

昴「軍師には軍師の真理があるように、武人には武人の真理があるってことだ。」

冥「ふむ・・・分かった。全て納得したわけではないけれど、今は昴を信じよう。」

昴「助かるよ。」

雪「それで、あなた達劉備の軍はどうするの?」

昴「俺達は呂布と張遼の隊が袁術の軍にぶつかって混乱した時を狙って呂布が張遼を討ち取る予定だ。」

雪「あゝずる〜い!」

昴「ま、そこは早い者勝ちな？」
雪「むう。」

昴「じゃあ手筈通りに頼む。こっちも可能な限り援護する。それじゃ、また後で。」

雪「ふふっ、任せなさい。」

俺は孫策の陣を後にした。

愛「それで、ご主人様は一体どのような策を取られるのですか？」

昴「今説明する。とりあえず全体の流れは」

・
・
・
・
・
・

昴「と、こんな感じだ。」

星「なるほど。」

愛「分かりました。」

鈴「分かったのだ！」

昴「後は袁術の陣に敵方がなだれ込んだ時だけ。呂布だけは、愛
紗、鈴々、星の3人で当たってくれ。」

愛「3人で、ですか・・・。」

星「それは些か卑怯では・・・。」

鈴「うう、正々堂々戦いたいのだ！」

昴「駄目だ。これだけは従ってもらおうよ。もし聞けないなら呂布とは俺が戦う。」

愛「そ、それは!？」

星「・・・分かりました。」

鈴「・・・分かったのだ。」

3人供納得いかないみたいだが、これだけは譲れない。

昴「ん?孫策の軍が動き出したな。皆持ち場についてくれ。」

皆「了解!^{なのだ}!」

愛紗、鈴々、星の3人が劉備の前線へと向かった。

昴「ふう。」

朱「お疲れ様です。」

雛「鈴々ちゃん達、残念そう。。。」

朱「仕方ないよ。万が一のことがあったらいけないし。」

桃「念には念を入れなくちゃね!」

昴「そうじゃない。」

桃「えっ?」

昴「念には念をとかそういうのじゃない。3人がかりでも呂布に勝てないかもしれぬ。」

朱「そんな・・・。」

桃「だ、大丈夫。愛紗ちゃん達、すつごく強いんだから。」

昴「だといけどな。」

万が一の時は俺が・・・。

曹操軍 side

華「さすが虎牢関と言つべきか。すぐには落とせそうに無いわね。」

秋「守備についている将が飛將軍呂布にシ水関から退却した張遼がいますからね。」

桂「無理に攻めても被害が大きくなるだけかと・・・。」

華「虎牢関から引つ張りだすのが上策、か・・・。」

桂「しかし、その策を実行する場合、袁紹軍が連携を取ってくれないという意味がないでしょう。」

華「あの馬鹿は攻めることしか頭に無いようね・・・迷惑だわ。」

春「御意。城門の前に陣取り、めったやたらに攻め立てているようですが・・・邪魔ですなあ。」

華「皆からの攻撃を一身に受けてくれているから、楽と言えば楽だけれど・・・これではラチが明かないわね。」

桂「何か、この状況を変える一石があれば良いのですが・・・。」

「申し上げます！後方より砂塵！旗印には孫一文字！」

春「孫策の部隊だと？奴ら、後方で待機していたはずでは無いのか。」

秋「何をしにきた？」

桂「あの勢いから見ると、こちらの戦場に乱入するつもりじゃないかしら。」

春「乱入だと？ただでさえ袁紹の動きが邪魔だというのに面倒な。」

華「乱入、か。なるほどね。」

秋「華琳様は孫策の考えがお分かりで？」

華「ある程度はね。孫策が今、排除したがつている人間は誰？」

桂「それは袁術でしょう。．．あ。」

華「そういうことよ。我らはこの一石に乗じましょう。春蘭、秋蘭。孫策の動きに合わせ、敗走するフリをしながら後退する。準備をしておきなさい。」

秋「なるほど。孫策の意図はそこにありますか。了解しました。」

春「えっ？えっ？どういうことだ？」

秋「後で説明してやる。今はすぐに軍を動かすぞ。」

春「わ、分かった。」

思「前方、城攻めの部隊に動きあり！曹の牙門旗が道を開けました！」

雪「昴の言った通りになったわね。さすが曹操。こっちの思惑、見事に見透かされているわね。」

冥「そのようね。曹孟徳、恐ろしい奴だ。・・・そしてこの展開を予見した御剣昴も。」

雪「今は好都合よ。・・・突っ込むわよ、冥琳！」

冥「分かった。・・・皆、遅れるな！」

「「「了解！」「」「」

雪「では行く！皆の者、我が旗に続けえー！っ！」

「「「応ー！」「」「」

董卓軍 side

「敵前線は混乱の様相を呈しております！叩くなら今が好機かと！」

恋「・・・行く。」

遼「・・・せやな。」

ね「しかしですなあ・・・。」

遼「分かつとる。連合側に何かしらの狙いがあるんやろ。けどな、援軍もけーへんのにこのまま籠つててもしやーないやろ？それならいつそ、このまま外に出て戦った方がええやろ。もしかしたら逃げるかもしれないしな。」

ね「むむっ、それもそうですな。呂布將軍ご出陣！深紅の呂旗をあげますぞー！」

遼「ウチも出るぞー！紺碧の張旗を盛大にあげてやー！」

「「「「「応っ！」「」「」

昴side

昴「・・・よし。」

手筈通り、雪蓮の軍が前線に出て、前線は混乱した。その後、呂布と張遼が虎牢関から出陣し、雪蓮の軍と華琳軍が敗走したフリをして後退し、殿を嫌った袁紹の軍も同じく後退した。そしてそのまま呂布の軍は袁術の軍に食い込み、張遼の軍は現在華琳の軍が止めている。

昴「それじゃ、俺達は袁術の救援に向かう。皆気合い入れろ！」

「「「「「応っ！」「」「」

相手は恋か。愛紗、鈴々、星、頼むぞ。

星side

私と愛紗と鈴々で先陣を切り、敵をほふりながら進んで行く。ある程度斬り込んでいくと・・・。

?「邪魔。」

「がはっ！」

「ぐふっ！」

圧倒的な強さをもって戦う1人の武人を見つけた。あれが飛將軍呂布か。主の言ったことが今理解できた。呂布は我々より強い。

愛「貴様が呂布だな。」

恋「そう。お前達は？」

愛「私は劉備軍が将の1人、関羽！」

鈴「鈴々は張飛なのだ！」

星「我は趙雲！」

愛「些か卑怯ではあるが主の命により、貴殿の首をいただく。」

愛紗と鈴々、そして私も構えを取る。

星「はあ、はあ、ぐっ！」

愛「くっ、そ！」

鈴「うぐっ！」

我ら3人供、手持ちの武器を杖代わりかろっじて立っている。
強い。強すぎる。呂布がここまで強いとは。

恋「もう終わり？」

愛「くっ、まだだ！でやああああ！」

愛紗が力を振り絞り、呂布へと向かう。
しかし、

ブオン！

恋「。。。。」

その一撃は呂布には届かない。

恋「振りが大きい。避けるの簡単。・・・ふっ！」

ガギン！

愛「うわ！」

愛紗の青竜刀は弾かれ、後方に飛ばされる。

鈴「愛紗！よくも、ええーい！」

ブオン！

鈴々の一撃もあっさり避けられる。

恋「軌跡が単純・・・終わり。」

ガギン！

鈴「にやにやー！」

鈴々も愛紗と同じく後方に飛ばされた。

恋「最後。」

星「くっ、ならば、これなら、どうだ！はいっ！はいっ！はいっ！はいっ！

私は我が槍の突きを連写を繰り返す。

恋「・・・。」

ヒュン、ヒュン、ヒュン、パシッ！

呂布は全ての突きを避け、最後の突きを素手で槍の柄を掴み取る。

星「なっ！？」

恋「速いけど、軽い。・・・これで終わり。」

そのまま呂布が私の腹に蹴りを入れた。

ドガッ！

星「ゲホッ！」

私はなす術もなく飛ばされる。

私も愛紗も鈴々もはや戦う力は残されていなかった。

恋「お前達強い。けど恋の方がもっと強い。」

強すぎる。3人がかりで手も足も出ないとは。

呂布が戟を構え、私に近づく。

桃香様・・・主よ。申し訳ありません。私はここまでのようです。

私は覚悟を決め、目を瞑る。

そして呂布が私にトドメを刺そうとしたその時、

ザクッ！

何かが刺さる音が耳に響く。目を開けると見覚えがある長剣が呂布と私の間の地に刺さっていた。

？「こうして助けるのは2度目だな、星。」

星「あ、主。」

振り返ると、そこには我らが主が立っていた。

昴「悪いが3人供俺の大事な仲間なんだ。邪魔させてもらうぞ、恋。」

恋「構わない。」

主は今呂布の真名を呼んだ？顔見知りなのか？

昴「星、動けるか？」

星「か、かろうじて、動くだけなら。」

昴「なら愛紗と鈴々と一緒に下がれ。」

星「いやしかし！」

昴「早く！」

星「・・・分かりました。」

悔しいが今の私では足手まといにしかならない。

私は愛紗達の元に向かった。

昴 side

間に合って良かった。心配になって来てみたら3人はやられていた。星にトドメを刺そうとした恋と星の間に村雨を投げつけ、恋を止めた。俺の言葉に星が従い。恋と対峙する。

昴「ここからは俺が相手になる。連戦だが大丈夫か？」

恋「大丈夫。」

俺は地に刺さった村雨を引き抜き、構える。恋も手持ちの戟を構える。

俺と恋の戦いが始まった。

続く

第34話 虎牢関の戦い、立ちはだかる飛將軍（後書き）

誰か私に文才を！

戦の描写ってすごく難しいです。中途半端に話も終わっただし・・・
・・・はあ。

感想、アドバイス、ありましたらよろしく願います。

それではまた！

第35話 激突、最高対最強（前書き）

投稿します。今回は一騎討ちオンリーです。

はあ、難しい。文才欲しい。

それではどうぞ！

第35話 激突、最高対最強

昴「……。」

星にトドメを刺そうとする恋の間に割って入り、対峙している。

恋「……。」

恋も無言で構えている。

さてと、相手は愛紗と鈴々と星の3人を圧倒する恋だ。どう攻めるか……。春蘭みたく安い挑発にはのらないだろう……。まあ、このまま睨み合っけていてもしょうがない。とりあえず、真っ正面から切り崩す！

昴「はっ！」

俺は恋に飛び込む。

恋「ふっ！」

恋も同時に飛び出した。俺と恋はみるみる距離が縮まり、

ガギン！ギギギギギキッ！

俺の下からの斬り上げと恋の上からの振り下ろしが激突し、つばぜり合いが始まる。

昴「驚いたな。後ろに弾き飛ばすつもりだったんだがな。」

恋「・・・恋も同じ。」

さすが恋だな。俺は一度距離を取り、再度恋に飛び込む。

ガギン！ガギン！ガギン！

数合に渡る斬り合いが繰り広げられる。

昴「はあ！」

恋「ふっ！」

ガギン！ギギギギツ！

再びつばぜり合いが繰り広げられる。

俺はスツと左手を下に下げた。

恋「！？」

左手の人差し指と中指で太ももにくくりつけられている朝陽を引き抜きそのまま恋に向かって斬りつけた。

ヒュン！

が、咄嗟に恋は後ろに下がり、それを避けた。

昴「よく避けたな。」

恋「・・・嫌な予感がした。」

体が勝手に反応したってどこか。

昴「こついつのはどうだ？」

俺は村雨を手放し、朝陽と夕暮を上空に放った。

恋「？・・・っ!？」

恋が俺から目を切った一瞬に俺は地面に落ちるスレスレの村雨を拾い上げ、恋に飛び込んだ。

ガギン!

恋は寸前で俺の一撃を防いだ。

昴「やるね、けどまだまだ！」

ガギン!ガギン!ガギン!

恋「くっ!」

恋は戟の柄で俺の攻撃を防いでいる。

昴「これでどうだ！」

村雨を横一闪する。

ブオン!

昴「っ!？」

そこに恋の姿はなく、恋は高く跳躍していた。そのまま空中で一回転して戟の一撃を繰り出した。

ドゴーン!

咄嗟に後ろに下がり、それを避ける……が、恋は即座に体勢を立て直し、俺との距離を詰め、追い撃ちをかけてきた。

ブオン!ブオン!ブオン!

昴「ちっ!」

恐ろしい程の速さと破壊力を秘めた攻撃が俺を襲う。なんとか避け続けるがそれも限界に近づく。

昴「くっ!」

避けられないとみて、村雨で恋の一撃を受けたが、

ガキーン!

昴「うっ?」

村雨を弾かれてしまう。

恋「はあ!」

恋の横一闪の一撃が俺を襲う。俺はそれを上体を後ろに反らし、避

ける。そして、先ほど上空に放ち、俺のいる場所に落下してきた朝陽と夕暮を掴み、そのまま斬りつけた。

恋「っ!？」

恋は後ろに下がりそれを避ける。

昴「逃がすかよ！」

下がった恋に間髪入れずに飛び込み、追い撃ちをかけた。

ギン！ギン！ギン！ギン！ギン！

恋「うつ・・・くっ！」

恋は必死に防戦する。戟は槍と斧の特性を兼ね備えた恐ろしい武器だが、懐に飛び込まれると防御しか出来ない。このまま一気に押し込む。そのつもりだったが、

恋「くっ！」

昴「っ!？」

恋が戟を短く持ち、体をひねり、コマのように回り一閃する。

ブオン！

恋「っ!？」

俺は跳躍し、恋の一撃を避けると、落下の勢いを利用し、朝陽を恋

に叩きつける。

ドオン!

恋は横に飛んでそれを避ける。

昴「甘い!」

地面に刺さった朝陽の柄を支点にし、手首で体を回転させ、まわし蹴りを恋に浴びせる。

ガン!

恋「うつ!?!」

恋は咄嗟に戟の柄で防ぐが体勢が悪かったため、若干後ろに弾かれる。

昴「ふう〜。」

俺は朝陽と夕暮を鞘に戻し、先ほど弾かれた村雨を拾う。

これも対応するか。さすが恋だな。飛將軍呂布。黄巾の乱で単騎で3万を討ち取り、この戦でも愛紗、鈴々、星の3人を相手に圧倒するだけのことはある。……………けど。

だけど……………。

昴「恋。」

恋「何?」

俺は自分の中の疑問をぶつける。

昴「恋はなぜ」

昴「本気で戦わないんだ？」

恋「っ!？」

先ほどから感じていた疑問。俺には恋が本気で戦っているようには見えなかった。

昴「何を遠慮してるんだ？それとも恐れているのか？本気を出す」とに。本気の自分を見られることに。」

恋「……。」

何も答えない。

昴「過去に恋を相手に凌げる者はいても対等に戦える相手なんていなかっただろう。それ以前に戦う恋を見て怯え、恐れを抱く者ばかりだったろう。それは敵も、そして……味方や恋が守ろうとした者さえも。」

恋「っ!？」

昴「誰だって避けられ、恐れられるのは辛い。本気を出すことで過去と同じ過ちを繰り返すことも……。けどな、そんな心配は不要だ。」

俺は両手を広げ、

昴「恋、今お前の目の前にいる相手はお前が全力をもってぶつかっても勝てない相手だ。俺は恋を恐れない。そして恋が優しい娘だというのを知っている。だから怖がらなくてもいい。お前の全てを俺にぶつける、恋!俺が全部受け止めてやる!」

俺は俺が思っていることを、俺の思いを全て恋に伝えた。それを聞いた恋は、

恋「・・・グスツ。」

涙を流していた。

昴「恋?」

恋「そんな・・・こと・・・言って・くれたの、昴が・・・初・めて。」

昴「・・・。」

恋「皆・・・恋のこと・・・怖がった。守り・・・たかった・だけなのに。皆。皆恋のこと・・・化け物を・見る目で見た。」

恋はずっと苦しんでいたんだな。強さもとある域を超えると周りが感じるのは恐怖だ。対等に戦える相手もおらず、知らず知らず自分の力に蓋をしたのだろう。

恋「ありがとう。恋、昴に会えて良かった。」

恋は涙を拭う。

恋「恋の本気、昴にぶつける。恋を見て！全力の恋を！」

恋が構えをとる。

昴「っ!？」

その瞬間俺の体がズシッと重くなった。

これは恋の威圧感だな。それが俺にプレッシャーをかけている。

さてさて、ようやく飛將軍呂布の本領が見れるわけだな。

俺も村雨を構える。

恋「ふっ！」

恋が10メートルはあろう距離をものすごい速さで詰め、一撃を繰り出した。

ガギン！

昂「ぐ！」

その速さからくる一撃を堪えきれず、後ろへ大きく弾かれた。

ズサササッ！

昂「ふう。」

何て一撃だ！手がすごい痺れる。何とか防いだものの、受けきれずに弾き飛ばされてしまった。それ以前にあの距離を一瞬で詰めやがった。これが全力の恋か。・・・なら、こっちもきっちり返礼しないとな。

ドオン！

俺は縮地で一気に距離を詰め、

ガキーン！

恋に一撃を浴びせる。

恋「ぐっ！」

恋も俺の一撃の勢いを殺しきれず、後方に弾かれる。

恋「・・・。」

恋が体勢を立て直し、構え直す。
改めて挨拶は済んだな。・・・それじゃ。

昴・恋「行くぞ（行く）！」

俺と恋が同時に飛び込み・・・ぶつかった。

春蘭 side

春「何だ、これは・・・」

私は華琳様の命により、張遼を捕縛するため、張遼隊に突っ込み、張遼と一騎討ちを果たした。何合か斬り結び、そして説得の末、張遼は華琳様に降った。その後、袁術の軍が呂布の隊に押し込まれているため、救援のため秋蘭と共に隊を率い、呂布の隊に切り込んだのだが、切り込んだ先、そこには昴と呂布が壮絶な一騎討ちをしていた。

ガギン！ガギン！ガギン！

昴と呂布の得物が交差する轟音が戦場に鳴り響く。

春「これが、呂布なのか・・・。」

昴の強さは良く知っている。何せ何度も戦い、そして何度も負け続けるのだから。今その昴と互角に戦っている呂布の姿を見つめている。

遼「あないな恋はみたことない・・・。」

春「霞・・・。」

遼「ウチも恋とは何度か模擬戦をしたことはある。勿論勝てへんかったがあそこまでの強さやなかった。」

霞も見たことがない姿なのか。

秋「・・・これが昴達のいる領域か。」

昴のいる領域。私が目指すべき領域。

春「いつか必ずお前の領域にまで辿り着いてみせる！」

以前に昴に宣言した言葉。

春「私はまだ昴に追いつくどころか、背中すら見えていない・・・。」

秋「姉者・・・。」

果てしなく遠いその領域。見れば見るほど私との差を痛感させられる。しかし、

春「だからこそ、目指し甲斐ある。常に私の遙か前に居てくれる。武人として私は幸せなのかもしれないな。」

秋「姉者・・・ふふっ、姉者の言う通りだな。」

遼「惇ちゃんも妙ちゃんも前向きやな。けど・・・ホンマやな。」

今はこの目に焼き付けよう。上の領域の戦いを。

雪蓮 side

呂布の軍を袁術ちゃんの軍に引き込むことに成功し、今は袁術ちゃん
の救援に来ただけれど・・・。

雪「言葉が出ないわね、これは。」

明「すごいです……。」

祭「相変わらず驚かせるのう。」

思「……。」

祭「思春よ、どうした？」

思「いえ、あれに勝とうとしていたと思うと……。」

祭「まあ気持ちは分からんでもないが……。」

冥「どうしたの雪蓮？いつものように熱くならないのか？」

雪「勿論熱くなっているわよ。」

半分ね。でももう半分の私はどんどん冷静になっていく。悔しいけど今の私じゃ割って入ることは出来ないわね。

雪「祭。この一騎討ち、どう見る？」

祭「うむ、今は均衡が保たれておる。しかし、体力では呂布が先に尽きるであらう。」

雪「なら昴の勝ち？」

祭「一概にそうとも言えませぬ。昴は自身の氣をもって身体能力を強化し、戦っておる。」

昴の戦いぶりを見る限り、体力よりも先に氣の方が先に尽きるであ

るっ。」

雪「つまりは……。」

祭「この一騎討ち。どちらが勝つかは皆目検討がつきませぬ。」

雪「そう……。でも私は何となく分かるかな。」

冥「ほう、それは是非聞きたいな。」

雪「言わなくても分かるでしょ？とりあえず、じっくり見学しましよっ。」

私の言葉に皆が昴達の一騎討ちに再び目を移す。

ふふっ、やっぱり昴は最高ね。これは意地でもものにしないとね
私も昴の戦いに集中した。

ガギン！ガン！

全力でぶつかり初めてから軽く十合を超えた。

昴「くっ！氣で身体能力を強化して、縮地で目一杯動いてるのに俺の速さについてきやがる！」

恋「（速い、昴の動きについていくので精一杯！）」

ガギン！ドン！ギン！

昴「（このままじゃ俺の氣が尽きちまうな。）」

恋「（恋が先に疲れきっちゃう。）」

尚も斬り合い続く。

昴「（でも。）」

恋「（でも。）」

昴「（今すごい楽しいな！）」

恋「（今すごく楽しい！）」

ガギン！

2人の間に距離ができる。

昴「ははっ！なかなかやるじゃねえか！」

恋「昂、すごい！」

2人の胸の中に今渦巻いているのは純粹な喜びだった。

昂「まだまだ行くぞ、恋！」

恋「うん！」

ドオン！

2人は地を蹴り、ぶつかり、再び壮絶な斬り合いが始まった。

星side

星「これは・・・。」

愛「なんといい戦いだ・・・。」

鈴「すごいのだ！」

主に言われ、愛紗と鈴々のもとに向かい、今主と呂布の一騎討ちを見届けている。序盤は主が若干押ししていた。2人を取り巻く空気が変わると、壮絶な斬り合いが始まった。

愛「我らは3人がかりで呂布の本気すら引き出せなかったのか……」

鈴「……悔しいのだ。」

星「……。」

私も、そして愛紗と鈴々もまだまだだということだな。

星「しかし呂布のあの強さ、

我ら3人を手玉にするあの強さ。正に最強の武だな。」

愛「何をのんきなことを！星、貴様はご主人様が心配ではないのか！？」

星「案ずるな。呂布の武が如何に最強足り得ようと、問題ない。」

鈴「どういふことなのだ？」

星「呂布が最強の武の持ち主なら我が主の武は最高の武。呂布が如何に最強でも最高には敵わぬ。」

愛「星……。」

星「主を信じる。我らの主を。」

主よ、しかとこの目で見届けさせていただきます。そしていつか主のいる場所へ……。

昴side

昴「はあああ！」

ガギン！ゴギン！

恋「ふっ！」

ギン！ガギン！

依然として斬り合いは続き、均衡は保たれている。

ギン！

俺は距離を取った。

昴「ふう、楽しいな。」

恋「ハア、ハア、うん、楽しい。」

昴「けど・・・それもそろそろ終わらせないと。」

恋「っ！？、どうして・・・。」

昴「戦の勝敗が完全に連合に傾いてる。このまま続けても多分、邪魔が入る。」

袁紹と袁術辺りは空気読めなさそうだし。

昴「それに、恋もそろそろ限界だろ？」

恋「ハア、ハア、ん。」

恋は肩で息をしている。

昴「かくいう俺も気がそろそろ尽きそうだしな。」

恋「残念・・・。」

昴「次で終わらせる。俺の取って置きの技を披露する。恋、付き合い合ってくれないか？」

恋「・・・うん。分かった。」

昴「よし。それじゃ……。」

俺は村雨を鞘に戻した。

恋「？」

昴「こういう構えの技なんだ。」

俺は半身の構えをとる。

恋「ふっ！」

恋は後ろ飛び、体の重心を前に置き、

恋「行く！」

地を全力で蹴り、俺に飛び込む。大きく助走をとり、突進の力と全身の力を俺にぶつけるのだらう。恋がどんどん俺に迫る。

昴「北辰流抜刀術……。」

昴「双・龍！」

村雨を一気に引き抜き、鞘の滑りで加速した一撃を恋にぶつける。

ギーン！ギギギギッ！

昴「ぐぐぐぐっ！」

恋「うううう！」

渾身の一撃がぶつかり合い、壮絶なつばぜり合いが行われる。

昴「ふっ！」

恋「っ！？」

昴「うおおおー！」

全身全霊の力を体から搾りだし、そして、村雨を振り切った。

ガキーン！

恋の戟が後ろに弾かれる。

愛「やったか！」

星「いや、違う！呂布は受けきれないと見て主の一撃を後ろに逃がしたんだ！」

愛「まずい！ご主人様は隙だらけだ！」

鈴「お兄ちゃん！？」

恋は体勢を立て直した。

恋「恋の勝ち『いや、負けだ。』っ！？」

昴「はあああ！」

左手の鞘を引き抜き、逆手のまま恋の脇腹に……。

ドオン！

恋「がはっ！」

ぶちこんだ。

恋は弾かれ、そして地に伏した。

昴「北辰流抜刀術、双龍。たとえば、一匹の龍を防いでももう一匹の龍が噛みつく。これが双龍だ。ま、もつとも、恋程の相手じゃ、初見殺しだろうがな。……俺の勝ちだ、恋。」

「oooooooooooo!!」「」「」

その瞬間戦場を激しい歓声が鳴り響いた。気付かなかったが、いつの間にか多くの将兵が観戦していたようだ。

恋「ぐっ！」

恋は戟を杖代わりに立ち上がり、俺に歩み寄る。もう戦う力は残されていないだろう。

恋「負け……ちゃった。でも……楽しかった。」

昴「また戦ろうな、恋。」

恋は満面の笑みを作り、そして・・・

ドサツ！

倒れた。

それと同時に。

？「恋殿ー！」

昴「ん？」

呂布隊の残党がなだれ込んだ。俺達の周辺は再び混乱し始めた。

ね「恋殿！しつかりするのです！」

昴「心配するな。命に別状はない。」

ね「お前は！」

昴「久しぶりだな・・・キキ。」

ね「何処の魔女ですか！？」

何で知ってんだよ。

昴「冗談だよ、ねね。」

ね「ぐぐっ！やはりお前なのですか、御剣昴！」

変わらないな。ねねは。

ね「呂布殿を担ぐのです。」

「はっ！」

兵の1人が恋を背負う。

ね「見逃すのですか？」

昴「あいにく、追撃をかける余裕はない。」

ね「ふん！・・・皆の者、混乱している内に撤退するのです！」

「了解！」

呂布の隊が撤退を始める。ねねが俺に振り返り、

ね「今日は恋殿の負けなのです。でも次は必ず恋殿が勝つのです！
首を洗って待っているのです！」

昴「ああ、分かったよ。またな、ねね、恋。」

ね「ふん！」

ねねとその他の呂布の隊の兵は戦場を離脱した。

昴「さてと・・・。」

愛紗達が心配だな。俺は、3人のいるところへと向かった。

・
・
・
・
・
・
・

愛「ご主人様！」

鈴「お兄ちゃん！」

星「主よ。」

昴「よう、ただいま。」

愛「ご無事で何よりです！」

鈴「お兄ちゃん、すごいのだ！」

星「やはり私の目に狂いはなかった。」

3人が俺へと歩み寄った。良く見ると3人供傷だらけだった。

昴「皆じつとしている。」

俺は内功で1人ずつ傷を癒した。

愛「傷が!？」

鈴「気持ちいいのだ！」

星「何度見ても驚きますな。」

よし、だいたいの傷は塞がったな。

昴「これでよし！……けど今ので完全に氣を使い果たしたから・
」

愛「？」

鈴「？」

星「主？」

昴「この後のことは桃香と朱里と雛里を交えて決めてくれ。それじ
ゃ、後は……」

ドシーン！

昴「頼む。」

愛「ご、ご主人様ー！？」

鈴「にやにやー！お兄ちゃん！？」

星「主ー！」

ああ、力が抜ける……。けど久しぶりに

楽しかったな。

俺は意識を手離した。

虎牢関の戦い。そして呂布との戦いが終結した。

続く

第35話 激突、最高対最強（後書き）

何かたださえ強い恋が更に強くなってしまいました。いいのかな・
ま、ご都合主義のタグ付けてるしいいか（＾Ｏ＾）

感想、アドバイスお待ちしております。

それではまた！

第36話 洛陽潜入、董卓の心（前書き）

はあ。昨日中に投稿するつもりが出来なかった。3日に1話の投稿目指してたんだけどな。

それではどうぞ！

第36話 洛陽潜入、董卓の心

昴「ん。。。」

目が覚めると天幕の中だった。

昴「。。。ああ、そっぴや氣を使い果たして倒れたんだっけな・・・」

徐々に頭が覚醒し、現状を把握してきた。

昴「さてと。。。」

詳しい状況を聞くため、起き上がろうとすると、

フアサ・・・。

天幕の入り口が開いた。

桃「ご主人様？」

昴「・・・おはよう、桃香。」

桃「ご主人様ー！」

桃香が俺に抱きついた。

昴「と、桃香？」

桃「良かった・良かったよお・・・。」

昴「・・・心配かけたな。」

桃香が俺に胸で涙を流している。桃香の頭を撫でていると、

愛「ご主人様！」

鈴「お兄ちゃん！」

朱「ご主人様！」

雛「ご主人様〜！」

星「主。」

ぞくぞく皆が天幕にやってきた。

昴「皆も心配かけたな。」

愛「申し訳ございません。我らが不甲斐ないばかりに・・・。」

昴「そう言っな。皆良くやってくれてるよ。」

鈴「鈴々、もっと強くなるのだ！」

星「私もいつか主に肩を並べるまで精進いたします。」

昴「期待してるぜ・・・ところで、俺はどのくらい眠ってた？」

朱「今でちょうど2日程です。」

昴「2日か・・・」

ずいぶん眠りこけたな。氣の使い手の唯一の弱点。氣を使い果たすと体が極度の疲労困憊状態になって、長い時間眠りについてしまう。こればかりはどうにもならない。恋との一騎討ち。どんどん強くなる恋との戦いが楽しくい真っ向勝負で、それも全力で戦った。言うなれば蛇口の水を全開にして氣を垂れ流しながら戦ったようなものだから当然尽きるのも速い。もつとも、手持ちの札をもつと早く切るか、相手の虚を付き、もつと駆け引きをしながら戦うかすればこつはならなかつたんだらうけど・・・そんな考え頭の片隅にもなかつたな。

昴「それと、今の状況を詳しく教えてくれ。」

朱「はい。虎牢関の戦は呂布さんと張遼さんの隊が関を飛び出し、袁術さんの軍に突撃した後、張遼さんの隊が曹操さんの軍に止められ、張遼さんとその隊は曹操さんに投降しました。呂布さんの隊は連合に囲まれながらも善戦していましたが、ご主人様に呂布さんを討たれたことにより士氣が完全に低下し、残りの手勢で包囲を一点突破し、戦場を離脱しました。虎牢関は完全に連合が制圧しました。制圧作業が終わり、洛陽に向けての軍議が先ほど行われたのですが・・・。」

昴「？・・・どうした？」

雛「洛陽への先陣は私達が切ることになってしまいました。」

昴「ああ、なるほど・・・大方、袁紹辺りに押し付けられたか。」

桃「うう、ごめんなさい。私が不甲斐ないばかりに・・・。」

昴「桃香のせいじゃないさ。多分俺が行っても同じだったろうよ。」
桃「私には代わりに兵糧とか武器を出してもらっただけで精一杯でした。」

昴「上出来上出来。後は進軍して状況みながら考えよう。」

桃「分かったよ。」

朱「御意です。」

昴「それじゃ、今まで通りに準備を始めようか。」

起き上がろうとすると、

愛「ご主人様はまだ休んでいてください。」

星「準備は我らがいたしますので。」

昴「もともと怪我はしてないし、丸2日寝てたからもう大丈夫だよ。」

愛「我々だけでも大丈夫ですのでご主人様は体を休めていてください。」

鈴「そーそー。後は鈴々達に任せるのだ！」

昴「・・・分かった。ならお言葉に甘えさせてもらっよう。」

昴「何処行くかな・・・」

連合って言っても味方ではあっても仲間ではないからな。あまり馴染みのない軍に行っても迷惑なだけだろう。

昴「とりあえず、雪蓮のところにも行くか・・・」

俺の策に乗ってもらった形だし。恋との一騎討ちの手柄をいただいた礼もしないとな。

昴「それにしても・・・」

「・・・(チラッ)」

「・・・(ボソボソ)」

さっきから会う奴会う奴が俺の方を見てるな。別段殺気とか向けられてるわけじゃないから・・・いいか。雪蓮の陣は・・・こっちか？

昴「ここだな。」

陣はほどなくして見つかった。

昴「その君、孫策殿に会いたいんだが。」

「孫策様は今忙し．．御剣昴様！」

昴「おっ？君は．．。」

「自分は荊州の賊の掃討の際、孫策と昴様の率いていた先陣の隊にいた者です。」

昴「なるほど、あの野戦のか。確か．．、俺達のすぐ後ろにいたよな？」

見覚えある顔だし。

「覚えていていただき、光栄です！」

昴「．．ところで、孫策は．．。」

「はっ！？長々と申し訳ありません！今掛け合ってみます！」

兵士は猛ダツシユで雪蓮のいるであろう場所に向かった。数分と経たないうちに帰ってきた。

「ぜえ．ぜえ、お、お会いに．なるそうです．．オエ。」

昴「わ、分かった。ゆっくり休んでくれ。」

急ぎすぎだろ。

俺は雪蓮のもとに向かった。

昴「よう、雪蓮。」

雪「あ、昴ー！」

雪蓮が俺に駆け寄り、俺の腕を抱いた。

雪「倒れたって聞いたけど大丈夫？それと何か用事があるみたいなのも聞いたけど。」

昴「少し疲れて倒れただけだ。用はさっきの戦でのことだ・・・それと雪蓮・・・その、当たってるんだが・・・。」

雪「当たってるんだけど？」

昴「……。」

確信犯かい！

昴「他の者目もあるし……その、離れような？」

雪「いいじゃない いずれは夫婦になるんだから……いたた！ 冥琳、痛い痛い！」

冥「雪蓮、ここにいるのは孫家の者だけではないのだぞ？ 少しは周りの目を気にしなさい。」

雪「ぶうー。いいじゃない……。冥琳のケチ。」

冥「まったく……それで、昴はどのような用向きでここに来たんだ？」

昴「何、雪蓮達が俺の策に乗ってくれたおかげで戦は早く終結したし、こっちは功もたてられた。だからその礼にと思つてな。」

冥「それについてはお互い様だ。こちらもし水関に続き、虎牢関も制圧できた。何より、袁術に被害を与えることが出来たのが大きい。こちらは当初の目的をほとんど果たせた。こちらが礼を言いたいぐらいだ。」

昴「そう言ってもらえると助かるよ。」

冥「……ところで、呂布との一騎討ちの後倒れたと聞いたが、また無茶をしたのか？」

昴「違う違う。あの時と違って今回は氣を使いきって眠ってただけだ。」

冥「そうか・・・軍師としては後々の脅威にはいなくなってほしいが、私個人は、無事でいてくれてとても嬉しい。」

昴「冥琳・・・」

冥「あまり皆を悲しませるなよ。」

昴「・・・ああ、分かってるよ。」

俺はどこでも心配かけてはっかだな。

雪「ぶうー、何か冥琳が昴といい雰囲気出してゝ！」

冥「おほん／＼・・・ところで、今連合内ではお前の話題で持ちきりだぞ？」

昴「俺の？」

？「うむ、天下の飛將軍の呂布と壮絶な死闘を繰り広げ、勝利したのだからな。」

昴「祭さん。」

明「昴様！凄かったです！」

昴「明命も。」

祭「お主には毎度驚かされる。相変わらず底がしれんのう?」

昴「ふふっ、ありがとうございます。」

祭「お主の評判はさらに天下に轟くであろう。が、それゆえ、警戒もされるであろう。」

昴「・・・でしょうね。」

祭「出る杭は打たれる。用心するのじゃぞ?」

昴「りょーかい。」

祭「まあ、お主のことじゃから心配は無用か。」

昴「忠告痛み入ります。そういや思春や他の皆は?」

雪「思春は偵察に出てるわ。穂は部隊の編成よ。蓮華と楓と亜莎はお使いで、シャオはお留守番よ。」

昴「なるほど。」

冥「楓は最後まで連合に参加すると聞かなかったがな。」

昴「そうなのか?」

祭「お主に会いたくて最後まで参加すると聞かなかつたのじゃが、思春と明命が兵の指揮及び偵察任務で欠かせんから必然と楓が蓮華様の護衛に付いたわけじゃ。」

昴「よく楓を納得させましたね。どうやったんですか？」

祭「拳骨じゃ。」

気の毒に。

昴「さてと、それじゃそろそろ戻ります。皆も心配しますし。雪蓮、冥琳、祭さん、明命、またな。思春や穩にもよろしく伝えてくれ。」

雪「分かったわ。またね、昴」

冥「ではな。」

祭「うむ、またな。」

明「昴様！お元気で！」

俺は皆に手を振り、孫家の陣を後にした。

昴「ん？」

自陣に向かって歩いてみると、自陣の手前で見知った顔見かけた。

昴「よう。どうしたんだ？春蘭、秋蘭、それに桂花。」

春「あー！貴様！勝負しろ！」

春蘭が七星餓狼を抜く。

昴「おいおい。」

秋「姉者、違うだろ。」

春「はっ！？そうだった。」

春蘭は七星餓狼を戻した。

何なんだ？

秋「お前が倒れたと聞いてな。今は一応は味方だから様子を見に来たわけだ。」

今は、ね。

昴「このとおり、もう大丈夫だ。」

桂「大丈夫、なのよね？」

おずおずと桂花が尋ねる。

昴「見ての通りだよ。」

桂「そう！良かった・・・！？、ふん！そのまま死ねば良かったのに！」

心配したり喜んだり怒ったり忙しい奴だな。

昴「相変わらずツン娘だな。」

桂「誰がツン娘よ！」

いやお前だ。言わないけどね。

秋「元気そうで安心したよ。では姉者、桂花、戻るぞ。」

春「うむ。昴！いつか必ず貴様を倒すからな！」

昴「返り討ちにしてやるよ。」

春「ふん！」

昴「桂花もまたな。」

桂花の頭を撫でた。

桂「ん／＼・・・もう・・・。」

秋「ではまたな。」

昴「ああ。」

春蘭と秋蘭と桂花は自陣に帰っていった。

昴「さてと、今度こそ戻るか。」

俺はさっきまで休んでいた天幕に戻った。

天幕に戻り、作業は皆に任せ、もう一休み、しようと思ったんだけど……。

昴「……。」

愛「ご主人様！あれほど休んでいて下さいとおっしゃったではないですか！」

桃「そうだよ！勝手に出歩いちゃ駄目でしょ！」

正座で説教を受けている。

昴「いや、でもジツとしてるのも体に悪いし……。」

桃「でもじゃないの!」

愛「でもではありません!」

昴「……すみません。」

朱「あの……桃香様、愛紗さんもそのくらいで……。」

桃・愛「(ギロリ!)」

朱「はう!(ブルブル)」

朱里はすくみあがった。

星「桃香様も愛紗もその辺にしたらどうだ?主も反省しているようだし、このままではかえって疲れがたまってしまっぞ?」

愛「うむ……確かに……。」

桃「そうだね……。」

星「主も出立は明日ですので今日はもうお休みくだされ。」

昴「ああ。分かってるよ。」

星「それでは我らはお暇するとしよじ。」

愛「そうだな。」

桃「分かったよ。」

朱「それでは失礼します。」

桃香達は天幕を後にした。

昴「ふう。」

災難だったな。とりあえず休む前に武器の手入れをしとくか。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

昴「よし、こんなところか。」

手入れをも終わったし、今度こそ休む……。

ファサ。

昴「ん？」

天幕入り口を見ると桃香と愛紗が入ってきた。

愛「ご主人様、まだお休みにいられていなかったのですか？」

昴「休む前に武器の手入れだけしておきたかったんでな。2人はどうしたんだ？」

桃「私達も作業が終わったから、ご主人様の監視に来たんだよ。」

昴「監視？」

桃「ご主人様、目を放したらすぐにどっか行っちゃいそうだから……」

愛「本日は私達がお側にいささせていただきます。」

え〜。

桃「それじゃ、失礼します。」

愛「失礼いたします。」

桃香と愛紗が俺の両サイドを固めた。

昴「……ええつと？」

愛「ご主人様はお気になさらずお休み下さい。」

桃「ほらほら、ご主人様は気にしないで休んで。」

昴「いや、なあ。。。」

休めと言われても、形上、俺の両腕を桃香と愛紗が枕代わりにして寝てる形なんだが。。。

桃「お休み、ご主人様」

愛「お休みなさいませ、ご主人様。」

昴「はあ。。。」

当然の如くなかなか眠れなかった。だって可愛くてスタイル良くていいにおいがする2人が俺の腕を枕にして寝てるんだぜ！？生殺しだよ。

あ、ちなみに何にもなかったからな。だってこれノクターンじゃないし。

翌日、洛陽に向けて連合軍は進軍を始めた。

昴「あゝ。」

ただいま寝不足気味です。

星「主よ如何なされた？」

昴「昨日は呂布との戦い以上の戦いがあったな。」

辛くも勝利したが、代償はこの寝不足だ。

星「おや？主がゆっくり休めるように桃香様と愛紗を主の元に行かせたのですか。」

昴「・・・お前の仕業か。」

星「ははっ、極上の女を傍らに眠るなど王たる特権ですよ。」

昴「お陰でこっちは寝不足だな。」

こんな他愛もない会話をしながら進軍をしている。

・
・
・
・
・
・
・

虎牢関を出発してから2日ほどたった。

桃「ねえご主人様。何だかちょっとおかしいような気がするんだけど。」

昴「確かにな。」

桃「どうしてもつすぐ董卓さんの本拠地なのに部隊の影さえも見えないのかな？」

昴「うーん・・・もしかしたら董卓はもう戦う気はないのかもしれないな。」

愛「どういうことですか？董卓は投降を考えているということですか？」

朱「シ水関と虎牢関を失ったとはいえ洛陽にいる董卓さんの兵力は連合軍とあまり変わりません。まだ投降を考えるのは時期尚早だと思います。」

愛「斥候は放っているのか？」

雛「はい。まだ帰ってきていませんけど。」

鈴「何にせよ今は前に進むしか無いのだ。」

昴「鈴々の言う通りだ。警戒を怠らないように洛陽に向かおう。」

桃「うん。雛里ちゃん。斥候の人達が帰ってきたらすぐに報告してね。」

雛「御意です。」

そのまま進軍をし、そして、

昴「結局何事もなく着いたな。」

桃「どういづことなのかな？やっぱり何かの計略？」

昴「いや、董卓はまだ戦う気にいるのなら虎牢関からここまで何も動きもないのは妙だ。・・・見たところ、城門近くに兵の姿も気配もない。やはり董卓はもう戦う気はないんだろうな。」

愛「董卓は一体何を考えているのでしょうか？」

昴「投降、逃亡。もしくは・・・。」

自害。これはかんがえたくないがな。

昴「何にせよ、急いだほうが良さそうだ。少数で洛陽に潜入して董卓を探そう。」

愛「了解です。」

昴「兵数は可能な限り少数で頼む。あまり大勢で乗り込むと民に不安を与えてしまうからな。朱里、雛里は兵を選抜してくれ。」

朱・雛「御意です！」

昴「桃香と星は待機しておいてくれ。愛紗と鈴々は洛陽に潜入だ。俺も洛陽に潜入する。」

愛「ご主人様！危険ですのでご主人様も待機しておいて下さい。」

昴「駄目だ。董卓を発見できても董卓が保護に応じるとは限らない。説得なら桃香が適任だが、愛紗の言う通り危険があるかもしれない。俺なら万が一何かあってもどうにでもなる。」

愛「しかし……。」

昴「頼む。」

愛「……分かりました。ですが、決して無茶はなさないでくださいね。」

昴「分かってるよ。それじゃ、皆準備を始めてくれ。」

皆「了解です！」

洛陽への潜入は大した苦勞もなく成功した。

昴「潜入は成功だな。……愛紗の隊は街の東に、鈴々の隊は街の西に、残りは俺についてきてくれ。一刻後、ここに集合な。それじゃ、行くぞ。」

愛「了解です。」

鈴「合点なのだ！」

・
・
・
・
・
・

昴「ふむ。」

街に変わった様子はないな。強いて言うなら人通りが少ないか。

昴「・・・ん？」

正面に何やら少数の兵を発見した。何かを守っているな。あれは・・・
・ 誰だ？董卓じゃないな。

「御遣い様、あれは？」

昴「何か気になるな。よし、君は関羽に、君は張飛のところはこの事を報告してきてくれ。残りは桃香に報告な。」

「了解いたしました。御遣い様は一人で大丈夫ですか？」

昴「俺の腕じゃ不安か？」

「滅相もありません！それではお気をつけて。」

昴「そつちもな。」

兵達が指示通り動いていく。

昴「俺は奴等のところに行くか。」

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

昴「待て。あんた達、何者だ？」

「何だお前は？」

昴「俺は・・・、」

正直に話か？まあいいか。

昴「俺は連合軍の者だ。」

「連合軍の？ではお前は私を助けにきたのだな？」

「どういうことだ？見たところ兵は董卓軍の兵のようだが、救うとは一体。」

昴「あんたは？」

「私は」

こいつはどつやら十常侍生き残りで、この戦のどさくさに紛れてお抱えの兵に脱出を計らせたらしい。

昴「・・・それで？董卓は何処だ？」

「案内する。ついてこい。おい、案内しろ。」

「はっ！」

偉そうに命令して（実際偉いか）兵達が動きだす。俺はその後に続く。

賈馱side

賈「月、早く！」

董「うん、ごめん・・・。」

連合軍がすぐ側まで来ている。早く逃げないと・・・。

賈「連合を侮っていたわ。こうなったのはボクの問題。涼州に戻って再起を図る。それしかないわ。」

董「う、うん。」

賈「とにかく今は脱出を・・・。」

「いたぞー！」

賈「っ！？、見つかった！」

ボク達の周りを兵が囲む。その後ろには黒い外套を羽織った男？女？とあと1人は・・・。

賈「！？、お前は！」

こいつは十常侍の生き残り。月を八メた張本人！

「こいつが洛陽を牛耳り、圧政を強いている董卓だ。」

賈「貴様！」

あいつはニヤニヤと気味悪い笑みを浮かべる。くそ、こいつのせいで月が！

？「ふーん。圧政をねえ。」

外套の奴が前に出てきた。

「こいつらが董卓と賈馱だ！早く捕まえるのだ！なんなら殺しても構わん！私を救えば褒美は思いのままだぞ？」

？「なるほど。」

すると外套の奴が長剣を抜いた。

賈「くっ！」

ボクは月の前に立ち月を庇う。

賈「月はボクが守る！」

董「詠ちゃん！」

外套の奴は長剣を構え、そして、

グシユ！

突き刺した。

十常侍の男に・・・。

昴side

グシュ！

「がはっ！き、きさ・ま、わ、たしを救って・・・。」

昴「救ってやるよ。罪の連鎖から、な。」

「そんな・・・。」

昴「真実を誰も知らないとも思ったか？この争乱を引き起こした

張本人さん？」

「ぐっ。。。」

昴「もう十分だろ？さっさと表舞台から退場しろ。」

「ぐっ・・・ふっ！」

十常侍の生き残りは絶命した。
辺りを見渡す。

「お、お前。」

「ひい！」

後は十常侍お抱えの兵達だな。

昴「ふっ！」

グシュ！ザシュ！

「がはっ！」

「ぎゃは！」

残りの兵を斬りすてる。こいつらは真実を知った上で十常侍に付き従ったんだ。弁解の余地はないな。それに他の諸候に捕まって余計なこと喋られる方が面倒だ。俺は全て斬りすて、血振りをして村雨を鞘に納めた。そして、董卓と賈馱に向き直った。

賈「!？」

賈馭が董卓を背に庇い、警戒する。

昴「董卓。それに賈馭だね？」

賈「……。」

董「……。」

昴「俺は劉備軍の御剣昴だ。単刀直入に言う。俺、いや俺達劉備軍は君達を保護しに来た。」

賈「何ですって!？」

董「!？」

昴「だから俺についてきてほしい。」

そう2人に告げた。

賈「……。」

董「……。」

昴「信じられないか？」賈「当たり前でしょ！いきなりそんなこと言われて信じられるわけないでしょ！第一そんなことしてあなた達にどんな得があるって言うのよ!？」

もっともな質問だな。

昴「俺は全ての真実を知っている。都の実状、連合結成の経緯もな。」

賈「!？」

昴「それに俺達は損得勘定だけで戦っているわけでも戦ってきたわけでもない。真実を知り、董卓を見捨てることはできない。だからここに来た。俺は君達を助きたい。だから俺達のところに来てほしい。」

賈「本当・・・なんででしょうね？」

昴「ああ。信じてほしい。」

賈「・・・。」

場が沈黙が支配される。賈馱は俺という人間を推し測っているのだろ。すると先ほどから黙っていた董卓が口を開いた。

董「・・・御剣昴さん。」

昴「何だ？」

董「詠ちゃんを助けてくれませんか？」

賈「月？」

賈馱を、か。

昴「君はどつするんだ？」

董「……。」

昴「董卓はここにいる、と名乗り出るつもりか？」

董「……はい。」

賈「月！？どうして!？」

董「私のせいでこの戦いは起きました。人もたくさん死んで、洛陽の民達にも不安を与え、迷惑をかけました。私はその責任を取りません。だから私は行けません。」

賈「月は悪くないわ！悪いのは十常侍と連合よ！月は何も悪くないわ！」董「ううん、詠ちゃん。私が至らなかつたからこうなったの。悪いのは私……。」

賈「月……。」

董卓は死ぬことで全ての責任を果たすつもりなのだろう。でも……。

昴「そんなことしてなんになる……。」

董「えっ？」

昴「連合に名乗り出れば間違いないなく殺される。君はそれを望んでいるんだろうが、それをしてなんになる？君が死ねば全て元に戻るのか？死んだ人間が生き返るのか？何も変わらない。何も変わら

ないんだよ。ただ君が死ぬだけだ。」

董「……。」

昴「そして君を想う1番の友が悲しむことになる。」

董「……でも、私は……。」

俺は苦悶する董卓を抱きしめた。

董「っ!?!」

賈「あんた!何を!?!」

昴「辛いよな。」

董「えっ?」

昴「自分のせいで誰かが死ぬのは。誰かを傷付けるのは。でも君は誰のせいにするわけでもなく、全て抱え込み、賈馱にも弱音を吐かず1人で苦しんできたんだろう?でももういいんだ。1人で苦しまなくて、1人で抱え込まなくて。良く頑張ったな。辛かったよな?」

俺は諭すように董卓に告げた。

董「つら……かった。皆が、私のせいで……私のせいで苦しんで、死んでいった……。」

董卓は涙を流し、心の慟哭を俺にぶつけた。

董「でも私・・には、私にはこうするしか、こう償うしか・・ないんです。私のせいで死んでいった人達にできることは・。」

昂「それは違うよ。君がもし償いたいと言っなら絶対に死んじゃ駄目だ。死ぬというのは責任を取ることではなく、ただの逃げだ。逃げることなんだよ。だから董卓。君は生きるべきだ。」

董「いき・・る？」

昂「そうだ。生きるんだ。そして償いの道を探そう。」

董「私は、赦されるのでしょうか？」

昂「分からない。でも死んで逃げるより生きて、償いの道を探すことが赦しの道に繋がるんだと俺は思う。」

董「赦しの・・道・・。」

昂「なあ董卓。君のその背負ってるものを俺にも背負わせてくれな
いか？」

董「えっ？」

昂「君のその罪。俺も共に背負う。一緒に償いの道、赦しの道を探さないか？」

董「でも・・。」

昂「1人で苦しむなって言っただろ？もう君は1人じゃないんだ。」

俺がいる。俺の仲間もいる。もちろん賈馱もな。」

董「う・・・うう・・・。」

昴「いいよ、泣いて。ここには俺と賈馱しかいない。ずっと泣くことも出来なかったんだろ？今は思い切り泣いていいよ。」

董「うう・・・うわぁ・・・！」

董卓は泣いた。ずっと流すことが出来なかった涙を全て出し尽くすかのようにな・・・。

董「あ、ありがとうございます／＼」

昴「気にするな。」

涙を流し尽くした董卓の目は真っ赤だった。

董「へうへう、お恥ずかしいです／＼」

昴「恥ずかしがることはないさ。」

賈「ちよつと。」

賈「私が俺を引っ張り、董卓から少し距離を取った。」

賈「・・・礼を言っわ。ボクじゃ月を説得できなかったわ。」

昴「礼には及ばない。ただ俺がそうしたかっただけだ。」

賈「それでも、ありがとう。私はあなたを信用するわ。」

昴「そう言ってもらえると助かる。」

董「詠ちゃん？」

賈「月！？何でもないわ。ボク達はあなたの庇護下に入るわ。月もいいでしょ？」

董「うん。御剣昴さん。よろしく願います。」

ポン。

俺は両の手を合わせ、

昴「話はまとまったから早速行動に移そう。とりあえずその格好じや目立つからこれに着替えてくれ。」

俺はメイド服を取り出した。

賈「こゝ、これは!?!」

董「へう／＼／」

昴「ちよつどそこに物陰があるからそこで着替えてくれ。」

賈「ちよつと!何でこの服をボク達が!その前にどこからこの服出したのよ!?!」

昴「気にしない、気にしない さつ、早く早く。」

賈「・・・あんたやっぱり信用ならないわ。」

数分後。

昴「うん。良く似合つな。」

賈「何よこのヒラヒラの服は／＼」

昴「俺の特注。」

賈「この！#」

董「でもこの服とっても可愛い。」

昴「気に入ってくれて何よりだ。」

賈「ボクは気に入ってない！」

昴「まあまあ……この後だが、とりあえずもう名前は名乗れないな。偽名を名乗るか……。」

賈「ボク達はあなたに真名を預ける。そうすれば偽名を名乗ることはないでしょ？」

昴「構わないが、いいのか？」

賈「月のためだもの。構わないわ。月、良い？」

董「うん。大丈夫だよ。」

昴「分かった。なら君達の真名を預かるよ。」

月「董卓、字は仲穎。真名は月ゆえです。」

詠「ボクは賈馯、字は文和。真名は詠。ボクのごとはどうでも良いから、とにかく月のことだけはちゃんと守ってあげてよ。」

昴「心配しなくても両方守るよ。俺は姓は御剣、名は昴。字と真名はないから俺のことは昴でいい。」

自己紹介が終わったその時、

愛「ご主人様！」

鈴「お兄ちゃん！」

昴「おっ？来たか。心配ない皆仲間だ。」

愛「ご主人様、1人で行動なさらないでください。ところでこの2人は？後この倒れている者は……。」

昴「この娘達は侍女で、この倒れているのが董卓だ。追い詰められ、錯乱してこの娘達を殺そうとしたからやむを得ず殺してしまったがな。」

愛「……そういうことですか。分かりました。では連合にそのように報告いたします。」

昴「頼む。」

さてと、これから……。

朱・雛「ご主人様、大変です。」

朱里と雛里、そして桃香と星がやってきた。

昴「どうした？」

桃「あのね、私達が入入した後、袁紹さん袁術さんが入場したんだけど、2人の軍が暴走始めて・・・」

昴「馬鹿か奴等は・・・とりあえず兵と合流しよう。そうしなきゃ何も出来ない。」

愛「御意。ではすぐに動きましょう。」

「や、やめてください!」

「良いから寄越せ!俺達を誰だと思ってるんだ!」

昴「ちっ!」

あれじゃもはや賊徒変わらないな。俺は袁紹の兵に近づき、襟首を掴んで投げ飛ばした。

「何しやがる！」

昴「こつちの台詞だ。民に乱暴、狼藉働いてんじゃねえ。」

「貴様〜。」

袁紹の兵が剣に手をかける。

「おい、こいつ、虎牢関で呂布を倒した奴だぞ。」

「けつ、関係ねえな。ビビんなよ。弱小勢力のこいつが俺達に逆らえるわけないんだ。」

はあ、総大将が馬鹿なら兵も同じだな。

「何だよ邪魔すんなよ。俺達に逆らうのか？死にたくなきゃ・・・。」

ブシヤ！

俺は村雨でこの馬鹿を斬った。死なない程度に。

「ぎゃああああ！」

「お、お前！自分が何をしたか分かって・・・。」

昴「何か言ったか？」

「ひい！」

軽く殺気をぶつけると袁紹の兵は腰を抜かした。すると、そこへ、

紹「私の兵に手をかけるなんて、あなた、覚悟は出来ているのでし
ようね？」

昂「黙れ。」

紹「!？」

昂「こいつは洛陽の民から略奪を行った。制止も聞かなかったから
やむを得ず斬った。何か問題あるのか？」

紹「大有りですわ！私の兵を斬るなど言語道断ですわ！」

昂「なら袁紹は略奪を容認するということだな？つまりあなたは洛
陽へは救うためではなく略奪しにきたと。ならば俺はあなたを逆賊
と判断し、この場で誅する。」

紹「何、ですって。。。」「

昂「当然だ。略奪を容認し、略奪を止めた俺を裁く言うならあなた
は立派な逆賊だ。このことは集まる諸候にも通達する。果たして、
逆賊の汚名を被るのを覚悟でどれだけの諸候があなたにつくかな？
あなたも名門袁家の名を汚したくないなら。醜い行為はしないよう
に徹底させるんだな。」

紹「ぐっつ・・・、顔良さん、文醜さん！今すぐこの兵を処刑なさい！
そして略奪暴行の一切を行わないように徹底させなさい！美羽さん
にも同様に伝えなさい！」

顔「は、はい！」

文「了解！」

話は分かるみたいだな。これで向こうが引かなかつたら面倒なことになったな。

昴「拙速なる判断に感謝するよ。さすが袁家だな。」

紹「当然ですわね。おーっほっほっ！」

乗せやすいな。言つや否や袁紹の面々は立ち去った。

星「主よ。」

昴「ん？」

星「お気持ちは分かりますがあのような行為は……。万が一目をつけられるようなことがあつたら……。」

昴「袁紹は見栄えや格好をとにかく気にするからああ脅しとけば大丈夫だよ。」

星「ならば良いのですが……。この後はどうしますか？」

昴「さつさと撤収……って行きたいが、袁家の面々に荒らされたことを放置するのはなあ。他の諸侯は袁家と同列に見られたくないから入城してこない。下手をすると今の俺達は袁家と同じに見られる可能性があるからどうにかしておこう。」

星「そうですね。」

昂「桃香はこの街の長老のところに行ってしてほしい事を可能な限り聞いてあげてくれ。」

桃「分かったよ。」

昂「愛紗は桃香と一緒に行ってあげてくれ。残りは糧食の余剰分を使って炊き出しをしよう。」

「「「了解!」「」」

指示を出してすぐに炊き出しの準備始め、洛陽の民に振る舞った。炊き出しの定番と言えば豚汁なので、豚汁を振る舞ってみたところ大好評だった。民に紛れて、鈴々や季衣や文醜もいたがな。炊き出し集まった民は結構な人数でかなりの人手不足になったけど、途中で孫家のメンバーが手伝いに来てくれたお陰で何とかなった。桃香の方も雨風凌げる寝床をどうにかしてほしいと言われたらしいがそこは天幕を使ってどうにかしたらしい。炊き出しも終了し、程なく

して連合も解散となった。当初の目的だった董卓の保護と同時に劉備軍の名を上げることにも成功し、俺達は意気揚々と平原へと帰投した。その帰り道・・・。

月side

私と詠ちゃんはその後ご主人様のお手伝いをし、その後荷台に乗って平原を目指しています。もう董卓は名乗れないけど、ご主人様の元で自分の出来ることを探そうと思います。詠ちゃんも一緒だから不安はありません。しばらく進んでいると、

昴「よっ、元気か2人共。」

月「あ、ご主人様。」

詠「あ、変態。」

昴「手厳しいな詠は。」

詠「当たり前でしょ！こんな服着せて！」

昴「しょうがないだろ？姿隠すための服あれしか持ってなかったんだから。」

詠「何でこの服持つてんのよ！#」

昴「気にしたら負けだ。」

詠「この変態！」

月「駄目だよ詠ちゃん、ご主人様にそんなこと言っちゃ。この服、可愛くて私は好きだよ？」

詠「月〜。」

月「ふふっ。」

詠「ちゃん楽しそう。」

詠「ところでアンタ何しに来たのよ？」

昴「ちよつと様子見にな。それと色々あつて疲れたから休みに来た・
・ちよつと失礼。」

月「へう！」

唐突にご主人様が私の膝に頭を乗せました。

詠「ちよつと！月の膝を枕にするんじゃない！#」

昴「おやすみ・・・ZZZ。」

すごい、もう眠り着いちゃった。

詠「今息の根を止めてやるわ。」

月「詠ちゃん、駄目だよ。」

詠「月〜。」

昴「すうー・・・すうー・・・。」

月「ふふっ。」

可愛い寝顔。それにとっても綺麗な顔と髪です。最初は女性かと思っただけと男性と聞いて驚きました。ご主人様は不思議です。傍にいととても暖かくて、心が安らんでいって、とてもほっとします。それに・・・。

へう〜／＼

ご主人様のお顔を覗くと胸と顔がとても熱くなります。こんな事初めてです。・・・でも、これが何なのか分かる。このモヤモヤの正体。私はきつとご主人様に

一目惚れしちゃたんだ。

とても優しくくて、こんな私を受け入れ、受け止めてくれたご主人様を。きつとご主人様の傍にいる女性は皆好きなんだと思う。桃香様や愛紗さん、鈴々ちゃんや星さんも。まだ気づいていないけど詠ちゃんも。皆ご主人様のことか……。今はこの気持ちを伝えることは出来ないけど、もし私の罪を償うことが出来たら。そしたらこの気持ちをご主人様に……。

反董卓連合の争乱は終結した。

続
く

第36話 洛陽潜入、董卓の心（後書き）

過去最長になりました。内容は薄いですけど。一部これはないかなあつて思う部分あつたけどそこはご都合主義ということ。この話をもって反董卓連合編は終了です。またしばらく拠点かな？

感想、アドバイス、お待ちしています。

それではまた！

第37話〈愛紗の慟哭、誓い〉（前書き）

投稿します。今回は間に合いました。

以前に前書きでセリフの前の名前を取ると言いましたが、いざ取ってみるとあれ？これ読んでる人誰が喋ってるかわかるかな？仮にここは大丈夫でもこの先キャラが増えたら大丈夫かな？っていう恐怖が生まれたため、結局名前をつけました。

それではどうぞ！

第37話 愛紗の慟哭、誓い

昴 side

反董卓連合の戦い終結から帰還して数日。軍を解散させ、戦後処理も終わり、政務に取りかかっていたある日……。

・
・
・
・
・

昴「愛紗の様子がおかしい？」

星「はい。連合から帰還した後、暇を見つけては鍛練に励んでいるのですが……些か過剰過ぎかと思ひまして。」

昴「そうなのか？」

星「はい。軍務や公務以外の時間のほとんどを自己の鍛練に注ぎ込んでおります。今までも積極的に鍛練を行ってりましたが、最近では寝食を忘れるほどです。このままでは軍務や公務に影響が出てくるのは時間の問題……いや、体を壊すのは時間の問題です。」

昴「・・・そうか。」

愛紗が・・・。

星「私がいくら問うても大丈夫と、心配ないの一点張りです。理由を話してはくれません。・・・理由はなんとなく察しは付くのですが、故に主に相談をと思ひまして・・・。」

昴「・・・分かった。俺から愛紗に尋ねてみよう。」

星「ありがとうございます。それではお任せいたします。」

昴「愛紗は大切な仲間だからな。任せろ。」

星「・・・では。自分は警邏に赴きます故、失礼いたします。」

昴「分かった、またな。」

星は警邏へと向かった。

昴「ふむ・・・。」

愛紗・・・。虎牢関での事を気にしてるのか？今愛紗は調練か。その後尋ねてみるか・・・。

しばらく政務をこなし、時間を見計らって調練場を訪ねたが、愛紗の姿はすでになかった。兵に聞いてみると、調練が終了後何処かへ行ったという。

昴「さてと・・・。」

愛紗は一体何処に行ったのか・・・。その日は結局愛紗を見つけることは出来なかった。

翌日、政務を早々に終わらせて、愛紗の元へ急いだ。しかし、

昴「一足違いか・・・。」

愛紗はすでに何処かへ行った後だった。今日こそは見つけようと決

めていたのでくまなく探した。すると城外の森で、

昴「見つけた。」

ブオン！ブン！ビュン！

愛「はっ！ふっ！やあっ！」

そこには青竜刀を振り回す愛紗の姿があった。立ち振舞い、太刀筋は見事なものだが・・・いつものキレがない。それに表情は何処か鬼気迫るものがあり、何処か焦りがあった。顔には疲労の色が見られる。俺は暫し愛紗を見守り、愛紗が一息ついたところを見計らい、声を掛けた。

愛「ふう・・・。」

昴「お疲れ様。」

愛「！？・・・ご主人様！？」

愛紗は夢中だったためか、声を掛けるまで俺の存在に気付かなかつたようだ。

昴「ほれ。」

俺は持っていた竹の水筒と湿らせた布を渡した。

愛「あ、ありがとうございます。」

愛紗はそれを受け取り、喉を潤し、汗を拭った。

昴「ずいぶんと熱心に鍛練に励んでいるようだな。」

愛「武人として当然のことです。」

昴「そうか……。」

思いきって聞くか……。

昴「星から聞いた。」

愛「!?!?」

昴「最近過剰に鍛練をしているらしいな。」

愛「そのようなことは……。」

昴「あるよ。疲労のせいでキレがない。それに目の下に隈も出来る。俺から見ても過剰過ぎだと思っぞ。」

愛「ご心配には及びません。私は丈夫ですのでこの程度ではどうにもなりません。」

昴「……はあ。どうしてそこまで鍛練に励むんだ？」

愛「武人が己を高めることに何か理由がいらいますか？」

昴「それはそうだが……。」

頑なだな。これじゃ説得出来そうにないな……仕方ない。とり

あえずは・・・。

昴「愛紗。愛紗には明日1日休養を命ずる。否は認めない。」

愛「なっ！？ご主人様！私は大丈夫ですのでそのような気遣いは・・・」

昴「否は認めないと言っただろ。ついでに言うとな愛紗を特別扱いるわけじゃないよ。連合から帰還して皆、ろくに休みを取ってない。だから休みを取らせる予定だったんだ。次の人は仕事の量や進行具合を見て決める。だから愛紗は気にせずゆっくり休め。」

愛「・・・畏まりました。」

昴「とりあえず今日はここまでにしておけ。がむしゃらに鍛練すればいいというものでもないんだから。」

愛「・・・御意・・・。」

愛紗は渋々ではあるが従ってくれた。

とりあえずこれでいい。1日休養を取らせればしばらくは大丈夫だろう。少しずつ事情を聞いて説得していこう。俺はそう考えた。

しかしその考えが甘かったことを明後日に思い知らされる。愛紗の心は俺の思っている以上に

思い詰めていた。

翌日は愛紗の休んだ分の軍務や政務をこなしていたため、愛紗の様子を見に行けなかった。後で星に聞いたら、仕事をしている様子はなく。部屋も出ていないとのこと、俺はきつちり休養を取ったのだと判断した。

そしてさらに翌日、それは起こった。

翌日、仕事を早々に終わらせて、愛紗と話をするために愛紗を探していた。しかし城の何処を探しても愛紗は見つからなかった。

昴「まさかな・・・」

俺は以前に愛紗が鍛練をしていた場所に向かった。

昴「着いたな。」

以前に愛紗が鍛練をしていた森だ。辺りを見渡しながら森が入っていく。すると、

ピチャ、ピチャ、ピチャ。

昴「雨か……。」

朝から雨雲が空を覆ってたからいつかは降ると思ったがつい降ってきたか……。

昴「本降りになる前に見つけよう。」

俺は奥へ進んでいった。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

もうそろそろ以前に愛紗がいた場所なのだが、愛紗の声や、青竜刀を振るう音は聞こえてこない。

ここにはいないのか……そんな考えも頭をよぎったが、とりあえず進んでいった。ようやく愛紗が鍛練していた場所に着いた。

昴「!？」

そこには倒れ、横たわっている愛紗の姿があった。

昴「愛紗！」

慌てて愛紗に駆け寄った。

昴「愛紗！しっかりしろ！」

愛「はあ・・・はあ・・・。」

愛紗は憔悴しきっている。症状はもしかしなくても過労だ。挙げ句に熱もある。

昴「待ってる！すぐに城まで連れていく！」

俺は愛紗を抱き上げ、城へと走った。

城へ戻ると早々に愛紗部屋へ運び、眠らせた。途中、ぐったりしている愛紗を見つけ、桃香や鈴々といった将が泣き出しそうになった。

桃「ご主人様、愛紗ちゃんは・・・。」

昴「・・・過労だ。おそらく、ほとんど睡眠も取っていなかったんだろつ。今は眠ってるよ。」

桃「大丈夫・・・だよね？」

昴「ゆっくり体を休めればすぐに回復する。心配ない。」

桃「そう、良かった・・・。」

桃香は胸を撫で下ろした。

昴「愛紗は俺が見とくから皆は仕事に戻ってくれ。」

桃「私も愛紗ちゃんの看病する！」

鈴「鈴々もなのだ！」

昴「大勢で押し掛けたら愛紗だってゆっくり休めないだろ？お見舞いは明日以降にしてくれ。」

鈴「うっ。」

朱「鈴々ちゃん、ご主人様の言う通りです。愛紗さんをゆっくり休ませてあげましょう。」

鈴「・・・わかったのだ。」

雛「それではご主人様、お願いします。」

桃「お願いね。ご主人様。」

昴「ああ。」

桃香達は愛紗の部屋を後にした。

星「主よ。」

昴「・・・すまない。星から忠告は受けていたのに。」

星「いえ、それは私も同じです。まさか愛紗がここまで思い詰めていたとは・・・私はてっきり反董卓連合の時の呂布に負けたことを気にしていたのかと思っていたのですが。もしかしたらそれだけではないのかもしれない。」

昴「・・・そうかもしれない。」

愛紗をこうまでさせる何かがあるのかもしれない。

星「それでは愛紗のことは改めて主にお任せ致します。」

昴「・・・わかった。」

星は愛紗の部屋を後にする。途中こちらを振り返り、

星「愛紗の心を救えるのは主だと私は思います。愛紗の事、頼みます。」

昴「ああ。任せろ。」

星「では。」

星は立ち去った。

昴「ふう。」

俺は愛紗の額の布を濡らし、額に戻した。

昴「愛紗。愛紗の一体何がそこまでさせるんだ・・・。」

愛紗は頑ななところがあつたが最近の愛紗は少し行き過ぎている。

昴「・・・そうだ。」

愛紗が寝てる内に何か作っておこう。お粥がいいな。

俺は厨房に向かった。

愛紗 side

愛「……ん。」

私は……そうか、私は眠ってしまっ……!? 何故私は自分の部屋に……。誰かが私をここまで運んだのか……。

愛「……うしてはいられない。」

時間が惜しい。少しでも多くの時間を鍛練に注ぎ込まなければ。私は青竜刀を持ち、部屋を出た。

昴 side

厨房でお粥を作り。愛紗の部屋に向かっている。

ザー!

外は雨が本格的に降っていた。
やがて部屋の前に着いた。しかし何か違和感を感じた。

昴「（俺部屋を出る前に扉は確か閉めた。誰か来ているのか？）」

部屋に入るとそこに愛紗の姿はなかった。

昴「!？」

愛紗。一体何処に……!？、壁に立て掛けていた青竜刀がない。
まさか!

昴「くそっ！」

俺はお粥を起き、外に飛び出した。

昴「・・・やはりか。」

森へ来ると雨に濡れることも気にせず、一心不乱に青竜刀を振るう
愛紗の姿があった。その姿は連合の折、華雄を討ち取った時の姿形
もないほど弱々しい姿だった。俺は愛紗に近づき、

ギーン！

愛「っ！？」

村雨で青竜刀を受け止めた。青竜刀は愛紗の手からこぼれ落ちた。

昴「もうやめるんだ。」

愛「ご、主人様。私は大丈夫。。。」

昴「大丈夫なわけないだろ！愛紗、お前は倒れたんだぞ！」

愛「大丈夫・夫です。私はもつと強く・強くならないと。」

昴「焦る必要はないだろ。ゆっくり確実に強くなれば『それでは駄目なんです！』、！？愛紗？」

愛「強くならないと駄目なんです。早くご主人様や呂布以上に強くならなければ。。。」

昴「どうしてそこまでして力を求める？」

愛「。。。。」

昴「俺には話せないことか？」

愛「・・・私には兄がいました。とても優しく、尊敬できる兄でした。ある時私のいた村は賊に襲われ、その時兄は私を庇って死にました。私をもつと強ければ兄を死なせることはなかった。私は自身の武を

磨き、鈴々と出会い、桃香様の理想に賛同し、戦ってきました。虎牢関での呂布との戦い、私は討ち取るどころか全力を引き出すことも出来ませんでした。それどころかご主人様のお手を煩わして・・・」

昴「・・・。」

愛「ご主人様が倒れた時、私は自分の非力さが許せなかった。私は大切な人を二度と失わせないために力を身につけたというのに、いざというとき、私は何の役に立てなかった。ご主人様が倒れた時、私は怖かった。ご主人様は二度と目を覚まさないんじゃないかって。大事な時にご主人様を守れないのでは私に何の価値もない。非力な私にご主人様の傍にいる資格なんて・・・。」

昴「そんな悲しいこと言うな！」

愛「っ!？」

俺は愛紗を抱き締めた。そうせずにはいられなかった。

昴「価値？資格？そんなもので愛紗を押し量ったりしない！」

愛「ご主人様・・・。」

昴「愛紗はお兄さんを守れなかったかもしれない。でも愛紗がいたから救われた人だっている。愛紗がいたから桃香は自分の理想を貫くことが出来た。愛紗がいたから勢力を築くことが出来た。愛紗は皆にとって必要で欠かせない人間なんだよ。」

愛「ご主人様・・・。でも私はこんなにも弱い・・・。」

昴「弱くないよ。自分の弱さを認められる人間がどうして弱いんだよ？愛紗は強いよ。愛紗はもっと強くなれるよ。」

愛「ご主人様……。私はここに居てもいいんですか？」

昴「いる。そんなに心配なら命じてやる。愛紗、ずっと俺の、俺達の傍にいろ。」

愛「ご主人様……！ありがとうございます……。ございます。私は……。」

愛紗はそこで意識を失った。

昴「愛紗！……っと、眠っただけか……。」

その顔はとても安らかだった。

昴「愛紗……。」

俺は愛紗を心を救えたかな……。考えるのは後だな。今は愛紗を部屋に寝かせないと。俺は城に戻った。

城に戻り、着替え等を月に任せて、自室に戻った。その道中・・・。

星「主。」

昴「星か。」

星「愛紗の心を救えたようすな。」

昴「だといいんだけど・・・結局、愛紗を追い詰めたのは俺だった。つくづく俺は王に向いてないな・・・俺も休むわ。またな。」

星「御意。」

俺は星の横を抜け、自室に入ろうとした時、

星「そんな主だから我らはついて行くことが出来るのですよ（ボソッ）」

昴「ん？何か言ったか？」

星「いえ、何でもありません。それでは。」

星は立ち去っていった。

昴「・・・まあいいや。寝よ。」

俺は早々に眠りについた。

その後、愛紗は俺が持っていた丸薬と医者が処方した薬のおかげで2日後には回復し、さらに2日後には完全回復した。

愛「おはようございます。ご主人様。」

昴「おはよう、愛紗。もう体は大丈夫か？」

愛「おかげさまで。ご迷惑をお掛け致しました。確かご主人様は本日政務でしたね。私もお手伝い致します。」

昴「そんな気を使わなくても大丈夫だよ。」

愛「いえ、私の方にもご主人様の認可が必要なものがありますので、一緒の方が都合が良いのです。」

昴「そうか。なら頼む。」

愛「それでは参りましょう。」

俺は愛紗と一緒に自室に向かった。

愛紗 side

愛「それでは参りましょう。」

私はご主人様の部屋へ向かった。

ご主人様。御剣昂様。あの日あなたと出会えて良かった。あなたと共に戦うことが出来て……。

私はいつまでもあなたの傍にいます。

続く

ずいじゅう…傍に…

第37話 愛紗の慟哭、誓い (後書き)

徐州引つ越し前にふと浮かんだ話をねじ込みました。大丈夫かな、この話 (^| ^ ;)

感想、アドバイスお待ちしております。

それではまた！

第38話 州牧就任、来訪者 (前書き)

投稿します。

時間が掛かったわりに原作とほとんど変わりませんが・・・。

それではどうぞ！

第38話 州牧就任、来訪者

昴 side

反董卓連合の戦い終結から1ヶ月が経ったある日。俺達の元に使者が現れた。使者曰く、前の董卓討伐の功績を讃え、桃香を徐州の州牧に就任せよとのことだ。州牧と言えば太守みたいなものだからかなりの出世だ。

桃「私、太守なんだ・・・」

昴「大出世だな。」

相から州牧だもんな。

桃「でも・・・ここを離れるのは少し寂しいな。」

雛「折角、頑張って内政したのにね。」

星「全くだな。馴染みの酒屋やラーメン屋が出来たというのに。」

雫「良い服屋を見つけましたのに。」

愛「そうは言うが、これは大きな前進となる。すぐに徐州に移りましょう。」

昴「そうだな。名残惜しいが、準備をしよう。ここで学んだことは次に活かそうな。」

桃「うん。じゃあ皆、早速お引越準備しましょ。」

鈴「ねえねえ、徐州ってどんなところー?」

雛「徐州は、東は黄海に連なり、西は中原と隣接する、と古くから五省に通ずる地として知られているところですね。」

朱「高祖劉邦の故郷でもあります。桃香様にとっては、ある意味お里帰りに近いかもしれませんね。」

桃「中山靖王劉勝の末裔だもんね、私・・・ウソかホントか分からないけど。」

昴「えー。」

随分と曖昧な。

桃「だって、昔のことなんて知らないし。唯一、それっぽって言

「 ったら、私が持っている剣だけだもん。」

星「靖王伝家。桃香様の持つ剣の名でしたな。」

桃「うん。だけどね、この剣を持っていたら誰でも中山靖王劉勝の末裔って名乗れるんだから、あまり意味は無いと思う。」

昴「何を成すか。大切なのはその一点だ。」

桃「うん。ということだ。この街のことは後任の人にお任せしよう。・・・名残惜しいけどね。」

愛「色々ありましたからね。」

俺はそれほど馴染み深いわけではないが、桃香達にとっては黄巾の乱で功をたてて、治安を維持したり、内政したり。色々あった街だから思うところあるよな。

星「うむ、我らはここでの経験を徐州で生かそうではないか。」

昴「そうだな。それじゃ、準備を始めるか。」

朱「そうですね。じゃあ私と雛里ちゃんは、事務書類などの輸送準備をしますね。」

愛「我らは兵の移動準備をしようか。」

星「了解だ。主と桃香様は家財などをまとめておいてください。」

昴「分かった。」

雫「わたくしもお手伝い致しますわ。」

桃「りよーかーい　じゃみんな！お引越作業、かっいし〜」

桃香の掛け声を合図にそれぞれ動き出した。さて、早く終わらせて皆を手伝おう。

全ての準備が整うと、俺達は徐州へと向かった。

徐州に到着し、荷下ろしの作業が終わると、早速徐州の生産高や産業の状況等の纏め作業を行った。これがまた大変な作業で、何せ平原とは規模が違うから時間が掛かること掛かること。徐州に到着して1ヶ月後にようやく全ての状況把握が終わった。

昴「ふう〜、ようやく終わったな。」

朱「ようやく終わりましたね・・・ご主人様もお忙しい中お手伝いしていただき、ありがとうございます。」

昴「気にするな。あれは量が多すぎるからな。朱里もご苦労様。よく頑張ったな。」

ナデナデ〜。

朱「はふう〜、ありがとうございます／＼」

桃「あ〜ずるい〜！私も頑張ったんだよ〜。」

昴「そうだな。桃香もよく頑張ったな。」

ナデナデ〜。

桃「えへへ〜／＼」

愛「こほん！和むのは後にして、報告を先にして頂けると助かるのですが。」

星「愛紗。ヤキモチも度が過ぎると嫌われるぞ？」

愛「だ、誰がヤキモチを焼いている！私は別に、そんなつもりで言ったわけでは・・・嫌ったりしませんよね、ご主人様。」

昴「当たり前だろ。」

ナデナデ〜。

愛「／＼、ご主人様・・・。」

星「と、あちこちで桃色な空気が流れているが、今は朱里の報告を聞こうではないか。」

桃「だねー。じゃあ朱里ちゃん。報告をお願い。」

朱「はい！」

朱里から徐州の生産力や産業商業の状況、交通面の報告が行われた。

朱「・・・以上のことから力を蓄えるには良い土地かと思われませぬ。」

桃「おおー。平原から比べると、何だかすごーく豊かなところだねえ。」

雛「しかし、それだけ治政が難しいと言っても過言では無いと思います。」

昴「それに、豊かだからこそ狙ってくる諸候もいるだろう。」

愛「となれば、速急に軍備の拡張を行わなくてはなりませんね。」

星「だが拙速な徴兵は民が不満を抱くもとなる。上手く舵を取らんと、すぐに沈没することになるだろう。」

昴「ま、そうだな。朱里と雛里はどう考える？」

朱「概ね、愛紗さんや星さんと同じ意見ですね。」

雛「内政をして国力を充実させつつ、軍備の増強を図るしか無いかと。」

鈴「でもその2つを同時にするって、すっごく難しそうなのだ。」

朱「それはそうです。背反する2つの命題を達成させなければいけませんから。」

雛「軍備とは即ち兵。兵というのは基本的には非生産階級ですから。兵を充実させれば、生産力が落ちるのは当然です。」

朱「その両者の天秤を平らに保つからこそ、富国強兵の理想かと。」

昴「難しいがやらなくちゃならない。」

雫「この時代を生き抜くためにはやらなくてはなりませんわ。」

星「うむ、皆で力を合わせれば、理想を実現させることができる。私達はそう信じて、ここに居るのだから。」

昴「星の言う通りだ。大変かもしれないがやるう。」

桃「おー!」

昴「それじゃ、朱里と桃香と雫と俺は内政を。雛里と愛紗と星と鈴々は軍備の方を頼む。数日・・そうだな、5日毎に確認しあって、微調整をしていこう。皆いいか?」

朱「御意です。」

昴「それじゃ、それを基本方針に」

行こう。そう続けようとしたそのとき。1人の兵がやってきた。

「申し上げます！」

愛「何だ！」

「ただいま城門にこ、公孫贇様が！」

星「伯珪殿が？ふむ。州牧就任の祝いにでも来てくれたのか。」

「いえ、それが多数の兵を引き連れ、劉備様に保護を求めていらっしやるのです！」

桃「ほ、保護！？」

鈴「何かあったってことかなー？」

昴「・・・とりあえず公孫贇から直接話を聞こう。ここに通してくれないか？」

「はっ！」

桃「白蓮ちゃん、どうしちゃったんだろ？」

星「本国で何かあった。そういうことでしょうか。」

保護ってことから考えられるのは謀反か侵略によって国を追われた、だが、あの公孫贇に限って謀反は考えられないな。ならば侵略。公孫贇の近隣の諸侯で考えられるのは・・・袁紹か？

昂「とにかく、話は公孫贇に聞こう。それで全て分かる。」

推察をしたって答えは出ない。それに直接公孫贇に聞けば分かることだ。

・
・
・
・
・
・
・

やがて、兵士に先導された公孫贇がやってきた。

桃「白蓮ちゃん!？」

白と金で飾られた鎧のところどころに傷や返り血がついており、その姿はぼろぼろだった。

公「うつつ、桃香・すまん。いきなり転がり込んできて・・・。」

桃「そんなこと良いつてば!それより一体何があったのか教えて?」

公「麗羽が・・・袁紹の奴が奇襲を掛けてきて、遼東の城を全て落とされたんだ。」

愛「何っ!?!」

星「袁紹が攻めてきた?」

昴「……。」

やはり袁紹か……。

公「ああ。反董卓連合の後、私は本国に戻って内政に取りかかっていたんだ。だけどもある日、宣戦布告の使者が来ると同時に、国境の城が次々落とされてしまっただけだ。」

鈴「反撃したのか?」

公「したさ! だけど気が付いた頃には領土の大半を制圧されていて、反撃するにも兵力が足りず……。」

星「落ちのびてきたという訳ですね。」

公「恥ずかしながら、そういうことだよ。」

昴「……なるほど。何せよ、公孫贇が無事で良かったよ。」

公「御剣……。」

昴「公孫贇、大変だったな。気が済むまでこの国に滞在してくれ。」

桃「そうそう。私達に今があるのも、白蓮ちゃんが私達のことを応援してくれたからなんだし。今度は私達が恩を返す番だよ。」

公「・・・すまん。」

桃「気にしない気にしない。困った時はお互い様なんだから」

朱「しかし、北方に袁紹の国が出来た以上、これからは諸侯同士の争いが激化するでしょうね。」

昴「だろうな。今の袁紹に背後を脅かすものが居なくなった。次に考えられるのは・・・。」

星「西進か南下か・・・というわけですか？」

朱「そうです。董卓さんとの戦いが終わったのにも関わらず、袁紹さんは望んでいた大きな物、この場合は帝のおられる洛陽であったり、それに近いものことですが、それを手に入れることが出来なかった。」

雛「ならば自力で手に入れるしかない。そういったところだと思います。」

雫「公孫贄さんの土地を奪い、後顧の憂いを断った、というところですね。」

愛「袁紹の南には曹操が居るし、西には剽悍で名高い涼州がある。攻めるなら北方と考えるのは、さして飛躍ではありませんね。」

公「甘かった。麗羽がそんなことするはずないって思ってたんだが・・・。」

星「確かにそうですね。乱世の兆しが見えていたのだから、太守と

しておおいに用心すべきでした。」

桃「星ちゃん！」

公「いや、良いんだ。星の言うことは尤もだよ。私が甘かった。」

昴「そう、甘い・・・でも俺はそういう人は好きだぜ。星も、だろ？」

星「はい。主のおっしやる通りです。」

公「星・・・御剣・・・。」

星「今はとにかく、白珪殿の今後のことを考えましょう。白珪殿。今後、どうする？袁紹に奪われた領土を奪い返すために行動するの
か？」

公「いや、麗羽の軍勢はすでに私の手に負えるものじゃ無くなって
る。もう私では太刀打ち出来ないんだ。」

愛「なら、どうなされるのです？」

公「・・・御剣達さえ良ければ、私をお前達の下に置いて欲しい。」

鈴「それって、つまり鈴々達の仲間になるっことー？」

公「仲間？いや、私は御剣達に臣下の礼を・・・。」

桃「そんなの要らないよ！私達は白蓮ちゃんを仲間として迎えたい
の 駄目かな？」

公「それで良いのか？」

昴「構わないさ。俺は臣下だの主従という目で皆を見てないし、それは桃香も同様だ。便宜上は主従ってことになってるけどな。だから公孫贄。俺達の仲間として来てくれないか？」

公「・・・変なんだな、2人とも。」

昴「ま、俺は桃香にあてられただけだけどな。」

桃「あー、ご主人様ひどいー！」

星「我らはもつと主らしくしていただきたいのだが、主達はそういうのがお嫌いなようだな。」

鈴「でも鈴々は今みたいなのが好きなのだ！」

桃「だよねだよね？それじゃ、気にしなくても問題なーし。」

昴「桃香らしい考えだな。」

公「・・・ふ、ふふふつ、はははははっ！なんか、良いな、こついうの。久しぶりに笑えた気がするよ。」

昴「それは何よりだ。」

公「そんな2人だから皆集まったんだろうな。私も・・・その仲間に入れてもらっても良いか？」

桃「当然だよ。白蓮ちゃんは私にとって、とっても大切なお友達だ

もん
」

昴「これからよろしくな、公孫贇。」

白「ありがとう、桃香、御剣・・そうだ御剣、私の事は白蓮と呼んでくれ。」

昴「分かった。俺の事は昴と呼んでくれ。改めて、よろしくな白蓮。」

俺は白蓮に手を差し出す。

白「ああ。よろしく頼む、昴。」

白蓮は俺の手を握った。

桃「でもでも、本当に白蓮ちゃんが無事でいてくれて良かったよ。」

白「私としても生き長らえるつもりはなかった。支城を次々に落とされ、最後、死を覚悟して騎馬隊を率いて袁紹本隊に突撃を仕掛けた。良いところまで斬り込めたんだが、文醜と顔良の2人に止められて。さすがに私も2人を相手には戦えなくて。もう駄目だ！そう思った時、まさかの人物に救われてな。」

愛「まさかの人物？」

？「ふむ、それは私のことだ。」

愛「お、お前は!?!」

星「華雄!？」

鈴「にやにやー!華雄なのだ!」

愛「馬鹿な、私は確かにお前を討ち取って・・・。」

雄「うむ、私も死んだと思ったが、死の淵にいとところをそここの。」

俺の方を向き、

雄「御剣昂に助けられてな。」

愛「ご主人様が?」

昂「死なすには惜しかったからな。」

白「華雄に助けられ、何とか落ちのびられたというわけだ。」

雄「多勢に無勢を見かねてな。何より・・・袁紹は気に食わん。」

愛「華雄・・・。」

雄「勝手にあがりこんですまないな。どうしても確認したいことがあつてな。」

星「確認したいこと?」

雄「董卓様のことだ。」

愛「!??」

雄「御剣昴。私は貴様に董卓様を委ねた。だが董卓様は死んだと世間では噂されている。」

華雄は俺に戦斧を向ける。

雄「董卓様はどうなった？返答次第では貴様を・・・。」

愛「ご主人様・・・。」

昴「・・・ああ。愛紗。月をここに。」

愛「よろしいのですか？」

昴「そういう約束だからな。頼む。」

愛「・・・分かりました。」

愛紗が玉座を出ていった。

雄「どういうことだ？」

昴「少し待っててくれ。」

数分ほど待っていると、月が玉座にやってきた。

月「お呼びでしょうか？」

雄「!?!?・・・董卓様!」

月「華雄さん！ご無事で何よりです！」

雄「勿体なきお言葉です！」

2人が再開を喜びあった。

雄「……。」

月「華雄さん？」

華雄が言葉を止め、おもむろに膝を地に付けた。

雄「申し訳ございませんでした！」

頭を下げた。

月「華雄さん！？」

雄「私は董卓様の臣にあるまじき行為をしました。董卓様と己の矜持を天秤にかけ、私は己の矜持を選んでしまいました。今日まで生き長らえてきましたが、董卓様の無事を確認でき、もはや後悔はありません。董卓様、我が首をお斬りください。」

月「華雄さん……。」

月は華雄の元へ近づき、そして、抱きしめた。

雄「董卓様！？」

月「華雄さん……今日まで生きていてくれて私は嬉しいです。私は

華雄さんのような臣を得ることが出来て、私は幸せです。」

雄「董卓様……。勿体なき……。お言葉です……。」

月「私の最後のお願いを聞いていただけますか？」

雄「はっ！何なりと。」

月「ご主人様、御剣昂様と桃香様の為にその武を奮っていただけませんか？」

雄「御剣昂と劉備の？」

月「はい。私はお二方の元で新しい道を探しています。華雄さん。あなたの力をお二方の理想を叶えるため、その力を奮ってほしいのです。駄目、でしょう？」

雄「……率直に言いますと、劉備のことは分かりません。ですが……。」

華雄は俺の方を向き。

雄「御剣昂。この者は信用に足る人物と言えます。董卓様の願いならば喜んでお仕え致します。」

月「ありがとうございます！あの、ご主人様、桃香様、こちらで勝手に決めてしまったんですがよろしいでしょうか？」

昂「俺は大歓迎だよ。桃香はどうだ？」

桃「私も大歓迎だよ。皆もいいよね？」

愛「華雄の力は私が良く知っています。シ水関では勝ちましたが今の華雄に勝つのは容易ではないでしょう。私もご主人様と桃香様と同じ意見です。」

星「華雄ほどの良将ならば大歓迎です。」

鈴「鈴々も大歓迎なのだ！」

朱・雛「私達も大歓迎です。」

雫「わたくしも昴様の決めたことなら喜んで。」

月「ありがとうございます！では華雄さん。これから改めてよろしくお願いします。それと私のことは月と呼んでください。」

雄「以前にもおっしゃいましたが私には真名がありません。ですから私だけ預かるわけには……。」

月「それでも構いません。是非、華雄さんに。」

雄「しかし……。」

昴「真名が無いことを気にしてるならいつそのこと月に決めてもらったらどうだ？」

雄「董卓様に？」

昴「この国の真名の風習に反するかもしれないが、月ならば構わないだろ？」

雄「・・・うむ、そうだな。では董卓様、お願い致します。」

月「分かりました。では・・・想華そうけというのはいかがでしょう？」

昴「意味は？」

月「華雄さんの私への忠義、想いは、華のように美しい。それで想華です。」

想「想華・・・美しき真名です。今より私は名は華雄、真名は想華と名乗ります！」

月「気に入っていただけただけで何よりです。それでは私の真名を受け取ってください。」

想「はっ！月様の真名、お預かり致します！」

月「これからよろしくお願いしますね。」

想「はい！」

華雄は想華という真名を得て、劉備軍へと参加した。

白蓮こと公孫贇。華雄こと想華が御剣昴と劉備の新たな仲間として加わったのだった。

続
く

第38話 州牧就任、来訪者（後書き）

華雄の登場早すぎましたかね？しかも真名が安直な上に若干蓮華と被ったし。だって募集したけど0だったんだもん（TOT）

感想、アドバイス待ってます。

それではまた！

第39話、徐州防衛戦、侵攻する袁術・呂布連合軍、（前書き）

投稿します。

原作を遵守したのですが、かなり原作引用が強すぎた感があります。

それではどうぞ！

第39話 徐州防衛戦、侵攻する袁術・呂布連合軍

恋 side

「ワンワン！」

恋「・・・セキト。」

セ「ワンッ！」

恋「・・・お腹減ったの？」

セ「ワンッ！」

恋「・・・そう。でもね・・・飯、無いの。」

セ「くう〜ん・・・。」

恋「・・・お腹減ったね。」

セ「わふっ・・・。」

お腹・・・減った・・・。最近お腹いっぱい飯食べてない。

ね「恋殿お〜〜〜！」

恋「ねね・・・。」

ね「恋殿、吉報ですぞー！」

恋「・・・??？」

ね「今し方、袁術の使いの者がやってきて、共同戦線を提案してきたのです。」

恋「共同？」

ね「そうですね。徐州に赴任したばかりの劉備に対し、軍事行動を起こすのです。それで劉備を追い払って徐州を山分けなのです！」

恋「・・・。」

ね「我が軍は前の連合軍との戦いのあと、徐州の端にあるこの城を手に入れましたが、兵を養うための兵糧も残り僅か。このままではマズイのです。だから恋殿。袁術と同盟を組み、劉備をやっつけるのです！」

恋「袁術、信用出来ない。それに・・・劉備のところには昴がいる。」

ね「そ、それは分かっておりますよ。ただ今は劉備をやっつけないことには、皆飢え死にしまうのです！それにこれは御剣昴との雪辱を果たす好機なのですぞ！」

恋「昴とは戦いたい。けど・・・こんな形じゃない・・・。」

ね「ですが〜。」

恋「今の恋じゃ・・・。」

お腹減って力が出せない。今の恋じゃ昂に絶対に勝てない。でも・
・このままじゃ皆が・・。

恋「……………ねね。」

ね「はいです!」

恋「出撃準備。」

ね「あ、了解したのであります!恋殿、見事、虎牢関での雪辱を果たすのでありますぞー!」

恋「……………」

もしも時は恋の命で皆を……………。

白蓮と想華が来てから2日後、白蓮が連れてきた兵を俺達の隊に組み込んだり、先の話し合いで決めた軍備増強と内政に取りかかっていた時、1人の兵士が玉座に駆け込んだ。

「申し上げまーす！」

愛「どうしたっ!？」

「え、袁術の軍勢が国境を突破し、我が国に侵攻してきました！」

昴「袁術が?」

愛「どういうことだっ!?!、宣戦布告も出さず、奇襲を掛けて来たと言っのかっ!?!」

「はっ!国境の警備隊を突破後、猛烈な勢いで侵攻してきております!このままでは、州都に到着するのは時間の問題かと!」

愛「くっ・・・鈴々!星!すぐに迎撃準備だ!」

星「応っ!」

鈴「合点!」

昴「ま、慌てるな。朱里と雛里は軽重隊の手配と・・・何かあるか分からないから籠城戦の準備も頼む。援軍要請は・・・辞めておこつ。」

雛「ですね。袁術さん達に合流されると危険ですからね。」

昴「ま、俺達だけで何とかなるだろ。」

星「無論です。袁術の軍など、我らだけで充分こと足りる。」

愛「ええ。それに白蓮殿が連れてきてくれた兵士達もいます。簡単に負けることはないでしょう。」

朱「ただ、素早くこの戦いを收拾しなければ、飢えた諸侯達が襲いかかってくるでしょう。今はとにかく時間が大切です。」

桃「素早く勝利して、隙が無いつて言うのを見せつけないといけないだね。」

雛「はい。諸侯は援軍も出さず、私達の戦いを傍観しています。それは私達が負けそうになったら、すぐに自分の取り分を確保するためです。」

愛「・・・卑怯者共め。」

昴「それが乱世だ。綺麗事にこだわり過ぎれば即座に食いつくされる。早い話、弱肉強食だ。」

白「・・・そうだな。そうだな。そういうのが乱世って奴だ。」

桃「でも大丈夫だよ。私達、絶対に袁術さんなんかには負けないんだから。」

昴「当然だな。それじゃ、出撃準備を始めよう。皆行こう！」

愛「御意！では行くぞ、鈴々！星！」

「「「応っ（なのだ）！」」」

桃「私達は兵站の準備だね。朱里ちゃんも雛里ちゃんもよろしくね」

朱・雛「はいっ！」

昴「準備が終わり次第出撃だ。俺達の国と家族とも言える民を守るう。」

俺達は動き出した。

袁術軍 side

術「七乃〜。」

勲「何でしょっ?」

術「妾達がここに居座って、すでに2日が経過しておるぞ。このままここに居て良いのか？」

勲「ここに居るべきですよ。だってお城を攻めるなんてしんどいじゃないですかー。」

術「それはそうじゃが・・・。」

勲「それに敵より多くの兵を持つてるんですから、ここで待ち構えて、一気に殲滅しちゃいましょー。そのための策も用意してますしねー。」

術「何じゃ、その策というのは？」

勲「ふふーん。実はですねー。呂布さんには、旗を隠したままついてきてもらってるんですよー。」

術「どっいつことじゃ？」

勲「つーまーりー。劉備さんが私達だけしか居ないと思って、安心して迎撃に出たときに、サツと呂布さんの旗をあげてびっくりさせると。そーいうことです。」

術「おおー。なるほどの。知らずにやってきた劉備を、呂布に討ち取らせるという訳じゃな。」

勲「そーですよ。七乃は頑張って策を考えました！美羽様、褒めてくださいー。」

術「うむ、良くやったのじゃー！さすがに妾の傳役なのじゃー！これで

御剣昴を妾の部下にすることができるとのじゃ！」

勲「そうですねー。劉備さんのところには優秀な人がいっぱいいますから、まとめて美羽様の部下にしちゃいましょうー」

術「おおー！そうすれば妾の軍は無敵なのじゃ」

勲「そのとおりですー」

術「待っておるんじやぞ劉備め。すぐに妾が打ちのめしてやるのじや！」

昴 side

桃「朱里ちゃん、状況はどんな感じかな？」

朱「我が軍の兵力に白蓮さんと行動を共にしていた兵隊さん達を加えて、ようやく形を整えられた・・・という軍容ですね。ですが斥候さんの話によると、袁術さんの兵力はかなりの規模だそうです。その中には正体不明の部隊も居るようで・・・。」

桃「正体不明って？」

雛「その部隊だけ、兵の練度が段違いに高いんだそうです。だけど誰が率いているか分からない。」

愛「謎の部隊、か。いやな予感がするな。」

星「練度が違うということは、それだけ優秀な将が率いているという事か。しかし・・袁術のところにもそれほど優秀な人材が居ただろうか？」

朱「もしかすると、客将という扱いで袁術さんに保護されている、孫策さんが出てきたのかも・・。」

昴「・・。」

雪蓮「・か。おそらくは違うと思う。兵そのものを伏せるならともかく、旗だけ隠すということは開戦直前に旗をあげて動揺を誘ったいんだろ。雪蓮が出てきても脅威ではあるが動揺を誘えるほどのものではないだろ。それに、もし仮に雪蓮なら俺達と戦うより反旗を翻して俺達と共に袁術を倒してそのままかつての自領を取り返した方が遥かに有益だから今頃使者の1人でも寄越しているだろう。だとすれば一体誰が・・ま、考えても答えは出ないか。」

昴「考えても仕方ないことだ。俺達は何があっても動じずに袁術を倒すだけだ。」

鈴「お兄ちゃんの言う通りなのだ。今は袁術をぶっ飛ばす方法を考えるのだ！」

星「うむ。我が方よりも多い敵の軍勢を、どうやって撃退するか。
・やはり策が必要か。」

愛「そうだな。雞里。敵との会敵予想地点はどの辺りになる?」

雞「ここより東方、東海地方曲陽辺りになるかと。」

昴「曲陽か。ずいぶんと東だな。」

朱「私達が本拠を置く彭城。曲陽はその裏口ですから奇襲するため
にそこから来た、というのならば納得いくのですが・・・。」

鈴「それにしても遠すぎるのだ。」

星「何かある、と見て間違いは無いだろうな。」

昴「だろうな。」

朱「何かしら策があるんだと思います。用心しておいた方が良く
と。」

昴「そうだな。とりあえず斥候の数を増やしてより重要な情報獲得
に努めよう。」

雞「了解です」

桃「素早く情報を手に入れて、素早く敵と対峙して、素早く敵を撃
退しちゃおう」

鈴「相変わらず桃香お姉ちゃんはノーテンキなのだ。」

昴「桃香の言うことは尤もだ。素早くケリをつけよう。」

桃「じゃ、方針も決まったことだし、曲陽に向けて出発しんこー」

さて、どうなるかな。。。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

「前方一里のところに敵陣を発見！随所に炊煙が上がっているため、現在は食事中かと思われます！まだ我々には気付いていないかと！」

昴「・・・食事中？しかも気付いてないって・・・。」

愛「・・・非常識極まり無いですね。何を考えているのだから。」

昴「まっただくだな。」

雛「ですがこれは好機ですね。このまま敵陣を急襲すれば、数の不利を覆すことが出来るかと。」

昴「そうだな。この際この隙を有効活用させてもらおう。」

星「うむ。私も同意見です。」

鈴「鈴々も異議なし！」

桃「みんな賛成なんだ？じゃあ雛里ちゃんの見解を採用。」

昴「決まりだな。それじゃ、先陣は……。」

鈴「はいはいはい！先陣は鈴々なのだ！」

昴「うん。それじゃ先陣は鈴々な。」

鈴「やたっ！鈴々が先陣。」

愛「いくら奇襲とはいえ、先陣には危険が付きまとう。油断するなよ、鈴々。」

鈴「分かってるのだ。」

昴「頼むな。それじゃ配置は、右翼は愛紗、左翼は星。中軍に白蓮と雛里。遊撃に想華を。後曲に本隊、桃香、朱里、雫に俺。こんな感じかな？」

雛「適材適所だと思いますし、良い采配かと。」

昴「それじゃ、全軍に通達。迅速に敵を討つ。皆行くぞ！」
皆「御意!!」

戦が始まり、両者入り交じっての戦いが始まった。その直後、1人の兵士が伝令に駆け込んだ。

「申し上げます！敵陣に旗があがりました！旗印は呂！」

昴「呂・・・呂布か！」

朱「はわわ！正体不明の隊は呂布さんの隊だったんですね!？」

桃「ご主人様、どうしよう!？」

昴「・・・他に伝令は？」

「我らに敵なし」と。

昴「そうか。なら皆に任せよう。」

桃「大丈夫かな？」

昴「愛紗も鈴々も星も出来ないことを言うほど愚かじゃない。確かに呂布の武はかなり脅威だけど、こと戦は戦術より戦略だ。袁術軍があのようにさほど心配ない・・・とりあえず想華に援護するように通達してくれ。」

「御意！」

昴「朱里は戦が決したら即座に呂布軍を包囲してくれ。」

朱「ぎよ、御意です！」

戦そのものは1隊が優れた程度では問題ない。肝心なのは最後の最後。恋を如何に投降させるかだ。

昴「桃香。」

桃「なにかな？」

昴「桃香は呂布をどうしたい？」

桃「どうしたいって？」

昴「捕縛した後、今後の脅威にならないように斬首するか、こちらへ引き入れるか。」

桃「・・・私は、殺したくないよ。例え、私達のところに来てくれな

くても・・・。」

昴「そうか。ならそうしよう。」

桃「いいの?」

昴「俺も同意見だからな。」

桃「・・・ありがとう、ご主人様!」

昴「まあ、今は戦のことに集中しよう。」

桃「うん。そうだね。」

とりあえず恋のことは皆に任せよう。

戦況はこちらの優勢となり、敵の部隊は崩れていった。やはり如何に呂布の隊の練度高くても明らかに袁術軍が足を引っ張っている。程なくして前線の部隊が追撃に向かった。呂布の隊が善戦してるものの袁術の軍は壊滅状態になり、各地でちりぢりになっている。

昴「朱里、すぐに呂布の隊の包囲に向かってくれ。」

朱「御意です！」

昴「桃香。」

桃「はい！」

昴「君の王としての器の見せどころだ。包囲が完了したら呂布の説得に向かってくれ。」

桃「うん。分かったよ。」

昴「雫は桃香を護衛をしてあげてくれ。」

雫「了解しましたわ。」

昴「さてと・・・。」

俺はもう一方の方に行くかな。

袁術・張勳 side

術「はあ、ひい、ふう、へえ、ほう……。」

勳「はあ、はあ、はあ……。」

術「うう、負けたのじゃ。」

勳「負けてしまいましたね。」

術「うう、次は絶対に勝ってやるのじゃ。」

？「君に次なんてない。」

勳「!？」

術「!？……お主は、御剣、昂……。」

昂「久しぶりだな。袁術。それに張勳。」

昴 side

桃香達が動き出した後、俺は袁術を探しに自陣を飛び出した。辺りを探したら程なくして袁術は見つかった。

昴「久しぶりだな。袁術。それに張勳。」

術「ううゝ。こ、これで勝ったと思わないことじゃ！この飯は必ず・
」

昴「だから次はないって言っただろ？」

術「ど、どついつことじゃ。妾を殺すのかや？」

勳「・・・それ以前に・・・張勳、君なら俺の言ってる意味が分かるだろ？」

術「どついつことじゃ、七乃！？」

勳「・・・これだけ派手にやられちゃいましたから。今頃は孫策さんにお城を攻め落としているかと・・・。」

術「なんじゃとおゝ！」

昴「こつちも確認はしてないが、孫策がこの機を逃すわけがない。

もう袁術に帰る場所はない。悪いが、投降してくれ。悪いようにはしないから。」

術「……。」

昴「投降してくれ、袁術。桃香、劉備なら投降を拒んでも命は取らないだろう。けど・俺は桃香程甘くない。後々、脅威になるかもしれない相手を逃がすわけにはいかない。だから袁術、投降してくれ、頼む。俺は君達を斬りたくない。」

勲「美羽様……。」

しばし沈黙が支配する。

術「……分かったのじゃ。妾はお主に降るのじゃ。」

勲「よろしいのですか、美羽様？」

術「うむ……。もう妾達に何も出来ぬし。それに……そのような悲しげな顔をした御劍昴に斬られたくないのじゃ。」

悲しげ・俺はそんな顔していたのか。

昴「ありがとう。袁術。張勲はどうする？」

勲「私も美羽様と一緒に投降します。」

昴「そうか。助かる。」

これで全て終わるな。

術「のう、昴。」

昴「なんだ？」

術「お主はどうして・・・どうして・・・妾に会いに来てくれなかったのじゃ？」

昴「！？、袁術・・・」

術「お主は会いに来てくれると言ったのに、どうして来てくれなかったのじゃ？ずっと待っておったのに・・・」

昴「袁術・・・」

あの後仕事やら戦やらで時間を作れずに結局会いに行けなかった。

術「待っても待ってもお主が来ぬから会いにいったらお主はもういなかった。どうして来てくれなかったのじゃ？ずっと待っておったのに・・・皆嘘つきじゃ。グシュ・・・父様も母様も、グスツ、大丈夫と言って結局逝ってしもうた。皆嘘つきなのじゃ。皆妾を置いていってしまつたのじゃ。」

袁術は王でも何でもなく、ただ1人の幼い女の子として泣きじゃくった。

術「うえくん。皆嫌いなのじゃ・・・」

俺は袁術をここまで悲しませてしまったのか。軽はずみに約束なんかして。

俺は泣いている袁術を抱き上げ、抱きしめた。

術「ふえ？」

昴「・・・ごめんな、袁術。寂しい思いをさせて。」

術「うう〜。」

昴「これからは寂しい思いはさせない。ずっとってわけにはいかな
いけど出来る限り一緒にいるから。だから、許してくれないか？」

術「・・・本当かや？」

昴「ああ。」

術「本当に本当に、一緒にかや？」

昴「ああ。一緒にだよ。」

術「うう〜、うえーん・・・。」

昴「よしよし。」

俺は袁術が泣き止むまで頭を撫でながら抱きしめていた。

・
・
・
・

やがて袁術も泣き止み、一緒手を繋いでに自陣に歩いている。

昴「もうすぐ着くからな袁術。」

美「美羽なのじゃ。」

昴「ん？」

美「妾のことは美羽と呼んでほしいのじゃ!」

昴「・・・分かった、美羽。」

美「えへへ。それと・・・また抱っこしてほしいのじゃ・・・駄目かや?」

昴「・・・よつと。」

俺は美羽を抱き上げた。

美「高いのじゃ〜!」

昴「ははっ。」

こうしてみるとただの子供だな。
はしゃいでいた美羽もやがて・・・。

美「すうく、すうく・・・。」

俺の腕の中で眠っていた。

勲「こんな可愛い美羽様久しぶりですく。」

昴「王として生きるにはあまりにも幼すぎる。早くに親を無くして、ずっと張勲以外に頼れる人がいなかったんだろくな。」

勲「そうなら嬉しいですね。」

昴「悪いんだけど・・・。」

俺は張勲に美羽を預ける。

昴「俺は呂布の所に行く。後は・・・誰か！」

「じじじー！」

昴「2人を護送してくれ、くれぐれも丁重にな。」

「はっ！了解致しました！」

昴「なら張勲、後でな。」

勲「昴さん！」

昴「ん？」

七「私のことは七乃と呼んでください。」

昴「いいのか？」

七「美羽様が預けた相手なら構いませんよ。」

昴「・・・分かった。では七乃、後でな。」

七「はい」

俺は恋の元に急いだ。

辿り着いてみると、恋の隊はすでに包囲されており、愛紗や鈴々や星はもちろん、恋も無事だった。愛紗達の間には殺気めいたものはなく、どうやら桃香の説得は上手くいったみたいだな。

昴「よう。話はついたみたいだな。」

桃「あ、ご主人様！うん、呂布さん仲間になってくれるって」

昴「そうか、良かった。」

桃「・・・って言っても決め手になったのはご主人様なんだけどね。」

昴「それでも桃香が信用ならなきゃ仲間にならないさ。」

やはり桃香に任せて正解だったな。

恋「！・・・昴！」

ギョツ！

恋が駆け寄り、俺に抱きついた。

恋「会いたかった。」

昴「俺もだよ。」

恋「恋達を受け入れてくれてありがとう。」

昴「気にするな。ただそうしたかったただけだ。」

俺は恋の頭を撫でた。

恋「っ／＼」

恋は気持ち良さそうだ。するとそこに。

？「貴様！いつまで恋殿にくっついていきますか！」

昴「久しぶりだな・根値寝。」

ね「字が違うのです！#」

昴「冗談だ。ねね。」

ね「やはりお前はここで仕留めるのです！喰らえ、ねねの新しい必殺技！」

ねねが飛び上がり、

ね「きりもみ・反転・ちんきゅーキーク！」

ねねがひねりを大いに加えた飛び蹴りを俺に繰り出す。

ガシッ！

俺はその蹴りを掴み取る。

ね「は、放すのです！」

昴「いい蹴りだ。なら俺も新技を披露しよう。必殺……。心中斬首！」

ズズズズズッ！

ねねは首だけ残し、地中に埋まった。埋まるまで2秒ほど。

昴「それじゃ皆、行こうか。恋。あの肉まんまた食べさせてあげるよ。」

恋「楽しみ。」

ね「こらー！ねねを出すのですー！」

愛「・・・よろしいのですか？」

昴「気にするな、人柱だ。」

ね「出せー！出すのですー！」

荒野にねねの声が響いた。

戦も終わり、彭城へと引き上げた。現在、将及び、投降した恋や七乃が玉座に集まっている。美羽はお休み中。

恋「モキユモキユ・・・。」

鈴「モグモグ・・・。」

恋と鈴々が俺の蒸した肉まんを食べている。

愛「ご主人様、恋やこの張勳はともかく、袁術は本当に我が軍で保護するのですか？この戦の元凶ですし、孫策との確執になりかねないのでは・・・。」

昴「心配ないだろ。孫策からすれば旧孫呉の領が取り戻せば今さら美羽をどうこうしようとは思わないだろ。」

星「かもしれませぬが、何より、袁術は何も出来ませぬ。そのような者に民からの税で施しを与えるのはいかなものかと・・・。」

昴「それは俺が再教育するよ。すぐには無理でもいずれは働けるよ。うにきつちり教育する。」

星「そうですか。であれば私は何も言いません。」

昴「すまないな。」

皆すぐには無理でもいずれ受け入れてくれるだろ。

クイクイ。

昴「ん？どうした、恋？」

振り返ると、肉まんを食べながら俺の服の裾を引っ張っていた。

恋「・・・ねね。」

昴「・・・あ。」

忘れてた。

改めて美羽との決戦地。日も暮れかかっている。

ね「この外道君主！ねねをこんなところに置き去りにして！#」

昴「いやー、すまん。そんなに怒るなって。何て言うか冗談じゃない？」

ね「こんな時間まで置き去りにして何が冗談ですか！#」

昴「ホントにすまん！許してくれ。このとおり！」

直立不動。

ね「頭を下げるです！早く出せです、この外道君主！」

昴「すまん、今出すからな。」

ズズズズズッ！

昴「ごめんな。さあ帰ろう。皆待ってるぞ。」

ね「岩！それはねねではなく岩なのです！」

昴「さあ帰ろうな。」

ね「こらー！出せー！出すのですー！……いや出して下さい！外道君主は言い過ぎました。出して下さいなのです！……土の中は嫌なのです……！」

日暮れの荒野にねねの音が響いた。

袁術・呂布連合軍との戦は俺達の完全勝利に終わった。

続
く

第39話 徐州防衛戦、侵攻する袁術・呂布連合軍（後書き）

原作蜀ルートだと美羽や七乃はここで出番終了なのですが、この作品では活躍の場を与えようかなって思います。出来るかな（＾|＾；）

何と言うかストーリーより拠点の方が書くのが難しい今日この頃です。

感想、アドバイス、お待ちしています。

それではまた！

第40話 暗躍・・・そして復活・・・（前書き）

投稿します。

今回は外伝的なお話です。

それではどうぞ！

第40話 暗躍・・・そして復活・・・。

御剣昂が劉備、曹操、孫策、名を冠した英傑が存在する外史に降りる前、外史の果てにて、1つの陰謀が始まっていた。

??side

?「くそっ!」

ガッシャーーン!

つり目の気の強さを思わせる顔立ちの青年が目の前の卓を蹴り飛ばした。

?「落ち着いて下さい左慈。物に当たっても仕方ありませんよ?」

眼鏡を掛け、肩まで髪を伸ばした青年が左慈と呼んだ青年をたしな

める。

左「落ち着いてなどいられるか！また奴を仕留められなかったんだぞ！」

？「……。」

奴。それは外史の守り手の1人、御剣昴のことである。

？「彼の武勇、そして知略は守り手の中でも随一。はてさて、万全の体勢で望み、破られた今、もはや策など……。」

左「何を悠長なことを言っている于吉！奴は必ず仕留めなければならぬ！奴の存在は外史を歪ませるんだぞ！」

御剣昴は外史に介入すると歴史を大いに変える。死すべきはずの人間を生かし、時に生きるはずの人間を葬り去る。結果的に外史はより良く安定するのだが、これは結果論で、1つ間違えば外史を大きく歪ませ、最悪消滅させてしまうリスクがある。本来なら著しく歴史を変えたりすることも、不要に外史に介入し、守り手の妨害することも禁じられてるのだが、御剣昴と左慈と于吉。どちらが正しいとも、どちらが間違いとも言えないので他の守り手や管理者は今も静観している。

于「あなたの言うことはもっともです。ですがもう打つ手がありませんよ？」

左「何かあるはずだ。まだ何か……！？、ある……あるぞ！御剣昴を仕留める方法が。」

于「どのような方法ですか？」

左「あいつの封印を解く。あいつなら御剣昴を仕留められる。」

于「あいつ・・・っ！？、左慈あなたまさか刃を解き放つというのですか！？」

左「そうだ。刃なら、御剣昴と言えど齒が立たないだろう。これ以上の適任はいない。」

于「それはいけません！いくらあなたでもそれだけは許すわけにはいきません！第一、刃は我々では手に負えません！操ることなど不可能ですよ！？」

左「ならば利用してやればいい。上手く利害を一致させればこちらの思う通りに事を運べる。」

于「しかし・・・。」

左「ならばお前は黙って待っている。俺1人でも封印を解きに行く。」

于「どうしても、やるのですね？」

左「くどい！」

于「・・・分かりました。あなたの決意がそこまで固いなら止めません。私も一緒に行きましょう。」

左「ならば急ぐぞ！」

于「・・・はい。」

「がはっ！」

白装束の男を蹴り飛ばす。

「何を・・・する・・・つもりだ。」

左「知れたことを、刃を解き放つ。」

「正気・・・か。。。」

左「至って正気だ。これも外史の安定のためだ。」

「後・・・悔・・・する・・・。」

白装束の男は意識を失った。

左「行くぞ。」

于「・・・はい。」

左「・・・これか。」

目の前には大きな祭壇がそびえたっており、祭壇の上には大きな装飾があしらった箱が置いてある。

左「これが聖櫃か・于吉。すぐに始めるぞ。」

于「分かりました。解封の術式は・・・問題ない。心得てる。『ならば始めます。』」

左「　　。」

于「　　。」

左慈と于吉が術式の詠唱を始めた。祭壇の上の聖櫃が微かに光を帯びてきた。

左「 。

于「 。

左慈と于吉は詠唱を続ける。聖櫃の蓋の隙間から目の眩むような光が漏れ始めた。

左「今こそ解き放つ。一の式、弐の式、解放。目覚めよ聖櫃！祖が盟約により解放せり！解！^{アムテ}」

祭壇のまつわる一室が光に包まれる。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

光が収まるとそこには1人の青年が立っていた。

左「久しいな・・・刃。」

刃 s i d e

妙な気分だ。俺は眠っていたはずなのに今起きている。

おかしいな。俺はとある外史で俺を殺すために来たたくさん守り手と管理者を殺していた。数はいてもあまりにも弱すぎた。武も術も俺には何の意味をなさなかった。しばらく殺り続けていたら突然辺りが真っ白になった。奴等は俺に歯が立たないと見るや否や外史ごと俺を封じた。外史を1つ自らの手で消すなど、奴等管理者からすればこれ以上ない苦肉の策だ。

左「久しいな・・・刃。」

ん？誰だ・・・・・・・・・・・・・・・・あぁ。

刃「・・・・・・・・左慈か。」

左「気分はどうだ？」

刃「・・・普通・・・で？俺に何の用？」

左「貴様の力を貸してほしくてな。」

刃「・・・お前が？」

左「不本意だが、こちらもなりふり構ってられないのでな。」

刃「ふーん・・・で？」

左「貴様にこいつを葬ってほしい。」

一枚の写真を差し出す。そこには1人の眉目秀麗の男が写っていた。

左「こいつの名は御剣昴。外史を乱す男だ。」

刃「・・・話は分かったけど俺には関係ないね〜。」

左「俺は貴様が何故外史を荒らし回っていたかを知っている。」

刃「・・・。」

左「俺達に協力してくれたらお前の目的のために力を貸してやろう。」

刃「ふーん。」

左「しばらくは貴様の片腕として働いてやろう。貴様の望む物も用意してやる。」

刃「何でもするってこと？」

左「そういうことだ。」

刃「それはありがたいね。じゃあ早速命令していい？」

左「何でも言ってみろ。」

刃「それじゃ
」

刃「 死んで？」

左「？、一体何を……。」「

ズシャ！

左「が・・・はっ・・・。」

左慈の胸に刀を突き刺した。

左「き・さま・・・な・・・ぜ・・・。」

刃「駄目だよ。そんなに弱くちゃ、片腕どころか駒にすらならないよ？っていうわけで不合格」

左「だれ・・・のお・かげ・・・で・・・自由に・・・。」

刃「あゝ、勘違いしてみたんだから教えるけど、俺、その気になればいつでも封印破れたんだ」

左「なっ!?!」

刃「もつと言っちゃうと封印自体、はね除けることも出来ただけど・・・知っての通り、アレが成るには時間がかかるからそれまで眠ってただけなんだ。ついでに、俺、導師って嫌いなんだ。左慈、于吉、君達は特に・・・っていうわけで・・・サヨナラ」

左「く・・・そ・・・。」

左慈は息絶えた。

于「左慈ーーーーー！よくも、よくも左慈を・・・っ!?!」

ズシャ！

于吉の胸を一闪し、于吉の体が2つに別れる。

刃「さてと、これからどうしよ……ん？」

振り返ると真つ二つにしたはずの于吉が立っていた。

刃「あれ……ああ、そういえば、于吉ってこの程度じゃ死なないんだっけ？」

于「そのとおりです。私の体はいわば不死身。如何にあなたでも勝てませんよ。増！」

その言葉と同時に30人程の白装束集団が現れる。

于「さあ、じわじわ仕留めさせてもらいますよ！無限に続く地獄を……なっ！？」

一瞬で白装束集団の首を飛ばし、于吉の目の前に立ち、そして……

ズシャ！

再び于吉の胸を一闪した。

于「くっ！」

やはりすぐさま体は再生した。

刃「于吉。お前の不死身の秘密。知ってるよ。お前は体に特殊な術

式をかけているから、体が負傷するとお前の妖力で自動的に再生を行う。だよな？」

于「ならばどうします？どのような力、妖術を用いても私には効きませんよ？」

刃「簡単だよ。それならお前の妖力が尽きるまで殺し続けてあげよ。同じ雑魚でも左慈より楽しめそうだ。せめて肩慣らしぐらいにはなっつてね？」

于「なめるな、刃ー！」

ズシャ！

何度も殺し続けた。再生しては殺し、再生しては殺しを繰り返した。圧倒的な力により、于吉は戦うことも逃げることもかなわない。やがて……。

于「う……ぐっ……」

刃「あゝあ。もう体が再生しきらないねえ？もはや生命維持が手一杯だ。」

于「ぐっ……」

刃「もういいや。じゃ、バイバイ」

于「あ……あ……」

ズシャ！

倒れている于吉の背中から心臓を刀で突き刺した。

于「がはっ……」

于吉は息絶えた。

刃「これからどうしようかな。この馬鹿達が早く起こすから暇でしようがないよ。」

于吉の頭を足蹴にする。

刃「ああ、そういえば……」

先ほど渡された写真に目を移す。

刃「御剣昂……ね。楽しみだな。近い内に会いに行くからせいぜい楽しませてね？」

写真を上に放り投げ、

ジャキン！

写真を一閃し、鞘に戻す。写真は中の御剣昂の頭を中心から縦に真っ二つになる。

暇潰しに何して遊ぼうかな？・・・あ、そうだ！適当に外史に入って強い奴と遊びに行こう！飽きたら皆斬っちゃおう 絶望の顔を浮かべた奴を殺すと楽しいんだよねー それじゃ、出発ー

どす黒い影、とても深い闇が動き出した。

続く

第40話の暗躍・・・そして復活・・・（後書き）

今回は外史の破壊者、刃復活のお話です。間1話だけ挟まっていた
できました。

気が付けばPVは40万を越え、ユニークも4万を越えました！自
分の二次小説をご覧いただき、まことにありがとうございます。お
気に入り登録していただいた皆様にも御礼申し上げます。

感想、アドバイス、お待ちしております。

それではまた！

第41話 お冠のちびっこ軍師達、信頼の形（前書き）

投稿します。

久しぶりの拠点だったので文量のわりに時間かかりました。大丈夫かな・・・。

それではどうぞ！

第41話 お冠のちびっこ軍師達、信頼の形

先の袁術、呂布連合軍との戦から1週間がたった。戦後処理の方もようやく落ち着いてきたある日のこと・・・。

昴「朱里、今日の俺の分の書簡だ。終わったから後で確認しといてくれ。」

朱「わざわざお持ちいただいてすみません。」

昴「何、気にするな。」

そこへもう1人来訪者がやってきた。

雛「朱里ちゃん。頼まれてた報告書持ってきたよ・・・あ、ご主人様。お疲れ様です。」

昴「よお、雛里もお疲れ様。」

雛「お気遣いありがとうございます。」

昴「他に何かやることあるか？」

朱「いえ、今日のご主人様の分はそれで最後です。ですのでゆっくりおやすみください。」

昴「そうか、なら・・・ん？」

ふと見ると、朱里と雛里の卓には大量の書簡やら竹簡やらが並んで

いた。俺はそれを半分ほど手に取った。

朱「ご主人様？」

昴「これは俺がやるよ。」

朱「ご主人様！？それは私達の方ですのでお任せください！」

雛「そうです！ご主人様は休まれてください！」

昴「俺なら平気だつて。3人でやれば早く終わるだろ？」

朱「駄目です！私達に任せてください！」

昴「俺なら素早くちよいちよいと終わらせられるから気にせず俺に任せて……。」

朱・雛「ご主人様！」

昴「おおっ！？」

朱里と雛里がズイツと詰め寄ってきた。

朱・雛「そんなに私達は頼りないですか！？」

昴「いや、そんなことは……。」

朱「あります！ご主人様はいつもいつも私達の仕事を自分でやっちゃうじゃないですか！」

昴「いやそれは・・・。」

雛「平原にいた時もそうでした!」

昴「いや、あの・・・。」

朱「ご主人様がそうまで自分でなさろうとするなら私達はもう知りません!」

昴「いや朱里、雛里・・・。」

朱・雛「ふん!」

ああ、完全に怒らせちゃった。大変そうだから手伝おうしただけなんだけど・・・。

その日から朱里と雛里が口を聞いてくれなくなった。

昴「あゝ、朱里、こっちの仕事は終わったんだけど・・・。」

朱「・・・(プイッ)」

昂「雞里、報告書だよ・・・。」

雞「・・・っん。」

ああ、っらい・・・。

あれからあらゆる手を変え品を変え、話かけたけど口を聞いてくれ
なかった。癒し系なごみ系の2人に無視されるのは想像以上に精神
にくる。俺はとうとう耐えきれず・・・。

星「突然訪ねてきたかと思えば、どうされました？」

昴「うん・・最近朱里と雛里が冷たいんだ・・。」

星「おやおや・・。」

昴「くるわ、あの2人に無視されると精神にくるわ。」

星「最強誉れ高い主が形無しですな。」

昴「どうして怒ったんだろ?・・。」

星「うむ。それでは怒らせてしまった時の状況を教えていただけますかな？」

昴「ええと確か。」

・
・
・
・
・
・

星「なるほど・・・分かりました。簡単な話ですな。」

昴「どういうことなんだ？」

星「主は何事も1人で出来てしまう。1人でしてしまう。ただそれだけのことです。」

昴「どういうことだ？」

星「主よ。主は周りに頼らず、1人でこなしてしまう。臣下である我々から言わせてもらえば、頼ってもらえないのは辛いんですよ？かつての虎牢関での恋との敗戦。私も愛紗ほど思い詰めませんでした。主が恋を打ち倒した時、歓喜と同時に私も悔しくもあり、そして寂しかったのですよ？」

昴「寂しかった？」

星「私は主にとって必要な存在なのか。そう考えてしまうのですよ。」

昴「・・・あ。」

星「決して主が悪いわけではありませんが、我々に頼らず、1人で何でもこなしてしまう主を見ていると臣下としてはやるせない思い

なのですよ。」

・・・そうか。そうだったのか。俺はただ皆の負担を軽くしたい。その一心だったけど、その気遣いは皆にとっては重荷だったのか。そっぴゃ昔・・・。

『姫様が突撃開始しました！』

昴『何だと！姫様は何考えてやがる！』

・
・
・
・
・
・

？『おお、昴よ到着ご苦労、大義であつた。』

昴『大義じゃねえ！大将自ら最前線で突撃なんて何考えてるんだ！』

？ 『知れたことを、我自ら突撃すれば士気も上がり、被害も少ない
であろう？』

昴 『言いたいことはわかるがそれは俺がやれば良いことだろ？』

？ 『我は強い！何も案ずることはない！』

昴 『強いとかそういうことじゃねえ！』

？ 『さつきから過ぎたことをごちゃごちゃと、貴様は黙って……。』

昴 『そんなに俺が信用出来ねえか！？』

？ 『っ！？』

昴 『お前は一人で無茶ばかりするんだ。もう少し俺を頼っても
いいだろ？何かがあるか分からないんだ。俺をもう少し信頼してくれ。』

？ 『分かっておる……。そんなに怒らなくても良いではないか……。』

『

つてなことがあったな……。朱里や雛里もあの時の俺と同じ気持ちだったんだな。頼ってくれないもどかしさ、そして、寂しさ。

昴「……そうか。そうだよな。馬鹿だよな、俺。」

星「主は賢すぎるのですよ。今後はもう少し我々に寄りかかってください。主の信頼を賜る。それこそ臣下冥利に尽きるといっものです。」

昴「分かった。これからもっとたくさん皆を頼らせてもらおうよ。」

星「是非ともお願い致します。」

昴「早速2人に謝ってくるよ。」

俺は2人の元に向かおうとすると、

星「主、お待ちを……。」

昴「ん、どうした?」

星の呼び掛けに振り返ると、

ギョッ。

昴「!?!?!?!星?」

星が俺の胸に飛び込んだ。数秒ほど抱きつくと体を放した。

星「相談料は今のでよしとしましょう。」

昴「こんなことで良ければいつでも。また何かあったら相談にのってもらってもいいか?」

星「構いませんが次の相談料は値上がりしていますよ?」

昴「そうなの?」

星「次は体を合わせるのではなく...。」

星は人差し指を自分の唇に当て、

星「唇を合わせていただきますのでご容赦を。」

昴「恐れ多いな...今日は助かった。ありがとな。じゃ、また後で。」

俺は朱里と雛里の元に向かった。

あれから自室に戻り、侍女達に頼み、朱里と雛里を部屋に来てもらうようにお願いした。しばらく待っていると・・・。

ガチャ・・・。

部屋の戸が開かれた。

朱「な、何ですか？（プイッ）」

雛「わ、私達、忙しいんですよ（プイッ）」

ああ、まだ怒ってる。俺はそんな2人に対して、

昂「ごめんなさい！」

土下座をした。徐州一、美しい土下座を。

朱・雛「はわわ（あわわ）、ご主人様！」

昂「ごめん！俺、自分の事ばかりで2人の事何も考えてなかった。俺はただ皆の負担を軽くしたいと思っただけで2人を信用してないとかそんなことはないんだ。だからもう許してくれ！」

朱「そんな！頭をお上げください！」

雛「上げてください〜！」

昴「2人が許してくれるまで上げない。」

朱「そこまでしていただければじゅうぶんですから、だから上げてください〜！」

雛「もう許しますから〜！」

昴「ホントに？」

朱「ようやく気付いていただけたようなのでもう許します。」

雛「もう怒ってません。」

昴「ありがとう〜。朱里〜、雛里〜。」

2人に抱きついた。

朱・雛「はわわ（あわわ）〜／＼」

良かった。これで駄目なら俺死んでたかも。

・
・
・
・
・

朱「ホントは私達、怒っていたわけではないんですよ？」

昴「そうなのか？」

雛「はい。怒っていたのはご主人様にそうさせてしまう自分自身に
でして、ご主人様に対しては怒っていたというよりも・・寂しかっ
たんです。」

昴「雛里・・。」

朱「ご主人様は自ら最善の策を提示して自ら前線に出て剣を振るう
ことも出来ます。政務も淡々と素早く的確にこなしてまいります。
そんなご主人様を見ていると・・私達はいらぬのかなって思っ
てしまうんです。」

雛「ご主人様に当たってしまったのは筋違いなのですが、無力な自分
がとても腹ただしいです。何も役に立てない自分自身が・・。」

朱里・・雛里・・。

昴「馬鹿だなあ。」

俺は2人を抱き寄せた。

朱・雛「ご、ご主人様!？」

昴「俺は2人がいるから自信を持って策を出せる。2人がいるから前線に出れる。たとえ俺が間違つても2人が正してくれる。穴があつたら2人が埋めてくれる。俺が前線に出たらかわりに桃香を支えてくれる・・・だから俺には2人が必要なんだ。だから・・・俺に不満があつたり愛想が尽きたんじゃないかなければ、これからも傍にいてくれないか？」

朱「もちろんです!ずっとお傍にいます!」

雛「嫌だと言われても離れません!」

2人が俺を強く抱きしめる。

昴「ありがとな。2人とも・・・」

俺は2人の頭を撫でた。

朱・雛「えへへ／＼」

昴「2人にはいろいろな心配かけた。何かお詫びをさせてくれないか？」

朱「そんな!お詫びだなんて・・・!」

雛「そんなことしていただくわけには・・・」

昴「そうしないとこちらの気が済まない。是非ともお詫びをさせてもらいたい。」

朱「ご主人様・・・それでは・・・」

朱里が雛里の方を向く。

雛「うん。朱里ちゃん。」

雛里が頷く。

朱・雛「私達のお願いを聞いてください!」

昴「ホントにこんなことでいいのか?」

2人がお願いしたこと、それは・・・。

朱・雛『今日、私達と一緒に寝てください!』

っていうお願いだった。

朱「はい。これがいいんです」

雛「ドキドキ。」

2人はすでに寝間着を着てスタンバイしている。

昴「それじゃ、寝るか？」

朱・雛「はい！」

俺が寝台の真ん中に寝て、2人が俺の両サイドに寝る。しばらく話をしてしていると・・・。

朱「スウー・・・スウー・・・」

雛「スウー・・・スウー・・・」

2人はすでに眠っていた。

昴「おっと、もう寝ちゃったか。」

もう夜も更けているからな。

昴「ふあ・・・俺も寝るか。」

最近忙しくてあまり寝てなかったよな。

昴「おやすみ、朱里、雛里。」

俺もすぐさま眠りに落ちた。

チユツ。

翌朝

昴「……ん……。」

何かが頬に触れ、目を覚ました。

朱「はわわ／＼」

雛「あわわ／＼」

昴「朱里？雛里？」

……ああ、そういえば、一緒に寝たんだけな……。

昴「おはよう。朱里、雛里。」

朱「お、おはようございませゆ／＼、はう。」

雛「おはようございませゆ／＼、あう。」

噛んだ。可愛いなあ。

昴「起きてたなら起こしてくれば良かったのに……。」

朱「い、いえ、とても気持ち良さそうに眠っていたので……。」

雛「起こしてしまって申し訳ありません。」

昴「気にするな。起きるにはちょうどいい時間だ。」

朱「あの、ご主人様……。」

昴「ん？」

雛「私達は色々支度があるのでここで失礼致します。」

昴「そうか。」

朱「それでは後程。」

昴「ああ。また後でな。」

朱里と雛里が俺の部屋を後にした。

昴「さてと。。。」「

俺も支度するかな。

俺は着替えを始めた。

朱「口付けしちゃったね／＼」

雛「しちゃったね／＼」

昂より先に2人とも目が覚め、寝顔を見つめていたら2人とも気が付くと頬に口付けをしていた。

朱「寝顔も綺麗だったね。」

雛「そうだね。」

朱「ご主人様とても優しいね。」

雛「うん。とても優しい。」

朱「あの日、水鏡先生の所で出会ったのはきつと運命だったんだよ。」

雛「うん。あの日、出会うことができ良かった。」

朱「頑張っでご主人様を支えようね。」

雛「うん・・・後、ご主人様がいつか私達に振り向いてもらえるようにもっとお勉強しよう?」

朱「うん!そうだね!なら早速本屋でお勉強になる書物を買に行こう。」

雛「うん!」

2人は改めて御剣昂との出会いに感謝し、更なる忠誠を誓うのだった。

続く

第41話 お冠のちびっこ軍師達、信頼の形（後書き）

難産でした（<ー>）

文才無いせいでちびっこ軍師達を生かせなかったかも・・・。

感想、アドバイス、お待ちしています。

それではまた！

第42話とある雨の日、過去・・・(前書き)

投稿します。

今回は短めです。

それではごっごー！

第42話とある雨の日、過去・・・

昴side

昴「それじゃ、これを朱里と雛里に持って行ってくれ。」

「かしこまりました。確かにお届け致します。」

昴「頼む。」

侍女は俺の書簡を受け取ると部屋を後にした。

昴「んゝ。。。」

俺は大きく伸びをした。

昴「仕事終わった。」

今日の分の仕事は全て終わった。しかも今はまだ昼過ぎ。徐州に来てからこんなにも暇になったのは初めてのことだ。

昴「何するかなゝ。。。」

街にでも行くか・・・それともねねをいじめるもとい遊びに行くか・・・とりあえず外に行こう。

昴「おゝ、高いな。」

とりあえず城壁の上に来てみた。

昴「風も気持ちいいな。」

空は青く。所々に雲が広がっている。とりあえず城壁の上に寝転び、雲をボーッと見つめた。様々な形の雲をただボーッと見送った。

・
・
・
・
・
・

ポーツ……

昴「ふわぁ……。」

眠くなってきたな。ここのところ忙しくてゆっくり休んでる時間な
かったからな。

俺は流れる雲をただただ見送り、やがて……

眠りに落ちた。

桃香 side

桃「うーん……。」「

街の人からの陳情だけ……。

桃「どうしよう……。」「

うー、私じゃ判断出来ないよ。

桃「……。そうだ!」「

ご主人様に相談しよう!もうお仕事終わったみたいだけど、相談するぐらいいいよね

桃「うん！ご主人様探しに行こう！」

私は執務室を出て、ご主人様探しに向かった。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

星「主ですか？今日は見かけていませんが・・・。」

白「御剣か？いや、見てないな。」

ご主人様、何処に行ったんだろう？城の外には出てないみたいだけ
ど・・・。

桃「うーん、何処だろう・・・あれ？」

ふと見上げると、さっきまで晴れていた空は雨雲に覆われていた。

桃「雨、降るかな？」

空を覆った雨雲を眺めつつ私はご主人様を探しに向かった。

雨が降っていた。とても冷たい雨が・・。

ここに天命を迎えようとしている一人の王が横たわっている。

？「すまぬな・・我は・・ここまでのようだ。後のことは任せる。

頼む・・ぞ。戦をなくし・・皆が・・笑って暮らせる国を・・お前の手で・・作ってくれ。願わくば、お前と・・共に掴んだ平和な国・・で、お前と・・静かに・・暮らし・・たかった・・

」。

硬く握られた手から力が抜け、そして・地に落ちた。その瞬間、より一層強くなった雨が地を打ち付けた。まるで天が王が失ったことを嘆くが如く。

昴side

ザー！

昴「ん……。」「

俺は何か顔を打ち付け、目を開けた。いつの間にか眠っていたらしいな。それにしても……。。

昴「雨が……。」「

さっきまで晴れてたのにな。

昴「あの時と、同じ雨・・・。」

だからあんな夢を。

昴「・・・。」

智夜・・・。

共に平和のために戦った王。俺が誰よりも忠誠を誓い、絶対に、何があっても、命に変えても守ると誓った王。そして、誰よりも愛した王。

昴「・・・。」

今お前は俺を見て何を思っている？

怒っているか？泣いているか？それとも、呆れているか？

戦争を心から嫌い、そして憎み、誰よりも平和と幸せを願っていたお前が、未だに戦争に身を投じている今の俺を見たら・・・。

昴「わかってる。それでも俺は・・・。」

？「ご主人様？」

昴「ん？」

ふと見ると、そこには桃香がいた。

昴「桃香か、どうした？」

桃「うん。ご主人様に相談したいことがあって・・・それよりご主人

様びしょびしょだよ!？」

昴「ん、仕事が終わったからここで昼寝してたら・・・この有り様だ。」

桃「そうだったんだ。」

昴「それで、相談したいことって？」

桃「あ、うん、街の人から陳情がきて、私じゃ判断出来なくて。」

昴「わかった。すぐに行くよ。執務室だな？」

俺は立ち上がり、桃香横を抜けようとすると、

桃「ご主人様。」

昴「ん？」

桃「ご主人様は雨は嫌い？」

昴「・・・そうだな、嫌いだった。雨はいろんなことを思い出してしまっから。」

桃「今は？」

昴「今は・・・嫌いじゃない。雨が降ると大切なことを忘れずにいられるから・・・どうしたんだ突然？」

桃「ううん。何でもないの。少し気になって。」

昂「そうか。着替えたすぐに執務室に行くよ。」

俺は城壁から降り、自室に向かった。

桃香 s i d e

ご主人様が城壁を降りて行った。

桃『ご主人様は雨は嫌い？』

どうしてあんなこと聞いたんだろう・・・。

あれからご主人様を探していたら1人の侍女さんが城壁に登るのを見たと教えてくれたのでそこに向かった。もうすでに雨は強かったから、侍女さんはもういないのでは？って言われたけど城壁に向かった。何となくまだそこにご主人様がいる気がしたから。行って見たらそこにはご主人様がいた。すぐに声を掛けようとして・・・躊躇

踏った。そこにいたご主人様はとても……とても……

悲しそうだった。

戦で凜々しい顔、鈴々ちゃんやねねちゃん達と遊んでいる時の笑っている顔、私はご主人様のいろんな顔見てきた。どれも印象的で素敵な顔。でも、ご主人様の本当の顔は、あの悲しそうな顔なんだと私は思う。ご主人様はきつと辛いんだ。でもそれをずっと隠して、誰にも話すことなくずっと1人で戦ってきたんだ。そしてこれからもずっと戦い続けて……。

でも、そんなの駄目だよ。私はご主人様には笑っていてももらいたい。私じゃご主人様のことを理解してあげられないかもしれない。それでも私はご主人様の力になりたい。いつかご主人様の笑顔が本当の顔になれるように……。

続く

第42話とある雨の日、過去・・・（後書き）

今回は昴の過去の話をさせていただきました。ここいらで挟んでおきたかったので。

感想、アドバイス、お待ちしております。

それではまた！

第43話 大国襲来、苦汁の選択 (前書き)

投稿します。

すみません！諸事情により、遅くなりました！焦って書いたから問題あるかも・・・。

それではどうぞ！

第43話 大国襲来、苦汁の選択

昴side

いつものように政務やら軍務やらをこなしていると、北方に放った細作の1人が戻った。そしてその細作に告げられた内容は、

曹操と袁紹の激突。

この国での巨大勢力同士の激突だ。各々兵力は袁紹が総勢約10万に対し、曹操の総兵力は約4万。その差は2倍以上だ。この報告を受け、皆袁紹が優勢と予想しているが俺はそうは思わない。確かに兵力差だけ見れば袁紹が優勢だが、将兵の差はそれ以上。王の資質と器に関してはもはや天と地ほどの差がある。両者はぶつかり合い、結果は予想通りの曹操軍の勝利。袁紹は逃亡し、袁家はこの国の勢力図から消えた。これにより、華琳は冀州を取り込み、大勢力となった。一方、俺達は内政に取り組んでいた。というよりも取り組まざるを得なかった。理由は先の戦だ。結果だけ見れば完勝だが、徐州に赴任してすぐの戦であったこともあり、やはりそれなりに被害は出ていた。正直、華琳が冀州を納めることになったのはかなり痛い。体勢が整い次第徐州に侵攻してくるのは目に見えていたからだ。袁紹軍と曹操軍の戦いに雪崩れ込んで漁夫の利を得ることも頭にあったが、それは出来なかった。理由はまず先の戦いで疲弊したこと。兵力そのものは恋の兵力と美羽の兵力の残党を組み込んだことにより解決したが、戦はそれだけでは勝てない。まず恋の兵は練度はかなり高いのだが、俺達の兵と連携がすぐにはうまくいかず、実戦で戦うにはまだまだ調練が足りない。次に美羽の兵の残党だが、これは論外で、練度が圧倒的に低すぎる。言ってしまうえば賊や義勇兵よりマシな程度。実戦に連れて行けば役に立たないどころか足を引つ

張りかねないレベルだ。かといってその兵を外した兵力では戦えない。以上の理由から内政に従事した。

はつきり言つてこの乱世で何も動きをみせないのは致命的なんだが、こればかりはどうしようもない。華琳に関しては、祈るしかないな。じつくり体勢を整えるために時間をかけてくれることを。しかしこの祈りは届くことはなかった。それは国境を守っていた兵士の1人が傷ついた体と共に駆け込んできたことから始まった。

「申し上げます！北方の国境に突如、大軍団が出現！関所を突破し、我が国に雪崩れ込んできております！」

昴「っ！？」

来たか。ちっ、手を打つのが早い。

桃「ええっ！？大軍団って一体どこのっ！？」

昴「北方には曹操しかいないだろ。」

桃「あつ、そつか。」

愛「ぬう……。北方を平定し、治安を維持している曹操の手腕は認めるが、何故更なる戦いを望むのだ。」

朱「霸王として大陸を統一し、己の理想を現実の物とするためですよ。」

雛「あの人が本腰を入れて動き出せば、大陸は再び戦乱の渦に巻き込まれます。」

鈴「だけど攻めてきてる以上、戦うしかないのだ。」

星「鈴々の言う通りだな。……して、敵の兵数はは分かっているのか？」

「はっ、それが……。」

元々の領土に、冀州が加わったんだ。おそらくその兵力は……。

「敵の兵力はおよそ50万ほどかと。」

やはりか……。

桃「ご、50万!？」

「はい。地平線を埋め尽くすほどの人の波が、あつという間に関所を覆い尽くし、瞬く間に関所を破壊しつくしてしまったのです。」

桃「50万つて・・・。」

朱「我が軍の規模は約3万。義勇兵を募るなどをすれば何とか5万人には届きますけど・・・。」

星「勝負にならんど、これは。」

雛「敵よりも多くの兵を準備するのが、兵法の基本ですからね・・・。」

愛「しかし、我が国の住民を守るためにも、曹操軍を止めなければ！」

鈴「でも、5万人で50万人に勝てる方法なんて、考えたって見つからないのだ。」

想「しかし、何か策を講じねばこの国は守れんど？」

朱「その通りです。何か策を考えないと。」

雛「策・・・策・・・策・・・。」

皆が懸命に策を考える。しかし皆気付いている。5万で50万に勝つ方法などないことを。

昂「・・・現状で策なんてない。」

雫「・・・ではいかがなさいますか、昂様？」

昂「・・・徐州を放棄する。」

愛「!?!」

星「・・・それはつまり、逃げるといふことですか?」

昴「ああ。」

愛「お待ちください!それは徐州の民を見捨てるということですか!?!」

昴「・・・形的にはそういうことになる。」

愛「そんな・・・。」

星「逃げるとして、一体何処へ逃げるおつもりですか?」

昴「北は曹操、南は孫策、東は海だ。ならば必然的に西しかない。」

星「西というと荊州辺りですか?」

昴「いや、荊州は曹操と国境を接することになるから一時しのぎにしかない。」

想「ならば一体何処へ?」

昴「目指すのは益州だ。」

詠「ちよっ!益州って、ここからどれだけ距離があると思ってるのよ!?!」

昴「それは百も承知だ。しかし、今の俺達が生き延びるにはそこしかない。朱里と雛里の意見はどうだ？」

朱「・・・それしかないかと・・・。」

雛「益州は現在、継承問題がこじれて、内戦勃発の兆候が見られていますので・・・。」

桃「その隙を付いて益州に行くってこと？・・・でも、何だか気が進まないなあ。」

昴「やらなきゃ曹操にやられちゃう。どのみち内戦が起こればたくさん犠牲が出る。隙を付いて本城を制圧すれば、結果的に犠牲は少なくなる。」

朱「それに太守の劉璋さんの評判、あまり良いものではありませんし・・・。」

桃「そうなんだ。なら・・・身勝手かもしれないけど、劉璋さんのところに押し掛けちゃおう。」

昴「決まりだ。なら急いで支度をしよう。桃香と雛里と鈴々は書類を・・・。」

愛「お待ちください!」

昴「どうした、愛紗？」

愛「さつきから逃げるなど、益州へ行くのだの、この徐州はどうするのですか!？」

昂「だから放棄すると言っただろ？」

愛「我々が居なくなったら徐州の民はどうやって自分の身を守ればいいんですか!？」

昂「それは曹操が守ってくれる。曹操は名君だし、曹操軍の軍律の厳しさはかなりのものだから略奪だって起きない。何も心配はいらない。」

愛「だから逃げるのですか？」

昂「ああ。・・愛紗。納得出来ないのはわかる。だがこれは仕方のないことだ。勝ち目の戦いに住民を巻き込む分けにはいかないだろうか？」

愛「ですが・・・。」

昂「聞き分けてくれ、愛紗。負け戦と無駄死には違う。俺達は俺達の理想叶えるためにここで死ぬわけにはいかないんだ。」

愛「理想を叶えるために、徐州の民を見捨てるのですか？」

雫「・・・その辺にしておきなさい、愛紗。」

愛「黙っている雫。ご主人様が仰ることは分かります、ですがご主人様はどうしてそう淡々と見捨てると言えるのですか？」

雫「おだまりなさい、愛紗!」

愛「ご主人様は悔しくないのですか！？折角我らが発展させてきた国を奪われるのですよ！？民を身勝手に見捨てて、ご主人様は何とも思わない……。」

昴「そんなわけがないだろ！」

愛「っ！？」

皆が静まる。

昴「嫌に決まってる！悔しいに決まってる！俺だつてこの国を守れるならそうしたい！けどな、俺達がここにいることでこの国とその民を苦しめることになつちまう！この国の民にはすまないと思つてる。けどな、俺達は戦乱の世を終わらせ、皆が笑つて暮らせる国を作るという理想叶え、そしてそのために死に、殺めてきた者のためにも、俺達はここで終わるわけにはいかないんだよ！」

愛「ご主人様……。」

昴「ここにいる皆にもすまないと思つてる。予想出来た事態に何の対策も取らず、国を捨てて逃げるなどこんなことしか言えない愚かな俺を。天の御遣いと信頼してくれた皆の期待を裏切つたことを本当にすまない。でもこれだけは約束する。この屈辱を返す舞台は必ず用意する。だから今はこらえてくれ。頼む。」

俺は愛紗と皆に頭を下げた。

桃「頭を上げてよご主人様。私達は裏切られたなんて思つてないよ？ねっ、皆？」

昴「桃香……」

星「無論です。今の状況は誰であっても防げなかったでしょう。主に非はありません。」

昴「星……」

鈴「お兄ちゃんはいつも一生懸命なのだ！そんなお兄ちゃんが鈴々は大好きなのだ！」

昴「鈴々……」

朱「私達はどこまでもご主人様について行きますよ。ねっ、雛里ちゃん」

雛「うん。いつも誰かのことを思い、誰かのために行動するご主人様が大好きだから。」

昴「朱里、雛里……」

雫「わたくしは常に昴様と共にあります。昴様の行くところならば何処までもお側におりますわ。」

想「私はお前に生きる道と意義をもらった。その恩に報いるため、お前についてゆく。」

白「昴には間接的に命を救ってもらったようなものだし、桃香と同様に信頼している。私もお前についてゆくぞ。」

恋「昴と一緒にだと楽しい。昴のこと大好き。恋はずっと昴と一緒に

いる。」

ね「むむっ、ねねはあくまでも恋殿についてゆくだけですぞ！恋殿のついでについて行ってやるのです…！」

美「妾と昴はずっと一緒なのじゃ！」

七「私も美羽様と一緒にについて行きますよー」

月「私も自身の道をご主人様と共に歩みたいです」

詠「ボクもついていくわ。か、勘違いしないでよ。あくまで月のためなんだから！」

昴「皆…ありがとうございます。」

皆には感謝の気持ちでいっぱいだ。

昴「事は一刻も争う。すぐに行動に移すぞ。皆、準備に取りかかってくれ。」

皆「了解！」

昴「俺は街の長老達に事情を説明しに言ってくる。」

桃「私も行くよ、ご主人様。」

昴「しかしな…。」

桃「ご主人様だけに汚れ役を押し付けたくないから。だから私も行く。」

昴「・・・分かった、一緒に行こう。」

桃「うん！」

徐州脱出に向け、皆が動き出した。

俺と桃香で街に行き、街の長老や代表者を広場に集めた。

「それで、劉備様、御遣い様、お話というのは・・・。」

昴「ああ。今から話す。時間がないから単刀直入に言う。今この国に曹操軍の大軍50万が押し寄せてきている。」

「!?!、なんと・・・。」

民達がざわつき始めた。

昴「戦つても勝ち目がない。だから俺達劉備軍は徐州から逃げる。」
再び民達がざわつく。

昴「勝手なことを言ってますまない。これからは曹操の指示に従ってくれ。」

「……。」

民達は何やら話し合っている。

昴「話しは以上『お待ちください。』……何だ？」

「つまりはこの国を捨て、逃げるということですか？」

昴「……そうだ。」

「でしたら、我々も連れていってください。」

昴「!?!?……駄目だ。」

「お願いします！私達をあなた方と一緒に連れていってください！」

昴「それだけは駄目だ。もしついてくれば辛い思いをすることになるし、それについてくれば敵戦力と見なされ、攻撃される可能性がある。何、心配はいらない。曹操は君達に圧政を強いたり税率をあげたりはしない。少し戸惑うことになるかもしれないが、それだけだ。きつと君達の安全な暮らしを守ってくれる。だから安心してくれ。」

「御遣い様の言うことに嘘はないのでしよう。ならばお聞きしますが、曹操という王は御遣い様や劉備様のように私達のひとりひとりを気にかけるような方ですか？私達の顔と名前を覚えていただけの方なのですかな？」

昴「それは・・・」

「私達は安全で平和な国に暮らしたいのではありません、あなたが治める国に暮らしたいのですよ。ですのでお願いします。私達を連れて行ってください。」

昴「・・・辛い旅になるぞ？殺されるかもしれないぞ？」

「覚悟の上です。もし仮に死ぬことになったとしても、最後の最後までお2人の傍に居られたことを誇りに笑って逝きます。」

「そうですね！」

「死んだじい様にはいい土産話になりますぜ！」

昴「皆・・・。」

皆「・・・どうして・・・。桃香達も皆もどうしてこんなにも・・・。俺は自分の目から流れる涙を止めることが出来なかった。」

昴「どうして・・・。どうして皆命をかけられるんだ・・・。俺はお前達を見捨てたんだぞ？なのにどうして・・・。」

桃「ご主人様・・・。」

桃香が俺を抱きしめる。

「そんなあなただからついていきたいのですよ。私達なんかのために涙を流してくれるあなただから。」

桃「ご主人様、連れていってあげよう？ここまで慕ってくれる人達を置いていけないよ。」

「劉備様・・・」

桃「でも約束して。私達は何があっても皆を守るから。だから皆も最後まで生きること諦めないで。それを約束してください。」

「分かりました。皆も良いな。必ず生き残るのだ。いいな!？」

「了解ですぜ!」

「はい!」

昴「約束だぞ？ならば早く荷物を纏めて準備してくれ、すぐにでも移動開始するぞ!」

「」「」「はい!」「」「」

俺達の脱出劇が始まった。

俺達は準備を整え、支城や関所の兵を全て集め終わると、益州目指しての大行軍が始まった。最終的に6割の民がついてきた。持病持ちや体に障害がある民とその家族、残りは、

『いつか戻ってきた時のために誰か残る必要があるので、我々は残ります。』

という理由で残った。民を引き連れているため、当然行軍速度はかなり遅い。華琳との軍の差なんてものはあつてないようなものだが必ず守る。ここにいる将と兵と民は必ず俺が守ってみせる！

秋「おかしいな。」

春「ん？何がだ？秋蘭。」

秋「本隊よりもかなり先攻しているのに、劉備軍の姿が全く見えな
い。」

春「我らにまだ気付いていないのか。それとも恐れをなして震えて
いるのか。どちらかではないのか？」

秋「そこまで劉備が無能な輩とは思えんな。仮に劉備が無能であつ
ても、周囲の者も無能というのはありえん。」

春「それに劉備の周囲には関羽や張飛も居る、か。」

秋「何よりあそこには御剣昂が居る。」

春「・・・そうだな。」

季「兄ちゃん・・・秋蘭様、ボクが先行して見てきましょうか？」

秋「それは止めておいたほうがいいだろう。相手は昂だ。ここは慎
重に部隊を動かそう。」

季「りょーかいです。」

春「では行くか！」

秋「ああ。」

昴side

隨時斥候を放ちながら進軍している。もうまもなく長坂橋へ到達する。

とりあえずここまでこれたがもうすぐ接敵するな。

昴「敵はもうすぐ来る。部隊を2つに分けよう。先行して益州の城を落とす部隊と曹操軍の攻撃を防ぐ部隊の2つに分ける。」

星「それしかありませんな。幸い長坂橋を背にすればかなり時間が稼げます。後方の部隊に3万。前方に2万を割り振り、残りを民達の護衛に廻す、というのでどうですか？。」

昴「それで問題ないだろう。次に将の振り分けだが、先鋒は愛紗。護衛部隊は星が指揮を執ってくれ。恋とねねと想華は桃香の護衛を。次に殿だが・・・。」

桃「殿は私が受け持つよ。」

昴「悪いが桃香には殿よりも先頭に立って皆を導いてほしい。」

桃「でも、私は皆を……。」

昴「先頭に立ち、手を引いて歩く。これは桃香にしか出来ないことだ。桃香の励ましが皆を勇気付けてくれるはずだ。」

星「主の言う通り。桃香様は導き手だ。それは桃香様にしか出来ないこと。」

鈴「そうそう。」

桃「うん、分かったよ。」

昴「話しは決まった。皆配置につくぞ。桃香は前方に。俺は後方につく。」

愛「ご主人様！あなたも桃香様と共に前方に居るべきです！あなたも導き手の一人なんですから！」

昴「俺は桃香のような導き手ではなく、皆を守る守り手だ。それに俺が後方に居れば曹操に対しこれ以上にならない威嚇になる。曹操は俺の事をよく知ってるし頭も良いから俺が居れば迂濶には仕掛けてはこれないだろう。」

愛「むう……。」

昴「たびたび悪いが他に手が無いんだ。聞き分けてくれ。」

愛「・・・分かりました。ですが・・・」

昴「心配するな、必ず務めを果たし、無事戻る。」

愛「約束ですよ?」

昴「ああ。それじゃ皆、持ち場についてくれ。」

皆「了解!」

それぞれが持ち場へと向かっていった。

鈴「お兄ちゃん、これからどう布陣するのだ?やっぱりこの橋の前に布陣するの?」

雫「それが最良ですわね。」

昴「橋は利用するが・・・鈴々、雫、2人は後方にいつでも迎撃できる体勢をとりながら後方についていていてくれ。」

鈴「?、どうということなのだ?」

雫「この長坂橋を利用しない手はないかと思いますが・・・。」

昴「策を仕掛ける。説明してる時間がないからとりあえず従ってくれ。」

鈴「ん〜、よく分からないけど了解なのだ!」

雫「昂様？」

昂「どうした？」

雫「・・・分かりましたわ。必ず合流してくださいね。必ずですよ？」

昂「分かってるって。」

鈴々と雫は民達の後方へと向かった。

昂「さてと・・・。」

ここからは俺次第だ。

昂「始めるか。一世一代の」

昂「大勝負を。」

秋蘭side

我らが彭城に向かうとそこは劉備の姿はなかった。他にも住民の数が少ないなどと奇妙なことだらけであった。このことを華琳様に報告すると、劉備は徐州を捨て、益州へと逃げる算段を取ったという結論に至った。そして姉者と季衣と霞を連れ、劉備達の追撃へと向かった。進軍していると、先ほど放った斥候が戻ってきた。

「長坂橋の手前に敵影を見つけました。」

秋「やはり長坂橋を利用してきたか・・・それで、率いている将と兵数は？」

「そ、それが・・・」

春「？、どうした？」

「長坂橋前には、御剣昴、たった一騎です！」

春「何だと！？どうする、たった一騎なら兵を突撃させるか？」

秋「いや、昴が策も無しに出てくるとは思えん。我らが先行し様子

を見よう。」

春「分かった。」

たった一騎だと？昂め何を考えている。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

長坂橋前にたどり着くとそこには本当に昂がただ一騎たたずんでいた。見たところ伏兵も見当たらない。

秋「久しぶりだな。昂。」

昂「そうだな。連合以来だな。」

春「ところで貴様、こんなところで一人で来て、一体何を企んでいる？。」

昂「企み？特にこれといった策はないよ。」

季「じゃあもしかして、投降しに来たの？」

昴の投降と引き換えに劉備を見逃してもらおう。これなら合点は行く。実際華琳様なら了承するだろう。

昴「はずれた。」

遼「ほんなら昴一人で殿か？せやったらウチらも舐められたもんや。」

やはり殿か……。

昴「それもはずれた。」

何だと。投降でも殿でもなければ、昴は一体何しにここに来たのだ。

昴「俺さあ、」

秋「？」

昴「今日ほど自分か情けないと思ったことはない。桃香達には屈辱を、民達にはかなりの苦勞を強いてしまったからな。」

秋「……突然なにを……。」

昴「それなのに皆は俺を好きだって、信賴しているって、どこまでもついて行くって言うんだ。すごい嬉しかった。」

昴は構わず続ける。

昴「恨まれても、罵倒されても仕方ないのに俺に優しい言葉を掛けてくれる。ホント、皆いい人ばかりだ。」

秋「……。」

昴「だからさ、そんないい人達をみすみす死なせたくないんだよ……だから……。」

秋・春・季・遼「っ!？」

突如体が重くなり息苦しくなる。

昴「そんな皆を苦しめるお前達は絶対許さない。」

昴から膨大な量の殺気があふれだす。

昴「投降？ 殿？ 違うよ、俺はお前達を殲滅しに来たんだよ……さあ行くよ？ 俺の全力、お前達に見せてやるよ。そして後悔させてやるよ、お前達が誰を怒らせたかを。死ぬ覚悟出来た奴から来い！」

長坂橋での戦いが今始まる。

続
く

第43話 大国襲来、苦汁の選択 (後書き)

徐州脱出です。鈴々のお株を奪う形で昴に殿をさせてしまいました。少しご都合主義が続くかもしれませんが悪しからず。あと麗羽達の姿がありませんでしたが、原作通りに保護していますので。次話で何とか出せたら出します。

感想、アドバイスお待ちしています。

それではまた！

第44話、長坂橋殿戦、昴の全力（前書き）

投稿します。

時間が掛かったわりに中身はかなりののご都合主義です。それでも大丈夫な方は読んでいってください。

それではどうぞ！

第44話 長坂橋殿戦、昴の全力

雫 side

昴様が行かれて幾ばくか経ちました。今のところ後方に敵兵の姿はありませんが・・・。

鈴「お兄ちゃん、遅いのだ・・・。」

雫「昴様・・・。」

鈴「策を仕掛けるって言ってたけど、お兄ちゃんはどつやって曹操達の大軍を足止めする気なのかなー？」

雫「それは・・・。」

鈴「鈴々なら1人で曹操なんてぶっ飛ばしてやるのだ！」

雫「鈴々さんならやれそうですね。」

わたくしには無理でしょうけど・・・。

鈴「お兄ちゃんはどつするのかなー？雫お姉ちゃんは分かるー？」

雫「それは・・・。」

これを教えてしまったら鈴々さんは・・・。

鈴「むう、知ってるなら教えてほしいのだ！」

雫「・・・先ほど鈴々さんがおっしゃった通りですわ。」

鈴「？、どういうことなのだ？」

雫「昴様はおそらく長坂橋を背にしてお一人で曹操軍を食い止めるつもりなのですわ。」

鈴「！？、そんな・・・お兄ちゃん！」

とっさに反転しようとする鈴々さんの肩を掴んだ。

鈴「放すのだ！鈴々はお兄ちゃんを助けに行くのだ！」

雫「お待ちなさいな。ここで昴様の指示以外の行動を取ってしまうばかえって昴様を困らせてしまいますわ。それに鈴々さんがここを離れてしまったら誰が民を守りますの？」

鈴「でも・・・。」

雫「昴様は聡明なお方ですわ。窮地に陥っているこの状況で決して出来ないことは致しませんわ。責任感がお強いお方ですから多少無茶はしても無理はしません。昴様は必ず合流するとおっしゃいました。ですから昴様を信じて待ちましょう。帰ってきたら文句を言うてさしあげなさい。」

鈴「分かったのだ！うう鈴々を仲間外れにして・・・。」

どうやら落ち着いたようですわね。昴様。わたくしも鈴々さんと同

じ気持ちですわ。とりあえず今は、ご無事とご帰還をお祈りいたしますわ。

昴side

ジリツ・・・

長坂橋前に曹操軍の追撃部隊が現れ、宣戦布告を告げてからにらみ合いが続く。今俺は殺気を解放しながら橋前を陣取っている。

昴「どうした、こないのか？このままお見合いでも俺は構わないけどな。」

春「くっ！」

膠着状態が続く。春蘭達も動かない・・・いや、動けない。俺が放つてる殺気はそれだけの量だからだ。

昴「どうしたよ？来ないのか？ここまで来て怖じ気づくくらいなら始めから侵攻なんかしてくるなよ・・・なあ！」

さらに殺気を強める。

「うぐ・・・。」

「かはっ・・・。」

殺気に当てられ、耐えられなくなった。兵士が気絶、もしくは過呼吸を起こし始めた。

秋「！？、兵士は全員距離を取れ！お前達ではこの殺気に耐えられん！」

命令に従い、兵士は後ろへと下がった。今長坂橋周辺にいるのは春蘭、秋蘭、季衣、張遼と俺だけになった。

昴「俺が1人で来た理由の1つは、俺が本気で殺気を放つと敵ばかりか味方をも巻き込みまうからだ。俺は敵だけに殺気をぶつけるなんて器用な真似はできないからな。」

秋「ちっ！」

再びにらみ合いが始まる。しかしこのにらみ合いは長く続かなかつた。この沈黙は・・・。

季「あ・・・あ・・・うわああー！」

季衣によって破られた。季衣は自身の得物である岩打武反魔で俺を

狙った。

季衣、俺の殺気に耐えられなくなったか……。人間ってのは不思議な生き物で、通常は恐怖にかられると逃げ出すか何も出来なくなるんだが、恐怖の中に責任感が加わると、人間はその恐怖に向かってしまう。そこに勇敢も暴走もない。ただ自身の恐怖を振り払うだけの特攻。

秋「季衣、よせ！」

秋蘭は制止をするが季衣には届かない。

季「やあぁー！」

俺は向かってくる鉄球を半身になって避ける。

季「くっ、まだまだ！」

季衣は鎖を手繰りよせ、鉄球を俺に叩きつける。
俺は左に飛んで避ける。

ドゴオン！

俺がさっきまでいた場所が大きく陥没した。たいした威力だ。

季「くっ、これでー！」

鉄球を一度自分のもとに戻し、再度俺に叩きつける。

昴「すう。」

俺は一度息を吸い、村雨に手をかけ、

昴「はあ！」

ガギン！

俺は村雨で鉄球を弾き飛ばし、すかさず縮地で季衣に飛び込んだ。

季「ぐう、もう一度・・・！？、何処に・・・。」

昴「ここだ。」

俺は季衣の背後に回り、

トン。

季「あ・・・。」

季衣の首筋に手刀を当て、気絶させた。

昴「これで1人。次は誰だ？断っておくが、今の俺は虎牢関での戦いで恋・呂布と戦った時より強いぞ。来るなら心して来い。」

恋との戦いの折り、もちろん手を抜いていたわけではない。俺は殺気を押し殺して恋と戦った。本気と言っても殺気を押し殺した状態じゃないところ実力の8割程度が関の山だ。今は殺気を解放してるから10割、つまり全力で戦っている状態だ。

昴「次は春蘭か？それとも秋蘭？張遼か？ま、俺を仕留めたいなら・
・全員で来るんだな。そうすれば可能性がわずかにあるかもな。」

秋「くっ！」

遼「この……。」

秋蘭と張遼が俺の挑発にのり、前に出かけるが、

春「待て！」

秋「姉者？」

遼「何や惇ちゃん？」

春「次は私が行く。」

秋「姉者が？」

遼「あかんで！いかに惇ちゃんでも1人じゃ危険や！」

春「私とて武人。この場で昴を超える。それに、この中で昴の殺気に慣れているのは私だ。ここは私に任せろ。」

秋「姉者……分かった。」

遼「分かった。気いつけてや。」

春「おう！……昴！次の相手は私だ、行くぞ！」

春蘭が七星餓狼を抜き、俺に飛び込む。

昴「・・・後悔するなよ、はあ！」

ガギン！

俺の村雨と七星餓狼がぶつかる！

なるほど、俺が華琳の所にいた時より確実に強くなってるな。

ガギン！ガギン！ガギン！

数合に渡り、斬り合いをした。・・・よし、もう修正は出来た。とりあえず前の春蘭と今の春蘭の誤差を修正出来た。

昴「どうした？この程度か？」

春「っ！？、黙れ！」

春蘭は激昂し、真っ直ぐ俺に飛び込む。

ドゴオン！

春蘭の一撃が地に大きく穴を開けた。

昴「へえー、破壊力“だけ”は一級品だ。」

春「ぐぐぐっ、いつまでも見下したような言葉は吐かせんぞ！」

春蘭はさらに激昂し息をつかせない攻撃を繰り出してきた・・・が。

昴「お前のそういうところは相変わらずだな（ボソッ）おいおい、ちゃんと狙ってんのか？」

春「くそっ！くそっ！」

春蘭が俺の言葉を聞き、攻撃がどんどん単調になっていく。増すのは威力ばかりだ。

昴「はあ……。やっぱり劉備を選んで正解だったな。お前程度に将を任せる華琳だ。目が節穴の王に先なんてないだろうからな。」

春「！？・・・取り消せ・・・。」

昴「ああ？」

春「取り消せ！私の事ならいざ知らず、華琳様の侮辱は許さんぞ！」

昴「事実だろ？気に入らないなら黙らせてみな。」

春「言われるまでもない！すぐに地獄に叩き落としてくれる！うおおおおー！」

春蘭は怒りで完全に我を忘れ、襲いかかる。

ヒュン！ブオン！ビュン！ブン！

俺は春蘭の攻撃避け続ける。威力も速さもあるが単調過ぎて避けやすいことこの上ない。

昴「誇りを汚され、増すのは力ばかりか。これ以上何もなければ・・・。」

パシッ！

春蘭の手首を掴み取る。

昴「これで終わりだ。」

俺は春蘭の腹に蹴りを入れる。

春「がはっ！」

春蘭が後方に弾かれた。すぐさま体勢を立て直すか……。

春「ぐっ……。まだ……。まだ……。っ！？」

春蘭が自分の背後に回りこみ、村雨振り上げた俺の存在に気付く。

昴「春蘭、これも戦の習いだ。」

春「あ……。」

俺は振り上げた村雨を……

春蘭に振り下ろした。

張遼 side

ドゴオン！

昴が長剣を惇ちゃんに叩きつけた。

遼「惇ちゃん！」

昴の長剣からは血が滴り落ちていく。惇ちゃんは血まみれでピクリとも動かん。

遼「昴は・・・惇ちゃんを・・・殺ったんか？」

ウチはその事実を頭で理解出来なかった。

秋「姉者・・・？」

妙ちゃんが惇ちゃんを呆然と見つめている。

昴「これで2人目。」

秋「姉者・・姉者・・姉者――！」

妙ちゃんが叫ぶ。

昴「・・・。」

秋「昴！よくも、よくも姉者を！」

妙ちゃんが矢を3本つがえ、昴に打ち出す。昴はその内の1本避け、残りの2本長剣で弾く。

秋「このお！」

妙が再度矢をつがえ、放つ。昴はそれを弾き、秋蘭との距離を詰める。次々放たれる矢を弾き、避けつつけ、どんどん距離を詰めていく。妙ちゃんと昴との距離が5、6歩ほどのところで3本の矢を放った。

あの距離であの数は避けられん！直撃を確信したが昴はその矢を片手の指の間に挟みこんだ。

秋「っ！？」

遼「なっ！？」

あの距離で矢を片手で掴んだんか？

昴は長剣を放り投げると昴の右手が光始めた。

昴「旋氣掌。」

昴は光った右手を妙ちゃんに叩き込んだ。

秋「がはっ！」

妙ちゃんが後方に大きく弾かれた。

秋「く・・・そ・・・。」

昴「体に氣をぶちこんだ。しばらくはまともに体を動かせないだろ・・・。」

昴は先ほど放った長剣を掴み、ウチに振り返った。

昴「さて・・・張遼、君で最後だ。」

遼「くっ！」

あかん！どないする！？このままじゃ・・・。しゃーない、こうなったら・・・。

昴「全隊で突撃、か？」

遼「っ！？」

読まれとる！？突撃はあかん！ここは・・・。

昴「一度華琳と合流して再度追撃、か？」

遼「っ！？」

なんでや……。なんで昴は……。

昴「自分の考えてることが分かるんだ？」

遼「っ！？……なんやねん……昴、あんたは妖術使いなんか？」

昴「さて、どうだろうな？」

どうする！？人の心を読む人間相手にどうすれば……。

昴「考え事は結構だが、相手から氣を反らすのはよくないな……。」

遼「っ！？？」

氣が付くと昴はウチの頬を触れていた。

遼「くっ！」

ウチは自分の得物で昴を振り払った。しかし昴をとらえることは出来なかった。

遼「！？、何処や……。」

昴を見失った！一体何処に……。

トン。

突如背中に何かが当たった。

遼「っ!?!」

すぐさま前方に飛び、振り返った。昴は手刀を構えて立っていた。

昴「もし俺がその気だったらお前は死んでたな。」

あかん……。ウチは……。殺られてまう。ウチの神速なんて目やない……。速さも、実力も何もかも違いすぎる……。ウチが死を覚悟したその時、

?「そこまでよ!」

とても力強く、凜とした声が響いた。

昴「わりと早かったな……。華琳。」

そこには孟ちゃんがいた。

華琳 side

先陣の春蘭から昴が殿に来ているという報を受け、嫌な予感がしたから急ぎ彭城を制圧し、本隊を長坂橋に急がせた。到着すると、倒れている季衣。起きあがろうとする秋蘭。顔を蒼くしている霞。そして、

華「っ!？」

血まみれで倒れている春蘭の姿があった。

琉「春蘭様！秋蘭様！季衣！」

琉流が3人に駆け寄る。

華「昴。あなた春蘭を殺したの？」

昴「・・・だとしたら？」

華「私はあなたを・・・あなた達を許せなくなるわ。」

私はありつただけの殺気と覇気を昴にぶつけた。

昴「・・・。」

華「・・・。」

私と昴がにらみ合う。

昴「ふう。俺の役目は殿だ。足止め以上のことはしないぞ。」
どういふこと？

琉「華琳様！」

華「どうしたの、琉流！？」

琉「春蘭様ですが、これ、血ではなく、赤い染料です。」

華「染料？」

昴「あれは血じゃなくて赤染料だ。」

遼「どういふことや？アンタは確かに惇ちゃんに長剣を振り下ろしたやないか？」

昴「振り下ろしはしたけど、当ててはいない。当たる直前に逆の手で手刀を落として気絶させただけだ。多分秋蘭の方が重傷だぜ？」

秋「姉者……。」

ようやく回復した秋蘭が春蘭に駆け寄る。

春「う……秋蘭？」

秋「！？……姉者ー！」

春「うおっ！秋蘭！？」

秋「良かった・・・良かった・・・」

秋蘭が涙を流し、春蘭を抱きしめる。
良かった・・・。無事だったのね。

遼「何でそないな悪趣味な真似を？」

昴「秋蘭の判断力を奪うためだ。」

遼「？、どういうことや？」

昴「俺にとって1番やられて困ることは全兵全将による突撃だ。それをやられるとさすがに突破されちまうからな。秋蘭なら個別の騎討ちの危険性をすぐに理解できる。だからまず殺気を放って季衣を怯えさせて前に引っ張り出して、次に春蘭を挑発して殺したと見せかけたんだ。目の前で春蘭が死ねば冷静さを保てないだろうからな。」

遼「なるほど・・・ほなら昴は人の心がホント読めるんか？」

昴「読めるわけないだろ。あの状況じゃ突撃か撤退しか選択肢しかない。後は表情を見れば何を考えてるかはだいたい分かるよ・・・さてと。」

昴が私に振り返る。

昴「華琳と本隊が到着したようだが、どうする？まだ劉備を追撃するか？」

華「する。と言ったら？」

昴「それじゃあしょうがない。橋を落として後は可能な限り道連れにするだけだ。」

華「そう。。。」

本気ね。

華「いいわ。私達は徐州を手に入れたことでよしとするわ。これ以上は望まないわ。」

昴「いいのか？」

華「ここであなたを討ち取ることができてもその代償が大きすぎるわ。今は見逃すわ。」

昴「そうか。。なら、お言葉に甘えさせてもらうよ。」

華「一応聞くけど、昴、あなた私のところに来るつもりはない？」

昴「。。悪いな。俺の理想は華琳のもとでは叶わない。」

華「あなたは今でも皆が笑って暮らせるようにするなんて理想を追っているの？」

昴「ああ。」

華「あなたほどの人間がそれが不可能であることに気付かないとは思えないのだけれど？」

昴「分かっているさ。俺だって、それが完全な形で叶うとは思わ
ない。それでも俺は少しでもこの理想近づけるために劉備とこの乱世
を歩むつもりだ。」

華「甘いわね。劉備も、そしてあなたも。」

昴「よく言われるよ。それでも信じたんだ。想い続け、願い続け、
努力し続ければいつかそれは叶うって。」

華「そう・・・私には理解できないわ。」

昴「だろうな。ま、いいさ。」

昴・・・あなたはやはり私とは相容れないのかしら・・・

春「昴ー！死ねー！」

昴「うおっ！」

ブオン！

春蘭が昴に斬りかかった。

春「貴様、よくも華琳様を侮辱したな！その罪万死に・・・」

華「やめなさい、春蘭！」

春「か、華琳！？し、しかし・・・」

華「春蘭、私の言うことが聞けないのかしら？」

春「う・・・分かりました・・・（キッ！）」

春蘭が昴を睨み付ける。昴は何を言ったのかしら？だいたい検討はつくけれど。」

昴「春蘭、さっき言ったのは本心じゃない。君を怒らせるための嘘だ。」

春「えっ？・・・そうなのか？」

昴「当たり前だろ？華琳みたいな優秀な王の目が節穴なわけがないだろ。」

春「そうか！華琳様は偉大なお方だからな！」

昴「まあな・・・ところで、春蘭、左目どうしたんだ？」

春「う・・・袁紹の戦いで流れ矢に・・・あまり見ないでくれ。」

春蘭が昴から顔背ける。

昴「災難だったな。でもな左目を失ったって何も変わらない。春蘭の魅力は失わないよ。」

春「・・・嫌いになつたりしないか？気味悪がつたりしないか？」

昴「なるわけないだろ？」

昴が春蘭の頭を撫でる。

春「／＼・良かった・。」

春蘭、良かったわね。

季「兄ちゃん？」

昴「目が覚めたか、季衣。」

季「・良かった、ボクの知ってる兄ちゃんだ。」

昴「怖がらせて悪かったな。」

季衣の頭を撫でる。

季「えへへ／＼」

昴「それじゃ、俺は劉備のところに戻らせてもらつよ。」

昴が長坂橋に向かう。

華「昴。」

昴「ん？」

華「私はいずれあなたを手に入れるわ。覚悟しておくことね。」

昴「ああ。覚悟しておくよ・・・それじゃ俺からも・春蘭。」

春「おう!?!?」

昴「いちいち相手の言葉を鵜呑みにして安い挑発にのるな。お前がただの武人か一兵士ならいいがお前は将だ。お前の死は華琳の死に繋がることだってあり得るんだ。戦場じゃ頭を少し冷やせ。」

春「ああ。分かった。」

昴「次に秋蘭。」

秋「何だ？」

昴「一矢一殺はさすがだがそれにこだわりすぎだ。矢に限りがあるから無駄打ちしたくないのは分かるが、狙いの確に急所ばかりくるから慣れれば目を瞑ってたって避けられる。もっと駆け引きを覚える。」

秋「肝に命じておこつ。」

昴「張遼。」

遼「何や？」

昴「君は窮地に立たされた時の決断力が一步遅い。だから簡単に先手を取られる。もう少し即決力を磨け。」

遼「・・・分かった。忠告ありがとうな。」

昴「季衣は経験不足だな。戦場をもう少し経験すればまだまだ伸びるだろ。」

季「分かったよ、兄ちゃん！」

華「敵に助言なんて余裕ね。自分の首を絞めることになるわよ？」

昴「そしたら俺達はもっと強くなるまでさ・・・それじゃまたな。」

昴は長坂橋を渡っていった。

季「兄ちゃん・・・行っちゃった。」

華「今は昴を劉備に預けるわ。いずれどうどうと昴を手に入れましよう。皆、ここより撤退するわよ！急ぎ、準備しなさい！」

皆「御意！」

昴、また会いましょう。私の霸道、あなたの王道、どちらが優れているかじきに分からせてあげるわ。

長坂橋の戦いは終結し、第一の困難は退けられた。

続く

第44話 長坂橋殿戦、昴の全力 (後書き)

どうだったでしょうか？展開的に少しあり得ないかなって少し反省
しています (^ー^;))
しかし悔いはない！

感想、アドバイスお待ちしております。

それではまた！

第45話 益州到着、馬家の姫君と憧れ (前書き)

投稿します。

今回は文章の割りに話は進んでいません。小説って難しい (TOT)

それではごっごー！

第45話 益州到着、馬家の姫君と憧れ

桃香 side

ご主人様と鈴々ちゃんと雫さんが殿に向かい、私達は益州を目指していき、ついに益州の国境近くにあるお城へ着いた。劉璋さんから人心が離れているのでお城の人や住民は私達を受け入れてくれた。曹操さんの軍もご主人様達のおかげで私達のところには来なかった。やっぱりご主人様達はすごいです。いざ入城！と行こうとしたその時、北方から砂塵が上がったという報告がまいこんできた。もしご主人様達が来たなら東方からのはずなので、愛紗ちゃんと雛里ちゃんが軍を率いて向かってもらった。お城に入城し、私はご主人様達と愛紗ちゃんの帰りを待っている。

桃「……。」

もう日も暮れて、辺りはすっかり夜になってる。未だに帰還の報告は来ていない。

桃「ご主人様・・・愛紗ちゃん・・・鈴々ちゃん・・・雛里ちゃん・・・雫さん……。」

何度も呟いた名前。けど私には祈ることしかできない。

星「……いつまでここにいらっしやるつもりだ？」

桃「……ご主人様達と愛紗ちゃん達が帰ってくるまで、ここから動くつもりは無いよ。」

星「しかし・・・少し風が出てきた。そろそろ屋内に入らないと体調を崩しますぞ?」

桃「大丈夫。身体はちょっと寒いけど、心の中は真っ赤に燃えてるから。」

星「だから寒くないと?」

桃「うん。」

星「理想に燃える女と言うわけですな。」

桃「心配に燃えてる女でもあるよ?」

星「分かっておりますよ。・・・しかしな、桃香様よ。まだ星は落ちてはおりらん。皆、無事に戻ってくる。」

桃「あれ?星ちゃんって天文に通じてたっけ?」

星「いや。あれほどの人物達に何かあれば、天とて反応せずには居られまい、と。そう考えているわけです。」

桃「・・・そっか。そうだよな。何かあれば・・・すぐに分かるよね。」

星「ええ。そして今、何も無い。それが無事である証拠ですよ。」

桃「うんっ!」

星「納得していただいたところで、そろそろ屋内に入りませんか?」

桃「やだ、ここで待ってる。」

星「うーむ、しかしいつ頃か帰還になるか、分らないのですよ?」

桃「それでも待つてる。・・今の私には待つことしか出来ないけど・
・待つことだけはずっと出来るんだから。」

星「ふむ・・では肩掛けをお持ちしよう。夜風は身体だけではなく、
心にも染み入りますからな。」

桃「ん。ありがとう。」

星「では・・。」

星ちゃんが戻ろうとしたその時、

「申し上げます!ただいま殿が民間人と共に戻られました!」

星「桃香様!」

桃「うんっ!」

・
・
・
・
・
・
・
・

・・・

桃「みんな！」

鈴「ただいまなのだ！」

雫「帰還致しましたわ。」

桃「鈴々ちゃん・雫さん・無事で良かった・・・。」

ね「むう、ねね達を忘れていませんか!？」

桃「ごめんなさい!ねねちゃん、恋ちゃん、想華さんも無事で良かった。」

ね「まあこれしきのこと、ねねにとっては朝飯前ですからのー。」

恋「・・・ん(コクツ)」

想「我らの務めを果たしたまでだ。」

桃「うん!そうだね!・・・あれ？」

1番会いたい人の姿が見えない。どこに行ったのかな?

桃「ねえ、ご主人様は？」

「「「「「・・・。」」」」」

どうしたんだろう？何で何も言わない・・・まさか!？

桃「ご主人様に何かあったの!？」

鈴「・・・お兄ちゃんは・・・。」

ご主人様は?・・・どうしたの？

鈴々ちゃんが言葉を続けようとしたその時、

愛「ただいま戻りました、桃香様。」

桃「あ、愛紗ちゃん・・・。」

愛「鈴々達も戻っていたか、信じていたぞ・・・ん?ご主人様の姿見えないが・・・。」

再び愛紗ちゃんにより同じ質問が投げかけられる。

鈴「お兄ちゃんは・・・1人で曹操を足止めに行ったのだ・・・。」

桃「!？」

「「「!？」「「「

桃「そんな・・・。」

ご主人様が・・・どうして・・・。

愛「鈴々!なぜご主人様を止めなかった!」

鈴「・・・ごめんなさいなのだ。」

雫「お待ちなさいな。」

愛「何だ！」

雫「鈴々さんは何も悪くありませんわ。この娘は昴様を救出に向かおうとしましたわ。わたくしがご自分に任された務めを果たすようたしなめました。責はわたくしにあります。」

愛「なら貴様のご主人様を黙って行かせたのか？ご主人様が無茶をすると知っていて行かせたのか！？」

雫「・・・半信半疑でした。昴様がそのような行動を取るとは思いたくありませんでしたわ。」

愛「貴様ー！やはりお前など・・・。」

桃「やめて愛紗ちゃん。」

愛「桃香様・・・？」

桃「誰も責めることは出来ないよ。多分誰であつてもご主人様を止めることは出来なかった。それに・・・ご主人様にそうさせてしまったのは私達だよ。」

愛「私達、が？」

桃「私達はご主人様に頼りきりだった。戦でも、政でも。ご主人様に天の御遣いと崇んで、ご主人様に責任と重圧をかけた。そして曹

操さんが攻めてきて、ご主人様は全部を自分のせいにした。」

愛「そんな！私達はそんなつもりは・・・。」

桃「私達はそうだよ。・・・でもね、ご主人様はどうか？ご主人様
がきつと自分の責任にしたと思う。」

愛「っ！？」

桃「私はご主人様とは比較にならないけど、まがいなりにも、皆の
主だからその気持ち分かるの。考えてみたら、私も、皆も、最後に
はご主人様が何とかしてくれる。頭の片隅にそういう考えがあった
そうでしょ？」

「「「「「・・・」」」」」

桃「皆無意識の内にご主人様に頼りきっていたんだよ。ううん、1
番頼りきりにしたのは私。いつもご主人様に決断してもらって私は
何もしてない・・・だから愛紗ちゃん、雫さんを責めないで。責める
なら私を・・・。」

愛「そんな！桃香様は悪くありません！ご主人様を追い詰めたのは
私です！徐州で心無い言葉を掛けた私が・・・。」

桃「そんなこと・・・ううん、やめよう？責任は皆にあるんだから。
ご主人様が帰ってきたらちゃんと伝えよう？私達の言葉を。」

星「うむ、だがそれだけでは主は理解してくださらないだろうから
きっちり説教を交えて伝えましょう。」

桃「うんっ！ちゃんとご主人様に届けようね！」

「「「「はい！」「」「」

皆で強くならなきゃ。そしてご主人様に無茶をさせないように。

？「あの〜！」

桃「？」

？「取り込み中すまない。」

桃「ええつと・・・？」

誰だろう？

愛「ああ、待たせてしまつてすまない。」

？「こつちこそ勝手に上がり込んですまない。何か揉めてる声が聞こえたから来たんだが・・・。」

愛「心配かけたな。そちらとは別のことだから心配はいらない。」

桃「愛紗ちゃん？こちらの人は？」

愛「はい、こちらは・・・。」

馬超「あたしから言つよ。あたしは馬超。字は孟起だ。」

桃「馬超さんつて・・・。」

鈴「おおっ？馬超って、その槍、白銀の流星の如く・・・とかつて言われて、確か錦馬超って呼ばれてるあの馬超？」

馬超「それは少し大袈裟だけどなノノ」

朱「でも、その錦馬超さんがどうして益州に？確か錦馬超さんって、涼州州牧、馬騰さんの娘じゃありませんでしたっけ？」

馬超「・・・馬騰は死んだ。曹操に殺されたんだ。」

桃「！？・・・そんな・・・」

馬超「・・・戦いに負け、行き先も無く流浪している途中で関羽に会った、というわけだ。」

愛「勝手ながら我らの仲間にならないかと勧誘したのです。そのために一度、我らの主に会って欲しいと。」

桃「そうだったんだ・・・馬超さん。私は劉備、字は玄德だよ。よろしくね。」

馬超「よ、よろしく。」

桃「馬超さん。私達の理想を叶えるために馬超さんの力を私達に貸してください。」

馬超「・・・その理想というのは？」

桃「皆が仲良く、平和に暮らせる世の中を作ること！それが私達の理想だよ。」

鈴「今の世の中、どっかおかしいのだ。力があればどんなことでも
まかり通るなら、力の無い人達には地獄でしかないのだ。」

星「だからこそ、圧政に苦しみ、日々の暮らしの中で笑顔を浮かべ
ることさえ忘れてしまった人々を助け、そして共に笑って暮らした
い。私達はそのために戦っているのだよ。」

馬超「・・・話は分かる。けど、力でその理想を実現しようとするあ
んたらだって、傍から見れば、他の奴らと一緒にじゃないのか？」

桃「・・・否定はしないよ。でもだからって何もしないでただ見てい
ることなんて出来ない。私達のやり方は力尽くだって言うのも分か
ってる。でも力だけでも、想いだけでも何も変えることも救うこと
もできない。だから綺麗事と言われても偽善者だと言われても、私
達は理想目指します。それがきつと皆のためになるんだって信じて
いるから。」

馬超「・・・そんなことして、あんたらに何の得があるっていうんだ
よ?。」

桃「・・・満足、かな?あとは皆の笑顔!それさえあれば他に何もい
らないよ。」

愛「そうですね。皆が笑って食事をし、仕事をし、そして満足して
眠れる日が来るからこそ、私達にとっては何よりの褒美です。」

鈴「皆楽しそうなら、鈴々だって楽しいのだ。」

星「まあ、無欲過ぎるとは思うがな。広大な天の下にこういう人間
達が居ても、それはそれで面白いのでは無いかな?。」

馬超「ははっ。そんな夢物語を、この乱世の時代に思い描いている奴らがいるとはね。」

桃「乱世だからこそ、夢を忘れちゃ駄目なんだよ」

馬超「確かにね。」

愛「その夢を実現させるために、錦馬超。あなたの力を貸して欲しいのだ。」

馬超「・・・分かった。あたしの力、あんたらの理想のために使うよ。」

桃「ホント!？」

馬超「ああ。理想を語りながらすっかり現実を見ているみたいだし、少し矛盾を抱えているし、少し変だけど、あたしはそういうの好きだ。だからあたしはあんたらの部下になる。」

星「部下というか・・・。」

鈴「仲間になつて欲しいのだ!」って桃香お姉ちゃん達の台詞を取るのだ」

桃「取られちゃった。でも、言いたいことはその通りだから問題ないけどね。部下とか家臣は必要ないよ。みーんな仲間だもん」

愛「・・・だそうだ。」

馬超「ははっ、やっぱり変わってるな・・・早速皆に伝えて来るから少し待っててくれ。」

桃「うん、分かったよ。」

馬超さんが率いていた皆のところに戻っていった。ご主人様、また新しい仲間が来たよ。だから早く・・・。

「も、申し上げます！御剣昂様、ご帰還！」

桃「！？、ご主人様！」

玉座の間の入り口に目を移す。そこには・・・。

昂「皆、心配かけたな。」

私達が待ち望んだ最愛の人の姿があった。

昴 side

昴「おー、やっと着いたな。」

長坂橋で殿をこなし、桃香達を追いかけ、鈴々達と一足違いでたどり着いた。

昴「皆無事そうだ・・けど、皆絶対怒ってるんだろーな・・。」

勝手に1人で殿に行っちゃったしな。とりあえず皆に会いに・・ん？

？「おーっほっほっほっ！」

天蓋付きの馬車から何か聞こえるな。気になって覗いて見ると・・。

？「退屈ですわねー。まだ城に入れませんか？」

美「ううゝ、昴ゝ、七乃ゝ。」

そこには袁紹がいた。涙目の美羽を膝に乗つけて。

そついや徐州の国に隠れていたのを鈴々が文醜と顔良と一緒に見つけてきたんだっけな。愛紗は『捨ててきなさい！』って言ったけど、見捨てるのは可哀想、っていう桃香の意見で匿うことになったんだっけ。

紹「あら昴さんではありませんか、今到着しましたの？」

昴「まあな。」

美「昂……。」

昂「……あまり美羽をいじめてくれるなよ？」

紹「いじめてなどいませんわ。可愛がっているのですよ、ねえ？」

美「うう〜。」

涙目じゃねえか。七乃は何やって……。

七「涙目の美羽様可愛いです〜！」

はあ、駄目だ。文醜と顔良は……駄目だ。文醜は食事に夢中だし、顔良は必死に頭下げてる。

昂「ま、ほどほどにな。」

俺は馬車を後にした。

紹「ちょっと、わたくしはいつまでこの馬車にいなければなりませんの？聞いてますか!？」

とりあえず無視。早く皆のところに行こう。俺は兵士に声を掛け、兵士の誘導で皆のところに向かった。

玉座の間にたどり着くと皆揃っていた。良かった誰一人欠けてないな。

昴「皆、心配かけたな。」

皆「ご主人（昴）様！」

昴「皆無事で何よりだ。」

皆が笑顔や涙を浮かべている。すると桃香が俺の前に歩み寄った。うつむいているため、表情は読み取れない。

昴「桃香、今戻っ……。」

パチン！

桃香は俺の頬を張った。

桃「どうして、あんな無茶をしたんですか……。」

昴「……それは……。」

桃「ご主人様、前に言いましたよね、皆を率いる者は何があっても

最後まで死んではならないって。どうしてあんな無茶をしたんですか！」

昴「・・・ごめん。」

桃「私達にとってご主人様はかけがえのない大切な人なんです！何で簡単に無茶をするんですか！どうして・・・1人で背負い込んだりじゃうんですか・・・。」

桃香は涙を流した。

桃「ご主人様。もう無茶をしないで・・・。もつと私達を頼って・・・。1人で背負いこまないで・・・。私にはご主人様が死に行ってるようにしか見えないよ・・・。」

昴「!？」

俺が・・・死にに？

桃「私の目には、愛紗ちゃん達の勇気とご主人様のとでは違うように見えるよ。ご主人様は自分の命を考えてない。ただ戦って、皆を守って死にたい。そういう風にしか見えない。」

昴「俺は・・・。」

桃香が俺の胸に飛び込む。

桃「ご主人様。自分の命を大切にしてください。ご主人様は1人じゃないんだよ？ご主人様がいなくなったら、悲しむ人がいっぱいいるんだよ？」

昴「……。」

辺りを見渡すと皆が涙を流していた。

昴「ごめん、桃香。ごめん皆。俺は……ただ自分が許せなかった。皆の信頼に応えられない自分自身が……。桃香に以前に掛けた、王は何があっても生き延びろという言葉。あれは今でも正しいと思ってる、けどどうも思うんだ。自分1人助かるだけの命に、どれほどの価値があるのか？って。俺は頭のどこかに俺が死んでも桃香がいる。だからこの命失ってもって考えがあつた。でもこれが皆を悲しませたんだな。俺は死ぬのはさほど怖くない。だけど皆が死ぬのは何よりも怖いんだ。」

桃「1人で背負いこまないでって言ったでしょ？ご主人様にはこんなにも仲間がいるんだよ？」

昴「桃香……。」

愛「そうです。我々は仲間なのですよ？ご主人様。」

鈴「そうなのだ！鈴々達は仲間なのだ！」

星「もつと我らを頼ってください主。我らも、あなたを失うことが何よりも怖いのですから。」

昴「愛紗、鈴々、星、そうだな。俺は勘違いしていた。信頼とは信じて頼るって書くんだよな。俺がやってるのは独りよがり。自分勝手なことだった。」

俺はあの日、智夜失い、王の道を歩むことになってから自分の命に

価値を見い出さなくなっていた気がする。俺がやってるのは命を武器にしたただの特攻。断じて勇気ではなかった。

昴「皆、ごめん！これからはもっと皆を頼らせてもらおうよ。皆、改めてよろしく頼む！」

桃「うん！私達もご主人様に頼ってもらえるように頑張るよ！」

星「我ら武官も、己を磨き、更なる高見を目指しましょう。」

朱「私達軍師も、もっともっといっぱい知識を身につけてご主人様を支えます。」

昴「頼りにしてるぜ。」

俺も、皆も、もっと強くなろう。

昴「・・・ところで、状況はどうなってるんだ？」

朱「はい。現在の状況は」

・・・
・・・
・・・
・・・

・・・

朱「 が、現在の私達の状況です。」

昴「なるほど。それで馬超はどこにいるんだ？」

愛「馬超でしたら率いていた兵達に我らと共にすることを伝えに行きました。すぐに戻られると思い・・・あ、来たようです。」

馬超「待たせたな。兵達も納得してくれ・・・っ！？あなたは・・・

」

昴「ん？」

あれが馬超か？何やら固まってるようだが・・・。

愛「？・・・どうしたのだ、馬超よ。」

馬超「御剣・・・昴・・・様・・・。」

愛「・・・様？ご主人様、馬超と面識があったのですか？」

昴「いや、初対面・・・だよな？」

俺は涼州には行ったことはないし。連合の時も会ってないはずだし。

馬超「あう・・・あう・・・。」

昴「おーい、馬超ー。」

馬超に傍により声を掛ける。

馬超「 @ つ!？」

馬超はみるみる顔を赤くする。

?「クスクスツ、お姉様ってば、お顔真っ赤にしちやってえ〜」

馬超「た、たんぽぽっ!」

愛「馬超、この子は?」

馬岱「たんぽぽはお姉様の従妹の馬岱だよ。よろしくー!」

桃「よろしくー」

馬岱「やっぱりお姉様こっとなっちゃった。」

愛「」どづいづことだ?」

馬岱「ほら連合の時、御剣昴様が呂布さんと一騎討ちしたでしょ? その時に御剣昴様にお姉様が一目惚れ……。」

馬超「わーわーわー!」

馬超があわてて馬岱の口を塞ぐ。

昴「?」

馬岱「要するに、御剣昴様はお姉様の憧れの人なんだよ」

昴「そう、なのか？」

馬岱「そうだよ 涼州に帰ってきてからお姉様、その時の話ばかり・
」

馬超「わー！たんぽぽ！もう喋るな！」

馬超が再び馬岱の口を塞ぐ。

昴「ん、よく分からないが、とりあえずこれから俺達の仲間って
ことでもいいんだよな？」

馬超「あ、ああ／＼」

昴「そうか、俺は姓は御剣、名は昴だ。これからよろしくな。」

翠「あ、ああ。よろしく・・・お願いします・・・御剣様・・・」

昴「昴でいいよ。」

翠「ああ、分かったよ／＼」

た「たんぽぽはね、馬岱！真名はたんぽぽ！よろしく、ご主人様！」

翠「ご主人様あ！？」

た「だってみんなご主人様って言うてるもん。だからたんぽぽもご
主人様って呼ぶの」

翠「う・・・じゃああたしもそう呼ぶ方が良いのかな？」

昴「好きに呼んでくれて構わないよ。」

翠「じゃあ・・・ご主人様、今後ともよろしくな！」

昴「・・・まあいいや、よろしくな、翠、たんぽぽ。」

桃「私は劉備、字は玄德、真名は桃香！桃香って呼んでね。」

翠「ああ、よろしく頼む、桃香様！」

た「よろしく、桃香様！」

俺と桃香が自己紹介をしたあと、皆がそれぞれ真名を交換しあった。新しく馬超と馬岱が加わり、結束力と共にさらに俺達は強くなった。

益州と荊州の国境沿いにある諷陵に入城を果たした劉備軍は益州平定の一步を果たした・・・。

続く

第45話 益州到着、馬家の姫君と憧れ (後書き)

今回は、正直なんとも言えないですね。一部自分の好きなセリフを入れさせてもらいました。分かる人は分かるかも。

翠は最初からデレ状態です。後無理やりですが、麗羽達を登場させました。ここで逃すと出番なくなりそうなので。

感想、アドバイスお待ちしております。

それではまた！

第46話、益州攻略初戦、黄漢升の説得（前書き）

投稿します。

今回はかなりご都合主義なうえグダグダです（<|>）
書いてはグダグダ。消して書いてはグダグダ。それを繰り返して完
成したのがグダグダです。（TOT）
大幅な修正もあるかもしれませんが。

それではどうぞ！

第46話 益州攻略初戦、黄漢升の説得

益州と荊州の国境沿いにある諷陸に入城し、益州攻略の第一歩を果たした俺達。それからすぐに住民達のまとめ役の長老が謁見を申し出てきた。話を聞いてみると、益州の内部は暴政と内乱でボロボロで、これ以上、無能の劉璋に国を治めてほしくはないという。話を聞くと、益州の実状は事前に聞いていた情報よりかなり酷かった。住民達は何よりも大乱に巻き込まれることを恐れていた。住民達の願いは、有能な人間に太守になってもらい、安心して暮らしたい。長老は俺達に益州の新たな太守となつて益州をまとめてほしいとのことだった。もはや民にすら無能扱いをされている実状だ。このままじゃ民はいつまでたつても安心して暮らすことはできない。そんな思いから俺達は出陣をする。

益州全土を平定するために……。

桃「ここから成都まで、いくつぐらいお城があるのかなあ？」

朱「新しい本城である諷陵は、益州でも端の端にありますから、成都まではあと20個ぐらいお城を落とさないとたどり着けないです。」

桃「20つ!? うへえ〜・多すぎだよお。」

昴「益州は大陸の約4分の1ぐらいあるからな。けどまあ、その全部を落とすことにはならないと思うぞ。」

桃「そうなの?」

昴「劉璋があればほど無能なら、現体勢を快く思わない者だって多くいるだろうし、俺達が次々に城を落としていけば戦わずして落ちる城だって出てくるだろう。」

桃「そうか! そうだよね!」

昴「つつか、未だに内乱続けている愚か者だ。そんな奴を命を賭けてまで守ろうとする奴は極めて少ないだろうな。」

つつか「いるのか?」

翠「それにしても、他人が家の中に入ってるのに、それを無視して内輪で揉めてるって。劉璋って馬鹿なのかな?」

ね「馬鹿は翠のことですなー。今のこの状況こそ、我ら軍師の策があつたればこそですよ。」

翠「馬鹿で悪かったな。・・つつか、それってどういうことだよ?」

雛「諷陵に入城したあと、すぐに劉璋さんに使者を出して諷陵入城の正当性を伝えておいたんです。」

白「正当性？・・・ぶっちゃけ、どう考えても正当性なんて無いんじゃないか？」

朱「そこをどうにかするのが、軍師である私達の役目ですから。」

鈴「口先三寸で丸め込んだってことなのだ。」

昴「酷い言い方だが、騙される方が悪い。」

信「信じることに疑わないことは別物だ。自領の城を明け渡すなんざもはやただの馬鹿だ。」

愛「それ故に無能と言われているのでしょうか。」

星「極めつけは、その評価を下しているのが将では無く民だということだな。」

ね「民あつての国であつて、国あつての民では無いのですからのー。」

朱「学も無く、戦う力を持たない人達が殿上人とも言える太守を無能扱いするという、この一事だけでも、劉璋さんに人を治める資格は無いかと。」

恋「・・・油断できない。・・・兵は多い。」

雛「恋さんの仰る通りですね。例え太守が無能でも、益州は人口多

く、豊かな土地です。それを守る軍の数もかなり多く、油断は出来な
ないかと。」

「昂「数の差は否めない・・・が、それでも俺達は勝たなきゃならない。」

桃「そうだね。今も暴政に苦しんでる民のためにも、素早く成都を
制圧しないとね。」

昂「そのために成都への最短距離を突き進むわけだが・・・当然兵は
多いし配置されている武将は有能だろう。」

愛「我らが向かっている城にも、有能な武将が詰めているというこ
とですか？」

昂「ああ。次に向かう城の城主は・・・黄忠だっけ？」

朱「はい。そのとおりです。」

黄忠・・・俺の知ってる限りじゃ、文武に優れ、弓の名手・・・ぐらい
だな。

星「黄忠・・・聞かん名だな。一体どんな人物だ？」

「 雛「将として有能であり、なおかつ慈愛に満ち、徳望厚い方ですね。」

星「ふむ・・・言つなれば良将というわけか。」

昂「そういうことだな・・・雛里、黄忠のいる城まではあとどのくら

いだ？」

雛「あと1日ほどですかね。状況が状況ですから、すでに黄忠さんの放った斥候に、捕捉されていると考えるのが妥当かと。」

白「ということは、夜襲を警戒しておかなくちゃいけないな。」

昴「そうだな。そんじゃ、もう少し進んだら野営の準備を始めるか。」

皆「了解！」

黄忠 side

「黄忠様！劉備軍を確認しました。到達は明日になりそうです。」
斥候に出した兵が報告にやってきた。

黄「そう。了解しました。・・・ご苦労様。」

「はっ・・・。」

黄「・・・あら。どうかしたのかしら?」

「はっ。・・・黄忠様は、まだ劉備と戦うことを迷っていらっしやるのですか?」

黄「・・・迷いが無いと言えば嘘になるでしょうね。」

「そうですね。・・・すでに街の住民には、劉備を待ち望む声がかかっております。」

黄「国の内情を理解しているからこそ、劉璋殿に見切りをつける民も出てくる。当然のことでしょうね。」

「は。・・・劉備は仁徳を兼ね備えた方だという噂です。もしそれが本当ならば・・・。」

黄「・・・どちらにせよ、私達は民のためにも劉備を見定めなければなりません。皆の命を無駄にしないためにも私達は私達の役目を果たしましょう。」

「はっ!」

黄「明日は決戦です。しっかりと睡眠を取り、明日に備えなさい。」

「はっ。・・・では、おやすみなさいませ。」

黄「おやすみなさい。」

兵が立ち去り私1人となる。

黄「劉備玄德。噂通りの人物なら劉璋などによる益州を治めるに相応しい人物でしょう・・・でも、劉備以上に気になるのが・・・。」

天の御遣い、御劍昂。

黄巾の乱、反董卓連合。いずれにも上がる名だわ。武と知、そして美と勇をも兼ね備えていると、この片田舎の益州にまで轟いている。戦乱を治めるために舞い降りた天の御遣いが何故戦乱を巻き起こすのか。それも見定めなければ・・・。

昂side

翌日、出陣準備も整い、敵城へと進軍を開始した。

雛「現在、敵城からの出撃は確認されていません。黄忠さんは籠城を選んだ可能性が高いです。」

桃「籠城？援軍が来るアテがあるのかな？」

朱「アテは無いでしょうけど、黄忠さんの選択は理に適ったものですよ。」

星「うむ、兵も将も揃っている我が軍の唯一の弱点は兵站だ。籠城し、我らの兵糧が尽きた頃に逆撃するつもりだろう。」

愛「我らの弱点を的確に見抜いているということか。油断出来んな。」

昴「……。」

鈴「にゃ？お兄ちゃん、どうしたのだ？」

昴「……なあ、戦をする前に一度黄忠と話をしてみてもいいか？」

愛「黄忠に舌戦を仕掛けるのですか？」

昴「舌戦というか……黄忠を説得しようと思う。」

星「……主よ、いくらなんでもそれは無理なのでは？せめて一度力を示してからでなければ……。」

昴「籠城戦になれば双方に被害が出る。……何より、1番に煽りを受けるのは民だ。朱里や雛里が策を仕掛けてるからさほど時間もかからないだろうが、それでも、な。」

愛「ご主人様・・・。」

朱「どうなさるおつもりですか？」

昴「ん〜、とりあえず城の前に布陣したら前に出て、城壁に多分黄忠がいるだろうから説得してみるよ。」

雛「危険ではないですか？黄忠さんは弓の名手ですよ？」

昴「良将と呼ばれているならいきなり狙撃したりはしないだろ？」

愛「いえ、尋ねられても。」

昴「とにかく、なるべく被害は出したくない。任せてくれないか？
皆が静まる・・・。」

桃「分かったよ。でもね、1つだけ条件があるよ。」

昴「条件？」

桃「私も一緒に連れて行って。」

「「「「「！」「」」」」

愛「桃香様！いくらなんでもそれは危険過ぎます！」

桃「私だつてご主人様と同じ代表だもん。黄忠さんに私の想いを聞いてもらいたい。それに、私が一緒ならご主人様だつて無理はしな

いでしょ？」

愛「しかし・・・。」

昴「分かった。一緒に行こう、桃香。」

愛「ご主人様!？」

昴「桃香の理想は桃香自身に語ってもらった方が黄忠に伝わるだろ。それに・・・俺が桃香を守るから心配はいらない。」

愛「・・・分かりました。では私と星が護衛として共に・・・。」

昴「行くのは俺と桃香の2人だ。」

愛「!?!?駄目です!向こうが攻撃を仕掛けてきたらどうするのですか!?!」

昴「心配する気持ちは分かるが、これからこちらの理想を語り、説得しようとする人間が守られながら舌戦じゃ格好がつかないだろ?万が一仕掛けてきても桃香1人なら守りきれぬ。」

愛「・・・分かりました。ですが、くれぐれも無茶はなさないでくださいね。」

昴「了解。」

桃「分かったよ!」

さて、桃香の理想を黄忠に届けるか。

黄忠 side

「黄忠様！劉備軍が我が城の前に布陣を開始しました！」

黄「ご苦労様。引き続き警戒を怠らないように。」

「了解！」

黄「ふう。」

いよいよ始まるのね。劉備との戦が。

黄「あら？」

敵陣から2騎が前に出てきた。

1人は髪の毛の長い可愛らし女の子。もう1人は黒い外套と長剣を携え

た、あちらも女の子に見えるけど恐らくは男の子ね。

黄「一体何を・・・!？」

こちらへ向かってくる途中、女の子は剣を。男の子は長剣と2本の剣と外套を地面に置き、こちらへ近付いてきた。

桃香 side

私とご主人様は自陣を離れ、黄忠さんの説得のために城へ歩いていく。ご主人様の案で途中で武器を置いて丸腰であることを示し、策や罠を警戒させず、私達の話をちゃんと聞いてもらうための方法を取った。心臓の高鳴りが止まらない。

怖い。

もしかしたら矢で射かけられるかもしれない。そう思うとドキドキが止まらない。胸でギュッと拳を握る。

ポン。

桃「っ!?!」

ご主人様が私の肩に手を置き、一度だけ頷いた。すると、ドキドキが収まった。そうだ。私にはご主人様がいるんだ。ご主人様を守ってくれる。だから私は私の務めを果たそう。私は城壁にいる黄忠さんに目を向けた。

桃「私は劉備、字は玄德です！黄忠さん、私の言葉を聞いて下さい！」

城壁にいる黄忠さんが私に目を向ける。

黄「……。」

しばらく私の方を見つめると、城の中へと下がっていった。そんな・黄忠さんは私の聞いてくれないの？少し待っていると、城門が開いた。開いた先には黄忠さんがいた。

黄「劉備さん。あなたの話を聞かせてもらっわ。けれどその前に、こちらもいくつか尋ねさせてもらってもいいかしら？」

桃「はい、もちろんです。」

黄「まず、あなたは何故益州に侵攻してきたのかしら？」

桃「私達は益州の治める太守である劉璋さんの暴政に苦しむ民を救うためです。」

黄「……。」

桃「国の礎である民に暴政を敷き、自分は贅沢三昧でかつ内乱をす
るためにさらに民に暴政を強いるなんて間違っています！国や民は
王のためにあるんじゃない。国や民のために王というのは存在する
はずですよ。それを分からない劉璋さんでは民はずっと苦しみ続けな
ればなりません。だから私達は益州を侵攻しました。」

黄「……話は分かりました。それでは、益州を制圧出来たとして、
あなたはこの地を正しく治めることができますか？この地を他の脅
威から守ることができますか？」

桃「必ず治めます。私1人では無理だけど、私にはたくさんの仲間
がいます。とても信頼できる仲間が。皆で力を合わせて頑張ります
！」

黄「では最後に……あなたの求める世界、理想は何？」

桃「私の求める理想は皆が笑顔で暮らせる世の中にあることです。」

黄「笑顔を求めるあなたがなぜ戦乱を巻き起こすような戦いを始め
るの？今あなたをしていることはその理想に反しているのでは？」

桃「……否定はできません。だけど、今の世の中は思いだけでは
何も変えることはできません。力を持たない人達を救い、守るため
には力が必要なんです。けど、力だけでも駄目。……もちろん思い
だけでも……。」

黄「……。」

桃「私達は得た力を皆を守るために使う。理想を果たすために。で

すから黄忠さん。私達に力を貸して下さい！」

私は私の想いを全て黄忠さんにぶつけ、黄忠さんの目を見つめた。黄忠さんはしばらく私の目を見つめた後、矢をつがえ、私に構えた。

黄「今の言葉に嘘はありませんね？」

桃「はい。」

黄忠さんはしばらく私に弓を構え、やがて、

黄「ふう。」

弓を下ろした。

黄「あなたの言葉、確かに聞かせてもらいました。もしあなたが力で民を支配する者であったり、理想を語るだけの愚か者だったらこの場であなを射殺すつもりでしたが、あなたは劉璋と違い国と民の両方を曇り無き眼で見ることができるとはですね。」

桃「？、えーつと・・・？」

黄「民もあなた方を求めています。私自身もあなたの言葉に感服しました。黄漢升。あなた方にこの身をお預けしましょう。」

桃「ホントにっ！？」

黄「ええ。誇りのために死ぬより、大義のために生きる道を選びます。」

桃「良かった。」

身体に力が抜け、その場に座り込んだ。

昴「お疲れ様、桃香。良く頑張ったな。」

桃「ご主人様のおかげだよ！ご主人様が傍にいてくれたから頑張れたんだよ！」

昴「俺は何もしてないよ。」

黄「あなたは？」

昴「ああ悪い。俺は姓は御剣、名は昴だ。」

黄「・・・やはりあなたがあの天の御遣いでしたか。」

昴「やはり？」

桃「あの？」

黄「あなたからは特別なモノを感じます。御剣昴。武と知と徳と美を兼ね備えた英傑であると。」

昴「・・・噂の1人歩きは恐ろしいな。俺はただ人より少し強くて頭が良いだけなんだが・・・。」

桃「ご主人様は噂通りの人だよ！すつごく強くて、頭が良くて、それに優しくとてもかっこいいだから！」

昴「あゝはは／＼．．ま、何にせよ、劉備共々よろしく頼むよ。黄忠さん。」

紫「紫苑とお呼び下さい。」

昴「．．桃香はともかく、良いのか？」

紫「はい。天の御遣いと誉れ高いあなたなら是非に。それに．．うふふ。」

むうー、ご主人様に熱い視線送ってる。またご主人様は．．。

昴「？．．分かった。よろしく頼む、紫苑。」

紫「はい。ご主人様。」

昴「．．ご主人様．．まあ、いいか。」

桃「それなら私のことは桃香って呼んでね。」

紫「私も紫苑とお呼び下さい。よろしくお願い致します。桃香様。」

桃「後、ご主人様は渡さないからね。（ボソッ）」

紫「恋と主従は別物ですよ。（ボソッ）」

うう、協力なライバル出現だよ。

でも、紫苑さんを説得することができて良かった。

紫苑 side

不思議なモノだわ。私は当初、戦わずして降るつもりはなかった。桃香様が前に出てこられて、彼女の言葉を聞いた時、もう戦う気は失せていた。桃香様なら皆を導いてくれる。そう感じた。もう1人気になるのが。

紫「(チラツ)」

御剣昂様。彼の存在。桃香様は最初怯えていた。それがご主人様が近くに來ただけで桃香様から怯えがなくなった。そして桃香様に矢を向けた時、ご主人様はすぐに飛び出せる構えを取っていた。その時のご主人様の目はまるで子を守る親のような目だった。とても純粹でとても綺麗な。きっと桃香様の理想はご主人様の理想でもあるんだわ。ご主人様からいるから桃香様は理想を貫くことができる。ご主人様。彼を見ていると私の中の女が疼くわ。桃香様にはあのように言っただけ。本当に狙ってみてもいいかもしれないわね

益州平定の初戦にして一番重要な戦いは開戦を待たずに終結した。

続く

第46話、益州攻略初戦、黄漢升の説得（後書き）

どうでしょう。当初はほぼ原作通りになってこれじゃ二次じゃない
！ってことで書き直しました。戦は無しにしました。理由は原作と
違った形にしたいのと、一番理由は籠城戦をうまく書く文才がない
ことですorz

次回はきっちり二次っぽくしますので。

感想、アドバイスお待ちしております。

それではまた！

第47話 巴郡攻略戦、井の中の蛙 (前書き)

投稿します。

時間かかりましたが、内容は・・・ごめんなさい (TOT)
かなりご都合主義です。後キャラ崩壊あります！

それではどうぞ！

第47話 巴郡攻略戦、井の中の蛙

昴side

桃香の説得により、戦闘を行うことなく紫苑を引き入れることに成功し、紫苑の居城へと入城した。

昴「桃香のおかげで双方に被害を出さずに終わることができたな。」

朱「現在、兵の皆さんには食事をとってもらっています。もうすぐ補充兵の方も到着するかと。」

昴「徐州から今に至るまでほとんど休み無しで来たからここいらで大休止を取ったほうが良さそうだな。」

雛「はい。正しいご判断かと。」

愛「ですが、のんびりしては、成都への道を塞がれてしまうのでは・・・。」

昴「それもそうなんだが・・・疲労を抱えたまま進軍したらそれこそ大怪我の元だ。1日だけ兵達に休んでもらって、その間に次の戦の作戦を練ろう。」

桃「そうしようー・・・それで、次の戦いつてどこになるの?」

白「成都までの道のりを考えると、巴郡、江陽、巴東県辺りになるかな?」

朱「その3つの進路が妥当でしょうね。でも紫苑さんのご意見も聞いてみたいです。」

桃「あ、そっか。・・聞いても良い？」

紫「何なりと。」

愛「先ほど白蓮殿があげた3つの進路。その内、どの進路が与しやすいのだ？」

紫「そうね。与しやすさだけで言うのならば、江陽と巴東の2つかしら。」

星「その言い方だと、巴郡には強敵が居るということだな。」

紫「ええ。でも、桃香様にお勧めするのは、巴郡かしらね。」

昴「なるほどね。」

桃「?・・巴郡に強敵に居るならそこは避けた方が良いんじゃないの?。」

昴「強敵だからこそだ。攻略することが出来れば他の城は戦わずして落ちるだろう。」

桃「あ、なるほど!。」

昴「紫苑の口振りからして、説得することも可能・・と考えて良いのか?。」

紫「ご主人様の言う通りです。巴郡城主麴顔と、その部下魏延。2人とも懇意にしていた間柄ですから。説得の仕方によっては分かってくれると思います。」

愛「説得で済むのならば、確かに江陽や巴東を征くよりも早いかもしれんな。」

紫「いいえ。城を落とす速さで言うならば、江陽や巴東の方が早いでしょう。しかし、麴顔と魏延の2人を説得出来たならば、成都へ向かう道々にあるお城は、ことごとく桃香様の物になるでしょう。」

星「それほど人望厚き人物なのか。」

紫「はい。ただ1つ問題が・・・。」

桃「問題？どんな？」

紫「実力、人望申し分ない2人ですが、そんな2人だからこそ頑固なところもありまして。素直に応じるかどうか分からないのです。恐らく、一戦して力を示せ、ということになるでしょう。」

愛「そこで我らの力を見せれば、説得に応じるといふ訳か・・・。」

鈴「偏屈な奴なのだ。」

翠「自分に自信のある奴は得てしてそういうもんだ。」

白「でもまあ、そういう、自分なりの判断基準を持っている奴の方が信用出来るけどな。」

昴「・・・その敵顔と魏延。聞く限りかなり頑固そうだけど、戦で勝利すれば説得出来るのか？」

紫「敵顔の方は大丈夫だと思いますが、魏延の方が・・・。」

昴「問題あるのか？」

紫「魏延は更に頑固者で、己の武こそ最強と思い込んでいる節があります。例えば戦で勝利しても説得に応じるかどうか・・・。」

昴「ふーん・・・。」

要するに自信家の身の程知らずか・・・。

昴「・・・ならその魏延、俺が相手するよ。」

星「主がですか？」

愛「わざわざご主人様が出ずとも我らで十分ですよ？」

昴「まあ愛紗や星達なら難なく降せる相手だろうが、そういう身の程知らずは俺直々に調k・・・相手して自信の根っこをへし折ってやるよ。」

皆「・・・。」

昴「ん？皆どうした？」

皆「いえ、何も・・・。」

・・・まあいいか。

昴「とにかく心配はいらない。・・・それじゃ、明後日の出陣の準備をしよう。朱里と雛里は場内の物資の確認を頼むな。」

朱・雛「はい」

桃「それじゃ皆、明後日の出陣に向けて英気を養おう。ご主人様も、紫苑さんが仲間になったからってあんまり変なことばかりしちゃ駄目だよ。」

昴「残念。ま、ほどほどに、な？」

紫「あらあら・・・。」

愛「ご主人様！今は成都攻略の大切な時期ですのでそのような・・・。」

昴「愛紗、冗談だよ。」

紫「あら、私はよろしかったのですが・・・。」

愛「・・・紫苑よ、あまりご主人様を誘惑しないでいただきたい。」

紫「うふふ・・・主の要請には身を捧げるのが良き臣下の務めでしょっつ？」

昴「あはは、なら今日は夜に付き合ってもらおうかな？」

紫「・・・ご主人様のご要望なら何なりと・・・。」

昴「・・・なら、頼むな。」

その夜、紫苑に夜明けで付き合ってもらった・・・。

酒に・・・。

当たり前だろ！

敵顔 side

夜。1人城壁にて夜風に当たっておると焰耶。魏延が血相を変え、
儂を尋ねてきおった。

魏「敵顔様！黄忠の守る城が劉備軍に落とされたとの連絡が、つい
先ほど入りました。」

敵「なにっ！いつだ？」

魏「斥候の話では、本日の昼頃にはすでに城門が開かれていたよう
です。」

敵「半日保たずか。紫苑ほどの者が守る城を、こつも易々と落とす
とはな。」

魏「劉備軍の評判は、伊達では無いということでしょうか・・・。」

敵「それもあるだろうが・・・。焰耶。城が落ちた時の様子を聞いて
おるか？」

魏「いえ。まだ詳しい報告は受けてません。」

嚴「迂濶じゃの。良いわ。斥候に出向いた兵士をここへ呼べ。直接聞くことにしよう。」

魏「はっ！ではすぐに。」

焰耶がその兵士の元へと向かった。

紫苑ほどの者が半日で城を明け渡す、か。何を考えておるのじゃ、あの未亡人殿は。降伏したのか・・・？確か紫苑は現体制には否定的じゃったな。それについては儂も同意見ではあったが。

嚴「うーむ、読めんな。状況が・・・。」

すぐに焰耶が兵士を連れ、戻ってきおった。

魏「桔梗様、兵士を連れてきました。」

嚴「ご苦労。城が落ちた時の状況を、もそつと詳細に報告せい。」

「はっ。それが・・・。」

嚴「？・・・どうした、申してみよ。」

「それが・・・劉備軍が黄忠將軍の城の前に布陣した後、劉備軍から2人が出て城前へと進み、何かを問いかけると黄忠將軍は城の外へと1人出られまして、何やら話をした後、黄忠將軍が劉備軍を先導する形で入城し・・・。」

嚴「・・・もうよい。報告ご苦労。少し休んでおれ。」

「はっ！」

敵「うーむ・・・。」

紫苑は1度も戦闘を行わずに劉備に降ったか・・・。

魏「一体、どうなったというのでしょうか？」

敵「・・・分からぬか？恐らく劉備軍から出た2人の内1人は劉備じやろう。」

魏「・・・総大将自ら前に、ですか？」

敵「うむ、そして紫苑はその劉備の説得により降ったのじやろう。」

魏「むう。黄忠將軍ともあろう者が、早まったことをする・・・。」

敵「・・・紫苑は優しげに見えて、なかなか骨のある女。そう易々と降伏はせん。察するに劉備はそれほどの人物なのだろうな。」

魏「劉備の噂はこの巴郡にまで聞こえていますからね。我らの住民達が騒ぎ出さないように、注意しておかないと・・・。」

敵「注意なぞせんでも良い。劉璋のボウズに比べ、劉備が優れていることなんぞ、誰でも分かるわい。」

魏「は、はあ。では桔梗様も黄忠將軍同様、劉備に降伏するのですか？」

敵「民が幸せを求めるのを止めることは出来んからな。住民達が劉

備を歓迎するのならば、それは致し方無いことじゃ・・・じゃが、くくつ、儂らいくさ人にはそんなこと関係無い。まずは一戦。儂らの歓迎を受けてもらわんとな。」

魏「ですよね！やっぱり桔梗様はそうで無くては。刃も交えず降伏するなど、誰がしてやるかってんです！」

敵「うむ。紫苑が認めた人物だと言うならば、この目でしかと確かめてやるう。・・・焰耶。戦の準備、怠るなよ。」

魏「了解です！」

焰耶は城へと降りていった。

敵「くくつ、劉備か。どれほどの器か、楽しみじゃ。・・・それにあともう1人・・・。」

天の御遣い、御剣昂。巷の噂はどれも奴を誉め称えるものばかりじゃ。

敵「全てを兼ね備えた存在、か。どれほどの者か確かめてやるわい。」

久しぶりに楽しい戦ができそうじゃ。

昴 side

2日後、出陣準備が整い、巖顔が守る巴郡へと出発した。

昴「昨日は久々に楽しめたな。」

紫「ふふっ、ご主人様、とても強く、たくましかったわ。私もつい熱くなつてしまいましたノノ」

昴「また付き合ってくれるか？」

紫「はい、是非とも！」

翠「ごごごごご主人様！何ハレンチなこと言ってるんだよノノ」

愛「そうですね！紫苑もあまりご主人様を誘惑するのは止してくださいな
いか！？ご主人様も今は状況が状況ですから・・・。」

昴「いや、また酒を酌み交わそうってことなんだが・・・。」

愛・翠「えっ！？」

昴「何を想像したんだ？この非常時にハレンチな（笑）」

愛・翠「っ／＼」

紫「うふふ。．．しかしご主人様はお酒がお強いんですね。いくら飲んででも一向に酔われませんでしたから。」

昴「んゝ、まあもともと強かったのもあるが、至るところでいろんな酒を飲んだからな。」

紫「ご主人様に御奉仕させてもらおうと思っていたのですが、一向に隙を見せてくれませんでしたので、こちらが先に酔いが回ってしまいましたわ。」

昴「酔った紫苑も色っぽかったよ。」

紫「まあ、お恥ずかしい／＼」

昴「ははっ．．イタタッ！」

桃香に頬をつねられた。

桃「むううう。」

昴「何怒ってんだよ？」

桃「ふん、知らないもん！」

そっぽを向かれた。

昴「何だかなゝ．．ん？」

良く見ると皆そつぽを向いていた。

昴「あれ……？」

何で皆怒ってるんだよ……。

昴「なあ、愛紗？」

愛「……（プイッ）」

昴「朱里、雛里……。」

朱・雛「……（っーん）」

はぁ……。しばらくしたら皆機嫌を直してくれた。しばらく行軍している……。

「申し上げます！前方に敵軍を発見！その数、約8万前後！旗印には敵と魏の文字！」

愛「ご苦労。下がって休め。」

「はっ！」

愛「敵は城を出て、野戦で決着をつけようと言うのか。」

星「解せんな。籠城を捨てて野戦を挑むとは……。敵は何を考えている……。」

翠「籠城していれば味方の援軍だつて来るのになあ。あ、逆に考えれば、援軍が来ないってことかな。」

雛「その可能性もありますが、可能性を判断するための情報が不足しています。もうちょっと情報を集めないと。」

桃「あの、紫苑さん・聞いてもいいですか？」

おずおずと桃香が紫苑に訪ねる。

紫「ええ、構いません。」

桃「でも、もし言いたくなければ・・・。」

紫「お気遣いありがとうございます。ですが、私はすでに身も心もご主人様のもんですからご心配には及びません。」

「「「「・・・。」」」」

ジトーとした視線が俺に突き刺さる。

昴「紫苑・・・話が脱線しそうだから今は勘弁してくれ。」

はあ・・・全く・・・。

朱「では、紫苑さんが知っている限りの情報を教えて貰っても良いですか？」

紫「ええ。・・・蔽顔と魏延。2人は共に心から戦を楽しむ、生粋の武人。それに元々、劉璋を頂点とする現政権を口やかましく批判し

ていましたから。援軍を要請したところで、今の成都が対応するはずはないでしょう。」

つくづく劉璋は無能だな。巴郡を抜かれれば成都までは目と鼻の先だつてのに。

紫「それ以前に、恐らくあの2人は成都に援軍など要請してもいいでしょうけどな。」

蒲「うわー。体育会系」。戦うことが楽しいって人達なんだね。」

紫「そうね。あの2人は根っからのいくさ人。酒と喧嘩と大戦をこよなく愛する武人よ。」

想「ふむとても。気持ちの良い2人なのだ。野戦を挑む潔さ。私とは気が合いそうだ。」

ね「しかしそれで野戦を挑むと？・・・何とも迷惑な人達ですな！」

昴「そう悪い判断でもないがな。」

白「そうか？いくら援軍が来ないからって野戦を選ぶのは戦術的には下策じゃないか？」

昴「通常ならな。だが、籠城をしていて城内に混乱が起きたら戦うことも出来なくなる。それに・・・多分だけど向こうは戦術とかどうとかそういうことは考えてないと思う。」

恋「恋も昴と同じ考え・・・誇り。ただそれだけ。」

昴「まあ何にせよ、向こうが籠城ではなく野戦を挑んできたことは

こちらにとってはありがたい。現戦力で籠城戦はきついからな。この一戦で俺達の強さを示し、巖顔と魏延を降伏させる。今はそれだけだ。」

星「ふむ。事態は見えた。勝つ。それだけですな。」

雛「そのようですね。では部隊を配置したあと、進軍を再開しましょう。」

桃「了解 それじゃ先鋒は紫苑さん、鈴々ちゃん、翠ちゃんに願いますね。その3人の補佐は雛里ちゃん、白蓮ちゃん、たんぼぼちゃんがお願い。」

雛「はいっ。」

白「了解。」

蒲「はい。」

桃「愛紗ちゃんと星ちゃんは左右についてね。」

愛「はっ!」

星「うむ。」

桃「恋ちゃんと想華さんと雫さんは予備隊として本隊で待機。朱里ちゃんねねちゃんも同じく、私の傍に居てね。」

朱「はいっ。」

ね「了解ですぞー。」

恋「・・・(コクッ)」

想「承知した。」

雫「承りましたわ。」

桃「・・・配置はこれで大丈夫かな、ご主人様？」

昂「適材適所だ。問題ない。・・・それじゃ俺は先鋒の補佐に行くよ。」

愛「・・・やはり行かれるのですか？」

昂「当然。身の程知らずの相手をするからな。・・・心配するな。あくまでも先鋒の補佐だ。最前線にはでないよ。」

愛「・・・分かりました。無理はなさらないでください。」

昂「ああ。分かってるよ。・・・それじゃ、皆朱里達の指示に従って部隊を編成してくれ。皆、行くぞ！」

皆「御意！」

部隊を編成し、進軍すると敵が見えてきた。

雛「敵軍捕捉！皆さん、作戦通り部隊を展開してください！」

愛「よし！鈴々達は部隊を展開させる！」

鈴「分かっているのだ！皆行くのだ！」

翠「へへっ、張り切りすぎてへますんなよ！」

鈴「翠に言われたく無いのだ。ねー、紫苑、お兄ちゃん。」

紫「ふふっ。2人とも気を付けなさいね。」

昴「油断するなよ。」

翠「とーぜん！たんぽぽ、行くぞ！」

蒲「ほーい！」

白「よし、私も久しぶりに派手に暴れさせてもらおうかな。白馬の勇士達よ！張飛隊、马超隊に負けるなよ！」

「応っ！」

雛「私と紫苑さんは先鋒中央で相手の出方を待ちましょう。説得の方をお願いします。」

紫「了解ですわ、可愛い軍師殿。」

愛「関羽隊、趙雲隊は左右より敵を迎撃する！攻撃ばかりに気を取られるなよ！」

星「押せば退き、退かば押す！柔軟な動きこそ我らの真骨頂とおもえ！」

「応っ！」

朱「本隊は先鋒の後ろで魚鱗の陣を布いてください！戦況によってはそのまま前に出ますからねー！」

桃「了解」

昴「俺は翠とたんぽぽの補佐に向かう。桃香。本隊は任せた。」

桃「任せて じゃあご主人様！」

昴「全軍構え！攻撃開始だ！」

「「「「「おおおー！！！！」」」」」

戦は開戦された。

両軍がぶつかり、戦場と化した巴郡に怒号、叫び、悲鳴が入り交じった声と剣と剣がぶつかり合う音が激しく鳴り響く。

翠「どっしやおらー！」

蒲「いつくよー！」

翠とたんぽぽの騎馬隊が敵陣に斬り込み、敵を討ちながら縦横無尽に駆け回り、敵陣を攪乱していく。鈴々の隊が敵顔の部隊に突撃し、次々に敵を討ち取る。そして間髪入れず、愛紗と星の隊が左右から挟撃をして敵陣を斬り崩していく。白蓮と紫苑の隊が各隊を援護をし、想華と雫の隊が遊撃に回る。各々が与えられた役割を果たし、当初の数的不利を瞬く間に跳ね返していく。やはり将の差は大きい。数も質も、こちらに圧倒的に分がある。魏延の隊は翠とたんぽぽの騎馬隊に攪乱され、みるみる統制を失っていく。敵顔の隊も鈴々の隊を止められず、こちらも押し込まれていく。それでも敵顔、魏延両隊は奮戦をしていたが、遂に堪えきれず、ついに崩れ始めた。

昂「今こそ好機だ！一気に敵陣に押し込むぞ！」

「「「応っ!」「」」

自軍の兵が敵陣に突撃していく。

昴「さて、俺も魏延を探しに行くかな・・・。」

・
・
・
・
・
・

さて、敵陣に来たが、魏延はどこだ?しまったな、紫苑に特徴ぐらい聞いておけば良かったな。辺りを探していると・・・。

ドォーン!

「ぐふっ!」

昴「轟音と共に1人の自軍の兵士が吹き飛ぶ。」

魏「ふん!貴様ら雑兵如きでは、この魏延の足元に及ばん。」

・・・あれが魏延か。見つけた。

魏「誰か私の相手になる奴はおらんのか！」

おうおう、いかにも身の程知らずな人間だな。それじゃ、その自信を根っこからへし折ってやるか。

昴「その雑兵を討ち取っただけの割りに随分と威勢が良いな。」

魏「む？・・・何だ貴様は？」

昴「劉備軍の御剣昴だ。」

魏「御剣？・・・ああ、貴様が天の御遣いなどと呼ばれている者か。」

昴「知っていたいただいて光栄だ。」

魏「ふん。・・・何だ、噂を聞いてどんな者かと思ったが・・・たいしたことはなさそうだな。」

・・・初見で相手の力量を量れない程度か・・・

昴「相手になつてやる。来な、蛙ちゃん？」

魏「蛙？」

昴「井の中の蛙。お前に大海を教えてやるよ。」

魏「ほざけー！」

魏延が真つ直ぐ俺に突っ込み、得物である金棒を振り下ろした。俺は左足を退き、半身になって魏延の一撃を避ける。

ドォーン！

魏延の一撃により、地面に穴があく。

ふーん、威力はまあまあだな。

魏「次は外さんぞ。」

昴「俺が避けたんだよ。」

自分が外したみたいに言うな。

魏「うおおおー！」

再度魏延が俺に飛び込む。

ブォーン！ブォーン！ブン！

次々と俺に攻撃を繰り返す。

魏「どうした！先ほどから避けてばかりだが、手も足も出ないのか！？」

昴「そういうのは一撃でも当ててから言えよ小娘。」

魏「ほざくな！」

ブォーン！ブォーン！ブォーン！

なおも魏延は攻撃を繰り返す。
単調過ぎる攻撃。話しにならないな。

昂「どうしたどうした？そんなんじゃ何年たっても俺を捉えられないぞ？」

魏「ちょこまかと避けることしか出来ない奴がほざくな！一撃、一撃でも捉えたら貴様の終わりだ！」

あっそう。だつたら・・・。
俺は足を止めた。

魏「止まったな？これで終わりだー！」

魏延が俺に渾身の一撃を繰り返す。俺は右手に氣を集中させ、

ドン！

魏「なっ！？」

俺は魏延の一撃を受け止めた。

昂「例え当たってもこの程度だ。」

俺は金棒を払った。

昂「次はこちらから行くぞ。」

俺は村雨を抜いた。

昴「先に言っておく。避けるよ？受けようとか思うな。死にたくな
ければな……。」

村雨の切っ先を上へ上げ、村雨に氣を込める。

昴「飛龍・・衝撃・・。」

村雨を魏延に振り下ろした。

魏延 side

昴「先に言っておく。避けるよ？受けようとか思うな。死にたくな
ければな……。」

奴は長剣を抜き、切っ先を空へと上げた。

死にたくなければだと？ふん！貴様にどんな一撃を繰り出せるとい
うのだ！下らん、その一撃ごと貴様を吹き飛ばしてくれ！

私は自身の武器である鈍砕骨を構える。

昴「飛龍・・・衝撃・・・」

奴が長剣を振り下ろした。私は鈍砕骨をぶつけようとした。

ドクン！

魏「っ！？」

これを受けたらまずい！何故か分からないが直感的にそれを悟った。私は攻撃を止め、後ろへ下がりが、奴の一撃を紙一重で避ける。よし、かわした！

奴が放った一撃が地面へと吸い込まれると・・・！

ドゴーン！

魏「うわー！」

繰り出された一撃の衝撃により、私は後方に弾き飛ばされた。

魏「うつ・・・はっ、これは！？」

目を開け奴に振り返ると愕然とした。奴が繰り出した一撃により、その周辺は大穴があいていた。私の一撃とは比較にならない大穴が。もし・・・この一撃を受けていたら・・・。私は死んでいた。それも跡形も残らず・・・。

奴がこちらへ歩みよる。くっ、立たねば！私は足に力を込め、立ち上がる。

ギン！

魏「っ！？」

突如私の体に強烈な殺気が襲った。奴が、御剣昂が私に強烈な殺気をぶつけてきた。

魏「あ．．あ．．。」

私はその殺気により力が抜け、立っていられなくなった。私は．．．なんて奴を相手にしていたのだ。奴は．．私の敵う相手ではなかった．．。

昂「ようやく力の差に気付いたか。」

魏「．．あ．．。」

気が付くと御剣昂が眼前にいた。

昂「ちなみに言っておくと、今の一撃、当てることも出来たしもっと強い一撃を放つことも出来た。」

魏「くっ！」

実力が．．格が違いすぎる．．。
奴がスツと右手を近づける。私は、死ぬのか．．。
私が覚悟を決め、目を瞑ると、

ピシン！

魏「あう！」

私のおでこに軽い衝撃が走った。目を開けると先ほどの殺気はなく、ただ目の前に立っていた。

昴「1つ聞く。お前は何のためにその力をつけたんだ？」

魏「何の・・・ために？」

昴「ただ戦いたいからか？それとも他者に己の力を誇示したいからか？」

魏「それは・・・。」

戦に喜びを感じ。それ故に力をつけていた。私の武を天下に知らしめる為でもあった。

魏「・・・。」

昴「凶星か・・・もつたいないな。」

魏「もつたいない？」

昴「お前のその力。正しく使えば多くの人間を救うために使うことが出来るのに。」

魏「多くの人間を救う・・・。」

何故こいつはそんなことを・・・。

昴「魏延。」

魏「何だ。」

昴「強くなりたいか？」

強く？そんなこと・・・。

魏「ああ。なりたい。」

昴「そうか・・・。」

奴がフウツと一息する。

昴「さっきの一撃で劉璋に仕える魏延は死んだ。ここにいるのはただの魏延だ。」

魏「・・・貴様は何を言っている？」

昴「これから先どうするかはお前の自由だ。劉璋の配下に戻るも、野に降るも、降伏するもな。だがもし俺達と共に歩む道を選ぶなら、俺がお前を強くしてやる。そして強くなったお前の力を正しく使うための道を俺が指し示してやるよ。」

魏「・・・。」

昴「まあ、良く考えるんだな・・・さてと。鈴々は今頃敵顔と対峙しているところか・・・。たんぽぽはいるか!？」

奴が叫ぶと。

蒲「ここにいるぞ」

何やら小さな娘が現れた。

昴「俺は鈴々達の様子を見てくる。魏延を護送してくれないか？」

蒲「うん、分かった」

昴「それじゃ、頼む。またな。」

それだけ言うと奴は桔梗様の陣に歩いていった。

魏「……。」

蒲「ほら、たいした怪我してないんでしょ？早く立ちなさいよ！」

魏「おい……。」

蒲「何よ？」

魏「奴は……一体何者なんだ？」

蒲「はあ！？あんた聞いてなかったの？彼の名前は御剣昴。あの人
は天の御遣いで、たんぼぼ達のご主人様だよ」

魏「天の……御遣い……。」

噂は誇張でも何でもなく、その通りだった。あの方こそ。あの方こそが……。

魏「私が求めていた主だ。」

蒲「何？あんたどうしたのよ？」

魏「ああ・・昂様」

私はあなた様に身も心もお捧げ致します

蒲「ご主人様つたらこんな脳筋にまで・・。」

私は先ほどまでいた昂様の顔を頭に浮かべた。

昂side

敵顔の陣にたどり着くと、完全に勝敗は決しており、戦闘はほとんど行われていなかった。

昂「鈴々は・・おっ、いた。」

敵顔と対峙しているが、その周りに殺気はない。どうやらこつちも終わったみたいだな。良く見ると、そこには桃香と紫苑もいた。

昴「こつちも終わったみたいだな。」

桃「あ、ご主人様」

桃香が俺に駆け寄る。

桃「うん、終わったよ。鈴々ちゃんのおかげで敵顔さんが降参してくれたよ。」

昴「そうか。良くやったな、鈴々。」

鈴々頭を撫でた。

鈴「にははは／＼／」

敵「ぬっ・・・お主は？」

紫「桔梗。こちらの方が私の主。御剣昴様よ。」

敵「ほお。お主がかの有名な天の御遣いか・・・なるほどのう。お主ならば頷けるのう。」

昴「どうも・・・それで、話はどこまで進んでいたんだ？」

桃「ああそうだ！それで敵顔さん。もう反董卓連合に参加した諸侯の半数がすでもう領地が無いんです。袁紹さんに袁術ちゃん、白蓮ちゃん・・・公孫賛ちゃんに西涼の馬騰さん・・・。」

嚴「なにっ！？袁紹と言えば、確か三公を輩した名門ではないか。その袁紹が滅亡したというのか？」

桃「滅亡じゃないです。だって袁紹さんは私達のところに居るもの。」

嚴「どういうことだ？」

紫「曹操に敗れさった袁紹さんが、劉備様の領地をウロウロしている時に保護されていたそうよ。」

嚴「袁術は？」

桃「恋ちゃん・呂布ちゃんと連合を組んで攻めてきたんだけど、皆で撃退して、今は呂布ちゃんと一緒に私達の仲間になってくれたよ。」

嚴「呂布、天下の飛將軍にあの袁術までもが劉備陣営に与しているのか……。」

紫「呂布や袁術だけではなく、董卓、袁紹、公孫瓚。皆、自分の領土を失ったあと、劉備様の下に集い、その理想を手助けしているわ。」

嚴「ふうむ。」

昴「今この大陸の勢力も残り少ない。北方の曹操に東方の孫策。あとは……。」

敵「益州の田舎に籠り、安穩としている劉璋のボウズか。しかし奴では国を守れんだろうな。」

紫「だからこそ、私は益州の未来を・・・そして大陸の未来を劉備様に賭けたの。あなたは どうする?」

敵「決まっとる。曹操孫策など、儂は知らん。だが刃を交えた劉備殿の心底は分かっておる。知らぬ覇者より見知った王者を選ぶ方が、助け甲斐あるというものだ。」

桃「あ、じゃあ・・・。」

敵「うむ。我が魂と我が剣。共に劉備殿に捧げよう。」

桃「ありがとう! 敵顔さん!」

敵「ああ。我が名は敵顔。真名は桔梗。よろしく頼みますぞ、主殿。」

桃「うん! 私の真名は桃香っていうの。よろしくね、桔梗さん。」

昂「俺は御剣昂。・・・俺も真名で呼んでも良いのか?」

桔「当然だ。桃香殿と御剣殿の2人が、我が主ということになるつ。よろしく頼むぞ、お館様。」

昂「こちらこそよろしく頼む。桔梗さん。」

桔「さんなど不要だ。桔梗で構いませぬ。」

昴「分かった。よろしく頼む。桔梗。」

桔「うむ！」

桃「・・・あ！そういえばご主人様は魏延って人のところに行ったんじゃないかったの？」

昴「そっちはもう片付いた。後のことはたんぽぽに任せてきたんだが・・・。」

蒲「呼んだ？」

昴「ああ、たんぽぽか。ちょうど良かった。魏延はどうしてる？」

蒲「あいつならたんぽぽの天幕で大人しくしてるけど・・・連れてくる？」

昴「頼む。敵顔が降伏したこともちゃんと伝えといてな。」

蒲「ほーい。じゃあ連れてくるねー！」

桔「魏延を降すとは、やはりお館様はお強いすな。」

昴「まあ魏延は驕りが過ぎていたからな。」

桃「さすがご主人様　ところで桔梗さん。魏延さんは仲間になってくれるかなあ？」

桔「分かん。頑固な娘だからな。・・・お館様。もし魏延が降るのを拒否したとき・・・。」

昴「心配するな。どうにかなるつもりないよ。」

桔「・・・安堵した。」

桔梗が俺の問いにホッと息を吐く。すると何やら大きな足音が近づいてきた。

?「お館様ー！ー！」

振り向くと魏延がもうスピードで近づいてきた。そして俺の目の前で止まった。

魏「魏文長！ただいま馳せ参じました！」

昴「は、早いな、魏延。」

焰「焰耶とお呼び下さい！お館様！」

昴「真名を呼んでも良いのか？」

焰「是非お呼び下さい！」

昴「そうか。では焰耶。君のこれからのことだが・・・。」

焰「私の身も心もすでにお館様の物です！私はお館様についていきます！」

昴「そ、そうか。ではよろしく頼むな。」

焰「はっ！よろしくお願い致します！お館様！」

桔「むう。あの焰耶をこうまで籠絡してしまうとはのう・・・。」

昴「何かとんでもないことになったけど・・・ま、いつか。」

桃「私の名前は劉備。真名は桃香。桃香って呼んでくださいね。」

焰「はっ／＼（この方も美しい）」

桃「ええつと？」

焰「はっ！？・・・失礼致しました！私のことも焰耶とお呼び下さい！」

桃「うん！よろしくね。」

焰「はい！」

その後なにかとはしやぎすぎて焰耶は桔梗に拳骨を貰った。

巴郡は落ち、嚴顔と魏延が仲間になった。その後、朱里と雛里が嚴顔と魏延の2人が劉備軍に参加したことを流布したことにより、各地の軍が次々に参戦し、劉備軍はさらにその規模を大きくした。

後残っているのは益州州都成都のみとなった・・・。

続
く

第47話 巴郡攻略戦、井の中の蛙 (後書き)

何か焔耶がかなりおかしくなってしまうたね。戦の方もなんか
ダイジエストに。。。文才欲しいな。。。。

感想、アドバイスお待ちしています。

それではまた！

第48話 蜀州都成都攻略戦、最後の砦 (前書き)

投稿します。

最近投稿速度が落ちて来ていますね。今回はオリキャラを交えたお話です。どうか蛇足になりませんように。

それではどうぞ！

第48話 蜀州都成都攻略戦、最後の砦

巴郡で桔梗と焰耶。敵顔と魏延を降し、巴郡を攻略した。これにより、各地の軍が次々と劉備軍に参加し、益州平定で残すところ、後成都のみとなった。俺達は桔梗の城に入城し、新たに加わった桔梗、焰耶を交え、軍議を始めた。

昂「益州平定まで残すところ後成都のみだ。州都成都の攻略だが・・」

翠「と言っても益州のほとんどがあたしらに降ったんだ。特に心配はないんじゃないか？」

鈴「鈴々達なら楽勝なのだ」

桔「いや、そうとも限らん。」

紫「・・そうね。」

焰「・・そうですね。」

愛「何か問題があるのか？」

紫「ええ、成都にはまだ1人、警戒しなければならぬ方いるわ。」

桃「警戒しなきゃならない人？」

桔「親父殿じゃ。」

焰「お爺様ですね。」

桃「？」

紫「張任様。諸国ではあまり広まっていない名だけれど、益州では知らぬ者はいない方です。」

星「お主らがそれほどまでに言うほどの人物なのか？」

桔「うむ。儂と紫苑もそうだが、焰耶も、この国の武官は皆、親父殿に手解きを受けておる。老齡なれどその武は未だ健在。儂も焰耶も一度も勝ったことがない。一騎討ちも兵を率いての模擬戦も。」

愛「それほどか・・・。」

桔「皆親父殿を尊敬し慕っておった。・・・ただ劉璋のくそ坊主に群がる文官どもは親父殿を疎ましく思っておつての、劉璋に働きかけ、親父殿を将から外し、益州の辺境の街に幽閉しおつたんだが、桃香様達が儂らと戦をする少し前に将に復歸したという報告が入った。桃香様達の快進撃に恐れをなし、急きよ呼び寄せたのだろうが・・・忌々しい話じゃ。半ば無理やり追い出しておいて、都合が悪くなつたら呼び戻すなど・・・。」

桔梗はかなり苛立ってるな。

紫「もし張任様が自由に部隊を指揮できる立場にあるなら、かなり厳しい戦になると思います。」

愛「警戒し過ぎではないか？如何に優れていようと所詮は1人である。私達には武に優れた将も知に優れた軍師もいるのだぞ。」

紫「それがそうでもないわ。確かに桃香様の周りにはたくさんのお秀な将が集まっているわ。だけど張任様は桃香様に唯一ないものを持っているわ。」

愛「我らに持っていないもの？」

紫「ええ。それは・・・。」

昴「経験、だな？」

紫「・・・そのとおりです。ご主人様。」

昴「経験の差つてのは大きい。若き才を持つ英傑も、歴戦の将から見たら赤子も同然だ。」

桔「お館様の言う通りじゃ。それに、この国が今の今まで成り立っていたのは親父殿がいたからこそじゃ。」

昴「経験の差はでかいぜ？絶対縮まることがないからな。」

愛「・・・でしたら、早々に私が討ち取りましょう。一騎討ちなら経験の差など・・・。」

紫「残念だけど、今の愛紗ちゃんでは無理だわ。」

愛「むっ・・・。」

紫「単純な膂力や速さなら愛紗ちゃんの方が上だわ。でも一騎討ちをしたら愛紗ちゃんは負けると思うわ。」

愛「・・・(ギョッ!)」

愛紗は拳を強く握っている。なんとも悔しそうだな。まあ武人が戦わずして負けるとか言われれば仕方ないか。

昴「とりあえず話は分かった。警戒すべきはこの張任だけでいいのか?」

桔「うむ、残りは取るに足らん将ばかりじゃ。」

昴「なら、俺達はその事を念頭に入れて進軍しよう。警戒すべき相手かもしれないが、だからといって臆する必要もない。今の俺達には力も勢いもある。愛紗の言う通り、1人では限界がある。個で勝てないなら集でぶつかればいい。益州攻略まで後少しだ。皆気合い入れて行くぞ!」

「「「「「了解!」」」」」

??side

場所は成都。

?「ふむ、風がでてきたのお。」

この季節は老骨には堪えるのう。

「申し上げます！劉備軍が巴郡より進軍を開始しました！」

?「きおったか。」

時の勢いは劉備にある。さて、どうするかのお。。。

「あの、張任様。」

張「何じゃ。」

「本当に劉備と戦うのですか？」

張「不服か？」

「率直に、劉璋に仕える価値はあるのでしょうか？」

張「。。。。。」

「政治を顧みず、民を蔑ろにし、自身は贅沢三昧。拳げ句に張任様を都合の言いように利用して。私はこの国を治めるに劉璋は相応しくないかと。。。。。」

もはや兵の心すら離れておるのか・・・。

張「ならば劉備に降るがよい。儂は止めも罰せもせぬ。」

「張任様は何故劉璋などのために戦うのですか!？」

張「儂は二君には仕えぬ。儂は劉焉様の願いのために戦うだけじゃ。」

「ですが、劉璋は張任様を都合のいい道具としか見ておりません！
現に戦の陣立ても・・・くっ！せめて張任様が全ての指揮を取られ
ば・・・。」

次の戦。儂に任されたのは1部隊のみ。全軍の指揮を取るのは戦経
験もろくにないひよっこ。」

張「ホッホッホッ、気軽て良いわい。」

「笑い事ではありませんよ!」

張「儂は劉備と戦い、死に花を咲かせよう。お主はどうする?」

「・・・お供致します。張任様。」

張「・・・負け戦じゃぞ?」

「劉備、劉璋など知りません。私は恩ある張任様のために戦います。」

張「・・・すまぬのう。では、参ろうか。」

「はっ！」

さて劉備よ成都最後の砦である儂は簡単には抜けぬぞ？心して掛かるがよい。

昴side

巴郡から進軍し早2日。俺達はずいに成都へとたどり着いた。俺達は素早く部隊を展開し、臨戦体勢を取る。

朱「敵の動きは鈍重を通り越してますね。」

昴「確かにな。だが・・・。」

雛「1部隊だけ、練度が段違いに高いです。」

昴「あの部隊を率いているのが張任か。」

桔「うむ。親父殿の隊じゃ。」

昴「あの様子じゃ、率いているのはあの1隊のみみたいだな。」

桔「恐らく、親父殿の謀反を恐れて1部隊のみしか任せんかったのじゃろう。愚かな話じゃ。」

昴「こちらとしてはありがたい事だ。」

1部隊のみなら例え歴戦の将言えどやれる事は限られるからな。

桃「・・・張任さんを説得する事はできないのかなあ？」

紫「・・・先ほどもおっしゃいましたが、説得は無理かと・・・。」

桃「でも、紫苑さんや桔梗さんがそこまで慕ってる人なら、話せば分かってもらえるんじゃないか・・・。」

桔「無理じゃな。親父殿は益州では鷲鼻の張任と呼ばれておる方だな。一度口した言葉は例え殺されようと変えん。最後まで戦っじやろう。」

桃「でも・・・。」

俺は桃香の肩に手を置き、

昴「何にせよ、今は戦に集中にしよう、桃香。」

桃「・・・うん。」

桃香は納得してないな。

昴「この戦の指揮は桃香がするんだ。迷いを持てばそこを突かれるぞ。」

桃「うん・・・でも私で大丈夫かな？相手の方が兵数も多いし・・・」

昴「心配するな。敵の兵数はこちらより多いが、将の質は圧倒的にこちらが勝っている。その差は大きい。向こうは張任の1部隊のみで他は益州で内輪揉めしてただけの連中だ。敵じゃない。」

桃「スウー、ハアー・・・」

桃香は一度大きく深呼吸をして、

桃「ありがとう。私、頑張るよ！」

昴「よし。桃香の手腕、見せてもらおうよ。」

桃「分かったよ。それじゃ、行ってくるね！」

桃香は前線へと向かった。

翠「良いのか？ご主人様が指揮を取らなくて？」

昴「桃香なら大丈夫だ。益州制圧の最後の戦いだ。ここいらで桃香の手腕を皆に示しておかないとな。」

翠「なるほどな。」

昂「俺達は桃香の指示にすぐに対応できるようにしておこう。」

朱・雛「はいっ！」

愛紗 side

愛「臆するな！かかれー！」

「「「応ー！」」」

戦が始まり、両軍が激突した。私の隊は最前線左翼。相対する隊は、

愛「張任隊……。」

敵の部隊で唯一警戒すべき相手。

愛「くつ。」

紫「単純な膂力や速さなら愛紗ちゃんの方が上だわ。でも一騎討ちをしたら愛紗ちゃんは負けると思っわ。」

紫苑は私にそう言った。私とて連合の折りに恋に敗れてから己を鍛えなおしたのだ。如何に紫苑や桔梗の師とはいえ、遅れなどたらん！私を先頭に張任隊に斬り込んで行く。

？「ホツホツホツ、騒々しいのう。」

愛「！？・・・貴様は？」

張「この隊を率いておる張任じゃ。」

愛「・・・お前が張任か。」

見た目は紫苑達の言う通り白髪混じりの老人。確かに老人とは思えない佇まいだが、そこまで警戒すべき相手なのか？

張「お主、将じゃな。名を聞かせてもらおうか？」

愛「我が名は関羽！字は雲長！劉備軍が将の1人だ！」

張「ほー、お主が関羽か、その名、片田舎の益州にも轟いておるぞ。」

愛「ふん、張任。素っ首、貰いつける！」

青竜刀を構える。

張「ふむ、よいじゃろう。関羽程の者が相手なら冥土へのよい土産話になりそうじゃ。」

張任が剣を抜く。

張「心して掛かられよ。この老いぼれは強いぞ?」

愛「行くぞ、張任ー!」

私と張任の一騎討ちが始まった。

桃香 s i d e

戦いが始まって幾ばくか過ぎた。

「趙雲隊、右翼を突破しました!」

「張飛隊、敵將を撃破！」

次々と朗報が舞い込んでくる。この調子、この調子で……。そう願っている、1人の伝令さんが私のところへ来た。

「申し上げます！関羽隊が押されています！」

桃「っ！？愛紗ちゃんの隊が！？」

愛紗ちゃんが戦ってる隊って、張任さんの隊だ！

桃「華雄隊を救援に向かわせて！後ご主人様に伝令！張任隊を包囲して張任さんを捕縛するように伝えて！」

「了解！」

伝令さんが想華さんとご主人様のところへ向かった。

桃「愛紗ちゃん……。」

お願い、無事でいて。

愛紗 side

愛「はあ・・・はあ・・・くっ！」

張「なんじゃ、もう疲れたのか？最近の若い者はだらしないのう。」

愛「まだだ！」

青竜刀を構え、張任に飛びかかる。

張「若いの〜。」

張任が剣を構える。

力は私の方が上！奴の剣ごと弾き飛ばす！

愛「おおおー！」

ガキン！スッ・・・

愛「なっ!?!」

張任が私の青竜刀を受け止めた刹那、後ろへと私の一撃を受け流した。受け止めると予想していたため、私の体勢は崩れる。

張「ホッホッ、相手が必ず受けるとは限らぬぞ?・・・むん！」

愛「くっ！」

私は何とか張任の一撃を受け止める。

何故だ！？私の方が力も速さも上なのに！？

張「不思議かのお？力も速さも劣っている儂にいいように扱われるのが。」

愛「っ！？」

張「敵を知り、己を知れば百戦危うからず。お主は儂を知らん。それ以上に己を知らなすぎる。」

愛「なん・だと。」

張「お主は儂よりも強い。じゃが勝てない。それはお主が無駄だからだからじゃ。」

愛「言わせておけば！」

張「惜しいのう。後数年実戦で経験を積めば勝てようが、今のお主では何度戦おうと儂には勝てん。」

愛「まだ勝負はこれから・・・。」

張「良いのか？儂ばかりにかまけておって。」

愛「何を・・・はっ！？」

辺りを見渡すと私の部隊が次々に殲滅されている。

張「たとえば、練度の高い兵も、将の指揮がなければこのとおりじゃ。」

愛「それならば貴様とて同じなはずだ！」

張「儂はお主と戦う前に副官に詳細の指示を出しておいた。お主は儂の陣に来てからは出さなかったようじゃのう？」

愛「くっ・・・そ・・・。」

張「お主の落ち度で兵が逝く。お主の兵には同情するのう。」

愛「まだまだ！今ここで貴様を討ち取れば、我が隊は立て直せる！」

私は再び張任へと飛び込む。

張「ふむ、お主はまだ理解できんようじゃのう。」

ゲシッ！

愛「っ！？」

張任が蹴り飛ばした石つぶてが私を襲う。

愛「小癩な真似を！」

ギン！

向かってくる石を青竜刀で弾く・・・が、一瞬。ほんの一瞬張任か

ら目を切ったその時、

張「・・・終いじゃ。」

張任が目の前に剣を構え、振り下ろした。

ザシユ！

愛「うぐっ！」

咄嗟に横へ飛び、剣を避けるが、避けきれず、左腕に傷を負う。

張「見事。これを避けるとは、さすが関雲長じゃ。じゃが、その腕の傷、致命傷でこそないが、力が入るまい？」

愛「ぐっ！」

奴の言う通り、力が入らない。

張「成長したお主を見てみたかったが、ここは戦場、悪く思っな。続きは冥土で見てやろう。」

張任が剣を構えて歩みよる。

愛「まだだ！」

青竜刀を右腕で構える。

まだ、戦える！

張任が私と5歩程の距離で立ち止まった。

愛「？」

張「ふむ、残念じゃがここまでのようじゃのう。」

愛「それはどういう・・・！？」

辺りを見渡すと自軍の兵が取り囲んでいた。その先頭には、

愛「朱里、雛里！」

朱「ここまでです。張任さんの隊の兵士も捕縛しました。ここで投降してください。」

張任にそついい放つ朱里。

雛「すでに他の隊は全滅、残りは城へと逃げました。あなた方の負けです。」

次に雛里が告げる。

張「・・・小童どもを質に取られては致し方ないのお。関羽殿、名残惜しいがここまでじゃな。この一騎討ちは引き分けじゃ。」

張任が剣をしまう。

愛「くそっ！」

引き分けなものか！私は、また負けた。また助けられてしまった！

張任は縄で縛られ、捕縛された。

桃香 side

間一髪で愛紗ちゃんを助けられた。愛紗ちゃん、悔しそうだけどまた前みたいにならなきゃいいな。

張「。。。。」

今日の前にはさっきまで愛紗ちゃんと戦っていたおじいちゃんがいる。

桃「あなたが張任さんですね？」

張「いかにも、お主の名は？」

桃「私は劉備、字は玄德です。」

張「ほお、お主が劉備殿か。お主の評判は益州まで轟いておるよ。」

桃「ありがとうございます。」

この人が張任さん。紫苑さんや桔梗さんや焰耶ちゃんの師。

桃「・・・張任さん。あなたの力を私達に貸してください。」

張「・・・。」

桃「この国、この大陸から戦を無くし、皆が笑って暮らせる世を作るために協力してほしいんです！」

張「それはできん。」

桃「どうして!?!」

張「儂は二君には仕えぬ。」

桃「劉璋さんは民を蔑ろにして内乱をしているような人なんですよ!?!どうしてそんな人に仕えるんですか!?!」

張「それが儂の生き方じゃからのう。」

桃「・・・劉璋さんはあなたを見捨てたんですよ?向こうは張任さん1人囿に城に逃げ込みました。それでもまだ仕えますか?」

張「それが何じゃ?たとえ向こうがどうであろうと忠を尽くすのみじゃ。」

桃「・・・そんなの・・・。」

何で？どうしてあんな人のために・・・

桃「・・・分かりました。それでは・・・。」

張「逃がす、と言っなら止めておくのじゃ。」

桃「!？」

張「逃がせば僕はお主を狙う。情に駆られたなら無用じゃ。」

桃「・・・どうして。」

昴「止めておけ、桃香。」

桃「ご主人様？」

昴「それ以上は、張任殿への侮辱だ。」

桃「・・・。」

・・・分からないよ。

張「お主は？」

昴「劉備軍の御剣昴だ。」

張「ほお、お主がかの有名な天の御遣いか。」

昴「知つていただき光荣です。」

張任さんがご主人様の目を見ている。

張「ふむ。良い目じゃ。お主の噂に偽りはなぞぞうじゃ。」

昴「どうも。」

再び張任さんはご主人様の目を見つめ、

張「……すまぬが、儂の最後の願いを聞き届けてはくれぬか？」

昴「なんでしよう？」

張「ふむ、御剣昴殿。お主との」

張「——騎討ちを所望する。」

続
く

第48話 蜀州都成都攻略戦、最後の砦（後書き）

いかがだったでしょうか。少し中途半端で終わってしまいましたね。最近急激に寒くなっているためスランプ中です。（関係ないか。）

感想、アドバイスお待ちしております。

それではまた！

第49話、宿将との一騎討ち、益州平定（前書き）

投稿します！

メインは一騎討ちなんですけど、うまく執筆できるようになっているかなマ
ンガを読んで参考にしたんですけど……。色々ブツコミ過ぎて方向
性を見失ったかも（^ー^；）

それではどうぞ！

第49話、宿将との一騎討ち、益州平定

昴side

張「ふむ、御剣昴殿。お主との一騎討ちを所望する。」

昴「!?!」

俺との一騎討ち?

愛「ふざけるな!そんなもの認められるわけが・・・っ!?!」

俺が愛紗を手で制する。

昴「理由を聞かせてもらってもよろしいですか?」

張「ホッホッホッ、長生きをすると冥土へ行くのに手土産が欲しくなるんじゃよ。武人として、誉れ高い武人と戦わずして逝くのは心残りじゃ。」

昴「・・・なるほど。」

歳を取ろうと根っこは武人。というわけか。

昴「良いだろう。その願い、聞こう。」

愛「!?!、ご主人様!お止め下さい!そのような事、する必要などありません!」

昴「蜀の国の宿将だったの希望だ。受けさせてもらおうよ。」

愛「ご主人様！」

昴「それに、さっきは一騎討ちに水を差した形だからな。その詫びも兼ねて、な？」

愛「うぐっ、ですが・・・。」

昴「戦ってみたんだよ。愛紗をいとも容易くあしらった張任殿と。」

愛「・・・もし、万が一の事があつたら・・・。」

星「愛紗よ。主は言い出したら聞かぬのはもうわかっているだろ。」

愛「星・・・。」

星「万一の時は我らが止めに入ればよい。」

愛「・・・分かった。」

昴「話は決まった。張任殿。準備をしてください。」

張「礼を言うぞ。御剣昴殿。」

・
・
・
・
・
・
・
・

昴「それでは始めましょう。」

張「うむ。」

俺と張任殿が対峙する。

昴「星。合図を頼む。」

星「分かりました。それでは……。」

星が手を上げる。

俺が村雨に手を置き、張任殿が構える。

星「始め！」

一騎討ちが始まった。

昴「……。」

張「……。」

お互いにじわりじわりと距離を詰める。
さてどうするか。抜刀術の疾風で先制したいが、これは以前に刃相
手に痛い目を見た一手だ。張任殿は刃とはまた違った意味で不気味
だ。

張「……。」

張任殿も動かない。このまま睨み合っいてもしょうがない、か。な
らば。

ドオン！

一気に距離を詰める。
仕掛けて隙を探るのみ！

昴「はあ！」

ギン！

俺の一撃を張任殿は受け止める。

昴「まだまだ！」

ギン！ギン！ギン！

立て続けに斬撃を繰り返す。張任殿は無駄なく斬撃をいなす。

ギン！

昴「っ!？」

最後の斬撃を流し、張任殿が一気に懐に飛び込んできた。

張「むん！」

昴「ちい！」

ギン！ギン！ギン！

張任殿が懐に張り付き、斬撃を繰り返す。

さすが百戦錬磨。村雨の特性にすぐに気付いたか。村雨はその長さ故に懐に飛び込まれると手詰まりになる。

張「はあ！」

張任殿の斬撃が俺の首を襲う。

ブオン！

張「むっ。」

俺は上体を後ろに反らし、斬撃を避けると、村雨を手放し、朝陽と夕暮を引き抜いて斬りつける。

ブン！ブン！

張任殿はすぐさま後ろへ下がりがり、これ避ける。

張「ほお、面白いー手じゃ。」

昴「これを避けますか。やりますね。」

朝陽と夕暮を構える。張任殿は少し距離を取って構える。

村雨の時は刀が届くギリギリで間合いを取り、今は距離を取ったか。実にやりにくい。村雨は距離があれば必殺の一撃を決められる。逆に朝陽と夕暮は刃渡りが短いから距離を詰めないと攻撃が届かない。・・愛紗が苦戦するわけだ。俺も含め、今まで出会った将達は力で押し、速さでかき回す。力と速さが勝る者が優位進められる戦いだった。いわば剛の戦い。だが張任殿は違う。剛の技を見切り、相反する力で受け流し、相殺する。いかなる技を無効にする戦い。いわば柔の戦い。柔に対し剛は相性が悪い。

昴「・・・。」

張「・・・。」

柔を制するには同じく柔で対するか・・圧倒的剛で叩き潰すか・・。

張「決まったかのお？」

昴「ええ。」

俺は・・。

昴「はあ！」

剛をもって戦う！

ガギン！

朝陽をぶつける。

昴「ふっ！」

さらに連撃を加える。

ガギン！ガギン！ギイン！

張「ふうむ・・・！」

張任殿は俺の連撃をさばく。

ギイン！

夕暮を剣で止める。

もう一方の朝陽で斬りつける。

張「ふん！」

バキッ！

昴「ぐっ！」

張任殿が俺の右手の手首に拳を打ち込む。

張「止まったのお。」

斬撃が俺を襲う。

昴「甘い！」

体を半身にして夕暮を手放し、左手の拳で剣の腹を叩き軌道を反らし、斬撃を避け、大きく距離を取る。

昴「ふう。」

張「ホツホツホツ！さすが御遣い殿。規格外じゃのう。」

昴「張任殿にも驚かされますよ。」

洞察力と判断力と決断力がすごい。これが経験から成せる事か。だが、あくまでも俺は剛の力で行くだけだ！

張「（来るのお）」

地に刺さる村雨を抜き・・・。

ドオン！

引き続き剛の力で行く！

昴「おおおー！」

ガギン！

大きく降りかぶり、力の入った一撃をぶつける。

張「ぐう・・・！」

昴「まだまだ！」

ガギン！ギイン！ギン！

なおも連撃をぶつける。

こんな大振りじゃ防がれるのはわかってる。だが、張任殿の技量じや避け続けるのは困難。防御とてそのうち限界が来るだろう。俺は捌き損ねた隙を狙い打つのみ！

昴「はっ！」

ギイン！

張「ぐっ！」

張任殿の剣を持つ両腕が上へ跳ね上がる。

ここだ！

昴「ふっ！」

ギン！

張任殿はすぐさま剣を戻し、返し斬撃を防ぐ。

おしい。もう一度！

ギイン！

今度は左へ剣を持つ両腕が弾かれる。

これで！

ギン！

またもやすぐさま剣を戻し、斬撃を防ぐ。

しぶといな。だが当たるまで繰り返すのみ！そのあとでも数合同じようなやり取りを繰り返したが張任殿は俺の斬撃を防ぎ続ける。

こちらのペースだ。これを繰り返し・・・ていいのか？張任殿は本当に防戦一方なのか？さつきからやけにあっさり、剣を弾かれて隙を作っている。偶然かそれとも・・・。

昴「はあ！」

再度力ののつた斬撃を繰り返す。

スツ・・・。

昴「!?!」

張任殿は両腕の力を抜いた。

ガキン！

張任殿の剣が飛ぶ。

張「むん！」

張任殿が蹴りを繰り返す。

問題ない、防げ・・・!?!?

張任殿蹴り足。その先端には刃が付いていた。仕込みの具足。暗器

か！腕でのガードでは腕事もっていかれる！ならば！

ドン！

咄嗟に村雨の鞘を抜き、張任殿の足首を狙い打つ。

張「なんと！？」

初めて驚愕の顔を浮かべた。

ドン！そのまま一回転しながら真後ろに飛び、体勢を整える。

張「ふむ。」

張任殿は足首を地にグリグリとやり、具合を確かめる。足一本もつていきたかったが、あの分じゃ効果無しか。

昴「まさか暗器とはな。」

張「以前この国に立ち寄っていた発明家に仕込んでもらっておつてのお。・・・卑怯者と罵るか？」

昴「まさか。相手の虚を付くのが戦の常道だ。この程度は駆け引きの範疇だ。・・・しかし、老いてもなおその武。衰え知らずですね。」

張「衰える？愚問じゃ。儂の武は老いごときでは曇らん。常に今が全盛期じゃ。」

昴「ハハハッ、なるほど。」

歳を取れば練れる駆け引きが増えるというが、駆け引き一つでここまでできるのか……。さつきも俺の斬撃が当たる瞬間、その力に反発せずに流し、俺の斬撃の威力を吸収していた。言うのは簡単だが、やるとなれば困難だ。完全無比な洞察力が必要だ。

張「強いのお。」

昴「？」

張「お主は強い。儂とお主の差は歴然じゃ。じゃが、こうして対等に戦える。その差はどうあっても縮まらん。じゃが埋めることはできる。戦と同じ。策一つで差は埋まるのじゃ。」

昴「・・・勉強になります。」

俺は弾き飛ばした剣を張任殿の前に放り投げる。

張「気前がいいのお。」

張任殿が剣を拾う。

昴「丸腰のあなたを討つても意味がない。仮に暗器を持っていてもそれでは俺に通用しない。それに……。」

村雨を構える。

昴「もう小細工も誤魔化しも通用しない。」

縮地で背後を取る。

張「!？」

ガキン!

張「うぐっ!!」

昴「続きますよ?」

縮地で動き回りながら斬撃を繰り返す。

ギン!ギン!ギン!ギン!

張「ぐぐぐっ!!」

ギン!ギン!ザシュ!ギン!ザシュ!

必死に防ぐも徐々に傷を増やしていく。

昴「ふっ!!」

張「ぬっ!!」

斬撃を浴びせる。

ピタッ!

張「!？」

剣に当たる直前で村雨を止める。

昴「囧だ。」

ザシユ!

張「くっ!」

背後に回り、斬りつける。

昴「あなたの策も、手の内が明らかになればおそるに足らん。」

手の内が分からない内はうかつ飛び込むことができなかった。明らかになれば遠慮なく飛び込める。

張「。。。。。」

村雨を鞘に納め、抜刀術の構えを取る。

昴「これで終わりだ。」

このままじわじわ削れば確実に勝つだろう。だけどそんな勝ち方は俺は望まない。

ドオン!

縮地で俺の射程範囲に入る。

昴「ふっ!」

鞘から村雨を引き抜き、斬撃を繰り出す。張任殿の体勢では避けることはできない。

終わりだ・・・。

張「・・・青いのお。」

張任殿が剣を構える。

無駄だ。剣ごとをもっていけ・・・っ！？

張任殿は左腕に剣を添えた。

グシュ！

張任殿の左腕が飛ぶ。

左腕を犠牲にして俺の斬撃を止めたのか！
村雨は張任殿の腕のみを飛ばし、振り抜かれた。
最後の最後でぬかった！双龍も無理だ！

張「ふん！」

張任殿が斬撃を繰り出した。

昴「くっ！」

俺は勢いのままぐるりと一回転し、再度斬撃を繰り出す。

昴「おおおおー！」

俺と張任殿の斬撃が交差する。

ザシュ！

両者動きを止める。

張「・・・見事・・・」

ブシュ！

張任殿の胸から鮮血が飛び散る。

張「ぐっ！」

張任殿が倒れた。

昴「ふう。。。」

俺の方が先に当たった、のか。。

一騎討ちは終わった。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

昴「張任殿。。。」

張「ゴホッ！最後の小細工も、通用せんかったかのお。」

昴「。。。紙一重でしたよ。」

ほんの僅かに俺が速かった。

桔「親父殿……。」

焰「お爺様……。」

紫「冽翁様……。」

桔梗「て焰耶と紫苑が詰め寄る。」

張「ホッホッ。ひさしいのお。ひよっこ……ども。」

桔「親父殿、儂らは……。」

張「そんな顔をするな。得た力を自分の信じる道を切り開くために使えと言ったであろう。」

桔「……。」

桃「……どうして。」

昴「桃香……。」

桃「どうしてここまでする必要はあるんですか？」

張「言っただであろう。そういう生き方しか儂は出来ぬからじゃ。」

桃「……ご主人様、治療を……。」

俺は首を横に振る。

桃「どうして!?!」

昴「・・・傷は治せる、だけど・・・。」

張「気付いて、おったか。」

昴「・・・張任殿の身体は病魔で蝕まれている。もう手の施しようがないくらいに。」

桃「そんな・・・。」

末期だ。仮にこの場に華佗が居たとしても・・・。

昴「だから最後の一撃が鈍ったのでしょうか?」

最後の一撃。タイミングはどう考えても相討ちだった。

昴「勝った気がしませんよ。」

張「紛れもなく・お主の・・・勝ち・じゃ・・・ゴホッ!」

口を血を吐き出す。

張「病魔すら・・・念頭に入れて・・・戦うのが・武人・じゃ。」

昴「張任殿・・・。」

張「劉備殿・・・儂は最後・・・まで己を・貫けた・・・。悔いはない。」

桃「……。」

昴「張任殿……。」

冽「冽翁・じゃ。」

昴「？」

冽「僕の・真名は・・冽翁・じゃ。最後に僕の真名を・・預かって・
・もらえんか？御剣昴殿。劉備殿。」

昴「・・分かりました。冽翁殿。あなたの真名。確かに預かりまし
た。」

桃「私もお預かりします。冽翁さん。」

冽「すまぬ……の。ゴホッ！ゴホッ！」

大量の血液を吹き出す。

桔「親父殿！」

焰「お爺様！」

冽「もし……また・人・として……転生賜るなら……お主達に……
仕えて……みたいのお。御剣昴・殿のような・気高き……王に……劉
備……殿のような、優しき……王……に。」

昴「ははっ、機会があれば、是非ご指導ご鞭撻、よろしく願います。」

冽「ホッホッ、言い・・・よるわい。」

冽翁殿の体から力が抜けていく。

冽「我が・・・人生。最後・・・まで、よき・・・もの・・・で・・・あつ・・・た・・・」

桃「・・・」

冽「この・国を、・・・頼み・・・ま・・・す・・・ぞ・・・」

冽翁殿の体から力が抜けた。もはや脈動も鼓動もない。

桔「親父殿・・・！」

焰「お爺様・・・」

紫「冽翁様・・・」

桔梗と紫苑は目を伏せ。焰耶の瞳からは涙が溢れている。

昴「・・・冽翁殿。俺はあなたという武人がいたことを忘れません。決して。」

冽翁殿に手を合わせ、黙禱を捧げた。

桃「・・・分からないよ。どうしてこんなことする必要があったの？」

昂「病魔に臥せ、残りの余生を過ごすより、武人として散る道を選んだ。それだけだ。」

桃「でも！それでも私は長く生きていてほしかった！死ぬことが本望なんて、間違ってるよ……。」

桃香の瞳から涙が溢れる。

桔「……桃香様。親父殿の顔をご覧くださいませ。」

桃「？」

桔「とても穏やかなお顔じゃ。死に逝く者のお顔には見えませんじやろう？」

桃「……。」

桔「親父殿は満足して逝かれた。後悔などは決してなかったと思われます。それに……。」

桃「？」

桔「お館様と桃香様に仕えてみたい。儂の知る親父殿は決してそのような言葉言わない方だった。最後の最後、お館様と桃香様が変わったのじゃ。親父殿の信念を。」

桃「……冽翁さんは幸せだったのかな？」

紫「ええ……。冽翁様は救われたと思います。桃香様と、ご主人様

のおかげで。」

桃「……。」

昴「冽翁殿を丁重に弔ってあげてくれ。」

「はっ！」

兵が担架に冽翁殿を乗せ、碧の張旗を冽翁殿に掛け、運んで行く。

昴「……桃香。戦はまだ終わってない。行くぞ。」

桃香は袖で涙を拭い、

桃「うん。」

強く頷いた。

その後成都への攻城戦が始まった。堅牢城だが、冽翁殿を失った劉璋軍はもはや軍の統制も取れず、朱里と雛里の策もあり、攻城戦を開始してほどなくして城門は開かれ、愛紗の隊を先頭に突入し、玉座を占拠した。

戦は終結し、益州は俺達劉備軍が平定した・・・。

続く

第49話 宿将との一騎討ち、益州平定（後書き）

益州平定しました。1番苦勞しました。益州の戦いが。自身の文才の無さを改めて実感しました。ここからしばらく拠点かな？

感想、アドバイス、お待ちしています。

それではまた！

第50話、多忙なる日々、飛来する闇と報（前書き）

投稿します。

拠点・・・の前に1話だけ。

それではごっごー！

第50話 多忙なる日々、飛来する闇と報

徐州を出発し、曹操軍に追われながらも無事益州にたどり着き、先日、めでたく益州の平定をした俺達劉備軍。ここまで駆け足で進んできたこともあり、ゆつくり休みたい所だが、まだやらなければならぬ事がたくさんある。さしあたって、益州の地を立て直す為に内政状況を調べたのだが・・・。

昴「酷いな・・・。」

朱「酷いですね。」

雛「酷いです。」

ある程度は覚悟していたが、現状はかなり酷かった。とにかく劉璋に待る官吏達は民から巨額の税を搾り取り。自らの懐にしまいこみ、残りには内乱に当てていたのだ。そのため、田畑水田は荒れ放題。道もろくに整備されていないなど、挙げたらキリがない。改めて、劉璋に見切りを付けた民の気持ち理解できた。

昴「治水工事、農地整備に道の舗装に税制改革等々・・・やることは山積みだな・・・。」

朱「まったくです・・・。」

雛「あう・・・。」

さて、どうしたものかな。手間取れば民心はあつという間に離れる。迅速な対応が必要だ。

昴「ん〜・・ならいつそのこと、大改革しちまうか？」

朱「大改革、ですか？」

昴「ああ。とりあえず」

俺が提案したのは独立治安維持部隊である警備隊。これは華琳のところでも行つたやつだ。次に役所の設立。役割は領内の住民に戸籍や商人達に証明書を発行し、商人を認定すること。他にもいくつか提案したが、大規模な改革はその2つだ。

昴「　　ってな感じな改革を行おうと思うんだが、どうだ？」

朱「・・・。」

雛「・・・。」

朱里と雛里は固まっている。

昴「朱里？雛里？」

2人に声を掛けると、

朱「す、すごいいお考えです！そのような改革、思いつきませんか？
た！」

雛「そのヤクシヨと言つのも素晴らしいです！それが設立されれば
税を払う人達が確定出来ます！」

朱「警備隊も設立されれば犯罪件数は大幅に減少しますね！」

2人は大いに盛り上がっている。

昴「通常、ここまで大改革をすれば反対者は多数出るだろうが、劉璋達が圧政を敷いていたから税率を下げる等の対策を取れば反対者はあまり出ないだろう。」

朱「そうですね。」

雛「そのとおりかと。」

昴「明日までに草案を纏めてくるから2人は今日のところは帳簿を調べて私服を肥やしている官吏やそれに群がる商人の所在を洗ってほしい。」

朱「それは構いませんが・・・。」

雛「どうされるんですか？」

昴「事情聴取を行って、黒とみたら財産没収し、場合によっては国外と追放する。」

朱「分かりました。放置すれば国は食い物にされてしまいますからね。」

雛「やむを得ないかと。」

昴「今日はこんなところか・・・。しばらくは皆・・・特に朱里と雛里にはかなり負担をかけることになるけど、よろしく頼むな。」

朱・雛「はい。任せてください。」

昂「それじゃ、この山積みになっている書簡を片付けるとしますか。」

朱・雛「御意です。」

書簡との戦が始まった。

2月は書簡とのにらめっこは続いた。その量は徐州の州牧の時の比じゃない。日の入りより少し前に起きて政務を始め、深夜まで作業。睡眠時間は2時間、少ない時間で1時間だ。まあ桃香や他の皆は違っけどね。俺は自身の鍛練とか軍務もあるからこんな具合になる。通常2月もこんな生活すれば確実に過労でぶっ倒れるが、俺は寝る前に以前に華琳や冥琳に渡した丸薬を飲んでるので昨日疲労はあまり残らない。今日も今日で書簡との格闘が始まる。

・
・
・
・
・
・

とある日の昼下がりに。

桃「ふへえ〜。。。」

桃香が机に突っ伏す。

昴「お疲れさん。はい、次これな。」

ドン！と桃香の前に新しい書簡の山を並べる。

桃「ええー！こんなにー！？」

昴「当然だ。怠ればそのツケは明日に回ってくるぞ。」

桃「うう〜。。。」

涙目の桃香。

朱「桃香様、私達もお手伝いしますので。」

雛「頑張りましょう。桃香様。」

桃「・・・うん。頑張る・・・。」

まあ、2月もこんな調子じゃ、桃香でなくても参るよな・・・。

昴「これも王の務めだ。しんどいだろうが頑張ってくれ。・・・俺は息抜きに散歩にでも行ってくるな。」

桃「あゝ！ご主人様だけずるい〜！」

昴「俺はもうこれだけ終わらせたがな。」

量は桃香の3倍以上だ。

桃「もうこんなに終わらせたの!？」

昴「まあな。・・・それじゃ、桃香、朱里、雛里、任せた。」

朱「はい」

雛「御意です」

桃「ふえーん(TOT)」

すまん。頑張ってくれ、桃香。

城の廊下にて・・・。

愛「あ、ご主人様、お疲れ様です。」

昴「愛紗も、調練お疲れ様。」

愛「ご主人様はこれからどちらに？」

昴「政務も一段落したからちよつと散歩にな。」

愛「そうですか。でしたら私もお供致します。」

昴「・・・あゝ、悪いな、少し1人になりたいんだ。」

愛「ですが、お一人では何かあつた時に・・・。」

昴「散歩と言つても領内だ。心配いらないよ。俺より桃香のところ
に行つてあげてくれ。書簡に囲まれて今にも泣き出しそうだったか
ら。」

愛「・・・分かりました。・・・ご主人様と二人きりになりたかったのに。(ボソツ)」

昴「ん？何か言った？」

愛「い、いえ／＼、何でもありません。ではご主人様、お気をつけて。」

昴「？・・・ああ。」

俺は愛紗に手を振り、城の外へと向かった。

街を軽く見て回った後、近くの森へとやってきた。

昴「うゝー、疲れた〜。。。」「

肩を回し、コキコキ鳴らしながら森を歩く。

昴「やっぱりデスクワークは肩にくるな〜。。」

まだしばらくはこんな日々が続くんだよな〜。

チュチュン。。。。

小鳥達のさえずりが森に響き渡る。

昴「癒されるな〜。」

マイナスイオン効果だっけ？心身共に癒されてる気がする。

昴「提案した改革も順調に進んでるし、今のところ言うことではないな。」

役所や警備隊の設置。間諜や騎馬隊の強化等々。順調順調。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

昴「……。」

しばらく、森を眺めながら散歩する。少し開けた場所で立ち止まる。

昴「……居るのは分かってる。出てこい。」

俺の後方に問い掛ける。

？「おやおや、まさか気付いていたとはね。」

やはりこいつか。

昴「良くそんな戯言言えるな。あからさまに気配を垂れ流しとして……何の用だ、刃。」

刃「くくくつ、俺のラブコールに気付いてくれて嬉しいよ。何、益州を平定したみたいだからね。祝いの言葉を贈りに来てあげたよ。

御剣昴君

昴「お前がそんな律儀な奴だとは思えないがな。……本題は何だ？」

刃「あれから君がどれほど者になったか。確かめたくなくてね。」

昴「……なるほど。」

刃に殺気をぶつける。

刃「……なるほど、確実に育っているみたいだね。俺は嬉しいよ。」

昴「ほざいてる。」

村雨に手を置き、構える。

刃「くくくつ、良いね良いね、この空気。それじゃ・・・殺ろうか？」

刃が自身の刀に手を置く。

あの構え・・・何をするつもりだ？

刃「ねえねえ、ちよつとこれ、見てくれない？」

何を・・・！？、あの構え、まさか！？

刃「くくくつ。」

ドオン！

刃が俺との距離を詰める。

あの構え、腰元の刀に手を置き、重心を前に置いたあの構えは・・・。

ザシユ！

北辰流抜刀術、疾風・・・だと・・・。

俺の身体が2つに別れる。

刃「あはっ 出来るもんだね」

刃が高笑いをする。

刃「まさか、こんなあっさり……。」

ブオン！

刃の背後から斬りつける。

昴「……ちっ！」

外したか……。

刃「縮地の高速移動による残像か。ま、分かってたけどね。」

昴「……。」

俺の秘技の1つの疾風を一度見ただけで再現したのかよ。

刃「いきなりじゃ再現仕切れないや……。後2、3回試せば、ちよろいね。」

昴「……くっ！」

人が苦勞して修得した技を嘲笑いやがって！……だが、直前で気付かなかつたら本当に真つ二つだった。

昴「……。」

刃「……なるほど、やっぱり確実に育っているね。今の君なら本気で戦えそうだよ。」

チン！

刃はそう言うと、刀を鞘に納めた。

昴「何のつもりだ。」

刃「まだ足りない。今の君なら俺の本気を引き出すことが出来るだろうけど、本気の俺を相手したら今の君では相手にならない。もう少し待ってあげるよ。」

昴「後悔するぞ。」

刃「是非させてよ。それこそが俺にとって1番の愉悦だよ。いずれ最高の舞台を用意してあげる。その時まで・・・じゃあね。」

刃の周りに木の葉が群がる。

昴「待て！」

刃に飛び込み、村雨を一閃する。

ブオン！

しかし斬れたのは木の葉のみで、そこには刃の姿はなかった。

昴「・・・くそつ。」

まだ俺は刃に及ばないのか・・・。

昴「もつと強くないと・・・。」

俺は奴を倒せない。

昴「・・・ふう。今日は何とも珍客が多いな・・・そつちも出てこい。覗き見なんざ趣味が悪いぞ。」

そつ問い掛けると大木の陰から、

？「あらん、気付いていたのねん」

やつぱり・・・。

昴「お前か・・・貂蝉。」

貂「あら、私のラブコールに気付いてくれてのね、嬉しいわん」

昴「悪いが、今俺は機嫌が悪い。用があるなら手短に頼む。」

貂「・・・つれないわねん、分かったわ、要件を伝えるわ。」

昴「その様子じゃ、あまりいい話ではなさそうだな。」

貂「そうね。いい話ではないわね。」

はあ、やつぱりか・・・。

貂「それで要件だけど、管理者同士での話し合いで決まったことだけど、もし、あなたが刃に敗れたら、その時点でこの外史を消滅させる事が決まったわ。」

昴「何だと・・・。」

消滅・・・だと!?

貂「刃言えど、外史消滅のエネルギーを食らえば無事ではすまないわ。たとえ仕止めきれなくてもその直後に封を施せば永遠に封印が出来る・・・かもしれないわ。」

昴「そんな簡単に外史を消滅させるのかよ。」

貂「やむを得ないわ。どのみちあなたが敗ればこの外史は刃によって壊されるわ。そして他の外史も同じ運命を辿るわ。」

昴「・・・くそっ!」

好き勝手言いやがって!

貂「チャンスは一度きり、あなたとの戦いで消耗した直後の一度きり。でも消滅なんてしないわ。」

昴「?」

貂「あなたが刃を倒すから。そうでしょ?」

昴「!」

そうだよ。俺は何で負けた時のことなんて・・・。

昴「そりゃそうだ。刃は俺が倒す。それ以外の結末なんて考える必

要はないな。」

貂「そうよん、期待してるわよん」

昴「任せろ！俺はもつと力を付ける。刃を倒すために。そしてこの乱世も終わらせ、この外史を守る！それが俺の守り手としての使命だからな。」

貂「その意気よ」

この外史を、刃や管理者の思惑通りに行かせない！俺は新たに覚悟を決めた。

益州平定後の、最も慌ただしい1日が終わった。

続く

第50話〈多忙なる日々、飛来する闇と報〉（後書き）

警備隊等、色々組み入れてみたのですが、基本、政治等にそこまで詳しくない自分なので少々不安です（^|^-;）

感想、アドバイスお待ちしております。

それではまた！

第51話 苦悩なる姫、得た役割 (前書き)

投稿します！

過去最高のキャラ崩壊警報を発動します！

正直別人です。それを受け入れられない方はリターンで

それではどうぞ！

第51話 苦悩なる姫、得た役割

昴「ふう〜。」

ようやく一段落ついたな。

益州平定から早くも3ヶ月。政務の方もだいぶ落ち着いてきた。

昴「……。」

ふと窓から外を眺める。青い空と共に平和な街並みが広がっている。

?「おーっほっほっほー!おーっほっほっほー!」

昴「……。」

?「おみこしワッショイ!おみこしワッショイ!」

昴「……。」

今日も成都是平和だ。

詠「そんなわけないでしょ!」

昴「詠……。人の心を読むなよ……。」

詠「細かい事はどうでもいいのよ!とにかくくれ!」

昴「ん〜……。絶好の洗濯日和だな。」

詠「もう少し下を見なさい！#」

昴「冗談だよ・・・、袁紹か・・・。」

何かと賑やかな奴だな。

昴「別にいつものことだろ？」

詠「そうだけど、あれを見て！」

昴「見てって、だから見てる・・・あつ。」

良く見ると、袁紹の後ろ、猪々子と斗詩（真名は成都制圧の少し前に預かった）の間に月がいた。

昴「何があったんだ？」

詠「月と街に買い出しに行っただけで、そしたらあいつらが騒ぎを起こして・・・。」

昴「それに月が巻き込まれたと。」

詠「うん。月が、ボクを必死に逃がしてくれたんだ。」

なるほど・・・。

昴「話は分かった。袁紹に関しては多少は多目に見てたんだが・・・。」

さすがにあれは放置できないな。警備隊も発足したばかりでまだ

うまく機能していないからあれの扱いには戸惑いそうだな。

昴「あれは止めないと後々面倒なことになりそうだから今すぐ鎮圧しに行くよ。」

詠「月のこともお願い。」

昴「分かってるよ。それじゃ、行ってくるわ。」

確か鈴々とたんぽぽが今日非番だったな。一緒に連れて行こう。

紹「おーっほっほっほ！おーっほっほっほ！」

猪「おみこしワッショイ！おみこしワッショイ！」

斗「おみこしワッショイ……。おみこしワッショイ……。」

居た。ノリノリの袁紹と猪々子に涙目の斗詩。あれが騒動の中心だ

な。

昴「たんぼぼは警備隊と一緒に野次馬を散らせてくれ。鈴々は俺と騒動の中心を制圧な。」

蒲「はい」

鈴「了解なのだ！」

たんぼぼが野次馬のところに行き。俺と鈴々が袁紹のところに向かった。

昴「お前ら、この辺にしておけ。」

鈴「そこまでなのだ！」

紹「あら？」

猪「あ、アニキー！」

斗「ごめんなさい！ご主人様ごめんなさい！」

月「へー……。」「

楽しそうな袁紹と猪々子と涙目の斗詩と月。斗詩は気苦労が絶えないな。

昴「袁紹。警備隊の仕事を増やさないでくれ。」

紹「あら？わたくし何かなさいまして？」

昂「御輿で馬鹿騒ぎを今まさにしてるだろ……。鈴々、御輿撤去。」

鈴「応！」

鈴々が1人で御輿を持ち上げ、運んでいく。

紹「何をしますの!？」

昂「道にあんなの置いておいたら邪魔だろ……。つうか、袁紹、君も一応はうちに厄介なってる身なんだから大人しくしてくれよ……」。

紹「厄介? あらあら、三國一の当主であるこの私が、あなた達に厄介なつてると?」

昂「そのとおりだろ。」

紹「あなた、誰に不遜の態度をとっていますの? このわたくしは三公袁家の末裔……」

昂「その袁家はもうないだろ。君はもうただの袁本初だ。」

紹「……あなた、わたくしを侮辱してますの?」

昂「そうじゃない。もう君を縛る三公袁家はない。」

紹「っ!?!? ……しば……る?」

昂「ああ。連合で初めて君に会った時から思ってたことがある。君

が三公袁家を自称するとき、それを誇っているようには見えなかった。俺には自分に言い聞かせてるようにしか見えなかったよ。」

紹「っ!？」

昂「袁紹。もういいんじゃないか？その袁家はもうないんだ。君はただの袁本初として・・・。」

紹「あなたに・・・あなたにわたくしの何が分かると言っの!？縛る？ふざけないでくださいな！袁家はわたくしの誇り、わたくしの全てですわ！血筋も何もない成り上がりのあなたごときが、知った風な口を聞かないでちょうだい!！」

袁紹は走っていった。

袁紹。誇りか。だったらなんでそんな目をするんだよ。なんでそんな泣きそうな顔をするんだよ。俺には・・・俺には・・・

袁紹 side

全く！なんなんですよ、あの男は！連合の時から気に入っていませんでしたわ！

紹「せつかくのいい気分が台無しですわ！」

この怒りをどうしましょうか。．．まあいいですわ。今は何か腹こしらえでも致しましょう。

紹「手持ちは．．そういえば、お金はほとんど斗詩さんが持っていたのでしたわ。」

仕方ありません。本来なら高貴なわたくしには高級食材を使った料理が相応しいのですが、今はお腹に入れば何でもいいですわ。確か屋台．．でしたっけ？それで我慢しましょう。．．あそこに行きましょうか。

屋台に近づく。

紹「これ、1ついただきますわね。」

「毎度！」

店主が景気のいい声を出す。しばらく待っていると。

商A「しかしこの大陸もすっかり変わっちゃったな。」

商B「そうだな。黄巾賊が蔓延ってた頃と比べて今やほとんどの諸侯が減ってしまったな。」

紹「？」

何ですか？

商A「今有力なのは曹操に孫策にこの国の劉備様と御遣い様だな。」

商B「やっぱりそうだよな。お前確かいろんなところに行商に出てるんだろ？どうだった？」

商A「孫策の領土はいいところだったよ。街は活気に溢れてたし、物も流通しているし。なかなか商売しやすかったよ。」

商B「あのあたりって、昔袁術の領土だったよな？」

商A「ああ。何でも、劉備様の昔の領土に攻めて敗北して、その隙に本城を盗られちまったんだとよ。」

商B「そうだったのか。」

何ておまぬけな美羽さんだこと。戦に負けた挙げ句に本城を盗られるなんて。

商B「曹操の所はどうだった？」

商A「あそこもいいところだったよ。警備隊つてのがいるから安心して商売ができたからな。」

きーっ！あのクルクル娘の名前なんて聞きたくもありませんわ！

商B「へえー、そういえば少し前に袁紹が治めてた土地がなかった

か？」

あら？わたくしの話ですの？殊勝な心がけですわね。

商A「あそこは駄目だったよ。何せ治めているのがあの無能だぜ？」

紹「っ！？」

やめて・・・。

商A「袁術のところも酷かったけど、お膝元はまだ商売できたんだが。袁紹の所は駄目だ。あの無能の太守が重税を強いて我が儘三昧ばかりしてるから誰も何も買わない。」

やめて・・・。

商B「でも袁紹って名門なんだろう？」

商A「ご先祖様は凄かったみたいだが、今の代の当主は無能だよ。街の奴等も口を開けば無能無能、だったぜ？」

やめて・・・。言わないで・・・。

商B「そういえば聞いたことあるな。袁紹って確か2倍以上の兵力がいたのに曹操に負けたんだっけ？」

商A「そうだぜ。2倍以上もいたのに負けるなんてホント無能だよな。」

やめて・・・。お願い・・・。

商B「あれで名門だなんて笑えるよな。」

商A「ホントホント。ご先祖様も今の当主を見て。さぞかし呆れるんだろうな。」

やめて!!!!

ドン!

商A・B「?」

ダッ!

わたくしは駆け出した。もう話を聞くことが出来なかったから。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

とにかく走る。場所も目的もなく走る。

ドスン！

紹「きゃっ！」

「おい、嬢ちゃん、大丈夫か？（この血筋だけの無能太守が！）」

紹「っ！？、いや！」

「おい、嬢ちゃん！？」

とにかく地を蹴って走る。

やめて！何も言わないで！無能と呼ばないでください！
ひたすら走り続けた。

紹「はあはあ、はあはあ。」

耳を塞ぎ、目を閉じ、ひたすら走り続けた。

ダッダッダッダッ、ゲシッ！

紹「きゃっ！」

ズシーン！

何か足を取られ、激しく転倒する。

紹「うう・・・ここは何処かしら？」

気が付けばそこは見知らぬ場所でした。傍に川が流れていた顔
を覗いた。そこには顔も服も髪も汚れたわたくしの姿が映りました
わ。

紹「・・・こんなに泥だらけ。以前のわたくしでしたらこんな姿、考
えられませんでしたわね。」

常に優雅で、美しくいられたあの頃からは・・・

紹「・・・。」

もう、わたくしには何もありません。武も知らない。唯一の袁家も、
華琳さんに盗られてしまいましたわ。

紹「・・・あら。」

ふと見ると、自分のすぐ傍に一本の剣がある。賊か何かが落として
いったのでしょうか？

紹「これで喉元を貫けば、わたくしは楽になれるのでしょうか・・・」

もう・・・疲れましたわ。袁家の末裔を演じることも、何も考えないことも・・・生きることさえも・・・。

紹「わたくしが居なくなれば、猪々子も斗詩も自由に生きられますものね。」

誰ももうわたくしを見てくれない。きつと居なくなっても、誰も気にも留めない。

紹「そんな命なら・・・。」

もういつそのことごとくで・・・。

わたくしは目を瞑り、剣先を喉元に突き立てる。

紹「さよなら・・・。」

誰に対して？返してくれる相手もないのに。

剣を握る手に力を込める。しかしいくら力を入れても喉元に刺さらない。まるで何かがそれを阻んでいるかのように。おそるおそる目を開けるとそこには・・・。

紹「あ・・・。」

昴「よう。」

そこには剣先を掴む御遣いの姿がありました。

昴side

袁紹がいなくなった後、俺は街中を探してまわった。訪ね歩いて見ると、街の外に走っていく袁紹を目撃されたのだと森に来てみた。気配を辿ると、そこには喉元に剣先を突き立てる袁紹がいた。

紹「さよなら。。。」「

袁紹は自決しようとしていた。俺は縮地で飛び込み、剣先を掴んだ。

紹「あ。。。」「

昴「よう。」「

そこには啞然とした袁紹が。その瞳からは涙が流れていた。

昴「穏やかじゃないな。」「

俺は袁紹から剣を奪い、遠くへ投げる。

紹「何の・・・真似ですの？」

袁紹は涙を拭い、目を反らしながら訪ねる。

昂「目の前に命を捨てようとしている人間がいるのを止めるのに、理由はいらないだろ？」

紹「ふん！放っておいて下さればよろしいのに。どうせわたくしが死んでも、誰も困らないのですから。」

昂「そんなことはないだろ。猪々子も斗詩も悲しむぞ。俺だって、
・特に桃香なんて特にな。」

紹「劉備さんが？」

昂「あいつは他人のことを自分のことのように喜んだり悲しんだりする奴だからな。」

紹「そう・・・ですの。」

昂「今日は月が良く出ている。しばらく月見でもしないか？」

俺は寝転がり、夜空を見上げた。

紹「・・・ふん。」

袁紹も座り、夜空を見上げていた。

・
・
・
・
・
・
・

昴「……。」

紹「……。」

1 時間程夜空を眺めていると、

紹「袁家は、わたくしにとって誇りでしたわ。」

昴「……。」

紹「幼い頃、お父様にご先祖様のお話をお聞きして、わたくしもご先祖様のように立派な人になりたい。ですからわたくしは努力致しましたわ。……ですけどわたくしは何の才能もありませんでしたわ。私塾で知を学んでも、将の方から武を学んでも、わたくしにはろくに身に付かなかった。」

昴「……。」

紹「同時期に入った華琳さんはどんどん頭角を表していきましたのに、わたくしは落ちこぼれのままでした。」

昴「そうか。」

紹「わたくしは華琳さんが嫌いでした。高慢な性格もそうですが、華琳さんはわたくしが苦労して手に入れたもの、手に入れられなかったものを呼吸するのと同じに身に付けてしまうから。」

昴「……。」

華琳を前にしたら誰もがその才を覆ませるだろうが……。

紹「その内に皆がわたくしを陰で貶すようになりました。無能だと家柄だけが取り柄の女だと。そしてついに父上までも……。」

袁紹が1度言葉を止める。

紹「わたくしはそこで努力することを止めました。考えることも、人の言葉を聞くことも。ならばせめて生まれもった唯一の誇りの袁家を自慢するように致しましたわ。そうすることでしか。わたくしはわたくしを保てなかったから……けれど、それもなくなってしまうましたが。」

昴「袁紹……。」

紹「もうわたくしには何もなくなってしまうました。ここにいるのは何もないただの女。ですからわたくしなんていなくなってしまうえ……。」

昂「本当に何も無いのか？」

紹「えっ？」

昂「袁紹。君は自分には何も無いと思えるほど努力したのか？」

紹「しましたわ！けれどわたくしは駄目だった・・・。」

昂「俺にはそう思えない。華琳と比べて、自分には何も無いと決めつけて諦めただけじゃないのか？」

紹「っ！？それは・・・けれどわたくしには何の才能も無くて・・・。」

昂「才能。袁紹に限らず、皆、何かを持つ者や何かを成した者にこの言葉を使ったがる。けどな才能なんてのは所詮ただの言葉だ。」

紹「言葉？」

昂「袁紹。華琳や、愛紗や星、朱里や雛里でもいい。皆生まれながら今の能力を持っていたと思うか？何もせずして今の高見に登れたと思うか？」

紹「それは・・・。」

昂「皆な、死に物狂いに努力してここまで登ったんだ。そして今も努力している。更なる高見に登るためにな。」

紹「・・・。」

昴「俺には、君は華琳を諦めるための言い訳にしたようにしか聞こえない。」

人は簡単にものを諦められる者じゃない。だから人は自分に納得できる言い訳を探す。諦めるために。

紹「分かったような口を聞かないで！あなたに何が分かるというの！？」

昴「分かるよ。だって君は悔しいと思ってるんだろ？」

紹「！？」

昴「悔しいという気持ちがあるなら、君はまだ全てをやりつくしていない。」

紹「……。」

昴「探せばいいじゃないか。」

紹「えっ？」

昴「みつともなくても、惨めでもいいから自分に何が出来るか探せばいい。また昔みたいに努力すればいい。」

紹「……努力すれば、見つかりますの？」

昴「そりゃやってみないと分からないさ。努力をすれば必ず報われるとは限らない。・・けどな、何かを成した者は必ず努力しているんだ。また1から頑張ってみよ。」

紹「御剣さん・・・え!？」

俺は袁紹を後ろから抱きしめる。

昴「不安なら俺が傍にいる。やると決めたなら俺が背中を押してやる。だから・・・もう少し自分を信じてみる。俺は袁紹を見捨てたりしないから。」

紹「御剣さん・・・。」

袁紹は振り返り、俺の胸に顔を埋める。

紹「少し胸をお貸しなさい。今、あなたに顔を見られたくはありませんわ。」

昴「・・・そうか。」

俺は優しく袁紹の頭を撫でた。袁紹は微かに震えていた。

紹「ありがとう・・・。」

袁紹は一言呟いた。

紹「お、お恥ずかしいところを見せてしまいましたわね／＼」

昴「誰にだって弱さはある。気にするな。」

紹「そ、そうですわね。」

しばらくするといつもの調子を取り戻したようだ。

紹「・・・御剣昴様。」

昴「ん？」

様？

振り返ると袁紹が片膝を付き、右拳を左手で包んだ。

麗「姓は袁。名は紹。字は本初。真名は麗羽。この真名を御剣昴様にお預けし、あなたに忠誠を誓いますわ。」

袁紹・・・。

昴「俺達は仲間だ。臣下の礼なんて不要だ。」

麗「いえ、わたくしはまだ御剣昴様に何もお役に立つことができません。それまでは仲間とおっしゃっていただくわけには参りません。」

わたくしにできることが見つかるまではこつとさせてくださいな。」

昴「・・・分かった。そこまで言うならな。・・・後君の真名、確かに預かったよ。麗羽。」

麗「ありがとうございます。御剣様。」

俺は手を差し出し、

昴「帰ろう。皆が心配してるだろうからな。」

麗「はい！」

麗羽が手を取り、城へと歩き出した。

やがて城に着き、麗羽を送った後、部屋にと戻る。愛紗にはこつぴどく怒られたが。

昴「ん？」

部屋の前に着くとそこには猪々子と斗詩がいた。

昴「2人ともどうした？」

斗「あの、ありがとうございます。」

昴「何がだ？」

猪「麗羽様の事、アニキのおかげで元気になったんで礼に来たんだ。」

昴「礼には及ばないさ。．．．ところで一度聞きたかつたんだが、2人は何で麗羽に仕えたんだ？2人なら他にもいくらでも士官先はあっただろ。」

猪「．．．まあ正直、初めは麗羽様の事はかなり嫌いだったよ。我が儘だし人の話は聞かないし。」

斗「私も猪々子と同じでした。．．．けど私達見ちゃったんです。麗羽様の部屋で麗羽様が1人で泣いてるところを。」

猪「それ見て麗羽様を放つて置けなくなってずっと仕えてたんだ。あの時の麗羽様、つらそうだったから。」

昴「なるほど、2人がいたから麗羽は救われたんだな。1人だったら麗羽を救うことが出来なかっただろうな。」

猪「そんな!」

斗「私達は結局麗羽様に何も出来ませんでしたし。」

昴「そんなことはないさ。・・・2人とも、これからも麗羽を支えてやれよ。」

猪「当然だろ！アニキも麗羽様の事頼むな。」

昴「出来る限りのことはするよ。」

斗「ありがとうございます。それじゃ、文ちゃん、行こう？」

猪「おお！アニキ、またな！」

昴「ああ、またな。」

猪々子と斗詩は戻っていった。

昴「さて、俺も残りの仕事を片付けるとしますか。」

俺は部屋に戻った。

翌日から麗羽は変わった。今までは騒ぎを起こしたりなど、何かと騒動の種になることばかりしていたのだが、今では己を高めるためる事にただがむしゃらに頑張っているようだ。

星「最近の袁紹は人が変わったようですね。」

愛「星もそう思ったか。」

星「ああ。私に武術を教えてほしいと言った時は我が耳を疑ったぞ。」

愛「私の所にも来たぞ。」

朱「私の所には軍略や政に関する書を貸してほしいって言ってきました。」

雛「私もです。」

愛「一体何があったというのだ・・・。」

昂「それで、見所はあるのか？」

星「・・・率直に、才に関してはあまり期待出来ないでしょう。しかし、必死に何かを掴もうとしているのは伝わる。そういう者は才に関係なく伸びるでしょう。」

昴「なるほど。」

いい方向に進んでくれているみたいだな。
星が俺に顔を覗かせ、

星「ふむ・・主よ、何かしたのですか？」

昴「特には、な。少し背中を押してあげただけだ。」

星「なるほど・・あの袁紹を・・やはり主には驚かされる。」

とまあ、こんな感じだ。俺も麗羽に会った時は驚いた。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

それは城の廊下を歩いている時だった。

昴「よう。麗・・羽？」

驚いた。以前は長い髪を2つのロールにしていたんだが、今は髪を1つに束ねた、いわゆるポニーテールだ。

昴「髪型変えたんだな。」

麗「ええ。あれは整えるのに時間が掛かりますから。今は時間が惜しいのです。」

昴「そうか。」

変わったな。変わったのは髪型だけじゃない。麗羽の目。とても強い目だ。何かを掴もうと、何かを指そうとする強い目。桃香や華琳、雪蓮と同じ強く真っ直ぐな目だ。もし、昔に麗羽を導いてくれる者がいたら。また違ってたのかもしれないな。まあ、たればななんて言い出したらキリがないがな。

昴「邪魔して悪かったな。」

麗「いえお構い無く。それでは失礼致しますわ。」

昴「ああ。」

麗羽は立ち去った。おそらく鍛練に向かったのだろう。

昴「俺も負けていられないな。」

俺も自分を鍛えよう。

ある時、ちょっとした問題が起きた。それは、益州の旧劉璋派の豪族の1人が従わないことだった。1番の問題となっているのがその場所だ。益州の端の境目近くにその豪族がいるため、華琳辺りに万が一寝返られたら益州の一角をみすみす渡すことになる。それだけは避けたい。通告を出したが無視をするといった具合だ。

愛「従わないのなら兵を動員して降らせましょう。」

星「それは最終手段だ。ただ力で制圧しては人心はすぐに離れてしまふ。」

朱「星さんの言うことも尤もです。しかし、あまり時間を掛けられる問題でもありません。」

愛「ではどうする？」

雛「再度通告して、それにも応じなければ兵を動員して降らせるしかありません。」

昴「妥当だな。それじゃ、もう一度使者を……。」

麗「その役目、わたくしが引き受けますわ!」

昴「麗羽がか?」

麗「要はあの豪族達を降らせれば良いのでしょうか?」

昴「そうだが・・・危険だぞ?」

最悪殺されるかもしれない役目だ。

麗「覚悟の上ですわ。」

昴「・・・分かった。この役目、麗羽に任せる。」

麗「承りました。それではすぐに出立致しますわ。」

麗羽は部屋を出ていった。

愛「・・・ご主人様。袁紹では逆に相手を怒らせるだけではないのですか?」

昴「それは、分からないぜ?」

星「まあ愛紗よ。袁紹でなくてもどのみちつまくはいかぬだろ。我々は兵をまとめておこう。」

愛「うむ。それもそうだな。」

皆も同意見のようで、各々戦の準備を始めようとしていた。

その1週間後、麗羽からの伝令が届いた。内容は、

『豪族は見事こちらに降りましたわ!』

との事だった。これには皆空いた口が塞がらなかったようだ。誰も
が失敗で終わると予想していたからだ。麗羽の活躍により、俺達の
問題事の1つが解決した。

昴「ふむ。」

麗羽の出来ること。見えたかもしれないな。俺達に唯一に足りない
人材、それは、

外交官。

正直俺達の軍には交渉事に向いてる人材がいなかった。愛紗と星は
軍の中枢だから駄目。鈴々は絶対に向いてない。朱里と雛里は人見

知りな上にカミカミだから駄目だろう。その他にも・・駄目だな。強いて挙げれば紫苑ぐらいなもんだな。そういえば麗羽は弁が立つし、どんな状況でも物怖じしないから向いているかもしれないな。外交官の存在は助かる。場合によっては無用な戦を避けられるからな。今回のように。

・・・うん。いいかもしれないな。麗羽が帰還したら早速打診してみよう。

麗羽が劉備軍での大きな役割を得て、劉備軍の仲間になった瞬間だった。

続く

第51話 苦悩なる姫、得た役割 (後書き)

どうだったでしょうか？途中の一般人の()は麗羽のみに聞こえた幻聴です。実際麗羽ってこんな感じなのではと勝手に想像して書いて見ました。袁家にだって猪々子や斗詩以外にも将はいらるだろうし、陰口叩いたり麗羽を利用しようとしている人間もいたのではと。。。

感想、アドバイスお待ちしております。

それではまた！

第52話 幼き心、生まれる心 (前書き)

投稿します！

我ながらなんとというものを書いてしまったのか。ある意味で1番まともなんです。がそれ故に・・・。

それではどうぞ！

第52話 幼き心、生まれる心

美「むむむ……。」

昴「……。」（サラサラサラサラ……）」

美「ふむむ……。」

昴「……。」（サラサラサラサラ……）」

ただいま美羽はお勉強中。俺は横で政務をしている。

美「む・むむ・むむむ……。」

今美羽は俺が作ったテストをしている。美羽には毎日時間を作って政や軍略、時に武も教えているのだが、定期的にテストを行い、しっかり知識として身に付いているか確認をしている。出来が良ければ褒美をあげて、出来が悪ければ補習をして改めて身に付けさせて再テストといった具合だ。

美「むう……出来たのじゃー！」

昴「おっ、どれどれ。」

いったん政務を中断し、早速採点を開始する。

美「（ドキドキ）」

昴「ふむ……。」

これは丸つと。これも丸だな。こっちは……んゝ惜しいな。これは・

次々に採点を進め、やがて。

昴「ふむ。」

採点が終わわり、筆を置く。

美「ど、どうじゃった?」

昴「採点の結果は……。」

美「う、うむ。」

昴「採点の……結果は……。」

美「(ドキドキ)」「」

昴「……。」

美「(ゴクン)」「」

部屋を沈黙が支配する。

昴「正解率……8割合格だ。」

美「やったのじゃー!」

美羽は跳び跳ねながら喜びを顕にする。今回のテストの合格のため

の正解率は7割。見事合格だ。

昴「良く頑張ったな、美羽。」

美「妾なら当然なのじゃ！もっと褒めてたも！」

美羽は大きく胸を張った。

昴「えらいえらい。」

美羽の頭をナデナデする。

美「えへへ／＼。」

昴「良く頑張った美羽には何かご褒美をあげないとな。後少しで政務も一段落着くから少し待っていてくれ。」

美「うむ、分かったのじゃ！」

飴と鞭ではないが、厳しさの中に優しさを入れてしつかり教育する。それが俺の美羽の教育の方針だ。しつかり身に付いてるみたいで良かった。・・さてと、早く終わらせるか。

昴「(サラサラサラサラ。)」

美「・・・。」

昴「(サラサラサラサラ。)」

美「・・・のう昴。」

昴「ん〜？」

政務を続けながら返事をする。

美「その・・昴の膝に座ってもいいかの？」

昴「膝に？」

美「駄目かや？」

美羽がおずおずとお願ひする。
俺は椅子を少し引き、

昴「いいよ。ほら、おいで。」

美羽の顔がぱあっと笑顔になり、

美「ありがとうなのじゃ！」

美羽が俺の膝に座る。

昴「大人しくしてるんだぞ？」

美「うむ！昴の邪魔はせぬのじゃ！」

美羽はどうやら俺の膝の上がお気に入りで、たびたび座ってくる。そういえば、華琳のところに行った頃に季衣が良く座ってきたっけな。季衣元気かな・・。よし、政務を続けよう。

昴「（サラサラサラサラ。）」

美「く、昴の膝の上は気持ちいいのじゃく」

昴「ふふっ……。」

微笑ましいな光景だ。

美「……これは何の書簡なのじゃ？」

昴「これは街に住む人達の陳情だよ。」

美「ほう……こっちはなんじゃ？」

昴「こっちは流民の受け入れに関する意見書だ。」

美「ほうほう……。」

美羽はいろんな事に興味を示す。俺はそれにちゃんと答えてあげている。興味を示すのは良いことだからな。

このあと美羽の質問に答えながら政務を続けた。

昴「ふう。こんなところかな。」

美「終わったのかや？」

昴「ああ。残りは後でゆつくりやるよ。待たせて悪かったな。」

美「構わぬのじゃ！」

大喜びの美羽。ちょうどその時、

七「美羽様、昴さん、お茶をお持ちしましたよ。・・あらあら
もうお勉強は終えたのですか？」

美「うむ！すっかり合格したのじゃ！のう、昴！」

俺は美羽の頭を撫でながら、

昴「ああ。美羽は良く頑張ったよ。」

七「そうですね、でしたらこれからお出掛けですか？」

昴「その予定だが、せっかく七乃がお茶を持ってきてくれたんだ。
いただいてから行くよ。美羽もいいね？」

美「うむ！七乃も座るのじゃ！」

七「はいはい。今お茶を淹れますからね」

七乃が手際よくお茶の準備をする。手慣れたるな。そっぴや美羽が太守の時からお茶は七乃が出していたって言うたっけ。お茶は美羽の好物な八チミツ水・ではなく、一般的なお茶だ。八チミツ水は高級品だから頻繁には出さない。贅沢は敵つてのをしつかり教えこんだ。最初は結構わがままを言っていたが、しつかり言い聞かした。

・
・
・
・
・
・

昴「ご馳走様。」

美「ご馳走様なのじゃ！」

七「お粗末様でした」

美「では昴、街に行くのじゃ！」

美羽が俺の腕を引っ張り、急かすように言う。

昴「分かった分かった。慌てなくても街は逃げないだろ？七乃はどうする？一緒に行くか？」

七「はい、お供致します」

昴「よし。それじゃ、行こうか。」

美「うむ！」

七「はい。それではお片付けをして準備してきますね。美羽様、行きましょう。」

昴「それでは城門で待ってるぞ。」

七「はい。」

美「またあとでなのじゃ！」

美羽と七乃が部屋を出ていった。

昴「さてと。」

俺は身仕度をし、書簡を各将のところを持っていき、城門に向かった。

美「昴、遅いのじゃ！」

昴「悪い悪い。」

七「美羽様、私達も今来たばかりですよ。」

美「ぐむ。。。」

昴「それじゃ、行こうか。」

美「うむ！」

七「はい」

俺が美羽の右手と手を繋ぎ。逆の手を七乃が繋ぎ、歩き始めた。

・
・
・
・
・
・
・

美「　」

美羽は繋いだ手をプルプルさせながら道を歩く。

昴「ふふっ。」

七「美羽様可愛いです〜」

俺は美羽を結構街に連れ出す。城に籠りっぱなしじゃ気が滅入るし、何より、俺には街の、民の暮らしを肌で感じてもらいたいからだ。百聞は一見にしかず。書で知るより我が目我が耳でだ。やがて一軒の outlet に到着し、いつものやつを購入する。

昴「ほら美羽。」

美「ハチミツ水なのじゃー！」

美羽はハチミツ水の入った器を受け取り、早速飲み始める。

昴「ゆっくり味わうんだぞ？」

美「ゴクゴクゴクゴク・・・ぷはぁー、美味なのじゃー！」

ああもう聞いちゃいない。

昴「ほら八チミツ水が顔に付いちゃってるぞ。」

俺はポケットからハンカチを取りだし、美羽の口を拭う。

美「むぐむぐ、ありがとうなのじゃ。」

昴「まったく。」

七「あははー。」

そのあとも街を3人で見てまわった。出店や屋台など、目につく場所を寄っていった。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

美「（ジー）」

街を見てまわっている途中、美羽が何やら見つめている。目で追ってみると、

「まてまて〜!」

「こつちだよ〜!」

「こつちこつち〜!」

街の子供達が広場で遊んでいた。

美「……のう昂、あれは何をやっておるのじゃ?」

昂「あれか?あれは鬼こつこだな。」

美「おにこつこ?」

昂「簡単に説明すると、鬼を1人決めて、決めた鬼以外は鬼から逃げる。鬼は追いかけて回して、鬼に触れたら鬼を交代してまた逃げ回る。そんな遊びだ。」

美「ほう。」

知らないのか?と聞こうとして止めた。名門貴族の生まれの美羽なら知らなくて当然だからな。

美「(ジー)」

なおも美羽はその光景を見つめている。

昴「一緒に遊んでくるか？」

美「わ、妾はあのような子供の遊びになど興味ないのじゃ！」

と言ってるが美羽はチラチラ子供達を覗いている。

昴「・・・まったく、しょうがないな。」

俺は美羽の手を取り、子供達のところに歩み寄る。

昴「君達、この子も混ぜてもらっていいか？」

美羽を子供達の前に出す。

美「す、昴!？」

「だあれ？」

「?」

昴「ほら、自己紹介。」

美「う、うむ・・・え・・・美羽なのじゃ。」

さすがに袁術の名は出さなかったみたいだな。

「みづちゃん？」

「いっしょー!」

「いつしよにあそぼー!」

子供達が美羽の手を引っ張って行く。

美羽が俺に振り返り、

美「遊んでも良いのかや?」

昂「いいよ。たくさん遊んでこいよ。」

美「!・・・うむ!」

美羽は子供達と広場に走っていった。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

美「待つのじゃ〜!」

「こっちこっち〜!」

「わーい！」

今は美羽が鬼となり子供達を追いかけてまわしている。俺と七乃は広場の隅にある倒れている木に座り、美羽と子供達を眺めている。

美「昂ー！七乃ー！」

美羽が時よりこちらに大きく手を振る。俺と七乃はそれに手を振り返して応える。

七「あははー。こうやって見ると美羽様は子供みたいですねー。」

昂「子供さ。きっとこれが本来の美羽なんだと思う。」

七「そうなんでしょうね。」

昂「袁家みたいに責任を負わなければならない立場ではなく、普通の家柄に生まれていれば美羽は真っ直ぐに育ったんだろう。名門貴族ってのは大なり小なり醜い一面もあるからな。」

七「昂さん……。」

昂「乱世の常とはいえ、戦して、家を失って。美羽は七乃にしか心を開けなくて、きっと寂しい思いをしてきたんだろうな。」

七「……でも今の美羽様は私が見てきた中でも1番楽しそうですよ。」

昂「そうか。……なら俺はあの笑顔を守らないとな。」

美羽に兵法とかも教えているが、正直、それが戦場で生かされるようなことにはしたくないな。美羽が戦場に出るようになるまえに乱世を治めたい・・・いや、治める。必ず。俺は新たに決意した。その横で、

七「美羽さまハアハア、美羽さまハアハア・・・。」

横で悶えていた。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

やがて夕刻となり、子供達は家に帰る時刻となった。

「みうちちゃんまたね〜！」

「またあそぼーねー！」

「バイバイ〜！」

子供達が手を振り、帰っていく。

美「またなのじゃ〜！」

美羽も手を振り返す。

子供達の姿が見えなくなるまで見送ると、美羽が俺達の元に駆け寄ってきた。

美「いっぱいいっぱい遊んだのじゃ〜！」

昴「そうか。」

美「いっぱいいっぱいお友達が出来たのじゃ〜！」

昴「良かったな。今日は楽しかったか？」

美「うむ〜！」

満面の笑みでそう答えた。

昴「それじゃ、帰ろうか。」

美「うむ、帰るのじゃ〜！」

美羽は俺と七乃の手を繋ぎ、城へと歩き始めた。

七乃 side

美「ス〜・ス〜・ス〜」

美羽様は今昴さんの背中でごっすりおやすみ中です。いっぱいお勉強していっぱい遊んだから疲れちゃったんですね〜。

七「可愛い寝顔ですねー。」

昴「まったくだな。」

昴さんが美羽様を背負いなおしました。昴さん、とっても優しげなお顔です。

七「ふふっ、こうして見ていると、昴さんは美羽様のお父様みたいですねー。」

昴「・・・それを言うなら兄じゃないのか？」

七「いえ、美羽様を見守っている時の昴さんの目はお兄様じゃな

くってお父様そのものでしたよ？」

昴「ハア、年齢的には父じゃなくて兄なんだがな。」

昴さんは複雑そうな表情を浮かべてます。でも嫌そうでもなさそうです。ふふっ、昴さんもからかったら楽しいですね

昴「・・・あ、でも俺が父親なら母親は七乃だな。・・・って事は、俺達は夫婦で美羽は俺達の子供になるわけだな。」

七「なっ／＼」

昴さんったら何を！？

七「も、もう、私も母親って言われる歳じゃないですよー。」

昴「ははっ、冗談だつて。」

七「もう・・・。」

あゝ、びっくりした。昴さんは・・・笑ってる。良かった、動揺してたの気付かれなかった。からかうのは慣れてますけどからかわれるのは慣れませんね。

やがて日が沈んだ頃にお城に着きました。

昴「それじゃ、俺はここで。」

昴さんから美羽様を受け取り、美羽様をおぶる。

美「ん・ムニヤ・。。。」

昴「またな。」

七「はいー」

昴さんはそのままお部屋に戻って行きました。私達もお部屋に戻って美羽様をお布団に運びました。

美「うにゅ・・昴・。。。」

七「ふふっ、美羽様可愛いですー」

このままずっと眺めていたいですけど、その前に政務を終えちゃいましょう。

さてと、お仕事お仕事

私は残った政務を終わらせて、私は美羽様の眠るお布団と一緒に眠りました。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

その日、私はおかしな夢を見ました。とてもとてもおかしな夢。私はただの街の住民で、私はお店での仕事を終えて家へと帰宅しました。

美「お帰りなのじゃ！」

七「ただいま」

可愛い私の娘がお出迎えしてくれました。

美「今日もいっぱい勉強していっぱい遊んだのじゃ！」

今日あったことを楽しそうに話してくれます。私はお話を聞きながら食事の用意をします。出来た料理を宅に並べて、2人で椅子に座って待っていると、

？「ただいま！」

旦那様が帰ってきました。

美「お帰りなのじゃ〜！」

娘の美羽が旦那様に胸に飛び込む。

？「ただいま美羽。いい子にしてたか？」

美「うむ！」

旦那様は抱っこしたまま頭を撫でる。

七「お帰りなさい〜」

？「七乃、今帰ったよ。」

七「食事準備が出来てますよ・・・昂さん」

とてもとても素敵な旦那様が帰ってきました。そのまま3人で食事をして、お話して、やがて娘を寝かし付けました。

昂「お疲れ、七乃。」

七「あ、昂さん。」

昂さんはお酒を飲んでいました。私がお酒のお供を作ろうとしたところ、

七「ひゃっ！」

昴さんが後ろから私を抱きしめました。

昴「嫌だったか？」

七「いえ、そんなことは／＼」

とても嬉しいです。

昴「……。」

七「……。」

昴さんが私の顔を無言で見つめる。……やがて、両目を閉じて私に顔を近付ける。私も両目を閉じ、そして……。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

七「ひゃ〜！」

私はお布団から飛び起きました。
私ったら、なんて夢をノノ

美「うにゆ・・・なの〜・・・どうしたのじゃ〜・・・。」

七「い、いえ、何でもありませんよ、美羽様！」

いけないいけない。美羽様を起こしてしまいました。

美「うむ・・・ならばよい・・・スー・・・スー・・・。」

美羽様は再び眠りにつきました。

七「ふー・・・、それにしても、どうしてあんな夢を見たのでしょうか。」

美羽様が娘で昴さんが旦那様だなんて。・・・あ。

昴『・・・あ、でも父親が俺なら母親は七乃だな。・・・ってことは俺達は夫婦で美羽は俺達の子供になるわけだな。』

きつとあれのせいですね。だからあんな夢を。

七「・・・まだ日が昇ったばかりですね。」

まだ起きるには早いですけど、胸のドキドキのせいで眠気はすっかり覚めてしまいました。

七「もう寝られませんか。」

とりあえず洗い場で顔を洗ってすっきりしてきまじょう。

洗い場は……ありました。洗い場は私達の部屋から遠いのが難点
なんですよね。
洗い場に着くと。

ドクン！

七「っ／＼」

そこには昴さんがいました。いつもの白の服ではなく、どうやら寝
間着で、髪は後ろに流している。

昴「ん？七乃か。おはよう。早いな？」

七「す、昴さんも早いですね。」

昴「俺はいつもこの時間に起きてるぞ?」

七「そ、そうなんですか?」

昴さんは髪留めを口にくわえて髪を束ね始めた。

昴さん・・すぐ綺麗な黒髪です・・。身体も引き締まっていて、わずかに覗いた胸板も・・。私は思わずみとれてしまった。

昴「 乃、七乃?」

七「っ!? ひゃい!」

気が付くと昴さんが私のすぐ傍で顔を覗いていた。

昴「大丈夫か?もしかして何処か体の調子でも悪いのか?」

七「い、いえ、大丈夫です。別に何処も・・・っ!」

ドクン!

昴さんが私の額に手のひらを当てる。

どうしよう。今きつと私、すごく顔が赤い。それにさっきから胸のドキドキが収まらない。もしかしたら胸の音、聞かれちゃうかも・・。

昴「ん〜・・熱はなさそうだけど、顔がすごく赤いな。」

七「だ、大丈夫ですから!」

私は思わず昴さんから顔を逸らした。

昴「でも……。」

七「大丈夫ですから！」

昴「七乃？」

私は駆け出した。これ以上その場にいたら心臓が飛び出してしまいそうだったから。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

七「ハア……ハア……。」

思わず部屋まで走ってきてしまいました。

ドクン！……ドクン！……

胸の鼓動が収まりません。

七「あんな夢を見たから・・・。」

昴さんを意識してしまいました。そういえば以前、何かの書で夢はその者の願望だと書いてあったような・・・っ!?!、それでは私の願望は・・・。

ふと、ついさきほど見た夢を思い出す。昴さんと夫婦のように暮らし、そして昴さんに抱きしめられ、両目を閉じて私に顔を近付ける夢を・・・。

ドクン!

七「っ／＼」

あれが私の願望なのでしょうか!?あれが、私の・・・。

七「どうしましょう。もう昴さんの顔を見られません・・・。」

・・・そうだ!しばらく昴さんに会わないようにしましょう。しばらく会わなければ胸の鼓動もきつと収まるだろうしこの気持ちだっ
て・・・。

七「そうしましょう。」

私は昴さんに会わないようにしようと胸に誓った。

あれから数日、私は昴さんに会わないように気をつけて過ごした。そうすれば以前と同じように昴さんと話せるようになると思ったから。．．．でも。

七「はあ．．．。」

駄目だった。時間が経てば経つほど昴さんへの想いが強くなっていく。ポーツとしている時間も増えました。

七「今さらですよね．．．。」

私「．．．昴さんを．．．好きだなんて。」

七「会いたい．．．。」

でも会ってどうしましょう。きっと私、昴さんの顔を見れません。

七「どうしましょう．．．。」

このままではきっと私、おかしくなってしまう。

七「・・・とりあえず部屋に戻りましょう。」

美羽様が待つてるでしょうから。

・
・
・
・
・
・

七「美羽様・・・どちらに・・・っ!?!?」

ドクン!

部屋に戻るとそこには・・・。

昴「よう。」

昴さんがいました。

七「す、昴さん、どうしてこちらに?それに美羽様は?」

昴「美羽なら俺の部屋でお勉強中だ。」

七「そ、そうでしたか。それでは……。」

そそくさと部屋を後にする……つもりだったのですが……。

昴「待った。」

昴さんが私の手を掴む。

ドクン！

七「な、何でしょう？」

昴「美羽から話を聞いてな。七乃の様子がおかしいって。っていうか俺の事避けてないか？」

七「っ！？……あはは、気のせいですよ！」

昴「あれだけ露骨に避けといて気のせいはないだろ。それに……。」

昴さんが私の顔を覗く。

ドクン！

私は昴さんから目をそらしてしまった。

昴「気のせいだって言うなら何で目をそらす？」

七「……気にしないで下さい。」

昴「するよ。俺が何かしたなら謝らせてくれ。」

七「・・・放っておいて下さい。」

昴「放っておけるか。七乃は大切な仲間だ。」

七「・・・もう、やめて下さい。」

昴「だから何で!」

七「やめて下さい!・・・でないと・・・。」

昴「ん!？」

私は昴さん口づけをしてしまった。

七「でないと、私は昴さんをもっと好きになっってしまうす!」

それだけ言って部屋を飛び出した。

七「ハア・・・ハア・・・」

ひたすら走り続け、気が付くと以前に昴さんと美羽様と来た広場に
来ていた。

七「ふふっ・・・皮肉ですね。逃げて、たどり着いた場所がここだ
なんて。」

私は広場の隅にある木に腰掛けた。

七「はあ・・・どうしましょう・・・。」

昴さんと顔を合わせづらいな。私が一人悩んでいると・・・。

?「七乃さん。」

七「!?!?・・・桃香さん?」

桃「走つていく七乃さんの姿が見えてんで・・・横、いいですか?」

七「構いませんよ。でも一人で街に出ていいんですか?」

桃「あはは、愛紗ちゃんには内緒にしといてね。」

七「ふふっ、分かっていますよ。」

おそらく無駄でしょうけど。

桃「・・・七乃さんは私達の事分かってないよ。」

七「桃香さん？」

桃「私も皆も。ご主人様が選んだ人なら喜んで祝福するよ。」

七「桃香さん・・・。」

桃香さんが私の手を握る。

桃「自分に素直になって。自分の想いを大切に。・・・でも、私達も頑張るから誰が結ばれてもうらみっこなしだからね。」

桃香さん・・・強いな。

七「ふふっ、そうですねー。」

心がすごく楽になりました。桃香さんはすごく心が広い人ですね。恋敵を相手に助言をするなんて・・・。だからこそ、皆桃香さんを慕っているのですね。

桃「あーでもでも！ご主人様と口づけなんてするい！私もしたことないのにー！」

七「あはは、早い者勝ちですよ。」

桃香さん・・・ありがとう。

翌日、城の廊下を歩いていると、

昴「よう、七乃。」

七「あ、おはようございます。昴さん。」

トクン！

心臓が鼓動する。でも昨日まで違って今はそれが心地いい。

昴「えっと・・・昨日の事だけど・・・。」

昴さんがおずおずと訪ねる。

七「昨日の事は冗談でも何でもありませんよー。」

昴「・・・そうなのか。・・・ええっと。」

うふふ、昴さん、とても困ってますー！意外にうぶなんですな。

七「今は何も言わないでいいですよ。また以前みたいに接してくださればそれでいいです。」

昴「いや、でもだな・・・。」

もう、昴さんは分ならず屋ですねー。そんな昴さんの口に入差し指を当てる。

七「いいと言ったらいいんですー。そんな分ならず屋な事言つとまた昨日みたいに口を塞いじゃいますよー?」

昴「昨日・・・っ／＼」

昴さんは昨日の事を思い出して顔を赤らめちゃいました。あはは、やっぱり人をからかうのは楽しいですね。

七「美羽様共々、これからもよろしくお願いしますねー。」

昴「んゝ・・・まあいいか。これからもよろしく頼む。」

七「それでは失礼しますねー。」

私は美羽様のいるお部屋に向かった。
今日も楽しい1日になりそうですねー

また1つ、新たな想いが生まれた。

続
く

第52話 幼き心、生まれる心 (後書き)

普通のラブコメですね、これ。

こつこつ展開にするとハーレムは難しいかな。(^ | ^ ;)

美羽に関しては恋愛感情ではなく、父や兄のような家族愛のような感情を昂に向けている感じですよ。もう少し心と身体が成長すればまた変わるかもしれません。

感想、アドバイスお待ちしております。

それではまた！

第53話〜ねね達の復讐、その末路・・・（前書き）

投稿します！

今回は完全にギャグパートです。お待ちかね？のあの人が登場します。

それではぶっぞー！

第53話 ねね達の復讐、その末路・・・

音々音side

ね「ぐぬぬぬ、あの外道君主め！」

ねねなのです。今日もあの外道君主に裁きの鉄槌を降すべく挑んだのですが、

ね「城の真ん中に埋められたのです！」

結果は返り討ち。

ね「ご丁寧に柵と看板まで用意してたのです！」

埋めた後柵でねねを囲い、その脇に看板刺して放置したのです！看板には“アホ”と書いてあったのです！

そのあとたまたま通りかかった翠に抜いてもらったのですが、あの男はねねの事を忘れて恋殿とお茶してたのです！

その他にも以前このような事があったのです。ねねの子分達（街の子供達）を使って復讐を企てた時・・・。

「たいちよー、ホントにやるのー？」

その手には水が入った桶が、

ね「隊長命令なのです！」

何も知らずにやってくる外道君主。

ね「今なのです！」

街の数人の子分達が一齐に屋根から水を投下。水はあの君主の頭上に、

ね「やったなのです！」

ぶつかる寸前にその姿を消した。

ね「なんですとー！一体どこに……。」

昴「誰を探してるんだ？」

ね「そんなもの、あの外道君主……に……。」

背後にその外道君主が、

昴「（ニヤー）子供達、全員集合！」

屋根の下の道に集められたねねと子分達。

昴「いたずらも結構だが、あれは駄目だ。他の人にかかったら大変だし、何より屋根から落ちたら大怪我するだろ？これからはもう少し安全に遊びなさい。」

「……はい。(なのです)」「」

昴「分かればよろしい。……それで、あのいたずらの発案者は誰だ？」

「……」

皆が黙った。皆、ねねを庇って……。

昴「ふむ、お友達を庇うのは結構な事なんだが……よし、分かった。ちゃんと潔く名乗り出る事ができたら許してあげよう。」

「……子分達にこれ以上疑いの目を向けさせたくないのです。ならばねねが潔く。」

ね「ね、ねねなのです……。」

おそろおそろ手を上げ、名乗り出た。

昴「……そうか、ねね。良く名乗り出る事が出来たな。偉いぞ。……よし、ねね以外全員許す。」

ね「なんですとー!?!？」

昴「ね〜ね〜。俺と向こうでO H A N A S H I しに逝こうか」

ね「ひいひいひいー！」

なんて事があつたのです！何があつたかは思い出さたくもないのです！

ね「ぬぬぬ、このままコケにされたままでは終われないのです！」

けどねねだけではあの規格外には敵わない。ちんきゅーキックに何度も何度も改良を加えて挑んだのですが結果は返り討ち（埋葬）。ちんきゅーキックに自信はあれどねねは所詮は文官。武はからっきしなので。ねねの策を忠実に実行してくれる武官さえいれば。。。

ね「むむむ、どうすればあの外道君主に一泡・・・ん？」

？「くそー。あんの野郎ー！」

ね「ふむ、あれは確か・・・。」

??side

?「くそー!あんの野郎ー!」

あいつだけは絶対許さん!あいつだけは・・・ん?いきなりなんだお前はつてか?まあ質問はごもつともだな。以前に一瞬登場しただけだからな。俺は以前、都洛陽の城の門番をしてた者だ。名を胡軫という。あのボケに顔を落書きされて都の笑いにされてしまった。

詳しくは第28話を。

反董卓連合でのゴタゴタと顔の落書きがあまりに哀れすぎて侵入を許した罪は不問にはなったが・・・。
連合の際に呂布様の隊の部隊長になり、その後は腕が多少立つたため將に任命された。劉備様に降り、あのボケに復讐の機会をうかがっている内に今に至る。

胡「どうにかあのボケに・・・。」

あのポケどうにかシバきたい。だが、一騎討ち申し込んでも……
・やられる。

ならば、鬨討ち仕掛けても……確実に気付かれる。相手は呂布様に勝つちまう化け物だ。正攻法じゃ返り討ちだ。俺に策を授けてくれる軍師がいれば。

胡「くそー、どうにか……ん？」

ね「……。」

その時、音々音と胡軫が出会った。

ね「む、お前は……落書き殿！」

胡「胡軫です！#」

元部下の名ぐらい覚えていて下さい。

ね「想いはねねと同じようですな。」

胡「もちろんですよ！あのポケ辱しめにあわさなきや気がすみませんよー！」

ね「ねねに一計があるのです！」

胡「お聞きしましょう。」

ね「耳を貸すのです。」

陳宮殿に背丈を合わせた。

ね「まず・・・ゴニョゴニョ・・・ゴニョゴニョ・・・するのです。」

胡「ふむ、なるほど・・。」

ね「それでゴニョゴニョ・・・ゴニョゴニョ・・。」

胡「えっ！？ですが・・。それでは問題が大きく・・。」

ね「あらかじめ・・・ゴニョゴニョと言っておけば大丈夫なのです。」

胡「なるほど、さすが軍師ですね！」

ね「ねねの策に抜かりはないのです！」

胡「あのボケに一泡二泡吹かせましょう！」

ね「では早速準備を始めるのです！落書き殿ついてくるのです！」

胡「応っ！」

ようやく・・・ようやく我が復讐が果たせる・・・。後俺は胡軫です
陳宮殿。元上司でもしまいには殴りますよ？

昴side

一方その時、

昴「くしゅん！」

愛「ご主人様、お風邪を召されましたか？」

昴「いや、違うよ。多分誰か俺の噂をしているな。これは……ね
ねだな。後でいじm・遊びに行こう。」

愛「(気の毒に。)」

・
・
・
・
・

次の日、自室で政務をしていると、

月「た、大変です！」

昴「ん、どうした月？」

月「ねねちゃんが誘拐されてしまいました！」

昴「誘拐？」

ねねが？

月「ねねちゃんと街にお買い物に行って、私はお店に入ってねねちゃんには外で待っててもらったんですけど。・・・お店から出てきたらねねちゃんはいなくて、代わりにこれが・・・。」

月が一枚の手紙を差し出す。

昴「・・・。」

その内容は、

『小娘は預かった。無事返してほしくば、御遣い1人、そして丸腰で街の外れにある廃屋に來い。もし、仲間を連れてきたり、武器を持ってきたらその時点で小娘の命はない。復讐者』

なるほど。街の外れの廃屋って確か、1つポツンとあったあれか。街から離れているし、周りは草木が生い茂っているから誘拐して監禁するにはうってつけの場所だな。

昴「話は分かった。すぐに行こう。」

俺は外套を羽織り、政務室を飛び出した。

月side

月「へう。」

ねねちゃん、大丈夫かな？

私がいつものように侍女のお仕事をしているとねねちゃんが、

ね『これをあの外道君主に渡してほしいのです。渡す時にねねが誘拐されたと伝えてほしいのです。』

と言って私に手紙を渡しました。

月「ねねちゃん、ご無事で。」

私はねねちゃんの無事を祈りました。

昴side

城を出て、街の外れの、指定された廃屋に來た。廃屋に歩み寄ろうとすると、

？「そこで止まれ！」

廃屋の中から声が響く、すると廃屋の中からねねと面を顔に付けた多分男が出てきた。

？「約束通り1人で來たようだな。」

昴「ああ。ご覧通り丸腰だ。」

一歩前に踏み出そうとすると、

？「止まれと言っただろう。」

ねねの首筋に剣を突きつけた。

ね「た、助けて〜。(棒読み)」

昴「それで、お前は何者だ？」

？「・・・忘れたとは言わせないぞ！」

男が面を外した。

昴「!?!、お前は!?!」

？「久しぶりだな。」

昴「お前は、そうだ、あの・・・その・・・ええーと、あれだ・・・その・・・
・そうだ、あの時助けた鶴か！」

？「覚えてないなら覚えてないって言いやがれ!#」

すまん。

？「ならば思い出させてやる! 貴様、反董卓の連合が組まれる前に
洛陽にいただろう。」

昴「ああ、いたな。」

？「その時に城に潜入したな？」

昴「・・・ああ。」

何故こいつがそれを・・・。

？「潜入する前に1人の門番を蹴散らしたな。」

昴「ああ・・・そうか！お前あの時の門番か！」

胡「そうだ。貴様に屈辱を浴びせられた名は胡軫。思い出したようだな。」

昴「そうだよ。どこかで見たことあると思ったんだよ。ここまでは出てたんだよ。」

おでこちゃんちゃん。

胡「そこまで出てたんなら口から出せ！#」

昴「そうか、全て思い出した。お前はあの時、城の門の見張りをしていた、顔に面白い墨を入れてた奴か。」

胡「お前が書いたんだろうが！#」

そうだったけ？

昴「それで、えー、それでみしん。」

胡「胡軫だ！」

昴「あーすまん、みしん。」

胡「貴様わざとやってんのか・・・#・・・」

昴「こ。」

胡「し！」

昴「し。」

胡「ん！」

昴「ん。」

胡「胡軫！」

昴「みしん。」

胡「ぶつ殺すぞてめえ！#」

昴「冗談だよ、冗談。シャレが通じない奴だな。」

胡「てめえ、自分の立場分かってんのか！こつちには人質がいるんだぞ！こいつがどうなってもいいのか！」

再度ねねに剣を突きつける。

ね「昴殿ー、助けてなのですー。」

昴「殺せ！」

ね「何ですとー!?!」

昴「あ、間違った。．．お、落ち着け、お前の狙いは俺だろ？その娘は関係ないだろ。」

胡「うるせえ！貴様に復讐するためなら手段なんて選ばないんだよ！」

昴「お前がそこまで思い詰めるとは．．すまなかった、許してくれ。このとおり！」

直立不動。

胡「頭ー!#!、もう許さん、貴様を殺して俺も死んでやる！」

いかん、相手が自暴自棄になってしまった。何とか宥めなければ。

昴「お、落ち着け、ならばこうしよう．．．お前だけ死ね！」

胡「てめえだけに都合のいい提案出してんじゃねえ!#!」

交渉失敗。

胡「どこまでも人のコケにしゃがって！てめえを墓場に．．。」

剣先をねねから俺に、チャンス！

昴「ふっ！」

ミサイルキック！

胡「ぎゃふ！」

ね「ねねごとー！」

昴「からの〜。」

両足を俺の両脇に挟み込み、ブン回す。

昴「オラオラオラー！」

胡「ぎゃあああー！」

どんどんブン回す。

10分後、

ブンブンブンブン……。

胡「ほへー……。」「バター状態。

ね「もうやめるです。……そいつのHPは0なのです……。」「
この辺りでいいか。」

昴「益州の果てまで……イッテQ。」

ブオン！

胡「ほへー……。」「

昴「胡軫……俺の名を言ってみろ。」

ドシーン！

胡「あべしー！」「

昴「将星墜つべし。」「

懐から油性ペンを取りだし、

サラサラサラサラ……。。

昴「……。ぶっ！」「

これでよし。万事解決だ。

音々音 s i d e

あれは人じゃない・・・悪魔なのです・・・あんな仕打ち、人間の
することじゃないのです。

ね「とりあえず一端この場を・・・」

振り返り、逃げ出そうとすると、

ぽすん。

ね「ぐふ。」

何かにぶつかって・・・ひ!?

昂「ね〜ね〜ちゃん、どこ行くの?」

ね「す、昴殿・・・助けていただきありがとうございます・・・。」

昴「これ、ねねの仕込みだな？」

ね「ギクツ！・・・何を証拠に・・・。」

昴「月もねねも緊迫感なかったし、まあ、胡軫はマジだろうけど、
っていうかそもそもあれ（胡軫）、確か恋の隊にいた奴だ。当然ね
ねも知り合いだよな。」

ね「うっ。」

昴「まったく・・・。」

昴殿が手を近づける。

ひっ！またお置ききされるのです！

目を瞑り、身構えると。

ポン。

おそるおそる目を開けると、昴殿が頭を撫でていた。

昴「最近政務尽くしだったからいい気分転換になった、ありがとな、
ねね。」

昴殿は笑顔をこちらに向けたのです。

・・・ずるいのです。こやつは普段からねねをいじめてばかりする
のに、時々、すごく優しいのです。そんな優しくされたらねねはお
前を・・・。

嫌いになれないのです。

昴「ねね、一緒に帰ろうか。」

昴殿は手をこちらに差し出す。

ね「……ふん。帰ってやるのです。」

その手を繋ぐ。

昴「何か食って行くか？」

ね「お前の奢りですぞ。」

昴「分かった分かった。好きなの食べよ。」

ね「ならば付き合っただけです！」

それから店に寄り、城へと戻った。

おまけ。

胡「ちくしょう、あの野郎（TOT）」

目を覚ますと。顔が元祖スーパーロボットに出てくるア○ユラ男爵にされていた。

胡「殺す！あいついつか絶対殺す！」

憎しみ芽はさらにすくすくと育った。

その後彼は街でアシユラと呼ばれるようになった。ちなみに落書きは4日消えなかった。

続
く

第53話 ねね達の復讐、その末路・・・（後書き）

この話に出てきたオリキャラですが、

名前は胡軫。

昂に落書きされた後はいつか復讐をするために武を磨いた。それが功をことうして呂布隊の部隊長に抜擢される。反董卓連合の戦いの後、呂布隊に将が不足していたため、将に急ぎよ昇進。劉備軍に投降後は昂への復讐機会を伺っていた。

昂への認識は、太守や武人としては認めるが人間としては認めないという認識です。とりあえず昂を恥をかかせられればそれでいいみたいです。

真名は翼。

一応はかつこよさげな真名は付けましたが。呼ばれることは多分ないかと（＾―＾；）

一応最後いい感じに締めてみました。

感想、アドバイスお待ちしています。

それではまた！

第54話〜メイドの日常、メイドの本心〜（前書き）

投稿します！

遅くなりました。この時期は忙しくて（^―^;）

とりあえずお先に、キャラ崩壊警報を発令します。でも悔いはなし！

それではごっぞー！

第54話〜メイドの日常、メイドの本心〜

昴side

昴「……。」

時刻は今早朝。俺は自己の鍛練をしている。

昴「スウー・・・はっ！」

ブン！ブオン！ビュン！

村雨を抜き、振るう。ただやみくもに振っているのではなく、目の前に相手がいると仮想して振っている。仮想の相手は・・・刃。

昴「……ふっ！」

再度前に出て村雨を振るう。仮想の刃は難なくこれを避ける。背後からの刃の斬撃を避け、一撃加える・・・が、あっさり避けられ、そしてまた背後を取られ、

昴「ブスリ・・・はあ。」

イメージでもまだ刃には勝てない。刃と戦った時間は僅かだけど、おおよその強さは計れている。

昴「力の差は簡単には縮まらない、か。」

もっと強くないとな。

昴「ふう。今日はこれくらいにしておくか。」

今日はいつもの政務に、確か調練の視察もあったな。

昴「さてと、一休みしたら仕事にかかるか。」

また忙しい1日が始まりそうだ。

昴「（サラサラサラサラ……）」

書簡の山との格闘中。

昴「（サラサラサラサラ……）」

筆を動かす音だけが部屋に響く。

昴「……ふう。」

ちよつと休憩。

月「失礼します。」

昴「ん？ああ月か。」

月「お茶をお持ちしました。」

昴「お、悪いな、月。」

月が器にお茶を注ぎ、俺に渡す。

昴「ありがとうございます。．．んくっ、んくっ、んくっ．．．ぷはあ！」

月「お疲れ様です。ご主人様。あ、おかわり致しますか？」

昴「うん、もらつよ。」

月が器にお茶を注ぐ。

月「どうぞ。」

昴「ありがとうございます。んくっ、んくっ。」

月「お忙しそうですね。」

昴「ん？益州平定直後はかなり忙しかったけど、最近それもよつちやく落ち着いてきたよ。」

月「そうですね。でもあまり無理はしないで下さいね。」

昴「分かってるよ。月も仕事には慣れたか？」

月「はい。だいぶ慣れました。」

昴「そうか。月も体には気を付けるよ。」

月「お気遣いありがとうございます。」

俺は器に残ったお茶を全て飲み干し。

昴「さて、一息付いたし。俺は政務に戻るよ。」

月「分かりました。では器をお下げしますね。」

月が器をお盆に乗せて部屋を後にする。扉の前で、

月「お仕事頑張ってください。」

昴「ああ。ありがとう。お茶、美味しかったよ。」

月「では・・・。」

月は部屋を後にした。

昴「月もすっかりメイドが板に着いたな。」

いつも一生懸命仕事をしている月を良く見かける。

昴「俺も頑張るか。」

気持ちを切り替え、残りの政務に取りかかった。

翌日、桃香と朱里や雛里達軍師達と今後の方針についての会議が終了し、俺は今日の仕事を終えた。

昴「さて、何するかな。」

時刻は昼下がりに。ずいぶんと暇をもてあましている。

昴「とりあえず街にでも・・・ん？」

ふと辺りを見渡すと、そこには月の姿があった。

月「く」

月は鼻歌を歌いながら仕事をしている。

どうやら洗濯物を取り込んでいるみたいだな。それにしても、月は
楽しそうに仕事をしているな。そんな月を遠巻きで眺めていると、

ビュウ！

月「へう。」

突如突風が吹き荒れた。

月「あ、待って！」

その突風に干していた洗濯物の1つがさらわれてしまった。

昴「あれならまだ届くな。」

俺は飛ばされた洗濯物の元に走り、

昴「ふっ！」

氣を展開し、洗濯物目掛け一気に跳躍し、キャッチする。

月「あ、ご主人様。ありがとうございます。」

昴「ずいぶん強い風だったな。ほれ。」

キャッチした洗濯物を渡す。

昴「あ。」

夢中で気が付かなかったが俺がキャッチしたのは下着。それも女性

者。

昴「・・・気をつけて。」

月「へう。すみません。」

月から目を反らしながら下着を渡す。月も申し訳なさそうに受け取る。

昴「また風で飛ばされたら面倒だ。早いところ取り込んじゃおう。」

月「ご、ご主人様！それは私の仕事ですので・・・！」

昴「気にするな。ちょうど暇をもてあましていた所だったんだ。」

月「へうー。ホントにすみません。」

2人で大急ぎで洗濯物を取り込んだ。

月「ホントにすみません。洗濯物まで運んでもらって。」

昴「いいのいいの。1人じゃ大変だろ?」

月と一緒に洗濯物を運んでいる。

それにしてもメイドというのも大変な仕事だな。掃除に洗濯に料理に……。月や詠は良く頑張ってるな。

昴「なあ月。」

月「はい。なんでしょう?」

昴「辛くはないか?」

月「?・・・どうしてですか?」

昴「いやさ。望んでなかったわけではないとはいえ、君は都洛陽の太守だったんだ。身分を隠すためとはいえ、メイドなんかをさせてしまって辛くはないのかなって。」

冷静に考えてみれば太守だったのにメイドをやるなんてかなりの屈辱だ。例えば誇り高い華琳なら絶対にやらないだろう。仮にやったとしても確実に国の乗っ取りを画策するだろう。まあ関係はないが個人的にメイド服は似合いそうだが……。俺はそれが気掛かりだった。月は立場上不満があっても言えないだろうし。それを尋ねてみると、

月「辛くないですよ。皆優しくしてくれますし、それにメイドのお仕事ってすごく楽しいです。」

昴「……。」

嘘を言ってるようには見えないが……。

昴「そうか。ならいいんだ。」

月「ふふっ。ご主人様はホントに優しいんですね。あ、洗濯物はそこに置いてください。」

昴「分かった、……よっと。そんなことはないさ。しかし、月は本当に良い子だな。」

頭をナデナデする。

月「へう／＼」

月は顔を赤くして照れている。その時、

詠「こらー！ボクの月にちよっかいだすな！」

昴「おっ、ツン子参上。」

詠「誰がツン子よ！#あんた仕事の邪魔よ。用がないなら何処かへ行きなさいよ！」

月「詠ちゃん。ご主人様にそんなこと言っちゃ駄目だよ。ご主人様はお仕事手伝ってくれたんだから。」

詠「月〜。」

昴「分かった分かった。これから街にでも行ってくるから。月、またな。詠も頑張れよ。」

詠「ふん！大きなお世話よ。」

月「詠ちゃん。」

詠「う・。。」

月が目で詠をたしなめる。

なんだかんだでいいコンビだ。

俺は街に行き、ちようど街にいた鈴々と一緒にラーメンを食べた。

翌日、午前中は政務を。午後は街に区画整理のための視察に赴いた。その途中、酒家で珍しい酒を見つけたので、購入した。今日の全ての仕事を終えたので早速それを味わうことにした。

昴「今日は綺麗な月が出ているな。」

うん、月見酒でもしよう。城の庭先に移動した。

・
・
・
・
・

酒と器を持って移動していると、

月「あ、ご主人様。」

昴「よう月。」

月が俺の手に持っている酒を確認して、

月「お酒を飲まれるんですか？」

昴「ああ。いい酒が手に入ったからな。」

月「それでしたら星さんや桔梗さんとご一緒されてはいかがですか

？」

昴「ん、あの2人を誘うといつの間にか飲み比べになっちゃうんだよね。」

以前に一緒した時、最初は酒を楽しみながら飲んでいただけ、唐突に桔梗が誰か1番酒が飲めるかって話しになって、ガンガン酒を煽るハメになった。まあ勝ったけどね。

昴「今日は純粹に酒を楽しみたいから2人には内緒って事で。」

月「ふふっ、分かりました。では何かお酒に合う肴をご用意致しますね。」

昴「おっ、悪いね。」

月に感謝しつつ俺は庭先に向かった。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

庭先に着くと、その場に横になり、月や星を眺めながら待っている
と、

月「お待たせしました」

昴「待つてました!」

月がつまみを持ってやってきた。

昴「それじゃ・・・。」

器を取り出すと、

月「ご主人様、お注ぎ致します。」

昴「ありがとうございます。」

器に酒が並々注がれる。

昴「んくっ、んくっ、んくっ・・・ぶはあ!これはなかなか・・・。」

言うだけあつていい酒だな。

月が空になった酒に再び酒を注ぐ。

昴「んくっ、んくっ・・・ふう・・・そうだ、月も一緒にどうだ?」

月「いえ、私はメイドですから・・・。」

昴「今はそんなの気にしなくていいよ。やっぱ1人で飲むのは寂し

いからな。酒は飲めないわけじゃないんだろ？」

月「でも……。」

昴「ほね。」

もう1つの器を月に放る。

月「わっ。……ふう。」

月は手元で器をお手玉しながら受け取る。

昴「遠慮は無用だ。酒の席は皆平等だ。」

月「……分かりました。そういうことでしたら。」

俺は月の持つ器に酒を注ぐ。

月「ではっ、んくっ、んくっ……ふう。とても美味しいです。」

昴「お気に召してくれて何よりだ。」

月は次の一口で酒を飲み干した。

月「へう。ご主人様もどうぞ。」

月が俺の器に酒を注ぐ。酒があまり強くないのか、心なしか月の顔は少し赤い。それからしばらく、お互いの器が空になれば注ぎ合い、酒を楽しんだ。正直、月に酒を勧めたのは酒が回ったら月の本音を聞けるのはって思ったからだ。後乱れた月の姿を見れるかなって

下心も少しあったが……。しばらくすると月は酔いが回ったようだ。結論から言つと、やらなきや良かつたよ……。

・
・
・
・
・
・

月「うう、ほんろに、詠ひゃんはいつもわたひを子供扱いしへう……ん。」

月が酒を一気に飲み干し、空になった器を差し出す。

昴「月。少し飲みすぎだ。このへんで……。」

月「ん！」

昴「……はい。」

何とも逆らえない威圧感だったので言われた通りに酒を注ぐ。

月「んくっ、んくっ、んくっ……それで、朱里ひゃんは艶本あんな

とほろに隠して・・・ごひゅひん様、きいへますか!」

昴「聞ってる聞ってる。」

しまったな、月がこんな酒乱だったとはな。普段とは正反対の月だな。

月「皆皆わたひの仕事ばかり増やして・・・でも1番許せないのはごひゅひん様です!」

昴「俺!？」

月「ごひゅひん様がご自分の事を何でもなさってひまうせいでわたしはごひゅひん様にご奉仕出来ません!」

昴「いやそれはな・・・。」

俺は基本部屋を汚さない。これは単に性格だ。適度にやっつけていればそれほど手間にならないから定期的に自分でやっつけている。

月「ごひゅひん様はわたひの事嫌いなんでふか!? 嫌いなんでふかね! そうなんだ、・・・うわーん!」

嗚呼泣き出した。大変なことになったな。何て言うか、多分だが、月は酔うと普段押し殺している自分が出ちゃうんだろうな。

昴「俺が月を嫌うだなんて、そんなわけないだろ。」

月「ほんろれふか?」

昴「本当だよ。」

月「じゃあわたひの事好きれふか？」

昴「ああ。好きだよ。」

月「へう／＼うれひいれす。」

月は両手を頬に当て身悶えている。

とりあえず今気掛かりなのは、月は地面にあぐらをかいて座っている。太股は見えちまつてるし、下着もチラチラ覗いている。

昴「あのな月。その・・・そんな座り方してると・・・下着が見えちまつぞぞ？」

月「へう／＼」

月は慌てて裾を押さえた。

月「もう、ごひゅひん様だったらスケべなんれすから。そんなに見たいのれしたら言ってもらえれば・・・。」

月はスカートの裾を胸の所まで捲り上げた。そこには雪の様な純白な下着が・・・って。

昴「月！それは駄目だ！」

俺は月の両手を押さえた。

月「へう／＼／」

しかし、不幸なことに、俺は月の両手を制圧して押し倒す形になってしまった。

月「ごひゅひん様、こんな所れ・・れもわたひはごひゅひん様のめいろれすから、ごひゅひん様の命には逆らえません。」

ひどく誤解されてるな。

昴「いやな月、俺は別にそういつつもりは・・んう!?!」

おもむろに月が両腕を俺の首に回し、俺の唇を奪った。

クチュ・・クチュ。

昴「!?!」

それはとても情熱的で何度も何度も俺の舌に自分の舌を絡ませてきた。

月「ぷはあ!」

月が唇を離す。俺と月の間に1本の白銀の糸が伝った。

昴「ゆ、月!何して・・。」

月「?・・わたひとごひゅひん様は両想いなんれすから何ももんらいありませんよ?」

あ、さっきの・・。

月「わたしはごひゅひん様をあひひていますから。だからごひゅひん様と……ずつろ……スー……スー……」

どうやら月は眠りに落ちたようだ。

昴「はあ……」

疲れた。まさかあんな月の姿が見られるなんてな。

昴「今後月に酒を飲ませるのはやめよう。俺のためにも、月のためにも……」

俺は心に誓った。

その後、月を抱き抱えて部屋まで運び、俺はそのまま自室に戻って寝た。

翌朝、城の廊下を歩いていると。

詠「昂ー！」

昂「ん、詠か。どうした？そんな血相変えて。」

詠「あんた。月にお酒飲ませたでしょ！？」

昂「んゝ、ああ。」

詠「やっぱり……。先に伝えておくべきだった。」

詠が頭を抱える。

昂「過去に何かあったのか？」

詠「・・・まだ月が都にいた頃、ボク達が十常侍を肃正したのは知ってるわね？」

昂「ああ。」

詠「殺されて当然の奴らだったとはいえ、月が望んだことじゃなかったから月が酷く落ち込んだのよ。」

昂「まあ、あの月じゃなあ。」

詠「それで月のために霞・・・張遼が酒宴を開いたのよ。一晩だけでも嫌なことを忘れられるように。張遼がとにかくお酒を勧めたら・・・」

昂「なるほど・・・。」

あの月が出たわけか。

詠「大変だったわ。皆月に説教されるし、かと思えば泣き出したり・
」

その絵が浮かぶな。

詠「張遼は裏月って名付けたわ。」

すごい分かる。

詠「でも・・・1番怖いのは・・・」

昴「？」

詠「月は酔うととにかく口づけをしたくなるのよ!」

昴「・・・なるほど。」

いわゆるキス魔になるのか。

詠「ボクとねねは月に奪われたわ。」

昴「・・・なんと言うか。」

言葉が出ないな。

詠「まあボクは別に・・・」

昴「え？」

まさか・・・。

詠「／＼・・・とにかく！そんなことがあったのよ！」

昴「一部追及は後々にするとして、そんなことがあったのか。」

詠「あんた、月に何もしてないでしょうね？」

詠から目を反らし、

昴「うん・・・何も・・・。」

詠「・・・どうして目を反らすのよ？」

昴「別に、意味はないぞ？」

詠「・・・まあいいわ。とにかく覚えておいて。月に絶対お酒を飲ませないで。いいわね!？」

昴「心から誓おう。」

詠「ボクからはそれだけよ。じゃあね。」

詠は去って行く。

昴「そういや、月は大丈夫かな？」

かなり酔っていたけど。

昴「様子を見に行くか。」

そうしよう。

部屋の前まで行くところまで月が出てきた。

昴「おはよう、月。」

月「あ、おはようございます。ご主人様。」

昴「気分はどうだ？」

月「大丈夫です。今日も頑張ります。」

二日酔いとかはないんだな。

月「ところで昨晚。ご主人様に肴を届けて後から覚えてないんです

が、私ご主人様に何か粗相しませんでしたか？」

昴「・・・心配するな。何もなかったから。途中疲れたのか寝ちゃったみたいだから部屋まで送っただけだ。」

月「そうでしたか。わざわざすみません。」

昴「気にすることはないよ。」

覚えてないなら何よりだ。知らない方が月のためだし。

昴「まあ、大丈夫ならいいんだ。それじゃ、俺は朝議があるから行くな？」

月「はい。お仕事頑張ってください。」

昴「ありがとう。じゃあな。」

俺は朝議へと向かった。

月side

ご主人様は朝議に向かい、やがて姿が見えなくなった。

月「へう／＼／」

何も覚えてないって言ったけど実は私・・・。

月「昨晚の事、全て覚えています。」

私は酔っても記憶は無くならないんです。

月「へう／＼。またやっちゃったよ／＼。」

前にも同じ事やって、詠ちゃんに気を遣わせてしまった。ご主人様もきつと同じで・・・。

月「口づけ・・・しちゃったんだよね。」

しかもあんなに激しく舌を求めて・・・。

月「へう／＼／」

思い出すと顔から火が吹きそう。あんな事、普段の私じゃ絶対に出来ない。

月「・・・でも。」

お酒があれば私は大胆になれる。お酒があれば・・・。

月「うん。勇気が出せない時はまたお酒の力を貸してもらおう。」

私は胸に誓った。

続く

第54話〜メイドの日常、メイドの本心〜（後書き）

勝手に独自設定をいれました。

自分は酒が強いので記憶がなくなるまで酔っぱらったことはありません。吐いたことは多々ありますがorz

感想、アドバイスお待ちしております。

それではまた！

第55話、偵察任務、歌姫達との再会、（前書き）

投稿します！

今回はご都合主義満載です。

それではどうぞ！

第55話 偵察任務、歌姫達との再会

??side

「てめえ、何処見て歩いてやがる！」

?「アンタがよそ見してたんでしょ！」

もう最悪！せつかく気分転換しに街に来たのに！

?「もう、痛いじゃない！早くその汚い手を離しなさいよ！」

「さつきからこっちが甘い顔をすれば付け上がりやがって！もう許さねえ！」

男が拳を振り上げる。

「調子に乗るんじゃない！」

?「っ!？」

男が拳を振り下ろした。私は目を瞑り、突然の事に体を震わせる。
・・・いつまで経っても痛みも衝撃もこない。おそろおそろ目を開けると。

?「あ。」

1人の女性が男の拳を止めていた。

？「女の子に手をあげるなんて、男の風上にも置けないわね。」

「何だてめえ。」

？「名乗る名などない。目障りよ。早々に消えなさい。」

「馬鹿にしゃがって！ならてめえから痛めつけてやるよ！」

男が私を助けてくれた女性に拳を振り下ろした。

？「危ない！」

とっさに叫んだけど女性は難なくその拳を取ると地に投げつけた。

「ぐはあ！」

すぐさま女性は男の腕を捻りあげ、取り出した懐剣を首筋に当てる。

？「死ぬか消えるか。・・選りなさい。」

「ひっ！勘弁してくれ！」

男が命乞いをするとう女性はその手を離れた。男はすぐさま逃げ出した。

「お、覚えてろ！」

そんな捨て台詞を残して去っていった。

？「あんな捨て台詞、言う人いるのね。貴女、何処か怪我は・・・
あら？貴女は確か数え役満 姉妹の・・・」

あ、私の事に気付いた。

宝「うん、私は地和よ。それより、助けてありがとう！助かったわ
！」

？「気にしないで。見ていらなかったから。」

宝「お姉さん、何かお礼させて！」

？「ごめんなさい。折角だけど、急いでるから。」

宝「そうかく、残念。なら名前だけでも教えてよ！」

？「名前・・・」

お姉さんが少し困った顔をした。聞いちゃまずかったかな？

貂？「・・・うん。私は都の踊り子、貂蝉よ。」

宝「貂蝉さんですか。」

ふーん。貂蝉さんか。

貂？「私はそろそろ行くわね。人も集まってしまったようだしね。」

辺りを見渡すと人だかりが出来始めていた。何人かはちに気付いたみたい。

宝「うん。分かった。．．そうだ！私はこのあと舞台があるから見に来てよ。」

貂？「ええ。是非行かせてもらおうわ。」

宝「約束よ。それじゃ、またね、貂蝉さん！」

私は人だからから逃げるために貂蝉さんに背を向ける。

貂？「またね．．．．張宝ちゃん。」

宝「！？」

慌てて振り返る。しかし、人だけりせいで貂蝉さんの姿は見えなくなっていた。

今、あの人、ちいの名前を．．。誰？ちい達の本当の名前を知っているのは曹操さんの一部の将だけのはず。でも．．あの人を見たことない。それじゃ黄巾党の？でも黄巾党であの人は見たことない。どうしよう。どちらにしてもちい達の正体がバレたら大変よ！

宝「急いで姉さん達に知らせなきゃ！」

私は急いで姉さん達の元に戻った。

貂蟬？ s i d e

貂？「やってしまった。」

とっさに張宝ちゃんと呼んでしまった。

貂？「確実に怪しまれたな。」

絡まれている女の子がいたから助けに入ったらまさか張宝ちゃんとは・・・あ、もう何人か気付いていると思うけど、俺は御剣昂だ。現在俺は涼州のとある街に来ている。涼州と言えば以前に翠の母君である馬騰が涼州連合の長として治めていた地であり、今は華琳が治めている地だ。そんな敵国の地に何故俺がいるのかと言うと・・・。

昴「涼州に何人かの将が？」

朱「はい。斥候からそのように報告が来ています。」

朱里が放った斥候から涼州に何人かの将と兵が向かっているとの報告が来た。

昴「それで、将は誰が向かったかは分かるか？」

朱「確認出来ているのは張遼將軍と楽進將軍だけです。」

昴「なるほど。」

涼州に一体何をするつもりだ。・・・そういや、涼州はまだ馬騰の影響力が根強く残っているから治安維持に問題が出ていたな。つと
いう事は・・・なるほど。

朱「ご主人様？」

昴「ん？いやなに、涼州に新たに密偵を送ろうかなって。」

朱「そうですね。でしたら私が優秀な密偵を厳選しますので。」

昴「今回は迅速かつ的確な情報が欲しい。将を1人同行させよう。」

朱「御意です。ですがそうなると涼州に向かってもらう将は限られ

ますね。」

昴「まあな。」

この任務に求められるのは冷静な判断力と分析力、さらにそれなりの武力を持ち合わせた者。となると必然的に・・・。

朱「隼さんですね。」

昴「ああ。」

俺達の軍1番の万能である隼が適任だ。

昴「なら俺は隼にこの事を伝えてくる。朱里は密偵の厳選と物資の準備を頼む。今日中に出発させよう。」

朱「分かりました。では私はすぐに準備をしますね。」

昴「任せる。それじゃ、あとで。」

朱「はい。」

朱里は準備に向かった。さて、俺は隼の所に行くか。

雫「偵察任務ですか？」

昂「ああ。涼州に魏軍の将が何人か向かっているらしいから。何の目的で向かっているか確かめる必要がある。」

雫「かしこまりました。ご命令とあらば喜んでこの任務を受けさせていただきますわ。」

昂「頼む。．．．あ、それと、偵察には俺も同行するから。」

雫「．．．今一度宜しいでしょうか？」

昂「偵察には俺も同行する。」

雫「却下ですわ。」

昂「やっぱ駄目？」

雫「当然ですわ！王自ら偵察に出向くなんて聞いたことがありませんわ！」

昂「頼む！どうしても行きたいんだ！気になる事があるし、何より確かめたい事があるんだ。」

雫「．．．この事は皆は知ってますの？」

昴「・・・いや。話したら桃香や愛紗辺りは確実に反対するだろうし。」

雫「・・・桃香さんや愛紗でなくても反対致しますわ。」

昴「頼むよ。俺はへまはしないし危険な事もするつもりはない。万が一、俺なら逃げるのもわけない。」

雫「・・・はあ。分かりましたわ。」

昴「おっ、良いのか？」

雫「駄目と言ってもついてくるのは分かっていますから。こっそりついて来られる方が困りますわ。」

・・・俺のこと良く分かってるな。

昴「恩に着る。」

雫「その代わり、わたくしの条件にも従ってもらいますわ。」

昴「ああ。分かった。」

よし、これで堂々と涼州に行ける！

雫「では、条件の1つとして、昴様には変装をしてもらいますわ。」

昴「変装か。ま、当然だな。」

俺の顔は魏勢でも有名だからな。

雫「それではこちらをお召し下さいませ。」

雫が衣装を取り出す。

昴「・・・何故これを？」

渡されたのは一着のチャイナ服（春蘭や秋蘭が着てるような服）。

雫「幸いにもわたくしと昴様の背丈はほとんど変わりませんからきつと寸法も合いますわ。」

昴「いや、俺男・・・」

雫「早くお召し下さい。お化粧を致しますので。」

昴「ええ・・・」

そこまでののか・・・。

雫「さあ、脱ぎ脱ぎしましょう。次にはお化粧が待っていますわ。」

昴「嘘だ!？」

トホホ。ついていくためとはいえ、大変な事になった。グスン。

とまあ経緯はこんな感じだ。街に着いてからは雫と別行動（撒いてきた）を取り、反射的に張宝を助けてしまった挙げ句本名を口にしてしまい、慌てて逃げてきた具合だ。

昴「よりによってとっさに出た名前がああ筋肉達磨とはな。」

名乗らないのも不自然だと思って偽名を名乗ったが、貂蝉って・・・まあ今はそれより・・・。

昴「これから警戒はされるだろうな。」

張3姉妹は黄巾の乱で死亡した事になった。生きてる事を知ってるのは魏勢の一部の将兵と俺だけだ。これからは慎重に動かないと。まあ声を変えて喋ってたから俺だとは思わないだろうけど。ちなみに俺は声帯を気で強化することで好きな声で喋る事ができる。ただ声帯はそんなに強くないから声を変えて喋り過ぎると後程大変なことになるのが難点だが・・・まあ何にせよこれで確信した。涼州に一部の将兵が来た理由は張3姉妹に涼州の街で公演を行わせて治安の維持と華琳への忠誠を誓わせるために来たんだな。凧や張遼はその護衛といった所か。

昂「とりあえずこれで目的が果たせるな。」

涼州に来た理由。それは・・・。

数え役満 姉妹の公演を見ること。

華琳の元から旅立つ前に約束したものの、立場上見に行けなかった
ので、これを機会に約束を果たそうと考えたわけだ。

昂「ひとまず3人の所へ行くか。」

俺は張3姉妹を探しに移動開始した。

張3姉妹 s i d e

凧「分かった。それでは警備隊を率いてその人物を探しに行こう。
真桜は私と共に。沙和は3人の警護を頼む。」

真「分かったで。」

沙「任せろなの！」

凧「では行くぞ。」

真・沙「了解や（なの）！」

凧、真桜、沙和の3人が張3姉妹の居る建物から出ていく。

宝「あゝあ、それにしても誰だったのかなあの人。」

角「魏にそんな人はいないって言ってたしね。」

梁「黄巾党にもそんな出で立ちの人は覚えがないわ。」

宝「だよな。でもとても綺麗な人だったな。」

角「すごく美人で綺麗な人だったんだよね？確か名前は・・・何だっけ？お姉ちゃんド忘れしちゃった。」

宝「ちゃんと覚えておいてよ。貂蝉さんよ、貂蝉さん。はあ、もう一度会いたいな。」

想いを馳せる張宝。すると背後から・・・。

貂？「呼んだかしら？」

角・宝・梁「!?!」

張る姉妹はすぐさま声の方向に振り返る。

宝「あゝ！あなたはさっき・・・ん！？」

貂蟬？はすかさず張宝の口を人差し指で塞ぐ。

貂？「騒がないで。今大きな声を上げられると困るから。」

貂蟬？はる姉妹に目配せをする。3人は張宝から手練れだという話を聞いているため、素直に従う。

梁「あなたが貂蟬？」

貂？「そうよ。」

梁「何故私達の本当の名前を知っているの？」

貂？「何故つて、当然よ。黄巾党最後の戦い。逃げ出すあなた達を捕らえたのだから。」

宝「嘘よ！あの時あなたはいなかったわ！」

貂？「良く思い出さない。いたわよ。覚えていないはず。あの時、あなた達を捕らえに来た者中に黒い長髪に長剣を携え、黒い外套を羽織った者がいたことを・・・。」

角「黒い長髪・・・。」

宝「長剣・・・。」

梁「黒い外套・・・まさか・・・」

角・宝・梁「昂さん!？」

昂「思い出してくれたみたいだな。」

元の声で張ちやう姉妹に話しかけた。

昂 s i d e

張ちやう姉妹を探しに行くとは早々に見つけることができた。見張りに沙和の姿が見えたが難なく忍び込めた。

角・宝・梁「昂さん!？」

昂「思い出してくれたみたいだな。」

俺は元の声に戻して喋った。とりあえず落ち着いて話そうとしたその時、

沙「どうかしたのー？」

沙和か？まずいな・・・。

角「な、何でもないよ〜？」

宝「うん！何でもないよ！」

梁「何でもないから。」

沙「そうなのー？」

入って来られると面倒だな・・・。声帯に気を集中させて・・・。

昴「何でもない。沙和はそのまま警護を続けてくれ。」 凧の声

沙「あれ〜凧ちゃんなのー？いつ戻ったのー？」

昴「忘れ物があってな。沙和。私が戻って来たのにも気付かないとは気を抜けているのではないか？」

沙「ご、ごめんなさいなのー！」

昴「すぐに行くからそのまま警護を頼む。」

沙「分かったなのー！」

・沙和は持ち場に戻ったみたいだな。

昴「ふう。これでよし。」

角「すっごくいい、凧さんの声そっくりー。」

宝「どうなってるの？」

昴「まあちよっとした、特技だ。」

または宴会芸だな。

梁「ところで、昴さんはどうしてここにいるんですか？」

昴「約束を果たすためさ。」

梁「約束、ですか？」

昴「ほら、いつか歌を聞きに行くって約束しただろ？」

宝「あ、ちいと約束……。」

昴「さすがに立場があるからなかなか行けなかったけどな。」

角「うそ……。わざわざそのためにここまで……。」

昴「他にも理由はあるが、これも目的の1つだ。」

角「わざわざ歌を聞きに来てくれて私嬉しい。」

張角が俺の腕に抱きつく。

宝「ちいも嬉しい」

張宝が逆の腕に抱きつく。

梁「わ、私も嬉しい・・・」

張梁が俺の胸に抱きつく。

昴「ははっ、ありがとう。」

3人に照れながら礼を言う。すると張角がおずおずと、

角「ところで、昴はどうして女装してるの？」

昴「ん〜、まあ俺って結構顔が知られてるから変装のためなんだが、やっぱりおかしいよな？」

角・宝・梁「・・・。」

昴「何か言ってくれよ。」

角「（私より美人だよ。）」

宝「（ちいより綺麗・・・）」

梁「（自信無くしそう。）」

昴「・・・まあいいか。確か3人の舞台は明日だったよな？」

宝「ええ。そうよ。」

昴「必ず行くよ。張宝。」

宝「もう、今はその名前でちいを呼んじや駄目なんだよ?。」

昴「そういやそうだな。なら・・・。」

地「ちいの事は地和って呼んで。」

昴「ああ。分かった、地和。」

天「なら私も、天和って呼んでね。」

人「私も人和でお願いします。」

昴「天和に人和も、分かったよ。それじゃ、俺はこの辺でな。」

天「うん、また明日ね。」

地「必ず来てね!。」

人「お待ちしています。」

俺は裏口からこっそり抜け出した。

街に戻り、店が建ち並ぶ通りを歩いている。

昴「さてと、明日までどうしよう・・・げっ！」

目の前には、

雫「すくばるさま。何をしていらっしやいますの!？」

昴「ちよつと辺りの散策を、な。」

雫「単独行動は控えてくださいと言いましたでしょう!」

昴「悪かったって。」

雫「もう!今日はここまでにして、宿に戻りますわよ!」

雫が俺の腕を取って歩き出す。俺も雫も背丈があるからすぐく注目を集めていた。雫はやっぱり斥候に出すには目立ち過ぎるかな?

実際は2人の容姿に皆が魅了されているだけだったらしい。

宿にて、

雫「では、中央の広場で舞台公演が行われると？」

昂「ああ。数え役満 姉妹が舞台を行い、それで治安維持の架け橋と魏国への忠誠心を高めさせるんだろう。」

雫「なるほど、曹操もなかなか手の込んだ手段を取りますわね。．．．それで、わたくし達はこれからどう致しましょうか？」

昂「とりあえず、明日、その舞台公演を見に行ってみるか。」

雫「．．．隙を見て数え役満姉妹を暗殺致しますか？」

昂「．．．やめておいた方がいいだろう。俺達はいくまでも斥候だ。警備は嚴重だからわざわざ危険を侵す必要はないだろ。．．．それに、仮に成功しても、数え役満姉妹はあくまでも曹操に雇われたに過ぎない。そんな彼女達を暗殺したら桃香の名は地に墮ちるだろう。」

雫「それもそうですわね。」

昂「なら動くのは明日だ。」

雫「了解ですわ。」

昂「なら俺は外で食事でもしてくるよ。」

雫「ですから、あまり目立つような行動は・・・。」

昂「雫。斥候は目立つのは論外だが、目立たなすぎるのもまた怪しまれる。あまり部屋に籠っていると不審がられるぞ?。」

雫「はあ。そういう事にしておきますわ。くれぐれも用心を。」

昂「分かってるよ。」

俺は宿を出た。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

・・・

昴「さてと・・・ここにするか。」

俺は一軒の店へと立ち寄った。

注文をしてしばし待つと料理が運ばれ、食事を楽しんでいると、

？「隣、ええか？」

昴「ええ、どうぞ・・・！？」

この声、この気配・・・。

遼「おおきに。おっちゃん！酒頼むわ！」

張遼・・・。

昴「・・・。」

遼「・・・(グイッ)」

張遼はただ注文した酒を飲んでいる。

遼「んくっ、んくっ・・・ぷはあ！・・・あんだ、貂蝉か？」

昴「・・・ええ。」

遼「警備隊達が騒いどったわ。都の踊り子なんやって？」

昴「そうね。」

遼「そうなんか……。ウチな以前は都の将やってん。あんたの名前も影も、見たことも聞いたこともあらへん。」

昴「……。」

遼「何しに来たんや……。昴。」

昴「……どうして俺だと分かった？」

俺は声を元に戻して尋ねた。

遼「分かるわ。長坂橋で昴に完敗してから昴の事ばかり考えとったんや。それこそ恋人のようにな。」

昴「容姿を変えてたのに良く分かったな。」

遼「分かるわ。姿形を変えても、身のこなしとその目は同じやっただからな。」

なるほど。

昴「……捕らえるか？」

遼「……せえへんよ。どうせ捕まえられんやろうしな。」

昴「恩に着るよ。」

遼「あんたは敵や……。でもな、あの長坂橋からあんたはウチにと

って懂れや。あんたが見せた神速をどうにかものにしようと鍛練したけど、理想には全く届かん。ホンマに、ウチの神速も地に墮ちてもうたわ。」

張遼は自嘲気味に笑い、酒を一口飲んだ。

昴「まあ、強さは簡単には手に入らないさ。速さもな。」

遼「せやな。」

昴「でもな、速さは手に入れることは出来なくても、速くなることは出来る。」

遼「?・・・どついう事や?」

昴「そうだな、例えば・・・」

俺は張遼に向き直る。

遼「?」

昴「・・・(チラツ)」

俺は張遼の目を凝視し、一瞬横へ視線を反らす。

遼「ん?」

張遼が俺の視線に釣られる。

その瞬間に張遼に近づき、俺の両手で頬を触り、顔を張遼の眼前にまで近づけた。

遼「／＼、な、なんや！」

張遼は顔を赤らめて驚く。

昴「今、張遼には俺がどう見えた？」

遼「そ、そんなん、ウチが目を反らした隙に昴が目の前に・・・。」

昴「張遼の目には、気が付いたら俺が消えたように見えただろう？」

遼「そりゃそうやけど・・・。」

昴「実際速く動いているわけではない。でも相手が速いと感じたなら、それは速くなったのと同じ意味を持つ。」

遼「あ・・・。」

昴「速く見せる技術はいくらでもある。今みたいな視線誘導もその1つだ。人間には反射的にどうしても反応してしまうものがあるからな。後は、そうだな、わざと遅く動いてみる、とかな。」

遼「・・・どついう事や？」

昴「俺達は一騎討ちの際、相手の力量を計り、力や速さを体で覚え、そこから勝機を掴む。」

遼「せやな。」

昴「けど、渾身の一撃が自分が推し量ったいた速さより速い一撃が

来たらどう感じる?」

遼「・・・めっちゃめっちゃ速く感じるやるな。」

昴「そうだろ?これも速く見せる技術だ。」

遼「なるほどな。」

昴「そういう速さもある。求める速さの方向性を変えてみたらどうだ?」

遼「せやな・・・おおきに。参考になったわ。・・・けど、ええんか?ウチはあなたの敵やで?」

昴「見逃す礼とも思ってくれ。さっきから俺を捕らえようとする素振りも兵を呼ぶ素振りも見せてないしな。」

遼「・・・あかんわ。それではお釣が出てまうな。せや!」

昴「?」

霞「これからウチの事は霞と呼び。これで差し引き無しや。」

昴「分かった。礼を言うよ霞。・・・なら、俺はここで失礼するよ。」

霞「ほなな。・・・外の奴にもよろしく言うといてや。」

気づいていたか。

昴「それじゃ、またな。」

俺は食事を終えて、店を後にした。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

昴「雫、せめて殺気は隠そうな。」

雫「申し訳ございません。しかしあの方、張遼ですわね?」

昴「ああ。けど気にする必要はない。こっちが下手な真似しなければ何もしてこないだろ。」

雫「・・・ならば良いのですが・・・。昴様、もう戻りましょう。」

昴「そうだな。」

俺達は宿に戻り、一夜を明かした。

翌日、

天「みんな大好き——！」

「てんほーちゃ————ん！」

地「皆の妹おーっ？」

「ちーほーちゃ————ん！」

人「とつても可愛い。」

「れんほーちゃ————ん！」

張3姉妹、数え役満 姉妹の舞台が始まり、会場は大熱狂の渦に包まれた。

昴「すごいなこれは……。」

この大いに盛り上がる観客もそうだが、張3姉妹もすごい。

まずは天和の舞台をいっぱいに使った天真爛漫なパフォーマンスと透き通った歌声は心に染み渡ってくるものがある。

地和は狙ったポーズで観客を興奮させ、甘い声で男達を魅了していく。

人和は2人の暴走を押さえつつ、しっかりと目立つ移動して自分をアピールしている。

3人とも、自分の個性を引き出しながらも互いに高めあって1つの歌をなっている。

昴「なるほど、華琳が差し向ける事のだけはあるな。」

涼州もこれで完全に魏の領土なるだろう。

3人はこの後も踊りを加えた歌を披露し、終始会場は大盛り上がりだった。

天「皆、ありがとうー！」

「おおーっ！」

これで舞台も終わりか。

地「でも、まだ終わらないよー！」

この場を立ち去ろうとすると舞台上の地和が突然観客に声を掛ける。
ん？まだ何かあるのか？

今一度舞台に視線を移す。

人「今日は皆に紹介したい人がいます！」

紹介？メンバーでも増やしたのかな？
すると、舞台上の3人が俺に視線を向ける。

まさか・・・。

3人が舞台から降りて俺の方に向かってくる。

俺は嫌な予感がブンブンしたので逃げだした。が・・・。

パシッ！

昂「げ！？」

霞に腕を掴まれ、それを阻まれる。霞の顔にはいたずらっ子のよう
な笑みを浮かべている。

昂「うそ〜。」

やがて張3姉妹に捕まり、舞台上に上げられる。

天「紹介するのはー！」

人「都の踊り子。」

地「貂蝉さんでーす！」

「おおーっ！」

観客は大いに盛り上がった。

何かすげえ盛り上がってるよ。雫は顔面蒼白なのが見える。真桜と
沙和は戸惑っているのが見える。凧は何やら思案している。

っていつか舞台上上げられて俺どつすりゃいいんだ。

天「貂蝉さん。せつかくですから。」

地「何か1つお願いします！」

・・マジか。しょうがないな。

昴「分かりました。今日の催しものは歌ですので、皆さんに歌をお届けします。」

俺は一度目を瞑る。しばらくすると大盛況の観客が静まりかえる。それを確認し、歌い始める。曲は・・。

彼方の面影・・。

この歌はいなくなってしまうた愛する人へ捧げる歌・・。そして
つたえたい事を伝えることが出来なくなった事を嘆く歌・・。

正直この場に似つかわしくない歌だが俺はこの曲を歌った。そして歌い上げた。

静まりかえったままの会場。俺は目を瞑り、胸の前で両手を組んだ。昂「皆さんには愛する人はいますか？今は乱世。人が当たり前になくなってしまう時代です。もし愛する人が傍にいるのなら、心に浮かぶその言葉を伝えてあげてください。もし、もう伝える相手がもうすでにいないなら、その人の事を思い出してあげてください。たまにでもいいですから思い出してあげてください。その人はあなたの心で今も生き続けているから。」

俺は会場に視線を移し、

昂「この世界から戦が無くなり、皆が笑って暮らせる日が1日でも早く訪れますように・・・。」

俺はそれを告げ、舞台を降りる。

パチパチパチパチパチパチパチパチ・・・。

会場は拍手の渦に包まれた。

その後、張3姉妹にこっそり別れを告げ、涼州を立ち去った。地和は良いところ持ってかれたーって喚いてたけど。その帰り道、

雫「昂様。」

昂「ん？」

雫「涼州に何故一部の将が集まっていたか知っていましたわね。」

昂「正直、半信半疑だったけどな。」

雫「まったく・・・あの歌、昂様にも伝えられなかった言葉と相手がいますの？」

昂「・・・さあな。」

雫「・・・そうですか。」

雫が俺に詰め寄り、俺の腕を抱きしめる。

昂「雫？」

雫「・・・お慕いしておりますわ。昂様。」

昂「雫、突然何を・・・。」

雫「わたくしも後悔したくないだけですわ。」

昴「・・・雫、俺は・・・。」

雫「今は何も仰らないでください。ただこのままいさせてくださいませ。」

昴「・・・分かった。」

その後、しばらくそのまま歩いた。数日後、成都へと帰還した俺に待っていたのは桃香と愛紗による地獄の大説教。気が遠くなるほどの説教を受けたのだった。

続く

第55話、偵察任務、歌姫達との再会（後書き）

今回は少々強引に張る姉妹と霞の真名を昴に預ける話にしました。
ここを逃すと機会がなさそうでしたので。

感想、アドバイス、お待ちしています。

それではまた！

第56話 憎しみと親愛、答え (前書き)

投稿します！

今回はかなり時間がかかってしまいました (^ | ^ ;)
改めて自分の文才の無さに嫌気が差しました。かなりご都合主義で
す。

それではどうぞ！

第56話 憎しみと親愛、答え

昴「ふう。大きな不満もなくて何よりだったな。」

俺は今日、街の長老達との会合に来ていた。定期的に街の住民達の声や意見を聞きに来ている。大改革を行ったから少なからず戸惑いがないし不満はあるだろうからな。

愛「お疲れ様です。ご主人様。」

昴「愛紗もご苦労様。桃香もな。」

桃「うん！ありがとう」

昴「ただ街の長老にお爺さんはやめような。」

桃「うう・・・ごめんなさい。」

いきなりお爺さんだもんな。まあ長老も気にしてなかったけどな。

昴「改革に対する戸惑いは多少あったけど、皆今の暮らしに満足してくれていた。これも桃香や皆が頑張った結果だ。」

桃「えへへ」

愛「光荣です。」

桃香も愛紗も誇らしげだ。

愛「ご主人様はこの後はどうなさいますか？」

昴「ん、そうだな・・・。」

今日は急いでやらなきゃならないほど書簡もないんだよな。

昴「少し水浴びにでも行こうかな。近くに確か小川があったからな。」

桃「あ、いいなあ。私も行こうかな。」

愛「桃香様はこの後政務です。」

桃「ふえーん、ご主人様だけずるい！」

昴「俺は早朝にだいたい片付けちゃったからな。桃香はこれからそうしたらどうだ？」

桃「うう・・・、ご主人様のいじわる・・・。」

桃香は涙目で俺を見つめる。

愛「ではご主人様、お気をつけて。」

昴「ああ。」

愛「では桃香様、我らは城に戻って政務に付きますよ。」

桃「ふえーん、ご主人様・・・。」

桃香は愛紗に引きずられながら城へと帰っていった。
俺は2人の背中を見送り、小川に向かった。

森を歩いていると小川のせせらぎが耳に伝わってきた。

昴「お、着いたな。」

やがて、小川にたどり着いた。人の手が全く加わっていないだけに川の人は透き通っており、魚達の姿も確認出来た。

昴「それじゃ早速・・・。」

俺は外套や着込みの衣服を脱ぎ、髪留めを外し、パンツ一丁になると、

昴「ヒヤッホー！」

ドボーン！！

川の中腹まで泳いだ。

昴「うおー、超気持ちいい」

水温も程よく。まさに絶好の川水浴日和だな。しばらくプカプカ浮いた後、岩壁から川の水が伝うちよつとした滝に移動し、髪を洗う。

昴「ん？」

しばらく滝に打たれていると人の気配を察知した。どんどんこちらへ近づいてくる。

刺客か？いや違うな。殺気を感じない。この気配は・・・ああ。なるほど・・・。

昴「誰だー、何処にいるんだ？」

そう問い掛けると・・・。

蒲「ここにいるぞっつ」

やっぱりたんぼぼか。

蒲「すごい。良くたんぼぼだって気がついたね。」

昴「気配だだ漏れだったからな。っていうかこんな所でどうした？」

蒲「それはたんぼぼの台詞・・・あっ、お姉様、こっちこっち。」

お姉様・・・翠か。そついや気配は2つあったがもう1つは翠だったのか。

翠「なに騒いでるんだよ、たんぽぽ。ご主人様は見つかったのか？」

昴「よう、翠。」

翠「ん？」

茂みから出てきた翠に声を掛ける。

翠「ご主人様？」

翠は俺に目を向け、俺の格好を確認すると、

翠「／＼、うわあああああ！？なななっ、なんて格好してんだよっ！」

昴「ん？・・・ああ、水浴びしてたからな。」

全裸ではないとはいえ、女の子前に立つ格好じゃない・・・な。

蒲「お姉様、今さら隠したって遅いよ。・・・でもご主人様ってホント引き締まった身体してるよね。髪もサラサラで長いし、羨ましいな。」

昴「そうか？意識したことないから良く分からないな。」

俺は持つてきた布で身体の水滴を拭き取り、髪留めをくわえながら髪を後ろに束ねる。

翠「・・・(ポ〜)」

蒲「あはっ お姉様まじまじと見てる〜。」

翠「ノノ、ベベべ別に見とれてたわけじゃないからな！」

蒲「お姉様、誰もそこまで言っていないよ」

翠「 @ っ!？」

翠の顔はみるみる真っ赤に。

昴「そっいゃ、2人は何でここに？今日は訓練じゃなかったか？」

蒲「んとね、訓練が終わって城に帰ろうとしたらたまたま1人でどこかに行こうとしてたご主人様を見かけたの。そしたらお姉様が、何かあったらいけないからって言い出して、こっそり後をつけてきたってわけ。」

昴「心配しなくても俺は賊や刺客程度にどうにかされるほど弱くないぞ。」

蒲「ご主人様は乙女心が分かってないな〜。それは口実で本当はご主人様の傍に・・・。」

翠「わー！わー！わー！」

翠が慌ててたんぼぼの口を塞ぐ。

昴「?・・・良く分かんが、心配かけて悪かったな。」

翠「べ、別に、あたしは心配なんて・・・。」

蒲「素直じゃないなあ〜つ。」

翠「うるさい!」

翠は怒って拳を振り上げ、それを見たたんぽぽが慌てて逃げ出した。

昴「やれやれ・・・。」

俺は服を着ると、2人の後を追った。

翌日、仕事を早々に終えたので街へと繰り出した。何か買い物でもしようかなと店を見てまわっていると、

昴「おっ?あれは・・・翠か。」

外に椅子や机が並べられた茶房、いわゆるオープンカフェに翠をみつけた。

昴「よう、翠。」

翠「ん？・・・あ、ご主人様。」

昴「ここでお茶してたのか？」

翠「見てれば分かるだろ。ご主人様はどうしてここに？」

昴「仕事が終わったから街にちょっと買い物にな。そしたら翠を見かけたから声をかけたんだ。」

翠「そうだったのか。」

昴「相席してもいいか？」

翠「あ、ああ、どうぞ。」

俺は翠の真向かいに座り、店員にお茶を注文した。

昴「なかなかいい感じの店だな。翠は良く来るのか？」

翠「いや、初めてだよ。なんか今、この辺りで一番人気がある店らしいから、試しに来てみたんだけど・・・。」

そっぴや栗からそんな話を聞いたな。この店だったのか。

翠「すごいよな、うじ。」

昴「すごいって?」

翠「ほら、この店、すごくオシャレだろ?そのせいで恋人同士で来てる奴が多くて、だから、あたしだけ浮いてるっていうか・・・。」

そついや、辺りを見渡すと男女の2人組ばかり・・・っていうかだけだな。1人なのは翠だけだ。

昴「なるほどね・・・、でも今は俺も居るんだから浮いてはいないだろ?」

翠「それはそうだけど・・・、でもご主人様があたしなんかと一緒にいるから皆あたしに嫉妬してるよ。」

辺りを見渡すと、通行人や客がチラチラこちらを見ている。でもそれは・・・。

昴「逆だよ逆。嫉妬の視線は俺にぶつけてるんだよ。あんな可愛い娘を独り占めしやがってってな?」

翠「ノノ、かかかか、可愛いって、なになっ何言ってるんだよ!?そんなわけないだろ!？」

昴「あるよ。さっきまで憂いを含んだ表情でお茶を飲んでいた美少女にどこぞの馬の骨とも分からない男が恋人のように同じ卓にいたんだ。分かるだろ?」

翠「ここここっ、恋人って・・・」

昴「翠ほどの美少女が恋人なら、その男は嫉妬と羨望の視線を浴びせられるんだろうな。」

翠「 @ つ!?!?」

翠の顔はみるみる赤くなっていった。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

その後も翠と他愛のない話をしながらお茶を楽しんだ。

翠「ご主人様はあたしの事からかいすぎたよ。あたしはがさつだし、不器用だし、顔も可愛くないし、身体つきだって中途半端だし・・・」

昴「そんなことないって。」

翠「あるよ。昔からそんなだからそんなんじゃないぞって・・・母様が・・・」

昴「・・・。」

翠がお茶の入った器をギュッと握り、悲しげな顔を浮かべた。

馬騰殿・・・か。

昴「・・・翠。」

翠「何だよ。」

昴「曹操が憎いか？」

ピシッ！

そう口にした刹那、俺の周りの空気が弾けた。

翠「・・・当たり前だろ。曹操は母様の仇だ。必ずあたしの手で殺す。」

復讐。

昴「翠。復讐をしても馬騰殿は帰って来ないし喜ばない・・・なんてきれいごとを言うつもりは毛頭ない。殺す殺されは乱世の常っていう言葉で片付けるつもりもない。君が曹操を殺せば今度は翠が曹操の臣下から憎しみを受けることになる。」

翠「・・・だから何だよ。」

昂「殺されたから殺して。殺したから殺されて。そんな事を繰り返してたらいつまで経っても戦なんて、乱世なんて終わらない。」

翠「・・・何が言いたいんだよ。ご主人様はあたしに、曹操を許せとでも言うのかよ。」

昂「・・・復讐なんて、果たしても果たせなくても、ただ残るのは虚しさだけだ。」

ドン！

翠が卓を強く叩く。

翠「ご主人様にあたしの何が分かるってんだよ！？ たった1人の家族を殺されたんだ！ 何も知らないご主人様が知った風な口を聞くな！」

翠はそれをいい放つと店を飛び出していった。

昂「翠・・・。」

復讐を口にした人間を俺は何人も見てきた。復讐を諦めきれなかった人間は結局最後は不幸だった。翠にはそうなってほしくない。

俺は精算を済まして店を後にした。

翌日、政務を中断して城の庭へと行くと、翠が自身の槍で素振りをして鍛練をしていた。俺は翠に近づいて行くと、翠はピタリと動きを止め、

翠「・・・何か用かよ？」

昴「そうだな。俺と模擬戦をしないか？」

翠「ご主人様と？」

昴「ああ。」

翠はしばし俺を見つめ、

翠「・・・分かった、相手になるよ。」

翠は十字槍を構えた。

俺は足元に落ちていた手頃な石を拾い。

昴「この石が地に付いたら始めるぞ。」

翠は無言で頷く。俺は上空に石を放り投げ、村雨を構える。

トン！

地に石が付く。

翠「うらぁー！ー！」

昴「ふっ！」

両者が同時に動きだし、

ガギン！

同時にぶつかる。

翠「まだまだ！」

ガギン！ギン！ギン！

翠は間を置かずに連撃を繰り返す。

昴「。。。。」

強い。錦馬超の名は伊達じゃないな。一撃一撃が重く、速い。

昴「はぁ！」

ガギン！

翠「ぐっ！」

翠を弾き飛ばし、距離を取る。

昴「……。」

俺は翠が離れたのを確認すると村雨を鞘に納めた。

翠「……何のつもりだよ。」

昴「終わりだ。今の翠と戦っても鍛練にならない。」

翠「……どういう事だよ？」

昴「今の翠の武は曇り過ぎている。おまけに迷いだらけだ。これではお互いに何も得られない。」

翠「っ！？、ふざけるなよ、人の事分かった風な口ばかり……。」

昴「翠。涼州に行け。」

翠「はぁ！？。」

昴「涼州の1番大きい酒家を知っているだろ。そこに行け。今の翠には必要なものがそこにある。」

翠「……。」

昴「これは命令だ。」

翠「……分かった。」

翠はすぐに準備へと向かった。

昂「涼州から帰って来たら、その時にこれを渡すよ。」

俺は懐の1枚の手紙に手を触れた。

翠 side

ご主人様の命令ですぐに準備をして涼州へと向かった。馬を飛ばしたからそう時間もかからずに着いた。

翠「懐かしいな・・・。」

つい最近まで居たはずなのに、すごく懐かしい。でも今は憎き曹操の属国になっている。

翠「ご主人様は何であたしをここに・・・。」

ご主人様は酒家に向かえって言ってたな。場所は分かる。涼州の街はあたしの庭みたいなものだ。

翠「・・・ここだ。」

酒家はすぐに見つかった。早速入ると。

「いらつしゃ・・・!?、馬超様・・・」

翠「あんたは・・・。」

そこには40歳ほどの女性がいた。

知ってる。この人はあたしや母様の元で侍女長をしていた人だから。

「お待ちしておりました、馬超様。」

翠「待っていた?」

「御剣昴様より言伝てをいただきましたので。そのうちに馬超様がここを尋ねると。」

翠「ご主人様が・・・。」

「ご案内致します。こちらへ・・・。」

あたしは案内に従って彼女の後を追った。

翠「それじゃ、今はあの酒家で？」

「はい。馬騰様が亡くなり、馬超様が涼州を離れてからはあそこでお世話になっております。」

翠「そうか・・・。」

あたしは話をしながら彼女着いていく。

「着きました。こちらです。」

翠「!?!?・・・これ・・・は・・・。」

薄々予感があった。あつたけど・・・。

「はい。馬騰様が眠られているお墓です。」

翠「・・・母・・・様・・・。」

母様がここに・・・。

「曹操の命により、私達侍女の手で葬りました。」

翠「!?!、曹操の命で!?!」

「はい。こちらの流儀で丁重に弔うようにと。。。」

翠「な。。ぜ。。。」

「あの日、曹操が城にまで侵攻し、馬騰様は敵の手にかかることを潔しとせず、自ら毒をあおり、自害なさいました。」

翠「自害?曹操が殺したんじゃないのか!?!」

「いえ、曹操が駆け込んだ時にはもう。。。」

翠「そんな。。。」

母様が。。何で。。。

「その後、曹操の命により、私達侍女が馬騰様をこちらの流儀で丁重に葬らせていただきました。」

翠「何で曹操は。。。」

「。。曹操は嘆いていました。馬騰様と戦場で相見えたかったと。。。」

翠「嘘だ。。。」

「曹操は馬騰様の亡骸を辱しめる者には厳罰を命じてまで馬騰様を
労いました。」

翠「・・・嘘だ。」

「曹操もこのような結末を望んでいなかったのでしょうか。」

翠「嘘だ嘘だ！あたしはそんなの信じないぞ！」

「馬超様・・・。」

そんなの・・・あたしは・・・。

「これが私の目を見たことの全てです。」

翠「・・・母様。」

「御剣昂様に馬騰様が馬超様に宛てた手紙を預けました。もうご覧
なりましたか？」

翠「ご主人様に？・・・あたしはそんなもの・・・。」

「きつと渡せなかったのでしょうか。手紙は確かに預けましたので益
州へ戻られましたらお受け取りください。」

翠「・・・分かった。」

「では私はこれで・・・。」

彼女は去っていった。

翠「母様・・・。」

あたしはしばらく母様の墓を見つめていた。

その後、あたしはすぐに成都へと帰還した。すぐさまご主人様の元へと向かった。

翠「ご主人様！」

昴「翠、戻ったか。」

翠「ご主人様。」

昴「・・・場所を変えようか。」

ご主人様が席を立ち、部屋を出ていった。あたしはその後を追った。

・
・
・
・
・
・
・

街の外の森までやって来た。

昴「彼女には無事会えたみたいだな。」

翠「ああ……。ご主人様が涼州に行ったのはこのことを確かめるためだったんだな。」

昴「ああ。」

翠「それで、あたしに真実を知らせてどうしろって言っただ？」

昴「曹操がこんな結末を望んでいなかったことは分かったはずだ。」

翠「だから何だって言うんだよ！？それでも……！」

昴「ああ。曹操が原因なことには変わりはないだろう。」

翠「だったら！」

昂「・・・昔、同じように復讐を志した奴がいた。」

いきなり何だよ・・・。

昂「そいつは自分の主であり、愛し合った者を殺された。」

翠「・・・。」

昂「そいつは主を殺した相手を心から憎み、復讐することを誓った。でも、ある時そいつはある疑問抱いた。この復讐はその主のためなのかと。」

翠「どういうことだよ・・・。」

昂「そいつは、自分の悲しみや怒りや苦しみを晴らす為に復讐して
るのではないのではと。」

翠「!?!?」

昂「ある日、戦場で自分と同じ目をした者に会った。彼はそいつに自分はお前に無二の友を殺されたと言った。その者の目を見て言葉を聞いてそいつは復讐をやめた。復讐は復讐を生むだけという事に気付いたから。何より、そんな世界をそいつの主は嫌っていたから。・・・でもそいつはそれに気付くのが遅すぎた。」

翠「遅すぎた?」

昂「気付いた時にはそいつの復讐にあまりにも多くの命と運命を巻き込んでしまったからだ。」

翠「……。」

昴「結局そいつは自分を許せなくなり、散っていった命に報い、償うために生涯戦場で戦い続けることを自らに課した。」

翠「……。」

昴「君の復讐が馬騰殿ためだって言うなら俺は止めない。止めることは出来ない。家族を殺された気持ちはその者にしか分からないから。でも、そうじゃないなら俺は翠を止める。翠にあんな運命を辿ってほしくないから。」

翠「ご主人様……。」

ご主人様はとても悲しそうな顔で言った。もしかして、ご主人様の言うそいつって……。

ご主人様が懐から一枚の手紙を取り出した。

昴「馬騰殿が君に宛てた手紙だ。今の君になら渡せる。」

あたしはそれを受け取り、開いた。

「翠へ、曹操の侵攻はもう防げない。私は自ら命を絶つ。曹操と戦って見たかったけどこの身体じゃ無理だろうしね。翠、あんたは間違っても私の復讐なんて考えるな。翠は馬家の頭領を務めなきゃならないんだ。憎みに部下を巻き込んだりいけなさいよ。強くなりなさい。心も身体も。最後に、翠の成長を見られなかった事が心残りだけど、私は天からいつでも翠の事を見守っているよ。それじゃ、先に天で待っている。生きるだけ生きてら会いにきなさい。碧より。」

」

手紙にはこう書いてあった。

ポタツ・・・ポタツ・・・。

あたしの涙が手紙を濡らす。

翠「母・・・様・・・。」

あたしは手紙を抱きしめた。

翠「ご主人様・・・。母様はさあ、いつも厳しくて、あたしはいつも怒られてばかりだった。でも・・・すごく優しく、あたしの憧れだった。」

昴「・・・ああ。」

翠「大好きだったんだ！でももう母様はいないんだ・・・。」

昴「・・・ああ。」

翠「もう・・・いないんだ・・・。」

涙が止まらない。止めることができない。

翠「ご主人様・・・。あたしはどうしたら良いのかな？どうしたら・・・。分からないよ・・・。」

昴「翠。君は優しさや愛、苦しみも悲しみも全て知っている。それを知っている君だから。俺達と一緒に作らないか？」

翠「えっ？」

昂「俺達と憎みや悲しみが生まれたい、皆が笑って暮らせる世界を俺達と一緒に作らないか？」

翠「皆が・・・笑って・・・」

昂「ああ。誰かが誰かを憎んで、殺しあつて、そんなの悲しいだけだろ？そんなものは無くさなきゃいけない。だから、改めて力を貸してほしい。俺達の理想を果たすために。」

翠「ご主人様・・・っ!？」

ご主人様があたしを抱きしめる。

昂「今はいっぱい泣いたらいい。大好きなお母さんのために・・・」

翠「ご主人様・・・うわああああ！」

あたしは泣いた。ご主人様の胸で力いっぱい。

昂「それでいい。辛いなら泣いたっていいんだ。そして、泣いた分だけ強くなるう。」

翠「うん・・・うん・・・」

あたしはご主人様の胸で泣き続けた。大好きだった母様を想って・・・。

辺りはすっかり暗くなってしまった。ご主人様はずっとあたしを抱きしめてくれた。嬉しい、嬉しいけど……。

翠「すごく恥ずかしい／＼」

昴「皆には黙っておくよ。」

翠「絶対だからな！」

翠「ああ。2人だけの秘密だ。」

鈴々やたんぽぽに知られたらずっとからかわれるからな。

昴「目、真っ赤だな。」

翠「／＼、ご、ご主人様のせいだからな！」

昴「俺のせいだよ……。」

ご主人様は頬掻きながら苦笑いをした。

翠「・・・ご主人様は強いな。」

昴「どうしてそう思うんだ？」

翠「ご主人様は憎みも悲しみも全て受け入れてなおも皆のために戦う事が出来るから。」

昴「・・・俺は強くない。俺は戦う事でしか皆を幸せに出来ない人間だからな。」

翠「そんなことはない！ご主人様は強いよ！とても強くてとても優しい。そんなご主人様だから皆もあたしも大好きなんだ！」

昴「翠・・・」

あれ？今あたし、ご主人様に好きって言っちゃった・・・

翠「あ・・・あ・・・」

どうしよう！？勢いで告白しちゃったよ！

昴「翠？」

ご主人様が心配そうにあたしの顔を覗く。

翠「うあああああああーっ！」

あたしは居たたまねなくなってその場から逃げ出した。

昴「おい、翠ー！」

ご主人様が後ろであたしを呼んだけど振り返らずにただひたすら逃げ出した。

しばらく走ったところで足を止めた。ご主人様はついてきていないみたいだ。

翠「明日からどんな顔して会おう・・・。」

告白して、逃げ出して、ああもう恥ずかしいな〜／＼

翠「・・・でも、ご主人様暖かったな・・・。」

あたしはご主人様と連合の時に初めてその目で目の当たりにしてその強さに憧れて、そして一目惚れをした。曹操に負けて、益州でご主人様と再会して、そして今、改めて思った。

あたしはご主人様を好きになって良かった。

作ろう。ご主人様と桃香様と皆と一緒に、皆が笑って暮らせる世界を……。

続く

第56話 憎しみと親愛、答え（後書き）

ご都合主義に頼りすぎだろこれ・・・。

もつと文才があればもつとうまく表現できるのでしようが、これが私の限界です。

タグに時々シリアスって入れてるけど、ほぼシリアスだな。タグ、変えよっかな・・・。

感想、アドバイスお待ちしています。

それではまた！

第57話〈悪戦苦闘、警備隊の舞台公演〉（前書き）

投稿します！

今回はいつもと違う感じにしてみました。

それではごっごー！

第57話 悪戦苦闘、警備隊の舞台公演

昴side

昴「・・・(カキカキカキカキ・・・)」

今日もいつものように政務に取り組んでいると、

朱・雛「失礼します。」

朱里と雛里が執務室にやってきた。

朱「お時間よろしいですか？」

昴「ああ。構わないよ。」

雛「ご主人様にご相談したいことがあります・・・。」

昴「相談？」

朱「はい。街の人からの・・・えっと・・・陳情なんですけど・・・。」

昴「陳情？」

雛「えと、陳情というと大げさなんですけど・・・。」

昴「？」

どういう事だ？

朱「警備隊の隊長である想華さんの事で、街の人から怖いという声
がありまして・・・。」

昴「怖い・・・。」

朱「想華さんはすごく真面目にお仕事してくれてるんですけど・・・。」

昴「なるほど・・・。」

俺は益州平定後、警備隊を設立し、その隊長を想華に任せた。当初
は何でも器用にこなせる雫に任せようと思ったんだが、雫はその万
能さ故に色々忙しいため、断念。同じく器用に何でもこなせる白
蓮が上がった。白蓮自体親しみやすい人柄のため適任かなとも思っ
たんだが、街の治安守らなきゃならない者の隊長が親しみやすいと
最悪ナメられる恐れがある。そうなると治安が乱れる。そういった
理由から真面目で貫禄もある想華に隊長を任せ、副隊長に白蓮、猪
々子、斗詩を任命した。

雫「もちろん、想華さんは間違ったことをしてるわけでも、過剰な
ことをしてるわけでもないのですが・・・。」

昴「それ故にか・・・。」

人つてのはたとえそれが正しいことであっても押し付けられる反発
したがる傾向がある。想華みたいに凜として、かつ絶対に逆らえな
い人間に押し付けられたら不満も出るだろう。俺は想華に警備隊と
して守らなければならぬことを通達した。想華はそれを忠実に守
ってくれているのだろう。忠実に・・・。

昴「それで、その声は結構出てるのか？」

朱「そうですね、そんなに多いわけではないですが、いくつか出ますね。」

昴「ふむ・・・。」

これはあまり放置出来ない問題だな。早々に解決しないと警備隊の崩壊しかねない。

雛「想華さんを責めることは出来ません。」

昴「かといって、民の気持ちも分かる、か・・・。」

さてどうするかな。どっちの肩も持てないし、想華にもっと柔らかく民に接して・・・多分無理だな。華琳の所に居たときは俺が隊長やってたからこの手の問題はなかったんだけど・・・。それならいっそ、想華の怖いというイメージを払拭することが出来れば。何か・・・！？、そうだ、これなら・・・。

昴「要するに、想華の怖いという印象を無くせば良いわけだ。」

朱「そうですね・・・。」

雛「何か良い考えがありますか？」

昴「まあな。問題解決になるかどうかは分からないけど、1つ考えがある。早速準備に取り掛かるよ。」

朱「分かりました。でしたらご主人様の業務は私達が行いますので、ご主人様はそちらに集中して下さい。」

昴「助かるよ。なら2人にしばらく業務を任せる。」

朱・雛「御意です」

さてと、早速準備を始めよう。割りと面白い事になりそうだ。

想「警備隊で演劇？」

昴「ああ。街の住民と警備隊の交流を図るために企画してみたんだ。」

想「しかし我らには演劇の経験など。。。」

昴「まあその辺は練習しながら慣れて行けば良い。衣装や舞台の設
立は俺が中心になって行う。皆は舞台公演に集中してくれば良い

よ。」

猪「でもあたいらに出来るかな？」

斗「うう。無理ですよ。」

昂「演技指導に関してはこの2人をお願いした。」

警備隊詰所の入り口から、

麗「わたくしにお任せ下さい！わたくしは幼い頃からこの手の娯楽は数多く見てきましたので！」

雫「わたくしも一度演劇をした経験がございますので、是非お任せ下さい あっ、ちなみにわたくしも舞台上上がりますので皆様よろしく願いますわ。」

昂「まっ、適材適所だと思ってな。」

猪「そっぴや麗羽様って昔からそっぴの好きだったよな。」

昂「そっぴいうことで・・・、とりあえず想華、君は主役な。」

想「なっ！？私がか！？私にはそのような経験はないと・・・。」

昂「悪いな、台本は俺が書いたんだが、主役に1番適してるのは想華なんだ。悪いが頼むな。」

想「ぐっ・・・了解した・・・。」

想華は渋々了承した。

昴「想華の相手役は雫な。任せるぞ。」

雫「はい！お任せ下さい」

昴「白蓮、猪々子、斗詩もちゃんと役があるからな。皆、通常業務をこなしながら練習することになるが、よろしく頼むな。」

想「うむ。了承した。（私に出来るか・・・）」

雫「はい」

白「応っ！（これを期に普通脱却だ！）」

猪「あいよ！（何か面白そうだ。）」

斗「はい・・・。（うう、自信ないよ。）」

次の日から猛特訓が始まった。

翌日、街の大きな屋奥を借りての稽古が始まった。

俺が書いた台本は正史の現代の恋愛劇である。主役は想華。ヒロイン役には雫である。いざ稽古が始まってみると、やはりというか、雫は自身が言うだけあって上手い。もはや女優顔負けだ。白蓮は・・何というかまあ、普通に上手い。何役か兼ねてもらったんだが、器用にこなしてくれてる。猪々子も以外に上手かった。

斗詩は緊張のせいでセリフが飛んだり、セリフを噛んだりしたが、稽古を重ねていく内にだんだんと慣れてきたようでそれも減っている。本番までにはどうにかなるだろう。問題は想華だ。台本はしっかり頭に入っているのだが・・。

雫「あなたは愛しの悠利なの？」

想「あ、ああ。わ、私は・・。」

麗「やめ、ですわ！想華さん、表情も動きも固いですわ。台詞も棒読み。お話になりませんわ！」

想「うぐっ、すまん・・。」

このように、どうにもこんな感じになってしまう。何というか・・これは苦勞しそうだな・・。

・
・
・
・
・
・
・

その後も稽古を重ねていき、どんどん仕上がっていく。着々と準備は進んでいく。が、しかし・・・。

麗「はいやめですわ！想華さん、もっと台詞に感情を込めて下さいな！」

想「ぐぐぐっ・・・！」

想華は相変わらずである。やっぱりというか、簡単には行かないよな・・・。

想「やはり私では無理だ！今すぐにでも変えてくれ！」

麗「何を言ってますの！？これは昴様が想華さんに任せたいわば任務ですよ？あなた、任務を放棄致しますの？」

想「いや、だがな・・・。」

麗「あなたなら出来ますわ！さあ、また初めから！」

想「だが、私には向いてないのは見て分かっただろ！？私では無理だ！出来ない！」

麗「なら逃げますの？」

想「っ！？」

麗「貴女は戦場で大軍や強敵を相手にしたとき、無理だの何だの言っただけで逃げますの？」

想「うぐぐぐっ、くそお！やってやるわ！」

麗「その意気ですわ！ならば最初から行きましょう」

おーおー、最近外交官として活躍してるだけあって、人をのせたり気持ちは掴むの上手いな。

稽古は更なる熱を帯びて再開した。

更に稽古は続き、ついに本番1週間前となった。

麗「はあ、これはなかなか手強いすわね。」

またもや想華のNGだ。

想「・・・。」

「「「・・・。」

場を沈黙が支配する。どうしても想華が上手くないかない。

想「・・・くそっ！」

想華は悔しげに床を蹴る。

麗「如何なさいましょう、昂様？」

昂「・・・。」

普通に、舞台公演だけを考えれば代役を立てるべきだろう。だがそれでは意味がない。そもそもこれは想華のために企画したものだから。とはいえ、このままではとてもじゃないが公演は出来ない。さてどうするか・・・。

俺が解決策を考えていると、

想「くっ！」

想華が稽古場を飛び出していった。

昴「想華！・・・皆はそのまま続けてくれ。」

俺は想華を追いかけた。

想華は街の外まで走り続け、近くの森の中で止まった。

想「・・・。」

昴「想華。」

想「・・・すまない。」

昴「どうして謝るんだ？」

想「私はお前の期待を裏切った。」

昴「想華・・・。」

想「自分が情けない。演劇1つまともにこなせない自分が・・・」

昴「まだ裏切つてないだろ？」

想「えっ？」

昴「まだ裏切つてない。そもそもまだ終わってすらいないだろ。諦めるには早いんじゃないのか？」

想「昴・・・。だがお前も見ていたなら分かるだろ。私には演技なんて出来ない！」

昴「はぁ・・・らしくないな。」

想「えっ？」

昴「らしくないよ。俺が初めて想華と言葉を交わした時、君はボロボロの身体に鞭を打って、勝ち目のない戦に行こうとした。月を助けるために諦めようとはしなかった。」

想「・・・。」

昴「あの時の君は何処に行った？ただ迷いなく月を助けようとした想華は何処に行ったんだ？」

想「・・・。」

昴「主役に変更はない。代役を立てるつもりもない。想華を信じる。」

「

俺はそれを告げると想華に背を向ける。

想「もし駄目だったらどうするのだ？」

昂「・・・君は戦に出陣する際に負けた時の事を考えるのか？」

俺は想華の問いにこう返して城へと戻った。

想華 side

昂が去ってから私も私は1人ここでたたずんでいる。

想「・・・諦めるな、か。」

思えば私には心が折れそうになったことが何度かあったな。恋に初めて出会った時、あの圧倒的な強さを前に武人として心が折れそうになった。あの天井知らず恋の強さに。それでも私は挫けず、鍛練を重ね、恋に及ばずとも今の強さにまでなった。次は記憶に新しい

シ水関での防衛戦。私の暴走で戦は負け、月様を危険に晒し、私は自ら命を絶とうとした。だが私は昴に諭され、生きる事を諦めなかった結果、月様と再会し、再び将としての居場所を手に入れた。

想「諦めなかったから今がある、か・・・。」

たとえ不得手な事であろうと諦めなければまた以前のように報われるのだろうか・・・。私はしばらくその場で考え続けた。

昴side

あれから幾日か経った。仕事があるため、毎日稽古が出来るわけではない。自ずと時間は限られる。しかし最後の稽古の日、そこに想華の姿はなかった。仕方なく想華抜きで稽古を行った。結局想華は最後まで現れなかった。そして本番当日・・・。

本番当日。街の広場に舞台を設置し、公演が行われる。宣伝もビラ配りも大々的に行ったので結構観覧者も多い。準備は万端なのだが・

麗「想華さんはまだ来ませんの!？」

白「まだ来てないな。」

猪「最後の稽古も来なかったし。」

斗「うう、どうしよう・・・。」

本番間近、未だに想華の姿はない。

雫「昴様、如何致しましょう・・・。」

昴「・・・。」

想華がなかなか姿を見せないため、皆が不安がる。本番もう目前。だが俺は不思議と一抹の不安もなかった。

大丈夫・・・。

俺は想華を信じているから。皆がそわそわとしていると。

想「すまない、遅くなった！」

想華が駆け込んで来た。

想「・・・稽古に出なくてすまなかった。もし許されるなら私にもう一度・・・。」

麗「時間がありませんわ。早く準備なさい。」

想「麗羽・・・。」

猪「待ちくたびれぜ。」

想「猪々子・・・。皆、良いのか？」

俺が想華の肩に手を置く。

昴「言つたら、代役を立てる気はないって。」

想「昴・・・。」

昴「時間がない。急いで準備を始めてくれ。」

想「ああ！任せろ！」

想華は急いで準備を始めた。

やがて公演が始まり、警備隊の舞台が始まった。

想華がゆっくり舞台の中央へと移動する。

想「我が名は悠利！我が愛しの愛那、姿を見せてくれ！」

想華の最初のセリフを語る。

完璧だ。以前は棒読みで、表情も動きも固かったが、今ではセリフにしつかり感情が込められ、表情も柔らかい。その後も公演は進んでいく。途中、斗詩が緊張のあまりセリフが飛んだり、猪々子が殺陣で暴走仕掛けたり等のトラブルが出たが、雫がアドリブでカバーしたり、殺陣に関しては彼女らは大陸に名を轟かせる武人だけあり、本物さながら（っていうかマジ？）の演技だったため、観覧者からの歓声は凄かった。公演は進み、いよいよフィナーレ……。

雫「悠利、もう私はあなたを一生離しません。ずっとあなたの傍にいます。」

想「私もだ愛那。私は永久にお前を愛す。お前以外の誰も愛さない。ずっと一緒だ。」

2人が見つめ合い、そして1つに重なる・・・。

そして公演は終わる。

パチパチパチパチパチパチパチパチ！！

観覧者からは拍手喝采で、その歓声は長い時間続いた。

舞台公演の翌日、俺は街と想華の様子を見に来た。正直、すぐには効果は表れないだろうと思ってた。他にもいくつか対策を用意していたのだが、結局それは不要となった。街に来てみると。

「「悠利様」」

想「あ、ああ・・・」

想華が軽く手を振る。

「「「きゃああああ
「「「

すると上がる黄色い声。想華はすっかり人気者になった。主に女性に。彼女達には今の想華が凛々しくクールな女性に見えるのだろう。もともと舞台公演をした理由は、想華に役者をやらせる事で街の人々に想華の普段とは違う一面を見てもらい、想華に親しみを感ずてほしかったのと、想華が演じる事を覚えてくれれば街の人々とも上手く付き合えるようになるんじゃないかという打算もあった。半ば駄目元だったけど効果は抜群だった。まあ、舞台の設置やビラ等で経費が足りなくて一部俺が自腹切ったから結構な出費だったけど、まあ、良かった。

想華の警邏が終わるのを見計らい、声をかけた。

昴「お疲れ、想華。」

想「むっ？昴か。」

昴「すっかり人気者だな。」

想「むう、いささか複雑だがな。あれでは警邏がやりづらくてかなわん。」

とは言うものの満更でもなさそうだ。

想「少し付き合ってもらっても良いか？」

昴「ん？構わないよ。」

俺は前を歩く想華の後に続く。

やがて着いたのは以前に想華が飛び出して辿り着いた森だ。

想「あの後、私は暇を見つけてここで練習をしていた。」

昴「なるほど。その結果がああ舞台公演というわけか。」

相当練習したんだろうな。

想華が俺に振り返り、

想「礼を言う。昴。」

頭を下げた。

昴「何の事だ？」

想「お前のおかげで舞台公演を成功させることが出来た。」

昂「別に俺は……。」

想「そもそも、この舞台公演は私の為だったのだろうか？」

昂「……気付いていたのか？」

想「私が街の住民から恐れられているのは気付いていた。だが私は生憎人付き合いはあまり得意ではない。もしこのまま放置してれば警備隊はどうなっていたか。」

昂「想華……。」

想「お前には感謝しても仕切れない。私を死の淵から救い。月様を救ってもらい、私に再び将としての居場所を与えてもらい、今回は私と民との溝を埋めてもらった。本当にありがとう。」

昂「当然だ。だって仲間だろ？」

想「……ありがとう。」

想華は何度も礼を言った。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

やがて日が沈み、辺りはすっかり暗くなった。

想「・・・(ブルツ)」

想華は身を震わせた。さすがに夜になると想華の格好では若干肌寒
いだろう。俺は自分の外套を想華に掛けた。

想「・・・ああ。すまない。」

昂「夜風で身体を冷やすといけないからな。」

想華は外套をキュツと身体に纏った。

昂「そろそろ戻るか。」

想「そうだな。」

俺達は城へと戻った。

城へ着くと、想華は纏っていた外套を俺に返した。

想「恩に着る。助かった。」

昴「気にするな。それじゃ、また明日。」

俺は外套を肩に下げて部屋に向かう。

想「昴。」

昴「ん？」

俺は想華に振り返る。

想「お前が書いた台本……。」

昴「ああ。単純でありきたりな物語だが、悪くなかっただろ？」

主人公、城の兵士、悠利が王族の娘と恋に落ち、あらゆる障害や困難を乗り越えてやがて結ばれる、まあ良くある物語だ。

想「恋とは美しいものだな。」

昴「そうだな。」

想「しかし、悠利とは男だろ？私が男役を演じる事になるとはな。」

昴「悠利は凛々しくて強く。何があっても絶対に諦めない不屈の心の持ち主だ。正に想華そのものだろ？」

性別が違うだけで。

想「むう・・・、そう言われると返す言葉がないな。」

昴「だろ？」

想華は複雑な顔をした。

想「だがな、私はこうも思う。」

想華が俺に近寄る。

想「凛々しく、何があっても諦めない不屈の心の持ち主が私と言うが、私はお前の傍に居るときは・・・。」

昴「っ！？」

想華は俺の唇に自身の唇を合わせた。ほんの数秒合わせると想華は身体を離れた。

想「一途に悠利だけを想う愛那でありたいと思う。」

昴「そ、想華・・・。」

想「ふふっ、お前でもそういう顔をするのだな。良いものを見た。
ではな。」

想華はそのままこの場を離れていった。

俺はこの後通りかかった桃香に声を掛けられるまで呆然としていた。

続く

第57話 悪戦苦闘、警備隊の舞台公演（後書き）

慣れない事はするものではないですね。華雄の拠点に関してはフツと浮かんだのがこれでした。無理矢理過ぎたかな。もはや華雄別人だし（^| ^ ;）

感想、アドバイスお待ちしております。

それではまた！

第58話 五胡襲来、驚愕の戦い（前書き）

投稿します！

戦描写を入れてみましたが、正直あまり自信がないです。

それではどうぞ！

第58話 五胡襲来、驚愕の戦い

益州平定から月日が経ち、俺達は内政と軍備をバランス良く行っていた。旧劉璋派の豪族もほぼ全て支配下に置くことが出来た。俺が実施した大改革も上手く軌道に乗り、着々と国は富んでいく。いつものように政務に勤しんでいると、成都へ凶報を携えた早馬が到着する。内容は西方の異民族である五胡の軍が益州へ侵攻した、という内容である。報を受け俺達はすぐさま将を集め、軍議を始める。

昴「皆も聞いてるだろうが、外敵である五胡が侵攻してきている。これを対処しなければならぬ。それで、状況はどうなってる？」

朱「はい。現在五胡の兵は村の1つを占拠したあと、その村を拠点として周辺に被害を及ぼしています。」

昴「なるほど。。。」「

愛「朱里の報告が正しいのであれば早急に兵を差し向けるべきでは？」

雛「愛紗さん言うことはもつともです。この件の処理に手間取れば、今まで私達が来たのを歓迎してくれていた人々が、一斉にそっぽを向いてしまいますから……。」

鈴「……何か問題があるのかー？」

昴「早急に手を打たなければならぬ。だが、あまりに将兵を割きすぎると曹操や孫策に隙を見せることになる。」

翠「あー、なるほど。」

昴「つまり、撃退するにあたってあまり将兵を連れて行くことができない。」

星「ならば、人選は慎重に行わなければなりません。」

桃「星ちゃんの言う通りだね。ご主人様、どうしよう……。」

昴「そうだな……。」

連れて行ける兵数は5万つとどこか。問題なのは誰を連れて行くかか……よし。」

昴「兵は5万程連れていく。率いる将は想華、麗羽、猪々子、斗詩、桔梗。軍師には詠とその補佐に七乃だ。」

「「「「「！？」「「「「」

皆が驚愕する。

星「主よ、想華達を軽視するつもりはないが、いくらなんでもそれでは・・・。」

愛「せめて私か鈴々を連れていってください。」

昴「駄目だ。愛紗と鈴々は成都を離れるべきではない。」

翠「ん〜、だけどさ。」

昴「この人選には理由がある。今あげた将は皆大陸に名を轟かしているが、愛紗や星とかに比べ、軽視されているのは事実だ。五胡を撃退することで天下に再び名を轟かせれば曹操やその他勢力への牽制にもなる。劉備軍の将は屈強揃いだとね。」

星「ふむ・・・。」

昴「皆心配はいらない。麗羽も猪々子も斗詩も俺達の所で愛紗達に揉まれて袁家存命の時よりはるかに底上げされているし、想華に至っては武人としては愛紗や星に劣っていたとしても将としてはヒケを取らないと俺は評価しているよ。」

麗羽は1から兵法を学んでいるようだし、猪々子や斗詩は俺が何度か鍛えた、想華は連合時の大失態が彼女を大きく成長させ、感情と勢い任せの将から冷静に戦況を見つめ、最善かつ最良の選択肢を選べる将にまで成長した。

昴「軍師には詠があるし、実戦経験豊富な桔梗もいる。それに、も

うアレは実戦導入出来る段階に来ているんだろ？」

朱「アレ・・・澄ですね。」

昴「そうだ。澄があれば騎馬を操りながらの射撃も可能になる。練度はもう充分なんだろ？」

雛「はい。集中して調練をしたのでいつでも実戦導入出来ます。」

昴「なら、問題はない。」

愛「むう・・・。」

桔「ハツハツハツ、お館様にこつも期待されてはその期待に応えるしかあるまいな。」

愛「・・・分かりました。それでは想華達に任せよう。」

想「うむ、任せる！」

麗「ご期待に応えますわ！」

猪々子も斗詩もやる気マンマンだ。

詠「・・・軍師はボクでいいの？」

昴「ああ。詠に勝敗の全てを背負わせるつもりはないが、詠の采配次第で結果は変わる。任せるよ。」

詠「・・・分かったわ。上等よ。賈文和の実力、見せてあげようじゃ

ない！」

昴「期待してるぜ。」

桃「皆頑張ろっね！」

昴「桃香はお留守番だからな。」

桃「ええっ！どうして？」

昴「俺と桃香の両方が城を離れるわけにはいかない。どちらかが行くことになるが、連れて行ける兵力が最小で、相手が五胡だから何が起こるか分からない。いざという時、前線に出て兵を鼓舞できる俺が総大将の方が都合がいい。桃香はもし曹操や孫策が動いた時は任せるよ。」

桃「うん、分かったよ！でもご主人様、無理したら駄目なんだからね？」

昴「分かってるよ。．．話は決まったな。すぐに準備に取りかかる。皆気を引き締めて行こう！」

「「「「「応っ！」「」「」

出陣準備が整うと、早々に城を出た俺達は、斥候を放ちながら益州西方へと向かう。

詠「アンタ、どういうつもりなの？」

昴「何がだ？」

詠「惚けないで。率いる将もそうだけど、この戦に導入した兵、新参の兵が多く目立つわ。ただでさえ少ない戦力なのよ？もっと古参の兵を入れるか、何だったら愛紗か鈴々を連れて来れば・・・。」

昴「確かに、古参の兵を連れて行くか、愛紗か鈴々が入れればこちらの被害は多少減るだろう。」

詠「・・・だったらどうして。」

昴「だがそれはこの戦に関しての話だ。これから先、曹操との決戦時、覚悟のない奴は生き残れないだろう。」

詠「この戦で覚悟を決めさせるの？」

昴「ああ。たとえ非道と言われようと、俺達の理想を叶える為には力とその覚悟が必要なんだ。だから実戦経験の少ない兵には多少荒療治になる。だけど、だからと言って兵を不用意に失わせたくない。」

だから……。」

詠「分かってるわ。その為にボクがいるんでしょ？」

昴「ああ。必要なら俺を使っても構わない。信頼してるぜ。」

詠「ええ、任せて。必要ならあんだでもとことん利用させてもらおうわ。」

昴「その意気だ。」

・
・
・
・
・
・

その後も進軍し、五胡の軍との距離、約2里ほどのまで進軍した。斥候の情報だと敵総数約5万。こちらとほぼ同数。向こうは詳しい事はほとんど分からない蛮賊。対してこちらは、軍師に詠が居るとはいえ、愛紗や鈴々等の主力抜きの軍。練度は高いとはいえ実戦経験の少ない兵を中心に編成されている。向こうは強行軍故に長期の戦が出来ない事を考慮しても、楽な戦にはならないな。

昴「全軍停止！」

兵が俺の号令で一斉に止まる。俺は村雨を抜き、

昴「これより死地に入る！相手は我らの領土を食い荒らす蛮賊だ！決して許してはならない！躊躇うな！恐れるな！それは、自分と仲間、ひいては家族を殺す事になる！行くぞ、皆とこの地を守る為に！」

「「「「応ー！！」「」「」

詠「全軍抜刀！」

ジャキン！

兵達が一斉に剣を抜く。

詠「皆、随時指示を飛ばすから聞き逃さないでよ！」

「「「「応ー！！！！」「」「」

兵は雄叫びをあげる。

昴「行くぞ！攻撃開始！」

戦は開戦した。

詠「今よ！盛大に銅鑼を鳴らなさい！」

ゴオン！ゴオン！

詠の指示により銅鑼が戦場に鳴り響く。

それに合わせ、先頭の騎馬隊を率いていた文醜隊が左右に別れ、それぞれ敵部隊にぶつかっていく。そこへ間髪入れずに顔良隊が横撃をかけて敵陣を切り裂いていく。すぐさま敵の前曲を孤立させる事に成功した。

詠「まずは予定通りね。」

前曲を孤立させ、敵部隊を2つに分けることに成功し、次に移行しようとした所、孤立してた敵前曲部隊が猪々子めがけ、一点突破を図ろうとする。

詠「やるわね。袁紹隊を救援に向かわせなさい！」

詠がすぐさま対応する。袁紹隊が指示を受け、文醜隊の救援に向かった。

詠「華雄隊は左翼から一斉掃射後、そのまま敵右翼を突き破りなさい！」

華雄騎射隊が一斉掃射を行い、すぐさま突撃を敢行する。敵はまさか騎馬からの射撃など想定外だったのか、かなり浮き足だっている。

詠「顔良隊、右翼から敵左翼に横撃を掛けなさい！敵顔隊はその援護に向かつて！」

先ほど敵陣を切り裂いて右翼に飛び出した顔良隊が陣形を整え、横撃を掛ける。敵顔隊も速やかに援護に回る。敵は前方の文醜隊、袁紹隊に集中していたため、対応出来ない。

昴「……。」

俺達の軍が優勢だ。敵は強行軍故に時間を掛ける戦いが出来ないからおのずと開戦早々に勝負をかけてきた。詠はそれを見事に逆手に取った指示を飛ばす。順調、なのだが……。

七「うーん……。」

七乃が何やら唸っている。

昴「どうした七乃？」

七「優勢、ですよな？」

昴「見ての通りだ。何か心配事か？」

七「根拠も何も無いんですけど、何か胸騒ぎがするんです。」

昴「そうか・・・。」

俺も同意見だ。五胡の軍は蛮賊特有の荒々しさと奇抜な用兵術をもつて戦いを挑んでいる。しかし、何か妙だ。敵はまるで何か目的を持って動いているみたいに見える。後もう一つ、順調過ぎる。あまりに思惑通りに進み過ぎている。七乃と同じに俺も何か悪い予感がある。

昴「手は打っておくか・・・。」

俺は兵を2人呼び、指示を飛ばした。

その後も戦は優勢に進み、敵陣を突き破った文醜隊が敵本陣に迫る。勝敗は決した・・・そう思った瞬間、俺達は驚愕の渦に巻き込まれることになった。

猪々子 side

猪「おっしゃあー！おまえら、このまま敵本陣一番乗りすんぞー！」

「応っ！」

一時はヤバかったけど、麗羽様のおかげで助かった。あたいらは敵陣を突破して本陣に突き進む。

猪「行くぜー！」

敵本陣にたどり着き、どんどん突破していく。

敵総大将を討ち取ってやる！

そんな意気込みで先陣切っていった。そして敵本陣に突き進むと・・。

猪「えっ？」

どついつ事だ？なんで……。

なんで本陣に誰もいないんだ？

場所間違えたかな？

兵達も混乱している。そこへ1人の伝令が来た。

「申し上げます！敵部隊が我が軍の本陣近くに現れました！」

猪「何だとー!?!」

何でそんなところに……!?!、まさか本陣に誰もいないのって……。

猪「やべーぞ！早く本陣の救援に向かうぞ！」

あたいはすぐに来た道に戻った。

昴 side

猪々子の隊が敵本陣へと突入し、勝敗は決したと思ったその時、

「西側の森から敵兵が現れました！」

昴「!?!」

詠「何ですって!?!」

自軍本陣に衝撃が走る。

詠「あの森に1部隊を伏せていたの!?!」

1部隊……。いや違う。あれは……。

昂「あれはおそらく敵本隊だ。」

詠「本隊？そんな、だって本隊は・・・。」

詠が前方の敵本陣の方向を見る。

昂「おそらくだが、本陣は空だ。」

詠「空？そんなわけ・・・。」

昂「考えても見る、いくら伏兵で俺達の本陣を突いても自軍本陣、本隊を全滅させられたら意味がない。例え不意打ちでもただの1部隊が早々に本隊が落ちる事はない。多少被害が与えられても最後には救援に来た部隊に挟撃されて終わりだ。」

詠「つまり・・・。」

昂「敵は短期決戦に対応してくる俺達の策を逆手に取り、本陣を囲に孤立した俺達本隊を本隊で殲滅を図ろうとしたんだろう。」

詠「っ！？、蛮賊にそんな事・・・。」

昂「敵にも頭が回る奴がいるといるんだろう。蛮賊言えど、たくさん人数が居れば1人や2人切れ者はいる。」

詠「くっ！今はとにかく対応しないと。華雄隊に通達、敵本隊の迎撃を・・・。」

昂「駄目だ、華雄隊も交戦中だから対応には間に合わない。俺達本隊で迎撃する。」

詠「本隊だつて迎撃体勢が・・・！」

昂「万が一に備えて既に本隊の1部隊に陣形を構築してる。俺がその1隊を率いて迎撃に向かうから詠は事態を收拾して隊を立て直せ。」

詠「あんだ、この事態を予測してたの？」

昂「ただの勘だ。根拠は全くなかった。今は一刻も争う状況だ。後のことは任せるぞ。」

詠「・・・分かったわ。」

昂「それじゃ、後は頼む。」

俺は詠に総指揮を任せ、あらかじめ陣を構築しておいた部隊の先頭に向かった。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

昴「俺達はこれより西側の森より現れた敵部隊の迎撃に向かう！皆俺に続け！」

「「「「「応つ！」「」「」

俺は村雨を抜いて先陣を切る。

あらかじめ陣を構築しておいたとはいえ、あまり長丁場になれば厳しい。なら俺がすることは・・・。

昴「敵総大将を討ち取る！」

もうまもなく接敵する。

「大将首はもらった！」

敵先駆けが俺に斬りかかる。俺は一度村雨を鞘に戻し、上体を下に下げる。

昴「北辰抜刀術・・・。」

足に氣を集中させ。

昴「疾・風！」

前方に飛び、鞘から村雨を引き抜き、斬り裂いた。

「ぐはっ！」「

「うぐっ！」

「がはっ！」

一気に3人の首を飛ばす。敵がぞろぞろ俺に集まってくる。

昂「一掃する。」

俺は村雨を再び鞘に戻し、朝陽と夕暮を抜き、氣弾を前後左右に乱射し、敵の急所を撃ち抜く。

ダダダダッ・・・

「ぎゃは！」

「うげっ！」

「がはっ！」

氣弾で撃ち抜き、双剣で斬り裂き、時に蹴り飛ばし、敵を次々に葬る。

「死ね！」

敵が4人俺に飛びかかる。自身の命をもって俺の動きを止めに来た。

昂「その意気込みは買っが、甘い。」

俺は上空に飛び、それを避ける。朝陽と夕暮を鞘に戻し、村雨を引き抜き。村雨に氣を込める。

昂「飛龍・衝撃！」

地面に落下と同時に気が込められた村雨を叩きつける。

ドゴーン！！

叩きつけられた場所を中心に大きな爆発が起きる。辺りにいた敵はその爆発に呑み込まれ、弾き飛ばされる。

「殺せー！」

昂「ちっ！」

今までの敵ならこれで少しは怯むんだが、こいつらはあるで怯まない。言うなれば死兵だ。まずいな、如何に精鋭揃いの本隊でもこんな奴ら相手ではいずれ崩れる。

昂「早い所敵総大将を・・・っ！？」

突如強い殺気が俺を襲った。俺はすぐさまその場を離れる。

ドーン！

俺がつい先程までいた場所が爆ぜる。そこには1人の人が居た。

？「・・・。」

五胡の兵は皆奇妙な仮面を付けているが、こいつにはそれはなく、素顔を晒している。明らかに他の奴らとは違う。

昴「お前が総大将か？」

？「肯定。」

見つけた。こいつが総大将。背丈は星と同じくらい。髪は腰に届く程に長い。得物は恋が使う方天画戟の柄を短くしたような戟を両手に構えている。

昴「俺は劉備軍、総大将の御剣。お前は？」

姜「姜維、伯約。」

昴「姜維か。姜維、その首貰い受ける！」

俺は姜維に飛び込んだ。

姜「否。私が討ち取る。」

姜維も同時に飛びかかる。

ギン！

俺の村雨の一撃を姜維は戟を交差させて受け止める。

ガチン！

一度距離を取り、再度距離を詰める。

ガキン！ギン！ギン！

お互いが数合斬り結ぶ。

強い。単純な実力は愛紗級だ。想華や猪々子や斗詩には悪いが、3人では荷が重かっただろうな。戦い方は蛮賊特有の荒々しい戦い方ではなく、堅実でどっしり腰を降ろしたような戦い方だ。この手の手合いはなかなか隙を見せない。本来なら時間をかけて体力を削って集中力がわずかでも緩んだ所を狙うのが常道だけど、あいにく俺に時間をかける余裕はない。時間が経てば経つほどこっちの士気はどんどん落ちていく。一騎討ちに勝っても戦に負けましたじゃ意味がない。・・・やむを得ないか。多少危険でも勝負を仕掛けるか。

姜「ふっ！」

姜維が戟を俺の顔めがけ、突いてくる。

ここだ！

俺はその突きに向かっていき、直撃スレスレで首を左にひねり、避けると同時に村雨を振り抜く。

ギン！

姜「ぐっ！」

姜維はかろうじてもう1本の戟で受け止める。

昴「はあ！」

俺は受け止められるのもお構い無しに振り抜く。

ギイン！

姜維が後方に弾かれる。

昴「まだまだ！」

俺はすぐさま追い討ちをかける。

ギイン！ガキン！ギイン！

姜「ぐぐぐつ。。。」

姜維はかるうじて体勢を立て直し、俺の連撃をしのぐ。

昴「ふっ！」

ギイン！

姜「くつ！」

姜維は再び戟を交差させて受け止める。

ギギギギギツ。。。

鏑迫り合いが行われる。

昴「強いな。」

姜「あなたも。」

昴「この戦の策は君が考えたのか？」

姜「肯定。」

昴「なかなかやるな。だが、本隊が迎撃体勢を取っていたのは予想外だろ？」

姜「・・・否。」

昴「何？」

姜「想定はしていた。」

昴「何だと？」

姜「もし私が止められたとしても」

姜「さらにもう一手を繰り出す。」

詠 Side

「申し上げます！東方より砂塵！」

詠「何ですって!？」

伏兵・・・いや別働隊!？そんなものまで・・・こっちは敵本隊で手一杯なのに・・・どうする・・・このままじゃ・・・本隊が全滅・・・そんな予感が頭をよぎったその時、

「申し上げます！我が軍後方から砂塵！」

詠「っ!？」

振り返ると後方に砂塵がまっていた。

まだ別働隊が？もしそうなら手の打ちようが・・・いや違う。あれは・・・。

星「趙雲隊、敵別働隊にぶつかる！気を引き締めてかかれ！」

「「「「「応ー!!!」」」」」

後方から趙雲隊が飛び出し、敵別働隊へぶつかっていく。

詠「星！？何で星の部隊が……。援軍要請は出してないのに……。いや、出してたとしても速すぎる。もしかして朱里か雛里の指示？」

そうでなければおかしい……。でも助かった。これで体勢を整えられる。

すでに文醜隊は敵本隊に向かっていているし、敵前曲ももうすぐ撃破できる。これで勝敗は決したわ。

詠「急いで立て直すわ！体勢を整え次第昂の救援に向かうわ！」

昂「別働隊まで用意していたとはな。」

姜「読んでいたのか？」

昂「これを想定していたわけじゃないけどな。」

俺は出陣の際、星に遅れて出陣するように指示をした。そして俺達に気付かれないようにこっそりついてくるようにと。これは万が一の時の為の切り札として用意しておいた。ちなみに俺以外誰も知らない。教えなかった理由は安心感を与えない為だ。結果的にこれが功を奏した。

姜「・・・退く。」

姜維が指示を飛ばし、五胡の軍は一糸乱れぬ動きで撤退していく。

姜「御剣昂。」

昂「何だ？」

姜「。。。」

昂「っ!？」

姜維は五胡の兵と共に撤退していった。

昂「そうか・・・。」

・・・五胡がここまでのものとはな。姜維程の切れ者がいるならこの先五胡はさらに恐ろしい存在になる。詠をここまで手こずらせるとはな。詠を責めることはできない。正直、朱里や雛里。冥琳や穩。桂花や茉里、華琳でも同じ結果になると思うから。それに結果的には序盤は詠の指揮もあって順調だったし、中盤の敵本隊自らの伏兵も俺が機転を利かしたから大した被害も出ていない。終盤の別働隊も星を控えさせてた事もあってこちらもあり被害を出していない。

かなり偶然に頼った結果でもあるが、被害は軽微。結果だけみたら完勝だ。

昴「五胡対策を立てないとな。」

俺は五胡への対策に頭を巡らせた。

詠Side

五胡は撤退し、ボク達は戦に勝利した。

星「何とか退けることが出来たな。」

詠「星。あんたどうしてここに？朱里か雛里の指示？」

星「聞いておらぬのか？私は主の命で別働隊として後方に待機しておったのだ。」

詠「昴の？」

星「うむ。・・むっ？主が戻られたようだな。」

星は昴の元に向かっていった。

何よ。ボクを信頼するって言ってたのに何で星を・・。ううん、何でその事をボクにすら言わなかったの？ボクは信頼するに値しないとでも言うの？何でなのよ・・。

外敵、五胡を退けることに成功した劉備軍。しかし、昴と詠の間に亀裂が走った。

続く

第58話〜五胡襲来、驚愕の戦〜（後書き）

一騎討ちの描写より戦の描写の方が難しいです。何処がおかしかったらすみません。

アンケートを実施してみて、正直2〜3票ほど投票が入れば良いかなって思っていました。まさかの数でびっくりしました。途中経過として・・・。

? 3票

? 2票

? 5票

? 3票

です。たくさんアンケートありがとうございます。正直軽い気持ちで書こうかと思っていました。まさかの投票数でプレッシャーがかかり、ガタガタブルブル状態です（。。。。）

感想、アドバイス等ありましたらよろしく願います。

それではまた！

第59話 軍師としての自分、メイドとしての自分 (前書き)

投稿します！

今回はもう1人のメイドのお話です。

それではどうぞ！

第59話 軍師としての自分、メイドとしての自分

昴side

五胡を退けることに成功した俺達だが、五胡の恐ろしさを改めて痛感させられた。今の俺達は華琳や雪蓮の事もあるため、あまり五胡ばかりに集中は出来ない。とりあえず対応策として、益州西方に鎮守府を築き、そこに兵と将何人かを常駐させる事にした。戦力を分散させる事になるが、やむを得ないだろう。俺達は成都へ帰還し、更なる国の発展と戦力増強を図るために政務へと勤しんだ。

昴「ふむ……。」

移住希望者に関する対応策か。俺達の国も今や大国。これまでとは、規模も事情も違ってくる。ただ来るもの拒まずというわけにはいかない。そんなことを続ければ直に国庫は空になる。かといって受け入れを拒否すれば人心はあっさり離れる。

昴「・・・そうだな。」

流民の一部は警備隊及び兵士として受け入れるか。徴兵はどのみち必要だからな。後は森を拓いて新しい田畑を開墾・・・いや、いっそ、屯田兵としてその両方を担ってもらった方がいいな。そうしよう。これだけで全ては抱え込めるわけじゃないが、案の1つとしては良さそうだ。後はどうするか・・・。

詠「・・・入るわ。」

昴「ん、詠か？どうぞ。」

詠が執務室にやってきた。

詠「・・・。」

詠は無言でお茶を淹れて俺に渡す。そうだ、詠に相談してみるか。

昴「なあ詠。」

詠「・・・何よ。」

昴「ちょっと詠に意見を聞きたいんだ。」

詠「・・・何でボクに。」

昴「いやな、俺だけじゃどうにも処理できなくてな。。朱里も雛里もないから相談も出来ないし。」

朱里と雛里は今日は調練の視察に出ている不在である。

詠「・・・朱里と雛里がいないから・・・。」

詠は何か呟いたが俺には良く聞こえなかった。

昴「人口の増加についてのことなんだが・・・。」

詠「悪いけどボクには思い付かないわ。」

昴「何でも構わないから何かないか？」

詠「あいにくだけど、ボクは忙しいの。失礼するわ。」

昴「んゝ、そうか。忙しい所悪かったな。」

詠は急須を片付け、執務室を出ていく。詠は扉の前で、

詠「どうせアテになんかしてないくせに（ボソッ）。」

昴「ん？何か言ったか？」

詠「・・・何でもないわ。」

詠はそのまま部屋を後にする。

昴「詠？」

どうしたんだ？何か様子がおかしかった気がしたけど・・・気のせい
いか。俺は目の前の案件に意識を戻した。

もっと早く気付いてあげべきだったと思う。詠と俺との亀裂が少しずつ広がっていたのを・・・。

それから2日後、

昴「・・・フー。」

俺は政務の合間に鍛練をしている。今やっているのは氣の鍛練だ。俺は城の庭の中心で座禅を組み、氣を身体に纏わせる。

昴「・・・。」

こんなところか・・・。

俺は身体に纏った氣を解除する。

昴「ふう・・・。」

俺が一息付くと、

月「お疲れ様です。」

昴「ん？・・・あ、月か。」

集中し過ぎて全く気が付かなかった。

月「どうぞ。」

月が水と湿った布を差し出す。

昴「ありがとう、月。」

俺は水と湿った布を受け取り、水を一気に飲み干す。

昴「んぐっ、んぐっ・・・ぷはあ！くく！生き返るなあ！」

俺は布で顔を拭く。気を使用した関係でとにかく身体が疲弊していたため、冷たい水が身体中に染み渡っていく。

月「すごい集中力ですね。私何度も声をお掛けしたんですけど・・・」

昴「あー、そうだったんだ。悪かったな。」

気の展開はとにかく集中力が命だから没頭し過ぎると周りの声や気配に全く気が付かなくなる。

月「いえ、取り立てて用事があつたわけではないですので・・・。」

熱心なんですね。」

昴「まあな。」

少しでも強くないといけないからな。

月「お身体に気を付けてくださいね。政務だって大変なんですから。」

昴「もちろん。分かってるよ。」

身体を壊したら本末転倒だ。

昴「心配してくれてありがとうな、月。」

月の頭を撫でる。

月「へう／＼／」

月は頬を赤らめた。

昴「さてと、鍛練はこの辺にして政務に戻るかな。これ、ありがとう。」

月に水筒と布を渡す。

月「あつ／＼」

渡す時に俺の手に月の手が触れる。その時、

詠「……。」

前方に詠の姿があった。今俺の手を月が握っている。

これは詠に『ボクの月に出すな!』とか言われるんだろうなって身構えていると、

スツ……。

詠が俺達の横を無言で抜けていった。

昴「？」

月「詠ちゃん？」

……様がおかしい。いつもの詠なら一言何か言っていくのに。

月「詠ちゃん、どうしたんだろう……。」

月の目からも詠の様子がおかしく見えたみたいだ。何があつたんだ？詠の様子がおかしくなり始めたのはいつからだ？五胡との戦の前まではいつも通りだったと思う。ならその後か？……分らないな。単に機嫌が悪かったのか……。後でそれとなく聞いてみるか。俺はひとまず詠の事は横に置き、政務に戻った。

星「わざわざ主にご足労いただき申し訳ありません。」

昴「構わないよ。」

翌日、俺は調練の視察に出ている。星の部隊だけあって規律もしっかりしていて、練度も高く、星はまるで自分の手足の如く兵を操っていた。

星「兵達も、主が直々の視察に大いにはりきっていました故、いつも以上に動いておりました。全く、いつもあれぐらいやってくればありがたいのですが。」

昴「そう言っただけだよ。見事だったぜ。」

星「そうは仰られますが……ん？」

？「それは無理だ。」

？「無理じゃない!」

星と共に歩いていると執務室の方から何やら声が聞こえてきた。

昴「この声は、愛紗と詠か？」

2人の声が廊下に響いてきた。執務室に入ってみると・・・。

愛「無理に決まってる！」

詠「無理って決めつけてるだけじゃない！」

見る限り愛紗と詠が言い争い、て言うか論争しているのか。

詠「だから、前曲と後曲、右翼と左翼を連動させなければ軍の力が分散するのっ！それぐらい兵法をやっていたれば分かるはずでしょ！」

愛「それは分かっている！だが全ての兵に騎馬をあてがうなど、くだい無理な話だ！」

2人の論争はますますヒートアップしていく。
やれやれ・・・。

昂「2人供、一旦落ち着こうぜ、声が廊下にまで響いてるぞ？」

愛「あつ、ご主人様・・・。」

詠「!？」

昂「一体何の話をしてるんだ？」

愛「はい、実はですね」

・
・
・
・
・
・
・

愛「 というわけです。」

昴「なるほど。」

軍の統率及び連携をより良いものにするために騎馬を全ての兵士にあてがえるようにせよという詠の意見に、それは無理だという愛紗の意見がぶつかり合っているわけか。話を聞く限り、詠の言う通り、騎馬を全兵士にあてがえれば連携の速さはかなりのものになる。兵法にも兵は神速を尊ぶなんて言葉があるからな。叶うならどうにか詠の理想通りにしたいが・・・。

昴「詠の言いたい事も分かるが、さすがに全兵士に騎馬をあてがうのは今は無理だ。軍資金にも限りはあるし、厩舎や馬の管理の事もある。」

愛「やはりご主人様も同じ意見でしたか。」

詠「・・・。」

昴「だがいずれは詠の理想通り・・・。」

詠「・・・もういい。」

昴「ん？」

詠「もういいわ！どうせあんたはボクの意見を聞く気はないんですよ！？」

昴「誰もそうは言っていないだろ？俺は現実と折り合いをつけて述べてるだけだ。」

詠「何が現実よ！現実ばかり見て理想を叶えようとしな！無理だ無理だから言っただけで最初から何もしようともしない！あんたがその程度のへぼ君主だとは思わなかったわ！」

愛「貴様！ご主人様に何て口の聞き方をしている！」

詠「もう良いわよ！」

詠が部屋を出ようとする。

昴「詠、ちょっと待て。俺は・・・。」

俺は部屋を出ようとする詠の肩を掴み、それを押し止める。

詠「触らないで！」

バチン！

昴「！？」

肩を掴んだ手を詠に叩かれる。

詠「どうせあんたは・・・、あんたは・・・ボクの事なんて何の信頼もしてないんでしょ!？」

昴「詠・・・。」

詠「もういいわよ・・・。信頼されなきゃ・・・信頼されない軍師なんて価値なんて何も無いのよ!！」

詠はそう言い放つと部屋を出ていった。

昴「詠・・・。」

俺はただ見送る事しか出来なかった。部屋から出る瞬間、詠の瞳から涙がつつたっていたから。

詠 Side

詠「何よあいつ・・・。」

あいつはボクの事なんて何の信頼もしていない。五胡との戦でボクはそれを知った。あいつはボクに一言も告げずに本隊を動かして、星を別動隊として後方に待機させていた。そんなの・・・。

詠「ボクが失敗することを想定してたみたいじゃない。」

万が一に備えるのは将として当然の事。だけど、理解は出来ても納得は出来ない。あいつが軍師としてボクを信頼していないなら・・・。

詠「ボクはここには居られない。」

軍師は君主からの信頼を得られなければ価値なんてない。ボクは元来軍師だ。メイドじゃない。それだけの為にここに居たくない。あいつは月を救ってくれた恩人だけど・・・。ボクは・・・。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

・・・

翌朝、ボクは前夜に用意していた荷物を持ち、日が昇りきる前に城を出た。誰にも見られなくなかったから。

詠「月・・。」

月にも黙って出てきた。絶対に月は反対するだろうし、ボクが本気だつて知ったら月はきつとついてくるだろうから。月に危険な目に合わせたくないし、何より月はあいつの事大好きだから、引き離すような真似はしたくない。

詠「さよなら、月・・。」

ボクは成都を出ていった。

翌朝、いつも通り早朝に起き、鍛練を行うとすると、

月「ご、ご主人様〜！」

月が血相を変えて俺の元に駆け寄ってきた。

昴「どうした、月？」

月「大変です！詠ちゃんが、詠ちゃんが何処にも居ないんです！」

昴「詠が？」

月「朝詠ちゃんのお部屋に行ったら詠ちゃんがいなくて、お城の中を探したんですけど何処にも見当たらないんです。」

昴「詠。。。」

ここ最近様子がおかしかったけど、その事で・・・

昴「分かった。手分けして探そう。」

月「はい！」

俺達は城内を駆け出した。

・
・
・
・
・
・
・

昴「何処にもいないな。」

城内を隅々まで探したけど詠の姿はなかった。

昴「城にいないなら外か・・。」

俺は街へと飛び出した。

・
・
・
・
・
・
・
・
・

街へとやってきたが、まだ早朝の為、店は何処もまだ閉まっております、人の姿もほとんどない。街をくまなく探していると、前方に朝の散歩をしているおじいさんを見つけた。

昴「すまない、少し尋ねたいのだが・・・。」

俺は詠の特徴を細かく説明し、尋ねた。

「ホツホツ、あのいつも可愛らしい服を着た方ですな？お見かけしましたよ？何やら急ぎ足で向こうへ歩いて行きましたが・・・。」

昴「分かった。ありがとう。」

俺は礼を言い、おじいさんが教えてくれた方角へ向かった。

こんな早朝に開いている店はない。急ぎ足で人目を気にして歩いていた事を考えると、詠は・・・。

昴「すれ違ったまま、原因も分からないままお別れなんてごめんだぞ！」

俺は城外へと急いだ。

詠 side

早朝、出来る限り誰にも見つからないように城外に出て、その後、誰かが追ってきても見つからないように森の中を歩いている。この辺りの地理や地図は頭にあっただから問題ないって思ってたけど。。。

詠「ここ何処なのよ!？」

木々を避けながら進んでいたらいつの間にか方向感覚が狂い、同じ所を行ったり来たりしている。

詠「もう!何処に向かえばいいのよ。。。」

ボクが愚痴を溢しながら歩いていると、

?「お困りのようだな。」

詠「っ!?!、誰!？」

?「私だ。」

木の後ろから出てきたのは、

詠「星!?!どうして。。。」

星「いやなに、早朝に鍛練をと思っていたら何やらお主がこそこそ

歩いていたのでな。こっそり後をつけてきたのだ。」

詠「そう……。」

誰にも見つからないように気を配ったつもりだったけど……。

詠「それで、ボクを連れ戻すの？」

星「……お主が主を見限ったというなら私は引き止めるつもりはない。……だが1つ聞きたい。何が原因なんだ？その原因は先の五胡との戦だと私は睨んでいるが……。」

詠「あんたには分からないわ……。」

星「ほう、と言うと？」

詠「あいつは、昴はボクを信頼していない。先の戦だって、ボクに内緒で本隊を動かしたりあんたを別動隊に置いたりして……。それが結果的にボク達を勝利に導いたのは分かっている。分かっているけど……。こんなのボクへの侮辱以外の何ものでもない。口先だけ信頼するとか言って……。」

星「なるほど、そういうことであつたか……。」

詠「そうよ、だからボクは……。」

星「甘つたれるな！」

詠「っ！？」

星「どんな理由かと思つて聞いてみれば実にくだらな。聞くだけ無駄であつたな。」

詠「あんたに、あんたにボクの何が分かるのよ！信頼を裏切られたボクの気持ちがあんたには分からないわ！」

星「多くの将兵の命を預かる立場の総大将として、事前に手を打つておくのは当然の事であろう。それを教えなかったのは単に兵達に安心感を与えず、緊張感を無くさない為の処置だったのだろう。」

詠「でも、だからつてボクにまで隠すことはないわ！事前に教えてくれてても・・・。」

星「もしお主が知つていれば、その事を前提に策を練り、陣を構成していただろう？それでは兵達に気付かれる恐れがあつた。だから主はお主にも黙つていたのだろう。」

詠「っ！？」

そうかも、しれないけど・・・。

星「あともう一つ、主はお主の事を信頼していないと言つたが、それを本気で言っているのならば、お主は今まで主の何を見ていたのだ？」

詠「何を・・・。」

星「あの主が。誰よりも優しく、心配性の主が。曹操に攻められ、城を失い、その事を全て自らの責任とし、たった1人で全ての将兵、そして民を守る為に大軍を足止めに向かつてしまつようなお人好し

の主が。信頼をしていない軍師なんかは将兵の命を預けると思っか
？」

詠「っ!？」

星「もしそうだと答えるならお主に主を語る資格はない。主の元を
離れたければ好きにすればいい。」

詠「・・・ボクは。」

星「もう一度良く考えるのだな。主の事、そして自分の事を。」

詠「・・・。」

星「良く考えて結果、主を認めたのであればまた戻ってくればいい。
そうでないなら去れ。お主程の軍師なら曹操も孫策も受け入れるだ
ろう。」

星は踵を返し、

星「言いたい事はそれだけだ。ではな。」

そう言い残し、去っていった。

詠「・・・何よ、言いたい事だけ言って・・・。」

ボクはしばらくその場でたたずんでいた。

・
・
・
・
・
・
・

ボクはしばらくその場で考えこんでいると、いつの間にか大きく時間が過ぎ去っていった。帰るにしろ別の地に移るしる早く行動しなければ日が暮れてしまう。どうしようか迷っていると、

ガサツ！

詠「っ！？、誰！？」

近くの茂みから大きな音がした。風とかそんなんじゃない。明らかに誰かが音を鳴らしている。

詠「誰！もしかして星なの！？」

音のした方向に声を掛けると、しばらく沈黙した後、

「グオオー！」

詠「く、熊！？」

とても大きな熊が茂みからやってきた。

ど、どうしよう。あんな大きな熊・・・。

後ずさりをしていると熊がこちらへ近づいてきた。

「グルルル・・・。」

詠「くっ・・・。」

少しずつ後ずさりをしているとやがて大きな木に道を塞がれてしまった。

詠「!?!?・・・嫌、助けて、月・・・。」

熊は少しずつこちらへ近づいてくる。

詠「助けて・・・。」

熊は二足で立ち上がり、鋭い爪でボクを振り下ろす。

詠「助けてよ、昴!!」

身を震わせ、両目を閉じる。

ガチン!

覚悟を決めて激痛に備えるが、いつまで経っても激痛は来ない。おそれるおそれる両目を開けると、

詠「あっ・・・。」

そこには熊の爪を受け止めた昴の姿があった。

「グルルル、グオオー！」

熊が再度昴に爪を振るう。

詠「昴！」

ボクは咄嗟に叫んでいた。

昴はまったく動かさず、ただ一言……。

昴「消える。」

ただ一言、低い声で熊に呟いた。

「グオ！……グルルル……。」

熊は昴に爪を振り下ろす直前に動きを止め、やがてのしのと逃げていった。

詠「助かった。」

思わず声を漏らすと、昴がボクの方へ振り返った。

昴「詠……。」

詠「な、何よ……。」

昴「探したよ。」

詠「・・・ボクは別に頼んでない。」

昴「聞かせてほしい。何が原因なんだ？何故出ていこうと考えたんだ？」

昴が星と同じ事をボクに聞いてくる。

詠「あんたが・・・、あんたがボクを信頼を裏切ったからでしょ！？」

昴「！？、そんなことはない！俺は詠の事・・・。」

詠「信頼している？嘘よ！だったら何で前の戦で星の別動隊の事、本隊を勝手に動かした事を黙っていたの！？」

昴「・・・それは・・・。」

詠「どうせボクがしくじると思っていたからそうしたんでしょ！？
こんなのボクへの侮辱以外の何でもないわ！」

昴「違う！俺はそんなつもりは・・・。」

詠「信じられないわ！ボクの軍師としての誇りを踏みにじって、あんたなんか、あんたなんか！・・・違う。」

昴「えっ？」

詠「あんたは何も悪くない。」

昴「・・・詠？」

詠「あんたは何も悪くない。あんたは当然の事をしただけ。悪いのは全部ボクだ。過信して、相手を侮ったボク自身……。」

昴「……。」

詠「……許せなかった。」

昴「え？」

詠「許せなかった！昴の信頼に答えられなかったボク自身が！そして……怖かった。」

ボクの両目から涙が溢れる。

詠「怖かった……。ボクは……月みたいにメイドが務められわけじゃない！もし、軍師としても昴の役に立たなかったら……。怖かった。昴に……お前なんかいらなくて言われるのが怖かったのよ……。」

涙を拭つても拭つてもどんどん溢れてくる。

詠「ごめんなさい……ごめんなさい……。」

ボクは昴に謝り続けた。

昴「……馬鹿だなあ。」

昴はそんなボクを抱きしめた。

詠「えっ？」

昴「詠がいらんなんて、そんな事あるわけないだろ？」

昴はボクを抱き締めて、ボクの頭を撫でた。

昴「先の戦。詠がいたから俺達は大した被害も出ずに戦に勝利出来たんだ。裏をかかれたことに関しても、あんなの誰であつても予見出来なかつたよ。それは朱里や雛里。他国の優秀な軍師。もちろん俺だつて。」

詠「昴・・・。」

昴「それにな、俺は軍師としての詠でなくなつても、メイドとしての詠でなくなつても、例え、ただの詠でも、俺は詠の事を捨てたりはしない。」

詠「！？、ホントに？」

昴「ああ。詠が俺や、俺達の国や、皆に愛想が尽きたわけでないのなら、ずっと俺達の所にいてくれ。」

詠「昴・・・！」

またボクの瞳から涙が溢れた。

昴「誰一人欠けちゃ駄目なんだ。だから詠。俺達の所に帰つて来てくれ。」

詠「・・・ありがとう・・・。ありがとう・・・。」

ボクは昴の胸に顔を押し付け、ありがとうと言いつづけた。

昴 side

詠はその後、俺達の所へ帰ってきた。

その日の夜、俺は城に戻ったのだが、勝手に城を抜け出した為、桃香や愛紗にもものすごく怒られたが、詠や星がとりなしてくれたため、すぐに解放された。翌日、早朝に起きて政務に勤しんでいるのだが、

昴「はあ、1日仕事サボれば仕事貯まるよな。」

月から事情を聞いた朱里と雛里がある程度俺の分をやってくれていたとはいえ、当然、俺自身が判断を下さないといけない案件は残っているわけで。

昴「ちやつちやつと終わらせるか・・。」

・
・
・
・
・
・
・

昴「・・（カキカキカキカキ・・。）」

無言で政務を続ける。

昴「・・・ふう。」

ようやく一段落ついた。

昴「・・（グウ〜）」

腹減ったな。

時刻はちょうど昼飯時だ。

昴「何か食いに行くか。」

俺が席を立とうとすると、

詠「は、入るわよ。」

詠が俺の部屋に入ってきた。

詠「食事を持ってきたわ。」

昴「詠が？」

いつもは月が持ってくるから思わず尋ねた。

詠「何よ、悪い？」

昴「いや、構わないけど・・・。」

詠が卓に次々と料理を並べる。

昴「・・・。」

俺は少し違和感を覚えた。いつもの月が作ってくれる料理と比べ、少し具の形が悪かったりしているからだ。ふと詠の手を覗くと、その手には傷痕があった。

昴「なあ、この料理は詠が作ったのか？」

詠「そ、そうよ、悪い？嫌なら食べなくて良いわよ。」

昴「そうは言ってないだろ？いただくよ。」

俺は手を合わせ、料理に手を付ける。

昴「モグモグ・・・おっ、美味しいな。」

詠「ほ、ホントに?」

昴「ああ。火加減も柔らかさ程よくと美味しいよ。」

形は少し悪いけど。俺は別の料理もいただいたがどれも美味しかった。やがて全て食べ終わり。

昴「ごちそうさま。」

詠「・・・お粗末様。」

詠は食べ終えた食器を纏め、お茶を淹れ、渡してくれた。

昴「ありがとう。」

礼を言い。お茶をいただいた。

詠「政務、大変なの?」

昴「そうでもないよ。今日中には終わるよ。」

詠「そう・・・。ならボクは・・・ってアンタ、ご飯粒が付いてるわよ?」

昴「ん?何処だ?」

俺は口元に手を当てる。

詠「違うわよ、もう少し左よ。」

昴「えっ？何処だよ。」

俺はご飯粒を取ろうとするがなかなか見つからない。

詠「だから・・・ああもうしょうがないわね!」

詠が俺に近づき・・・。

チュッ。

昴「えっ!?!」

詠が俺に口付けをした。

詠「／＼、あ、アンタは仮にも主なんだから、口元にご飯粒を付けっぱなしじゃ格好が付かないでしょ！・・ならボクは忙しいから行くわ。」

詠は食器をまとめたおぼんを持って出ていく。扉の手前で、

詠「・・昨日、アンタが軍師としてのボクでなくなっても、メイドとしてのボクでなくなっても、例えただのボクになっても見捨てないって言うってくれてすごく嬉しかった。でもボクはその言葉に甘えるつもりはない。軍師としてのボクをもっと磨いてあんたを支えてあげる。メイドとしてのボクをもっと磨いてあんたに尽くしてあげる。そして、女としてのボクをもっと磨いてあんたを貫いてやるんだから。」

昴「詠・・。」

詠「ふ、ふん／＼それだけよ！」

詠はそう言い残し、部屋を後にした。

昴と詠の間に出来た亀裂は新たに生まれた絆と愛で埋まったのだった。

続く

第59話〜軍師としての自分、メイドとしての自分〜（後書き）

詠らしさをうまく表現出来たらなと思います。気が付いたらこんなポリウムになってびっくりしました。

話は変わって、たくさんアンケートのご協力ありがとうございました。まさかこれほどのアンケートが来るとは思いませんでした。後はこの小説をご覧の方々が満足していただけるような話を書くこと、クリスマスまでに間に合うように精進致します！

感想、アドバイス、お待ちしております。

それではまた！

番外編〜80万PV突破記念、クリスマスの約束〜（前書き）

投稿します！

間に合いました（^ー^；）

ポリュームは満天ですが、上手く書けたかは分かりません。改めてアンケートのご協力、ありがとうございました。結果は本文でご確認下さい。

ここで注意書として、今回の話は番外編のため、いくつか注意点があります。

・舞台は聖フランチェス学園ですが、作者は春恋十乙女をほとんど知らないため、かなり独自設定が入ります。

・春恋十乙女のヒロインキャラは一切出ません。

・北郷一刀も出ません。

・恋姫十無双のキャラも、1話完結のため、メインヒロイン以外は出番が僅かだったり、名前だけや、名前すら出ないキャラもいます。

・キャラの名前ですが、真名を名前とし、名字はそのキャラの元々、姓、名、字からもじって作者が勝手に付けました。

・この話独自の設定があるため、くどく捕捉説明が入ります。

・試験も兼ねて、台本書きを止めています。

・ 駄文

以上の事を踏まえて読んで下さい。

それではどうぞ！

番外編 80万PV突破記念、クリスマスの約束

「くっそー!」

「だいじょうぶ?」

心配そうに女の子が少年の顔を覗く。

「ごめんね、わたしのせいで。。。」

「・・・グスッ。」

「だいじょうぶ?どこかいたいの?」

「いたいからないてるんじゃない。くやしいんだ。ぼくがもっとつよければまもれたのに!」

「すばるくん。。。」

「まってて。ぼく、つよくなる!もっともつとつよくなって ちやんをまもってあげる!」

「すばるくん・・・うん、ありがとう。・・・だいすき、すばるくん!」

「 なさい！」

「 うっっん。」

うっん、眠い。。。

「 っのっ… きる！」

うるさいな。。。

「 起きろって、言ってるでしょ！」

グシャ！！！！

「 がはっ！」

顔に激痛があ！

「 つっつてえな。。。」

少しずつ覚醒していく。

「目が覚めたかしら？」

「・・・毎度毎度言ってるけどよ、もっと優しく起こせないのかよ」

「 桂花。」

自己紹介だ。俺は御剣昴。聖フランチェスカ学園に通う2年生だ。そしてもう1人。今正に俺の顔面を足蹴にしているのが文月桂花。幼い頃からの付き合いで世間一般的な言い方で言う所の幼なじみだ。幼なじみって言葉を聞くと皆甘々な関係を想像するだろうがこいつにはそれは当てはまらない。顔合わせりや罵詈雑言浴びせられるし、殴る蹴るなんざ日常茶飯事だからな。

「ふん！わざわざ起こしに来ただけでもありがたいと思いなさい。
ホントは男の部屋に来るなんて考えるだけでもおぞましいんだから。」

「じゃあ来なきゃ良いだろ……。俺は別に1人でも……。」

「そう言っつていつも遅刻ギリギリで教室に駆け込んで来るのは誰かしら？私にはあんたのお母様に頼まれたから仕方なく起こしに来てるだけよ。でなきゃ誰があんたなんか……。ホント、お礼の1つでも欲しいわね。」

「ハイハイ。それはそれはご親切にありがとうございます。ありがとうございます。ありがとうございます。ありがとうございます。」

桂花は今俺のベッドの上に乗って、俺の顔を足蹴にしている。つまりベッドに寝ている俺からは下着が丸見えなわけで。今も桂花の薄いピンクの下着がスカートの裾から覗いている。

「っ／＼」

桂花が慌ててスカートを押さえ、下着を隠す。

「っの……。っ」

桂花が足を振り上げ、

「痴漢！変態！全身精液男！」

グシャ！！！！

「ものには限度があるだろ……。」

俺はズキズキ痛む顔を擦りながら文句を言った。

「ふん、自業自得よ！」

その後、激痛に耐えながら身仕度を済ませ、現在学校へと登校している。

「起こしに来た奴が眠らせてどうするんだよ。」

「いつそのこと一生寝てれば良いのに。」

「はぁ……。」

冗談の通じない奴だ。

桂花は基本的に毎日起こしに来てくれるけどとにかく起こし方が荒

い。こうやって足蹴にするのはいつもの事で、酷い時はバケツに水を目一杯入れてぶっかけられた事もあった。それに比べりゃ今日のはまだマシな方だが・・・。

「あんだ、今日も部活なの？」

「ん？まあな。」

俺は剣道部に所属している。俺はこの学校にはスポーツ特待生で入学したので、部活参加は必須だ。最も、そんな縛りが無くとも参加するが・・・。

「今日は終業式だつて言うのにご苦勞な事ね。・・・あ、明日は？」

「明日？そつだな・・・。」

明日は剣道部は休み何だよな。今の所特に予定はない。自主練でもしようかなつて考えていた。

「も、もしも暇なら私と・・・。」

桂花が俺に何か伝えようとしたその時、

「おはようさん、昴。」

乱入者が現れた。

「ん？おす、及川。」

こいつは同じクラスで入学してからの悪友の及川佑だ。基本的にこ

の学校は男の数が圧倒的に少ない。元々は女子校で俺達の代から共学になったからだ。数が少ないからおのずと連帯感が生まれる。

「なんや、今日も夫婦仲良く登校か？」

「誰が夫婦だ（よ）！」

「息ピッタリやないか。」

「ぐっ！」

返す言葉がない。

「今日で学校も終いや。そんで明日は待ちに待ったクリスマスや。今から楽しみやわ。」

「どうせ相手いないだろ、お前。」

「アホ抜かせ！時間はまだまだある！絶対相手見つけるで！」

「ハイハイ。お前に幸あれ。」

親指隠してお祈り。

「親指隠すな！・・・ほんで、昴はどうすんの？」

「俺か？俺は・・・特に予定ないな。」

「なんや、昴も独り身かいな。」

「一緒にするな。」

「それにしてもつまらんのう。昴ならその気になれば相手なんかよ
りどりみどりやん？全く俺がただけ昴のラブレター破り捨てたか
。。。」

「ゲスかお前は。別に、付き合う気にならないだけだ。」

「ホンマか？昴前に言うてたやん。背が高くてスタイルが良い女
が好みやて。」

「そりゃ女はスタイル良いのに限るだろ。」

チラツと桂花を見る。

貧乳、小柄。

「現実は無情だな。。。」

俺は自嘲気味に呟いた。

「・・・#」

桂花はワナワナと身体を震わせる。

「死ね！」

バキッ！

おもいつきり足の先をふんずけやがった。

「痛あ！」

あまりの激痛にその場をピョンピョン跳び跳ねる。

「ふん！」

桂花はプンスカしながら先に校舎へと歩いていった。

「相変わらず仲がええな。」

「お前は一度眼科に行け！」

「昴、はよせんと遅刻するでー。」

及川は俺をほっぼって先に行く。

「ちよっ、待てって！」

俺は痛む足を引きずりながら後を追う。

「背が高くてスタイルが良い女の子か。」

正直、そんなのどうでも良いけどな。

やがて学校に着き、自分のクラスへと向かう。

「ふん！」

桂花は俺を見るなりそっぽを向く。

「はぁ。。。」

まだ怒ってんのか・・・。

「おはようございます、師匠。」

「おはよう、凧。師匠も敬語も止めるって言っただろ？」

「うっ・・・すみま、すまん、昴。」

俺に挨拶をしてきたのは進藤凧。同じクラスの同級生だ。

「相変わらずだな、凧は。俺はもう空手部じゃないんだぜ？」

俺は入学当初、剣道部と空手部を掛け持ちをしていた。中学時代に剣道空手共に無敗で全国を制した事があり、その実績のおかげでこの高校に特待生として入学出来たわけだ。凧とは空手部で出会い、そこで実力を披露したら凧に慕われ、同級生ながら師匠と呼ばれる

ようになった。今は剣道一本だ。理由は高校入って最初大会の全国個人決勝。俺はその時の対戦相手の不破刃という男の圧倒的な強さに敗北した。それが悔しくて雪辱を果たす為に剣道一本に絞った。凧にはかなり惜しまれたが。

「凧も部長なんだからいい加減俺離れしろって。」

「むう……。昴の方が部長として相応しいと思うのだが……。」

「悪いな。俺は不破刃に勝つまでは空手部には戻らない。悪いな。」

「そう言われたらこれ以上は何も言えないな。次の大会で雪辱が果たせるように応援するぞ。」

「ああ。次こそは勝つよ。」

敗北した次の大会は善戦するも敗北。さらに次の大会は時間いっぱい戦い、結果判定負けを喫した。しかし確実に互角に戦える所まで来ているので、次こそは絶対に勝つ！

「と、ところで、話は変わるが、明日は暇か？」

「明日か？・・・特に予定はないかな？」

「そうか！良ければ明日私と……。」

凧が俺に何か伝えようとしていると、

「あ、あなた達！」

突如桂花が話に割り込む。

「ん？どうした桂花？」

「あ、その・・・えつと・・・ほ、ほら、もう先生来てるわよ！早く席に着きなさいよ！」

ふと見ると、既に教壇には俺達のクラスの担任である黄瀬紫苑先生が立っていた。

「ほら、あなた達、早く席に着かないとHRが始められないわ。」

「ととっ、悪い風。話は後でな。」

「あ・・・むう・・・」

俺達は席に着いた。

HRが終わり、その後すぐに終業式が行われ、またHRを行い、その日は学校は終了した。時刻はお昼。昼食を取りたいがあいにく、朝があんな感じだったため、当然弁当を用意する時間はなかった。

「購買に行くか・・・。」

席を立とうとすると、

「ん。」

「桂花？」

ふと見ると、桂花が俺に弁当箱を差し出した。

「用意してくれてたのか？」

「はあ！？そんなわけないでしょ。昨日の夕食と朝の残飯よ。捨てるのもつたいないから詰めてきただけよ！」

「そうなのか？何にせよ助かったよ。ありがとう。」

「ふ、ふん／＼」

桂花から弁当箱を受け取った。俺が弁当箱を開けようとする時、

「ちょっといいかしら？」

「？」

「あ、紫苑先生。」

「昴君今日日直だったわよね？頼みたい事があるんだけど良いかしら？」

「頼みたい事ですか？」

「大した用ではないの。図書室から資料を運ぶのだけど、量が少し多いから手伝ってほしいのよ。そんなに時間は取らせないわ。」
なるほど。

「良いですよ。それぐらいなら。」

「そう言ってもらえると助かるわ。では行きましょう。」

俺は席を立つ。図書室に向かうとすると、

「えっ!？」

紫苑先生が俺の腕に自分の腕を絡ませた。

「あら、どうかしたのかしら？」

「いや、その、当たって・・・。」

俺がドキマギしながら言うと、紫苑先生は絡める腕の力を強め、さらに俺の耳に顔を近づけ、

「当たってるのよ・・・。」

「っ／＼」

ボソツと耳元で告げた。甘い吐息が耳に当たる。

「せ、先生！」

唐突に桂花が叫ぶ。その声に反応して紫苑先生は俺から身体を離す。

「か、仮にも教師が、生徒を、・・誘惑みたいなことをするのは・・その・・。」

桂花は言葉を詰まらせながら紫苑先生に注意を促す。

「うふふ。心配しないで桂花ちゃん。心配しなくても昴君を取ったりはしないわ。」

「!?!、べ、別にそんな事・・。」

「ふふっ、可愛いわね。それでは昴君、行きましょう。」

「あ、はい。」

良く分からんがとにかく助かったな。

「ありがとう。助かったわ。」

「いえ、お構い無く。それでは。」

俺は紫苑先生の手伝いを終えて教室へと向かった。その道中、

「ん？あれは・・・。」

前方に見知った顔が。辺りをキョロキョロしている。何か探しているのか？

「こんにちは。」

「ん？ああ、昂か。」

「どうかしましたか？冥琳先輩。」

彼女は周東冥琳先輩。1個上の先輩で入学以来常に学年1位を取り続けている秀才だ。

「何、人探しだ。」

「人探し？・・・ああ、生徒会長さんね。」

「正確には元、だがな。」

「見かけたら捕まえ時ますよ。」

「頼む。首輪を付けてでも捕まえておいてくれ。」

冥琳先輩はそう告げると再び探しに行った。

「・・・行きましたよ。」

「あは、ありがと、昂。」

「今度は何から逃げ出したんですか？雪蓮先輩。」

彼女は我孫子雪蓮先輩。1個上の先輩で、冥琳先輩の幼なじみであり、ついでに剣道部の部長でもある。

「生徒会業務の引き継ぎ。だって、面倒なんだもん。」

「全く、雪蓮先輩は相変わらずですね。」

この人、カリスマ性はあるし、剣道の腕前も全国で5本の指に入る強者なんだけど、生徒会業務を冥琳先輩に押し付けて良く逃げ出したりする。俺も良く部長業務を押し付けられたし。授業もサボるか寝てるかの2択だ。それなのに何故か学年の成績は常に20位以内にいる。何でもテスト前日に『これ出そう』って言ってヤマ張って一夜漬けで覚えたところがほとんど出るらしい。

「いや、生徒会の引き継ぎ業務はしっかりやりましょうよ。蓮華が困りますよ?」

蓮華とは雪蓮先輩の妹で、隣のクラスのクラス委員でもある。他にも初等部に小蓮という妹がいる。

「ぶー。だつてさ、あたしの後の生徒会長はてつきり昴か蓮華がなるものだつて思ってたんだもん。」

「いや生徒会長になつたでしようが。」

「・・・他にも2人いるじゃない。」

「まあそうですけど・・・。」

今年の会長選挙は立候補者が3人で、内1人が蓮華だ。選挙当日、開票をしたらその3人が見事同数で、これでは決選投票も出来ない。結果、3人の生徒会長。いわゆるトロイカ方式を取る事になった。3人供个性的で考え方も違つがそれぞれがそれぞれ足りないものを持っているので、仲良くさえすれば上手く機能するだろう。

「でも、昴が出ればきつと生徒会長になれたわよ。何で辞退したの？」

「柄じゃないですし、剣道の鍛練の時間を取られなくなつたんですよ。あいつに勝つにはとにかく時間が惜しいですし。」

「ふーん。ま、その気持ちはあたしも良く分かるわね。」

雪蓮先輩は目を瞑つて同調した。雪蓮先輩は普段は先に述べたようにいい加減だが、部活だけは欠かさず出る。理由は、剣道の男子の部に不破刃という化け物があるなら女子の部にも化け物がある。名

前は確か・・・布袋恋だっけな？俺と同じ年で、その強さは飛び抜けており、未だに公式戦無敗らしい。雪蓮先輩は過去に2度試合をして2度供敗れている。年明けに雪蓮先輩にとって最後の公式戦が控えており、それが最後の試合になる。

「お互い次こそは勝利したいわね。・・・ところで、今日は部活に出る？」

「はい。もちろんです。」

「やった 今日も昴と試合できるわ」

雪蓮先輩が俺に抱きつく。

ううゝ、胸がノノ

「そうですね。」

俺はそう言って同じく抱きしめる。

「あら 今日は積極的ね？」

「約束ですからね。」

「約束？」

「雪蓮先輩を見つけたら捕まえといてくれて。」

雪蓮先輩が振り返るとそこには鬼のような形相を冥琳先輩の姿が。

「げっ！冥琳……」

「しえ〜れ〜ん、やっと見つけたわ。」

「あはっ、冥琳。そんな怖い顔しないで。すぐに行くつもり……痛い痛い！」

問答無用で冥琳先輩が雪蓮先輩の耳を引っ張り、連行していく。

「ちよつと、冥琳！痛い、痛いってば！そんなにしなくても行くから！昴からも何か言っつてよ！」

「ま、腹をくくりましょう。雪蓮先輩。」

「礼を言うぞ昴。では行くぞ雪蓮。」

冥琳先輩は雪蓮先輩を引きずりながら生徒会室へと連行していく。

「もう〜！昴の薄情もの〜！」

「自業自得です。」

俺は2人を見送った後再び自分の教室へと向かった。

やがて空腹を感じながら歩き、教室へ入ろうとすると、1人の女の子が声を掛けた。

「あら、昴じゃない。」

「よう、華琳。」

彼女は曹馬華琳。別のクラスの同級生で先程が説明した生徒会長の1人だ。

「貴様！華琳様に馴れ馴れしいぞ！」

「姉者。我らは同級生だ。」

そして華琳に付き従うこの2人が夏護春蘭、秋蘭の双子姉妹だ。まず曹馬華琳だが、彼女は世界でも有数の大企業、曹馬グループの会長の孫娘で、言うなればお嬢様だ。しかもその名に恥じない人物で、テストの成績は常に上位で、それだけでではなく、運動神経も良く、拳げ句の果てには料理の腕も一級品という、正にスーパーお嬢様だ。彼女自身の実力に裏打ちされた尊大な態度や行動力により、学内の人気も高い。

次に夏護姉妹、まずは春蘭から。こいつも同級生で華琳のボディガードでもある。同じ剣道部に所属しており、実力は雪蓮先輩と互

角に戦える部内の数少ない1人だ。一度剣道部でコテンパンにしたら目の敵にされてしまった。こいつは実力はあるが挑発するとすぐに頭に血を上らせるっていう弱点があるので、今のところ無敗だ。次に秋蘭。彼女も同じく同級生でボディガード、春蘭の双子の姉妹だ。姉とは対照的に落ち着いた正確でクールだ。彼女は弓道部のエースで公式戦で中学生の時から的一矢も外したことはないという公式記録を持つ人物だ。他にもライフルによる狙撃や拳銃の腕も一級品らしい。

本来なら俺みたいない一般人なんかとは関わりのない人物なのだが、出会ったきっかけは、華琳がたまたま夏護姉妹がいない時を狙われ、誘拐された時にたまたま俺がその場に出くわし、助けた事がきっかけだ。後で分かった事だがこの誘拐劇は曹馬グループのライバル企業である袁藤グループの差し金だったらしく、この事が明るみになり、袁藤グループは失脚したらしいが。以上が華琳との出会いだ。

「元気そうね。」

「華琳こそ。生徒会業務の引き継ぎは終わったのか？」

「前生徒会長がなかなか来ないから帰ってきたわ。元々頭には既に入ってるから不要だしね。我孫子と劉崎がいれば充分でしょ。」

「なるほど。」

「ところで、話は変わるけど、昴。あなたは来年は3年生。進路は決めたのかしら？」

「進路か。・・・まだ特に決めてないな。」

いろいろとやりたい事はあるがまだ1つに絞っていない。

「そう。ならお祖父様のグループの企業に来る？あなたは成績も要領も良いし、機転も利く。入社する資格は充分よ？」

「うーん……。」

曹馬グループの採用する人材は極めて変わっており、一流大学の卒業生でも無能なら落ち、逆に有能なら中卒でも採用する。企業必要な人材だけを採用する。故に大企業なのだろう。

「ならいつそのこと私のボディーガード兼秘書でも良いわよ？」

「か、華琳様！ボディーガードも秘書も我々だけで充分です！こんな男など……。」

「おや、姉者は昴の事を骨のある奴だと言っていたではないか。」

「しゅ、秋蘭、言っな〜／＼」

「？」

なんだ？

「明日、お祖父様やお父様が帰ってくるの。良かったら話を聞きに来てはどう？2人供会いたがっていたわ。」

「うーん。」

俺は一度華琳を助けた礼に華琳の家に招待されているんだが、常識

はずれのでかい家だった。門から屋敷までえらい距離あるし、屋敷内はメイド隊が盛大にお出迎えをする。正直住む世界が違う。そういえばあの時お世話してくれた月や詠は元気かな。

「お祖父様の企業はいずれ私が継ぐことになるわ。あなたなら私の良い右腕になると思うのだけど？・・・いつそのことあなたに嫁いであなたが企業を継いでも・・・（ボソツ）。」

「ん？最後の方良く聞こえなかったんだが。」

「な、何でもないわ／＼、明日、暇なら私の家に・・・。」

「ちよつと、昂！いつまで私を待たせる気なの！いい加減・・・あ、華琳様！」

突如桂花が乱入する。華琳様・・・そっぴや桂花は華琳信者の1人だったな。華琳は学内でも人気は高い。ファンクラブが出来るくらいに高い。会員番号1番にして会長が確か桂花だったな。

「・・・桂花。私の話を邪魔をするなんていい度胸ね。これはお仕置が必要かしら？」

「ひう！か、華琳様〜。」

「くそ〜、上手い事持っていきおって！」

「うるさい脳筋！」

「何だと！！」

桂花と春蘭は相変わらず仲が悪いな。

「まあ良いわ。話はまた後で。桂花。ついていらっしやい。」

「は、はい」

嬉しそうだな。

「昴、今日は部活に出るのだろう？ならば私と勝負しろ！」

「姉者は今日は追試だ。」

「そんなものはどうでも良い！」

良くはないだろ。っていうかこいつまた赤点取ったのか。

「春蘭。あなたまた赤点を取ったの？」

「!？、それは・・・。」

「どうやらあなたにもお仕置が必要みたいね。良いわ。あなたも一緒に来なさい。」

「は、はい」

嬉しそうだな、おい。

「では昴。またね。」

「ああ。またな。」

華琳達は桂花を連れて何処かへ行った。

「さてと、飯にするか。」

俺は机に乗っかっていた弁当をいただいた。うん、なかなか美味かったな。

ジャー！

「・・・んぐつ、んぐつ・・・ふう。」

昼食後、俺は部活に向かった。準備運動の後、素振りをしていると、雪蓮先輩がやって来て（結局逃げてきた）10本勝負をした。結果は7勝3敗。その後、追試を終えた春蘭とも10本勝負をした。結果は全勝。良い鍛錬にはなったけどめっちゃめっちゃ疲れた。今は休憩中だ。俺は剣道場の外の水道で顔を洗っている。

「ええつと。」

持ってきたタオルを手探りで探していると、

「はい。」

「ん？ありがとうございます。」

タオルを受け取り、顔を拭う。拭い終わって目を開けると、

「何だ、桂花か。」

「何よ、悪い？」

「別に、お仕置きは終わったのか？」

「あ、あんたには関係ないでしょ／＼」

「それもそうだな。・・・何か用か？」

「用と言うか・・・。」

「？」

何故か桂花はもじもじしている。

「トイレか？」

「そんなわけないでしょ！この変態！」

「冗談だよ。・・・何か言いたい事があるんだろ？」

「どうしてよ・・・。」

「何年一緒にいると思ってるんだ？それくらい分かるよ。」

「一緒・・・。ふふっ。」

今少し笑ったか？

「あんだ、明日の予定は？」

「明日は部活もないから特に予定もないかな。」

「そ、そう。・・・だったら私と・・・。」

桂花が何かを告げようとしたその時、

「すゝばる」

「うお！雪蓮先輩？」

「っ！？」

雪蓮先輩が後ろから抱きついてきた。

「春蘭と10本勝負してたんじゃないんですか？」

「もう終わったわ。5対5の引き分けだったわ。昴よく春蘭相手に全勝したわね。」

「あいつ短気ですからね。」

「ねえ鼻。明日暇？」

「まあ、部活ないですから暇ですね。」

「だったら私と街に行かない」

「!？」

「2人ですか？」

「そうよ。それで、夜は私の家でパーティーするから一緒に盛り上がりましょう。蓮華やシャオもいるし、他にもたくさん来るわよ」

「へえー。」

それは楽しそうだな。俺はどうするか考えていると、

「桂花？」

ふと見ると、桂花が何処かへと行くところとしている。

「帰る。」

「何か俺に用があったんじゃないのか？」

「もう……いいわよ。」

「どうしたんだよ？」

「精々我孫子先輩と楽しんでくれば？」

そう言い残して桂花は走り去った。

「何だあいつ。」

「・・・ふーん。」

「どうかしましたか？」

「何でもないわ。それで、どうする？」

「・・・すみません、せつかくですが、遠慮しておきます。」

「そう、残念ね。・・・いいわ。」

雪蓮先輩は再び剣道場に戻っていった。

「・・・そういや、明日はイブだったな。」

今日は12月23日だからな。

『来年は絶対に行くんだからね。』

「!?!?・・・何だ今の？」

今何か頭に・・・駄目だ思い出せない。

俺は思い出す事を止め、剣道場に戻った。

やがて部活も終わり、街に晩御飯の買い物に行くことにした。

「さてと、今日は何にするかな・・・。」

献立を考えていると、

「兄ちゃん!」

「兄様!」

「おつ、季衣に琉流か。」

正面から近くの小学校に通っている季衣に琉流がやって来た。

「お買い物ですか?」

「ああ。晩御飯の買い物だ。」

「そうでしたか。」

「ねえ兄ちゃん。僕達これから街の中央にあるクリスマスツリー見に行くんだ。兄ちゃんも一緒に行かない?」

「ツリー・・・ああ。あれか。」

毎年飾られるあれか。

「季衣。兄様も忙しいだろうから・・・。」

「ええー、兄ちゃんも一緒に行こうよー。」

「ツリーか。・・・ツリー・・・。」

あれ、今何か・・・。

「兄ちゃん？」

「兄様？」

「ああいや、悪いな。俺、この後用事があるんだ。」

「そうなんだ。残念だなあ。」

「季衣。仕方ないよ。すみません。引き止めてしまっって。」

「何、気にするな。」

「じゃあ僕達行くね。」

「そうか。」

「それでは失礼します。兄様。」

2人は街の中央に走っていった。

「最近の子供は元気だな。」

微笑ましい限りだ。それにしても、

「何か頭に引っ掛かっているんだよな。」

部活の時から何か引っ掛かっている。何だろう。何か分からないけど、俺は早く思い出さなきゃいけない。それだけは何故か分かった。何だっけ・・・引っ掛かっているのはツリーと約束・・・!?、そうだ、思い出した。だから桂花の様子がおかしかったのか。約束・・・去年、俺と2人で交わした大切な約束があった。それなのに俺は思い出さずに雪蓮先輩の招待を受けようとして、

「そりゃ怒るよな・・・。」

でもギリギリで思い出す事ができた。だから許してくれよ。俺はすぐさま走り出した。
行き先は

桂花 side

時は遡り、終業式の朝、

「
」

私は今お弁当を作っている。私の分と、それと・・・あいつの分。

「ふん。ついでなんだからね」

箸箸で唐揚げをつつきながら1人呷く。

「明日はイブか。あいつ、約束覚えてるかな。」

約束。去年のクリスマス。私は高熱を出してベッドの上で過ごす羽目になった。そのせいで街の中央広場のクリスマスツリーを見に行くことが出来なかった。それが悔しくて、身体に鞭を打つても行こうとしたら鼻に止められた。私が意地でも行こうとしたら鼻は言った。

『来年2人で見に行こうぜ。』

だから私は我慢した。とても嬉しかったから。

「覚えてるかなあいつ。」

覚えてなかったら承知しないんだから。

「出来た。・・・うん、味も悪くない。」

私は次々に弁当箱に詰めていく。

「さてと、あの馬鹿を叩き起こしに行こうかしら。」

私は鞆に弁当箱を入れて寮を出た。

「スー……スー……」

あいつの寮の部屋に入ると、昴はグースカ寝ていた。

「人が早起したってのにいい度胸ね。」

全く、いいご身分ね。

「ほら、起きなさい！」

「う……ん……」

一向に起きようとしなない。

「こいつは……」

依然として昴はスヤスヤ寝ている。

「あ……。」

気が付くと私は昴の顔の間近にまで自分の顔を近づけていた。

「わざわざ起こしに来たのよ。これくらいはいいでしょ？」

私は両目を閉じて少しずつ顔を近づける。私と昴の距離が0になる瞬間、

「うつん・・・雪蓮先輩・・・」

ピキッ#

「楽しい夢を見てるようね。今すぐ現実に引き戻してやるわ。起きなさい！」

大きく体を揺する。

「う・・・ん。」

「この・・・起きろー！」

一向に起きる気配はない。いい度胸ね。

「起きろって、言ってるでしょー！」

グシヤー！！！！

「がはっー！」

顔をおもいつきり踏みつけた。昴は激痛のあまりのたうちまわる。いい気味よ。その後もぶつくさ文句ばかり言ってくる。

「ハイハイ。それはそれはご親切にありがとうございます。ありがとうございます。とうついでにそんなところに突っ立っていると見えるぞ?」

「っ／＼」

私は慌ててスカート裾を押さえる。

「この・・・」

私は足を振り上げ。

「変態!痴漢!全身精液男!」

私はおもいつきり足を振り下ろした。

グシャ!!!

「ギャハッ!」

昴は顔面を押さえてのたうちまわった。

ほんと、男って最低よ!全く、こんな事ならもっと可愛い下着穿いて・・・って、何でこんな事思わなきゃ行けないのよ!

私はもう一度足を顔に振り下ろした。

その後、一緒に登校し、その道中、明日の事を切り出そうしたらあの馬鹿（及川）に邪魔されてしまった。私は先に教室へと向かい、待っている、程なくして昴も来た。てっきりすぐに私の所に来ると思ったら、空手部の凧と話し込んでしまった。もう・・・イライラするわね。

内容が気になり、こっそり聞き耳を立てると。

「と、ところで、話は変わるが、明日は暇か？」

「っ!？」

何よ・・・、明日の予定を聞いてどうするの？。

「明日か?・・・特に予定はないかな？」

昴が答える。

「そうか!ならば私と・・・。」

駄目・・・。明日は私と行くんだから・・・。だから駄目!

「あ、あなた達！」

咄嗟に話に割り込んでしまった。

「ん？どうした桂花？」

どうしよう……。何か言わなきゃ。

「あ、その……。えっと……。ほ、ほら、もう先生来てるわよ！早く席に着きなさいよ！」

私はふと目に入った黄瀬先生が目に入り、それを利用してその場を誤魔化した。2人はそれを聞いて席に着いた。

良かった、何とか止めることが出来たわ。

私は秘かに安堵した。

その後、終業式が終わり、昴の方を見ると、何か考えている。きっと昼食をどうするか考えているんだわ。

私は鞆から弁当箱を取りだし、

「ん。」

昴に渡した。

「桂花？」

昴がお弁当と私を見つめ、

「用意してくれてたのか？」

「はあ！？そんなわけないでしょ。昨日の夕食と朝の残飯よ。捨てるのがもつたいたいから詰めてきただけよ！」

「そうなのか？何にせよ助かったよ。ありがとう。」

「ふ、ふん／＼」

ありがとう、か。昴のそうやって素直にお礼を言うところが・・・。

「ちょっといいかしら？」

「？」

「あ、紫苑先生。」

「昴君今日日直だったわよね？頼みたいことがあるんだけど良いかしら？」

「頼みたいことですか？」

「大した用ではないの。図書室から資料を運ぶのだけど、量が少し多いから手伝ってほしいのよ。そんなに時間は取らせないわ。」

「良いですよ。それぐらいなら。」

ちよつと、それぐらい断りなさいよ！ホントお人好しなんだから。昴が席を立って図書室に向かおうとした時、

「えっ!?!」

なっ!?!

紫苑先生が昴の腕に自分の腕を絡ませた。

「あら、どうかしたのかしら？」

「いや、その、当たって・・・。」

激しく動揺する昴。それを見て紫苑先生は昴の耳元に顔を近づけ、

「・・・(ボソッ)」

「っ／＼」

何かを囁き、昴さらに顔を赤らめた。

あんの年増あ!!

「せ、先生!」

私は席から立ち、

「か、仮にも教師が、生徒を、．．誘惑みたいなことをするのは．．その．．。」

とにかく離させないと．．ああもう！上手く言葉に出来ないわ！

そんな私を見て、紫苑先生が昴から腕を離し、私の顔を見て笑みを浮かべ、

「うふふ、心配しないで桂花ちゃん。心配しなくても昴君を取ったりはしないわ。」

「！？、べ、別にそんな事．．。」

動揺した私の様子を確認すると、

「ふふつ、可愛いわね。それでは昴君、行きましょう。」

「あ、はい。」

昴と紫苑先生は図書室へと向かっていった。

くっ！からかわれたわ！

私は苦虫を噛んだ顔で2人を見送った。

昴が行ってから30分は経った。遅いわ。図書室から資料を運ぶのにどれだけ時間かかっているのよ！やっぱりあの年増・・・様子を見に行こうかしら・・・って、何で私がそんなこと！・・・別にあいつが何処で何しようとか関係ないわ！

それから5分程経つと、ようやく昴が帰って来た。全く、どれだけ私を待たせるのよ・・・って、また話し込んでる！もういい加減我慢の限界だわ。

「ちょっと、昴！いつまで私を待たせる気なの！いい加減に・・・あ、華琳様！」

どうして華琳様がここに！？

「・・・桂花？私の話の邪魔をするなんていい度胸ね。これはお仕置が必要かしら？」

「ひう！か、華琳様〜。」

華琳様の鋭い視線が私に・・・ああ、その視線が・・・。

「まあ良いわ。話はまた後で。桂花。ついていらっしやい。」

「は、はい。」

私は華琳様に連れられ、その後、時間を忘れる程の言葉責めとスパンキングを戴いたわ。はあく、華琳様〜

気が付けば、時刻は午後の4時を過ぎていて、日も落ちかけていた。

「もうこんな時間。」

あいつ、まだ剣道場かしら？

剣道場の近くに行くと、昴が水道で顔を洗っていた。私は傍に置いてあったタオルを昴に渡した。

「はい。」

「ん？ありがとうございます。」

昴がタオルを受け取り、顔を拭う。

「何だ、桂花か。」

「何よ、悪い？」

「別に、お仕置きは終わったのか？」

「あ、あなたには関係ないでしょ／＼」

何でそんなデリカシーのない事聞くのよ！いつは！

「それもそうだな。．．何か用か？」

「用というか．．。」

どうしよう、いざ誘おうとするとすごく恥ずかしい。っていつかあんたから誘いなさいよ！

「トイレか？」

「そんなわけないでしょ！この変態！」

こいつホント最低！

「冗談だよ。．．何か言いたい事があるんだろ？」

「どうしてよ．．。」

「何年一緒にいると思ってるんだ？それぐらい分かるよ。」

「一緒．．．。ふふつ。」

ずっと一緒だったんだわ。こいつと。

「あんだ、明日の予定は？」

「明日は部活もないから特に予定はないかな。」

よし！こゝ今度こそちゃんと言っわ。

「そ、そう．．．。だったら私と．．。」

一緒に過ごさない？そう続けようとしたその時、

「すゝばる」

「うお！雪蓮先輩？」

「っ！？」

また邪魔が入ったわ。どうして邪魔ばかり入るのよ！あの眼鏡ザルに空手馬鹿に年増。今度はこのサボリ魔の会長……。

「ねえ昴。明日暇？」

「まあ、部活ないですから暇ですね。」

「だったら私と街に行かない」

「っ!？」

何、言ってるのよ。先に誘おうとしたのは私……ううん、そもそも私はもう昔から約束してるのよ？

「そうよ、それで」

昴も早く断りなさいよ。……止めてよ。昴、どうしてそんな楽しみみたいな顔をするの？私との約束、忘れちゃったの？あんとにとつて私は……。

……もういい。

私は昴に背を向ける。

「桂花？」

「帰る。」

「俺に何か用があったんじゃないのか？」

「もう・・・良いわよ。」

あんだ、最低よ・・・。

「どうしたんだよ？」

「精々我孫子先輩と楽しんでくれば？」

私は走った。とにかく昴から離れたかったから。

どうやって戻ったのかは分からない。気が付けば私は自分の部屋にいた。

「・・・。」

私は小さい頃から昴と一緒にだった。家も近かった事もあって共に過ごす時間も多かった。昔、歳上の男の子からいじめられた事があった。それが理由で男なんて大嫌いになった。でも、そんないじめら

れてた私を助けてくれた昴だけは別だった。男が傍にいただけで吐き気すらする私だけど、昴が傍にいととも心地よくて、暖かかった。

「ひぐつ・・・ひぐつ・・・」

涙が溢れてくる。とても悲しくて、悔しくて。私は他人からはどことなくだらない些細な思い出も覚えている。たとえくだらなくても私にとっては大切な思い出だから。でも昴にとっては・・・

「馬鹿・・・」

一人浮かれて、はしゃいで、馬鹿みたい。

「馬鹿・・・」

私は薄暗い部屋の中で囁き続けた。

・
・
・
・
・
・
・
・

「・・・ん。」

あれ・・・私・・・そうか、寝ちゃったんだ。
もう辺りはすっかり日が暮れていた。

「・・・。」

お腹空いたな。何か食べよう。食事でも作ろうとしたその時、

トントン。

「？」

唐突に部屋の戸が叩かれる

「はあ・・・はあ・・・。」

あれから走り続け、桂花の元へ急いだ。

「スウー・・・ハアー・・・。」

一度深呼吸をし、

トントン。

桂花の部屋の戸を叩く。

「桂花、いるか？」

部屋からは何の反応はない。部屋に灯りは消えていたが、桂花は部屋にいる。俺はその確信だけはあった。

「桂花。そのまま良いから聞いてくれ。明日、聖フランチエスカの校門の前で待ってる。」

俺はそれだけ告げて、桂花の部屋を後にした。

翌朝、身仕度をしている時に気付いた事なんだが・・・。

「待ち合わせの時間。言ってねえ。」

大失態をした。携帯で伝えることは出来るが・・・。

「それも格好悪いな。」

しょうがない。来るまで待つか・・・。

俺は身仕度が整うと、校門へと向かった。

時刻は午後1時。校門に来てから早3時間。

「寒い。」

天気は曇り。薄い雲が空を覆っており、昼間とはいえ、かなり寒い。でも……。

「待ってるって、言ったもんな。」

待とう。来てくれる事を信じて。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

時刻は午後4時、まだ桂花の姿はない。日も暮れ始め、さらに気温も下がったきた。途中、缶コーヒーぐらい買いに行こうとも考えたけど、その間に来たら本末転倒だ。だからそのまま待ち続ける。来てくれる事を信じて。

・
・
・
・
・
・

時刻は午後7時。もう日もすっかり暮れている。

「……。」

気温はさらに下がり、身体はかなり冷たい。正直しんどい。死ぬか
なって思い始めたその時、

「……遅刻だな。」

「待ち合わせ時間を言わないあんたが悪いんですよ。……、ギリ
ギリまで忘れてた罰だと思いなさい。」

「そう言われると返す言葉がないな。」

「早く行きましょう？じっとしていると寒いわ。」

「……そうだな。」

俺と桂花は歩き始めた。

「……。」

「……。」

無言で2人は歩いている。

「……。」

「……悪かったな。」

「何が？」

「あの時の約束を忘れてて。」

「……そんなのいらないわよ。」

「でも……。」

「あー、もっつるさいわねー！良いったら良いのよー！こっつあって思い

出してくれたんだから。」

「・・・そうか。ありがとな。」

「ふん／＼」

そつばを向く桂花。

「でも良かったの？あんた我孫子先輩と約束してたんじゃないの？」

「ああ。あれは断ったよ。」

「・・・良かったの？」

「いいさ。約束の方が大事だからな。」

「・・・馬鹿ね。せつかくの先輩からの、あんたの好みのタイプの女からの誘いなのに。」

「何の話だ？」

好みのタイプ？

「あんた言ってたじゃない。自分の好みは背が高くスタイルが良い女だって。」

・・・ああ。

「あんなの嘘だよ。」

「そうなの？じゃああなたの好みのタイプって何なのよ？」

「それは・・・。」

俺の好みのタイプは・・・。

「秘密だ。」

「何よそれ。」

「ほら、先に行くぞ。」

「ちよっ、待ちなさいよ！」

俺はツカツカと早足で先を急いだ。

それから他愛のない話をしながら歩き、そして・・・。

「わぁ！」

「へえ。。。」

目の前には大きなメタセコイアの木に盛大なイルミネーションをあしらったクリスマスツリーの姿があった。

「綺麗。。。」

うつとりしながら桂花はクリスマスツリーを眺めている。

「。。。なあ桂花。」

「何？」

桂花はツリーを見つめたまま答える。

「俺の好みのタイプを教えてやるよ。」

「何よ突然。」

怪訝そうに答える桂花。俺は構わず続ける。

「俺の好みのタイプは」

背も胸もちっちゃくて、気が強くてその上素直じゃない幼なじみの女の子だ。

「えっ？」

桂花が驚いた表情を浮かべる。

「それって……。」

「……。」

俺は無言で桂花を見つめる。

「嘘……。だってあんた、そんな態度一度も……。」

「そりゃ、見せないようにしてたからな。」

「……。」

「・・・言えなかったんだよ。もし、桂花が俺の事をただの幼なじみにしか見てなかったら。そうだったら今の関係がなくなっちまう。そう考えると言えなかった。」

「昂・・・。」

「思えば、剣道も空手も、元々桂花を守りたかったから始めたんだよな。いつの間にか続ける理由は変わってたけど。」

「・・・。」

昔、桂花をいじめてた歳上の男と喧嘩して、コテンパンに負けた。それが悔しかったから始めた剣道と空手だ。

「桂花。聞いてほしい。」

「何。」

「俺は桂花が好きだ。今までもこれからも。だから、これからもずっと一緒にいてほしい。」

俺は伝えた。ずっと言いたかった、ずっと言えなかった言葉を。

「・・・グスッ。」

突如、桂花の瞳から涙が溢れた。

「遅い・・・のよ。」

「桂花・・・。」

「ずっと待ってた……。昴がそう言ってくれるのを……。」

俺は桂花を抱きしめる。

「私も好き。昔、あなたに助けってもらってからずっと……。私、昴の事大好き！」

「俺もだ、桂花！」

俺は桂花を抱きしめる力をさらに強める。

「……。」

「……。」

俺と桂花は見つめ合い、そして……。

唇を重ねた。

その直後、空からは雪が降り始め、2人とクリスマスツリーを彩っていった。

その後、しばらくツリーを眺めた後、買い物をし、街頭販売のケーキを買って俺の部屋に向かった。俺の部屋で買ったケーキやチキンを食べながら他愛のない話をし、そして今。。。

「。。。。」

「。。。。」

俺達はベッドに並んで座っている。桂花は俺の肩に頭を預け、俺は桂花の肩を抱いている。俺は桂花の顔を見つめ、

「ん。。。。」

桂花の口付けをする。

クチュ・・クチュ・・。

さつきみたいなソフトなキスではなく、互いが舌を求め合う激しいキスだ。

「ほう／＼」

顔を離す。2人の口と口に一本の銀糸が伝う。俺はそつと桂花をベッドに寝かせる。

「・・・何年も待たせたんだから。その分私を愛しなさいよ。」

「もちろん。」

俺達は長年の重ならなかった想いを取り戻すように求め合い、そして・・・。

愛し合った。

翌日は同じように2人で過ごした。

大晦日には2人で除夜の鐘を鳴らしに行き、元旦には初詣に行った。正直、俺達の間が変わった事はない。顔を合わせれば罵詈雑言浴びせられるし、時に殴る蹴るされる。ただ俺達の関係が幼なじみから恋人に変わったただけだ。何か変わった事は？って聞かれ、強いてあげるなら……。

「起きなさい！」

「う・ん、もう少しだけ寝かせてくれ。」

「何言ってるのよ！遅刻するわよ！」

「いや、まだ大丈夫だつて。」

「ああもう！起きなさい！でないと」

チュッ

「キスしちゃうわよ」

変わった事、それは朝俺を甘く、そして優しく起こしてくれるようになった事だ。

春が来て、夏が来て、また冬が来て。大学に入学して、卒業し、そして就職して・・・。

きっと辛い事はたくさんある。大変な事だって。でも俺は思う。

「？」

桂花がいれば。桂花さえいてくれれば、それだけできっと楽しいって。

「桂花。」

「何よ？」

「ずっと一緒にいような。」

桂花は顔を赤らめて、

「はあ！？何言ってるよ！？そんなの」

H
a
p
p
y

M
e
r
r
y

X
,
m
a
s

当
た
り
前
で
し
よ

番外編〜80万PV突破記念、クリスマスの約束〜（後書き）

難産でした。気楽に始めた番外編ですが、始めてみると大変で大変で（<ー>）

正直、桂花のツン要素が足りなかったかな？とも思ったりします。今回知った事。ツンデレは強力な武器ですが、扱いこなすのが難しいです。

次回からは本来の話に戻ります。

感想、アドバイスお待ちしております。

それではまた！

第60話 合う合わせる力、足される力 (前書き)

投稿します！

書き方は今までのままで行きます。改めて見直したら分かりづらい感じがしたので (^-^ ;)

それではごっごー！

第60話 合わさる力、足される力

昴「・・・(カキカキカキカキ。)」

今日も楽しく政務をしている。

昴「・・・(カキカキカキカキ。)」

今日も楽しく政務・・・。

昴「・・・はあ。」

仕事量多いな・・・。益州を平定してから大改革をしたため、おのずと仕事量は増える。何せ、決済や判断が俺にしか出来ないからな。

昴「・・・一旦休憩しよう。」

俺は執務室を出た。

昴「何か面白い事ないかなかな・・・。」

城の廊下を何かを探しながら歩いている。すると、

?「このー!」

?「ふん!」

ガキン!

昴「ん?」

何だ?声は庭から聞こえてくるな。

昴「・・・うん。面白そうだから行ってみよう。」

俺は城の庭へと向かった。

・・・

・
・
・
・
・

焰「どうした！その程度か？」

蒲「まだまだ〜！」

庭に来てみるとたんぽぽと焰耶がいがみ合っていた。あれは模擬戦か？それとも喧嘩か？

昴「2人とも何してるんだ？」

蒲「あ、ご主人様！」

焰「お、お館様！」

蒲「ちよつとご主人様聞いてよ〜！焰耶の奴が・・・」

焰「何！？貴様が・・・」

昴「あゝもう、喧嘩するなって。」

蒲「むう。」

焰「むぐっ。」

昴「それで、原因は何だ？」

蒲「焰耶の奴が自分の方がご主人様に相応しいって言うから・・・。」

焰「貴様がお館様は私には相応しくないと突っかかってきたのだから！」

昴「はいはい、喧嘩は止めろって。」

蒲「・・・じゃあご主人様はたんぽぽとこいつ、どっちが好き？」

昴「は？」

蒲「もちろんたんぽぽだよな？」

焰「私に決まっているだろ！」

昴「・・・俺にとって2人とも大事な仲間だ。優劣なんてないよ。」

蒲「・・・やっぱり。ご主人様の事だからそう言うと思ったよ。」

たんぽぽが不満げに言う。

焰「誰に対しても平等に扱ってくれる所はお館様の美点でもありませんが・・・。」

同じく不満げな焰耶。

昴「良いじゃんか。俺達の国では上なし下なし、皆対等で良いだろう？俺はその手の争い事は嫌いだからな。」

まあ、形式上の立場はあるだろうけど。

蒲「・・・はあい。分かったよ。」

焰「・・・お館様がそうおっしゃるなら。」

昴「2人とも仲良くな。」

蒲・焰「ふん！」

2人ともそっぽを向く。まあ、仲良くなんて人から言われてするものじゃないよな。

蒲「ところでさ、ご主人様政務は終わったの？」

昴「まだ終わらないよ。今は休憩中だ。」

蒲「だったらさ、たんぼぼと手合わせしてよ！一度で良いからご主人様と手合わせしてみたかったんだ。」

昴「手合わせか・・・ふむ。」

焰「アホか、貴様では相手にすらならん。お館様、是非私と・・・」

蒲「あんた前にご主人様にコテンパンにされたじゃないの！だからたんぼぼとやるの！」

焰「何をー！貴様・・・」

昴「だから喧嘩するなって！・・・良いよ、両方ともやるつ。」

蒲「ならたんぼぼからね！」

焰「お前は後で手合わせしてもらえ。お館様、まずは私から・・・。」

昴「優劣はつけないって言っただろ？2人いっぺんにやろう。」

蒲「2人同時に？」

焰「いや、それはさすがに・・・。」

昴「それくらいがちょうど良い。やろう。」

蒲「むっ。」

焰「・・・お館様言えどあまり侮られたくはないですね。」

昴「侮つてもいなければ自惚れているわけでもない。2人も武人なら言葉ではなく、行動で示せ。」

蒲「・・・良いよ。後悔させてやるんだから。」

たんぼぼが槍を構える。

焰「怪我をしても知りませんよ？」

焰耶も金棒を構える。

昴「遠慮はいらない。来い。」

蒲「いっくよ〜！てえ〜いっく〜！」

ヒュン！ヒュン！ヒュン！

たんぽぽが槍を連続で繰り出す。

昴「甘い。」

それを全て避ける。

焰「どけ！私が行く！はあっ！」

ドコーン！！！！

焰耶が金棒を繰り出す。

昴「動きが単調過ぎる。」

俺は横にひとつ飛びしてそれを避ける。

昴「どうした？その程度か？」

蒲「！？、まだまだっ！」

焰「行くぞ！」

2人が同時に俺に飛び込む。

焰「うりゃあーっ！」

蒲「てりゃ〜っ！」

昴「ふっ！」

蒲「っ！？」

俺は焰耶の金棒の先端を側面から手のひらでいなし、金棒の軌道をたんぽぽに反らす。

ガキン！

たんぽぽは咄嗟に槍で防ぐ。

蒲「ちよっ、ちよっと！危ないじゃない！」

焰「ボーツとしてる方が悪い！」

昴「仲間割れか？そんなんじゃ当てる事も出来ないぜ？」

蒲「うう〜！なら・・・あっ！？」

たんぽぽが俺の後方を指差す。

昴「ん？」

俺は指された方を向く。

蒲「隙あり〜！」

その隙にたんぽぽが槍を繰り出した。

ビーン！

蒲「嘘！？指一本で止めた！？」

俺は左手の人差し指に氣を集中させて受け止めた。

焰「これで、どうだー！」

そのさらに隙をつき、焰耶が金棒を振るった。

ガッツ！

焰「くっ！」

俺は右手に氣を集中させて金棒を受け止めた。

昴「終わりか？」

蒲「くっ！」

焰「ちいっ！」

2人が一度俺から離れ、

蒲「でえーい！」

焰「でりゃあ！」

2人が同時に俺に突進する。

昴「まだまだだな。」

俺は人差し指と中指を束ね、槍の穂先の腹を突いて軌道を変え、金棒を先ほどと同じように側面を手のひらでいなし軌道を変え、

昴「はあ！」

俺は2人の腹に掌を打ち込んだ。

蒲「かはっ！」

焰「ぐふっ！」

2人が後方に弾かれた。俺は倒れている2人に近づき、

昴「お互いがお互いの足の引っ張り合い。話にならないな。」

蒲「……。」

焰「……。」

昴「期待外れだ。」

俺はそれだけ告げて、執務室に向かった。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

昴「言い過ぎたかな？」

叩きのめした後に突き放した言い方をしてしまったが・・・。

昴「2人は仲は悪いみたいだけど、相性は良さそうなんだけどな。」

ま、武人つてのは基本的に負けず嫌いだからこれで自信喪失することはないだろ。

俺は政務に戻った。

蒲「ご主人様、強いね。」

焰「当然だ。我らがお館様だぞ？」

蒲「たんぼぼ達、弱いね。」

焰「……。」

蒲「ご主人様が圧倒的な強さを持つてるのは知ってる。でも……悔しいよ。」

たんぼぼが拳を握る。

焰「……くそっ！」

焰耶が地面を殴る！

蒲「このままじゃ終われないよ。焰耶。力、貸しなさいよ。」

焰「……良いだろう。貴様も力を貸せ。」

2人は手を取り合った。

翌日、早々に政務を終えて、城を歩いていると、

蒲「ご主人様！」

焰「お館様！」

昴「おっ？どうした？」

蒲「もう一回だけ手合わせして！」

焰「頼む！」

2人が俺に詰め寄る。

昴「良いよ。もう政務は終わったしな。」

俺達は城の庭に向かった。

昴「いつでも良いぞ。」

俺は構える。

蒲「それじゃ・・・。」

たんぽぽが槍を構え、

焰「行くぞ！」

焰耶が金棒を構え、そして、俺に飛び込んだ。

蒲「てりゃ！てりゃ！てりゃ〜！」

たんぽぽが昨日以上に手数を増やし、槍を繰り出した。

昴「へえー、手数で勝負してきたか。だけど星に比べりゃ遅い。」

俺は槍の柄を掴む。そのまま打撃を繰り出そうとすると、

焰「こちらを忘れてもらっては困ります！」

昴「ちっ！」

俺は槍を放し、金棒を避ける。するとすぐさまたんぽぽが追い討ちをかけてきた。

蒲「まだまだ〜！」

再び突きの嵐が俺を襲う。

俺は避け続けるが、

昴「ふっ！」

俺は槍の軌道を束ねた指で反らし、たんぽぽに拳を打ち込もうとすると、

蒲「にひっ」

昴「っ!?!」

たんぽぽがかがむと、その後ろから焰耶の金棒が飛び出してきた。

昴「ま、ずい……。」「

俺は咄嗟に上体を後ろに反らし、金棒を避け、そのままバク転の要領で後ろに飛んだ。

やり過ぎした……。そう思ったその時、

蒲「かかった」

昴「げっ!?!」

足元からしゅるしゅるしゅるっと音がし、俺の足の周りにから土煙が立ち上がる。

昴「うおっ!?!」

俺の身体が宙に舞った。

昴「ちっ!」

俺はすぐさま手刀で縄を切り、脱出する。だがそれでは終わらず、2人が着地場所に回り込み、

蒲「でえーい!」

焰「でりゃあ!」

同時に攻撃を繰り出した。

昴「くそっ!」

ガキン!

俺は朝陽と夕暮を引き抜き、2人の一撃を止めた。

蒲「あ〜んもう、これも止められた。」

焰「さすがはお館様だ。」

焦った。今のはマジにヤバかった。

昴「ふう……。」

俺は一度深く呼吸をし、双剣を鞘に納めると、

昴「はあ！」

縮地で一気にたんぽぽに飛び込んだ。

蒲「えっ……。」

たんぽぽはあまりの事に反応出来ず、

蒲「ぐっ！」

無防備なまま俺の一撃をもらう。

焰「この！」

焰耶が俺に一撃を繰り出した。が、

焰「っ!?!」

俺は跳躍してそれを避け、空中で焰耶の背中に一撃を入れる。

焰「うぐっ!」

焰耶はそのまま地に伏した。

昴「ふう。」

決着はついた。

蒲「また負けた……。」

焰「2人で力を合わせ、不意ながら策まで練ったというのに……。」

昴「さすがだよ。まさか得物を抜くことになるとはな。」

蒲「でも一撃も……。」

昴「最後の最後。俺に余裕は一切なかった。2人は俺に本気にさせたんだぜ？」

蒲「……。」

焰「……。」

昴「1に1を足しても2にしかない。けど1人と1人が足し合わせるなら1にしかならないこともあれば3にも4にもなることもある。どうだ、2人で力を合わせてみて？」

蒲「……。」

焰「……。」

昴「お互いもつと歩み寄って、認め合えばもつと強くなれるしお互いを高め合える。かもしれない。ま、早い話、もつと仲良くな。」

俺はその場を後にした。とりあえず2人にしたほうが良い。そう思

ったから。

蒲公英・焰耶 side

蒲「・・・あなた、なかなかやるじゃん。」

焰「・・・貴様もな。」

蒲「頑張ればたんぽぽもお姉様みたいに強くなれるかもしれない。
・たまにはあなたも鍛練付き合いなさいよ。」

たんぽぽが焰耶に手を差し出す。

焰「ふん！まあ良いだろう。」

焰耶がその手を掴む・・・が。

蒲「えいつ!」

焰「うぁっ!？」

たんぽぽが掴んだ手を引つ張り、焰耶は地面に勢い良く倒れ込んだ。

蒲「でも、ご主人様に相応しいのはたんぽぽなんだからね！」

焰「・・・この小悪魔娘が・・・」

蒲「べーだ！」

たんぽぽが逃げ出した。

焰「待て! 貴様ー!」

それを焰耶が追いかける。

2人はお互いを認め合ったが、仲良くなるのはまだ先の話であった。

第60話〜合わさる力、足される力〜（後書き）

今回の話は何を伝えたいのかは正直作者にも分からないです（^|
^:;）

最近若干スランプ気味です。

感想、アドバイスお待ちしております。

それではまた！

第61話 無謀なる業、蘇る親愛 (前書き)

投稿します！

今回はオリ設定を交えた話です。

それではどうぞ！

第61話 無謀なる業、蘇る親愛

昴side

桔「・・・お館様。本当によろしいのか？」

昴「構わない、やってくれ。」

桔「うむ・・・、それでは・・・。」

桔梗が豪天砲を構える。俺と桔梗の距離はおよそ10メートルほど。

桔「はあ！」

ドオン！ドオン！

豪天砲から鉄杭が放たれる。

昴「ふつ。」

俺は鉄杭を紙一重で避ける。

桔「次、行きますぞ！」

ドオン！ドオン！ドオン！

立て続けに豪天砲から鉄杭が放たれる。

昴「くっ！」

1 発目を避け、2 発目を村雨で弾く。3 発目も同じく村雨で弾こうと試みたが・・・。

ドカツ！

昴「がはっ！」

3 発目は弾ききれず、腹に直撃する。俺の身体は後方に吹っ飛んだ。

桔「お館様！」 桔梗が慌てて駆け寄ったが、俺はそれを手で制し、

昴「だ、大丈夫だ。もう一度、もう一度頼む。」

桔「やはり無理です、お館様！お身体を痛めるだけです！」

昴「多少無理を通してでも、やらなくちゃならないんだ。」

桔「ですが、この距離で目隠しをしたまま豪天砲を避け続けるなど無理です！」

そう、俺は今日隠しをして豪天砲の鉄杭を避ける、もしくは弾く荒行を行っている。これは五感や第六感を鍛え上げるためだ。別にわざわざ豪天砲を使う必要はないのでは？と思われるが、ある程度危険でなければ鍛えられないので桔梗の力を借りたわけだ。

当初桔梗は当然の如く猛反対をしたが、頭を下げ倒し、何とか了承してくれた。だが、さすがに豪天砲をまともにくらえば身体に穴が空いて死んでしまうので、鉄杭の先を丸く加工した物を打ち出してもらっている。これで死ぬことはない。が、死ぬほど痛い。

昴「何か掴めそうなんだ。もう少し付き合ってくれ。」

桔「何故そこまでして強さを求むのです？今のお館様とて天下に並ぶことなき力をお持ちでしょう。」

昴「．．これから先、戦に勝利し、俺達の理想を叶える為にはもっと力が必要なんだ。」

そう、力が。

昴「だから頼む。俺の気が済むまで付き合ってくれ。」

桔「ふうむ、賛成は出来かねますが．．、分かりました。では．．。」

再び桔梗が豪天砲を構える。

桔「行くぞ！」

ドオン！ドオン！ドオン！

豪天砲が火を吹いた。

昴「ふつ。」

1発目、2発目は上体を動かして避ける。

ガキン！！

3発目は村雨で弾き飛ばした。

ドオン！ドオン！ドオン！

さらに豪天砲が放たれる。

昴「くっ！」

4発目を紙一重で避ける。甲高い音が耳元を襲う。5発目も同じく避ける。

昴「ぐくっ！」

鉄杭が俺の肩を掠める。最後、6発目、村雨で迎撃を試みるが、

ゴスッ！

昴「ぐっ！」

弾ききれず、今度は肩に直撃した。

昴「また失敗か……。桔梗、もう一度だ。」

桔「……。分かりました。」

桔梗豪天砲に鉄杭を装填し、再度こちらへ砲門を向けた。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

その後もこの荒行を繰り返す、時に全弾避けきり、弾き飛ばしたり、直撃したりを繰り返した。回を増す毎に確実に直撃は減ってきている。確実に成果は出ているが神経を磨り減らしながらの荒行なので当然疲労も溜まり、そして・・・。

昂「ゴホッ！」

鉄杭が俺の腹に直撃し、俺は後方にふっ飛んだ。

桔「お館」

桔梗が何かを叫んでいたが、俺は途中で意識を手放した。

昴「・・・ん？」

気が付くと俺は横になっていた。そうか豪天砲が直撃して気を失ったのか。

桔「目が覚めましたかな？」

昴「ん、桔梗か・・・ぐっ！」

体を起こそうとしたら俺の体に激痛が襲った。

桔「急に体を起こしてはなりません。寝ていてください。」

俺は再び寝かされた。

昴「・・・あ。」

ふと見ると、俺は桔梗の膝に頭を乗せている事に気付いた。いわゆる膝枕だ。

桔「どうか致しましたかな？」

昴「いや、何でもない。」

桔「そうですか。」

俺はそのまま桔梗の膝に頭を乗せた。

桔「こんなに体を痛め付けて、もっとうご自愛なさいませ。」

昴「~~~~っ!」

桔梗が湿らせた布を俺の体に当てた。声も出ない激痛が俺を襲った。

桔「安全処理をした豪天砲とはいえ、あれだけ直撃したのですからな。冷やさねば腫れ上がってしまいますぞ?」

昴「す、すまない・・・。」

桔梗が丹念に体を拭いてくれた。俺は激痛に耐えながら歯を食い縛った。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

昴「・・・ん。」

しばらくそのまましていると今度は睡魔が俺を襲った。

桔「良ければ僕の膝でお休みください。」

昴「でもそれじゃ桔梗が……。」

桔「なに、お館様の寝顔を拝見するのもなかなか乙なものです。僕の事は気にせずにお眠りください。」

昴「そうか……。」

俺は言われるがまま睡魔に身を任し、そして眠りに落ちた。

桔「眠りにつかれたか。」

お館様は目を瞑るとすぐに眠りにつかれました。

桔「ホントに無理をなさる。」

自身に課せられた政務は的確にこなし、鍛練ではボロボロになるまで体を痛め付けて。

桔「皆がやきもきするのも理解出来る。」

心配事は尽きぬであろうな。だが、こんなお館様であるからあれだけの将兵が一同に会し、そして慕っているのだろう。お館様はご謙遜なさるが、儂もお館様の器量あつてのこの国だと思つ。この方に力の限り尽くしたいと思つ。それに、

桔「押し殺していた儂の中の女が疼かされる。」

女ならば皆お館様の魅力に惹き付けられてしまつてあるつ。だが、それも悪くない。

桔「今は儂だけに許された特権を堪能するとしてよう。」

儂はお館様の髪を撫で、お館様の寝顔を眺め続けた。

昴 side

あれから2週間ほどが経った。俺はその間にも何回かあの鍛練を続けた。相変わらず体は痛め付けられるが、確実に鍛練の成果は出ており、被弾の数は減ってきている。今日は劉備軍の主要な将が集まったので定例会議を行っている。

昴「次に雛里、頼む。」

雛「はい。新田開墾の件ですが・・・。」

次々に報告があがっていく。特に問題もなく報告は続けられる。

昴「うん。分かった。引き続き頼むな。次は桔梗、頼む。」

桔「・・・。」

ん、どうしたんだ？

昴「桔梗？」

桔「・・・。」

その後も定例会議が続いたがやはり桔梗の様子が少しおかしい。時折ボーっとしていたり、話を聞き逃していたり、普段の桔梗からは考えられない事ばかりだ。本人に尋ねてもおそらく大丈夫としか言わないだろう。やがて全員の報告が終了した。

昴「これで全員終わったな。なら今日の定例会議はここまでとする。解散。」

定例会議は終了した。

定例会議終了後、各々が任された部署に向かう中、俺は紫苑に声をかけた。

昴「紫苑。少しいいか？」

紫「ええ、構いません。」

昴「今日の桔梗、何処か様子がおかしく見えたんだが。」

紫「・・・ご主人様にもそう感じられましたか。」

昴「何か知っているか？」

紫「・・・おそらくですが、察しはつきます。」

昴「それは何なんだ？」

紫「それは」

その日の夜、俺は城の外の森を歩いていた。しばらく歩いていると、

）

森の奥から笛の音が響いてきた。笛に誘われるがまま歩いていった。やがて木々が開けた場所にたどり着き、そこには、

桔「く」

流麗な笛を奏でる桔梗の姿があつた。その音の調べはとても美しく、とても儂いものだった。やがて笛の音が止み、俺は桔梗の元に向かった。

昴「綺麗な笛の音だ。思わず聞き惚れたよ。」

桔「むっ、お館様？何故このような場所に？」

昴「森に散歩に来たら笛の音に誘われてね。」

桔「ご冗談を。」

昴「散歩は嘘だが笛の音に誘われたのは本当だ。ここに桔梗がいるんじゃないかと思って来たんだ。」

桔「何故儂がここにいと？」

昴「紫苑に話を聞いてね。だからここに来た。あの人が眠る場所・
・冽翁殿の墓に。」

紫「ちょうど今くらいの季節の事です。あの方、冽翁様と出会ったのは。」

昴「・・・冽翁殿と。」

紫「私や焰耶ちゃんにとって冽翁様は武人として将としての心得を教え込んでいただいた師なのですが、桔梗にとってはそれだけではありません。」

昴「桔梗にとつては？」

紫「はい。桔梗にとって冽翁様は師であると同時に父でもあるのです。」

昴「!？」

父？

紫「と言っても本当の父というわけではありません。桔梗の本当のお父様と冽翁様は昔から親交があり、桔梗が今の鈴々ちゃんの歳の頃にお父様を亡くし、その後冽翁様の元に預けられる形になりました。桔梗とはその時に出会いました。」

昴「・・・そうか。」

なら俺は桔梗の・・・。

紫「ですが、桔梗はご主人様を恨んではいませんわ。冽翁様は病に臥すより武人として死ぬことを選んだのですから。その心は桔梗が一番理解してますから。」

昴「なら桔梗は何で・・・。」

紫「それは私の口からは・・・。」

昴「分かった。後は直接聞いてみるよ。」

桔「そうですか。紫苑に聞きましたか。」

昴「聞いたのは俺だ。紫苑を責めないでくれ。」

桔「何、俺は口止めをしていたわけでもありません。責めたりはしませんよ。」

昴「そう言ってもらえると助かる。」

俺は冽翁殿の墓の前に立ち、持参した酒を墓石にかけ、手を合わせた。

昴「……。」

桔「……感謝致します、お館様。親父殿も喜んでいらっしゃるでしょう。」

昴「そうか。なら、良いんだがな。」

俺は墓の傍の大きな石に腰掛けた。

昴「……。」

桔「……。」

しばらく場を沈黙が支配した。

昴「桔梗。桔梗は俺を……。」

桔「断っておきますが、俺はお館様を恨んではおりませぬ。」

昴「……。」

桔「お館様には感謝の言葉しかありません。親父殿を武人として逝かせていただいたのですから。」

昴「……そうか。」

そう言ってももらえると俺は救われる。

昴「……。」

桔「……。」

再びその場を沈黙が支配する。

桔「……僕は親父殿に何か返せたであろうか。」

昴「桔梗？」

桔「僕は親父殿の不肖の弟子として、何も返す事が出来なかった。それだけが唯一の心残りであった。こんなことなら……いやはや、後悔先に立たずとはこの事ですな。」

桔梗は自嘲気味に笑った。

昴「返せなかった事はないさ。」

桔「お館様？」

昴「桔梗は冽翁殿の教えを今も守っている。得た力を自分の信じた道を切り開く為に使えという教えを。師にとって、自身が伝えた教えを守ってくれる事が一番の恩返しだ。桔梗の信じる道を、冽翁殿の最後の願いを守る事がきつと恩返しに繋がると俺は思う。」

桔「そうですね。……ふふっ、それにしても。」

昴「？」

桔「先ほどのお館様の言。まるで親父殿によつてしたぞ？」

昴「そうなのか？」

桔「うむ。同じ事を言われましたからな。」

昴「ふーん、そうなのか。」

冽翁殿とは一度でもいいから教えを乞いたかつたな。

桔「お館様。今一度我が笛を聞いてはくださらぬか？」

昴「ああ。是非聞かせてくれ。」

桔「では……。」

桔梗が笛を奏で始めた。その音はとても美しく、心を打つ音だった。

それから数日後、再びあの荒行に挑戦している。

桔「では行きますぞ！」

昴「来い！」

桔梗が豪天砲を構え、

桔「はあっ！」

ドオン！ドオン！ドオン！

豪天砲が火を吹いた。

昴「ふつ。」

俺は放たれた3発全て避ける。

桔「次、行きますぞ！」

ドオン！ドオン！ドオン！

さらに豪天砲から鉄杭が放たれる。

昴「はっ！」

ガキン！ガキン！ガキン！

村雨で鉄杭を弾く。

桔「お見事。ならばこれならばどうです！」

ドオン！

追い討ちをかけるように豪天砲から鉄杭が放たれた。

俺は村雨を鞘に納め、

昴「はあっ！」

抜刀術で鉄杭を切り裂いた。

昴「ふう。」

俺は目隠しを外した。

桔「さすがお館様ですな！まさか豪天砲の砲弾を無傷でやり過ぎすとは。もはや言葉もありませぬ。」

昴「少し動きが大きかったけどな。」

砲弾の数がさらに多かったら直撃しただろうな。

桔「しかし、進歩なされたのは喜ばしい事ですが、少々寂しくありますな。」

昴「寂しい？」

桔「お館様の寝顔を拝見出来なくなるのは少々寂しいですな。」

昴「はははっ。」

さすがにあれば恥ずかしいし、直撃は痛いから勘弁してほしいな。

昴「今日はここまでにしよう。」

桔「うむ、そうですね。」

俺は放たれた鉄杭を回収し、帰り支度をする。

桔「お館様。」

昴「ん？」

桔「・・・いえ、何でもありません。それでは参りましょう。」

そう言うと桔梗が俺の腕を取る。

昴「桔梗？」

桔「どうか致しましたか？」

昴「ん〜、いや・・・何でもない。」

胸が当たってるけど、言っても無駄なんだろうな。

桔「ふふっ、では参りましょう。」

俺達そのまま城へと帰還した。

続
く

第61話、無謀なる業、蘇る親愛、（後書き）

うーん、難しい。

じっくりくる感じに出来ませんでした（<―>）

今日が年内最後の投稿になりそうです。

感想、アドバイスお待ちしております。

それではまた！

皆さん良いお年を（^o^）ノ

第62話 最強の武人、優しき女の子 (前書き)

投稿します！

正月休みを満喫したので投稿が遅れました。初詣では賽銭箱に5百円を投じ、願掛けを致しました。

それではどうぞ！

第62話 最強の武人、優しき女の子

昴「はあ！」

恋「ふっ！」

ギイン！ガキン！

俺の村雨と恋の方天画戟がぶつかる。

昴「やるな、これならどうだ？」

俺は1度距離を取り、村雨を鞘に納めた。

昴「北辰流抜刀術……。」

氣を足に集中させ、一気に恋との距離を詰める。

昴「疾・風！」

俺は鞘から村雨を一気に引き抜く。鋭い斬撃を恋に浴びせる。

恋「くっ！」

恋は上体を後ろに下げ、俺の斬撃をギリギリで避ける。

昴「まだだ！」

俺はすかさず鞘での一撃を恋に繰り出す。

恋「同じ手は喰わない。」

恋は自身の戟の柄で鞘の斬撃を防いだ。

昴「百も承知だ。」

俺は鞘の斬撃をぶつかった直後に鞘から手を離し、斬撃の勢いを利用して体を回転させ、右足での蹴りを浴びせた。

ドカツ！

恋「ぐっ！」

恋は俺の蹴りをもろに浴び、後方に弾かれる。が、恋はすぐさま体勢を整える。

恋「まだまだ・・・っ!？」

俺は蹴りを浴びせた直後に間髪入れずに恋に飛び込み、右手で恋の方天画戟を抑え、左手を手刀にし、首筋に突き付けた。

恋「・・・恋の負け。」

昴「10本目、俺の勝ちだな。」

俺は恋の頭を撫でた。

恋「ん／＼・・・昴強い。」

恋と10本勝負をし、俺は7本勝利した。

昴「恋だって強いよ。1本たりとも楽に勝たせてもらえた勝負はなかったよ。」

恋「・・・昴どんどん強くなる。初めて恋と戦った時より強い。」

昴「まあ、俺も鍛練を毎日積んでるからな。」

かなりギリギリの鍛練だけど。

恋「昴、どうしてそんなに強くなる？昴充分に強い。」

昴「ん〜、そうだな・・・。」

大まかな理由は刃だけど、やっぱり1番の理由は・・・。

昴「守りたいからさ。」

恋「守る？」

昴「ああ。強くなれば自分の大切なものを守れるだろう？」

恋「・・・(コクッ)」

昴「だから強くなるんだ。その中にはもちろん恋も入ってるからな。」

俺はもう一度恋の頭を撫でた。

恋「ん。・・・恋は強い。」

昴「関係ないよ。恋は名だたる武人の前に、可愛い女の子だから。」

恋「つ／＼・・・恋、可愛い？」

昴「うん。可愛いよ。」

恋「可愛い・・・可愛い・・・。」

恋はうつむきながら何か呟いている。

昴「？・・・まあいいか、今日は模擬戦に付き合ってくれてありがとう。また頼むよ。」

俺は恋に礼を言い、その場を後にする。

クイツ。

昴「？」

何か引つ張られる感触したので振り返ってみると、恋が俺の袖をちよんと掴んでいた。

昴「どうした？」

恋「昴、明日お仕事ある？」

昴「どうしてだ？」

恋「恋、昴と2人でお出掛けしたい。」

昴「明日か・・・。」

明日もちろん仕事はある。

恋「・・・駄目？」

うつ・・・そんな顔されたら断れないよ。

昴「大丈夫だよ。お出掛けしようか。」

恋「ホント？約束。」

昴「ああ。約束だ。」

俺は恋の小指に俺の小指を絡ませた。

昴「終わった・・・。」

時刻は早朝。日の入りの直前くらいの時間に全ての書簡を終えることができた。

昴「・・・超疲れた・・・。」

2つの書簡を同時進行に進めるあのやり方。仕事を約4倍の速さで終わらせる事が出来るが、疲労も4倍である。

昴「・・・寝る。」

俺は寝台に倒れ、そのまま眠りについた。

あれから数時間ほど眠り、約束を果たすために城門の前まで来た。同じ城にいるんだから一緒に行けばいいのでは？とも思ったんだが、何故か城門で待ち合わせすることになった。時間にして10分ほどくらい城門の前に立っていると、

恋「お待たせ。」

昴「いや、たいして待って・・・おお。」

振り返るとそこには恋がいた。しかし、そこにはいつもの服ではなく、丈が若干短めのチャイナドレスを着た恋がいた。出る所は出て引込む所は引込んでいるため、その姿はかなり色っぽく、かなり綺麗だ。

恋「・・・どっ?」

昴「・・・ああ。見違えた。良く似合ってるよ。」

恋「／＼、・・・良かった。」

恋はうつむき、顔を赤らめた。

昴「・・・行くか。」

恋「ん。」

恋は俺の腕を自分の腕を絡ませた。

昴「えつと、・・・恋?」

恋「駄目?」

恋は上目遣いで俺に尋ねる。

昴「うっ・っ、いいよ。恋の好きなようにしてくれ。」

恋「うん。」

俺達は腕を組み、街へと向かった。

街をブラブラと散策しながら2人で歩いている。途中、飯店の店主が、

「將軍！今日は寄っていただけじゃないんですか？」

次々と飯店の店主が声をかけてくる。次第に食べ物でいっぱいになる。

昴「恋、良かったな。」

恋「〜」

恋はご機嫌だ。

一度近くの卓で買った食べ物を片付けると、今度は服屋に向かった。

昴「何か袖を通してみるか。」

恋「・・・(コクリ)」

どれにしようか・・・まずはこれにしようか。

昴「恋、これなんか似合うんじゃないか？」

俺が差し出したのは緑のノースリーブの服。以前に稟が着ていた服だ。

恋「・・・(コクリ)」

恋は服を受け取り、更衣室へと入っていった。数分待っていると、

恋「・・・どっ?」

昴「・・・うん。なかなか似合ってるよ。」

実際良く似合っていた。

昴「次はこれなんかどうだ？」

次に差し出したのは、スリットが入り、胸を強調した例えるなら雪蓮着ている服だ。

恋「・・・(コクリ)」

恋は再び更衣室に向かった。
数分後。

昴「おお。」

これもなかなか似合っていた。恋はかなりスタイルが良いので、その出で立ちはとても色っぽい。
それからいろいろな服を着てもらった。派手な服。落ち着いたものもある服。メイド服。何故かあったナース服。e t c . . .
どれも良く似合っていた。何か気に入った服を贈ろうとしたが恋はどれも選ばなかった。気に入った物がなかったのか、それとも遠慮したのかは分からないが。店を出ようとした時、

恋「・・・(ジー)」

恋が何かを見つめている。恋の視線の先には装飾あしらった髪留めがあった。

昴「これが欲しいのか？」

恋「・・・(コクッ)」

昴「そうか、店主、これを一つ・・・。」

もらおうかと続けようとする、恋が手で制した。

昴「どうした？」

恋「・・・お揃い。」

・・・ああ、なるほど。

昴「俺と2人でって事だな？」

恋「・・・(コクツ)」

昴「分かった。店主。この髪留めを2つほど欲しい。」

「毎度！」

店主は髪留めを2つ包み、俺に渡した。会計を済まし、髪留めを恋に渡した。色は俺が青色で恋が桃色だ。俺は早速今付けている髪留めを外し、それを付ける。恋は前髪に付けた。

昴「良く似合ってるよ。」

恋「ふふっ。昴も似合ってる。」

昴「ありがとな。」

俺達は再び街を歩き始めた。

しばらく街をブラブラした後、街の外にある森へ散歩に向かった。
自然に癒されながら歩いていると、小川が見えてきた。

昴「せつかくだし、泳いで行くか？」

恋「ん。」

恋は頷き、服に手をかけた。

昴「待った。」

俺はそれを止める。

恋「？」

昴「恋、俺が目の前にいるんだから服を脱いじゃ駄目だろ？」

恋「？」

何を言っているのか分からないと言った顔だ。

恋「・・・これから水に入る。」

昴「そうだな。」

恋「服を脱がないと、濡れる。」

昴「全くそのとおりだ。」

恋「服が濡れると愛紗が怒る。」

昴「まあ分かるけど・・・。」

言いたい事は分かるんだけど。

昴「言いたい事は分かるぞ。でもな、女の子が男の前で簡単に裸を見せたら駄目だぞ。」

恋「?・・・ここには恋と昴しかない・・・。」

昴「いやだから、俺がいるだろ?」

恋「・・・昴なら見られてもいい。」

昴「うーん、その言葉は嬉しいが俺でも駄目だ。いいか、恋は可愛い女の子なんだからこれからはもう少し恥じらいを持たなきゃ駄目だぞ?」

恋「・・・分かった。」

昴「分かってくれたか。」

恋「昴以外の男には恥じらいを持つ。」

やっぱり分かってない。

昴「はあ・・・、とりあえず、これに着替えてくれ。」

差し出したのは上下白のビキニタイプの水着だ。いつか桃香や愛紗に着てもらおうと仕立てもらった物だ。

昴「あそこの物陰で着替えてきてくれ。」

恋「分かった。」

恋は水着を受け取り、物陰に向かった。恋なら水着が良く似合いそうだ。裸よりはマシだからこれも役得という事にしよう。

やがて水着を身に付けた恋がやってきた。やっぱり良く似合ってるな。俺も上着とズボンを脱ぎ、下着一枚になり、川へ入った。川の水はとても気持ち良かった。2人で一緒に泳ぎ、水を掛け合ったりして楽しい時間を過ごした。

夕暮れ近くまで遊び、俺達は城へと帰る事にした。その道中。

昴「……。」

恋「……。」

俺達は無言で歩いていた。

昴「……気付いているか？」

恋「……(コクッ)」

恋が頷く。

俺達が開けた場所にくると、突如後方から大人数が飛び出した。数は100人ほどか。

昴「……何か用か？」

「大人しくしてもらおうか。」

昴「随分と物騒な物を持つてるんだな。」

各々が剣やら槍やらを持っている。

「お前達には人質になってもらう。」

昴「人質？」

妙な事を言うな。こいつらは賊ではないのか？

「お前達には劉備を誘き寄せ寄せる餌になってもらう。」

桃香を・・・こいつら・・・。

昴「お前ら賊じゃないな。」

「こゝ名答。俺達は劉璋軍の残党だ。」

やはりか。

昴「なるほど、劉備を呼び出してどうするつもりだ？」

「知れた事を、殺すに決まってるだろ。」

昴「劉璋の敵討ちか？」

「はっ！あんなクソガキなんざどうでも良い。はっきり言って劉備

が邪魔なんだよ。せつかくあのクソガキの元で美味しい思いしてたのによ、いきなり他所からやってきて我が物顔で益州の太守になりやがって。挙げ句の果てには俺達を追放しやがって！」

なるほど。こいつらは益州平定直後、俺達は賄賂や横領等、それらを行っていた奴等を追放した。こいつらはその連中か。本来なら斬首なんだが、桃香の温情により追放のみという事になった。

「劉備つてのは馬鹿な甘ちゃんだ。人質をとりや前に出てくるだろ。その時に殺してやるよ。ま、殺す前に少し楽しませてもらうけどよ。ギャハハハ！」

一斉に劉璋の残党の奴等が笑い出す。

昴「クスだな。」

「あっ？」

昴「生きる価値もない。せつかく拾った命を無駄に過ごす、はつきり救いようがないな。」

「お前、自分の立場分かってんのか？人質だからって殺されないとでも思ってたか？」

昴「分かってないのはお前らだ。やはりクスだけに運すらも天から見放されてるな。人質に狙った相手が天下の飛將軍、呂布に、天の御遣いなんだからな。」

「「「！？」」「」」

残党軍が驚愕する。

「呂布って、あの呂布かよ……。」

「天の御遣いって、その呂布より更に強いあの御遣いか？」

「マジかよ……。」

奴等が動揺している。

「は、ハツタリだろ？」

昴「なら試してみるか？」

俺が構える。

「ふ、ふん！ 仮にそうでもこいつらは今丸腰だ。今なら俺達でも勝てるぞ。」

あー、そういや俺達は今武器を持ってなかったな。俺は劉璋残党軍の中の戟を持っている奴の目の前に縮地で飛び込む。

ジュバツ！

「ぎゃはー！」

驚く間もなくそいつの首を手刀ではね飛ばした。

昴「恋、こいつを使え。方天画戟と勝手が違うが、ないよりはマシだろ。」

恋「・・・(コクッ)」

俺は戟を放り投げ、恋はそれを受け取った。

昴「それじゃ、こいつらを片付けるか。」

俺達は背中合わせに合わせて立ち、殲滅を開始した。

戦いはすぐさま終わった。たかが100程度では俺達の敵ではなかった。

「ひっ！助けてくれ！」

昴「・・・お前達には選択肢があった。心を入れ替え、真つ当に生きるっていう選択肢がな。」

「と、投降する。もう抵抗はしない！」

昴「俺は桃香ほど甘くない。人を捨てたお前に生きる道はない。」

「ひいつ！」

後退りで俺から逃げる。

昴「？」

こいつ・・・何か狙ってる・・・っ！？
奴の後方の茂みから弓隊の姿が見えた。

「やれえ！」

弓が一斉に放たれる。

恋「昴！」

恋が俺の前に立ち、飛来する矢を全て弾き落とした。

昴「ちいつ！」

俺は足に氣を集中させ、

昴「猛虎・蹴撃！」

大きな氣弾を弓隊に撃ち込んだ。

ドコーン！……！

「「「ギャアー！」」」

弓隊は残らず吹き飛んだ。

凧、お前の技を拝借させてもらったぜ。

恋「許さない。」

「ひいっ！勘弁してくれ！」

恋「死ぬ。」

ザシユ！

「がはっ！」

恋は脳天から戟を振り落とし、真っ二つにした。

恋「昂、大丈夫？」

恋が俺に抱きつき、心配そうに尋ねた。

昂「おかげさまでな。それにしても……。」

辺りを見渡し、

昂「折角のお出掛けに水を差してくれたな。」

恋「いい。楽しかった。」

昂「……そうか。なら良かった。」

ま、旧劉璋の残党を片付けられたからよしとするか。

恋「・・・昂。」

昂「ん、どうし・・・っ!？」

返事をしようと刹那、恋が俺の口を塞ぐ。

昂「恋!？」

恋「恋、昂の事好き。これからは恋が昂の事を何があっても守る。」

昂「そ、そうか。頼もしくて助かるよ。」

恋「ずっと昂の傍にいる。昂から離れない。」

昂「ありがとな、恋。」

俺は恋の頭を撫でた。

その後、俺達は城に戻り、事の顛末を報告し、再度益州領土内の賊や旧劉璋の残党を討伐を強化する事が決まった。次の日、俺はいつものように政務をしているのだが、

昴「……………」

桃「……………」

愛「……………」

皆が一樣に俺の方を見ている。

恋「〜」

恋が俺の横に座り、俺に寄り添っている。

愛「ゴホン！恋。ご主人様は政務中だ。用がないのなら……………」

恋「恋はずっと昴と一緒に。だから傍にいる。」

愛「ご主人様。ご主人様からも何かおっしゃってください！」

昴「まあ、別に俺は大丈夫だから……………」

愛「むう……………」

愛紗は何やら唸っている。

桃「なら、私もご主人様の隣で・・・。」

愛「駄目です！」

桃「うう、恋ちゃんだけずるい〜！」

その後、恋はずっと俺の傍にいた。食事の時も、寝る時も、風呂の時でさえも。嫌ではないんだけど、まあ、ねねには襲撃されるし、周りからは嫉妬の視線が・・・。

さすがに少し行きすぎていたので恋を説得し、ほどほどにしてもらった。いや〜、参った参った。

続く

第62話 最強の武人、優しき女の子 (後書き)

新年1発目は恋のお話です。うまく書けたか心配です (^-^;))

感想、アドバイスお待ちしております。

それではまた！

第63話 自由と苦勞と普通と、それぞれの悩み (前書き)

投稿します！

何とかネタをひねり出して書いてみました (^ ^ | ^ ^ ;)

それではごっごー！

第63話 自由と苦勞と普通と、それぞれの悩み

昴「今日はご苦勞様、皆。」

猪「いやあ。あんな仕事なら大歡迎だよ。いつでも声かけてくれよ、アニキ。」

斗「もう、文ちゃんったら。」

白「ま、今日ばかりは猪々子を咎めるわけにもいかな。」

昴「そうだな。おかげで黄巾の殘党を捕まえる事が出来たからな。」

俺達は、黄巾の殘党が近くの空き城を占拠したという情報を掴み、先ほどそれを制圧しに向かった。猪々子、斗詩、白蓮の活躍により、1人も残らず捕まえる事が出来たのだ。当初はもう少し時間がかかると予想されていたが、夜に城へ帰還する事が出来た。

昴「だけど猪々子は相手がただの賊とはいえ、少し油断が過ぎるぞ？」

猪「心配しなくても斗詩がいるから平気だよ。」

斗「もう。私がいなかったらどうするつもりなの？文ちゃんったら。」

猪「そんなときはアニキがいるさ。」

昴「あのなあ・・・。」

こんな冗談を言いながら歩いていると、

昴「ん？」

ふと1つの部屋から灯りが差している。部屋を覗いて見ると、

麗「・・・カキカキカキカキ・・・」

麗羽が書を読みながら何かを書き写している。おそらく、兵法書を書き写し、覚えているのだろう。

斗「麗羽様、今日もやってる。」

昴「そうなのか？」

斗「はい。麗羽様はあの日から空いている時間があればほとんど鍛練やいろんな書を読んで覚えているんです。」

昴「そうなのか。」

あの日。それは麗羽が俺に臣下の礼をした日の事だろう。

昴「・・・邪魔をしても悪いから俺の部屋に来るか？お茶ぐらいは出すよ。」

斗「そうですね。」

猪「賛成〜！」

昴「白蓮も来いよ。」

白「私まで良いのか？」

昴「ああ。」

白「なら私も呼ばれるとするよ。」

俺達は俺の部屋に向かった。

俺達は茶をいただく。

斗「・・・それにしても、本当に麗羽様、変わったね。」

猪「そうだよな。」

白「全くだな。」

昴「良いことだろ？」

猪「そうなんだけど・・・。」

白「以前の麗羽からは考えられない姿だな。」

昴「麗羽もまた成長したって事だろ？猪々子や斗詩にしたら気苦労がなくなつて良かったじゃないか。」

猪「うーん、そうなんだけど・・・。」

ん？何か歯切れが悪いな。

昴「何か問題あるのか？」

猪「問題はないんだけど・・・何か物足りないんだよな。」

昴「どういう事だ？」

猪「確かに以前の麗羽様にはさんざん苦労かけられたりしてたけど、でも今思えばそれはそれで楽しかったなっと思つ時があるんだよ。」

斗「あつ、それ何となく分かる気がする。」

斗詩がそれに同意する。

白「私は麗羽のお目付け役がなくなって清々してるけどな。」

白蓮はげんなりした顔で言う。

斗「本当に、麗羽様は変わっちゃったな。。。」

斗詩は何やら思い詰めた顔で呟いた。

昴「斗詩、何か悩んでいるのか？」

斗「えっ！？どうしてですか？」

昴「そんな顔してたよ。」

斗「。。。。。」

昴「俺達で良かったら相談してくれよ。」

斗「ありがとうございます。別に悩みって程の事でもないんですよ。ただ。。。」

昴「ただ？」

斗「麗羽様も、美羽様も、そして皆も。どんどん変わって、成長してるのに、私だけそのままなのではって思っんです。」

昴「ふむ。」

斗「麗羽様、どんどん成長していきます。誇りを捨てて、がむしゃらに自分を高めようとしています。そんな姿を見ると、私だけ取り残されている感覚に陥るんです。」

昴「……。」

斗「そう考えると私は怖くなります。」

なるほどね。

昴「そう考えているだけで、斗詩は前に進んでいるぞ。」

斗「えっ?」

昴「斗詩だって今変わろうとしている。ただし方向を見失っているだけで。」

斗「そうでしょうか?」

昴「斗詩は今前に進んでいる。それでも不安にかられるのは前に進んでいる自覚がないからだ。何故自覚がないかは目的地がないからだ。」

斗「目的地がない?」

昴「ああ。目的地がないのにただ前に進んだって本人には進んでいる自覚なんて得られない。自覚なければ心は立ち止まっているのと同じだから不安になる。」

斗「なるほど。」

昴「自分が何のために前に進むか。何に向かって歩みを進めるか。それが分かれば斗詩の悩みは解決すると思うし、斗詩はいろんな意味でもっと強くなれるよ。」

斗「・・・私に見つけられるかな・・・えっ／＼」

俺は弱音を吐く斗詩の手を包み込み、

昴「見つかるよ。見つからないなら俺も手伝うからさ。」

斗「あ、ありがとうございます。私、何か胸のつかえが取れました。」

昴「そうか、なら良かった。」

俺は斗詩の手から自分の手を離れた。

昴「猪々子は何か悩みは無いのか？」

猪「あたい？うーん・・・あると言えばあるんだよなー。」

へえー、意外だな。猪々子は悩みとか無縁だと思ったが。

猪「麗羽様が真面目になってから退屈で退屈でしょうがないんだよ。」

・・・そういう事ね。

昴「退屈を埋める種なんてそんじょそこらに埋まってると思っけどな。」

猪「探してってけどなかなか見つからないだよ。」

昴「なら猪々子だって武人なんだから武を極めてみればどうだ？」

猪「・・・どうせ極めても恋や愛紗には絶対勝てないしなあ。」

昴「ま、興味つてのは探すものだ。探してみれば何か見つかるかもな。」

猪「ぶーぶー。あたいだけ何か投げやりだな。」

昴「他に言い様がないしな。他に何か無いのか？」

猪「うーん・・・あ、そうだ！ある、あるぜ！」

昴「何だ？」

猪「斗詩に好かれる方法！」

昴「・・・もう猪々子には悩みはなさそうだな。」

猪「アニキ！切実な悩みなんだぜ？」

昴「知らん。俺に聞かれてもどうしようもないし。」

実際どうしようもない。

昴「猪々子の話はこれで終わり。白蓮は何かあるか？」

白「……。」

白蓮はかなり悲痛な面持ちになった。

白「……実は以前から悩んでる事があるんだ。」

白蓮がかなり深刻そうに言う。これは相当な悩みなのだろう。

昴「何を悩んでるんだ？」

白「それは……。」

昴「それは？」

白「何で私はこんなにも普通なんだ!？」

昴・猪・斗「……。」

俺達は言葉を失った。

猪「まあ白蓮様って武は普通だよな。」

白「うっ！」

猪「知力も普通だし。」

白「うっ！」

猪「見た目も普通で個性がないよなー。」

白「……がくっ。」

白蓮が卓に突っ伏した。

斗「ちょっと文ちゃん！」

白「良いんだ。私はどうせ普通だ。突出したものはないし、雫と違って万能ではなく器用貧乏だし……。」

あゝあ、これは深刻だな。

昴「本当に何も無いのか？」

白「無いよ。探しても何も見つからなかった。」

昴「そうか、もしそれが本当なら・・・それはもはや個性じゃないか？」

白「えっ？」

昴「何も無い人間なんてそうはいないぜ？人は何かしら何かあるものだ。もし何も無いならそれは個性と言って言いと思っぞ。」

白「そう・・・なのか？」

昴「なあ白蓮。何でそんなに普通が嫌なんだ？」

白「えっ？だって普通は地味だし、目立たないし・・・。」

昴「俺は思う。世の中で一番幸せなのは普通だって。」

白「どうしてだ？」

昴「普通に産まれて普通に育って普通に死ぬ。これは幸せな事だと思わないか？」

白「・・・。」

昴「権力を得て、城を得て、官位を得る。これも幸せかもしれないが、大きなものを得ると人はそれ相応に苦勞もする。常に何かと戦わなければならないからな。俺は自分の歩んだ道に後悔はしてない

けど、戦の無い国で普通に産まれて普通に死んでいく者を見て、僅かだけでも羨ましさを感じる時がある。異常な世界で生きる者は得てしてそういった者を羨むんだ。」

白「そう、なのかな？」

昴「そうさ。普通じゃないが故に過酷な人生を歩む奴だっているんだ。皆だって乱世という普通じゃない国に産まれているんな苦労しただろ？」

斗「そう言われてみるとそうですね。」

昴「結局普通が一番だと思うよ、俺は。」

白「・・・言いたい事は分かるが、あまりに無個性なのも悩みだぞ。目立たないし、いざって時役立たずだし。」

昴「役立たずって事はないだろ。白蓮は無能ではなく有能なんだから。」

白「うーん、でもなあ・・・。」

白蓮は釈然としない様子だ。

昴「俺はな。白蓮はこの国での役割は人間で言う所の心臓だと思ってる。」

白「心臓？」

昴「表からは見えず。決して目立たないが、絶対に無くてはならな

い物だ。それが無くては人は生きられない。」

白「……………」

昴「白蓮。人には役割がある。俺や桃香のように皆の頂点に立ち、皆を導く者。愛紗や鈴々や星のように皆の先頭に立ち、道を切り開く者。朱里や雛里のように策を提示し、知略をもって国を支える者。いろいろな役割がある。俺の思う白蓮の役割は、それらの者を影から支える者、だと思う。」

白「影から……………」

昴「決して目立たないが絶対にいなくてはならない存在だ。この世に光と影があるように、役割にも光と影がある。いや、なくてはならない。派手なものばかりが必ずしも重要とは限らない。目立たず地味なものほど意外にも重要だったりするんだ。まあ人は派手なものに目がいきやすいけどな。」

白「昴……………」

昴「あまり自分を悲観するな。俺は白蓮の事もしっかり見ているよ。」

白「昴……………。ありがとう。気が楽になったよ。」

昴「そうか、なら良かったよ。」

・
・
・
・
・
・

その後も4人でお茶をしながら話をする。

白「時間も時間だからそろそろお暇しようか。」

斗「そうですね。麗羽様もそろそろ休まれてるだろうし。」

猪「ええー、もっと話しようぜ。」

斗「文ちゃん、あまりご主人様迷惑かけちゃ駄目だよ。．．それはご主人様、失礼します。今日は本当にありがとうございます。」

昴「礼を言われる事じゃないさ。」

白「そんな事はないさ、昴、今日はありがとう。またな。」

昴「ああ。」

3人は部屋を出ていった。

猪々子・斗詩・白蓮side

猪「いや、楽しかったな。」

斗「もう、文ちゃんったら。」

3人が城の廊下を歩いている。

白「・・・それにしても、昴はすごいな。」

斗「・・・そうですね。」

白「あいつがいると、自分がどこまでも強くなれる気がする。」

斗「皆、ご主人様が大好きな理由が良く分かります。あんなご主人様だからこれだけの人が集まって、皆がご主人様の元で力を奮えるんですね。」

白「そうだな。・・・私達ももっと頑張ろう。皆に負けないように。」

「

斗「はい！」

猪「おつよ！」

3人は新たに誓いを立てるのであった。

続く

第63話 自由と苦勞と普通と、それぞれの悩み (後書き)

半ば人生相談みたいになりましたが、相談にのりきれているかかなり不安です。この3人は苦勞しますね。麗羽が真面目になって役割が1つ減ってしまった関係で。

感想、アドバイスお待ちしています。

それではまた！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8241u/>

真・恋姫†無双～外史の守り手～

2012年1月6日20時46分発行